

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第200集

中江田八ツ縄遺跡

国道354号道路改築（改良）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

1995

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第200集

中江田八ツ縄遺跡

国道354号道路改築（改良）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

1995

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 中江田八ツ縄遺跡全景 (左上が北)



2 中江田八ツ縄遺跡1・2区 (南東から)



1



2



3



4



5



6



7

- 1 · 2 1区1号住居跡出土滑車型石製品
3 · 4 1区5号住居跡出土紡錘車
5 1区18号住居跡出土緑釉陶器
6 1区47号住居跡出土土器台
7 3区2号住居跡出土墨書土器

序

一般国道354号線は、邑楽郡邑楽町と佐波郡境町間にて改良工事が進められており、既にその一部が供用されています。同国道の通過する新田町でも建設工事が進められており、中江田地区がその対象となると、建設工事区域内に埋蔵文化財の所存が認められたため、新田町教育委員会により工事着工前に記録保存のための調査が行われました。しかし平成6年度に工事が予定された中江田八ツ縄地区は、諸般の事情により新田町教育委員会の調査が不可能となり、当事業団に発掘調査が委託されました。

当事業団では平成6年2月から8月にかけて当該地域の調査を行い、今年度、その調査成果をまとめ、この度「中江田八ツ縄遺跡発掘調査報告書」を上梓することにしました。本書には縄文時代から平安時代にかけて営まれた集落の遺構・遺物が数多く報告されています。これらの遺構・遺物は新田町の歴史を解明する上で、新田町教育委員会から刊行されるであろう同地区の発掘調査報告書と共に、貴重な資料になるものと存じます。

発掘調査から報告書刊行まで、群馬県土木部道路建設課、同太田土木事務所、新田町教育委員会、地元関係者の方々から種々ご指導、ご協力を賜りました。これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が広く活用されることを願い序とします。

平成8年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**

例 言

- 1 本書は、国道354号バイパス道路改築（改良）工事事業に伴う「中江田ハツ縄遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、群馬県新田郡新田町大字中江田字ハツ縄50・52・53・119・120・125～133、字向原100・101・103である。
- 3 発掘調査は、群馬県（土木部道路建設課）の委託により、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 調査の実施期間は、以下の通りである。
発掘調査 平成6年2月1日～同年8月31日
整理事業 平成6年10月4日～平成7年12月28日
- 5 調査・整理解体制は、以下の通りである。
事務担当 中村英一、近藤 功、原田 恒弘、佐藤 勉、蜂須 実、神保侑史、斎藤俊一、小淵 淳、
巾 隆之、中束耕志、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、船津 茂、
高橋定義
事務補助員 松下 登、大澤友治、吉田恵子、今井もと子、角田みずほ、松井美智代、塩浦ひろみ、
内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子
調査担当 大木紳一郎（群馬県埋蔵文化財調査事業団 専門員）
小島敦子 （同上）
斉藤英敏 （同 調査研究員）
黒澤照弘 （同上）
整理担当 松井龍彦 （同 専門員、平成6年度）
斉藤英敏 （平成7年度）
- 6 報告書作成の担当は、以下の通りである。
編 集 斉藤英敏
第1章 中束耕志（群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究部 第4課長）
第6章 大木紳一郎
縄文土器観察 小野和之・山口逸弘（同 専門員）
土師器・須恵器観察 黒澤はるみ（同 嘱託員）
陶磁器他観察 大江正行（同 主幹兼専門員）
石器観察 桜井美枝（同 主任調査研究員）
自然科学分析 （株）古環境研究所
馬歯・馬骨の鑑定 宮崎重雄（群馬県立大間々高校教諭）
石材鑑定 飯島静男（群馬地質研究会）
鉄器分析 赤沼英男（財団法人 岩手県文化振興事業団）
上記以外 斉藤英敏
遺構写真 大木紳一郎、小島敦子、斉藤英敏、黒澤照弘

遺物写真 佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師）
保存処理 関 邦一（同上）、土橋まり子（非常勤嘱託員）、小材浩一（整理補助員）、
小沼恵子（同）
整理補助 黒澤はるみ（嘱託員）、阿久澤明子（整理補助員）、飯塚京子（同）、
池田和子（同）、岡田美知枝（同）、角田孝子（同）、戸神晴美（同）、
富永セン（同）、茂木良子（同）

7 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

群馬県（土木部道路建設課）、太田土木事務所、新田町教育委員会、
木暮仁一氏（東毛歴史資料館運営委員）、小宮俊久氏・小宮 豪氏（新田町教育
委員会）、鹿田雄三氏（太田西女子高等学校）、須田 茂氏（新田町立木崎中学
校）

8 調査資料は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センター及び（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

9 発掘調査に従事していただいた作業員は以下の通りである。

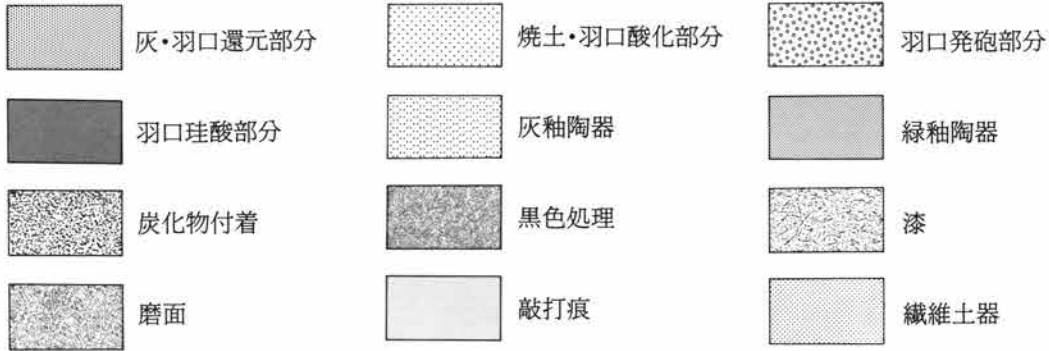
伊田ラク、中村みどり、細谷友江、川井美代、高橋左近、北川鎮、小野田実、小野田きよ子、梅沢さと能、
藤村春江、高橋恒幸、松波忠雄、梅沢亘、柳正幸、小林とみ江、片亀幸枝、森幸枝、富岡リウ、
久保田みち子、田辺弘子、広瀬林太郎、大隅ノブ子、長山絹子、荒井光子、高張市太郎、長谷川武、
堀川初恵、斉藤啓吾、斉藤清一、桜井裕子、横地裕子、湯地史子、古郡てるよ、小林みどり、大竹允子、
高橋喜久枝、大関たつ子、大竹達四郎、大山貞一、内田新作、石田まん、矢内政江、横堀シゲ子、
細井トク江、板垣てる子、鈴木正吉、鈴木まき江、早川フサ子、広瀬正子、佐藤七平、田部井ふみ、
矢内久美子、武藤富明

（敬称略）

上記以外にも、周辺地域の多くの方々のご協力を受けた。

凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、全て国家座標上の北を示している。
- 2 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院20万分の1及び5万分の1の地形図、群馬県新田町住宅地図1千7百分の1を使用した。
- 3 遺構平面図・遺構断面図・遺物実測図中に使用した網点部分は下記の通りである。



- 4 本文中に記載されているテフラは、浅間A・B・C軽石→As-A・As-B・As-Cを示している。
- 5 本書に掲載した遺構図・付図の縮尺については、スケールを付した。
- 6 遺物実測図の縮尺は、以下の通りである。
土器1/3、石製品1/3（大型1/6）、金属製品1/3、紡錘車・土錘・古銭・石鏃1/2。
- 7 遺物写真の縮尺は、以下の通りである。
土器1/3（大型1/4、1/6）、石製品1/3（大型1/6）、金属製品1/3、紡錘車・土錘・古銭・石鏃1/2。
- 8 土層・土器類の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人 日本色彩研究所色票監修 「新版 標準土色帖」昭和45年 を使用した。
- 9 住居及び竈の主軸方位は、次の基準で計測した。住居の主軸方位は、竈の付設された辺に直行する辺の角度を計測した。竈の検出されなかった住居については、基本的に残存状況の良好な辺を主軸方位とした。竈の主軸方位は、竈の中心軸を計測した。
角度は、真北を基準に、東西両方位で鋭角側を採用した。
- 10 本書に記載されている遺構名称は、整理作業の過程で再検討したが、発掘調査時の番号を尊重して、1・2区と3区とで、それぞれ通し番号を付している。その際、遺構番号が欠番、及び変更になったものもある。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第 1 章 調査に至る経緯	1
第 2 章 調査の方法と経過	2
第 1 節 調査の方法	2
第 2 節 調査の経過	2
第 3 章 遺跡の位置と環境	4
第 1 節 位置	4
第 2 節 地理的環境	4
第 3 節 歴史的環境	4
第 4 章 標準土層	10
第 1 節 調査 1・2 区	10
第 2 節 調査 3 区	10
第 5 章 遺構と遺物	11
第 1 節 旧石器試掘	11
第 2 節 竪穴住居跡	13
第 3 節 井戸	102
第 4 節 溝	118
第 5 節 土坑	130
第 6 節 その他の遺構	149
第 7 節 風倒木	157
第 8 節 遺構外遺物	158
第 6 章 まとめ	168
第 7 章 遺物観察表	173
第 8 章 中江田八ツ縄遺跡の科学分析	223
第 1 節 中江田八ツ縄遺跡の自然科学分析	224
第 2 節 中江田八ツ縄遺跡の馬歯分析	244
第 3 節 中江田八ツ縄遺跡の鉄分析	246

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	中江田ハツ縄遺跡位置図 (国土地理院 20万分の1「宇都宮」使用) ……	1	第 57 図	1 区20号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	53
第 2 図	調査区及びグリッド設定図 ……	3	第 58 図	1 区23号住居跡及び竈実測図 ……	54
第 3 図	遺跡周辺の地形分類 (「群馬県史」通史編 1 付図 2 を編図) ……	5	第 59 図	1 区23号住居跡出土遺物実測図 (1) ……	55
第 4 図	周辺遺跡分布図 (国土地理院 5 万分の1「深谷」使用) ……	7	第 60 図	1 区23号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	56
第 5 図	1・2 区基本土層概念図 ……	10	第 61 図	1 区24号住居跡実測図 ……	56
第 6 図	3 区基本土層概念図 ……	10	第 62 図	2 区27号住居跡竈実測図 ……	56
第 7 図	旧石器試掘位置図 ……	11	第 63 図	2 区27号住居跡掘り方及び出土遺物実測図 (1) ……	57
第 8 図	旧石器試土層断面実測図 ……	12	第 64 図	2 区27号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	58
第 9 図	1 区 1 号住居跡及び出土遺物実測図 (1) ……	13	第 65 図	2 区28号住居跡・竈及び出土遺物実測図 (1) ……	59
第 10 図	1 区 1 号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	14	第 66 図	2 区28号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	60
第 11 図	1 区 2 号住居跡実測図 ……	14	第 67 図	2 区29号住居跡及び掘り方実測図 ……	60
第 12 図	1 区 2 号住居跡竈及び出土遺物実測図 (1) ……	15	第 68 図	2 区29号住居跡出土遺物実測図 ……	61
第 13 図	1 区 2 号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	16	第 69 図	2 区31号住居跡実測図 ……	61
第 14 図	1 区 3 号住居跡実測図 ……	16	第 70 図	2 区31号住居跡出土遺物実測図 (1) ……	62
第 15 図	1 区 3 号住居跡竈及び出土遺物実測図 (1) ……	17	第 71 図	2 区31号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	63
第 16 図	1 区 3 号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	18	第 72 図	2 区33号住居跡実測図 ……	63
第 17 図	1 区 4 号住居跡 2 号竈実測図 ……	18	第 73 図	2 区33号住居跡掘り方及び出土遺物実測図 ……	64
第 18 図	1 区 4 号住居跡及び 1 号竈実測図 ……	19	第 74 図	2 区34号住居跡及び竈実測図 ……	65
第 19 図	1 区 4 号住居跡出土遺物実測図 (1) ……	20	第 75 図	2 区34号住居跡出土遺物実測図 ……	66
第 20 図	1 区 4 号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	21	第 76 図	2 区35号住居跡竈実測図 ……	66
第 21 図	1 区 5 号住居跡実測図 ……	22	第 77 図	2 区35号住居跡・掘り方 及び出土遺物実測図 (1) ……	67
第 22 図	1 区 5 号住居跡竈及び 21 号住居跡実測図 ……	23	第 78 図	2 区35号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	68
第 23 図	1 区 5 号住居跡出土遺物実測図 ……	24	第 79 図	2 区35号住居跡出土遺物実測図 (3) ……	69
第 24 図	1 区 6 号住居跡及び出土遺物実測図 (1) ……	25	第 80 図	2 区36号住居跡実測図 ……	70
第 25 図	1 区 6 号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	26	第 81 図	2 区36号住居跡出土遺物実測図 ……	71
第 26 図	1 区 7 号住居跡実測図 ……	27	第 82 図	2 区38号住居跡実測図 ……	71
第 27 図	1 区 7 号住居跡出土遺物実測図 ……	28	第 83 図	2 区38号住居跡竈及び掘り方実測図 ……	72
第 28 図	1 区 8 号住居跡実測図 ……	29	第 84 図	2 区38号住居跡出土遺物実測図 (1) ……	73
第 29 図	1 区 8 号住居跡出土遺物実測図 (1) ……	30	第 85 図	2 区38号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	74
第 30 図	1 区 8 号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	31	第 86 図	2 区39号住居跡及び掘り方実測図 ……	75
第 31 図	1 区 9 号住居跡及び出土遺物実測図 ……	32	第 87 図	2 区39号住居跡出土遺物実測図 ……	76
第 32 図	1 区10号住居跡実測図 ……	33	第 88 図	2 区40号住居跡竈実測図 ……	76
第 33 図	1 区10号住居跡出土遺物実測図 ……	34	第 89 図	2 区40号住居跡実測図 ……	77
第 34 図	1 区12号住居跡竈実測図 ……	34	第 90 図	2 区40号住居跡掘り方及び出土遺物実測図 (1) ……	78
第 35 図	1 区12号住居跡実測図 ……	36	第 91 図	2 区40号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	79
第 36 図	1 区12号住居跡掘り方及び出土遺物実測図 (1) ……	37	第 92 図	2 区40号住居跡出土遺物実測図 (3) ……	80
第 37 図	1 区12号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	38	第 93 図	2 区40号住居跡出土遺物実測図 (4) ……	81
第 38 図	1 区12号住居跡出土遺物実測図 (3) ……	39	第 94 図	2 区40号住居跡出土遺物実測図 (5) ……	82
第 39 図	1 区12号住居跡出土遺物実測図 (4) ……	40	第 95 図	2 区41号住居跡及び出土遺物実測図 ……	82
第 40 図	1 区12号住居跡出土遺物実測図 (5) ……	41	第 96 図	2 区42号住居跡及び出土遺物実測図 ……	83
第 41 図	1 区14号住居跡及び竈実測図 ……	42	第 97 図	2 区44号住居跡実測図 ……	84
第 42 図	1 区14号住居跡出土遺物実測図 (1) ……	43	第 98 図	2 区44号住居跡竈・掘り方 及び出土遺物実測図 (1) ……	85
第 43 図	1 区14号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	44	第 99 図	2 区44号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	86
第 44 図	1 区15号住居跡実測図 ……	44	第100 図	1 区46号住居跡及び掘り方実測図 ……	87
第 45 図	1 区15号住居跡出土遺物実測図 ……	45	第101 図	1 区46号住居跡出土遺物実測図 ……	88
第 46 図	1 区16号住居跡実測図 ……	45	第102 図	1 区47号住居跡実測図 ……	89
第 47 図	1 区16号住居跡出土遺物実測図 (1) ……	46	第103 図	1 区47号住居跡竈及び出土遺物実測図 (1) ……	90
第 48 図	1 区16号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	47	第104 図	1 区47号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	91
第 49 図	1 区17号住居跡竈実測図 ……	47	第105 図	1 区47号住居跡出土遺物実測図 (3) ……	92
第 50 図	1 区17号住居跡及び出土遺物実測図 ……	48	第106 図	1 区48号住居跡及び出土遺物実測図 (1) ……	93
第 51 図	1 区18号住居跡実測図 ……	48	第107 図	1 区48号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	94
第 52 図	1 区18号住居跡出土遺物実測図 ……	49	第108 図	1 区49号住居跡実測図 ……	94
第 53 図	1 区19号住居跡及び出土遺物実測図 (1) ……	50	第109 図	1 区49号住居跡出土遺物実測図 ……	95
第 54 図	1 区19号住居跡出土遺物実測図 (2) ……	51	第110 図	2 区51号住居跡実測図 ……	95
第 55 図	1 区20号住居跡実測図 ……	52	第111 図	2 区52号住居跡及び掘り方実測図 ……	96
第 56 図	1 区20号住居跡出土遺物実測図 (1) ……	52	第112 図	2 区52号住居跡竈及び出土遺物実測図 ……	97
			第113 図	2 区53号住居跡・掘り方及び出土遺物実測図 ……	98

第114図	2区54号住居跡及び出土遺物実測図……………	99
第115図	3区1号住居跡・掘り方及び出土遺物実測図……………	100
第116図	3区2号住居跡・掘り方 及び出土遺物実測図(1)……………	101
第117図	3区2号住居跡出土遺物実測図(2)……………	102
第118図	1区1号井戸実測図……………	102
第119図	1区1号井戸出土遺物実測図(1)……………	103
第120図	1区1号井戸出土遺物実測図(2)……………	104
第121図	1区2号井戸及び出土遺物実測図……………	104
第122図	1区3・4・5・6号井戸及び出土遺物実測図……………	105
第123図	1区7・8・9号井戸実測図……………	106
第124図	1区10・11・12号井戸実測図……………	107
第125図	2区13・14号井戸実測図……………	108
第126図	2区14号井戸出土遺物実測図……………	109
第127図	1区15・16号井戸実測図……………	109
第128図	1区17号井戸及び出土遺物実測図(1)……………	110
第129図	1区17号井戸出土遺物実測図(2)……………	111
第130図	2区18号井戸及び出土遺物実測図(1)……………	111
第131図	2区18号井戸出土遺物実測図(2)……………	112
第132図	2区19号井戸実測図……………	112
第133図	2区19号井戸出土遺物実測図(1)……………	113
第134図	2区19号井戸出土遺物実測図(2)……………	114
第135図	1区20号井戸及び出土遺物実測図……………	115
第136図	2区21号井戸実測図……………	115
第137図	2区21号井戸出土遺物実測図……………	116
第138図	2区22・23号井戸実測図……………	116
第139図	2区24号井戸出土遺物及び3区1号井戸実測図……………	117
第140図	1区1号溝実測図……………	118
第141図	1区1号溝出土遺物実測図(1)……………	119
第142図	1区1号溝出土遺物実測図(2)……………	120
第143図	1区2号溝及び出土遺物実測図……………	121
第144図	1区3号溝及び出土遺物実測図……………	122
第145図	1区4号溝及び出土遺物実測図……………	123
第146図	2区5～11号溝実測図(1)……………	125
第147図	2区5～11号溝実測図(2)……………	126
第148図	2区5～11号溝実測図(3)……………	127
第149図	2区5号溝出土遺物実測図……………	127
第150図	2区5～7号溝出土遺物実測図……………	128
第151図	2区7・9号溝出土遺物実測図……………	129
第152図	3区1号溝実測図……………	129
第153図	3区2号溝及び3号土坑実測図……………	130
第154図	1～9号土坑及び出土遺物実測図……………	131
第155図	9号土坑出土遺物及び10～16号土坑実測図……………	132
第156図	17～21・23～26号土坑実測図……………	133
第157図	27～35号土坑及び出土遺物実測図……………	134
第158図	36～39・43～45号土坑及び出土遺物実測図……………	135
第159図	45・46号土坑及び出土遺物実測図……………	136
第160図	47～52号土坑及び出土遺物実測図……………	137
第161図	53～59号土坑及び出土遺物実測図……………	138
第162図	59号土坑出土遺物及び60～67号土坑実測図……………	139
第163図	68～73・75～77号土坑実測図……………	140
第164図	78～85号土坑実測図……………	141
第165図	86～92号土坑及び出土遺物実測図……………	142
第166図	93～96・101～104号土坑及び出土遺物実測図……………	143
第167図	105・110・111・119・120・145号土坑 及び出土遺物実測図……………	144
第168図	22・145・151・153・154、3区1・2・4号土坑 及び出土遺物実測図……………	145
第169図	焼土遺構及び出土遺物実測図……………	149
第170図	1号円形周溝遺構実測図(1)……………	150
第171図	1号円形周溝遺構実測図(2)……………	151
第172図	1号円形周溝遺構出土遺物実測図……………	152
第173図	1号竪穴遺構実測図……………	152
第174図	1号竪穴遺構出土遺物実測図……………	153
第175図	2号竪穴遺構実測図……………	153
第176図	1号掘立柱建物実測図……………	154
第177図	サク状遺構及び出土遺物実測図……………	155
第178図	1号欹状遺構実測図及び写真……………	156
第179図	1号風倒木実測図及び写真……………	157
第180図	遺構外出土遺物実測図(1)……………	158
第181図	遺構外出土遺物実測図(2)……………	159
第182図	遺構外出土遺物実測図(3)……………	160
第183図	遺構外出土遺物実測図(4)……………	161
第184図	遺構外出土遺物実測図(5)……………	162
第185図	遺構外出土遺物実測図(6)……………	163
第186図	遺構外出土遺物実測図(7)……………	164
第187図	遺構外出土遺物実測図(8)……………	165
第188図	遺構外出土遺物実測図(9)……………	166
第189図	遺構外出土遺物実測図(10)……………	167
付図	中江田八ツ縄遺跡全体図	

図版目次

巻頭図版	中江田八ツ縄遺跡全景(左上が北) 中江田八ツ縄遺跡1・2区(南東から) 1区1・5・18・47・2区2号住居跡出土遺物
図版1	中江田八ツ縄遺跡全景(南東から)
図版2-1	調査1区全景(南東から) -2 調査2区全景(左上が北)
図版3-1	旧石器試掘土層断面1(南から) -2 旧石器試掘土層断面2(南から)
図版4-1	1区1号住居跡全景(西から) -2 1区1号住居跡電遺物出土状態(西南から) -3 1区1号住居跡電掘り方(西から) -4 1区2号住居跡電(西から) -5 1区2号住居跡電土層断面(西から)
図版5-1	1区2号住居跡全景(西から) -2 1区2号住居跡掘り方(西から) -3 1区3号住居跡電(南から) -4 1区3号住居跡電掘り方(南から) -5 1区3号住居跡遺物出土状態(東から)
図版6-1	1区3号住居跡全景(南から) -2 1区4号住居跡全景(西から)
図版7-1	1区4号住居跡掘り方(西から) -2 1区4号住居跡2号電(西から) -3 1区4号住居跡2号電掘り方(西から) -4 1区4号住居跡遺物出土状態(北西から) -5 1区5号住居跡全景(南東から)
図版8-1	1区5号住居跡電(南東から) -2 1区5号住居跡貯蔵穴土層断面(南から) -3 1区5・21号住居跡全景(南西から) -4 1区21号住居跡電掘り方(南西から) -5 1区5・21号住居跡掘り方(南西から)
図版9-1	1区21号住居跡柱穴7土層断面(南から) -2 1区6号住居跡土層断面(南東から) -3 1区6号住居跡全景(北東から) -4 1区6号住居跡掘り方(北東から) -5 1区7号住居跡遺物出土状態(西から)

- 図版10-1 1区7号住居跡全景(南から)
 -2 1区7号住居跡電(南から)
 -3 1区7号住居跡掘り方(南から)
 -4 1区8号住居跡電(南東から)
 -5 1区8号住居跡遺物出土状態(北東から)
- 図版11-1 1区8号住居跡全景(南東から)
 -2 1区8号住居跡遺物出土状態(東から)
 -3 1区8号住居跡電掘り方(南から)
 -4 1区8号住居跡掘り方(南東から)
 -5 1区9号住居跡土層断面(西から)
- 図版12-1 1区9号住居跡全景(西から)
 -2 1区10号住居跡全景(北から)
- 図版13-1 1区10号住居跡掘り方(北東から)
 -2 1区10号住居跡電遺物出土状態(南西から)
 -3 1区10号住居跡電土層断面(南西から)
 -4 1区12号住居跡上層遺物出土状態(南西から)
 -5 1区12号住居跡全景(北東から)
- 図版14-1 1区12号住居跡掘り方(南東から)
 -2 1区12号住居跡電①(南東から)
 -3 1区12号住居跡電②(南東から)
 -4 1区12号住居跡貯蔵穴土層断面(南東から)
 -5 1区12号住居跡遺物出土状態(西から)
- 図版15-1 1区14号住居跡掘り方・36号土坑全景(西から)
 -2 1区14号住居跡電(西から)
 -3 1区14号住居跡電掘り方土層断面(南から)
 -4 1区14号住居跡遺物出土状態(西から)
 -5 1区15号住居跡土層断面(東から)
- 図版16-1 1区15号住居跡全景(北から)
 -2 1区15号住居跡掘り方(北東から)
 -3 1区15号住居跡電(西から)
 -4 1区16号住居跡遺物出土状態(北から)
 -5 1区16号住居跡掘り方(北西から)
- 図版17-1 1区16号住居跡全景(南西から)
 -2 1区17号住居跡全景(南西から)
- 図版18-1 1区17号住居跡土層断面(南東から)
 -2 1区17号住居跡電(西から)
 -3 1区17号住居跡電掘り方(西から)
 -4 1区17号住居跡遺物出土状態(西から)
 -5 1区18号住居跡全景(西から)
- 図版19-1 1区18号住居跡掘り方(西から)
 -2 1区18号住居跡電(西から)
 -3 1区18号住居跡電掘り方(西から)
 -4 1区18号住居跡緑釉陶器出土状態(北から)
 -5 1区19号住居跡全景(南から)
- 図版20-1 1区19号住居跡土層断面(南から)
 -2 1区19号住居跡電土層断面(南から)
 -3 1区19号住居跡電(南から)
 -4 1区19号住居跡遺物出土状態(南から)
 -5 1区20号住居跡全景(西から)
- 図版21-1 1区20号住居跡遺物出土状態(西から)
 -2 1区20号住居跡鎌出土状態(東から)
 -3 1区23号住居跡全景(北西から)
 -4 1区23号住居跡掘り方(北西から)
 -5 1区23号住居跡電(北西から)
- 図版22-1 1区24号住居跡全景(南西から)
 -2 2区27号住居跡全景(西から)
- 図版23-1 2区27号住居跡掘り方(西から)
 -2 2区27号住居跡電(西から)
 -3 2区28号住居跡全景(西から)
 -4 2区28号住居跡電土層断面(西から)
 -5 2区28号住居跡電(西から)
- 図版24-1 2区29号住居跡全景(西から)
 -2 2区29号住居跡掘り方(西から)
 -3 2区29号住居跡電土層断面(西から)
 -4 2区31号住居跡電(西から)
 -5 2区31号住居跡遺物出土状態(南から)
- 図版25-1 2区31号住居跡全景(西から)
 -2 2区31号住居跡掘り方(西から)
 -3 2区33号住居跡電(南東から)
 -4 2区33号住居跡遺物出土状態(南から)
 -5 2区33号住居跡掘り方(南東から)
- 図版26-1 2区33号住居跡全景(南東から)
 -2 2区34号住居跡全景(南西から)
- 図版27-1 2区34号住居跡掘り方(南西から)
 -2 2区34号住居跡遺物出土状態(南東から)
 -3 2区34号住居跡電(南西から)
 -4 2区34号住居跡電掘り方(南西から)
 -5 2区35号住居跡全景(南東から)
- 図版28-1 2区35号住居跡掘り方(南東から)
 -2 2区35号住居跡電土層断面(南東から)
 -3 2区35号住居跡電(南東から)
 -4 2区35号住居跡貯蔵穴土層断面(南から)
 -5 2区36号住居跡全景(南東から)
- 図版29-1 2区36号住居跡電土層断面(南西から)
 -2 2区36号住居跡掘り方土層断面(東から)
 -3 2区37号住居跡全景(南から)
 -4 2区38号住居跡1号電土層断面(西から)
 -5 2区38号住居跡1号電(西から)
- 図版30-1 2区38号住居跡全景(西から)
 -2 2区38号住居跡掘り方(南から)
 -3 2区38号住居跡遺物出土状態(東から)
 -4 2区38号住居跡遺物出土状態(東から)
 -5 2区39号住居跡電(西から)
- 図版31-1 2区39号住居跡全景(西から)
 -2 2区39号住居跡掘り方(西から)
 -3 2区39号住居跡貯蔵穴土層断面(西から)
 -4 2区40号住居跡電土層断面(南から)
 -5 2区40号住居跡電(南東から)
- 図版32-1 2区40号住居跡全景(南東から)
 -2 2区40号住居跡遺物出土状態(南東から)
 -3 2区40号住居跡掘り方(南東から)
 -4 2区40号住居跡遺物出土状態(南西から)
 -5 2区40号住居跡柱穴4土層断面(南西から)
- 図版33-1 2区42号住居跡全景(南から)
 -2 2区42号住居跡土層断面(南から)
 -3 2区42号住居跡遺物出土状態(東から)
 -4 2区44号住居跡電(南東から)
 -5 2区44号住居跡電土層断面(北東から)
- 図版34-1 2区44号住居跡全景(南東から)
 -2 2区44号住居跡遺物出土状態(北から)
 -3 2区44号住居跡遺物出土状態(南西から)
 -4 1区46号住居跡電(南から)
 -5 1区46号住居跡電土層断面(南から)
- 図版35-1 1区46号住居跡全景(南から)
 -2 1区46号住居跡掘り方(南から)
 -3 1区46号住居跡貯蔵穴土層断面(南から)
 -4 1区47号住居跡電土層断面(北東から)
 -5 1区47号住居跡電(北東から)
- 図版36-1 1区47号住居跡全景(南東から)
 -2 1区47号住居跡掘り方(南東から)
 -3 1区47号住居跡遺物出土状態(北東から)
 -4 1区48号住居跡遺物出土状態(南から)
 -5 1区48号住居跡掘り方(東から)
- 図版37-1 1区48号住居跡全景(南から)

- 2 1区49号住居跡全景 (南西から)
- 図版38-1 1区49号住居跡土層断面 (南西から)
- 2 1区49号住居跡掘り方 (南から)
- 3 2区52号住居跡全景 (西から)
- 4 2区52号住居跡掘り方 (西から)
- 5 2区52号住居跡土層断面 (西から)
- 図版39-1 2区52号住居跡掘り方 (西から)
- 2 2区52号住居跡西側土層断面 (南から)
- 3 2区53号住居跡全景 (西から)
- 4 2区53号住居跡掘り方 (西から)
- 5 2区54号住居跡土層断面 (南西から)
- 図版40-1 2区54号住居跡全景 (北西から)
- 2 3区1号住居跡全景 (西から)
- 図版41-1 3区1号住居跡竈 (西から)
- 2 3区1号住居跡掘り方 (西から)
- 3 3区2号住居跡全景 (西から)
- 4 3区2号住居跡竈 (西から)
- 5 3区2号住居跡掘り方 (西から)
- 図版42-1 1区1号井戸全景 (南西から)
- 2 1区1号井戸掘削状況 (南西から)
- 3 1区2号井戸全景 (南東から)
- 4 1区2号井戸遺物出土状態 (南東から)
- 5 1区3号井戸全景 (南から)
- 6 1区4号井戸土層断面 (南から)
- 7 1区4号井戸全景 (南から)
- 8 1区5号井戸土層断面 (南から)
- 図版43-1 1区5号井戸全景 (南から)
- 2 1区6号井戸全景 (南から)
- 3 1区7号井戸土層断面 (南から)
- 4 1区7号井戸全景 (南から)
- 5 1区8号井戸土層断面 (南から)
- 6 1区8号井戸全景 (南から)
- 7 1区9号井戸土層断面 (南から)
- 8 1区9号井戸全景 (南から)
- 図版44-1 1区10号井戸全景 (西から)
- 2 1区11号井戸全景 (南から)
- 3 1区12号井戸土層断面 (南西から)
- 4 1区12号井戸全景 (南西から)
- 5 2区13号井戸全景 (東から)
- 6 2区14号井戸全景 (東から)
- 7 1区15号井戸土層断面 (南西から)
- 8 1区15号井戸全景 (南西から)
- 図版45-1 1区16号井戸土層断面 (南から)
- 2 1区16号井戸全景 (南から)
- 3 1区17号井戸全景 (南から)
- 4 1区17号井戸土層遺物出土状態 (南から)
- 5 2区18号井戸全景 (東から)
- 図版46-1 2区19号井戸土層断面 (南から)
- 2 2区19号井戸馬歯出土状態 (東から)
- 3 2区20号井戸土層断面 (南から)
- 4 2区20号井戸全景 (南から)
- 5 2区21号井戸土層断面 (南から)
- 6 2区21号井戸全景 (南から)
- 7 2区22号井戸土層断面 (南から)
- 8 2区23号井戸土層断面 (南から)
- 図版47-1 2区23号井戸全景 (南から)
- 2 3区1号井戸全景 (南から)
- 3 2区24号井戸全景 (南から)
- 4 1区1号溝全景 (北東から)
- 図版48-1 1区1号溝遺物出土状態 (北から)
- 2 1区1号溝遺物出土状態 (北から)
- 3 1区2号溝土層断面 (西から)
- 4 1区3号溝北側部分 (南から)
- 5 1区3号溝全景 (北から)
- 6 1区4号溝全景 (西から)
- 7 2区5号溝全景 (南から)
- 図版49-1 2区5~11号溝全景 (右上が北)
- 2 2区5~9号溝全景 (南西から)
- 3 2区8号溝土層断面 (東から)
- 4 2区5~11号溝 (東から)
- 5 2区10号溝土層断面 (北から)
- 図版50-1 3区1号溝全景 (北東から)
- 2 3区2号溝全景 (東から)
- 3 1区1号土坑 (北から)
- 4 1区2号土坑 (北から)
- 5 1区3号土坑 (西から)
- 6 1区4・5号土坑 (北から)
- 7 1区6・7号土坑 (北から)
- 8 1区8号土坑 (北から)
- 図版51-1 1区9号土坑 (北から)
- 2 1区10号土坑 (南から)
- 3 1区11~13号土坑 (南から)
- 4 1区14・15号土坑 (南から)
- 5 1区16号土坑 (南から)
- 6 1区17号土坑 (北から)
- 7 1区18号土坑 (南から)
- 8 1区19・20号土坑 (南から)
- 図版52-1 1区21号土坑 (南から)
- 2 1区22号土坑群 (東から)
- 3 1区23号土坑 (北から)
- 4 1区24号土坑 (北から)
- 5 1区25・26号土坑 (北から)
- 6 1区27号土坑 (北から)
- 7 1区28号土坑 (北から)
- 8 1区29号土坑 (北から)
- 図版53-1 1区2号溝・30・40~44号土坑 (南から)
- 2 1区31号土坑 (東から)
- 3 1区37号土坑 (北から)
- 4 1区38号土坑 (北から)
- 5 1区39・62号土坑 (南から)
- 6 1区45号土坑 (西から)
- 7 1区46号土坑 (南から)
- 8 1区47号土坑 (南から)
- 図版54-1 1区48号土坑 (東から)
- 2 1区49号土坑 (南から)
- 3 1区50号土坑 (北から)
- 4 1区51号土坑 (南から)
- 5 1区52号土坑 (北から)
- 6 1区53号土坑 (北から)
- 7 1区54号土坑 (北から)
- 8 1区55号土坑 (南から)
- 図版55-1 1区56号土坑 (南から)
- 2 1区57号土坑 (南から)
- 3 1区58号土坑 (南から)
- 4 1区59号土坑 (南から)
- 5 1区60号土坑 (北から)
- 6 1区61号土坑 (西から)
- 7 2区65~67・72・73号土坑 (西から)
- 8 2区68号土坑 (南から)
- 図版56-1 2区69号土坑 (西から)
- 2 2区70号土坑 (南から)
- 3 2区71号土坑 (南から)
- 4 2区75号土坑 (南から)
- 5 2区76号土坑 (南から)

- 6 2区77号土坑 (南から)
- 7 2区78~85号土坑 (北から)
- 8 2区86号土坑 (南から)
- 図版57-1 2区87~96号土坑 (北西から)
- 2 2区90~92号土坑 (北から)
- 3 2区94号土坑 (東から)
- 4 2区96号土坑 (北から)
- 5 1区101・102号土坑 (西から)
- 6 1区103号土坑 (西から)
- 7 1区104号土坑 (南から)
- 8 1区105号土坑 (西から)
- 図版58-1 2区110号土坑 (北から)
- 2 2区111号土坑 (西から)
- 3 2区120・138~144号土坑 (西から)
- 4 2区121~133・135・137号土坑 (西から)
- 5 2区145号土坑 (南東から)
- 6 2区148号土坑 (南東から)
- 7 1区153号土坑土層断面 (西から)
- 8 1区153号土坑遺物出土状態 (西から)
- 図版59-1 3区1号土坑土層断面 (北から)
- 2 3区2号土坑土層断面 (北から)
- 3 1号焼土遺構遺物出土状態 (南から)
- 4 1号円形周溝遺構土層断面 (東から)
- 5 1号円形周溝遺構全景 (南東から)
- 図版60-1 1号円形周溝遺構遺物出土状態 (南西から)
- 2 1号円形周溝遺構P-1 (北から)
- 3 1号円形周溝遺構P-3 (南から)
- 4 1号円形周溝遺構P-4 (西から)
- 5 1号竪穴遺構遺物出土状態 (東から)
- 図版61-1 1号竪穴遺構土層断面 (東から)
- 2 1号竪穴遺構全景 (東から)
- 3 2号竪穴遺構全景 (東から)
- 4 1号掘立柱建物柱穴土層断面 (北東から)
- 5 1号掘立柱建物全景 (北西から)
- 図版62-1 1号掘立柱建物全景 (北東から)
- 2 1号サク状遺構全景 (西から)
- 図版63-1 1号畝状遺構全景 (南東から)
- 2 1号畝状遺構 (東から)
- 3 1号畝状遺構土層断面 (東から)
- 4 1号風倒木 (東から)
- 5 1号風倒木土層断面 (南西から)
- 図版64 1区1・2号住居跡出土遺物
- 図版65 1区3・4号住居跡出土遺物
- 図版66 1区4~6号住居跡出土遺物
- 図版67 1区7・8号住居跡出土遺物
- 図版68 1区8号住居跡出土遺物
- 図版69 1区9・10・12号住居跡出土遺物
- 図版70 1区12号住居跡出土遺物
- 図版71 1区12号住居跡出土遺物
- 図版72 1区12・14号住居跡出土遺物
- 図版73 1区14~16号住居跡出土遺物
- 図版74 1区16~19号住居跡出土遺物
- 図版75 1区19・20号住居跡出土遺物
- 図版76 1区20・23・24・2区27号住居跡出土遺物
- 図版77 2区27~29・31号住居跡出土遺物
- 図版78 2区33~35号住居跡出土遺物
- 図版79 2区35・36・38号住居跡出土遺物
- 図版80 2区38~40号住居跡出土遺物
- 図版81 2区40号住居跡出土遺物
- 図版82 2区40号住居跡出土遺物
- 図版83 2区40~42・44号住居跡出土遺物
- 図版84 1区46・47号住居跡出土遺物
- 図版85 1区47~49号住居跡出土遺物
- 図版86 2区52~54・3区1・2号住居跡、1区1号井戸出土遺物
- 図版87 1区1・2・5・2区14・1区17号井戸出土遺物
- 図版88 2区18・19・1区20号井戸出土遺物
- 図版89 1区20・2区24号井戸、1区1~3号溝出土遺物
- 図版90 1区4・2区5~7号溝出土遺物
- 図版91 2区7・9号溝、1区9・32・39・45~47・50・59号土坑出土遺物
- 図版92 土坑(群)、1号焼土遺構、1号円形周溝遺構、1号竪穴遺構、1号サク状遺構出土遺物
- 図版93 遺構外出土遺物(1)
- 図版94 遺構外出土遺物(2)
- 図版95 遺構外出土遺物(3)
- 図版96 遺構外出土遺物(4)
- 図版97 遺構外出土遺物(5)



発掘風景

第1章 調査に至る経緯

国道354号線は高崎市を起点とし、尾島町で上武道路（国道17号バイパス）を横切り、更に太田市・館林市に至る。近年、群馬県と埼玉県を結ぶ上武道路が開通したことによりその使用頻度が増したため、群馬県では本路線の利便性を更に高める必要から、道路整備に着手することになった。

県土木部道路建設課では、事前に埋蔵文化財の有無について県教育委員会文化財保護課と協議を行ったところ、路線に沿って多くの埋蔵文化財包蔵地が存在することが判明した。文化財保護課・新田町教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の三者で協議したところ、新田町所在の「下田中中道・下田

中川久保遺跡」と「中江田ハツ縄遺跡」の発掘調査を、当事業団で実施することになった。

「下田中中道・下田中川久保遺跡」の発掘調査は、平成3年7月～10月・平成5年4月～6月に行った。中江田ハツ縄遺跡の発掘調査は、調査面積5,300㎡・期間7ヶ月で契約され、平成6年2月上旬から開始し、予定通り8月には調査を終了した。

整理事業については、平成6年度に第1集として「下田中中道・下田中川久保遺跡」の報告書を刊行した。中江田ハツ縄遺跡の整理は、平成6年10月から平成7年12月に行い、第2集として報告書を刊行することとなった。



第1図 中江田ハツ縄遺跡位置図（国土地理院 20万分の1「宇都宮」使用）

第2章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

調査対象地区は、木崎台地南部の舌状台地部分と、その東に入り込む谷地部分にまたがる、5,300㎡の範囲である。工事用測量杭のNO.109～121が、ほぼ当遺跡の調査範囲に該当する。

グリッドの設定は対象区域に限定した設定であり、今回の調査方法の概要は以下の通りである。

(1) 表土掘削には、調査の効率化を図るため、掘削機械を使用した。

(2) 調査対象区域は、道路・水路によって分断されているため、第2図に示すとおり遺跡北西部から1・2区、東南低地部分を3区と呼称した。

(3) グリッドの設定は、国家座標第IV系を基準に5m方眼を設定し(第2図参照)、南西隅をグリッド起点とし、南北軸を算用数字で、東西軸をアルファベットで呼称した。

(4) 遺構名称は種別ごとに、1・2区と3区とで、それぞれ通し番号を付した。遺物の取り上げに際し、遺構単位・グリッド単位を基本とし、原位置をとどめる物については、その都度番号を付し、図面上に記録した。

(5) 遺構等の測量には平板測量を用い、1/20縮尺図を原則とした。

(6) 写真撮影には35mm版と6×6及び6×9インチ版カメラの、モノクロトリバーサルフィルムを使用した。また撮影対象に応じて、高所撮影用エレベーターシステム・高所作業車を使用した。

(7) 出土遺物の取り上げに際しては完形・大破片については図化等を行ったが、小破片については埋没土層ごと一括して取り上げた。

また、出土した遺物は、発掘調査期間内に水洗い・注記まで行った。

(8) 本遺跡の調査では自然科学分析・鉄分析を行い、分析結果を巻末に掲載した。

第2節 調査の経過

本遺跡の調査は、平成6年2月1日から調査準備に入り、2月14日より本格的に調査を開始した。発掘作業員は当初、登録29名であった。

2月中に北側の一部を除く1区全域の表土を重機により掘削し、概略の遺構確認作業等を実施した。

3月は、遺構確認が終了した1区の調査、3区低地部分の表土掘削・遺構確認・調査を実施した。また、1区表土の廃土置き場として使用していた2区の廃土移動も行った。また、3区では第1回目の航空写真撮影を実施した。

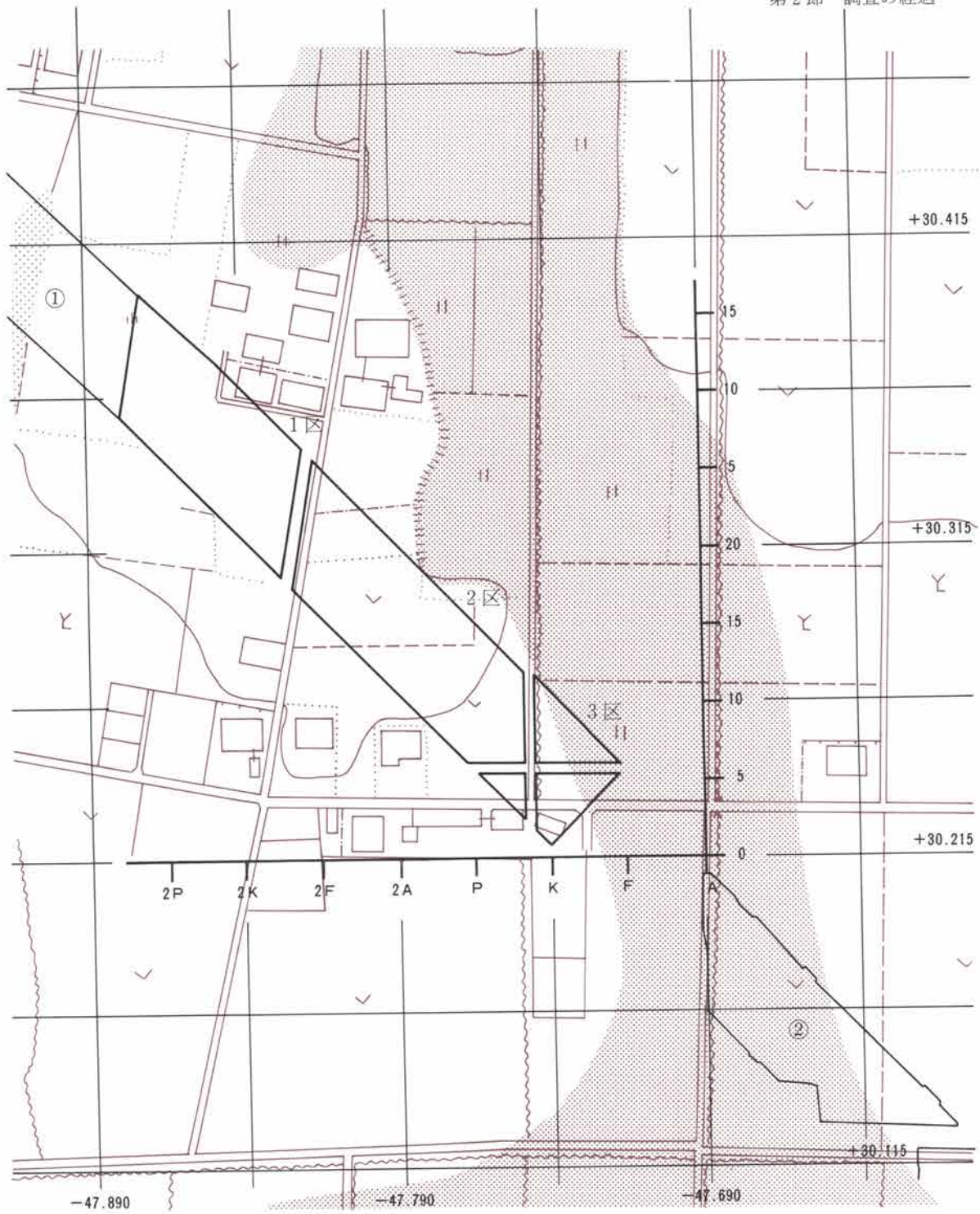
4月に入り、発掘作業員は登録53名となった。作業は、引き続き1区の調査を行った。また、遺構調査が終了した北西部から、順次測量グリッドごとに縄文時代の遺物包含層の調査に入った。

5月は、グリッドごとに縄文時代の遺物包含層の調査、中旬には同様に旧石器時代層に対する試掘調査を開始した。

6月は引き続き1区旧石器時代層の試掘調査を行い、中旬から1区残地部分の表土剥ぎと調査終了部分の埋め戻し、さらに2区の表土剥ぎ、3区残地部分の表土剥ぎ、3区調査終了部分の埋め戻し等を実施した。続いて遺構確認作業を実施した。さらに、調査期間等については旧石器時代層試掘の必要性等から協議の結果、当初予定を上回って、8月の1か月間を延長することとなった。

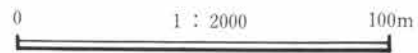
7月は、引き続き1区残地部分の遺構調査と、その部分の旧石器時代層の試掘調査、それと平行して2区の調査を開始した。また、2区において航空写真撮影を実施した。

8月は2区の旧石器時代層の試掘調査を行った。旧石器時代層の試掘では、遺構・遺物の存在は確認できなかった。下旬に現地調査を終了し末日までに調査区の埋め戻しと、調査事務所の撤収等を行った。



南から入り込んでいる帯状の低地

- ①中江田原遺跡（仮称）新田町教育委員会調査
- ②花園遺跡 新田町教育委員会調査



第2図 調査区及びグリッド設定図

第3章 遺跡の位置と環境

第1節 位置

中江田八ツ縄遺跡は、東武伊勢崎線木崎駅の西北西約1,200m、新田町立木崎中学校の西400mにある。

所在地は、群馬県新田郡新田町中江田字八ツ縄、字向原で、現況は台地上が宅地・畠地に、低地が水田として利用されている。

第2節 地理的環境

新田町は、群馬県の南東部にある。この地域は関東平野の北西部にあり平坦であるが、周辺の地形は、大間々扇状地・洪積台地・扇端低地等、形成時期の異なる地形が入り組み、複雑な地形を呈している。

大間々扇状地は、渡良瀬川によって形成された扇状地である。大間々町桐原を扇頂とし、ほぼ伊勢崎市東部と太田市西部を結んだ線を扇端としており、南北約18km、東西約13kmの地域を占める扇状地である。大間々扇状地は、一回でできたものではなく、形成時期の異なる新旧2つの段丘面で構成されている。その一つは、西半部を占める約5万年前に形成された桐原面であり、もう一つは東半部分の約2万年前に形成された藪塚面である。両者の間には、その形成時期に3万年ほどの開きがある。

大間々扇状地の扇端は、標高55～60mの間に位置する。扇端より北側の扇央部は、下部の厚い礫層のために水はけが良く乾燥し、乏水性扇状地の特色を示している。水が乏しく人々の暮らしには不向きな土地であったことから、大間々扇状地扇央部には、原始・古代の遺跡の分布が極めて少ない。

しかし、扇状地の礫層中を浸透した伏流水が、湧水として湧き出る扇端部には、原始・古代の遺跡が数多く見つかっている。それは、湧水が豊富なこと、さらに稲作が始まってからは、南側に水田可耕地としての扇端低地が広がっていること等の理由が考えられよう。

また、扇状地南側の扇端低地内にも台地が、侵食し残されている所が微高地として、島状に点在している。この部分は、周辺に水田可耕地としての扇端低地が広がり、古代から人々の生活に適した土地であったため、遺跡の分布が多い。

さらに扇状地南側には、新田町の木崎台地、太田市の由良台地という、扇状地より古い洪積台地がある。大間々扇状地の形成以前には、この台地が赤城火山の裾野から利根川付近まで広がっていたと考えられている。この台地を渡良瀬川が侵食する過程で、削り残された部分が、木崎台地・由良台地である。

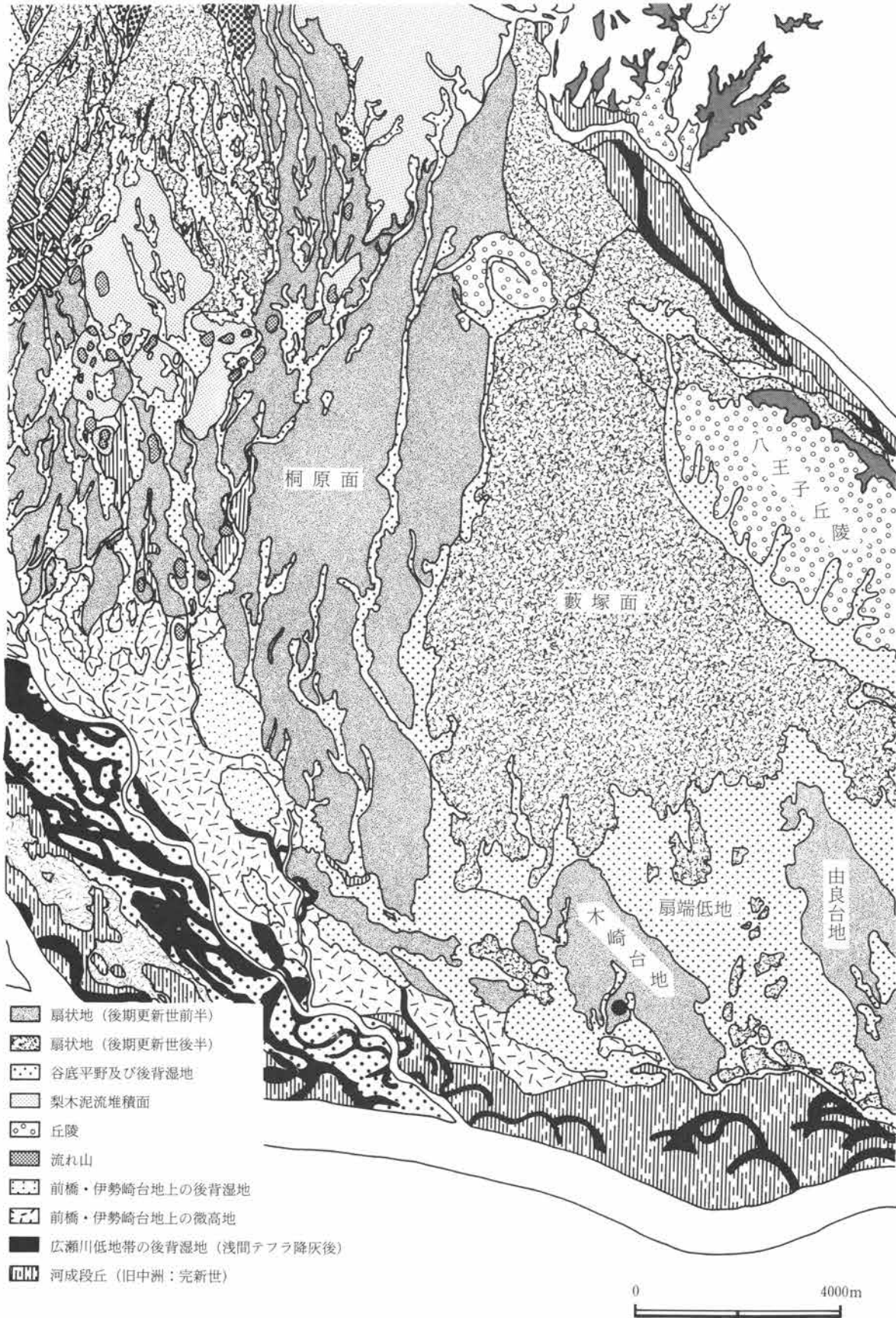
木崎台地は、火山泥流かまたは泥流性の堆積物の上にローム・有機質黒色土が堆積したものである。基盤は凝灰質の粘土層で、南北5km・東西2.3kmの広さをもつ。周辺低地との比高差は、2～2.5mである。こうした台地は、前述の微高地と同じく、古代から人々の住むのに適した土地として広く利用されてきた。台地縁部は周りの水田可耕地である低地との関連から、最もよく利用された場所の一つであり、遺跡が密集する地域である。

中江田八ツ縄遺跡は、この木崎台地の南西側縁部にある。木崎台地には帯状の低地が、南から幾筋か入り込んでいる。当遺跡は、その入り込んだ低地に両側を挟まれ、舌状になった台地部を、横断するように発掘区が設定された。発掘区の西側は、新田町教育委員会調査地点の、中江田原遺跡（仮称）が接している。

第3節 歴史的環境

中江田八ツ縄遺跡の周辺では、上武道路（国道17号バイパス）の建設及びその関連事業等に伴い、多くの遺跡が発掘調査されている。ここでは、遺跡の位置する新田町を中心として、その周辺地域の主な遺跡の分布を略述する。

旧石器時代 新田町における旧石器時代の遺跡



第3図 遺跡周辺の地形分類（『群馬県史』通史編1 付図2を編図）

第3章 遺跡の位置と環境

は、大間々扇状地の扇端部、木崎台地の縁辺部、微高地、湧水池周辺に主な立地が認められる。扇状地扇端部（標高60m）付近では愛宕遺跡（市野井）、木崎台地縁辺部では花園遺跡・大通寺東遺跡（木崎）・台遺跡（高尾）、中江田では原遺跡・A II地点・B地点・C地点の各遺跡が分布する。また、湧水池周辺では重殿遺跡（市野井）があげられる。

新田町出土の旧石器の大部分はA T層（始良丹沢火山灰、約21,000年前）より上位からの出土であり、旧石器時代後期から終末期にかけてのものである。その中で、当遺跡東側に広がる花園遺跡（木崎）では、A T下及びAs-B P中の2面の文化層が確認され、集石調理場跡も検出されている。

縄文時代 縄文時代の遺跡は多数確認されている。その分布は、大間々扇状地南端の標高60m前後に点在する湧水池周辺と木崎台地縁辺部に最も高い密度を示す。そして、前期末から中期にかけて急激にその数を増す傾向がある。その他、石田川・大川等の中小河川流域、扇端低地に残された微高地周辺、また湧水に起因する開析谷縁辺部にも遺跡が分布している。

主な遺跡としては、中江田A I・II地点遺跡（草創期）・中江田B地点遺跡（草創期）・矢太神遺跡（早・前・中・後期）・中江田原遺跡（前期）・一丁田遺跡（中期）・矢太神沼遺跡（後期後半）・重殿遺跡（前・中・後期）等があげられる。

弥生時代 新田町において弥生時代の遺跡が確認されている地域は、水田を開くことが可能な低地部を臨む、大間々扇状地扇端と洪積台地である木崎台地縁辺部である。主な遺跡には、大間々扇状地扇端部の矢太神遺跡・重殿遺跡、木崎台地上に立地する中江田A I地点遺跡・東田遺跡・梨子木遺跡・花園遺跡・台遺跡等があげられる。

古墳時代 古墳時代には灌漑技術の進歩に伴い扇端低地の開発が更に進み、弥生時代に比べて急速に発展していく。

木崎台地やその周辺の微高地は、最も多くの遺跡が残されているところである。特に木崎台地には、

新田町の古墳時代集落遺跡の約4割が集中する。はじめは台地縁辺や台地の中に入り込む谷沿いの部分に集落が発展し、6世紀になると台地中央部に向かって集落が広がっていくようである。

遺跡としては、木崎中学校校庭遺跡とその周辺の花園遺跡等があげられる。また、扇端低地中の微高地では深町遺跡・新屋敷遺跡・下田中遺跡等がある。

また、湧水池縁辺（大間々扇状地扇端部）にも、矢太神遺跡・村田境ヶ谷戸遺跡がある。

奈良・平安時代 中央集権的国家体制が成立し、律令制が施行されると新田町は、所謂「五畿七道」の東山道上野国新田郡に区画された。

東山道駅路に関係する遺跡として、入谷遺跡がある。瓦葺きの基壇建物2棟が90mの距離をおいて東西に並んでおり、総柱式であるところから倉庫の可能性があるという。遺跡の種別として地方官衙であることはほぼ確実視されており、『延喜式』に記載されている、「新田駅」に関係のある遺構の可能性も考えられる。

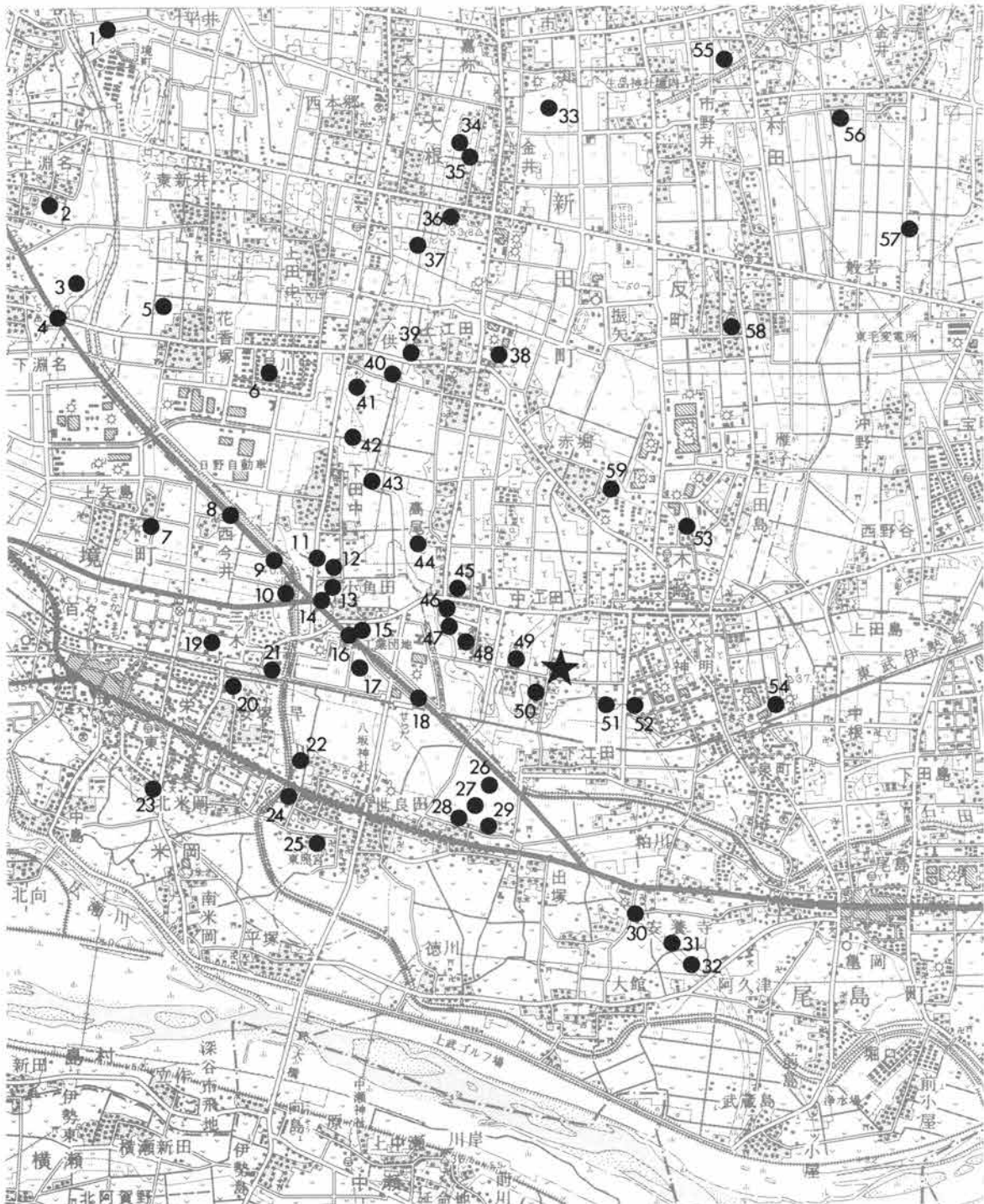
この時代の集落遺跡は、古墳時代の遺跡と分布を重複させながら、より外側まで集落が拡大している例が多く、下田中遺跡・三ツ木遺跡・中江田本郷遺跡・中江田原遺跡・台遺跡等があげられる。

寺院関係では、7世紀後半代に寺井廃寺が建立され、当遺跡の周辺では中江田本郷廃寺・源六堰廃寺等が確認されている。

中世 12世紀初めの浅間山の噴火によって一度荒廃したが、「女堀」に代表されるようにその後再開発が行われ、荘園を成立させていくのがこの時期である。新田氏による新田荘もこの時に成立した。これに関係する館跡には江田館跡・反町館跡等があげられる。また、世良田の長樂寺は、新田義重の子（徳川）義季が栄朝禅師を招き承久3年（AD1221）に開山した。その境内の一部が発掘され、中国陶磁・国産陶器・古瓦類等が多量に出土している。

【註】

- (1) 『新田町誌』第1巻 通史編 第1章照。
(新田町誌刊行委員会・新田町 平成2年)



1. 鶴巻古墳 2. 上淵名古墳群 3. 寺家前遺跡 4. 下淵名塚越遺跡 5. 梨子木遺跡 6. 下田中遺跡 7. 上矢島遺跡 8. 西今井遺跡 9. 三ツ木遺跡 10. 三ツ木越戸遺跡 11. 下田中川久保遺跡 12. 中道遺跡 13. 下田中中道遺跡 14. 三ツ木皿沼遺跡 15. 小角田古墳群 16. 小角田前遺跡 17. 尾島工業団地遺跡 18. 歌舞伎遺跡 19. 西林遺跡 20. 女塚遺跡 21. 下田遺跡 22. 上新田遺跡 23. 北米岡遺跡 24. 今井遺跡 25. 長楽寺遺跡 26. 世良田諏訪下遺跡 27. しども山古墳 28. 二体地藏古墳 29. 一本松塚古墳 30. 安養寺森西遺跡 31. 大館馬場遺跡 32. 阿久津宮内遺跡 33. 重殿遺跡 34. 矢太神沼遺跡 35. 矢太神遺跡 36. 新屋敷遺跡 37. 大根南遺跡群 38. 東田遺跡 39. 江田館跡 40. 西田遺跡 41. 上江田西田遺跡 42. 源六堰遺跡 43. 谷津遺跡 44. 台遺跡 45. 矢抜神社古墳 46. 中江田A地点遺跡 47. 中江田B地点遺跡 48. 中江田C地点遺跡 49. 中江田本郷遺跡 50. 中江田原遺跡 51. 花園遺跡 52. 木崎中学校校庭遺跡 53. 大通寺東遺跡 54. 下田遺跡 55. 村田境ヶ谷遺跡 56. 村田本郷遺跡 57. 深町遺跡 58. 反町館跡 59. 油田古墳群

第4図 周辺遺跡分布図（国土地理院 5万分の1「深谷」使用）

第3章 遺跡の位置と環境

周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	概要	文献等
1	鶴巻古墳	佐波郡東村東小保方字鶴巻	角閃石安山岩使用の横穴式石室。	
2	上淵名古墳群	佐波郡境町上淵名字銀杏	銀杏地区に群集墳あり。古墳～平安時代の集落跡。	『上毛古墳総覧』群馬県教委昭和12年『群馬県佐波郡采女村上淵名古墳発掘報告』国学院大学考古学会『上代文化』18 昭和23年
3	寺家前遺跡	佐波郡境町下淵名字寺家前	昭和58年度境町教委調査。朱書土器出土。	『昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』境町教委 昭和59年
4	下淵名塚越遺跡	佐波郡境町下淵名字塚越	古墳。古墳～平安時代の集落跡。館跡。	『下淵名遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成3年
5	梨子木遺跡	新田郡新田町下田中文字梨子木	弥生時代から古墳時代初頭の集落跡。	
6	下田中遺跡	新田郡新田町下田中文字高田他	古墳前期～平安時代集落、掘立柱建物。県企業局調査。	『萱野遺跡・下田中遺跡・矢場遺跡』群馬県企業局 平成3年
7	上矢島遺跡	佐波郡境町矢島字上矢島	ほ場整備関係の調査で一部集落跡を検出。	『上矢島遺跡発掘調査概報』境町教委 昭和54年
8	西今井遺跡	佐波郡境町西今井字中道 新田郡新田町下田中文字諏訪下	上武道、早川河川改修に伴う発掘調査で奈良時代以降の集落跡を検出。南接地はほ場整備関係の境町教委による調査。	『西今井・三ッ木遺跡調査概報』境町教委 昭和55年 『西今井遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和63年
9	三ッ木遺跡	佐波郡境町三ッ木字自光坊・堂前	古墳～平安時代集落、方形周溝墓。早川右岸台地上。なお南接地域は同遺跡名で境町教委が調査。	『三ッ木遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和60年 『西今井・三ッ木遺跡調査概報』境町教委 昭和55年
10	三ッ木越戸遺跡	佐波郡境町三ッ木字越戸	平安時代の集落跡。境バイパス工事に伴う調査。	『三ッ木越戸』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和56年
11	下田中川久保遺跡	新田郡新田町下田中文字中道 佐波郡境町三ッ木字越戸	古墳～平安時代の住居跡、平安時代の畝跡・溝、中・近世の道路等。	『下田中中道遺跡・下田中川久保遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成7年
12	中道遺跡	新田郡新田町下田中文字中道	古墳～平安時代の集落跡。	『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡』東京電力株式会社 昭和63年
13	下田中中道遺跡	新田郡新田町字中道	古墳～平安時代の住居跡・墳墓、平安時代の畦跡、中・近世の溝等。	『下田中中道遺跡・下田中川久保遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成7年
14	三ッ木皿沼遺跡	佐波郡境町三ッ木字皿沼	古墳時代の住居8軒、平安時代の畑・集落跡。	『年報13』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成6年
15	小角田古墳群	新田郡尾島町小角田	後期古墳群。角閃石安山岩使用石室。	相川龍雄「小角田前古墳考」『上毛及上毛人』198号 昭和8年
16	小角田前遺跡	新田郡尾島町世良田字小角田前	上武道に伴う発掘調査。古墳～平安時代の集落跡。古墳2基検出。	『小角田前遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和61年 『小角田前I・II遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成7年
17	尾島工業団地遺跡	新田郡尾島町世良田・小角田	小角田前遺跡に続く集落跡、古墳群。企業局調査。	
18	歌舞伎遺跡	新田郡尾島町世良田字歌舞伎	上武道に伴う発掘調査。古墳～平安時代の住居跡約200軒を検出。	『歌舞伎遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和57年
19	西林遺跡	佐波郡境町三ッ木西林	古墳～平安時代の集落跡検出。境バイパス関連調査。	『西林遺跡・下田遺跡発掘調査の概要』境町教委 昭和55年
20	女塚遺跡	佐波郡境町女塚道西	群馬大学史学研究室で一部発掘。古墳時代末期の住居跡を検出。	『境町古代遺跡』境町役場 昭和53年
21	下田遺跡	佐波郡境町三ッ木字下田	古墳～平安時代の住居跡。中世の溝・土坑。	『西林遺跡・下田遺跡発掘調査の概要』境町教委 昭和55年
22	上新田遺跡	新田郡尾島町世良田字上新田	中世の環濠居館の一部を検出。	『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡』東京電力株式会社 昭和63年
23	北米岡遺跡	佐波郡境町北米岡257他	縄文～古墳時代包蔵地。金子規矩雄氏蔵岩版出土地。	『境町古代遺跡』境町役場 昭和53年
24	今井遺跡	新田郡尾島町世良田今井	古墳～平安時代の集落か？	『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡』東京電力株式会社 昭和63年
25	長楽寺遺跡	新田郡尾島町世良田東照宮西	中世墳墓群、文殊山古墳(前方後円墳)等多彩。	『長楽寺遺跡』尾島町教委 昭和53年、56年

第3節 歴史的環境

No.	遺跡名	所在地	概要	文献等
26	世良田諏訪下遺跡	新田郡尾島町世良田諏訪下	古墳73基、平安時代の水田・館跡。	『世良田諏訪下遺跡』尾島町教委平成6年
27	しどみ山古墳	新田郡尾島町世良田稲荷東	世良田48塚古墳群の南端。後期古墳。	
28	二体地藏古墳	新田郡尾島町世良田、下町	東武伊勢崎線世良田駅から旧微高地上に続く古墳群のうちの一基。	
29	一本松塚古墳	新田郡尾島町世良田下原	世良田48塚古墳群の南端。後期古墳。	
30	安養寺森西遺跡	新田郡新田町安養寺字森西・森南	古墳～平安時代住居跡、中世館跡・墓坑、近世井戸・土坑・溝等。	『安養寺森西遺跡・大館馬場遺跡・阿久津宮内遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成7年
31	大館馬場遺跡	新田郡尾島町大館字馬場・鍛冶屋	古墳時代住居跡・畠、火葬土坑・井戸等。	同上
32	阿久津宮内遺跡	新田郡尾島町阿久津字宮内	弥生時代中期遺物包含層、古墳時代畠、平安時代住居跡等。	同上
33	重殿遺跡	新田郡新田町市野井字重殿・町田	旧石器・縄文時代遺物。古墳～平安時代集落跡。	『重殿遺跡』新田町教委 昭和59年
34	矢太神沼遺跡	新田郡新田町大根字松原	縄文時代後期の集落遺跡	『図録 矢太神沼遺跡』東京電力株式会社 昭和60年
35	矢太神遺跡	新田郡新田町大字大根	縄文時代集落跡。矢太神湧水池がある。	
36	新屋敷遺跡	新田郡新田町大根字新屋敷	古墳時代集落遺跡。	
37	大根南遺跡群	新田郡新田町大根字一丁田・観音前	縄文時代中期集落・土坑・埋設土器・集石遺構等、古墳時代住居跡。	『大根南遺跡群』新田町教委 平成5年
38	東田遺跡	新田郡新田町上江田	弥生時代の土坑、古墳時代の集落跡、中世の農家遺構。	『東田遺跡』新田町教委 昭和63年
39	江田館跡	新田郡新田町上江田字西廓	江田行義の館跡といわれる。室町時代の土塁、堀が残存。県指定史跡。	山崎一『群馬県古城址の研究』上昭和46年
40	西田遺跡	新田郡新田町上江田字西田	古墳・平安時代の集落跡。昭和50年調査。	『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡』東京電力株式会社 昭和63年
41	上江田西田遺跡	新田郡新田町上江田字西田	縄文時代住居跡・遺物包含層。古墳時代遺物包含層。	『年報』14 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成7年
42	源六堰遺跡	新田郡新田町上田中字源六堰	縄文～奈良・平安時代。上野国分寺式瓦を含む布目瓦散布。	
43	谷津遺跡	新田郡新田町上江田字谷津	古墳～平安時代の集落跡。櫛出土。	『西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡』東京電力株式会社 昭和63年
44	台遺跡	新田郡新田町高尾字台	縄文～平安時代の集落跡。	『台遺跡』新田町教委 昭和63年
45	矢抜神社古墳	新田郡新田町中江田字宿通	前方後円墳。角閃石安山岩使用石室。埴輪、大刀、玉類が出土。	出土品は東京国立博物館蔵
46	中江田A地点遺跡	新田郡新田町中江田字本郷他	通称「世良田田んぼ」の東側台地上にあり、旧石器～平安時代の包蔵地。	
47	中江田B地点遺跡	新田郡新田町中江田字宿通～新屋敷	旧石器時代遺物出土。縄文時代草創期の土器出土。	
48	中江田C地点遺跡	新田郡新田町中江田字宿通～新屋敷	旧石器時代遺物採取。縄文時代草創期の土器出土。	
49	中江田本郷遺跡	新田郡新田町中江田字本郷	奈良・平安時代の集落遺跡。中世館跡。	
50	中江田原遺跡	新田郡新田町中江田字原	旧石器時代遺物出土。古墳～奈良・平安時代住居跡。	
51	花園遺跡	新田郡新田町木崎字花園他	旧石器時代集石遺構、遺物出土。縄文時代住居跡、古墳時代集落遺跡。	『新田町誌』第1巻通史編 平成2年
52	木崎中学校校庭遺跡	新田郡新田町木崎字花園他	古墳時代集落遺跡。	『木崎中学校校庭遺跡』新田町教委 昭和59年
53	大通寺東遺跡	新田郡新田町木崎	旧石器時代尖頭器出土。	『新田町誌』第1巻通史編 参照
54	下田遺跡	新田郡新田町木崎	縄文時代の河道跡、古墳時代の水路。	『下田遺跡』新田町教委 平成6年
55	村田境ヶ谷戸遺跡	新田郡新田町村田字境ヶ谷戸	古墳時代後期の集落跡。	『境ヶ谷戸・原宿・上野井II遺跡』新田町教委 平成6年
56	村田本郷遺跡	新田郡新田町村田字本郷	古墳時代の集落跡。	
57	深町遺跡	新田郡新田町小金井字深町	微高地上の古墳時代前期の遺跡。	『重殿遺跡』付考(1) 新田町教委昭和59年
58	反町館跡	新田郡新田町反町字城	中世館跡。縄文土器散布し、古墳も館跡西南端に存在した。	
59	油田古墳群	新田郡新田町赤堀字東油田	後期古墳群。現状で3基確認。	

第4章 標準土層

第1節 調査1・2区

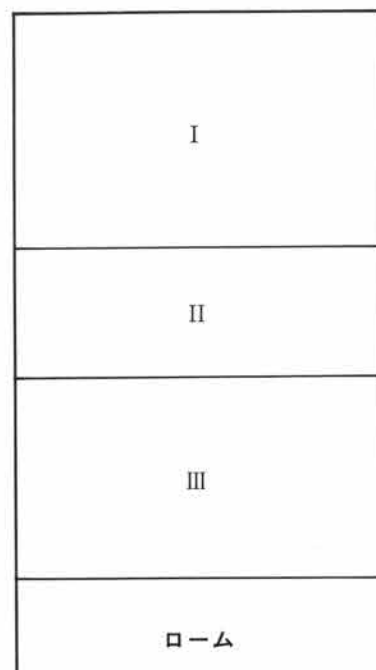
1・2区は、木崎台地上にあり、ロームの堆積が認められる。2区東半部分は、第I層から第III層まで削平または攪乱により、標準土層の堆積が薄いか、ほとんど確認されなかった。標準土層は以下の通り。

(ローム層については、第5章第1節及び自然科学分析を参照されたい)

第I層 いわゆる表土。暗褐色を呈する耕作土であり、浅間B軽石(As-B)を含有する。層厚は地点により異なるが、20~40cmほどである。

第II層 黒褐色を呈する土層。全体的に粒子は粗く、粘性弱いが、硬く締まっている。層厚は10~20cmほどである。

第III層 褐色を呈する土層。縄文時代の遺物包含層。砂質で粘性弱い。層厚は20~30cmほどである。



第5図 1・2区基本土層概念図

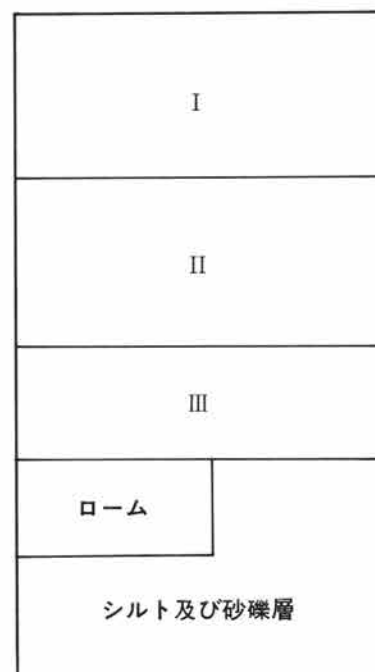
第2節 調査3区

3区は、木崎台地と低地との境に位置し、ロームの堆積は1・2区に比してしだいに薄くなり、堆積が認められなくなる。3区は道路を挟んで北と南に分かれるが、概ね道路北側ではロームは確認できず、道路南側で若干ロームが残っている。標準土層は、以下のとおり。(第III層以下の土層については、自然科学分析を参照されたい)

第I層 暗褐色を呈する土層。浅間B軽石(As-B)を含有する。層厚は地点により異なるが、概ね15~25cmほどである。

第II層 黒褐色を呈する、やや粘性のある土層。浅間C軽石(As-C)を、若干含有する。層厚は20~30cmほどである。

第III層 暗褐色を呈する、やや粘性のある土層。ロームブロックを若干含む。層厚は10~20cmほどである。



第6図 3区基本土層概念図

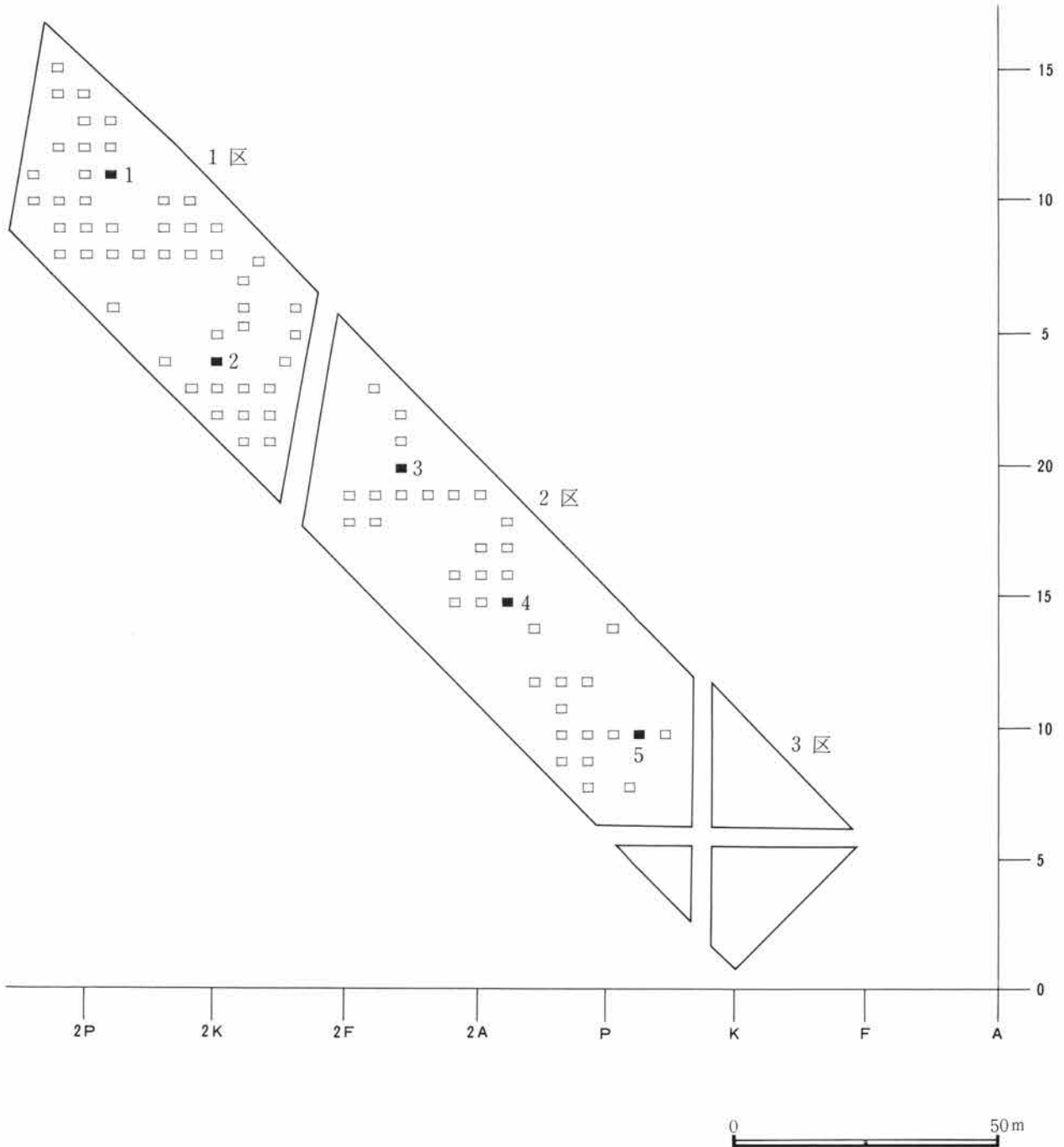
第5章 遺構と遺物

第1節 旧石器試掘

旧石器試掘は、5m四方の各測量グリッド毎に、攪乱・住居跡部分を除いて、2×1.5mグリッドを、

1・2区のローム台地上計85カ所で掘削した。

調査は、ローム上面より深さ0.7~1.5mほど、暗色帯を掘り抜くまで行った。この試掘の結果の限りでは、本時代の遺構・遺物は検出されなかった。



第7図 旧石器試掘位置図

第5章 遺構と遺物

なお、この試掘によりローム台地上では、暗色帯中にATが、その上層にAs-BPが、そしてローム層上部にAs-YPがそれぞれ検出された。

また、地層堆積状況によって、当遺跡が木崎台地南辺にある最大の舌状台地東部に位置し、1区が地形的に最も高く、2区・3区となるにしたがって低くなり、低地へとつながっていく状況が確認できた。(図版3参照。また、ローム層の詳細については、自然科学分析を参照されたい)

第1層 褐色を呈する土層。縄文時代の遺物包含層。

やや砂質で、粘性弱い。層厚は20~30cmほどである。(標準土層での第III層にあたる)

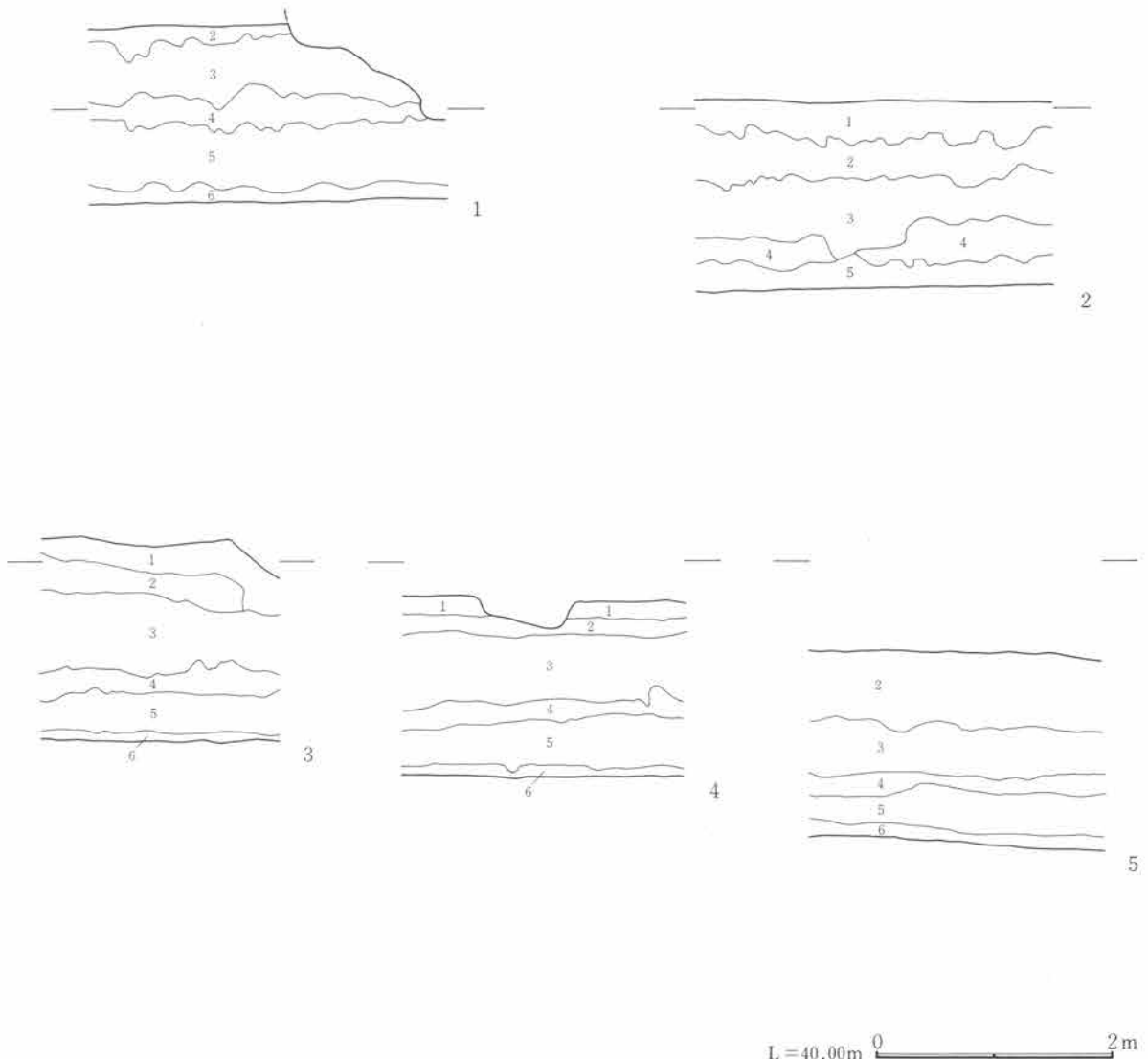
第2層 黄褐色を呈するローム層。軟質で粘性なし。この層上部にAs-YPを含む。

第3層 褐色を呈するローム層。硬質で粘性弱い。この層下部にAs-BPを含む。

第4層 黄褐色を呈するローム層。軟質で粘性強い。

第5層 暗色帯。軟質で粘性強い。

第6層 黄褐色土を呈するローム層。やや軟質で粘性強い。



第8図 旧石器試掘土層断面実測図

第2節 竪穴住居跡

1区1号住居跡 (図版4)

位置 2P・2Q-12・13

主軸方位 N-93° -E

平面形状 隅丸方形(推定) 規模 2.7×2.6m

残存深度 30cm 柱穴 なし 周溝 なし

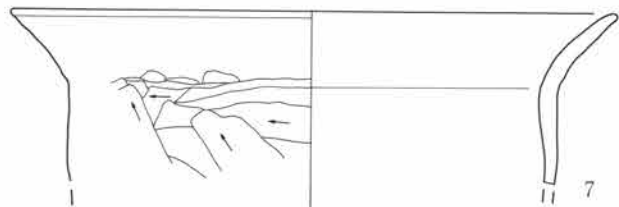
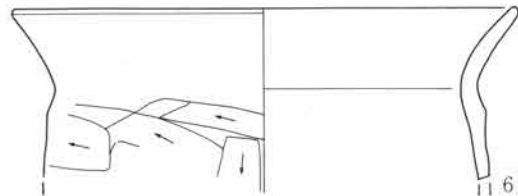
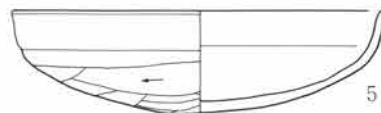
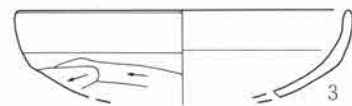
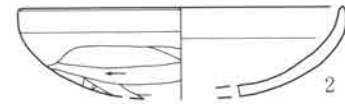
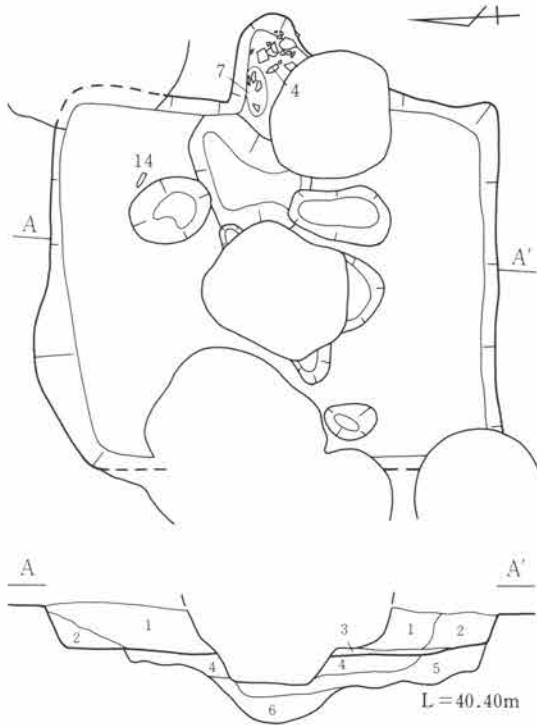
貯蔵穴 なし 竈概要 東辺中央部に位置する。

主軸は、N-87° -E。右袖部分は、32号土坑と重複しており不明。燃烧部は、東壁より約80cm外部へ

突き出し、横断面はU字状を呈していた。

遺物 土師器の坏・甕が、竈使用面や住居埋土中から出土しているが、破片を含めて遺物量は少ない。また、砥石・滑車型石製品も出土している。

調査所見 1号住居跡は、土坑が多数重複しているため、住居の残存状況は不良であった。掘り方は、深さ約10cmの起伏を持っていたと想定される。



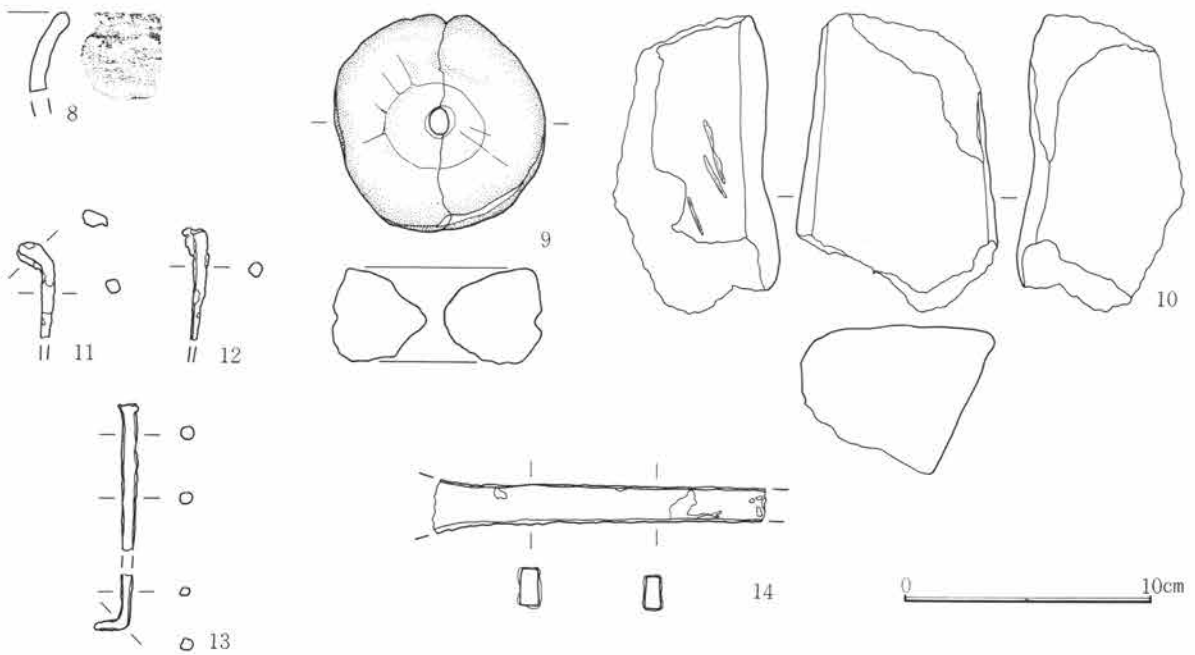
1区1号住居跡

- 1 黒褐色土 砂質。ロームブロック・焼土粒を含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒を含む。
- 3 貼り床
- 4 黄褐色土 ロームブロック・黒色土塊を含む。
- 5 褐色土 ロームブロックを含む。
- 6 褐色土 黒色土粒含み、不均質。

0 1m

0 10cm

第9図 1区1号住居跡及び出土遺物実測図(1)



第10図 1区1号住居跡出土遺物実測図(2)

1区2号住居跡(図版4・5)

位置 2M・2N-9・10

主軸方位 N-70°-E 平面形状 不明

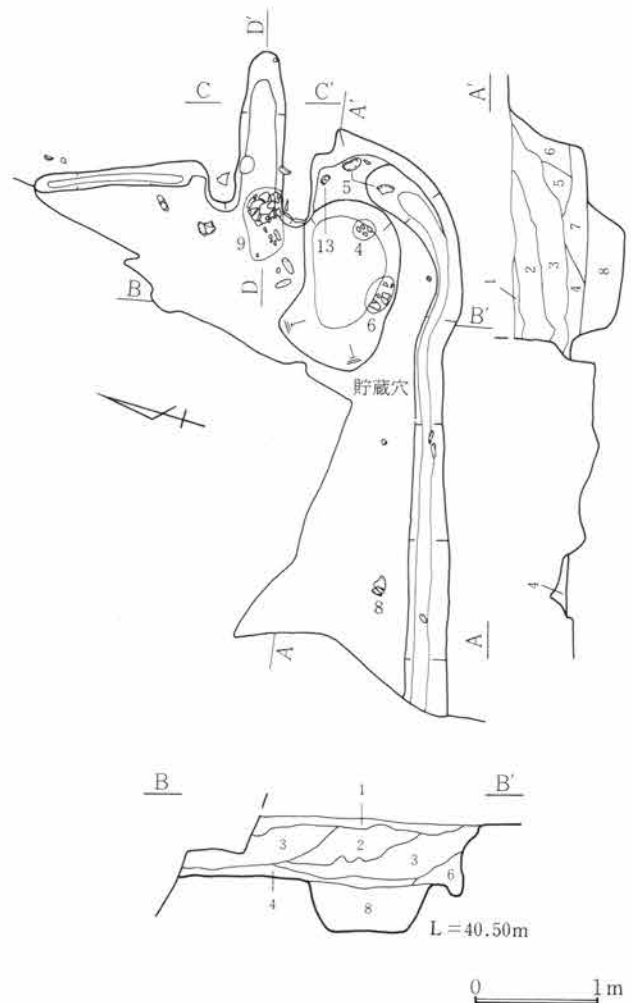
規模 不明 残存深度 50cm

柱穴 調査範囲では検出されなかった。

周溝 幅15cm深さ6cm程の周溝が、竈部分を除いて検出された。貯蔵穴 竈右側から検出された。規模は長軸130cm短軸75cm、深さ27cmである。竈概要 東辺に位置する。主軸はN-72°-E。残存状況は良好で、両袖部分は地山ロームを基礎としていた。燃焼部は東壁内に位置し、また煙道部は東壁より約80cm外部へ突き出し、横断面はU字形を呈していた。

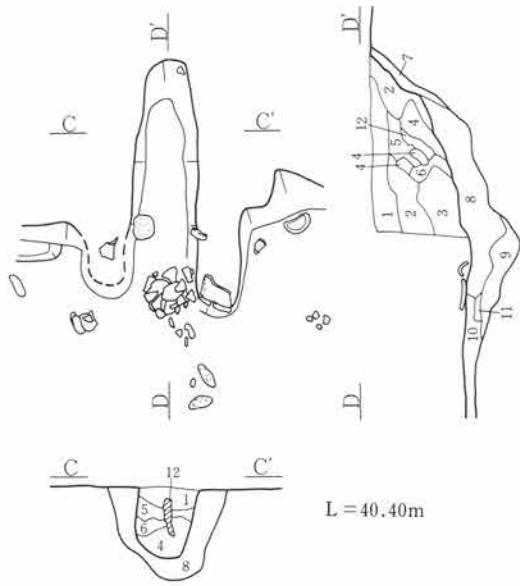
遺物 土師器の坏・甕、須恵器の蓋・甕、軽石等が住居跡床面・竈から出土している。

調査所見 住居跡北西部分は、大きな攪乱によって削り取られており、住居の全体の形状・規模等は不明である。床面は、粘質土とロームの混土を主体としてつくられており、全体的に固く締まっていた。また、7cmほどの起伏がある掘り方を持っていたと考えられるが、攪乱のためにその特徴を捉えるには至らなかった。



第11図 1区2号住居跡実測図

第2節 竪穴住居跡



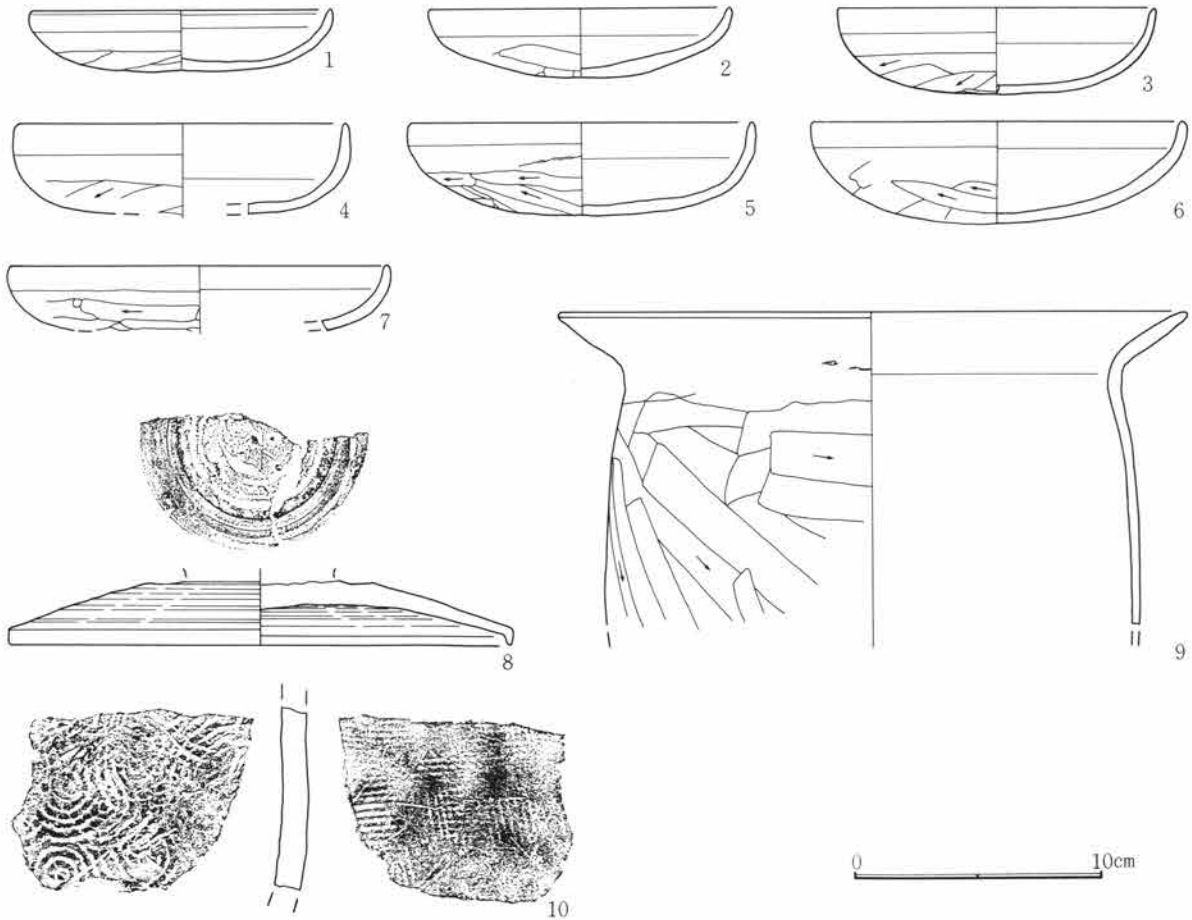
1区2号住居跡

- | | |
|--------|---------------------|
| 1 黄褐色土 | やや砂質。ローム粒を少量含む。 |
| 2 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 3 黒褐色土 | 焼土粒・ローム粒を多量に含む。 |
| 4 黒褐色土 | やや粘質。ローム粒を含む。 |
| 5 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 6 黄褐色土 | 焼土粒・ローム粒を多量に含む。 |
| 7 褐色土 | 焼土粒とローム小ブロックを多量に含む。 |
| 8 黄褐色土 | ロームブロック・焼土粒も若干含む。 |

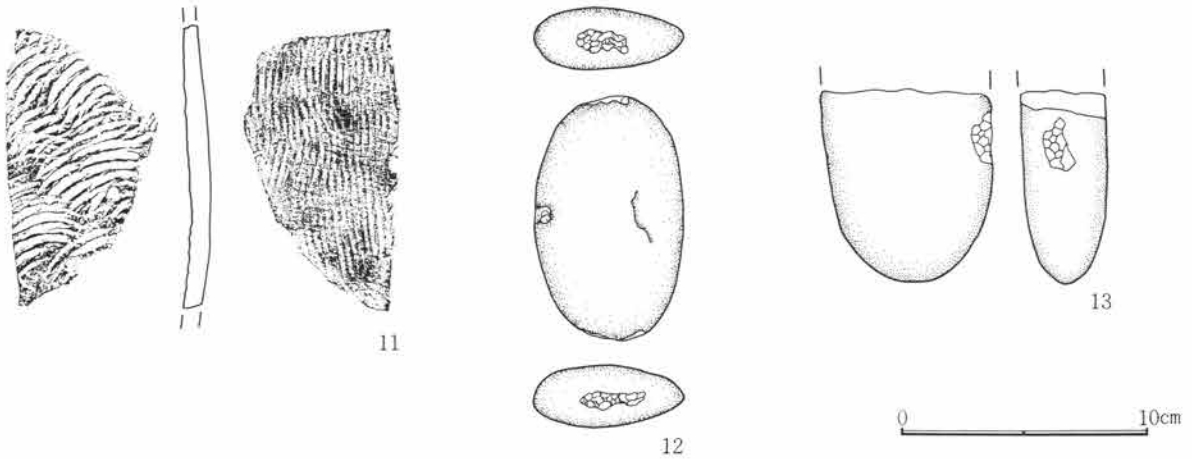
1区2号住居跡 竈

- | | |
|---------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒を多量に含む。 |
| 3 黒褐色土 | 焼土粒・黒褐色土小ブロックを少量含む。 |
| 4 明赤褐色土 | 焼土。 |
| 5 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物粒を多量に含む。 |
| 6 黄褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| 7 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 8 暗褐色土 | 焼土粒を多量に含む。 |
| 9 黄褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 10 黒褐色土 | 灰・焼土粒を含む。 |
| 11 暗褐色土 | 焼土粒を少量含む。 |
| 12 暗褐色土 | 攪乱。 |

0 1m



第12図 1区2号住居跡竈及び出土遺物実測図(1)



第13図 1区2号住居跡出土遺物実測図(2)

1区3号住居跡(図版5・6)

位置 2O・2P-10・11

主軸方位 N-17° -W 平面形状 隅丸方形

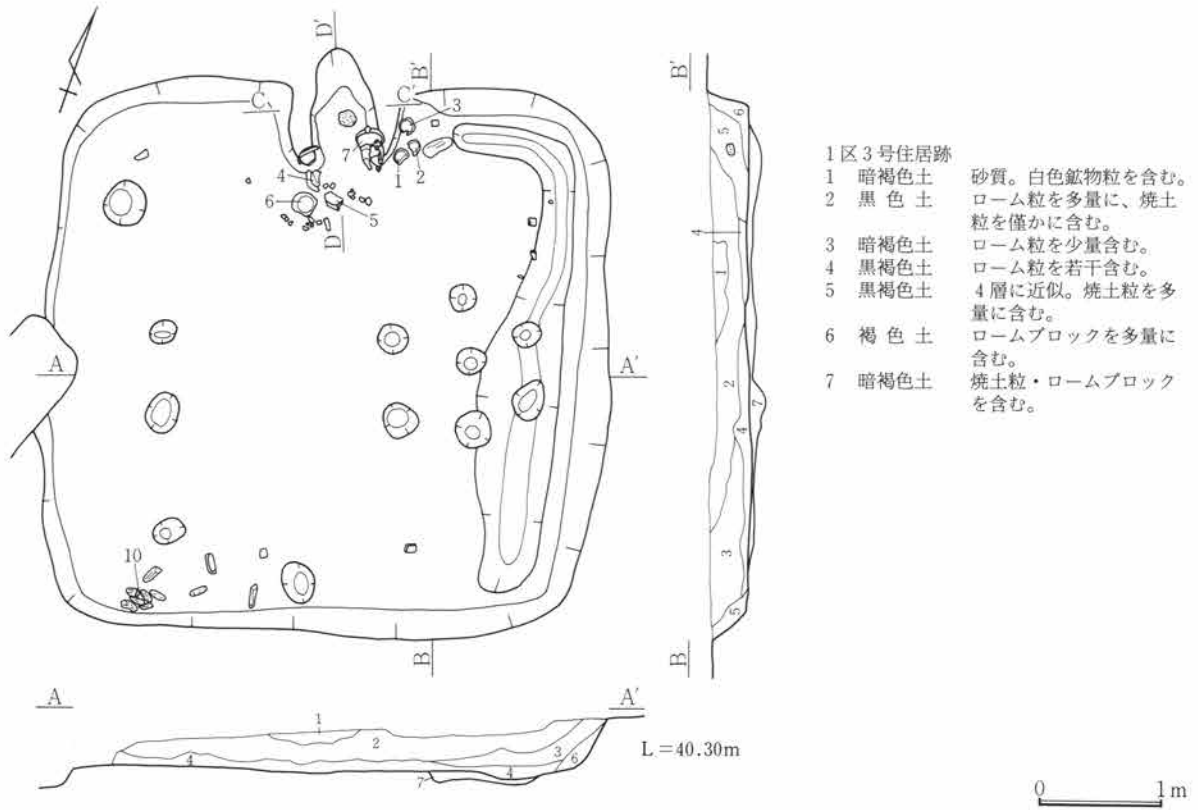
規模 4.3×4.2m 残存深度 30cm

柱穴 なし 周溝 住居北東コーナー部で、幅15cm深さ6cm程が検出された。貯蔵穴 なし

竈概要 北辺中央部に位置する。主軸は、N-26°

-W。比較的良好な状況で検出された。両袖部分は、地山ロームを基礎とし、その外部をロームブロック等を多量に使用した粘質土を用いて覆っている。燃烧面はよく焼けて締まっている。

遺物 土師器の坏・甕が、竈の袖部分や周辺に集中して出土している。また、棒状礫が住居南西隅に集中

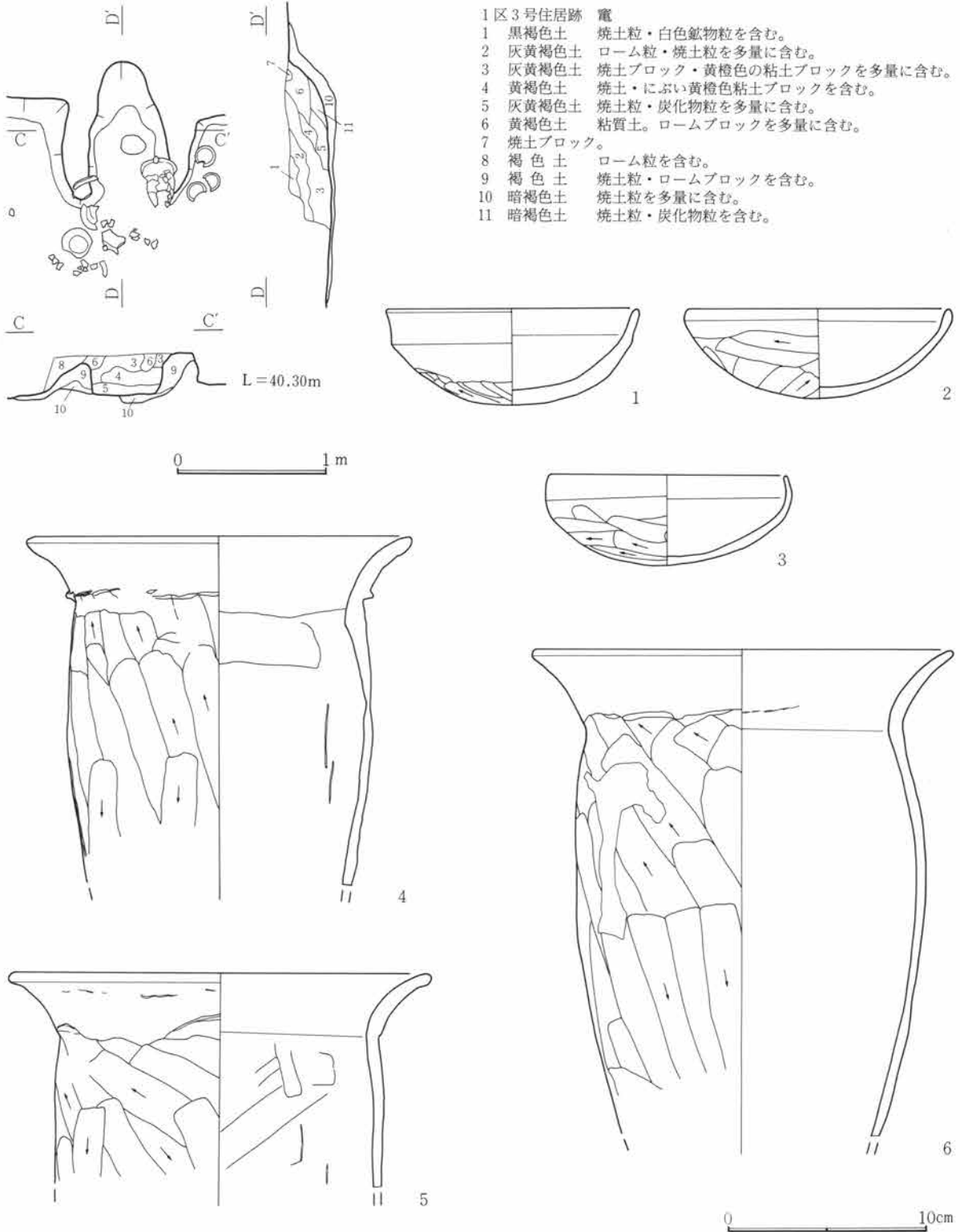


第14図 1区3号住居跡実測図

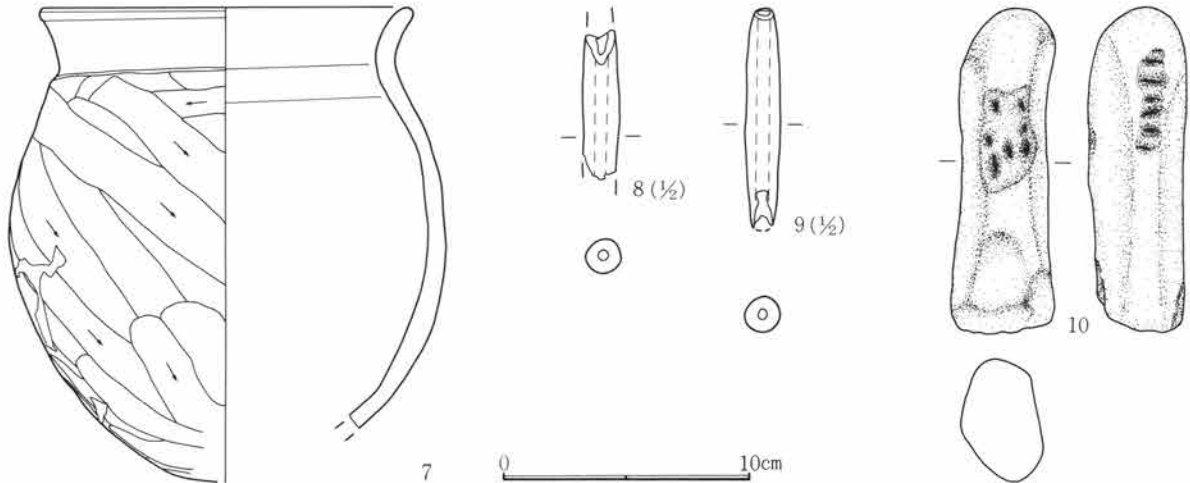
して出土している。

調査所見 床面には東西方向に2～3個並ぶピットの列が、4列検出された。壁方向と一致しているが、住居確認面でピットのみ確認はできなかったこと

から、住居に伴うものかどうか確定できなかった。掘り方は全体的に掘り下げられており、5 cm程の起伏を持っていたと考えられる。



第15図 1区3号住居跡竈及び出土遺物実測図(1)



第16図 1区3号住居跡出土遺物実測図(2)

1区4号住居跡 (図版6・7)

位置 2L-8、2M・2N-7・8

主軸方位 N-11° -E 平面形状 隅丸長方形

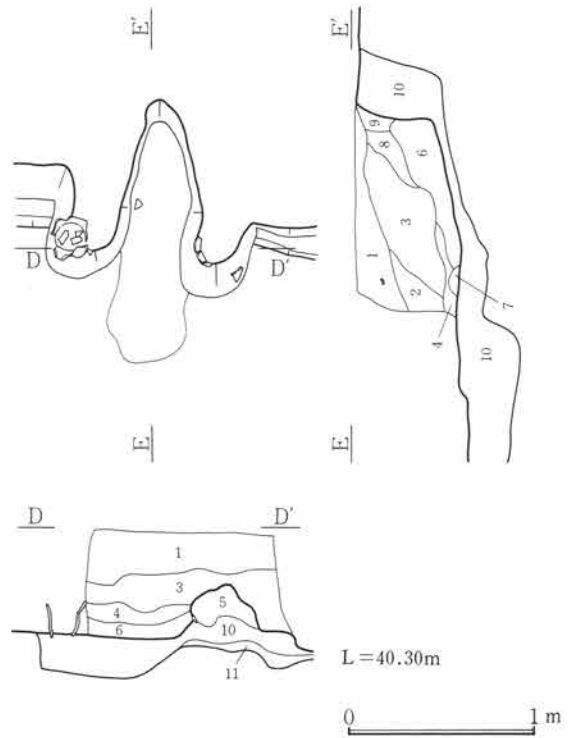
規模 5.3×3.3m 残存深度 53cm

柱穴 なし 周溝 幅15cm深さ7cmほどの周溝が、竈部分を除いて住居跡を全周する。

貯蔵穴 なし 竈概要 本住居跡からは、二つの竈が検出された。1号竈は北辺中央、2号竈は東辺やや南寄りから検出された。1号竈のほうが、2号竈より古いと思われる。主軸は1号竈がN-10° -W、2号竈がN-83° -Eである。最初に1号竈を使用し、作り替える時に北辺から東辺に移したのであろう。その際、1号竈の袖等は除去され、壁際には周溝が掘られている。2号竈は、竈穴外の地山を掘り込んで構築している。燃烧部は、二等辺三角形に近く、袖部分は住居跡内部に40cm程張り出し、粘質土を使用してその基礎としている。横断面は、緩やかなU字形を呈する。

遺物 土師器の坏・甕、棒状礫が住居埋土中・床面から22個出土している。また、破片ではあるが須恵器もわずかに出土している。

調査所見 住居跡東南コーナー部が、攪乱によって削り取られている。また、北東コーナー部では、11

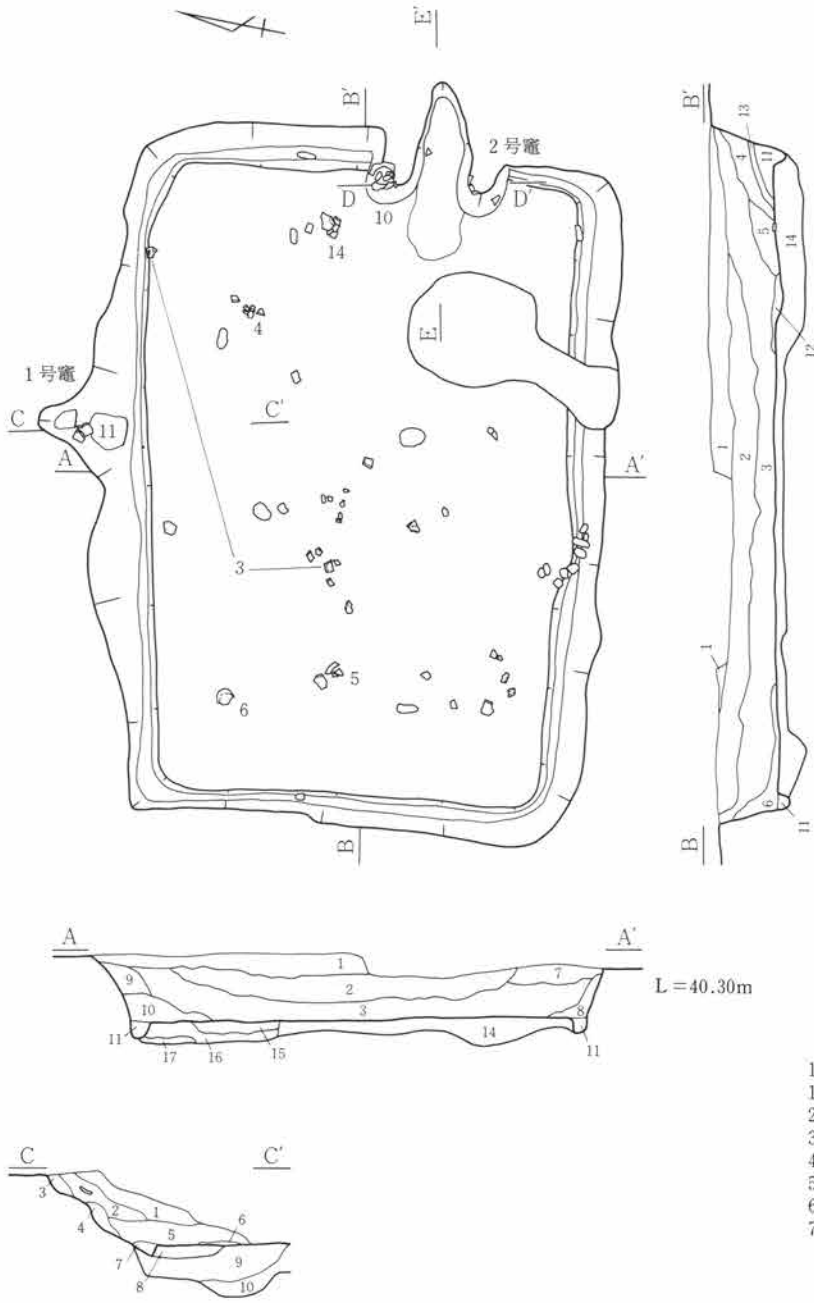


第17図 1区4号住居跡2号竈実測図

号井戸が重複しているが、新旧関係は不明である。住居跡掘り方は、中央部が小高く残り、その周辺が20cmほど低くなっている。

第2節 竪穴住居跡

- | | | | |
|---------|----------------|---------|--------------------|
| 1区4号住居跡 | 2号竈 | 6 黒褐色土 | 灰層。焼土粒を含む。 |
| 1 灰黄褐色土 | 粘性弱い。焼土粒を少量含む。 | 7 明黄褐色土 | ロームブロック主体。 |
| 2 灰黄褐色土 | 焼土粒を含む。 | 8 明褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| 3 黄褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 | 9 暗赤色土 | 焼土粒を多量に含む。 |
| 4 黄褐色土 | 焼土粒を含む。 | 10 黄褐色土 | 黒褐色土粒・ローム粒を含む。 |
| 5 黄褐色土 | 焼土粒を少量含む。 | 11 黄褐色土 | 10層と近似。ロームブロックを含む。 |



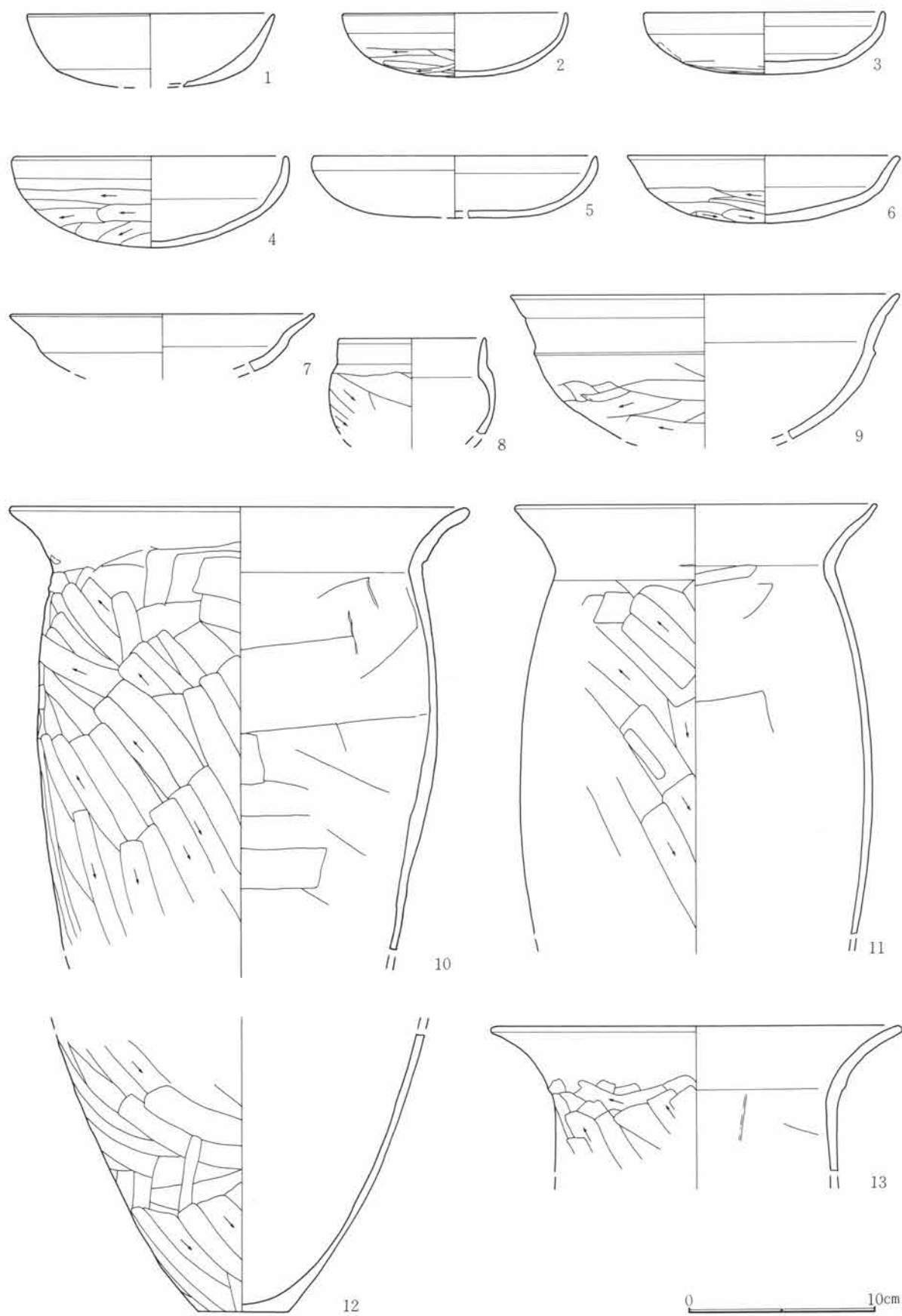
- 1区4号住居跡
- | | |
|----------|---------------------------|
| 1 黄褐色土 | 粘性弱い。ローム粒を若干含む。 |
| 2 黄褐色土 | 粘性弱い。ロームブロックを含む。 |
| 3 黒褐色土 | 粘性は1・2層より強い。焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 4 黄褐色土 | 粘性やや強い。焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 5 黄褐色土 | 粘性弱い。焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 6 褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 7 暗灰黄色土 | 粘性弱い。焼土粒を僅かに含む。 |
| 8 褐色土 | 6層に近似。粘性やや強い。 |
| 9 灰黄褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 10 灰黄褐色土 | 焼土粒・ローム粒・粘土ブロックを含む。 |
| 11 黄褐色土 | ローム粒を若干含む。 |
| 12 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 13 灰黄褐色土 | 焼土粒を若干含む。 |
| 14 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 15 黄褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 16 黄褐色土 | ロームブロックを多量に、焼土ブロックを僅かに含む。 |
| 17 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |

- 1区4号住居跡 1号竈
- | | |
|---------|--------------|
| 1 黒褐色土 | 焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 2 灰黄褐色土 | 焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 3 黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 4 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 5 褐灰色土 | 焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 6 黒褐色土 | 灰層。焼土粒を少量含む。 |
| 7 褐灰色土 | ローム小ブロックを含む。 |

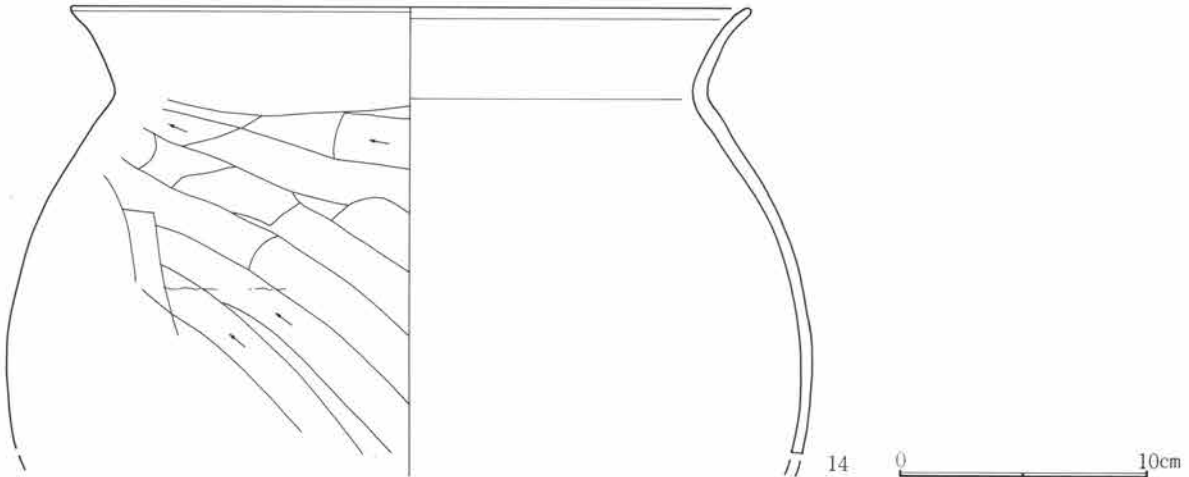
0 1m

第18図 1区4号住居跡及び1号竈実測図

第5章 遺構と遺物



第19図 1区4号住居跡出土遺物実測図(1)



第20図 1区4号住居跡出土遺物実測図(2)

1区5号住居跡・21号住居跡(図版7~9)

位置 2N・2O-6・7

主軸方位 N-38°-W(5号住)・N-49°-E
(21号住)

平面形状 5・21号両住居跡ともに隅丸方形

規模 6.2×6.2m(5号住)・4.4×4.5m(21号住)

残存深度 29cm(5号住)・10cm(21号住)

柱穴 柱穴1は直径60cm深さ66cm、柱穴2は直径70cm深さ83cm、柱穴3は直径85cm深さ69cm、柱穴4は直径55cm深さ50cmである。柱穴5は直径40cm深さ24cm、柱穴6は直径40cm深さ23cm、柱穴7は直径50cm深さ22cm、柱穴8は直径40cm深さ28cmである。

柱穴1~4は5号住に伴うもの、柱穴5~8は21号住に伴うものであると考えられる。

周溝 5号住は、竈部分を除いて住居跡を全周する。21号住は残存状況が不良で、検出されなかった。

貯蔵穴 5号住では、住居跡北側コーナー部に検出された。規模は、直径55cm深さ32cmである。21号住の貯蔵穴は、東コーナー部で検出された。規模は、直径50cm前後で深さは11cm程である。

竈概要 5号住竈は北西辺やや北寄り、21号住竈は北東辺やや東よりで、それぞれ検出された。

5号住の竈主軸は、N-43°-W。使用面は、住

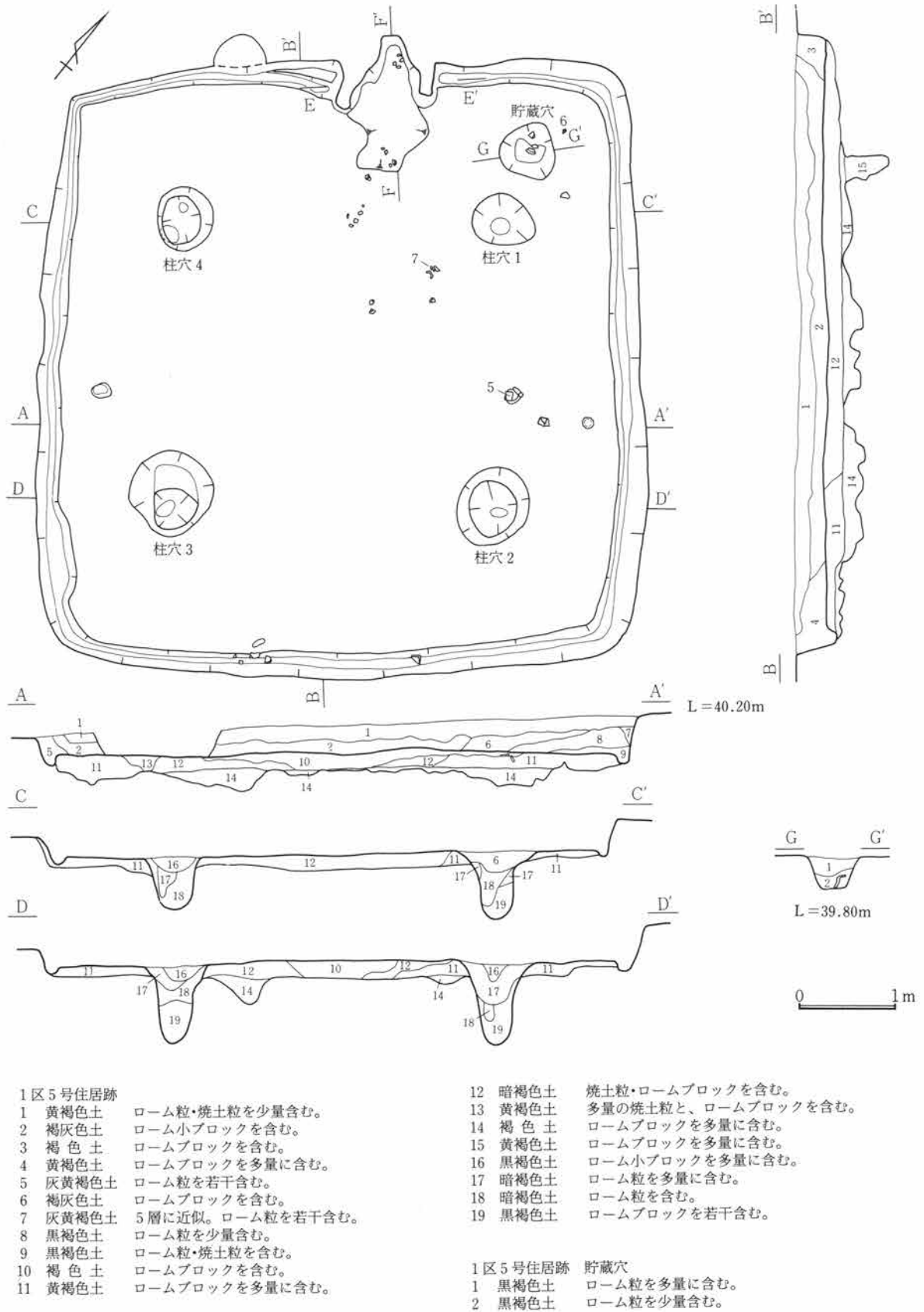
居床面よりも若干低くなっている。両袖部分は粘質土を使用して構築され、壁内に20cmほど張り出している。

21号住の竈主軸は、N-49°-E。残存状況は不良であるが、その埋土中からわずかに焼土が検出された。

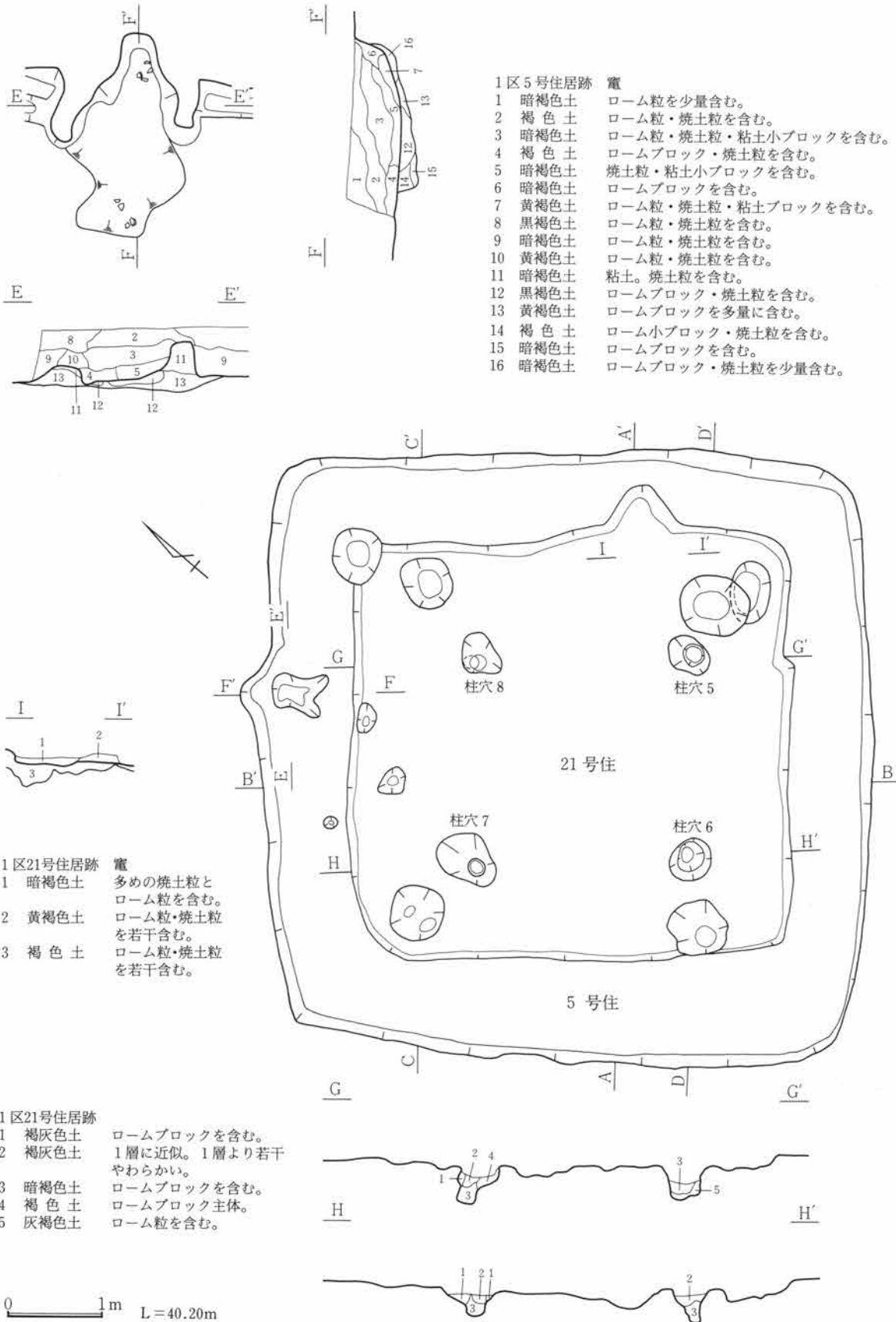
遺物 5号住では、土師器の坏・甕が埋土から出土している。また、柱穴1からは線刻のある石製紡錘車が、貯蔵穴からは鉄製品が出土した。

21号住からは、土師器の破片が僅かに出土した。

調査所見 調査当初、二つの住居跡は別の住居跡として取り扱った。しかし、柱穴1~4と柱穴5~8が等間隔であること、住居跡4辺が平行であることを考えると、5号住居跡は21号住居跡を拡張したものと考えるのが自然であろう。

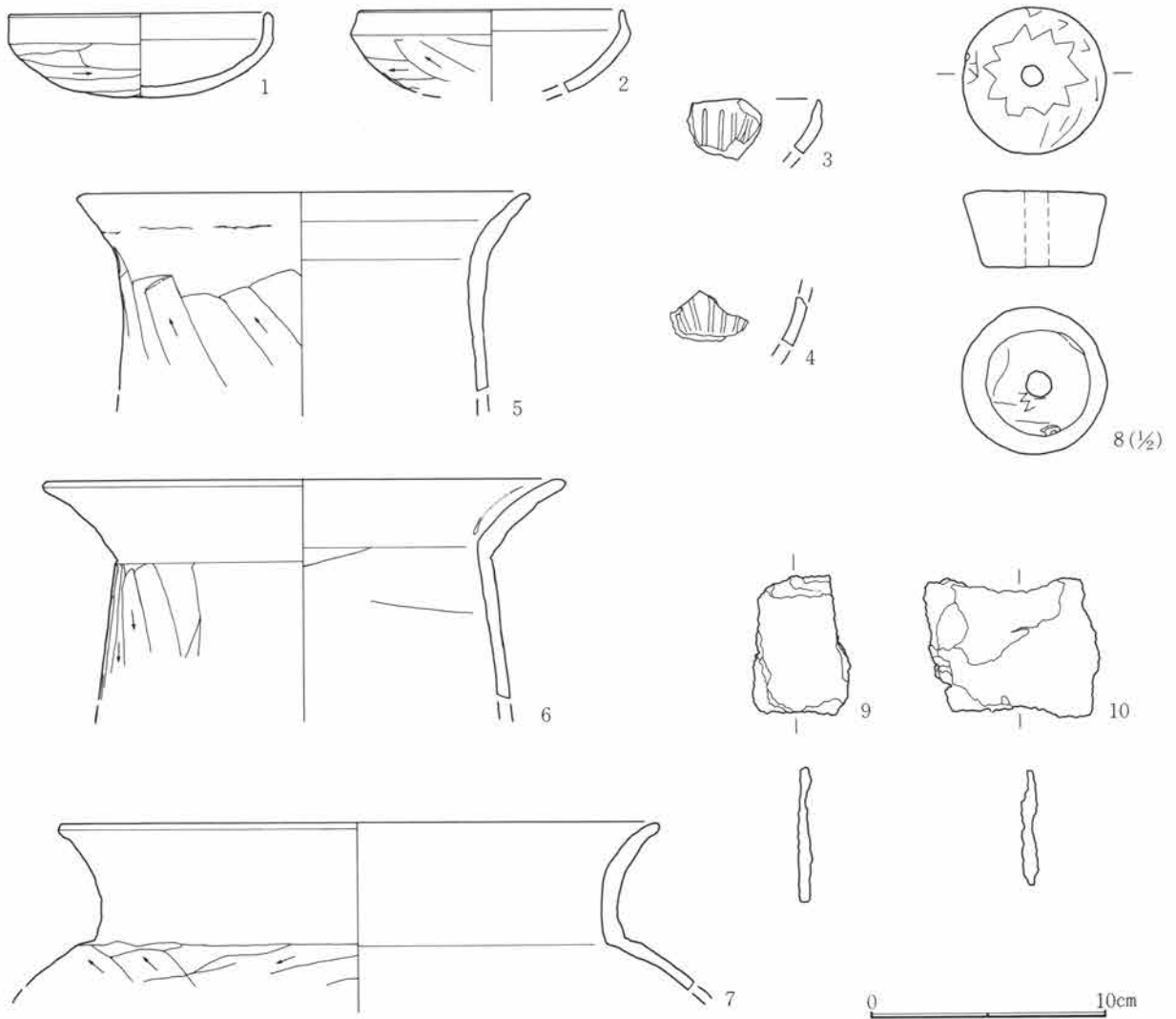


第21図 1区5号住居跡実測図



第22図 1区5号住居跡竈及び21号住居跡実測図

第5章 遺構と遺物



第23図 1区5号住居跡出土遺物実測図

1区6号住居跡 (図版9)

位置 2M~2O-4・5

主軸方位 N-23°-W

平面形状 隅丸方形(推定) 規模 不明

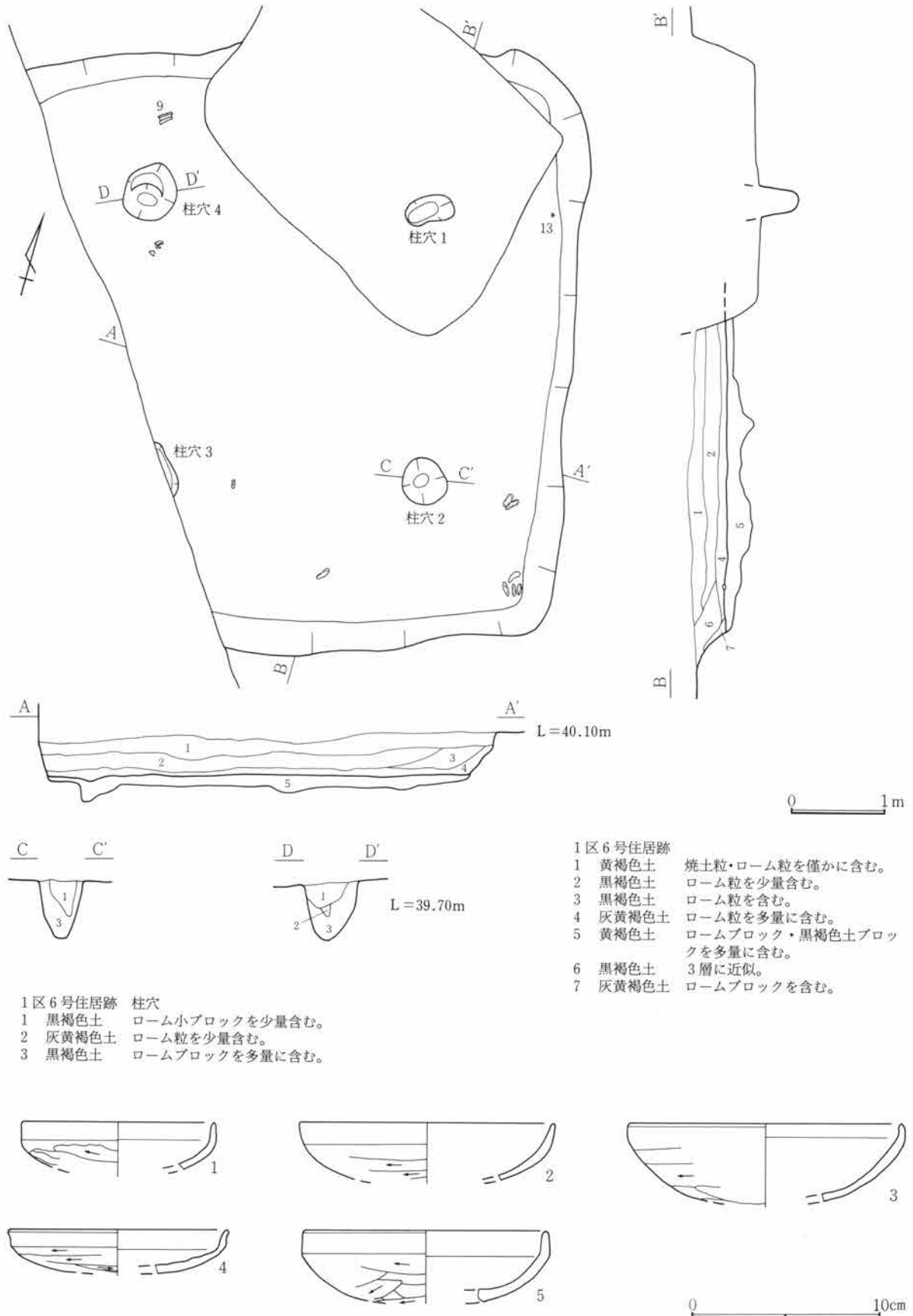
残存深度 35cm 柱穴 柱穴は3カ所で検出された。柱穴1は、直径30cm深さ43cm、柱穴2は直径70cm深さ47cm、柱穴4は直径80cm深さ46cmである。柱穴3は直径・深さは不明であるが、位置的に柱穴に発展すると考えてよからう。

周溝 なし 貯蔵穴 不明 電概要 不明

遺物 土師器の坏・甕、須恵器の甕が埋土中から出土している。また、暗文のある土師器の坏や、擦痕の

ある石製紡錘車が出土している。全体的な遺物量は、あまり多くない。

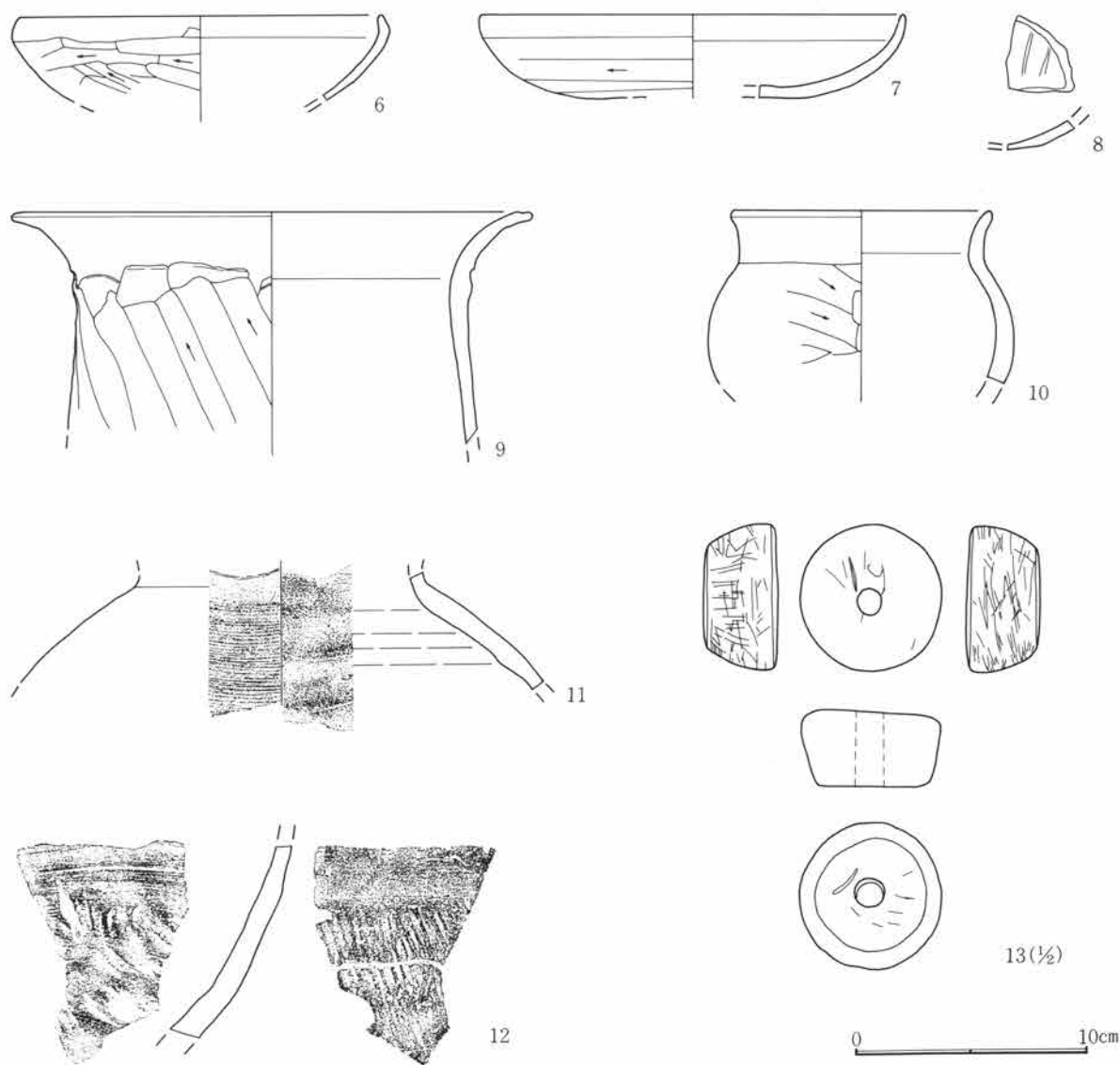
調査所見 6号住居跡は、調査区外にまでその範囲が及んでおり、また攪乱により北側の一部が削り取られているため、はっきりとした規模・形態は不明である。竈は検出されなかった。また、掘り方は住居跡中央部が小高く残り、その周辺が低くなっており、約10cmの起伏をもっている。



- 1区6号住居跡
- | | |
|---------|-------------------------|
| 1 黄褐色土 | 焼土粒・ローム粒を僅かに含む。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 4 灰黄褐色土 | ローム粒を多量に含む。 |
| 5 黄褐色土 | ロームブロック・黒褐色土ブロックを多量に含む。 |
| 6 黒褐色土 | 3層に近似。 |
| 7 灰黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |

- 1区6号住居跡 柱穴
- | | |
|---------|----------------|
| 1 黒褐色土 | ローム小ブロックを少量含む。 |
| 2 灰黄褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 3 黒褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |

第24図 1区6号住居跡及び出土遺物実測図(1)



第25図 1区6号住居跡出土遺物実測図(2)

1区7号住居跡(図版9・10)

位置 2J・2K-4・5

主軸方位 N-14°-W

平面形状 隅丸方形 規模 3.9×4.1m

残存深度 35cm 柱穴 なし

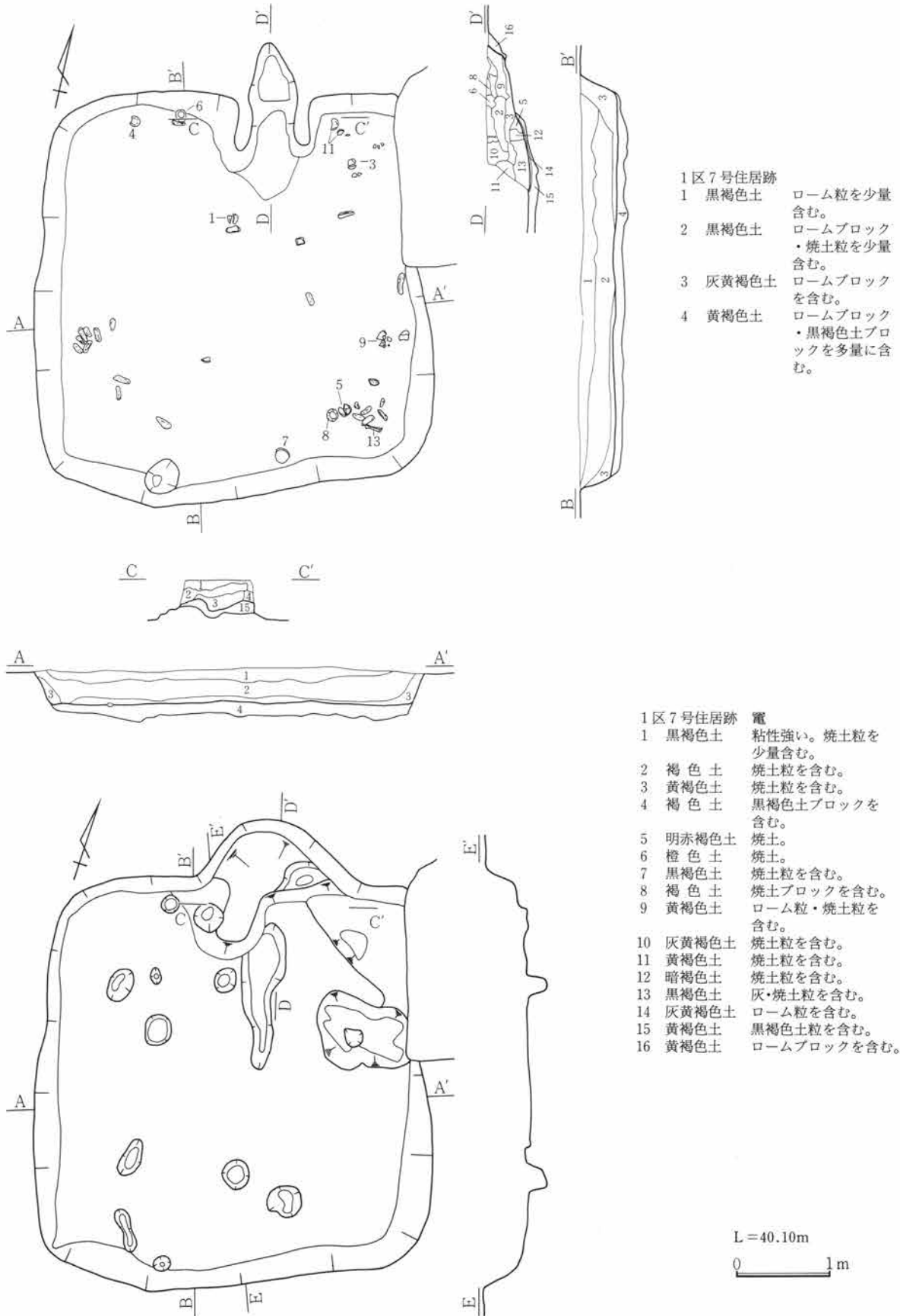
周溝 なし 貯蔵穴 なし

電概要 竈は、住居跡北辺やや東寄りで見出された。主軸は、N-13°-W。煙道部は北壁より約50cm外部へ突き出し、横断面は緩やかなU字形をなしていた。両袖部分は50cmほど壁内に張り出し、粘質土を

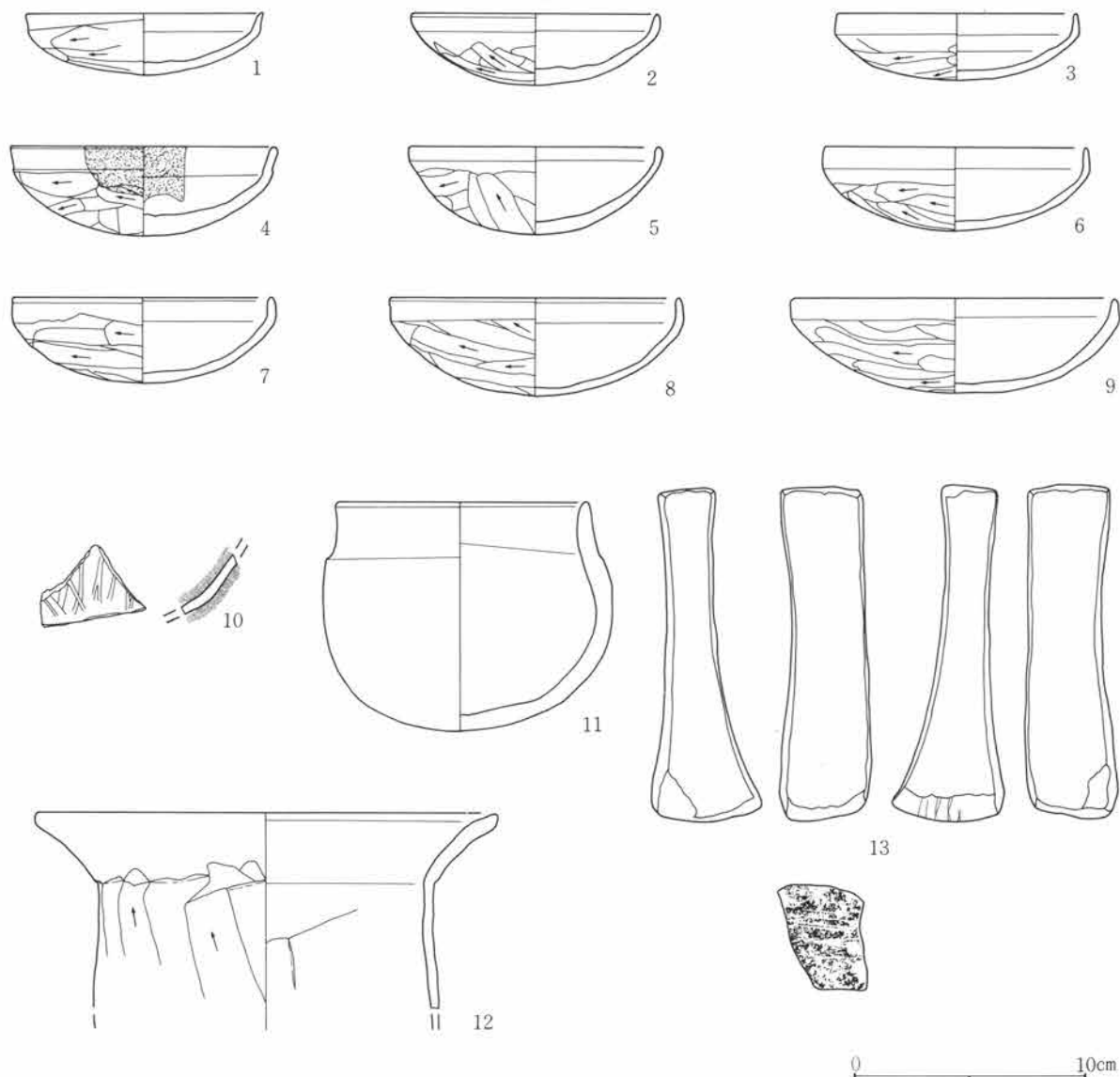
使用してその基礎としている。

遺物 土師器の坏・甕・壺や、砥石が住居埋土中・床面付近から出土している。また棒状礫が、住居跡東南隅と、西辺やや南寄りの部分で多数出土している。遺物総量としては、あまり多くはない。

調査所見 住居跡北東壁は、攪乱によって北側半分ほどが削り取られている。掘り方は深さ約15cmの起伏を持っていたと考えられる。



第26図 1区7号住居跡実測図



第27図 1区7号住居跡出土遺物実測図

1区8号住居跡 (図版10・11)

位置 2 I・2 J-4・5

主軸方位 N-33° -W

平面形状 東南部が弧状を呈する隅丸方形

規模 4.4×5.5m 残存深度 62cm

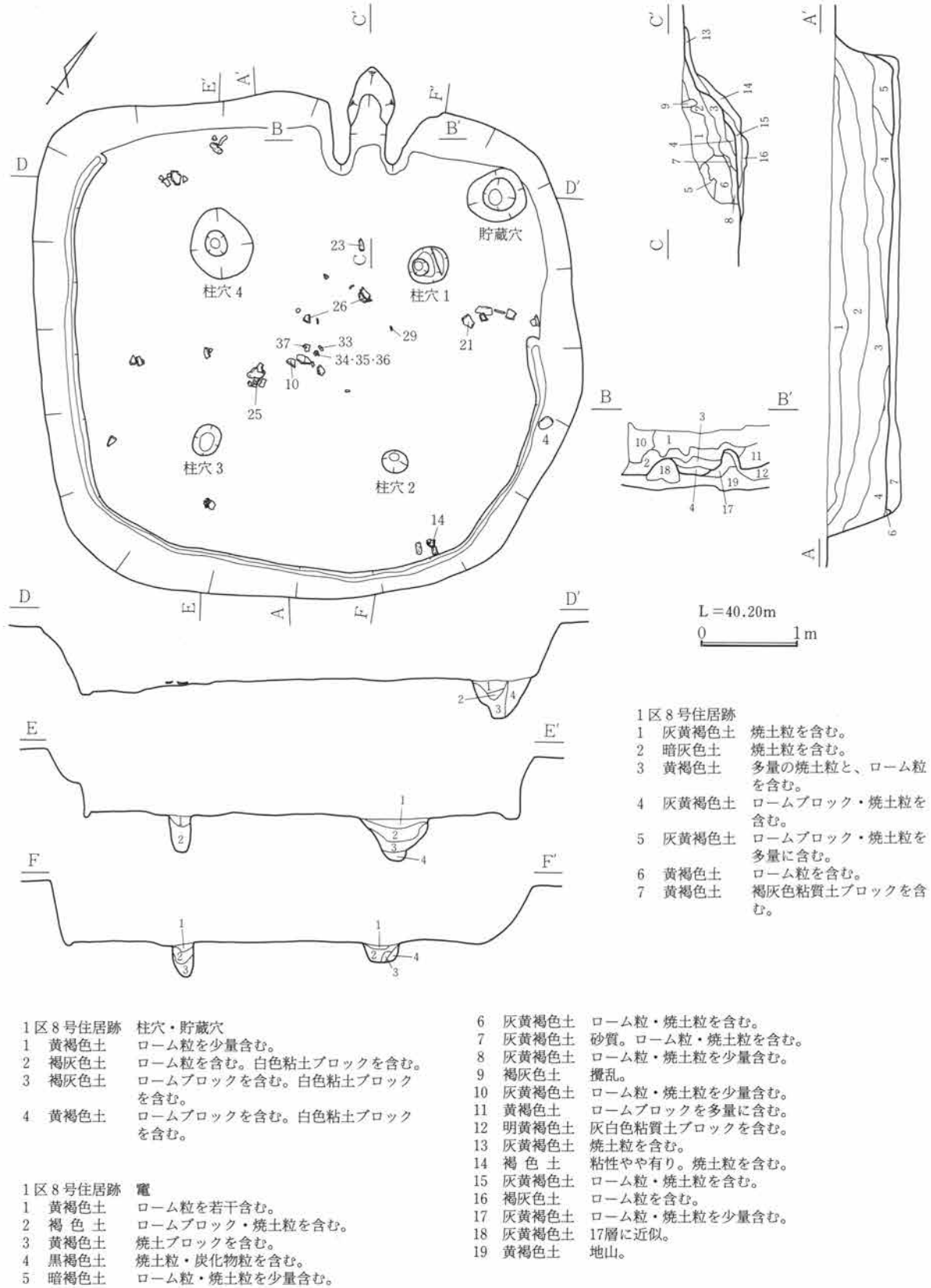
柱穴 柱穴1は直径35cm深さ20cm、柱穴2は直径25cm深さ35cm、柱穴3は直径20cm深さ35cm、柱穴4は直径70cm深さ40cmである。柱穴埋土に、青白色の粘土が検出されており、柱を固定するためのものと考えられる。周溝 住居跡南半部分で確認された。貯蔵穴 住居跡の北側隅、竈の右側で検出した。規

模は、直径60cm深さ40cm程である。

竈概要 北西辺やや北寄りに位置する。主軸は、N-29° -W。煙道部は、北西壁より約40cm外部へ突き出し横断面はU字形をなしていた。燃烧部は壁内にあり、両袖部分は壁内に40cmほど張り出している。

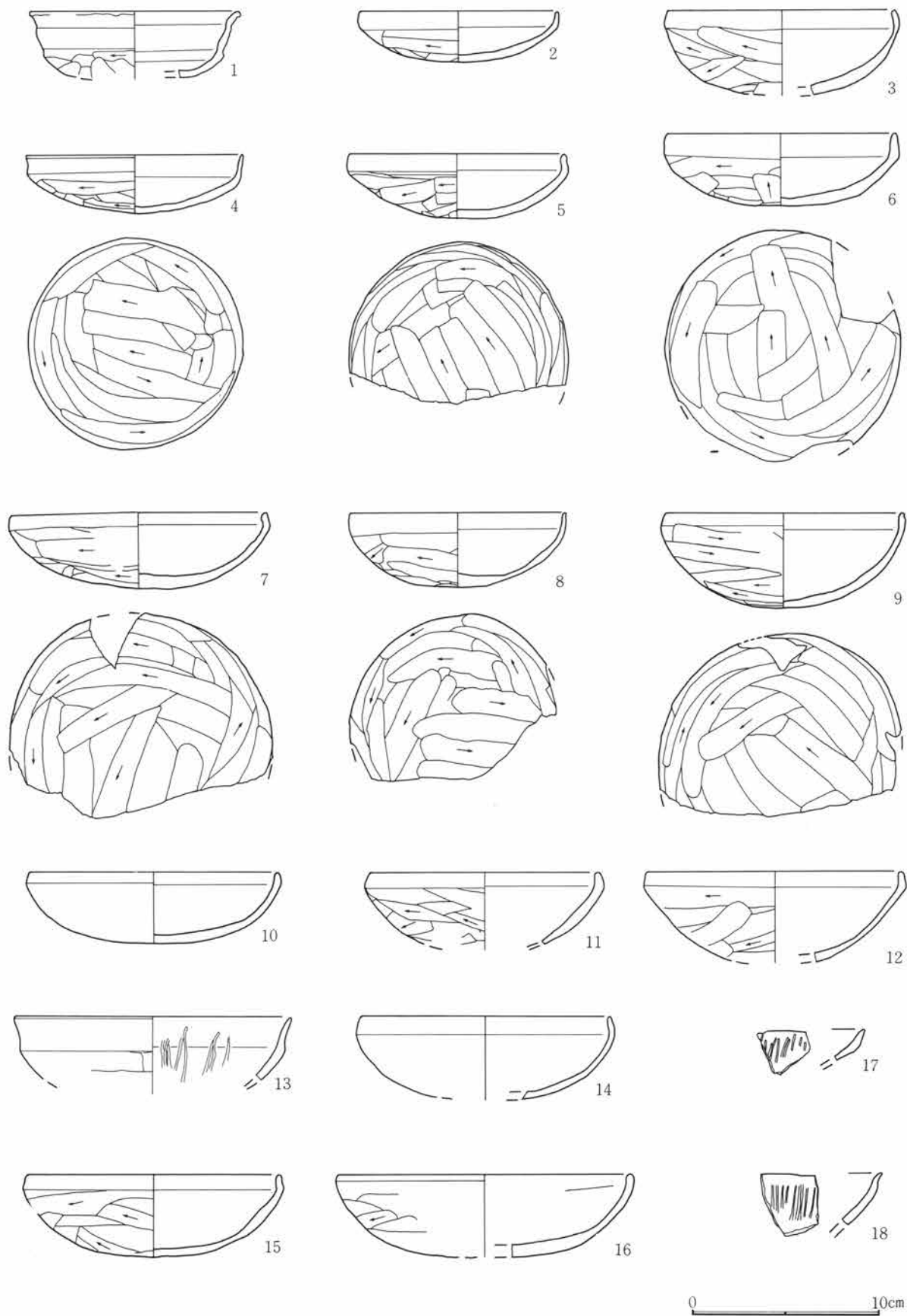
遺物 土師器の坏・甕、土錘や砥石、棒状礫が出土している。また、須恵器の破片が少量出土している。

調査所見 床面はロームを主体としており、全体的に固く締まっていた。掘り方は中央部が高台状に残り、その周囲が10cmほど低くなっている。

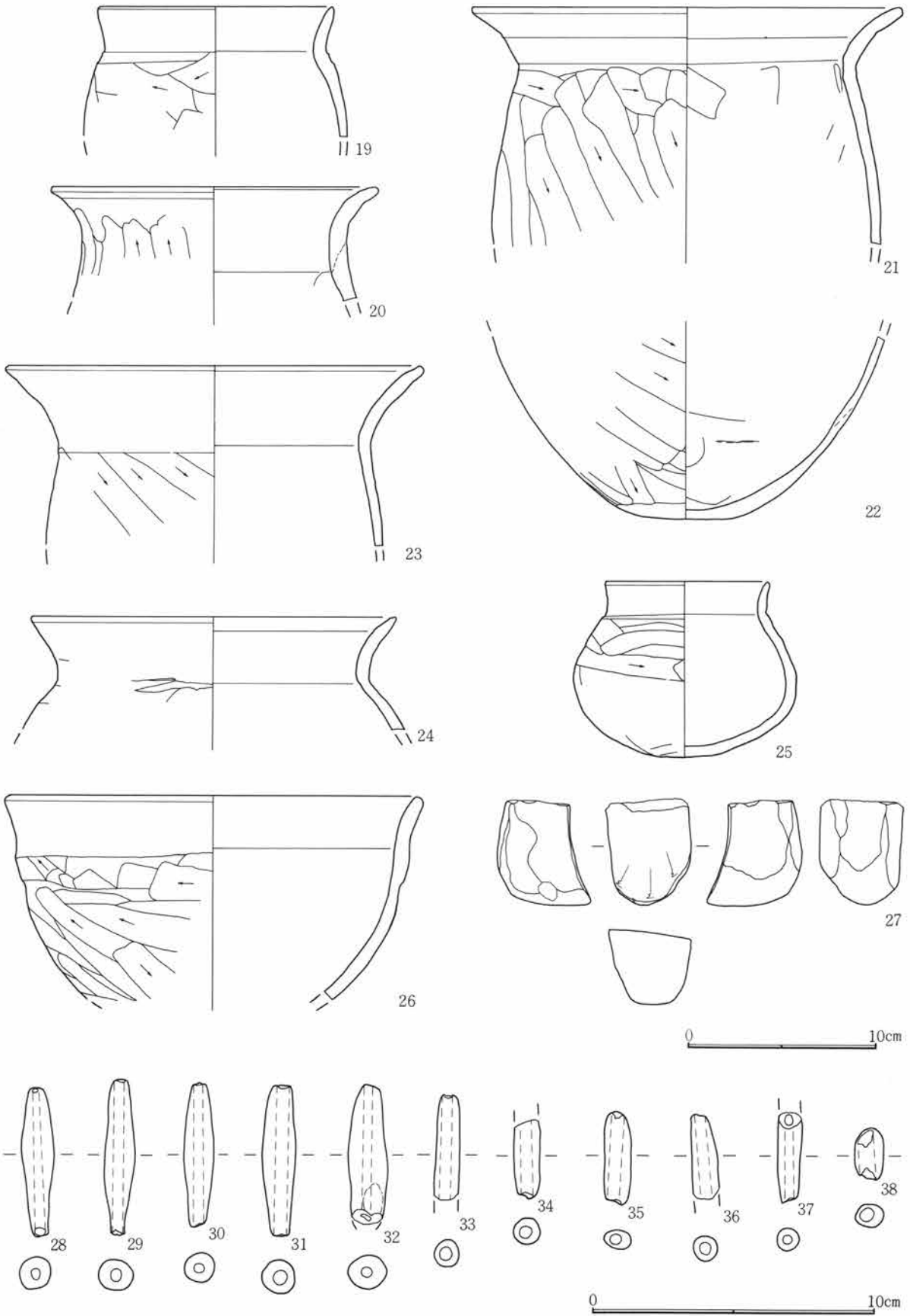


第28図 1区8号住居跡実測図

第5章 遺構と遺物



第29図 1区8号住居跡出土遺物実測図(1)



第30図 1区8号住居跡出土遺物実測図(2)

1区9号住居跡 (図版11・12)

位置 2K-7

主軸方位 N-113° -E

平面形状 不明 規模 一×2.3m

残存深度 7cm 柱穴 なし

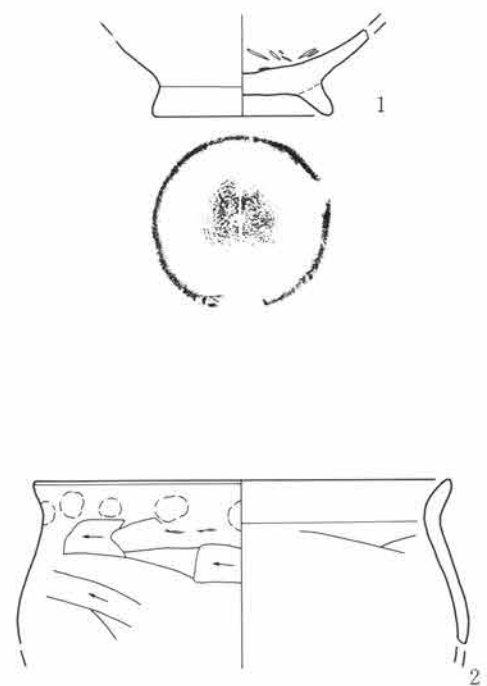
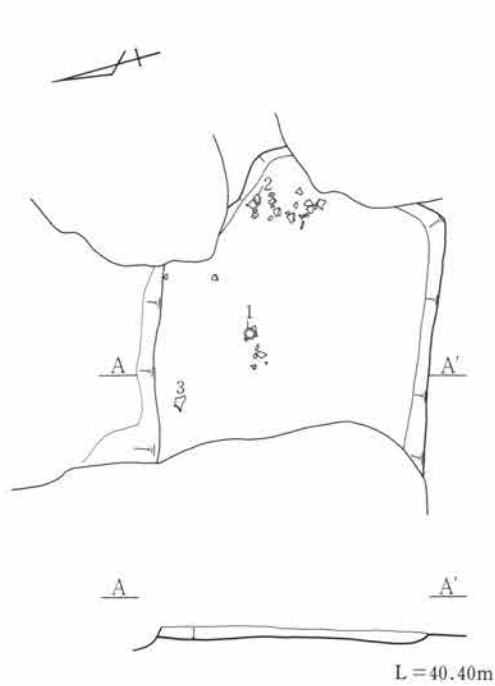
周溝 なし 貯蔵穴 なし

電概要 住居跡東辺に位置する。主軸は、N-107°-E (推定)。遺構確認面との高低差が少なく、残存状態が良くなかった。煙道部は、確認面で東壁より40cmほど外部へ突き出していた。

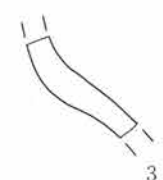
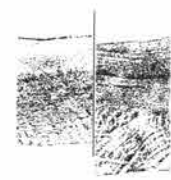
遺物 土師器の坏・甕・埴、須恵器の甕が出土しているが、遺物量は破片を含めて少ない。

調査所見 東西に大きな攪乱があり、北辺も1区4号溝と重複している。新旧関係は、4号溝のほうが新しい時期の遺構である。

また、床面までの残存深度が浅く、住居跡の残りはあまり良くなかった。住居埋土は砂質で粘性が弱く、壁面もやわらかく脆い。掘り方にも、特徴は認められなかった。



1区9号住居跡
1 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。



第31図 1区9号住居跡及び出土遺物実測図

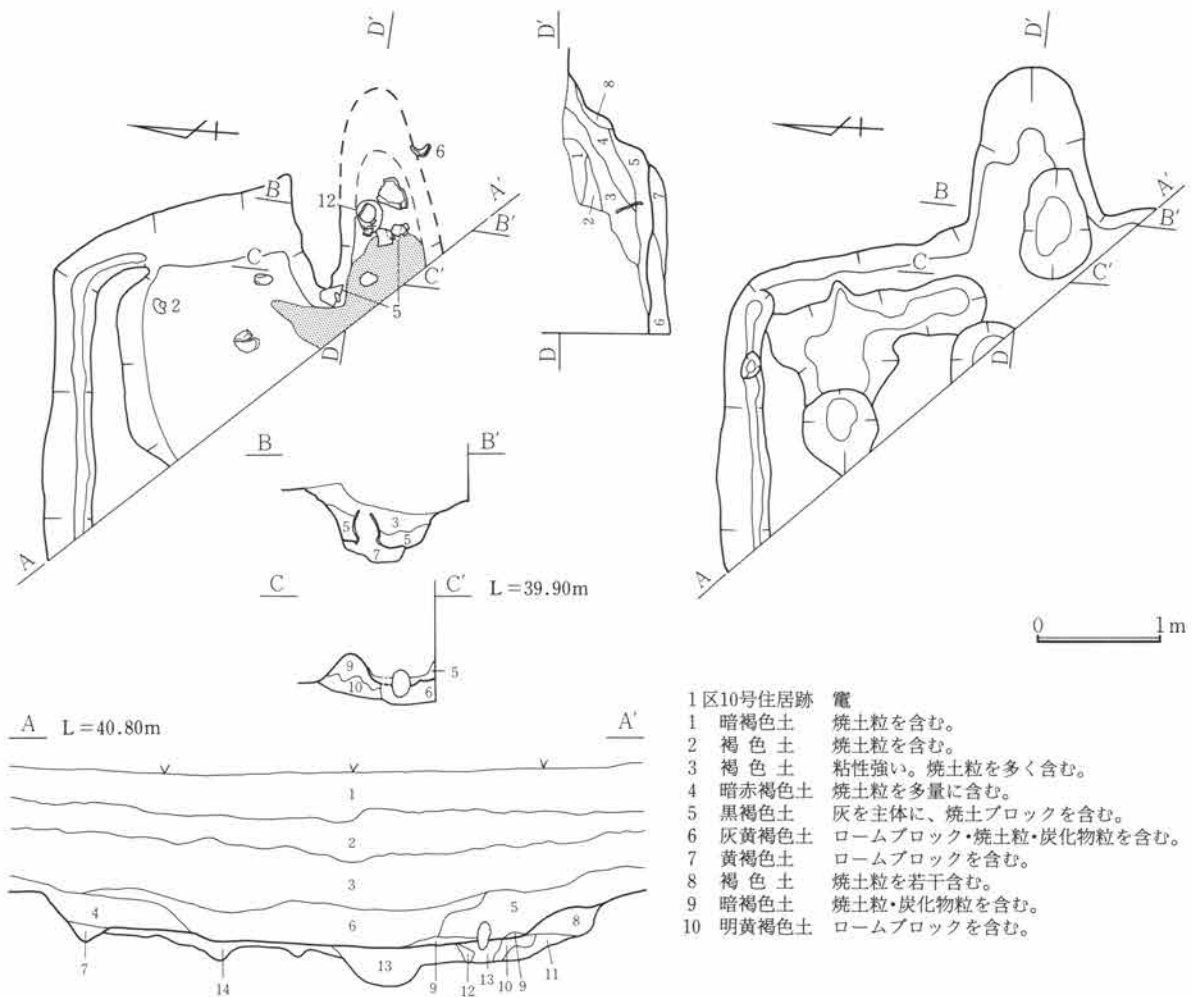
1区10号住居跡 (図版12・13)

位置 2K・2L-2 **主軸方位** N-85°-E
平面形状 不明 **規模** 不明 **残存深度** 45cm
柱穴 不明 **周溝** 住居跡北西部に、幅15cm深さ5cm程の周溝がある。 **貯蔵穴** 不明
竈概要 住居跡東辺に位置する。主軸は、N-83°-E。地山ロームを両袖部分の基礎とし、その上を暗褐色土で覆っている。燃烧部は壁内にあり、横断面はU字形をなしていた。またその中央部で、礫を利用した支脚も検出されている。両袖部分は、壁内

に90cm程張り出している。

遺物 土師器の坏・甕・埴、須恵器の坏・甕、棒状礫が埋土中や竈周辺部から出土している。

調査所見 調査区外にまで住居跡が及んでいるため、遺構全体の半分ほどしか確認できなかった。しかし、壁高が50cm近くあり、残存状態は良好であった。床面は固く締まっていた。また、住居北西部の床面が10cmほど中心部床面よりも高く残っており、さらに出土遺物から重複住居の可能性も考えられる。

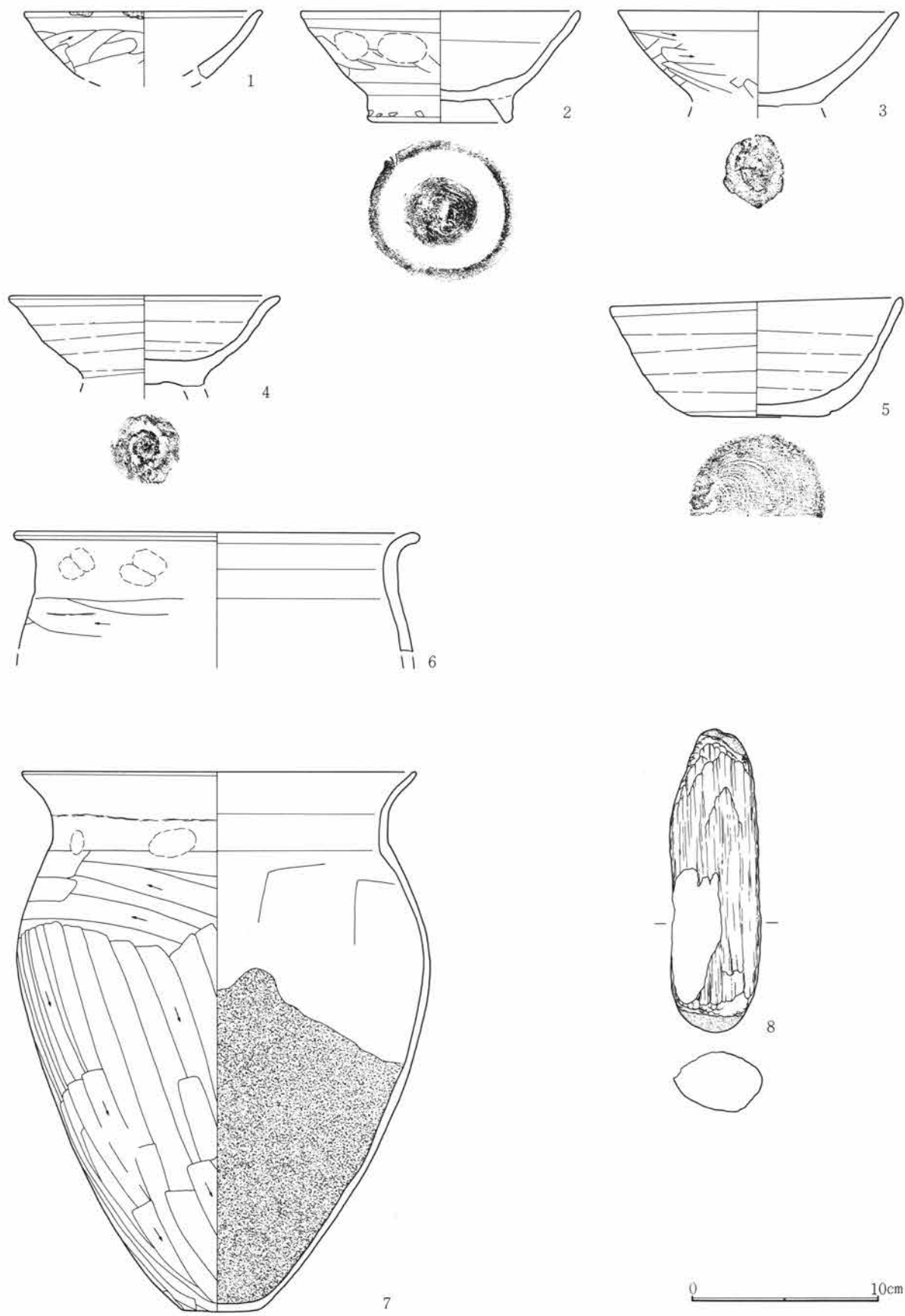


1区10号住居跡

- | | | |
|---|-------|-----------------|
| 1 | 暗褐色土 | 表土。 |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土粒を少量含む。 |
| 3 | 黄褐色土 | ローム粒・焼土粒を少量含む。 |
| 4 | 灰黄褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 5 | 黄褐色土 | ローム粒・焼土粒を多量に含む。 |
| 6 | 黄褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 7 | 黄褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |

- | | | |
|----|------|-----------------------|
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒を少量含む。 |
| 9 | 黒色土 | 灰層。ロームブロック・焼土ブロックを含む。 |
| 10 | 褐灰色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 11 | 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 12 | 灰色土 | 灰層。ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 13 | 灰色土 | 11層に近似。 |
| 14 | 褐灰色土 | ロームブロックを多量に含む。 |

第32図 1区10号住居跡実測図



第33図 1区10号住居跡出土遺物実測図

1区12号住居跡 (図版13・14)

位置 2G～2I-4・5

主軸方位 N-34°-W

平面形状 隅丸長方形 規模 4.8×5.3m

残存深度 86cm 柱穴 柱穴は4カ所検出された。柱穴1は直径30cm深さ30cm、柱穴2は直径30cm深さ38cm、柱穴3は直径25cm深さ37cm、柱穴4は直径50cm深さ51cmである。

周溝 竈部分を除いて、住居跡を全周する。規模は、幅15cm深さ7cmほどである。

貯蔵穴 住居跡北西隅で検出された。規模は、長軸90cm短軸50cm深さ28cmである。

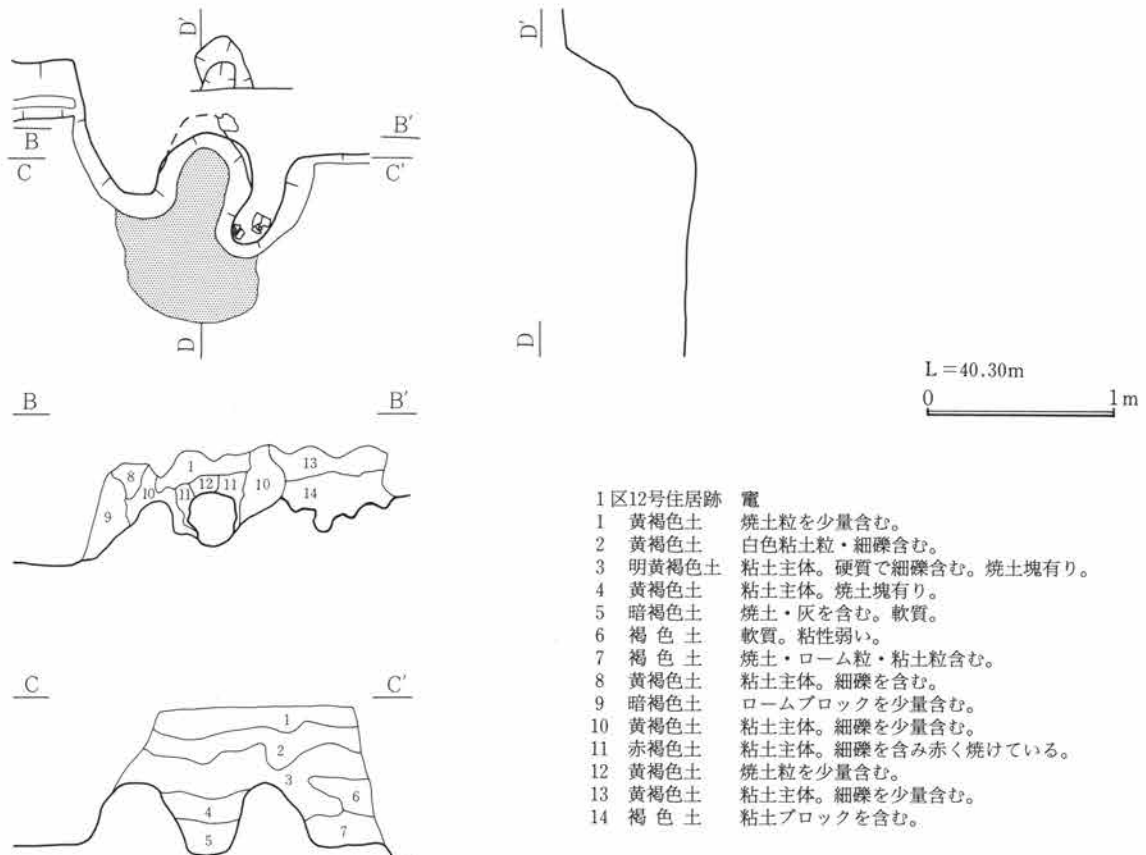
竈概要 住居跡北辺やや西寄りに位置する。主軸は、N-35°-W。竈を作るにあたり、粘質土を多量に使用しており、竈天井部の崩落があまりなく、かなり原型をとどめて検出された。両袖部分は、地山ロームをその基礎として使用し、壁内に50cmほど張り

出している。竈燃焼部の周壁は、粘質土で薄く補強されていた。燃焼部手前には、灰の広がりが確認できた。煙道部は、北壁より約25cm外部へ突き出し、横断面はU字形を呈している。

遺物 土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕、棒状礫・土錘が出土している。棒状礫は、住居跡西南隅部分から集中して出土した。

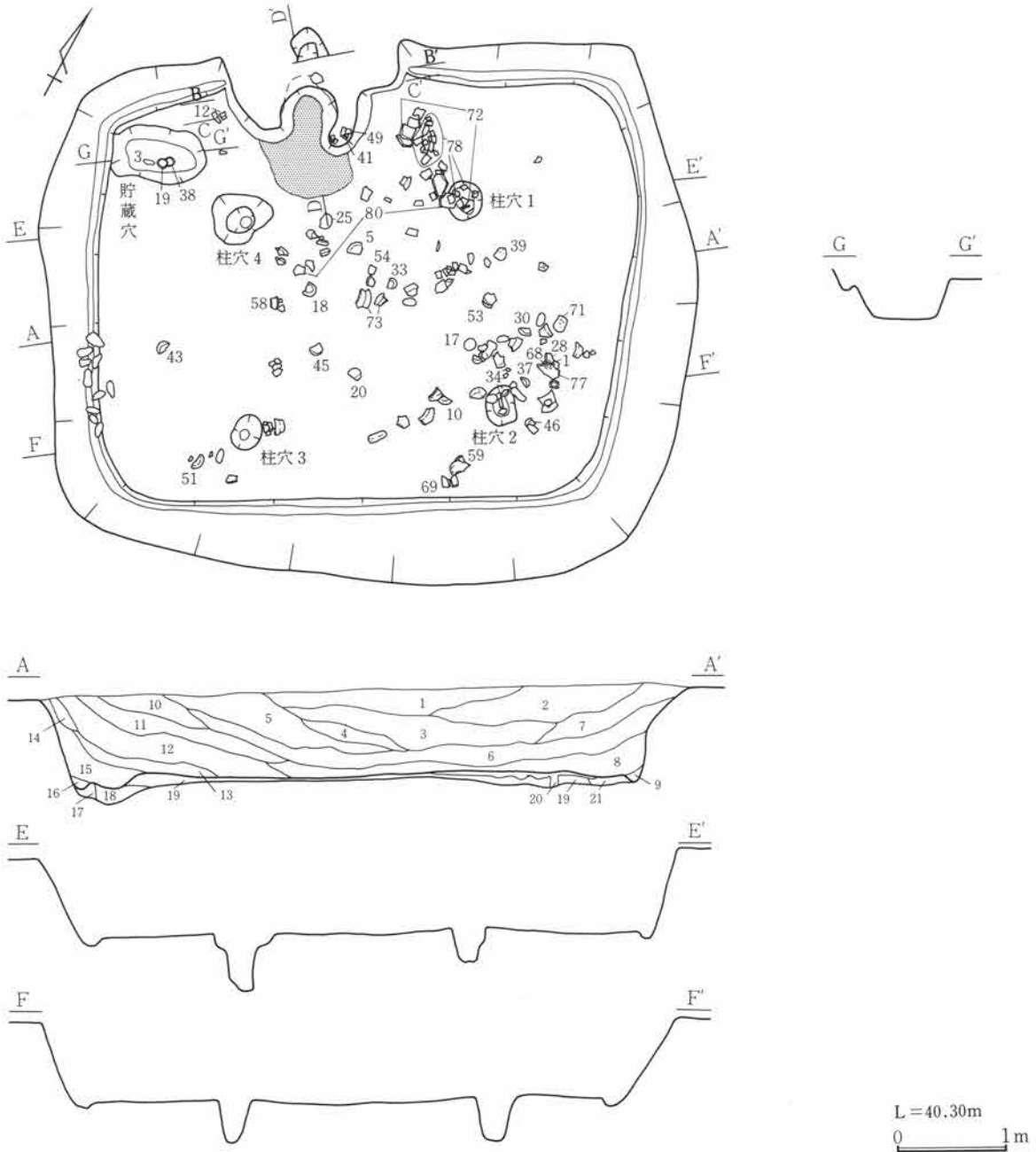
調査所見 住居跡の残存状態は良好であった。床面は、粘質土とロームを使用した張り床で、固く締まっていた。住居掘り方は、中心部が高く残り、その周辺が10cmほど低くなっている。

また、埋土の中・上層から多くの土器、特に坏が多量に出土しており、その遺物は本住居跡とは時期的にずれがあると考えられる。住居跡が埋没していく段階の一時期に、廃棄坑として利用されていた可能性も考えられる。



第34図 1区12号住居跡竈実測図

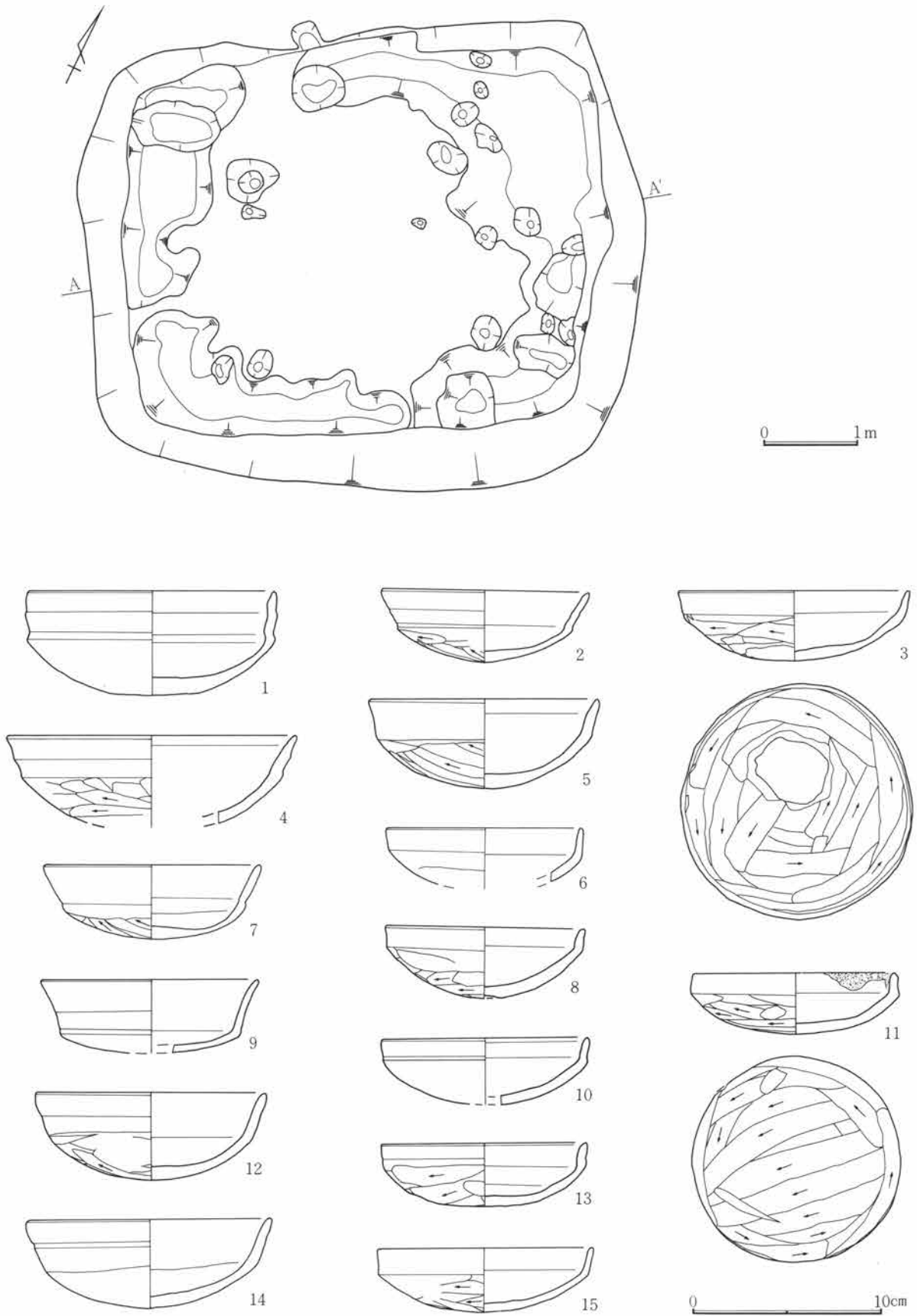
第5章 遺構と遺物



1区12号住居跡

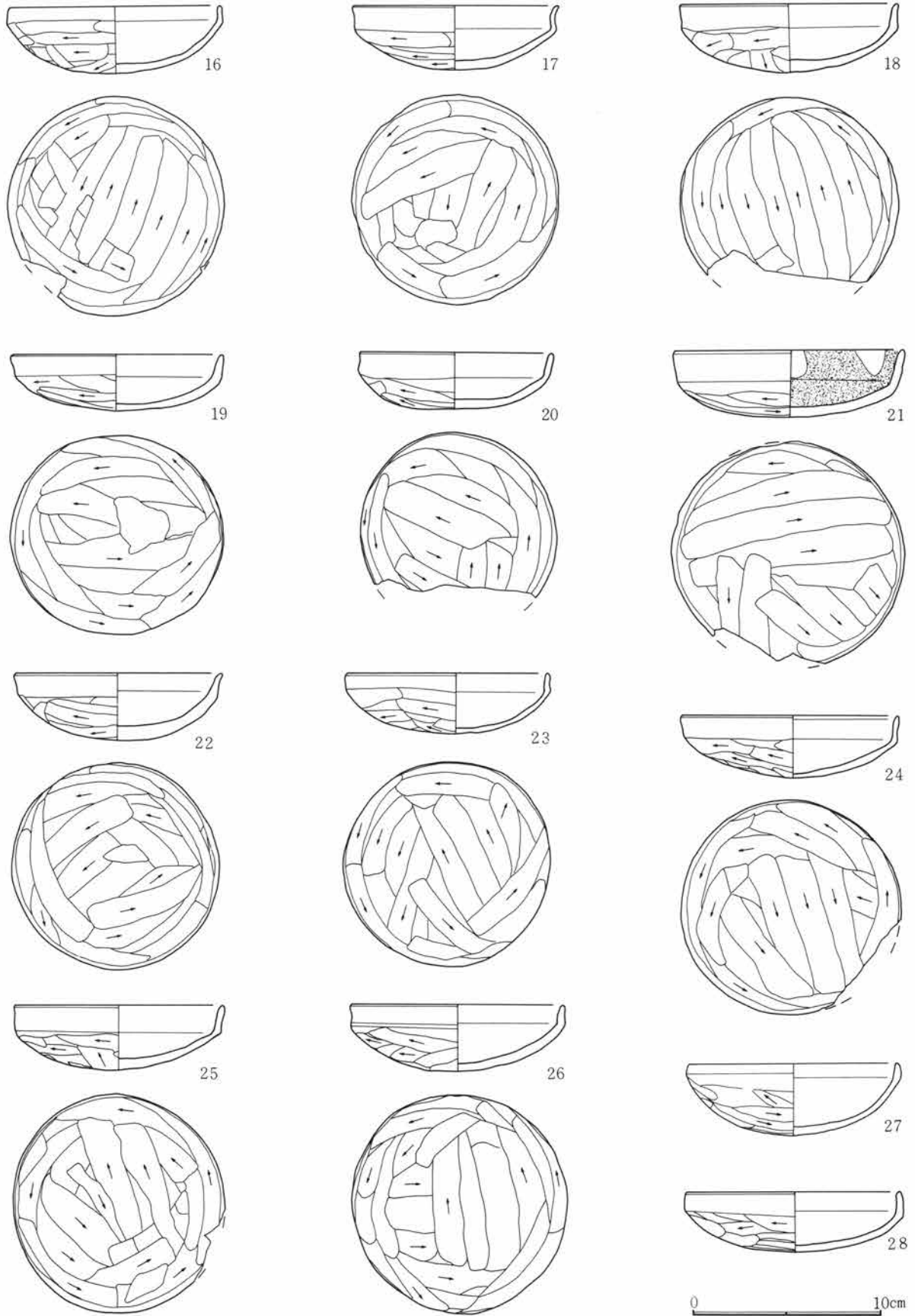
- | | | | |
|----------|----------------------|---------|----------------|
| 1 灰黄褐色土 | 焼土粒を含む。 | 12 黄褐色土 | 粘性弱い。ローム粒を含む。 |
| 2 灰黄褐色土 | 黒色土ブロック・焼土粒を含む。 | 13 青灰色土 | ロームブロックを含む。 |
| 3 暗灰色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 | 14 褐灰色土 | ロームブロックを若干含む。 |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック・焼土粒・炭化物粒を含む。 | 15 褐灰色土 | ロームブロックを若干含む。 |
| 5 黄褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 | 16 黄褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |
| 6 青灰色土 | 灰・ロームブロックを含む。 | 17 黄褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 7 暗灰黄色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 | 18 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 8 灰黄褐色土 | ローム粒を含む。 | 19 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 9 黄褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 | 20 褐灰色土 | ローム粒を含む。 |
| 10 褐灰色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 | 21 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 11 明黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 | | |

第35図 1区12号住居跡実測図



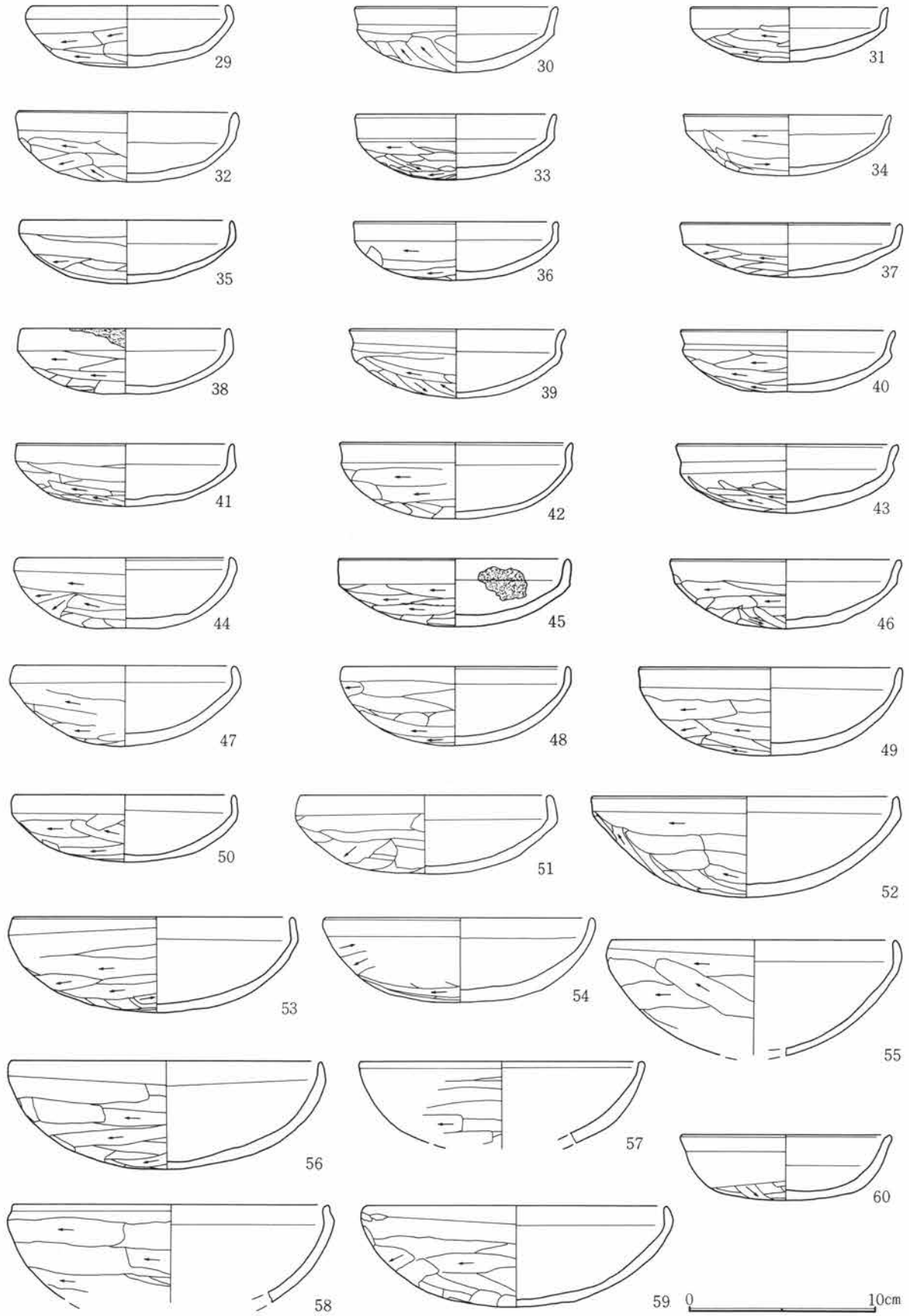
第36図 1区12号住居跡掘り方及び出土遺物実測図(1)

第5章 遺構と遺物



第37図 1区12号住居跡出土遺物実測図(2)

第2節 竖穴住居跡

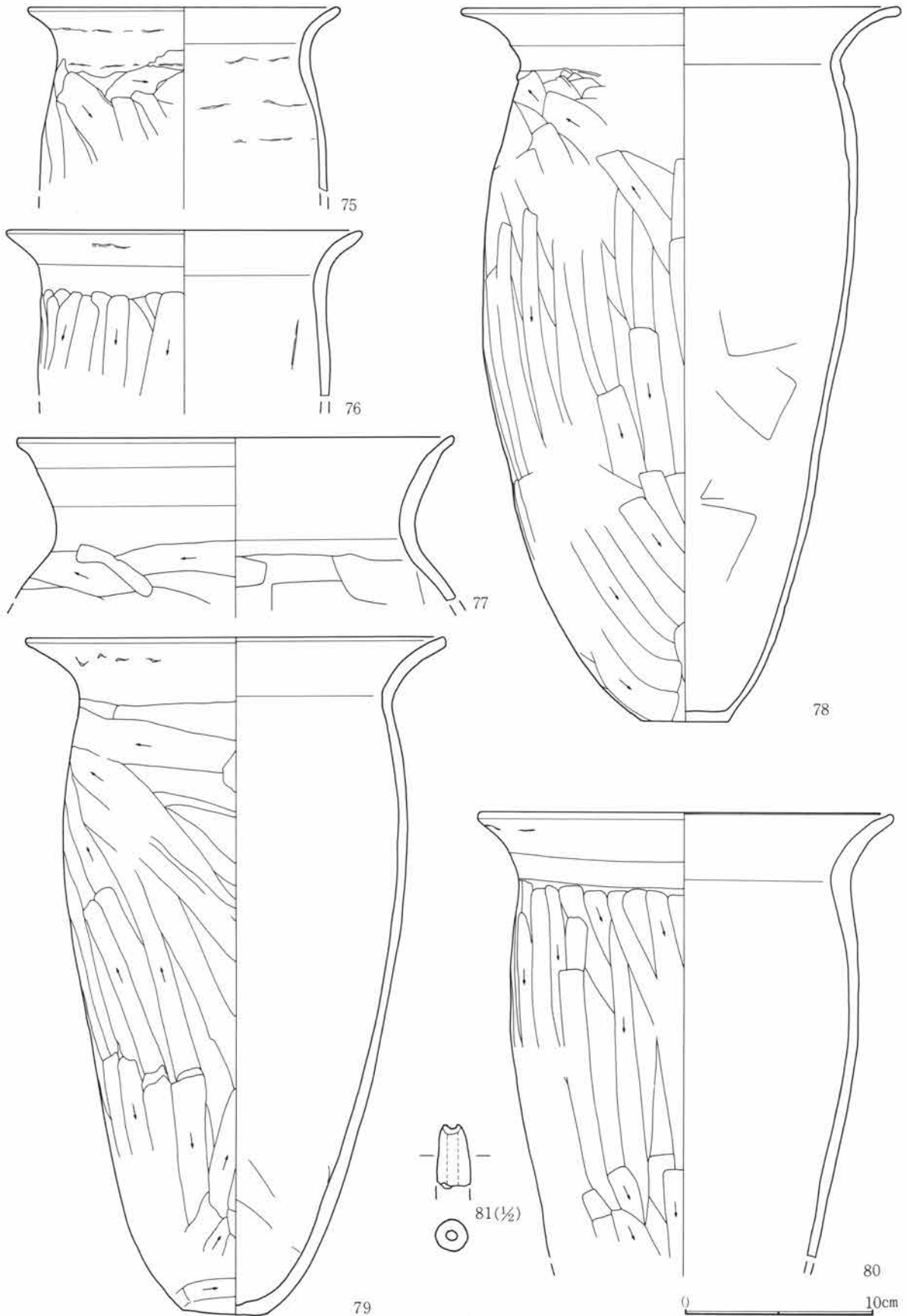


第38图 1区12号住居跡出土遺物実測図(3)

第5章 遺構と遺物



第39図 1区12号住居跡出土遺物実測図(4)



第40図 1区12号住居跡出土遺物実測図(5)

1区14号住居跡 (図版15)

位置 2J・2K-2・3

主軸方位 N-111° -E

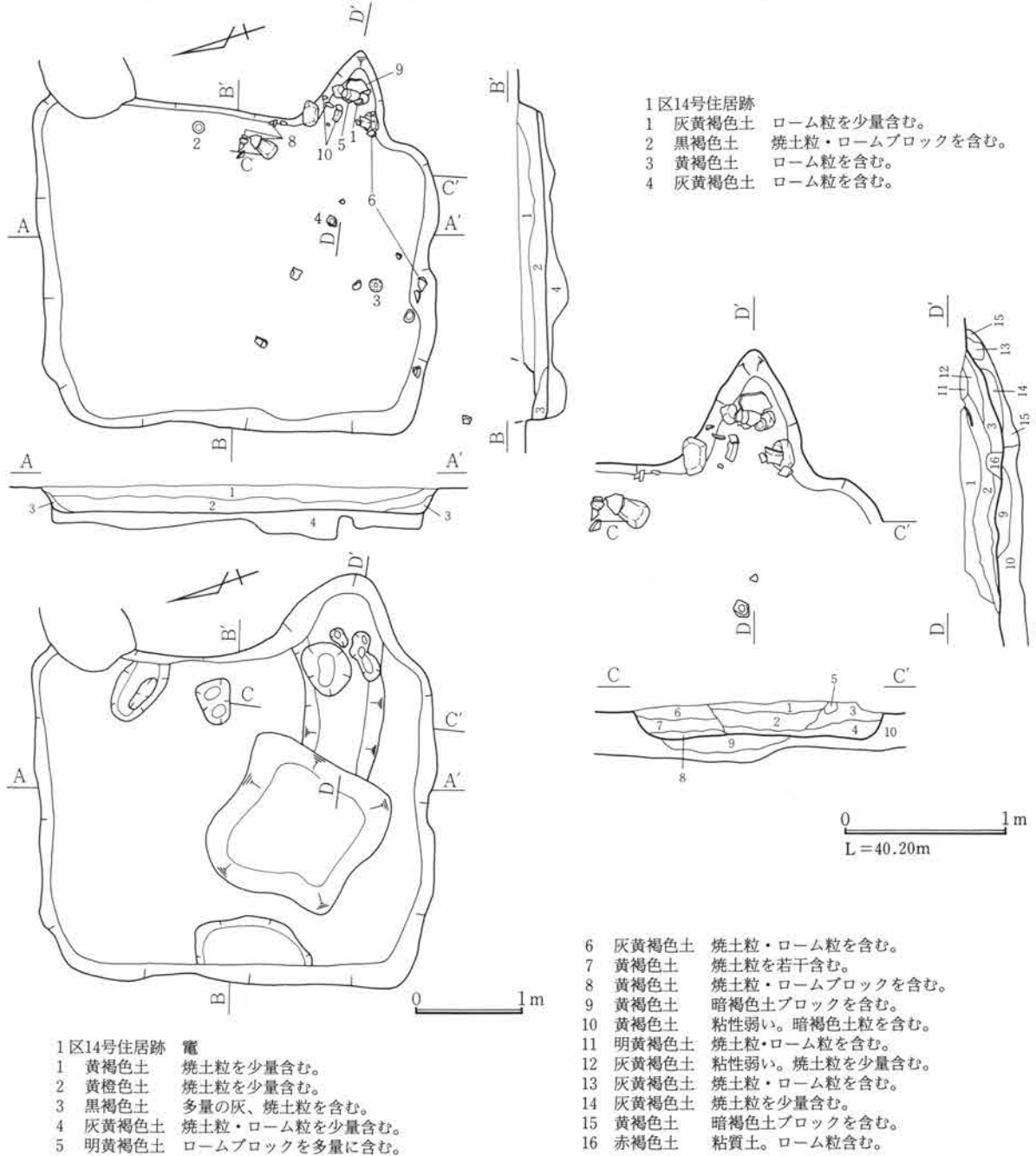
平面形状 隅丸長方形 規模 2.8×3.6m

残存深度 22cm 柱穴 なし 貯蔵穴 なし

竈概要 住居跡東辺やや南寄りに位置する。主軸は、N-111° -E。両袖部分には、袖石が検出されている。また、燃烧部中央寄りに、支脚がそのままの形

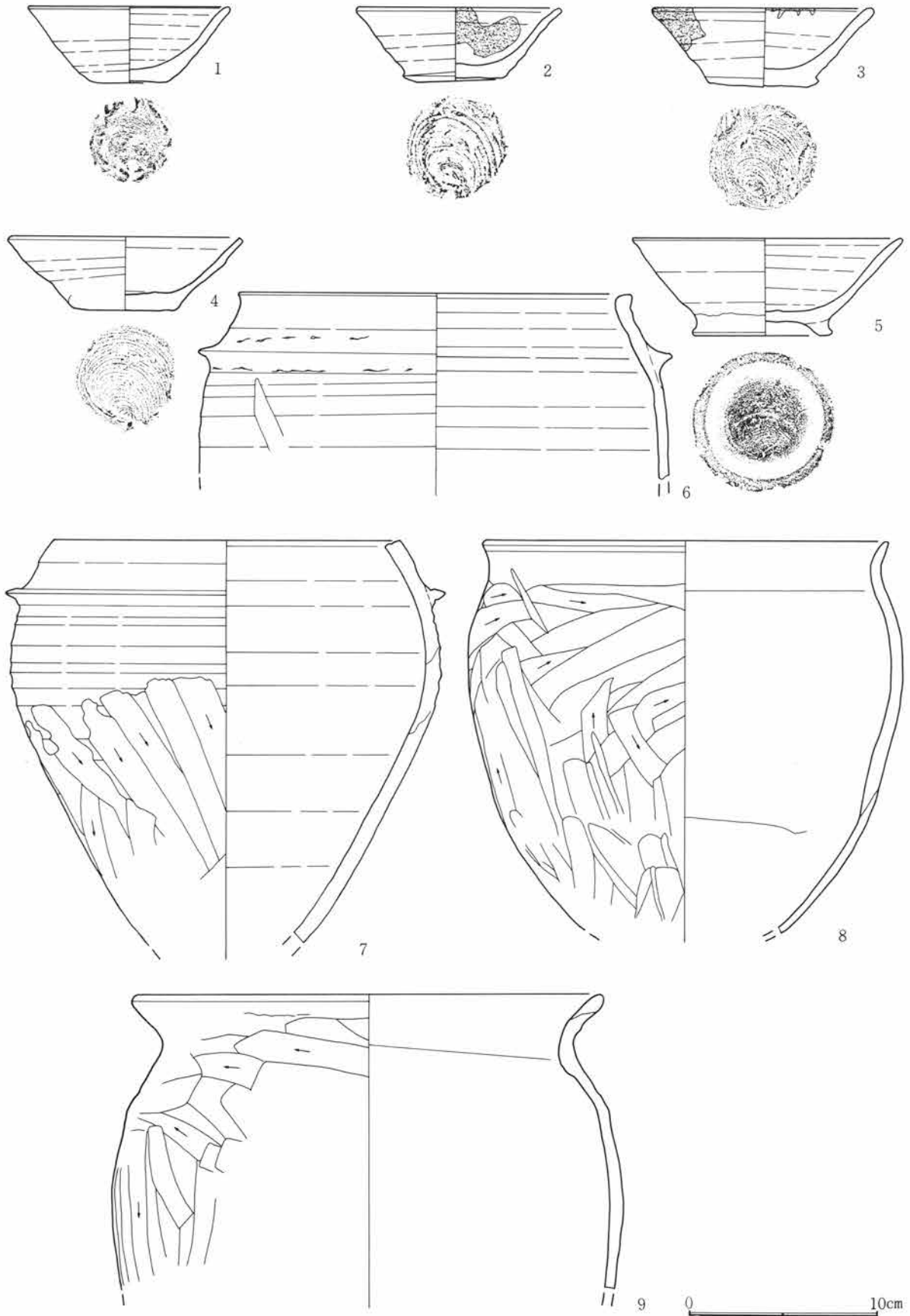
で検出された。燃烧部は、東壁外にあり横断面はU字形を呈している。遺物 須恵器の坏・甕・埴、羽釜・土釜が、埋土中から出土している。

調査所見 住居跡東コーナー部で、14号住居跡より新しい36号土坑と切り合っている。床面は、あまり固く締まっていなかった。また掘り方は、竈から中央部まで10cmほど低く掘り込まれている。

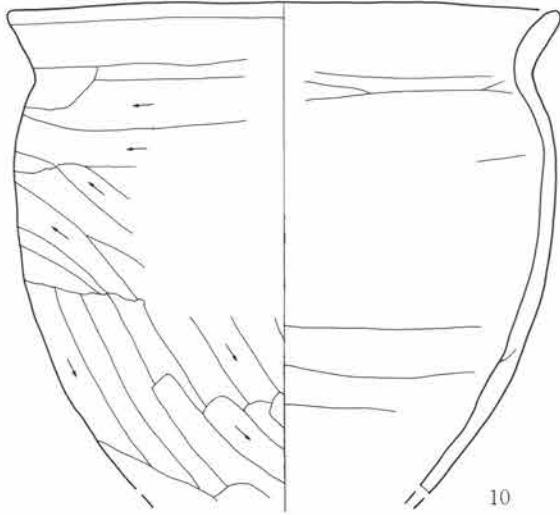


第41図 1区14号住居跡及び竈実測図

第2節 竪穴住居跡



第42図 1区14号住居跡出土遺物実測図(1)



0 10cm

第43図 1区14号住居跡出土遺物実測図(2)

1区15号住居跡(図版15・16)

位置 2J・2K-20・1

主軸方位 N-82° -E 平面形状 不明

規模 不明 残存深度 50cm 柱穴 不明

周溝 残存状況は不良であるが、北辺と東辺の一部で検出された。規模は、幅17cm深さ10cm程である。

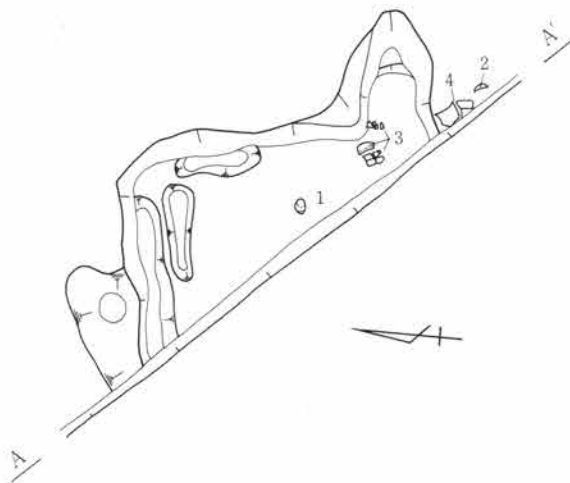
貯蔵穴 不明 竈概要 住居跡東辺に位置する。

主軸は、N-80° -E。向かって右袖部は、調査範

囲外のため確認できなかった。燃烧部は壁外にあり、横断面はU字形を呈していた。

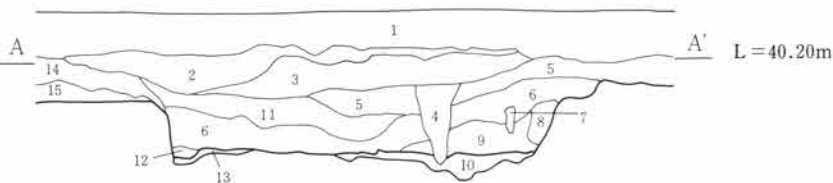
遺物 土師器の坏・甕が、竈使用面から出土している。

調査所見 住居跡の南半分ほどが調査区外にあるため、規模等は不明である。固く締まった床面を持っている。掘り方は、深さ10cmほどの起伏を持っていたと思われる。



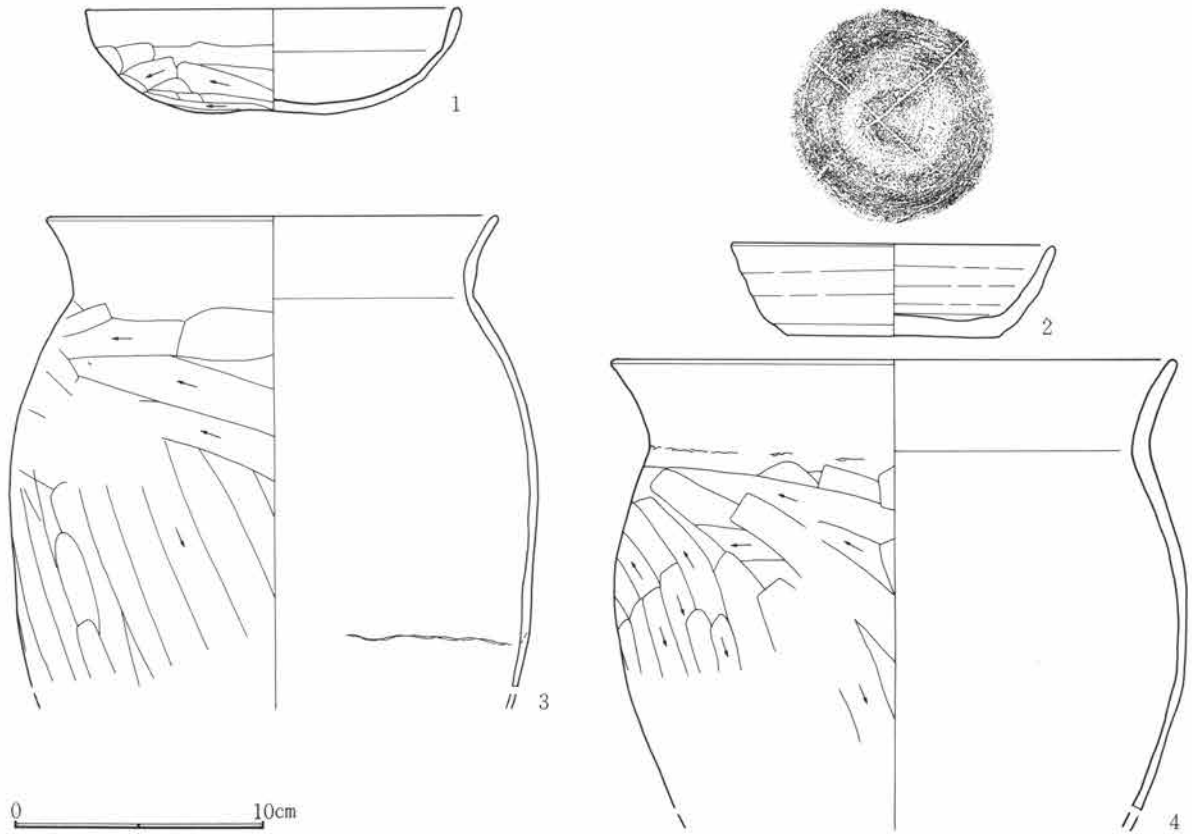
1区15号住居跡

- 1 褐色土 表土。
- 2 暗褐色土 As-B含む。
- 3 黄褐色土 焼土粒・ローム粒を含む。
- 4 黒褐色土 攪乱。焼土粒・ローム粒を含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒・ロームブロックを含む。
- 6 黒褐色土 焼土粒・ローム粒を含む。
- 7 黒褐色土 攪乱。
- 8 黒褐色土 焼土粒・ローム粒を含む。
- 9 黒褐色土 多量のローム粒と、焼土粒を含む。
- 10 黄褐色土 硬質。ロームブロックを含む。
- 11 黒褐色土 焼土粒・ローム粒を含む。
- 12 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 13 黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 14 黄褐色土 軟質。焼土粒を少量含む。
- 15 褐色土 ローム粒を含む。



0 1m

第44図 1区15号住居跡実測図



第45図 1区15号住居跡出土遺物実測図

1区16号住居跡 (図版16・17)

位置 2 F・2 G-5・6

主軸方位 N-123° -W

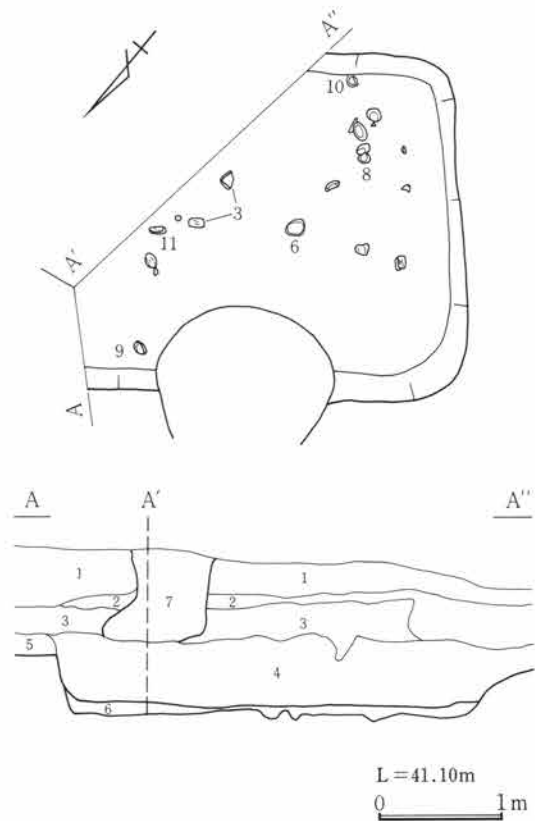
平面形状 不明 規模 2.7×-m

残存深度 32cm 柱穴 なし 周溝 なし

貯蔵穴 不明 竈位置 不明

遺物 土師器の坏・甕、須恵器の甕・甗、土錘や棒状礫が、住居埋土から出土している。

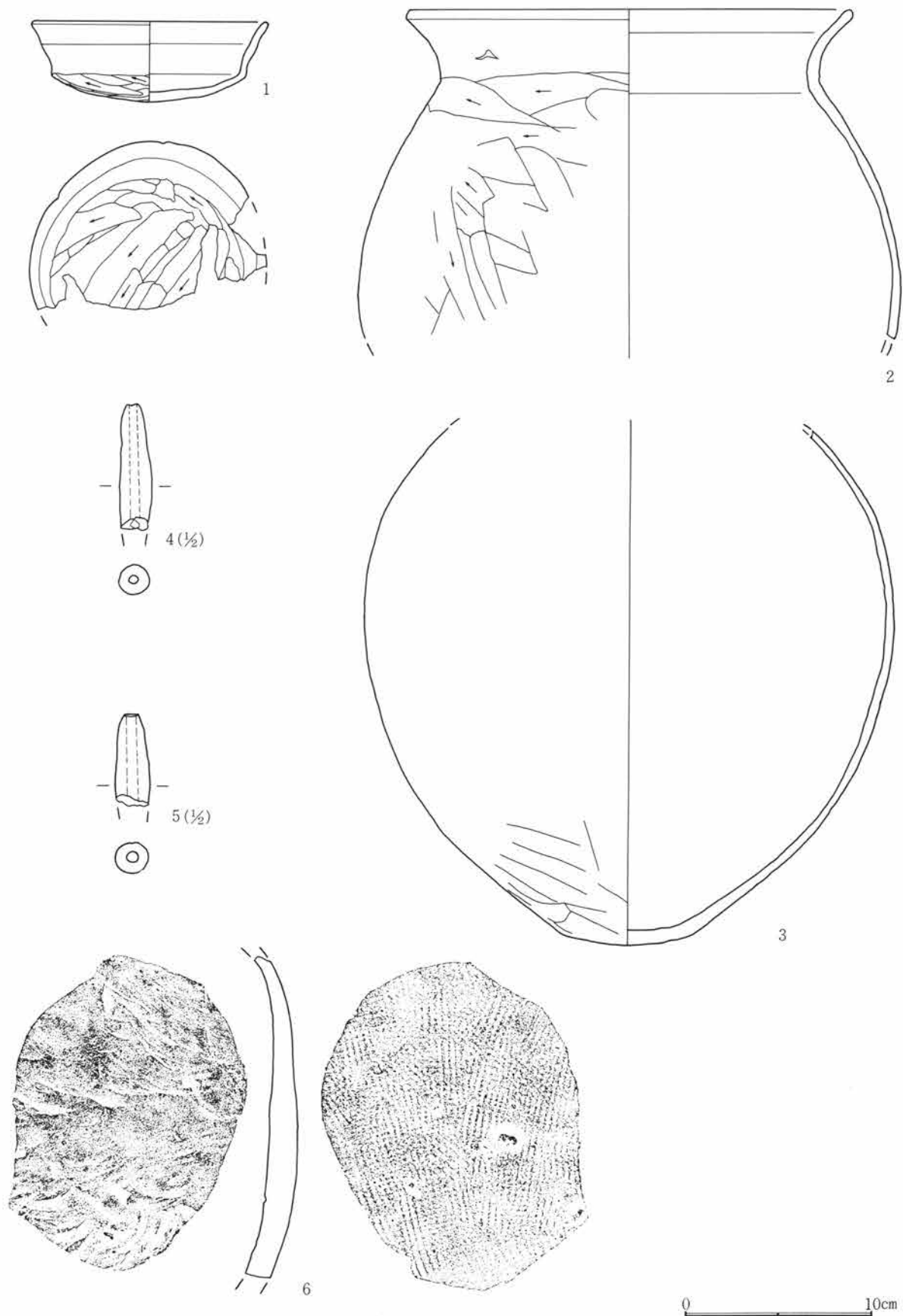
調査所見 住居跡北西辺が61号土坑に切られている。また、住居跡北東部が調査区外に及んでいるため、全体像は不明である。厚さ15cm程の張り床を持っており、掘り方は全体的に掘り下げられている。



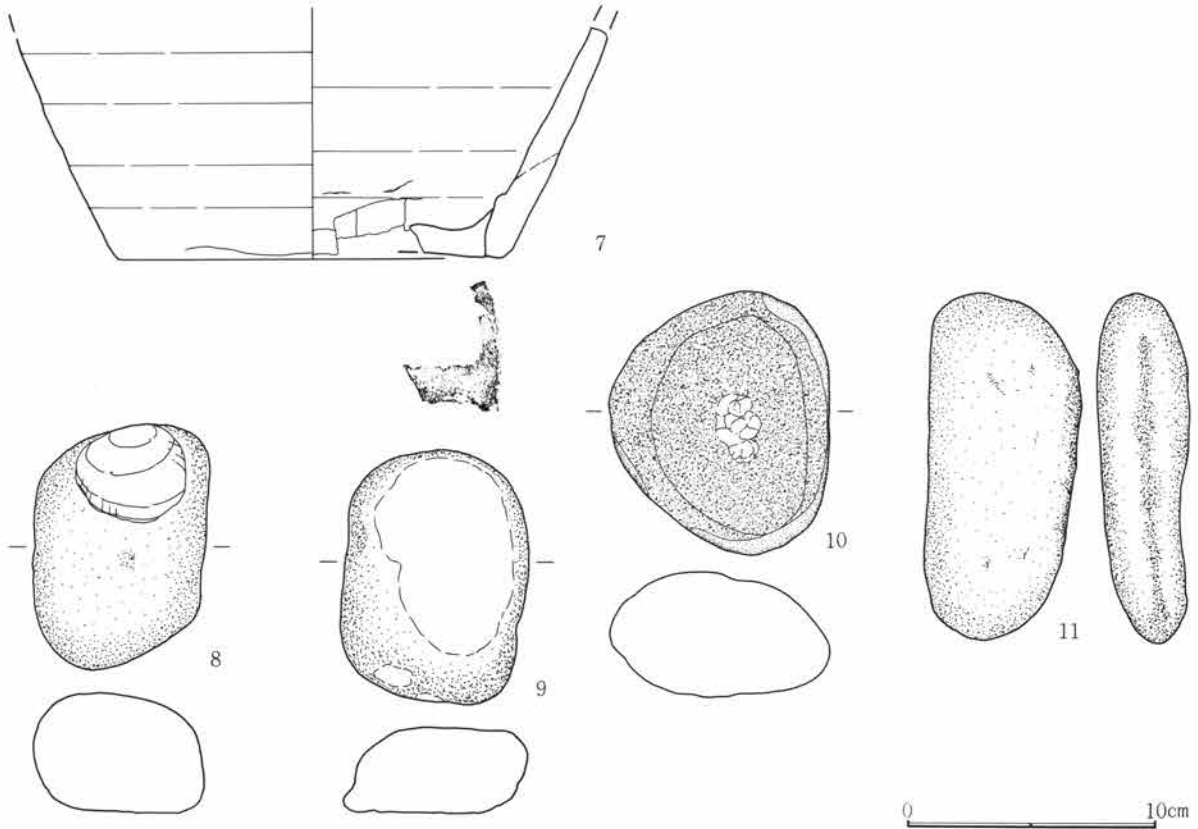
1区16号住居跡

- 1 灰黄褐色土 表土。
- 2 灰黄褐色土 ローム粒を含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒を含む。
- 4 褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。
- 5 黄褐色土 ローム粒を含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 7 攪乱

第46図 1区16号住居跡実測図



第47図 1区16号住居跡出土遺物実測図(1)



第48図 1区16号住居跡出土遺物実測図(2)

1区17号住居跡 (図版17・18)

位置 2H・2I-2 主軸方位 N-71° - E

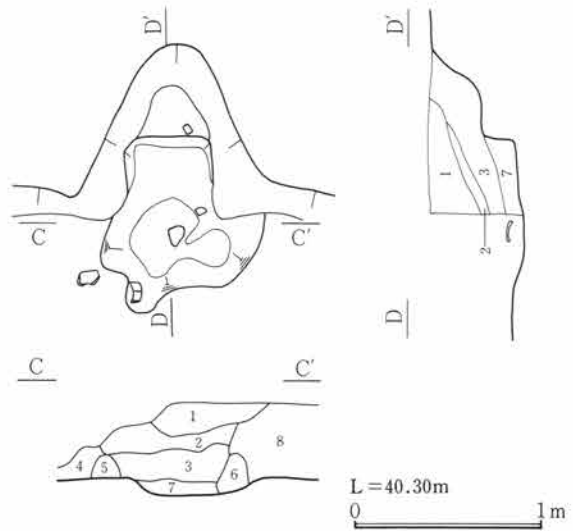
平面形状 隅丸方形 規模 3.2×2.8m

残存深度 45cm 柱穴 なし 周溝 竈部と住居跡東隅部を除いて、幅15cm深さ6cm程の周溝がめぐっている。貯蔵穴 住居跡の東隅部やや中心部寄り、竈の右側から検出した。平面形は円形で、規模は、直径45cm深さ10cm程である。

竈概要 主軸は、N-76° - E。位置は、東辺やや南寄り、で、燃焼部は東壁より80cmほど外部へ張り出し、横断面はU字形を呈する。

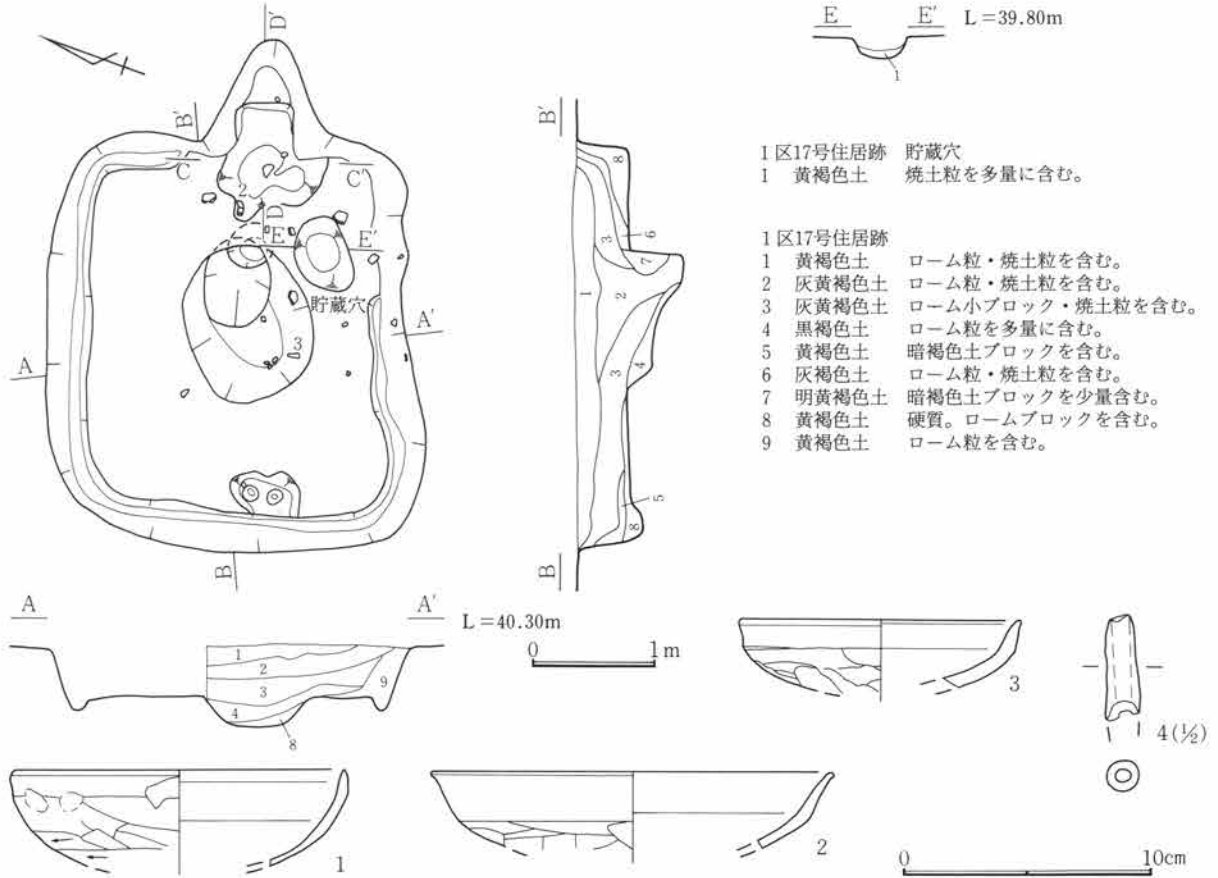
遺物 土師器の坏・甕・土錘・棒状礫が、住居埋土から出土している。

調査所見 床面は全体的に、固く締まっており、掘り方は無かった。また住居跡中央部に直径100cm深さ85cmほどの土坑が検出された。土坑は土層断面から、住居跡とほぼ同時期に埋まっており、その後もう一度掘り込まれたと考えられる。



- 1区17号住居跡 竈
- | | | |
|---|-------|-----------------|
| 1 | 褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 2 | 灰黄褐色土 | ローム粒・焼土粒を若干含む。 |
| 3 | 褐色土 | ローム粒・焼土粒を若干含む。 |
| 4 | 黄褐色土 | 暗褐色土ブロックを含む。 |
| 5 | 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 6 | 黄褐色土 | 5層に近似。 |
| 7 | 黒褐色土 | 灰層。ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 8 | 黄褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |

第49図 1区17号住居跡竈実測図



第50図 1区17号住居跡及び出土遺物実測図

1区18号住居跡 (図版18・19)

位置 2H・2I-1

主軸方位 N-98° -E

平面形状 隅丸方形 規模 3.9×3.7m

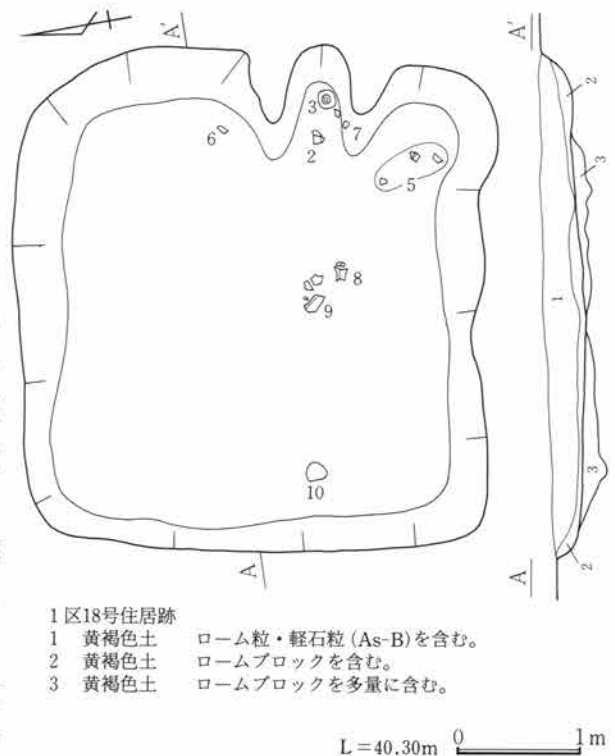
残存深度 33cm 柱穴 なし 周溝 なし

貯蔵穴 なし 電概要 主軸は、N-102° -E。

東辺やや南寄りに位置している。残存状況が不良で、壁面は崩落したものと思われ、僅かに焼土粒・炭化物粒によって、電の形が確認できた。燃烧部の横断面は緩やかなU字形を描く。

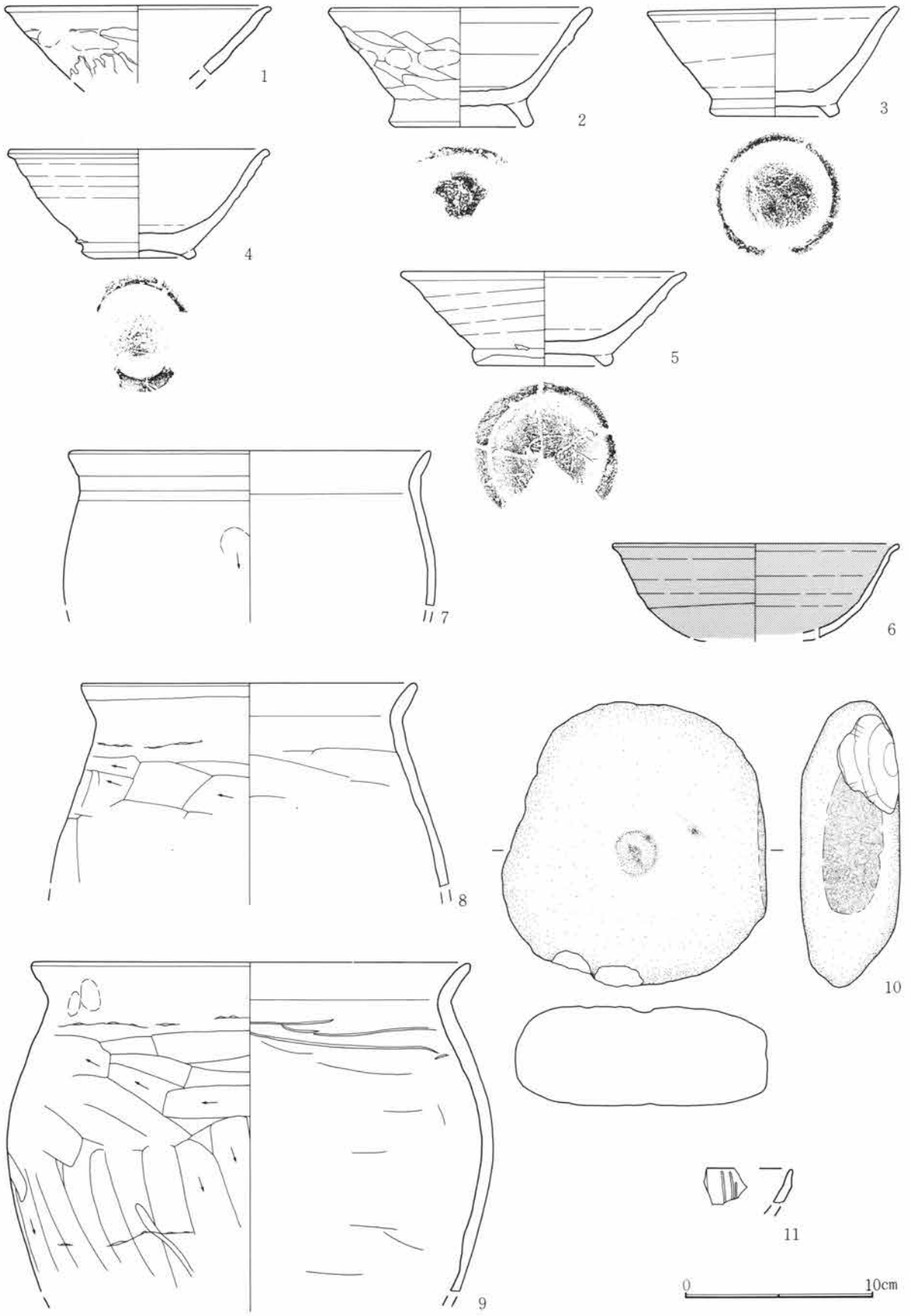
遺物 土師器の坏・埴・甕や須恵器の坏・埴、緑釉の碗が出土している。破片を含めて、遺物総量は少ない。

調査所見 確認面から床面までが浅く、床面はあまり硬くなかった。壁面の崩落が激しく、壁の傾斜度は緩やかである。掘り方は、深さ約10cm程の起伏を持っていたと思われる。



第51図 1区18号住居跡実測図

第2節 竪穴住居跡



第52図 1区18号住居跡出土遺物実測図

1区19号住居跡 (図版19・20)

位置 2H・2I-0・1

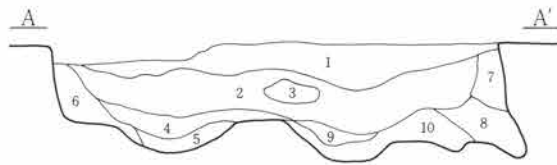
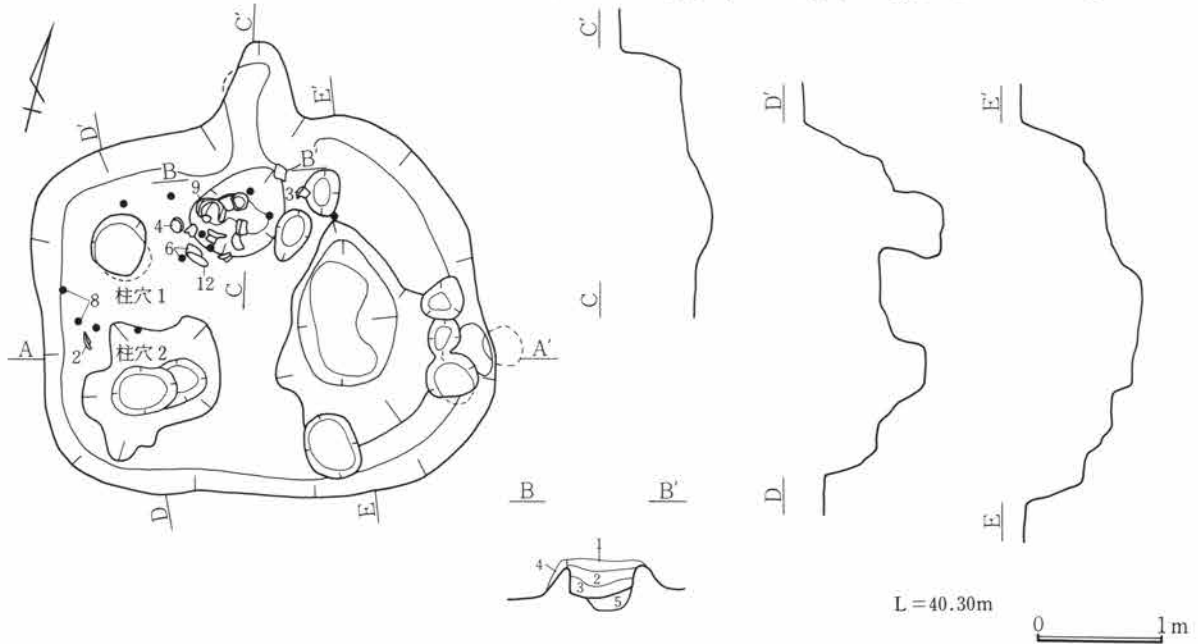
主軸方位 N-23° -W 平面形状 隅丸方形

残存深度 60cm 柱穴 柱穴1は直径40cm深さ40cm、柱穴2は直径50cm深さ45cmである。また、竈右寄りの落ち込みは、直径35cm深さ10cmで、柱穴か貯蔵穴か不明瞭である。 周溝 なし

貯蔵穴 不明 竈概要 主軸は、N-15° -W。北辺やや東寄りに位置し、左袖部分は側壁の地山が

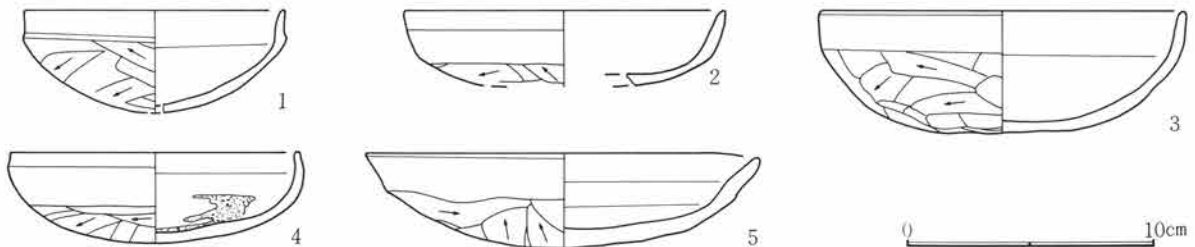
崩落せずに残っていた。燃烧部は壁外に約60cm張り出し、横断面はU字形をなしていた。

遺物 土師器の坏・甕や須恵器の坏、棒状礫が住居埋土から出土している。また、竈前床面から土師器の坏・甕が集中して出土している。 調査所見 床面は、確認できなかった。住居跡東側の落ち込みは、土層の堆積状況から、住居廃棄後時間をあまり経ない時期に、ほぼ床面から掘り込まれている。



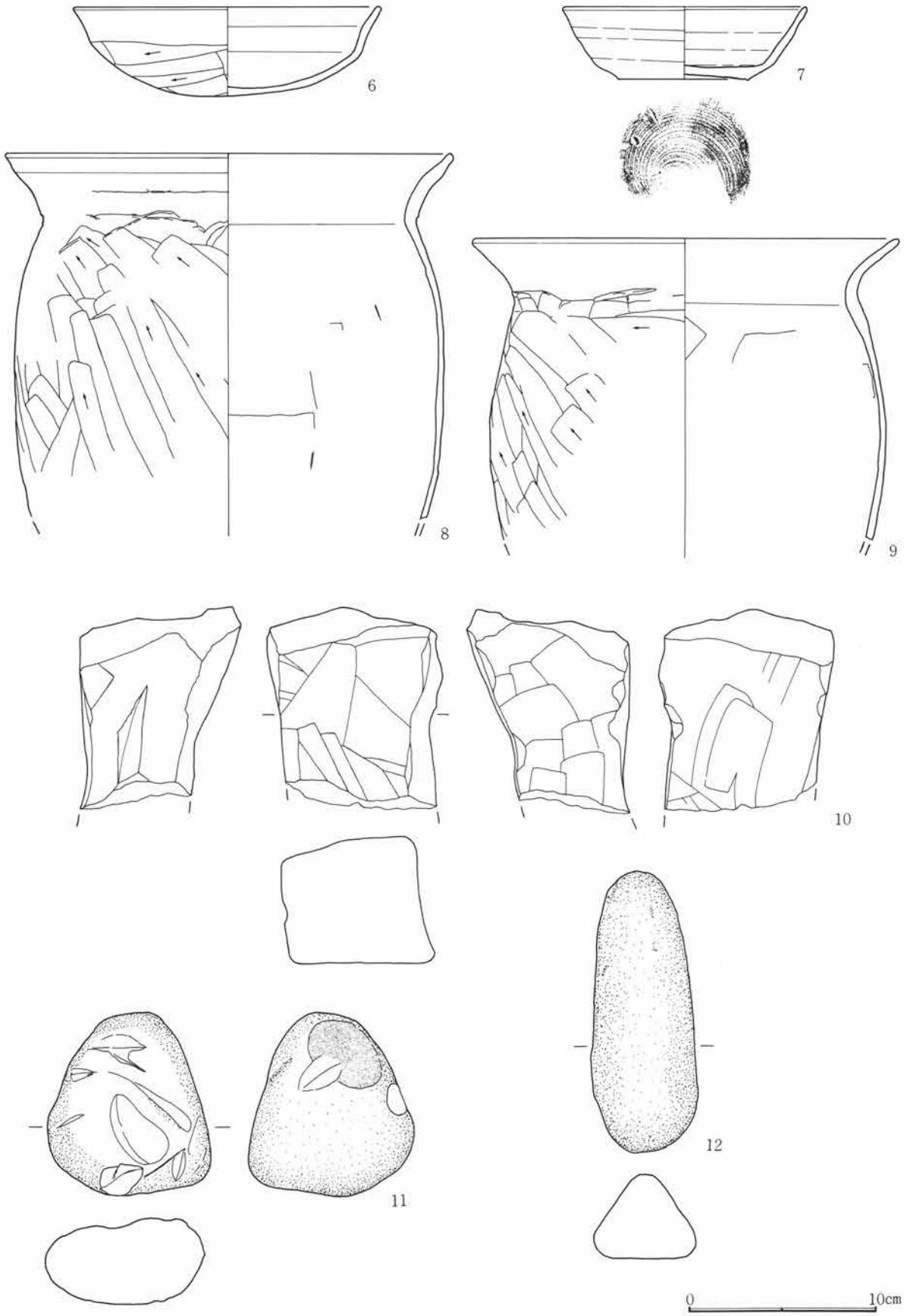
- 1区19号住居跡 竈
- 1 灰黄褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。
 - 2 灰褐色土 焼土粒を含む。
 - 3 黒褐色土 灰。焼土粒を含む。
 - 4 灰黄褐色土 ローム粒を含む。
 - 5 黄褐色土 黒褐色土ブロックを含む。

- 1区19号住居跡
- 1 黄褐色土 ローム粒を少量含む。
 - 2 灰黄褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。
 - 3 灰黄褐色土 2層に近似。粘土ブロック。
 - 4 黄褐色土 ローム小ブロックを含む。
 - 5 黄褐色土 ローム粒を含む。
 - 6 黄褐色土 ロームブロックを少量含む。
 - 7 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 - 8 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
 - 9 灰黄褐色土 ローム粒を少量含む。
 - 10 灰黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。



第53図 1区19号住居跡及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡



第54図 1区19号住居跡出土遺物実測図(2)

1区20号住居跡 (図版20・21)

位置 2G・2H-0・1

主軸方位 N-4°-E 平面形状 不明

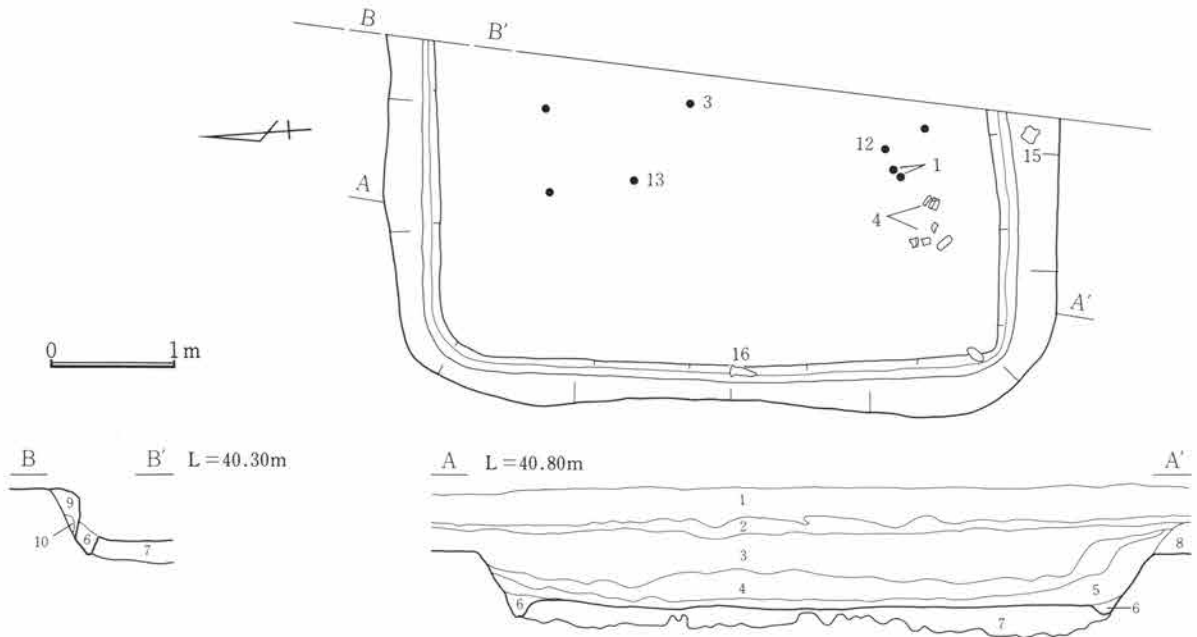
規模 5.3×-m 残存深度 45cm 柱穴 なし

周溝 幅15cm深さ7cm程の周溝がめぐっている。

貯蔵穴 不明 竈位置 不明

遺物 住居埋土中から土師器の坏・甕や須恵器の坏・壺が、周溝付近から鉄製の鎌や、棒状礫が出土している。
調査所見 住居跡が調査区外にまで広が

っているため、全体像を把握することはできなかった。床面は固く締まっていた。掘り方は、全体的に掘り下げられており、深さ15cmほどの起伏を持っていたと思われる。また、住居壁面で第5・6層と第9層との境界は、比較的明瞭であり、堆積条件が異なると考えられる。これは住居壁の土止めとして、第5・6層と第9層との間に板状のものがあり、そのため堆積土に違いが生じたものと考えたい。

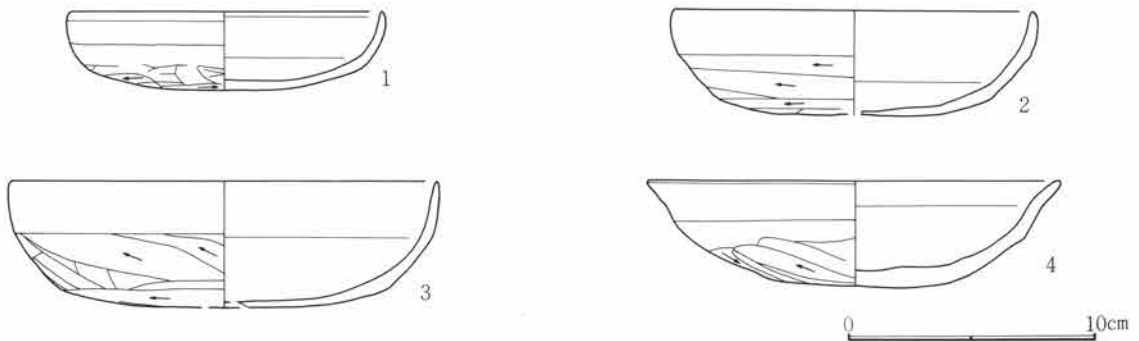


1区20号住居跡

- 1 褐色土 表土。
- 2 黄褐色土 As-Bを少量含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を含む。
- 4 暗褐色土 3層と近似。ローム粒を多量に含む。
- 5 褐色土 ローム粒を多量に含む。

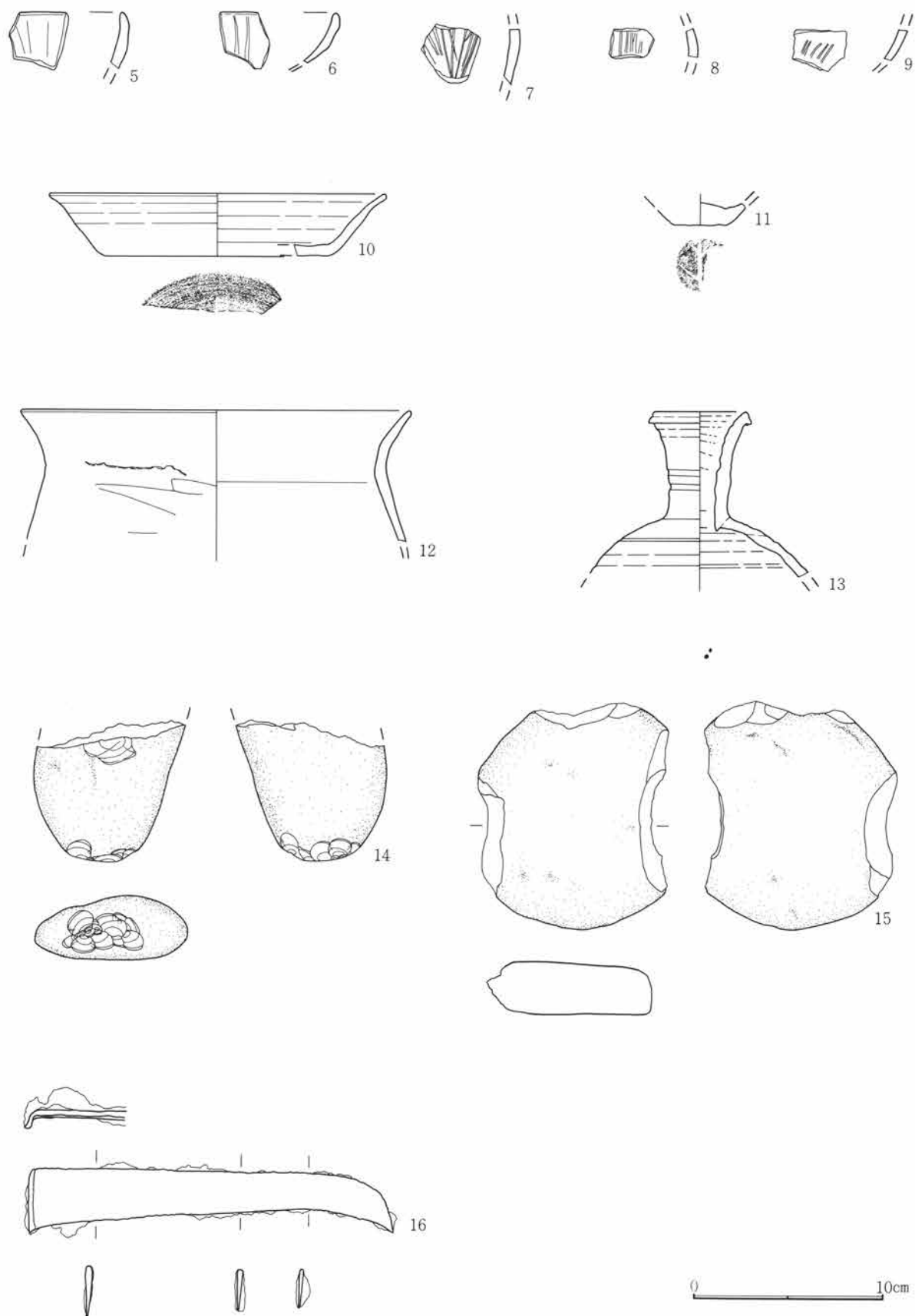
- 6 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 7 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 褐色土 ローム粒を含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- 10 黄褐色土 ロームブロック。

第55図 1区20号住居跡実測図



第56図 1区20号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡



第57図 1区20号住居跡出土遺物実測図(2)

1区23号住居跡 (図版21)

位置 2K・2L-3・4

主軸方位 N-118° - E 平面形状 隅丸方形

規模 2.8×3.3m 残存深度 35cm

柱穴 なし 周溝 住居跡の東・西隅で幅15~20cm深さ5cmの周溝が検出された。

貯蔵穴 住居跡南隅、竈の右側で検出された。規模は、直径60cm深さ25cmである。

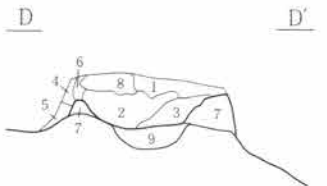
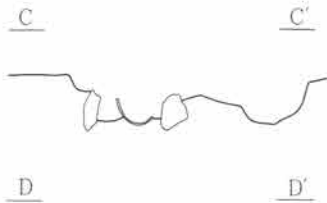
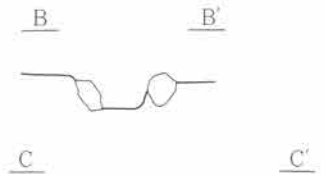
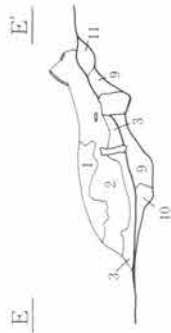
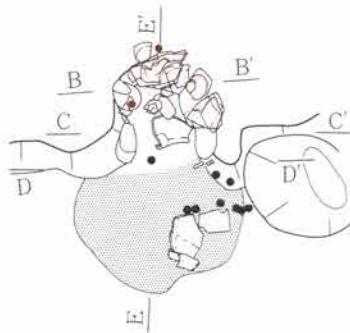
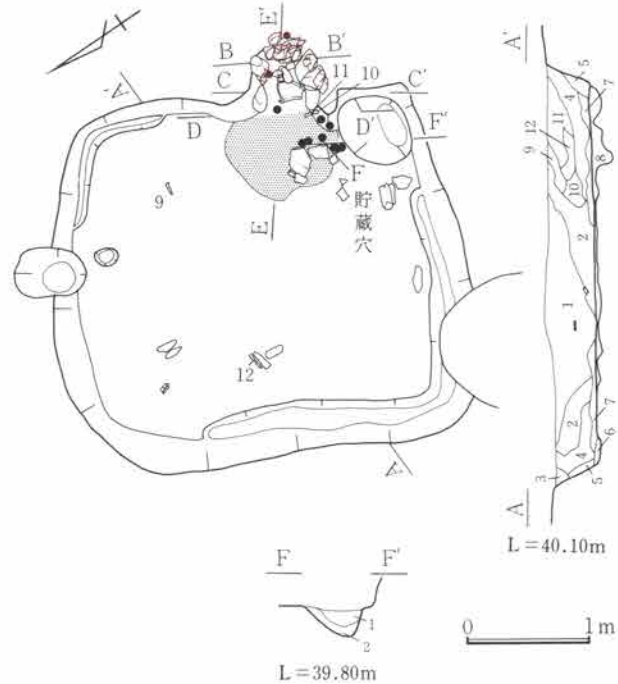
竈概要 主軸は、N-128° - E。住居跡東辺やや南寄りに位置し、燃烧部側壁が石で組まれた、石組み

竈である。燃烧部は壁外に40cm張りだし、横断面はU字形を呈する。支脚は燃烧部中央から検出されている。また燃烧部手前には、灰が集中する。

遺物 竈付近・埋土中から土師器の坏・甕や須恵器の坏・壺、棒状礫が出土している。

調査所見 住居跡南西辺の西寄りの一部が、攪乱によって削り取られている。また、北東辺においても、住居より新しい16号井戸と重複している。掘り方は、深さ約10cmの起伏を持っていたと考えられる。

- 1区23号住居跡 竈
- 1 褐色土 焼土粒・粘土粒を含む。
 - 2 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
 - 3 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
 - 4 暗褐色土 焼土粒を含む。
 - 5 暗褐色土 ロームブロックを含む。
 - 6 暗褐色土 焼土粒を含む。
 - 7 褐色土 ロームブロック主体。焼土粒を含む。
 - 8 灰黄褐色土 粘土。
 - 9 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む。
 - 10 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 - 11 褐色土 多量のロームブロック、焼土粒を含む。



L=40.10m

0 1m

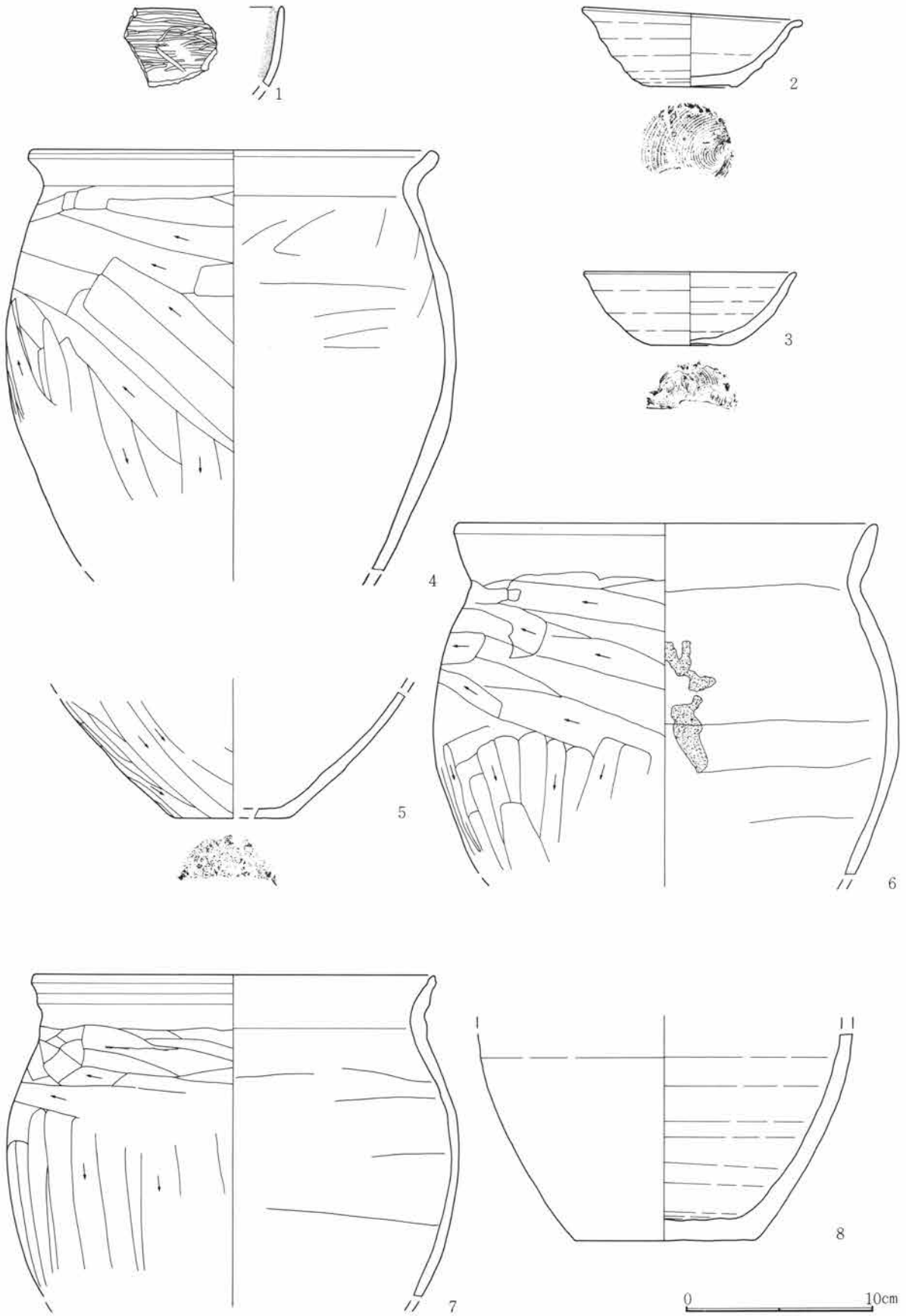
1区23号住居跡

- 1 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 2 褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 3 褐色土 ロームブロックを含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 褐色土 ロームブロックを含む。
- 7 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 8 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒を少量含む。
- 10 黒褐色土 ロームブロック・粘土粒を含む。
- 11 黒褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 12 褐色土 多量の粘土粒と、ロームブロック・焼土粒を少量含む。

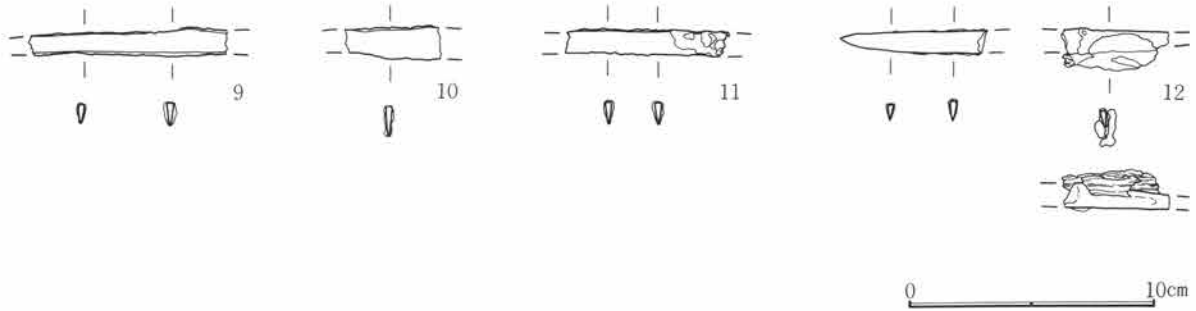
1区23号住居跡 貯蔵穴

- 1 黒褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。

第58図 1区23号住居跡及び竈実測図



第59図 1区23号住居跡出土遺物実測図(1)



第60図 1区23号住居跡出土遺物実測図(2)

1区24号住居跡 (図版22)

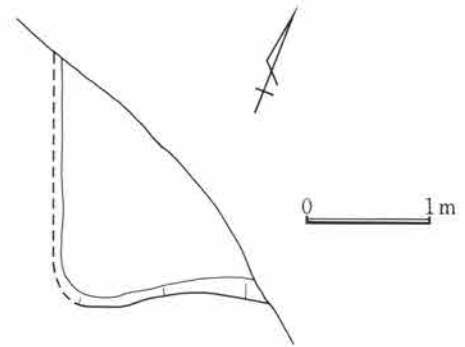
位置 2G・2H-7 主軸方位 不明

平面形状 不明 規模 不明 残存深度 25cm

柱穴 不明 周溝 なし 貯蔵穴 不明

竈位置 不明 遺物 ごく僅かであるが、土師器の破片が出土している。

調査所見 住居跡残存状況が不良で、住居跡隅が検出できたのみであった。



第61図 1区24号住居跡実測図

2区27号住居跡 (図版22・23)

位置 2B・2C-16・17

主軸方位 N-91° - E 平面形状 隅丸長方形

規模 3.6×4.5m 残存深度 30cm

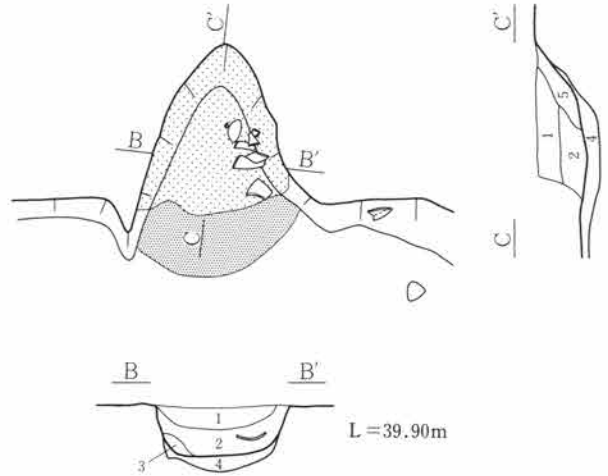
柱穴 ピットは多数あるが、柱穴跡は不明である。

周溝 なし 貯蔵穴 住居跡南東隅、竈右側で検出された。直径60cm深さ20cmである。

竈概要 主軸は、N-90° - E。住居跡東辺やや南寄りに位置し、燃烧部は竈穴外を掘り込む。燃烧部平面は、三角形を呈する。燃烧面は床面レベルとほぼ同高。横断面は、緩やかなU字形をなす。

遺物 土師器の坏・甕や須恵器の坏・埴、灰釉の碗、土錘・羽口が埋土から出土している。

調査所見 2区52号住居跡と重複している。土層や出土遺物から、本住居跡のほうが、52号住居跡よりも時期が新しい。また、本住居跡は床の一部が焼けており、埋土に焼土が多量に含まれること、炭化材が見られないこと、羽口が出土していること等から、鍛冶跡の可能性も考えられる。

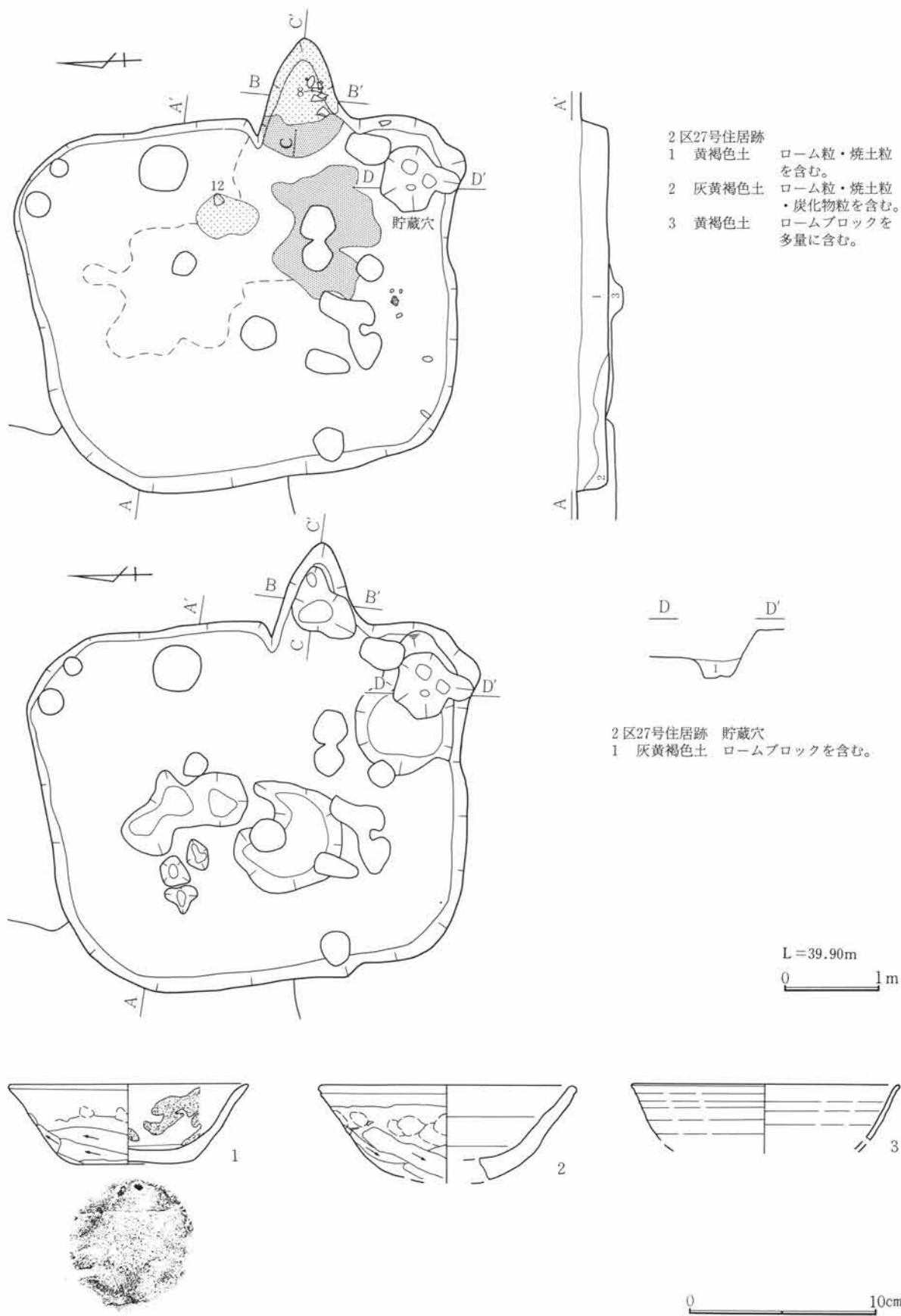


- 2区27号住居跡 竈
- | | |
|---------|---------------|
| 1 灰黄褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 2 暗赤褐色土 | 焼土ブロックを多量に含む。 |
| 3 褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 5 暗褐色土 | 焼土粒を少量含む。 |

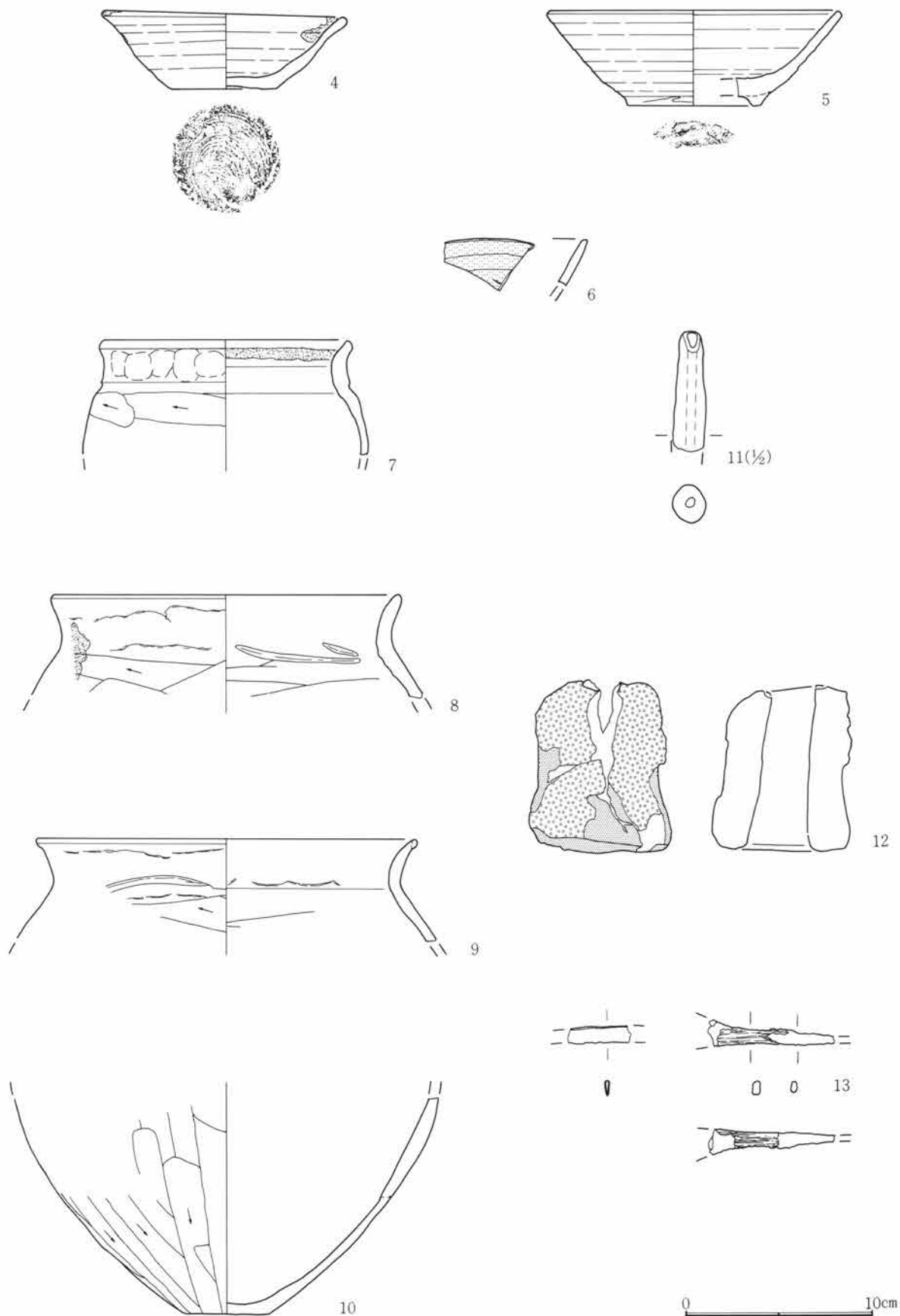


第62図 2区27号住居跡竈実測図

第2節 竪穴住居跡



第63図 2区27号住居跡掘り方及び出土遺物実測図(1)

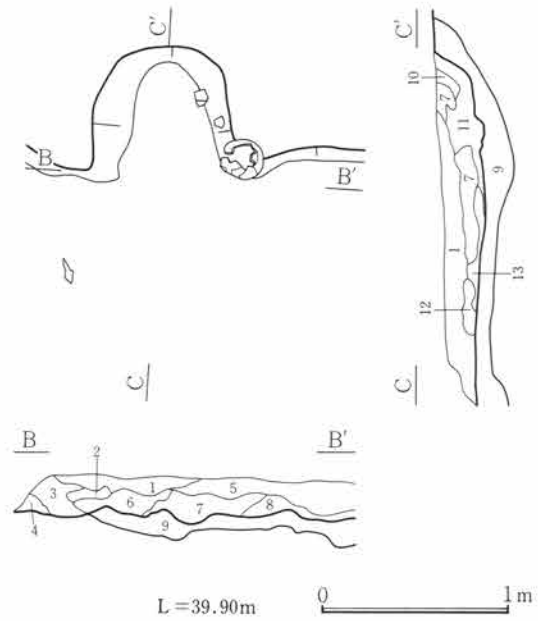
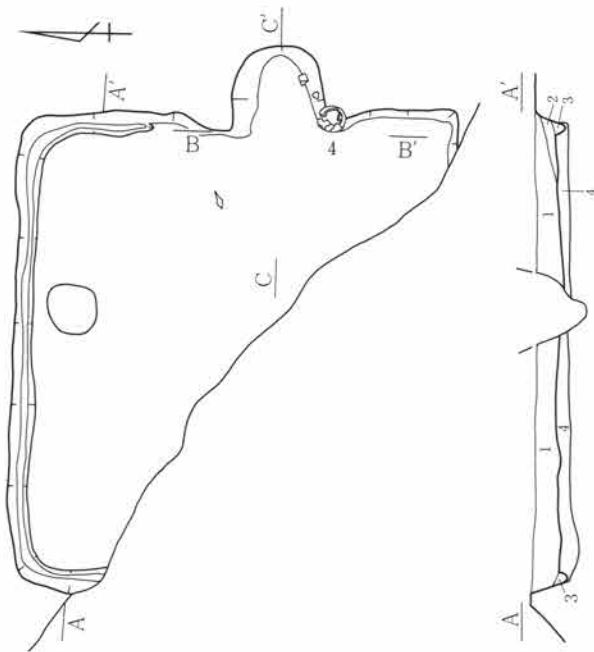


第64図 2区27号住居跡出土遺物実測図(2)

2区28号住居跡 (図版23)

位置 2 B・2 C-15・16 主軸方位 N-90° - E
 平面形状 隅丸方形 (推定)
 規模 3.7×-m 残存深度 18cm 柱穴 なし
 周溝 住居跡北側で、幅10cm深さ7cmの周溝が検出された。
 貯蔵穴 なし 電概要 主軸は、N-85° - E。住居跡東辺に位置している。左袖部分には、土師器の甕を使用している。燃烧部は外部に

約65cm張り出し、住居跡床面よりやや窪んでいる。また、横断面はU字形を呈する。遺物 土師器の坏・甕や須恵器の蓋が、埋土中から出土している。
 調査所見 住居跡南西半分ほどを、攪乱によって削り取られている。床面は全体に凹凸が多く、硬軟のばらつきも著しい。掘り方は、深さ約10cmの起伏を持っていたと思われる。

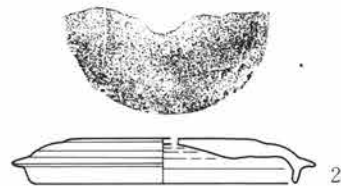
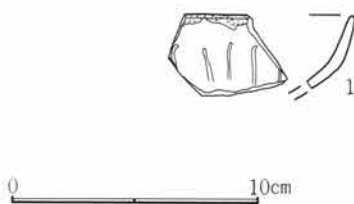


2区28号住居跡

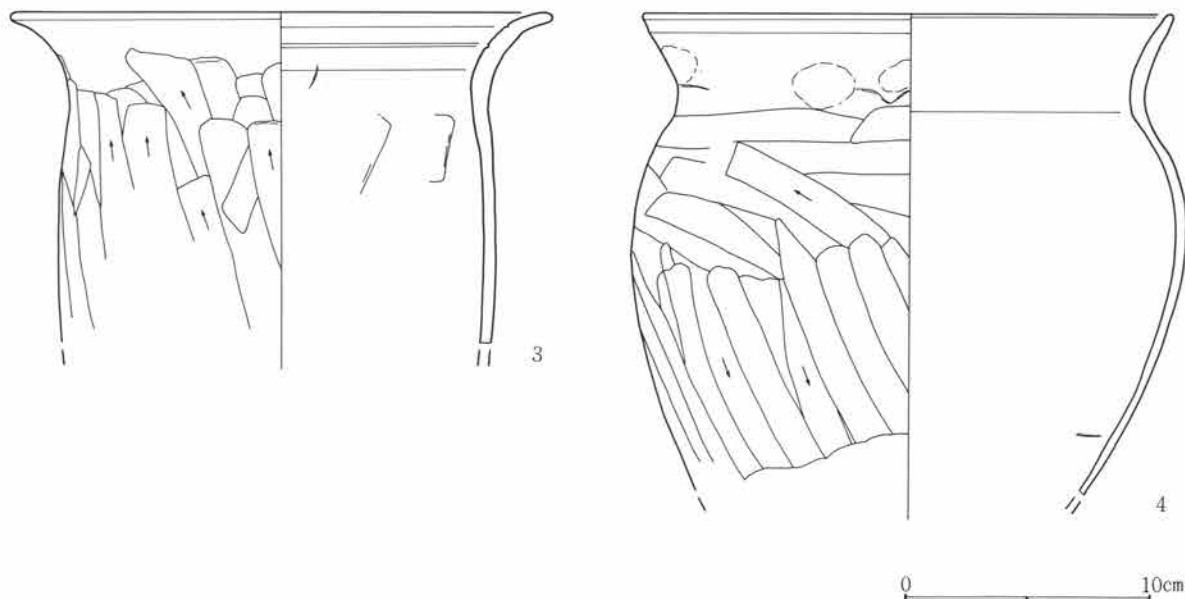
- 1 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 4 灰黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

2区28号住居跡 電

- 1 黄褐色土 砂質。白色小パミスを含む。
- 2 明褐色土 粘土主体。焼土粒を含む。
- 3 黄褐色土 ロームブロック主体。粘土粒を含む。
- 4 暗褐色土 ロームと黒色土の混土。
- 5 褐色土 粘土粒・焼土粒を含む。
- 6 明赤褐色土 焼土塊主体。
- 7 暗褐色土 粘土粒・焼土粒を含む。
- 8 黒褐色土 粘土粒を含む。
- 9 灰黄褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。
- 11 赤褐色土 焼土ブロック・粘土ブロックを含む。
- 12 灰黄褐色土 粘土主体。ローム粒を含む。
- 13 黄褐色土 ロームブロックを含む。



第65図 2区28号住居跡・竈及び出土遺物実測図(1)



第66図 2区28号住居跡出土遺物実測図(2)

2区29号住居跡(図版24)

位置 2B-14 主軸方位 N-95° - E

平面形状 不明 規模 不明 残存深度 32cm

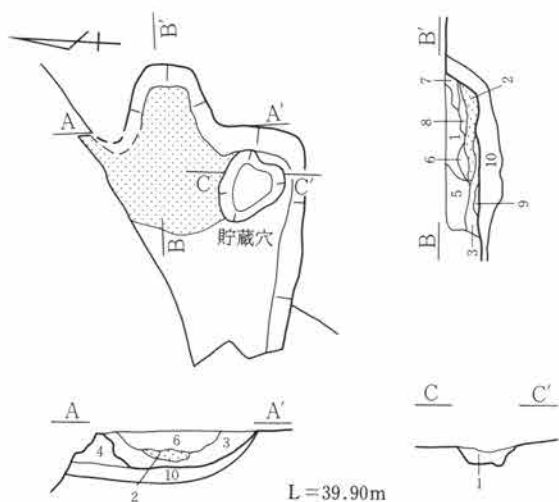
柱穴 不明 周溝 不明

貯蔵穴 住居跡東南隅、竈の右側で検出された。規模は、直径50cm深さ15cmである。

竈概要 主軸は、N-86° - E。住居跡東辺に位置する。左袖部分の一部は攪乱により、削り取られている。燃燒部はほぼ平坦で、壁外に約50cm張り出している。

遺物 土師器の坏の破片が、埋土から出土した。

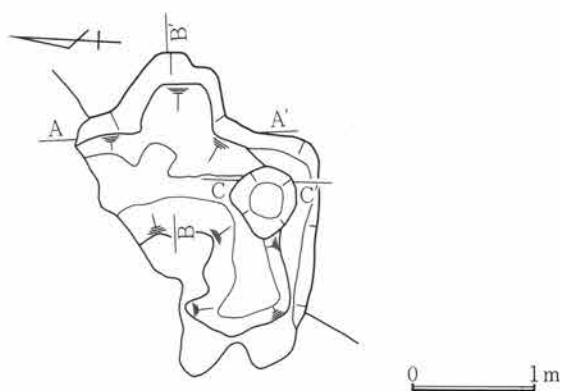
調査所見 住居跡のほとんどは、攪乱により削り取られていた。掘り方は、約10cmの起伏を持っていたと思われるが、詳細は不明である。



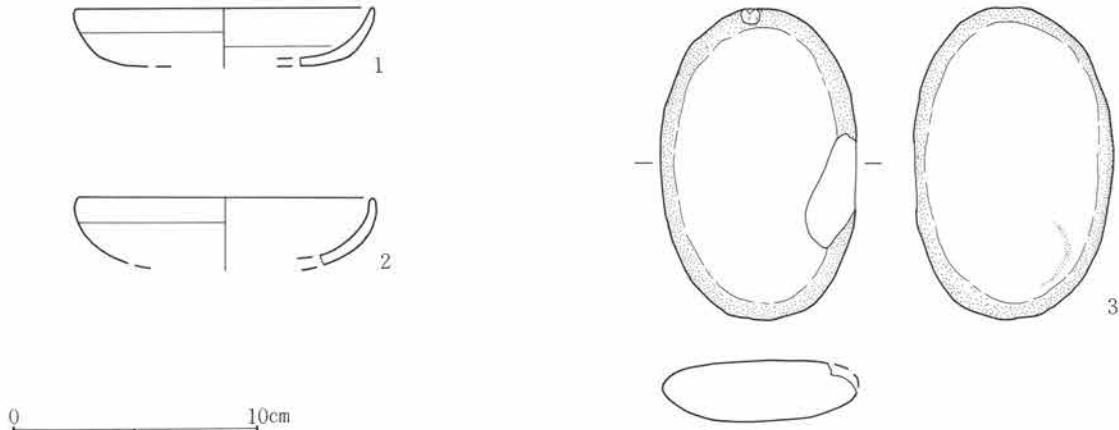
2区29号住居跡 貯蔵穴
1 黄褐色土 焼土粒・ロームブロックを含む。

2区29号住居跡 竈

- 1 暗褐色土 やや砂質。焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 粘質。焼土粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 4 黄褐色土 やや粘質。ロームブロックを含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒・ロームブロックを含む。
- 6 暗褐色土 粘土塊・焼土粒を含む。
- 7 褐色土 焼土粒を含む。
- 8 暗褐色土 粘土粒・焼土粒・炭化物粒を含む。
- 9 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 10 黄褐色土 ロームブロックを含む。



第67図 2区29号住居跡及び掘り方実測図



第68図 2区29号住居跡出土遺物実測図

2区31号住居跡 (図版24・25)

位置 R-17 主軸方位 N-96° -E

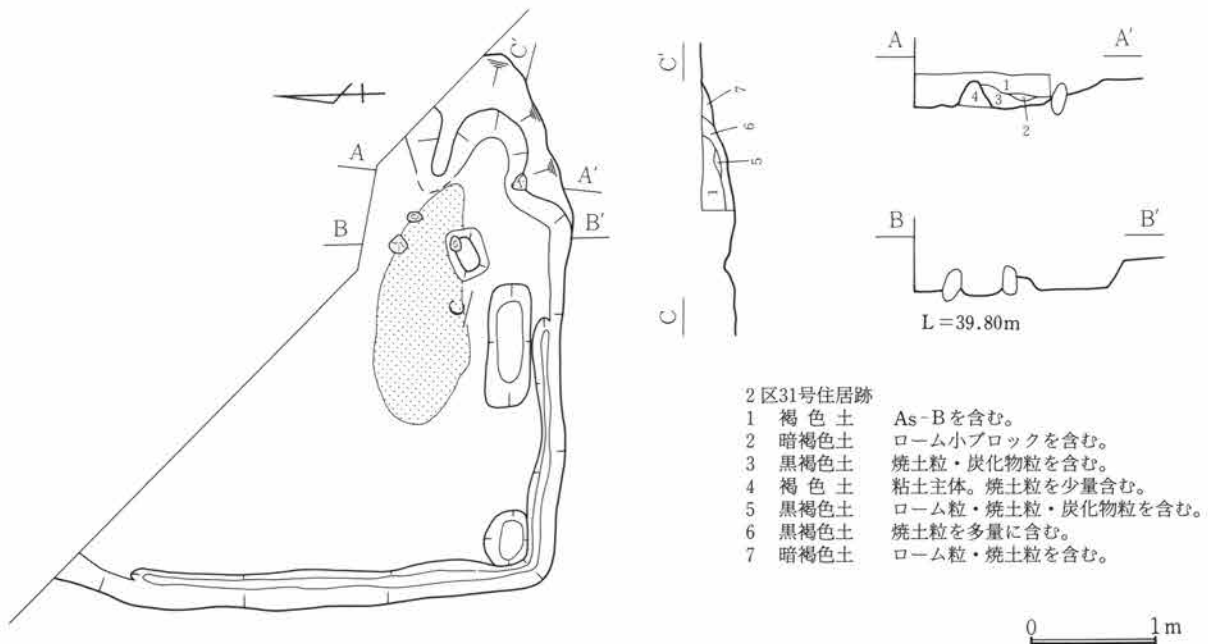
平面形状 隅丸方形 (推定) 規模 3.1×-m

残存深度 20cm 柱穴 なし

周溝 住居跡南西部で検出された。規模は、幅15cm 深さ4cm程である。 貯蔵穴 不明

竈概要 主軸は、N-113° -E。住居跡東辺やや南寄りに位置する。燃焼部は平坦で、外部へ約55cm張り出している。右袖石を残していた。また、1号竈の左下部 (住居跡内側) にもう一つの竈 (2号竈)

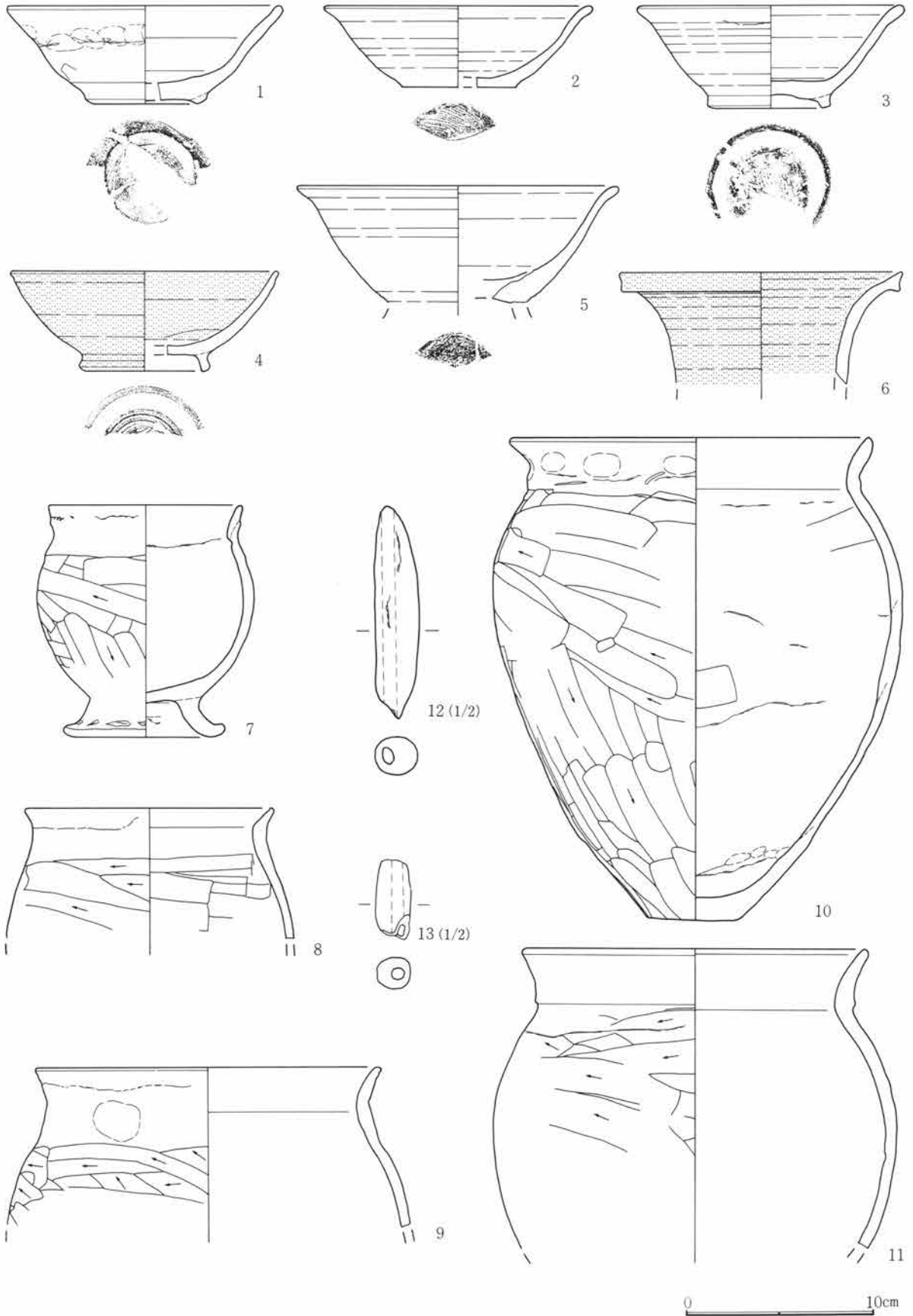
の痕跡を検出した。2号竈では両袖石と支脚、その周囲への焼土の広がり確認できた。袖石・支脚が残っていることや土層から、2号竈のほうが新しいと思われる。 遺物 土師器の坏・甕や須恵器の坏、灰釉陶器の碗や土錘が、埋土中から出土している。 調査所見 本住居跡は、北東部の半分ほどが調査区外にある。1号竈の左袖部分から北側は、変形していると考えられる。床面は住居跡中央部が固く締まっている。掘り方は深さ約7cmの起伏を持っていた。



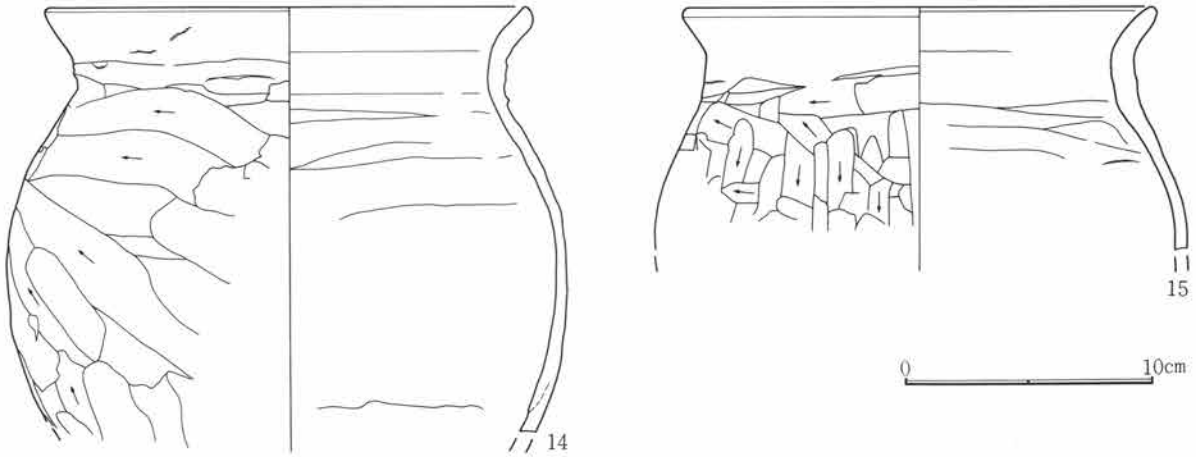
2区31号住居跡

- | | |
|--------|-------------------|
| 1 褐色土 | As-Bを含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |
| 3 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物粒を含む。 |
| 4 褐色土 | 粘土主体。焼土粒を少量含む。 |
| 5 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む。 |
| 6 黒褐色土 | 焼土粒を多量に含む。 |
| 7 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |

第69図 2区31号住居跡実測図



第70図 2区31号住居跡出土遺物実測図(1)



第71図 2区31号住居跡出土遺物実測図(2)

2区33号住居跡 (図版25・26)

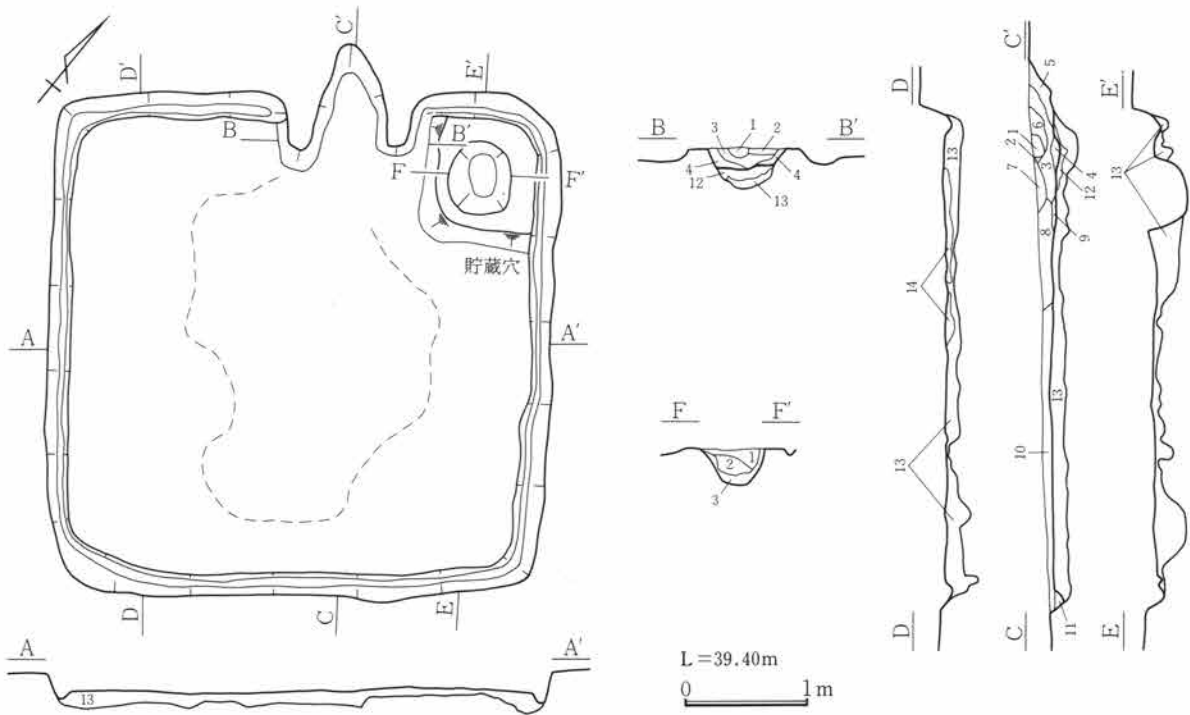
位置 Q・R-14・15

主軸方位 N-38° -W

平面形状 隅丸方形 規模 3.8×3.9m

残存深度 15cm 柱穴 なし

周溝 竈部分を除いて、住居跡を全周する。規模は幅10cm深さ8cmほどである。



2区33号住居跡 (竈含む)

- 1 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 粘質。粘土粒・焼土粒を含む。
- 3 黄褐色土 粘質。粘土粒・焼土粒を含む。
- 4 褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 5 黄褐色土 ロームブロック・粘土粒を含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロック・粘土粒を含む。
- 7 暗褐色土 粘土粒を含む。
- 8 暗褐色土 ローム小ブロック・焼土粒・粘土粒を含む。
- 9 暗褐色土 焼土粒を含む。

- 10 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- 11 暗褐色土 粘質。焼土粒を少量含む。
- 12 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 13 黄褐色土 ロームブロック・黒色土ブロックを含む。
- 14 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。

2区33号住居跡 貯蔵穴

- 1 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック・焼土粒を含む。
- 3 明黄褐色土 ロームブロックを含む。

第72図 2区33号住居跡実測図

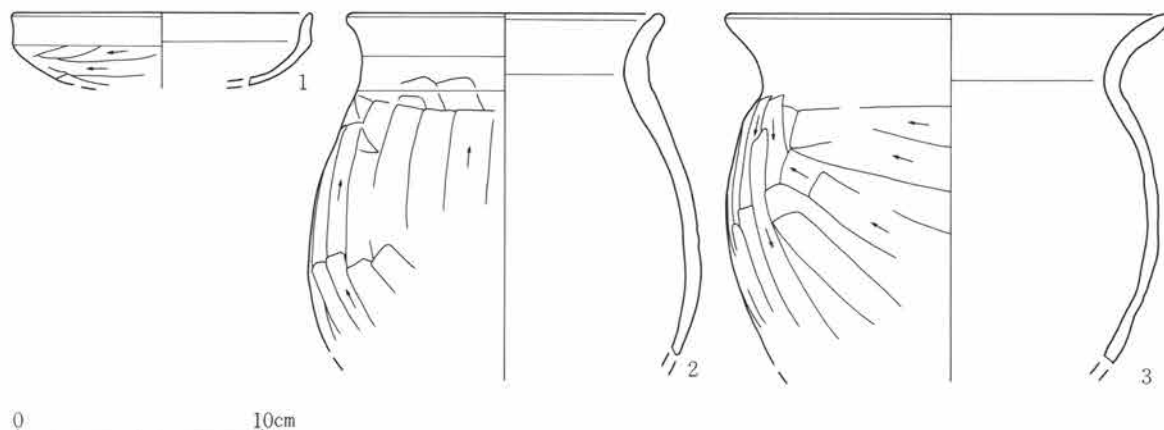
第5章 遺構と遺物

貯蔵穴 住居跡の北隅、竈の右側で検出された。円形で、規模は直径50cm深さ25cmほどである。また、貯蔵穴の周囲は、方形に床面から約10cm高くなっている。

竈概要 主軸は、N-40°-W。住居跡北西辺やや北よりに位置する。両袖部分は壁内に30cmほど張り出している。また、燃烧面は平坦で、北西壁より約40cm外部へ張り出し、横断面はU字形を呈している。

遺物 土師器の坏や甕、棒状礫が埋土中から出土しているが、遺物量は少ない。

調査所見 床面は住居跡中央部が、周辺部に比べて固く締まっている。掘り方は、深さ約10cmの起伏を持っていたと思われる。特に、住居跡北隅で落ち込みが明瞭であった。



第73図 2区33号住居跡掘り方及び出土遺物実測図

2区34号住居跡 (図版26・27)

位置 Q・R-12・13

主軸方位 N-47°-E **平面形状** 隅丸方形

規模 3.3×3.5m **残存深度** 10cm

柱穴 なし **周溝** 竈部分を除いて、住居跡を全周する。規模は、幅12cm深さ10cmほどである。

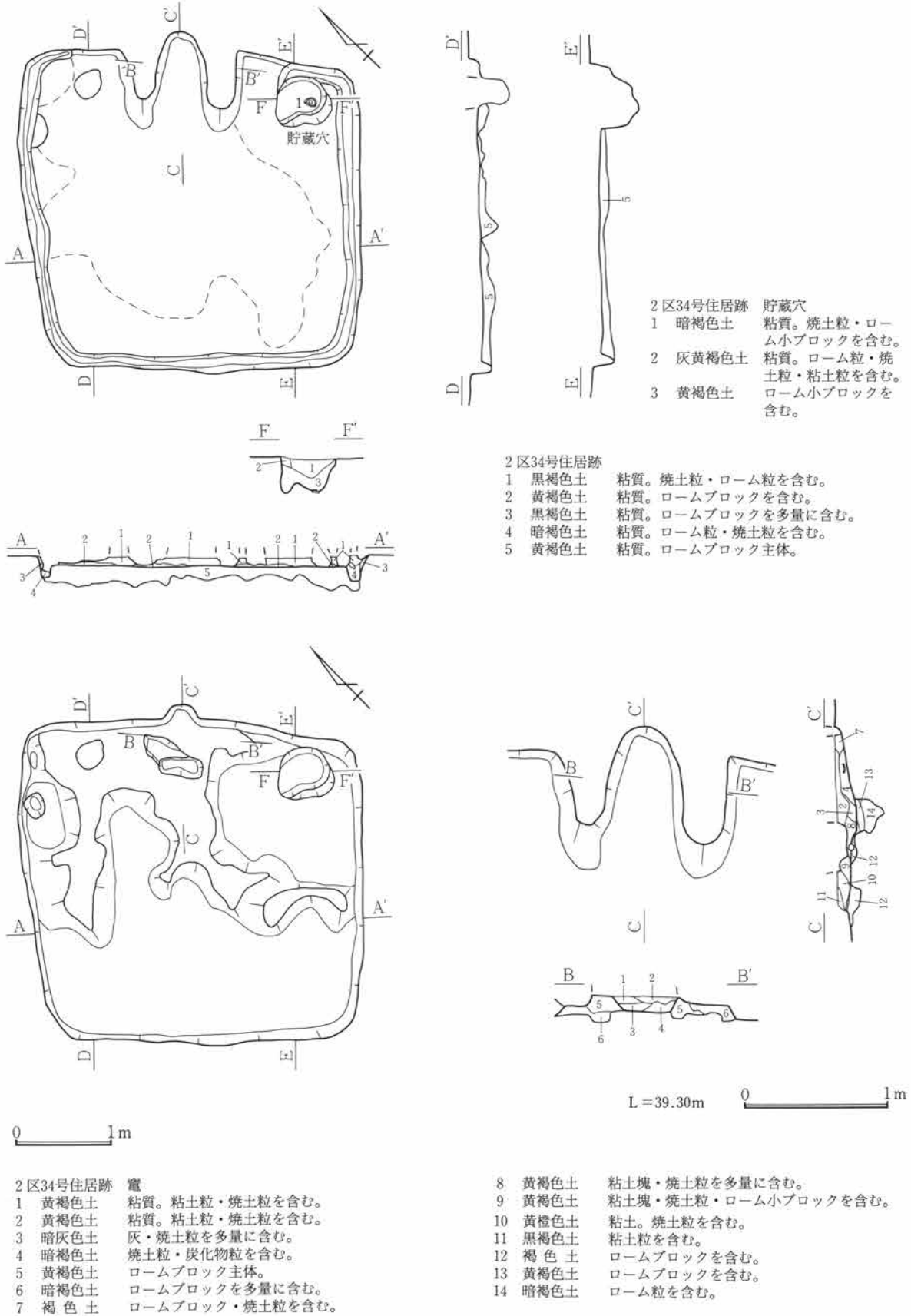
貯蔵穴 住居跡東隅部、竈の右側から検出された。規模は、幅55cm深さ35cm程で不整楕円形である。

竈概要 主軸は、N-48°-E。住居跡北東辺やや

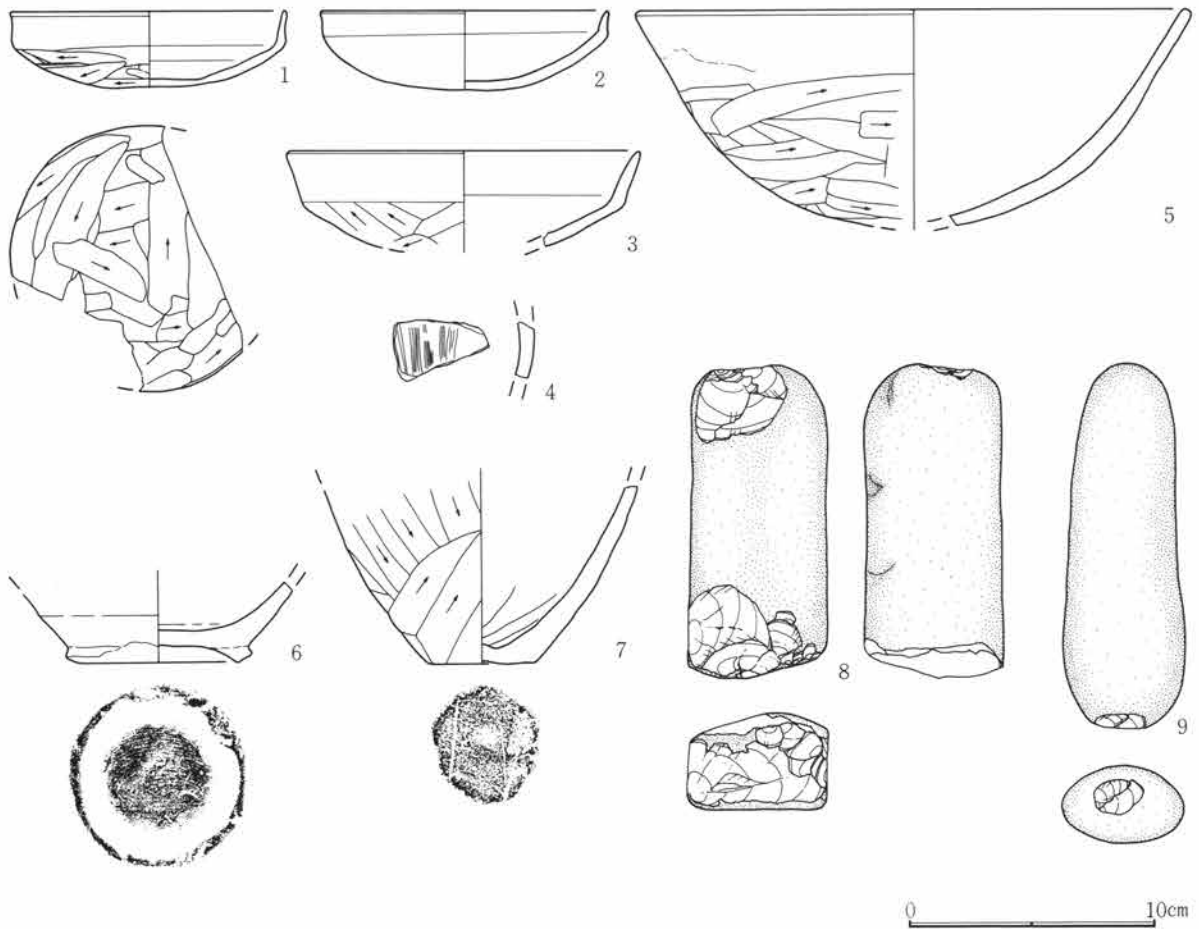
北寄りに位置する。両袖部分・燃烧部は壁内に位置している。袖部分はロームを主体として作られている。燃烧部の横断面は緩やかなU字形を呈する。

遺物 土師器の坏・甕・鉢や須恵器の碗、棒状礫が埋土中から出土している。破片を含めた全体の遺物量は少ない。

調査所見 床面が浅く、残存状態はあまり良くなかった。掘り方は、深さ15cmの起伏を持っている。



第74図 2区34号住居跡及び竈実測図



第75図 2区34号住居跡出土遺物実測図

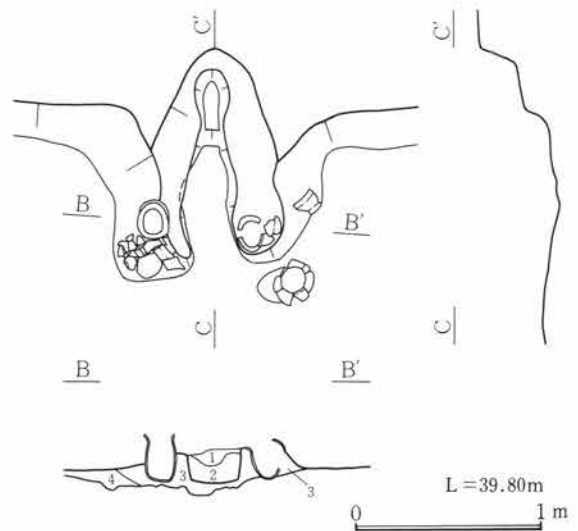
2区35号住居跡 (図版27・28)

位置 S・T-12・13 主軸方位 N-38° -W
 平面形状 隅丸方形 (推定) 規模 3.9×3.8m
 残存深度 31cm 柱穴 なし

周溝 竈部分を除いて、住居跡北隅部・西側で検出された。規模は、幅12cm深さ5cmほどである。一部検出されなかった箇所があるが、本来は全周していたものであろう。貯蔵穴 住居跡北隅部、竈右側で検出された。貯蔵穴内で土師器の甕が、横になった形で出土している。

竈概要 主軸方向は、N-36° -W。住居跡北西辺に位置する。残存状態は良好で、袖部分は粘質土で作られており、正立させた土師器の甕を芯材として使用して基礎とし、壁内に60cmほど張り出している。

遺物 竈周辺部から土師器の坏・甕が、埋土中からは須恵器の破片が僅かに出土している。また、棒状礫・



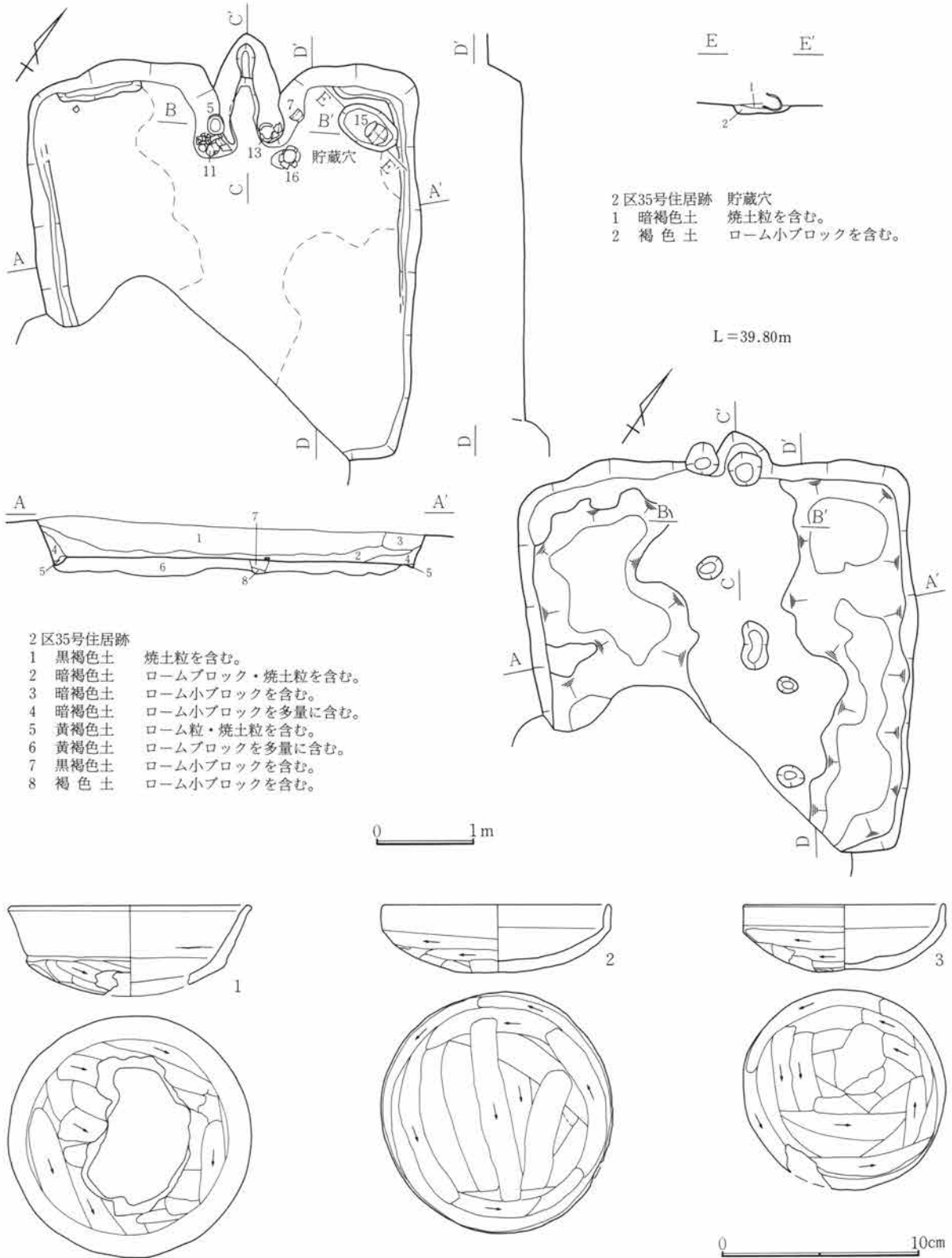
- 2区35号住居跡 竈
- | | | |
|---|------|--------------|
| 1 | 黄橙色土 | 粘土主体。焼土粒を含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | 粘土粒・焼土粒を含む。 |
| 3 | 褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 4 | 黄褐色土 | ローム粒を含む。 |

第76図 2区35号住居跡竈実測図

土錘も出土している。

調査所見 住居跡南側が攪乱によって、削り取られている。竈周辺から住居跡中央部の床面は、帯状に

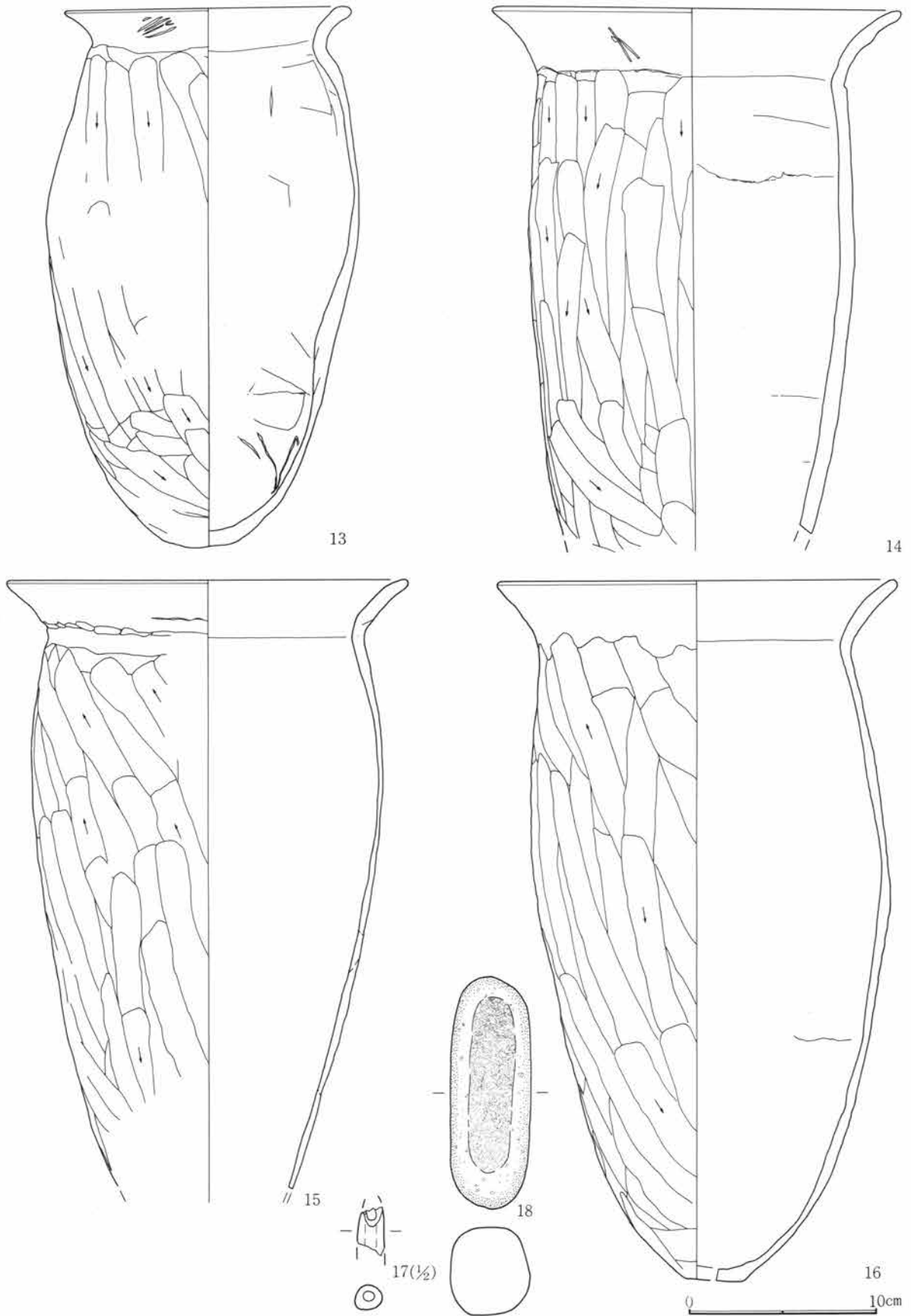
硬く締まっていた。掘り方は、北東壁・南西壁に沿って幅70~140cmの帯状に掘り込まれており、深さ約15cmの起伏を持っていた。



第77図 2区35号住居跡・掘り方及び出土遺物実測図(1)



第78図 2区35号住居跡出土遺物実測図(2)



第79図 2区35号住居跡出土遺物実測図(3)

2区36号住居跡 (図版28・29)

位置 Q・R-10・11 主軸方位 N-25° -W

平面形状 隅丸方形 規模 4.4×4.5m

残存深度 10cm (推定)

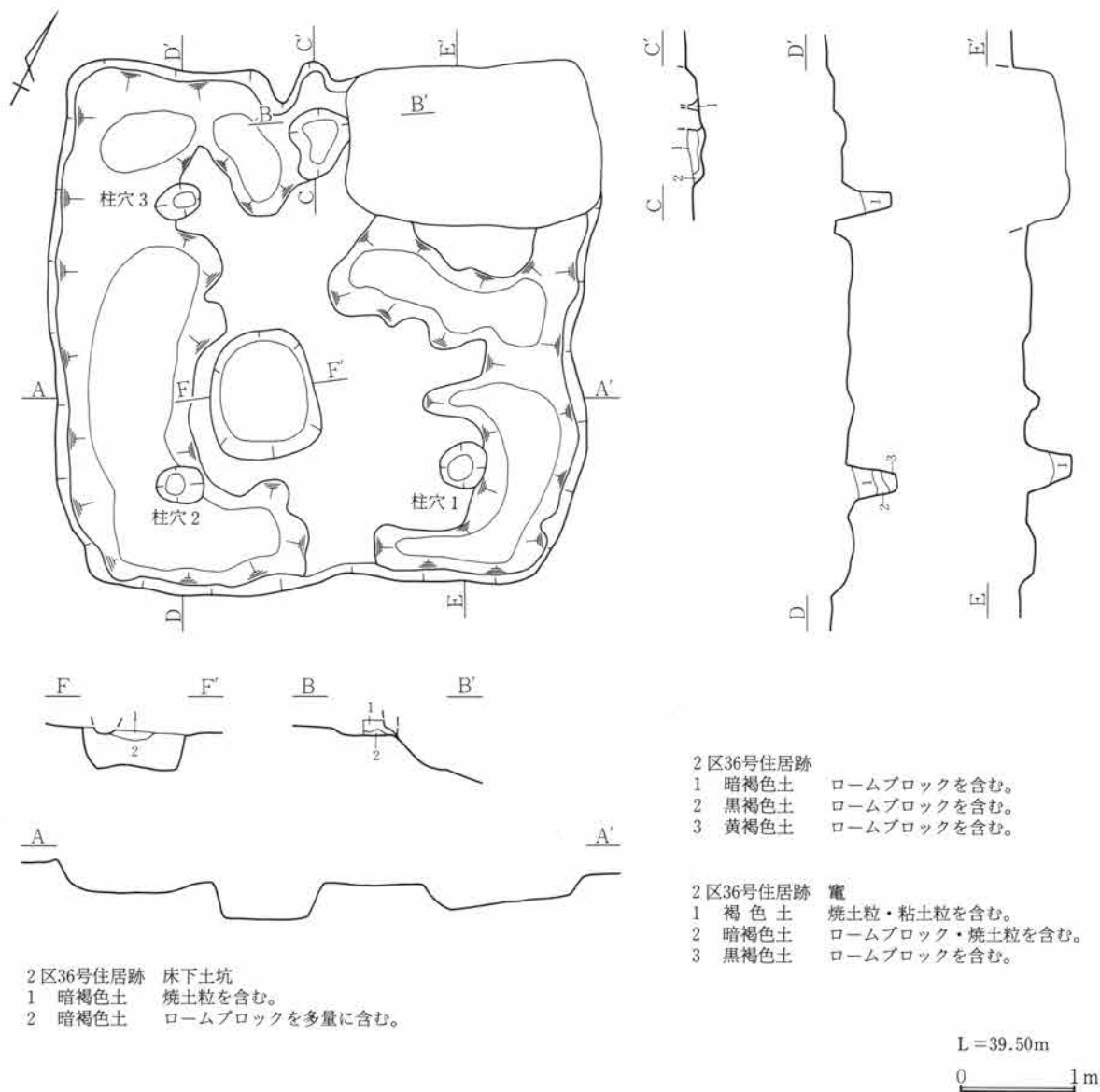
柱穴 3カ所で検出された。一つは148号土坑によって、削り取られており、検出されなかった。柱穴1は直径35cm深さ40cm、柱穴2は直径35cm深さ45cm、柱穴3は直径27cm深さ38cmである。柱穴間の寸法は、ほぼ2.4mである。周溝 不明 貯蔵穴 不明

竈概要 主軸は、N-35° -W。住居跡北西辺の中央部に位置する。残存状態は不良であった。左袖部

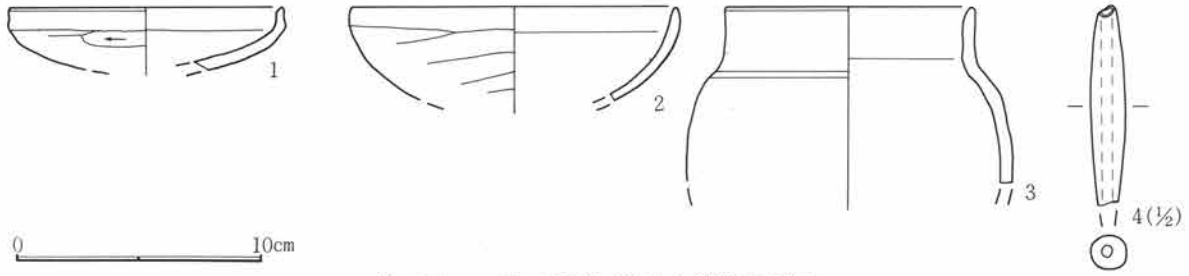
分は、壁内に40cmほど張り出している。

遺物 土師器の坏や小型の甕の破片が、埋土中から出土している。全体的な出土量は少ない。

調査所見 トレンチャーによる攪乱で、床面下まで掘り取られている。掘り方は、住居跡中央部が小高く、周辺の低い部分は15cmほどの起伏を持っていたと考えられる。直径1mほどの楕円形の床下土坑の上層に、張り床と考えられる焼土粒を含む、粘質土の層が検出されている。床下土坑の性格は、不明である。



第80図 2区36号住居跡実測図



第81図 2区36号住居跡出土遺物実測図

2区37号住居跡 (図版29)

位置 P・Q-10・11 主軸方位 不明
 平面形状 楕円形 残存深度 ほとんどなし
 柱穴 不明 周溝 不明 貯蔵穴 不明
 竈位置 不明

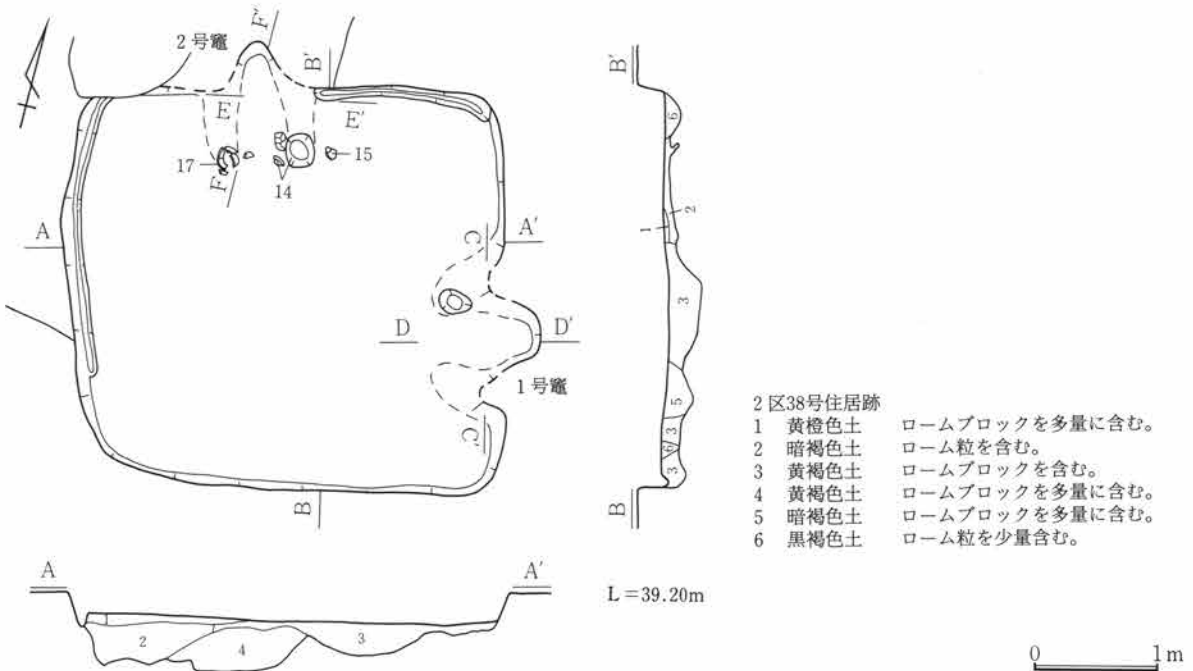
遺物 土師器の破片が、ごく僅か出土している。
 調査所見 本住居跡は、掘り方の一部しか残っておらず、残存状態は極めて不良である。埋土にはわずかながら、焼土粒が混入していた。

2区38号住居跡 (図版29・30)

位置 O・P-12・13 主軸方位 N-76° -E
 平面形状 隅丸方形 規模 3.5×3.3m
 残存深度 25cm 柱穴 なし
 周溝 住居跡北辺と西辺の一部で検出された。規模は、幅10cm深さ7cmである。 貯蔵穴 なし
 竈概要 竈は、東辺やや南寄り(1号竈)と、北辺やや西寄り(2号竈)の2カ所で確認できた。主軸方位は、1号竈がN-76° -E、2号竈がN-17°

-Wである。2基共に、壁を作り直した痕跡は窺われなかったため、同時期に2基の竈を使用していた可能性もある。但し東辺の1号竈より、北辺の2号竈のほうが土器の出土もあり、残存状態が良好である。また、袖部分のピットは土師器の甕を芯材として用いた名残と思われる。

遺物 土師器の坏・甕・台付壺、須恵器の坏・蓋、棒状礫が埋土中から出土している。

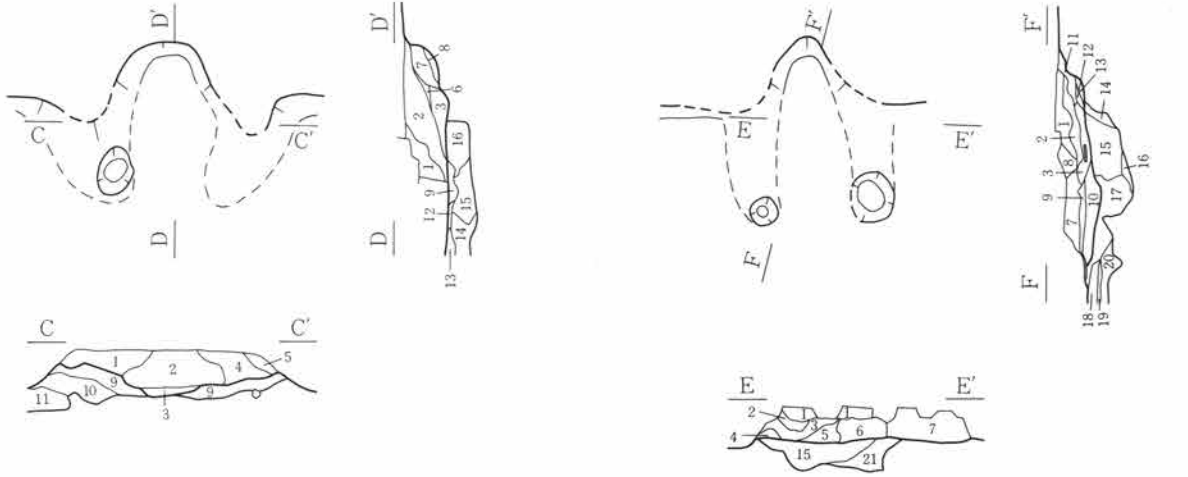


- 2区38号住居跡
- 1 黄橙色土 ロームブロックを多量に含む。
 - 2 暗褐色土 ローム粒を含む。
 - 3 黄褐色土 ロームブロックを含む。
 - 4 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 - 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 - 6 黒褐色土 ローム粒を少量含む。

第82図 2区38号住居跡実測図

調査所見 本住居跡は、51号住居跡と重複している。51号住居跡を掘り込んでいることから、本住居跡は、51号住居跡より時期が新しいと考えられる。掘り方

は、住居跡中央部が深く掘り込まれており、最も深いところでは40cmを測る。

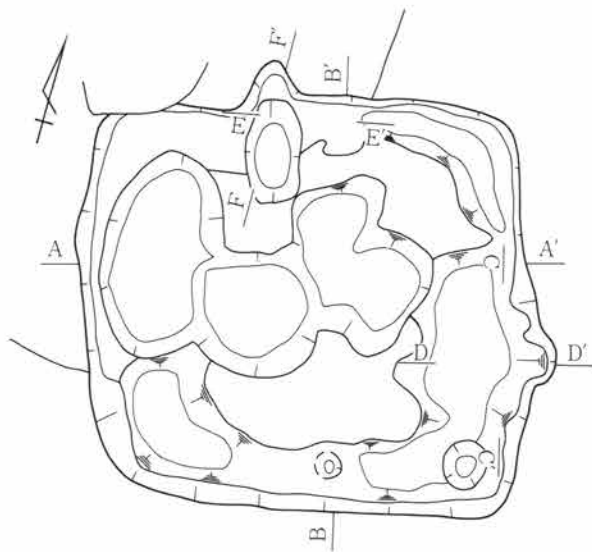


2区38号住居跡 1号電

- | | |
|----------|------------------------|
| 1 黄褐色土 | 粘土ブロック・焼土粒・ロームブロックを含む。 |
| 2 褐色土 | 粘土粒・焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 3 暗褐色土 | 粘土粒・焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 4 黄褐色土 | 粘土主体。 |
| 5 黄褐色土 | ローム粒・焼土粒を少量含む。 |
| 6 暗褐色土 | 焼土粒を多量に含む。 |
| 7 褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 8 黒褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 9 褐灰色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 10 黒褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 11 明黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 12 黒褐色土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 13 黄褐色土 | 粘土ブロック・ロームブロックを含む。 |
| 14 明黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 15 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 16 褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |

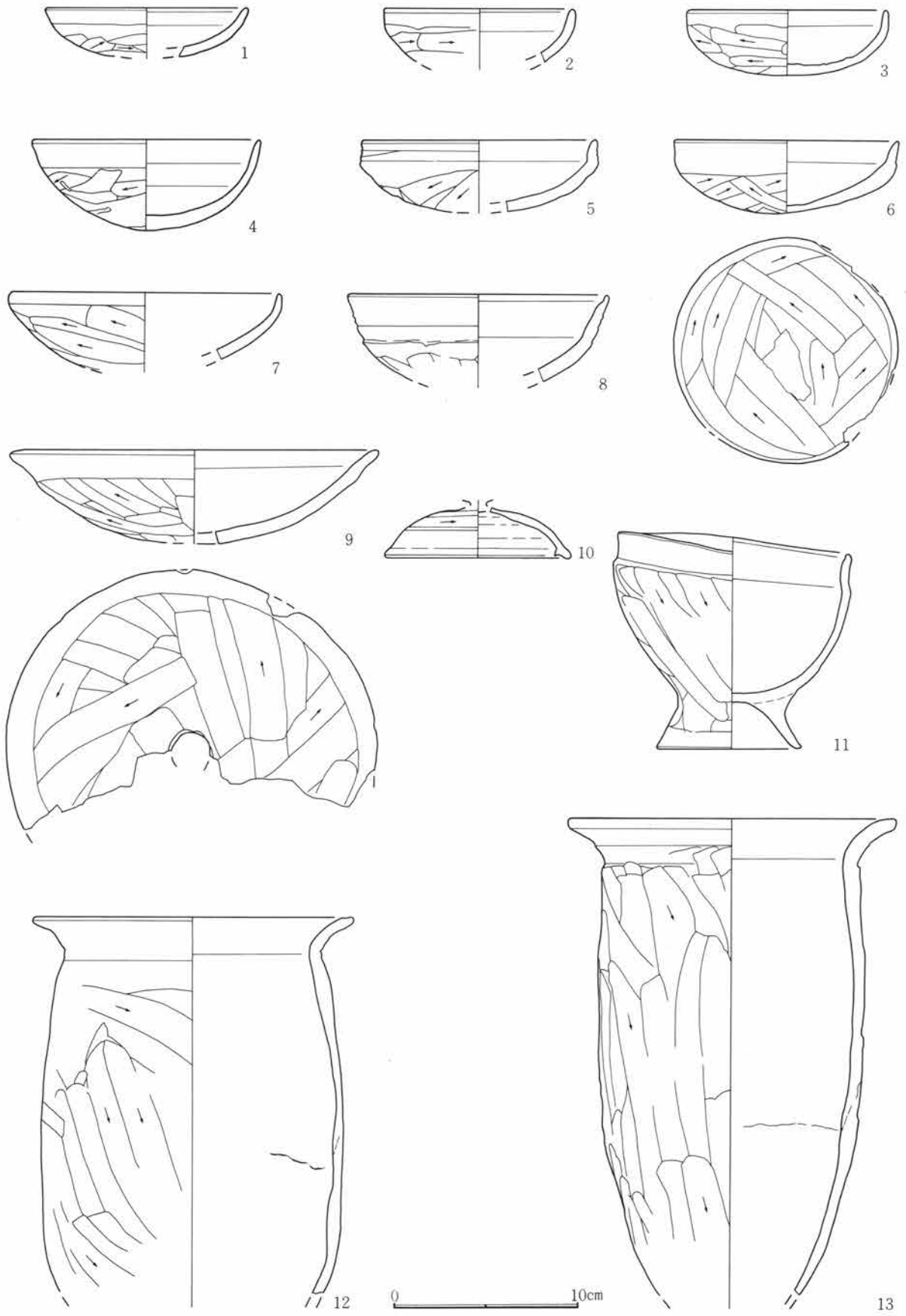
2区38号住居跡 2号電

- | | |
|----------|----------------------|
| 1 灰黄褐色土 | 焼土粒・粘土粒を含む。 |
| 2 赤褐色土 | 焼土。 |
| 3 黒褐色土 | ローム小ブロック・焼土粒を含む。 |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック主体。 |
| 5 黄褐色土 | ローム小ブロック・焼土粒を含む。 |
| 6 黄褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 7 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 8 暗褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| 9 黒褐色土 | 粘土粒・焼土粒を含む。 |
| 10 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む。 |
| 11 褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 12 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 13 暗褐色土 | ローム小ブロックを少量含む。 |
| 14 暗褐色土 | ローム小ブロック・焼土粒・粘土粒を含む。 |
| 15 褐色土 | ロームブロック主体。 |
| 16 明黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 17 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 18 明黄褐色土 | ロームブロック・粘土ブロックを含む。 |
| 19 黒褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 20 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 21 黒褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |

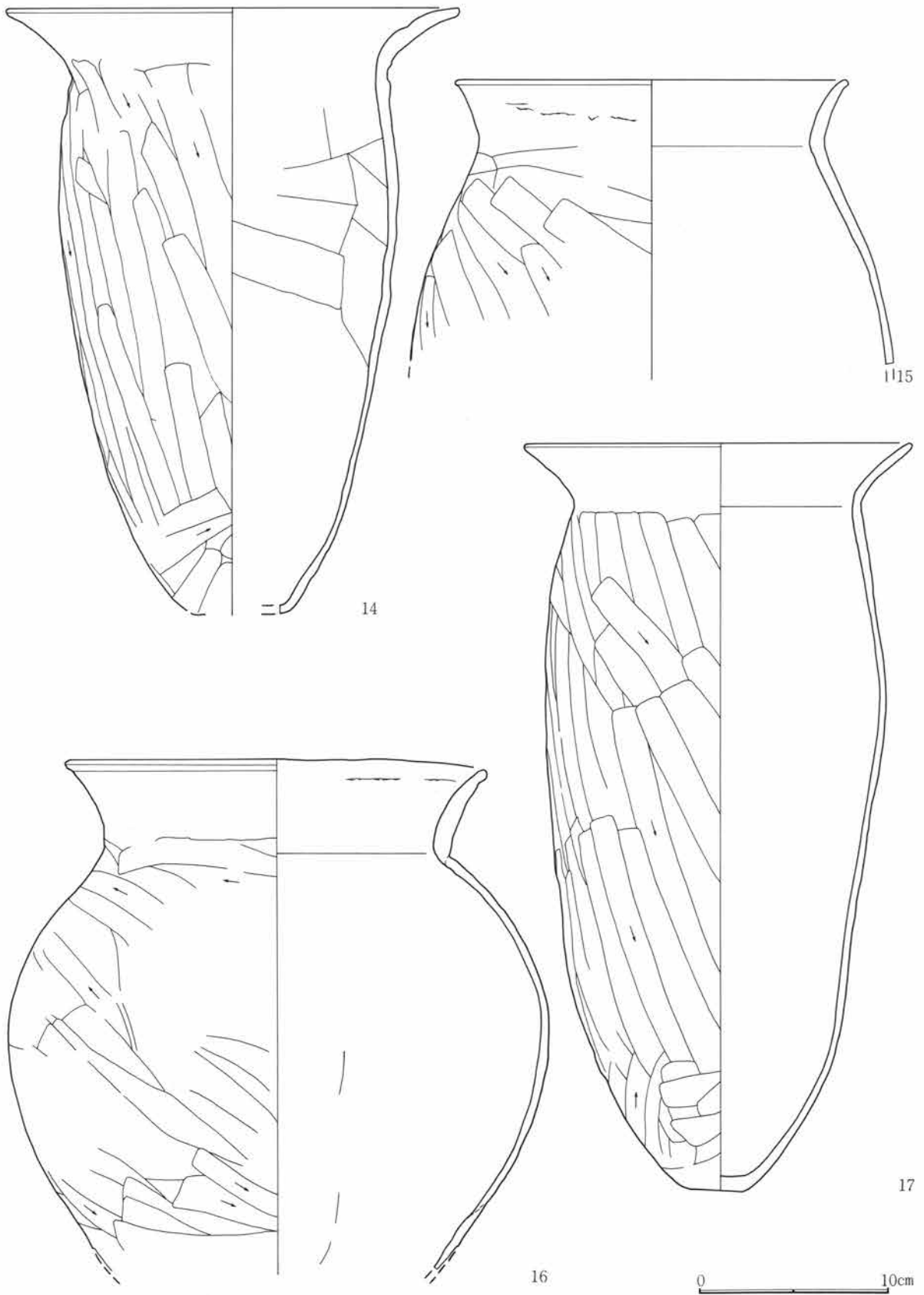


第83図 2区38号住居跡竈及び掘り方実測図

第2節 竪穴住居跡



第84図 2区38号住居跡出土遺物実測図(1)



第85図 2区38号住居跡出土遺物実測図(2)

2区39号住居跡 (図版30・31)

位置 N・O-11 主軸方位 N-87° - E

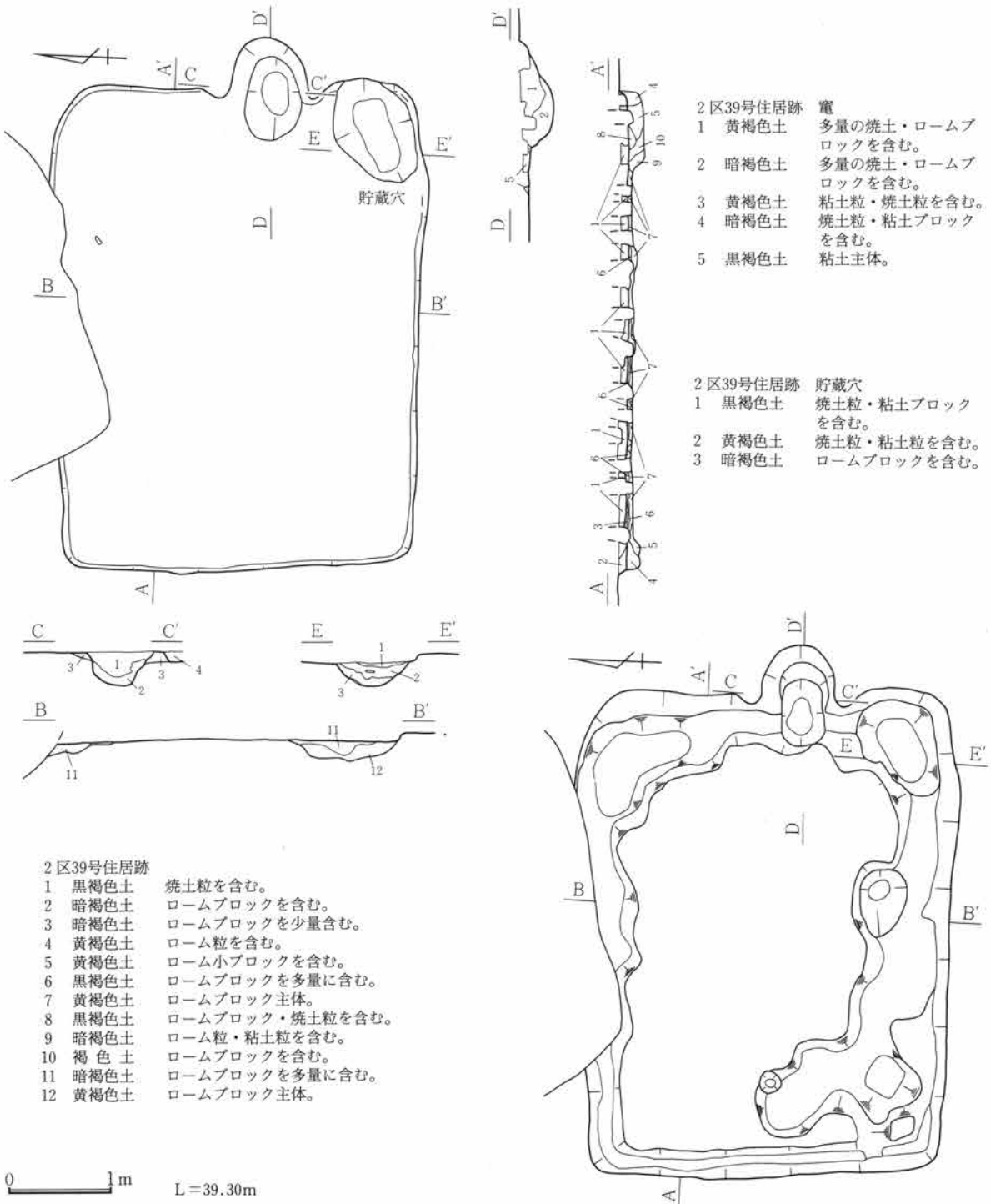
平面形状 隅丸長方形 規模 4.4×3.5m

残存深度 7cm 柱穴 なし

周溝 床面調査では不明瞭であったが、掘り方の西壁では周溝らしき痕跡が確認された。

貯蔵穴 住居跡東南隅、竈右側で検出された。規模は幅70cm深さ23cmである。

竈概要 主軸は、N-88° - E。住居跡東辺やや南寄りに位置する。燃焼部は、東壁から約60cm外部へ張り出しており、断面はU字形をなしている。

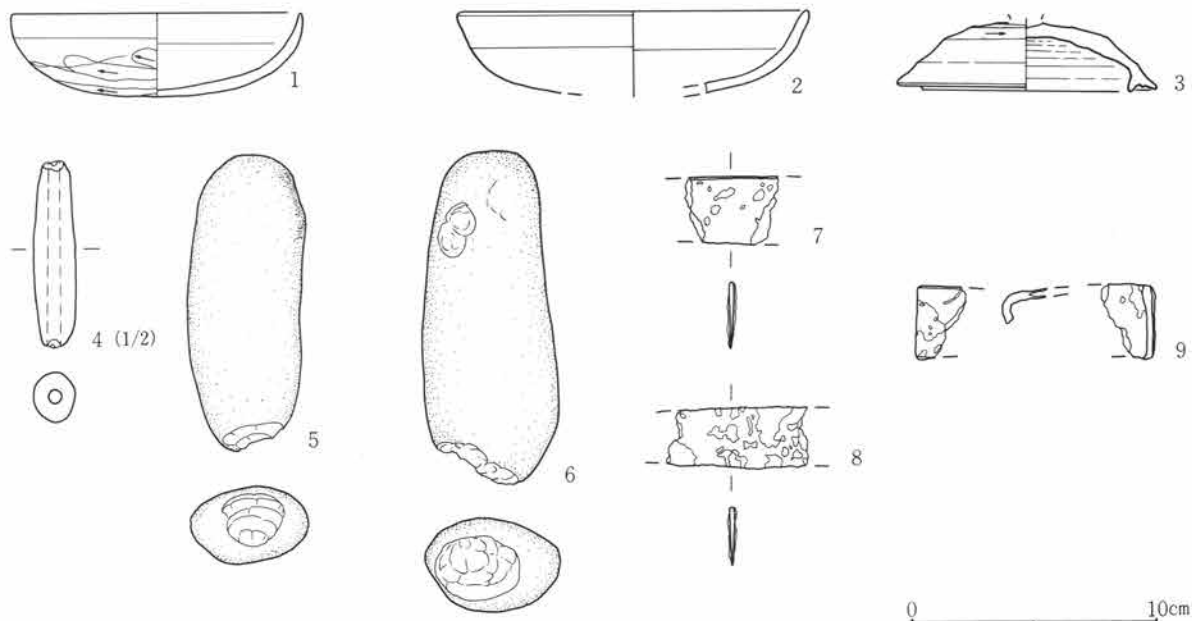


第86図 2区39号住居跡及び掘り方実測図

遺物 土師器の坏や須恵器の蓋・棒状礫・土錘・鉄製の鎌が、埋土中から出土している。

調査所見 本住居跡は、攪乱により北壁が一部削り

取られている。掘り方は、住居跡中央部が小高く残り、その周辺部が壁に沿って凹んでおり、5cmほどの起伏をもっていたと思われる。



第87図 2区39号住居跡出土遺物実測図

2区40号住居跡 (図版31・32)

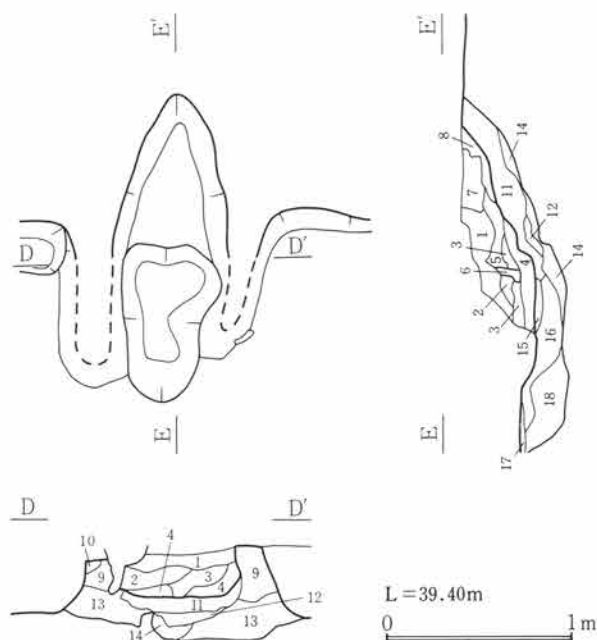
位置 N~P-8・9 **主軸方位** N-31° -W

平面形状 隅丸方形 **規模** 6.1×6.2m

残存深度 36cm **柱穴** 柱穴1は直径47cm深さ65cm、柱穴2は直径55cm深さ56cm、柱穴3は直径65cm

深さ48cm、柱穴4は直径60cm深さ69cmである。柱穴間の寸法は、ほぼ3mである。

周溝 竈部分を除いて住居跡を全周する。規模は、幅20cm深さ10cm程である。 **貯蔵穴** 不明



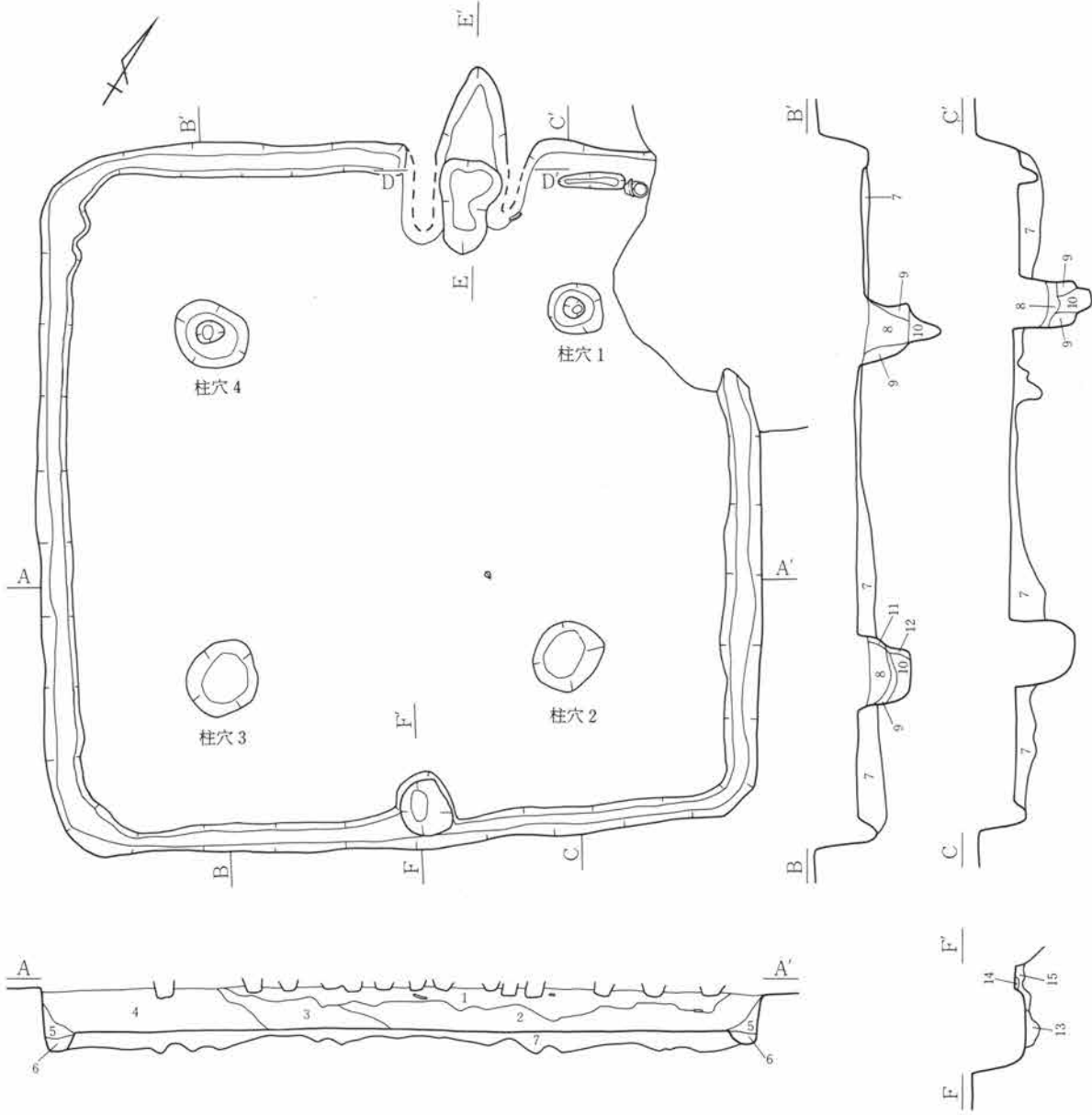
- | | |
|----------|--------------------|
| 2区40号住居跡 | 竈 |
| 1 黄褐色土 | 粘土ブロックを多量に含む。 |
| 2 黄褐色土 | 粘土粒・焼土粒を含む。 |
| 3 褐色土 | 焼土粒を多量に含む。 |
| 4 明赤褐色土 | 焼土粒を多量に含む。 |
| 5 黄褐色土 | 粘土粒・焼土粒を含む。 |
| 6 攪乱 | |
| 7 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 8 暗褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| 9 黄橙色土 | ローム主体。焼土粒・炭化物粒を含む。 |
| 10 黄褐色土 | ローム粒を多量に含む。 |
| 11 黒褐色土 | 粘土粒・焼土粒を含む。 |
| 12 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 13 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 14 暗褐色土 | ローム粒・少量の焼土粒を含む。 |
| 15 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 16 暗褐色土 | 灰・ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 17 暗褐色土 | 灰・焼土粒を含む。 |
| 18 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |

第88図 2区40号住居跡竈実測図

竈概要 主軸は、N-25°-W。住居跡北辺やや北よりに位置する。袖部分は、壁内に60cmほど張り出している。燃烧部は床面より10cmほど凹んでおり、横断面はU字形をなしている。煙道部は、北西辺よ

り約63cm外部へ張り出している。

遺物 土師器の坏・甕、須恵器の壺・鉢・蓋・短頸壺、土錘や鉄鏃、棒状礫が埋土中から出土している。また、住居跡北隅では、土師器のほぼ完型の坏が5個



2区40号住居跡

- 1 黒色土 焼土粒を含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 6 褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 7 褐灰色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- 9 黒褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- 10 黄褐色土 ロームブロックを含む。

- 11 褐灰色土 ローム小ブロックを含む。
- 12 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 13 褐灰色土 ローム粒を含む。
- 14 褐灰色土 ローム粒を少量含む。
- 15 灰黄褐色土 黒色土ブロック・ローム粒を含む。

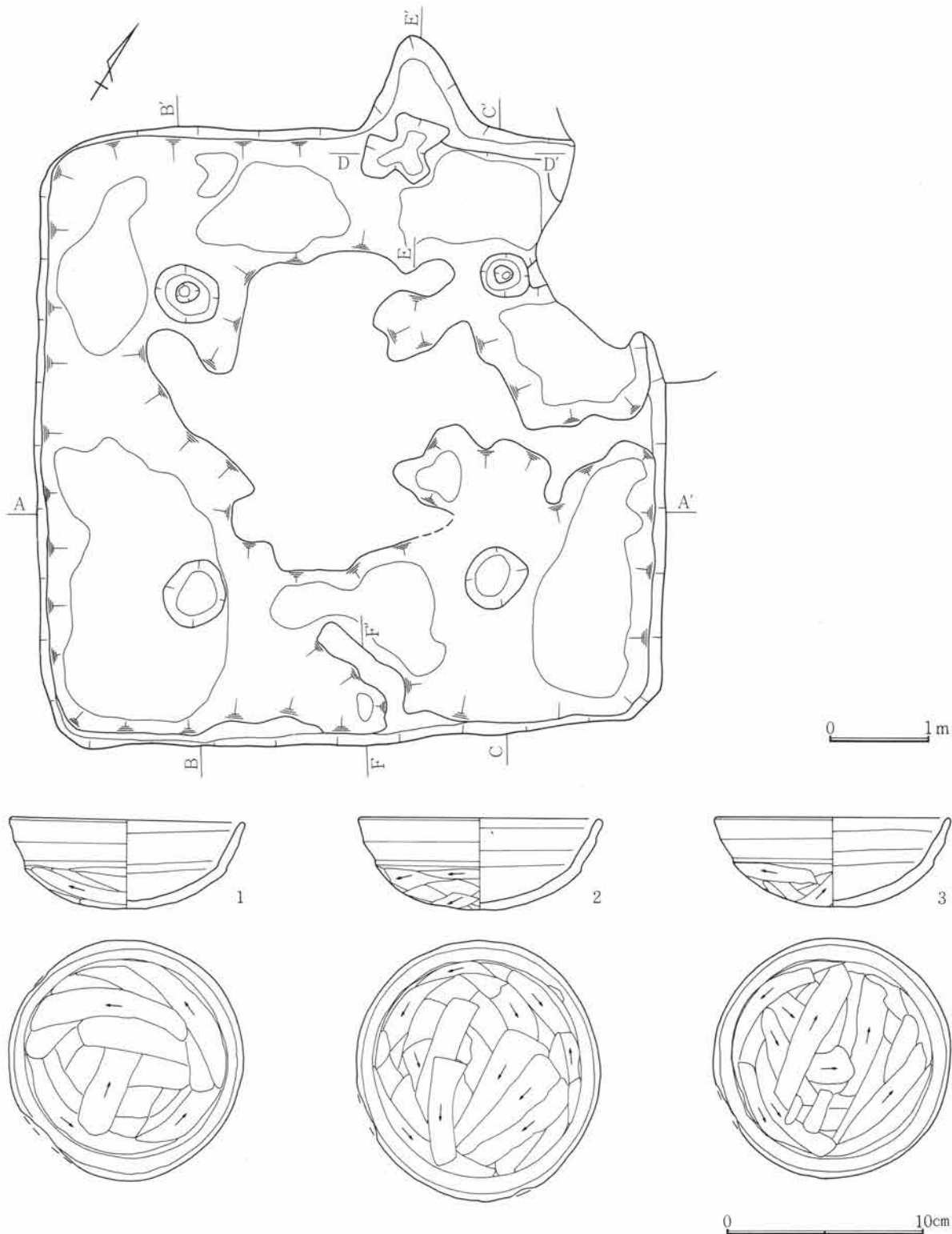
L=39.40m 0 1m

第89図 2区40号住居跡実測図

体、重なった状態で出土した。

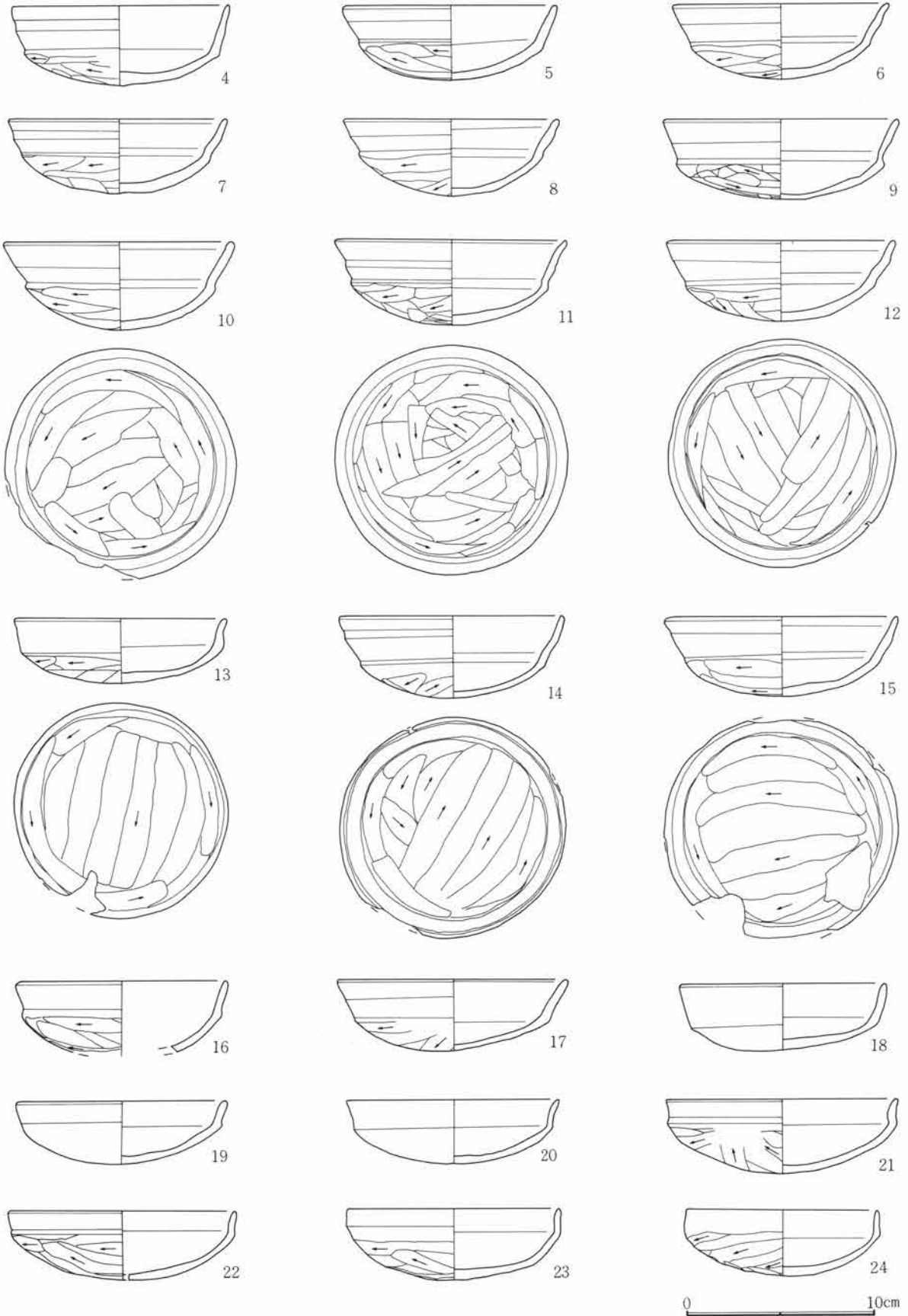
調査所見 住居跡北隅部は、攪乱により削り取られている。また南東辺中央にピットがあり、出入口に関係する可能性も考えられよう。規模は直径50cm深

さ10cmほどである。床面は平坦で全体が張り床であるが、あまり硬くない。掘り方は、中央部が小高く、周辺部が低く掘り込まれており、15cmほどの起伏を持っていた。

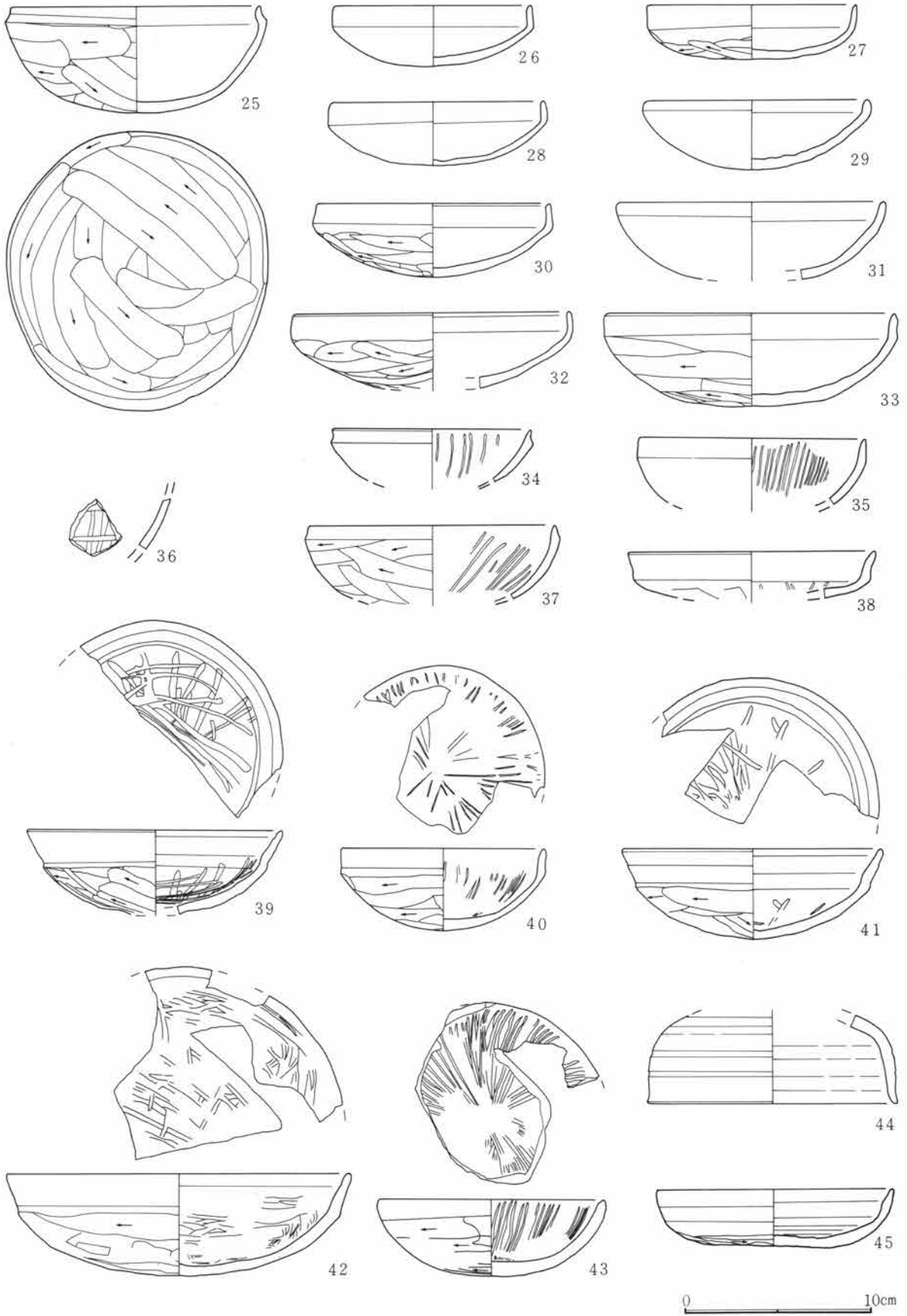


第90図 2区40号住居跡掘り方及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡

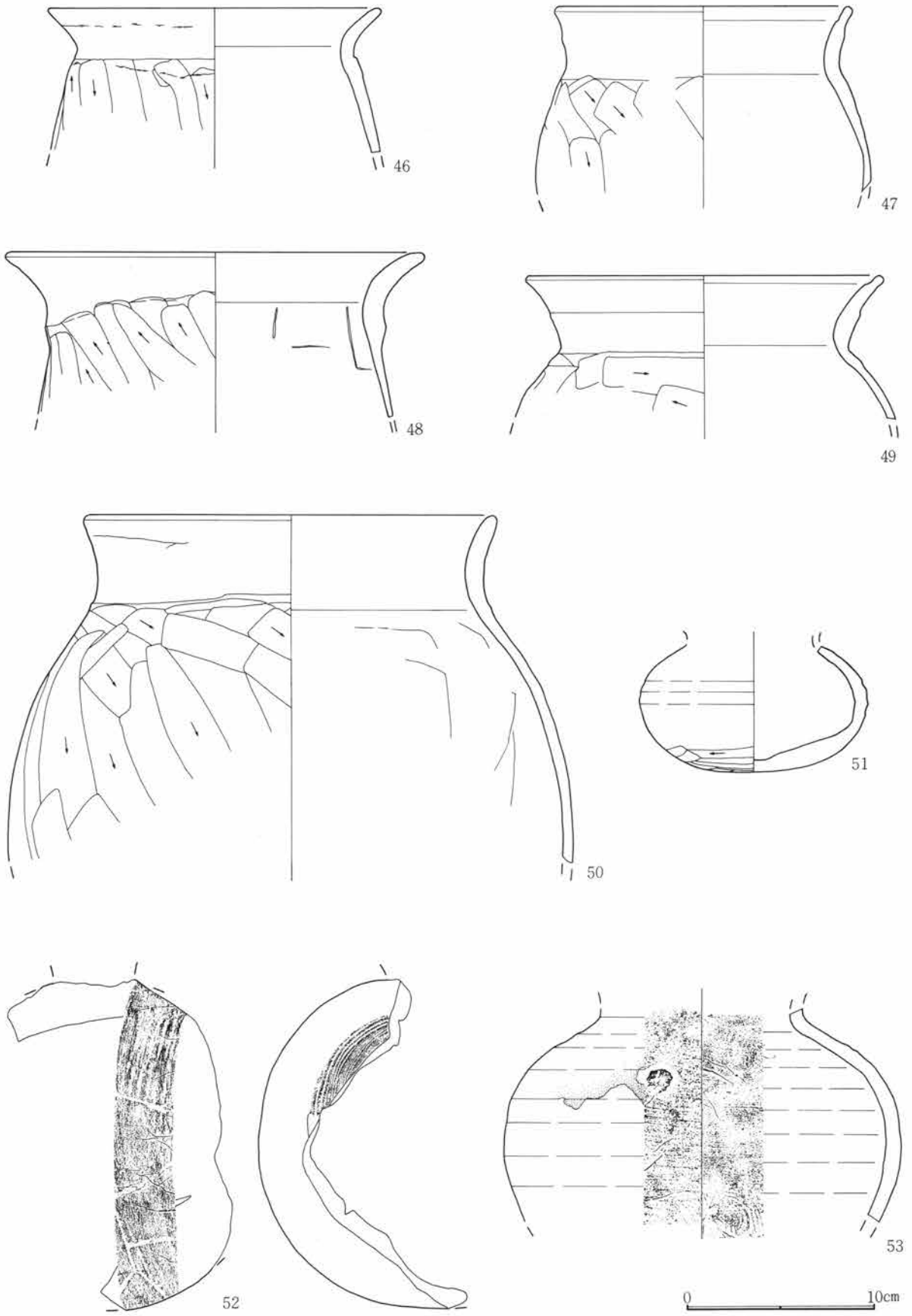


第91図 2区40号住居跡出土遺物実測図(2)

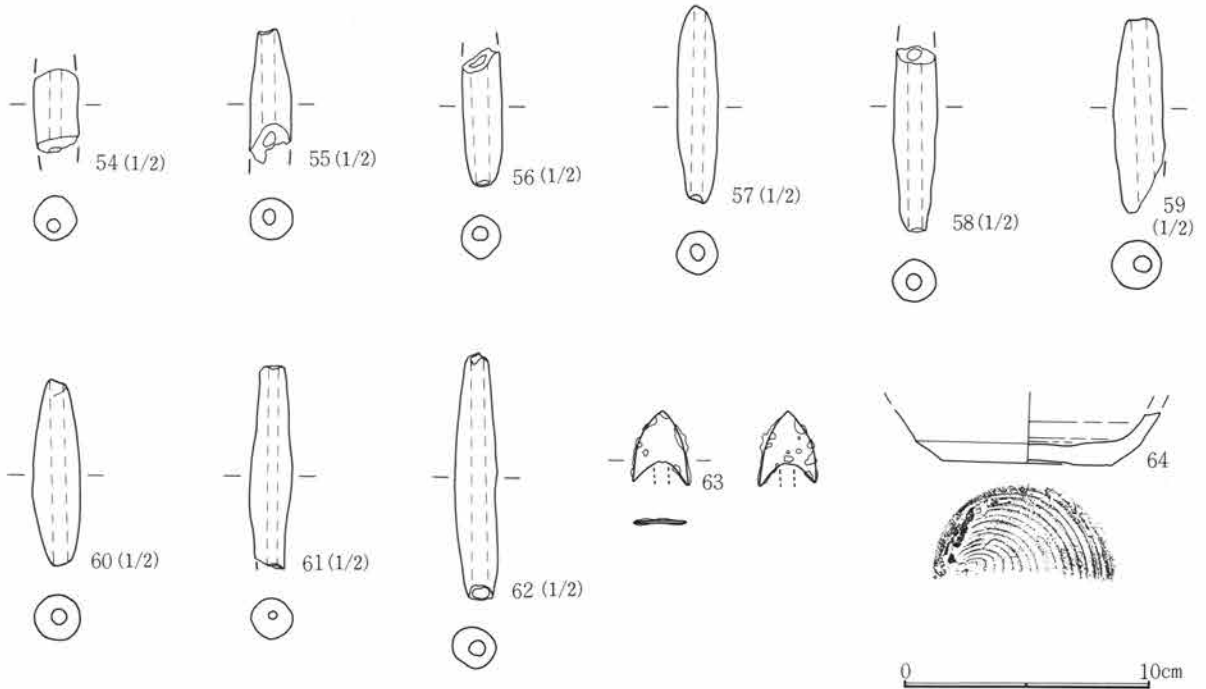


第92図 2区40号住居跡出土遺物実測図(3)

第2節 竪穴住居跡



第93図 2区40号住居跡出土遺物実測図(4)



第94図 2区40号住居跡出土遺物実測図(5)

2区41号住居跡

位置 Q・R-13・14

主軸方位 N-83° - E

平面形状 不明 残存深度 5cm

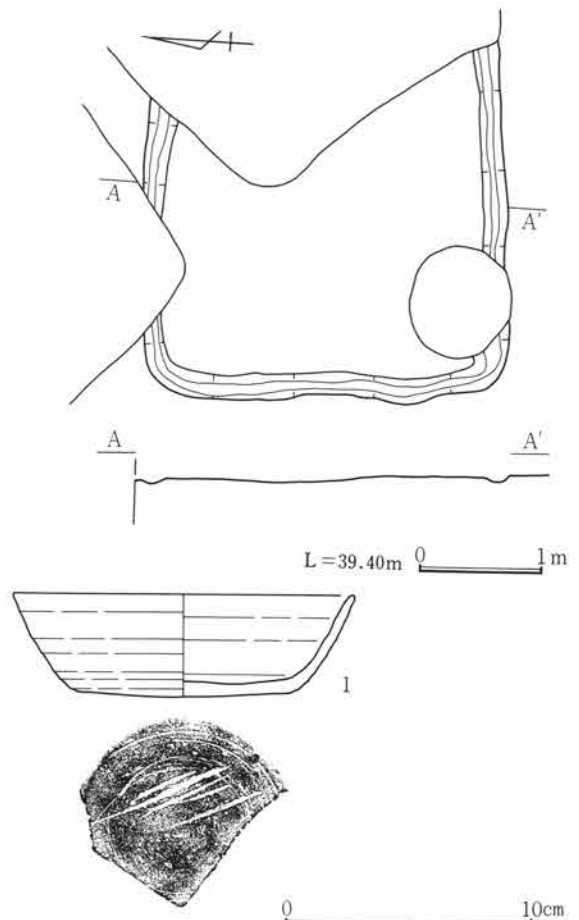
柱穴 なし 周溝 貯蔵穴部分を除き、壁に沿って検出範囲全体で検出された。規模は、幅15cm深さ5cmである。 貯蔵穴 不明

竈位置 検出されていないが、住居跡の残存状況から、住居跡東辺に位置していた可能性が高いと思われる。

遺物 土師器・須恵器の破片が、埋土中から少量出土している。

調査所見 攪乱によって、住居跡北東半分ほどが、削り取られている。また、残存状況の良好な所でも、確認面から床面まで5cmほどであり、壁面はほとんど確認できなかった。

住居跡南西隅では、直径80cm深さ50cmほどの土坑が検出された。当初貯蔵穴を想定したが、竈の脇ではないこと、周溝を切っているところから、後世の遺構の重複と考えられる。



第95図 2区41号住居跡及び出土遺物実測図

2区42号住居跡 (図版33)

位置 2A・2B-20

主軸方位 N-19° -W

平面形状 不明 規模 3.38×-m

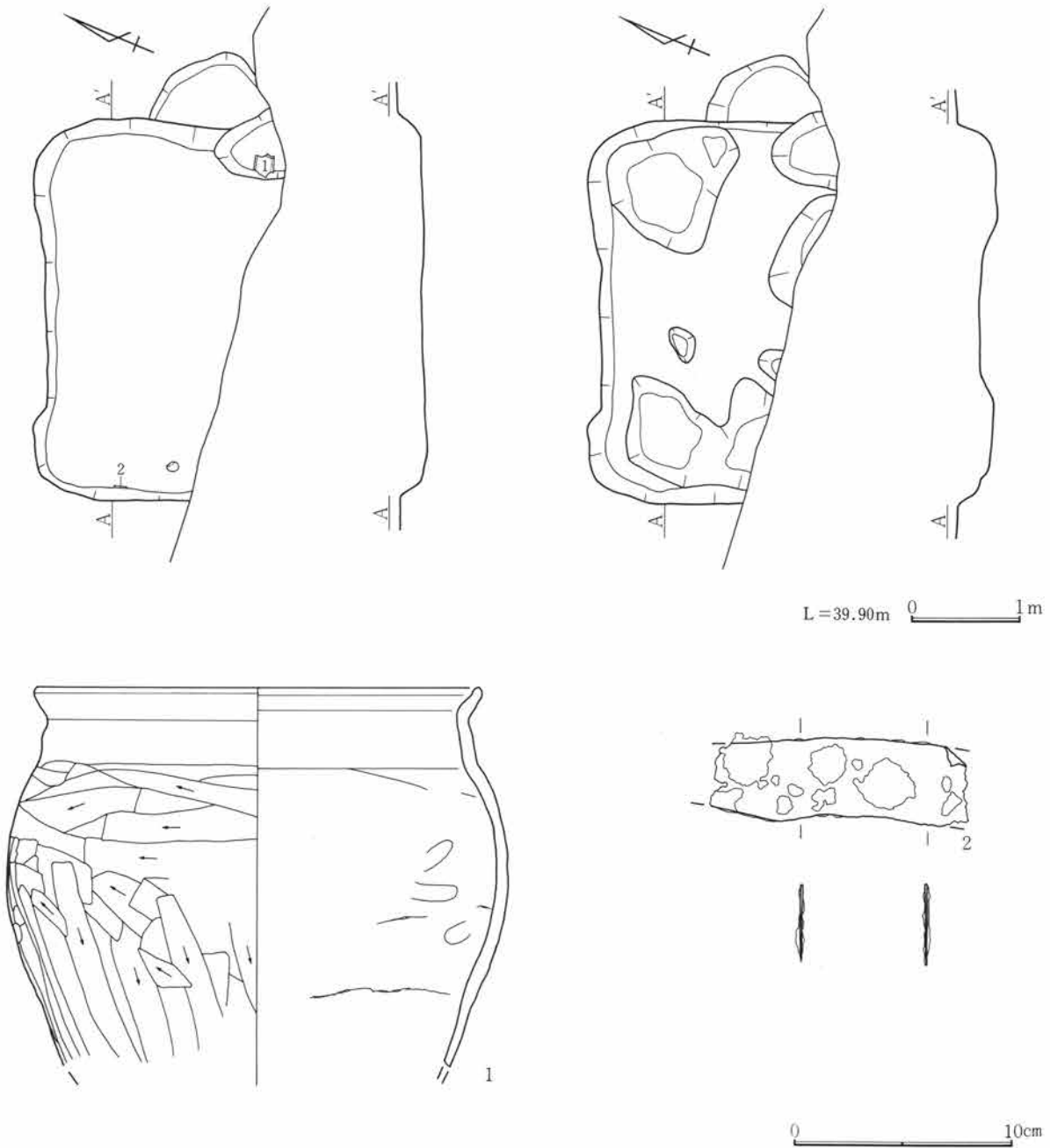
残存深度 20cm 柱穴 なし 周溝 なし

貯蔵穴 不明 竈位置 不明

遺物 土師器の甕の破片が住居跡東辺南寄りの落ち込みから、また鉄製の鎌が住居跡西辺の床面から出

土している。埋土を含めた遺物量は少ない。

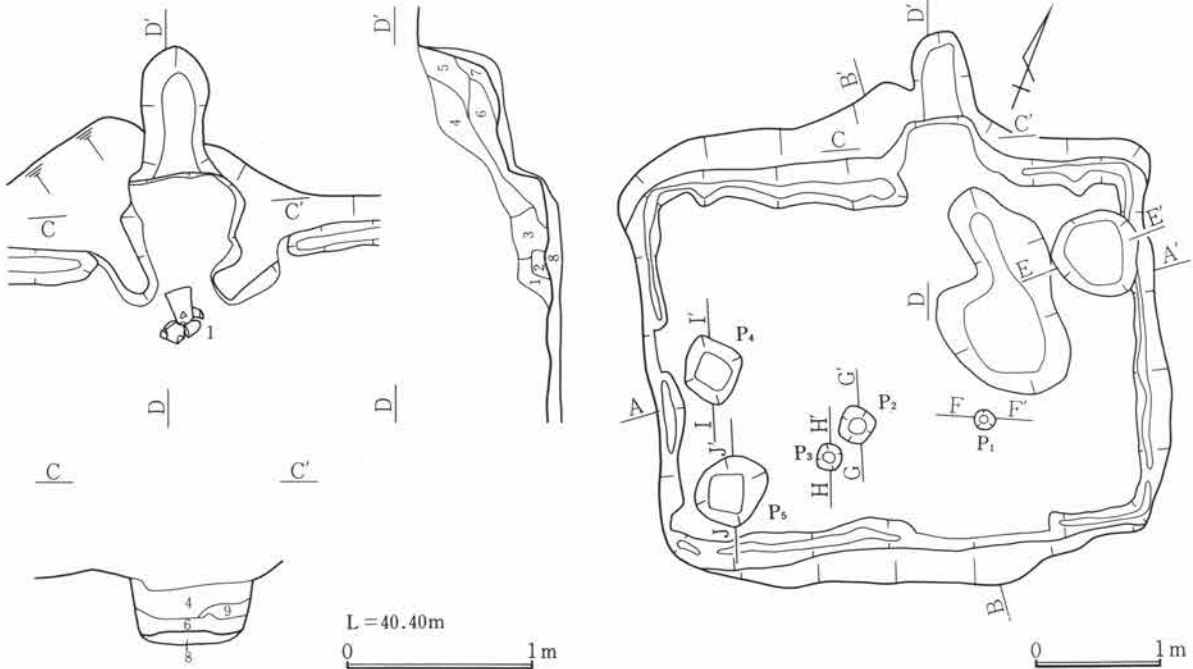
調査所見 本住居跡は攪乱により、南半分ほどが削り取られている。住居跡東辺南寄りの落ち込みで、焼土粒・粘土粒が検出されており、竈跡であった可能性も考えられる。床面は全体的に締まりがない。掘り方は、深さ10cmほどの起伏を持っていた。



第96図 2区42号住居跡及び出土遺物実測図

調査所見 貯蔵穴の他に、性格不明のピットが5個検出された。ピット各々の規模は、P1が直径18cm深さ8cm、P2が直径30cm深さ40cm、P3が直径25cm深さ35cm、P4が直径50cm深さ18cm、P5が直径55cm深さ20cmである。また住居跡床面は、硬く締まっていた。住居跡中央部から出土した鍛冶関係の遺物は、

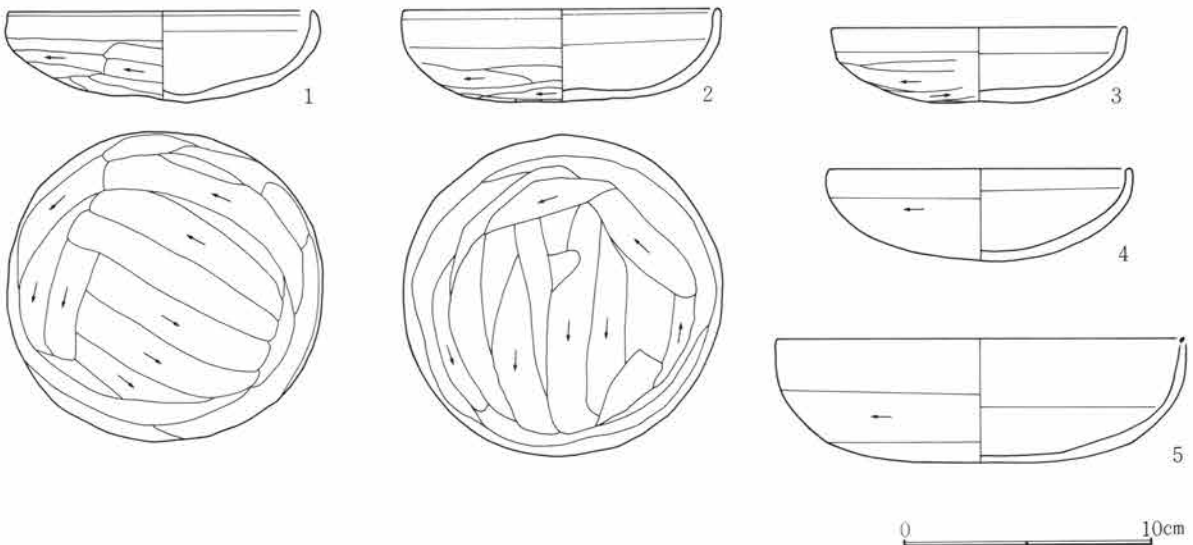
当初本住居跡に伴うものと想定されたが、焼土と炭化物が土坑状に堆積していることが確認されたため、これは住居廃棄後に、新たに掘り込まれた、鍛冶に伴う廃棄坑と判断された。尚、この坑の時期については、本住居跡時期を上限とする以外に判断材料がない。



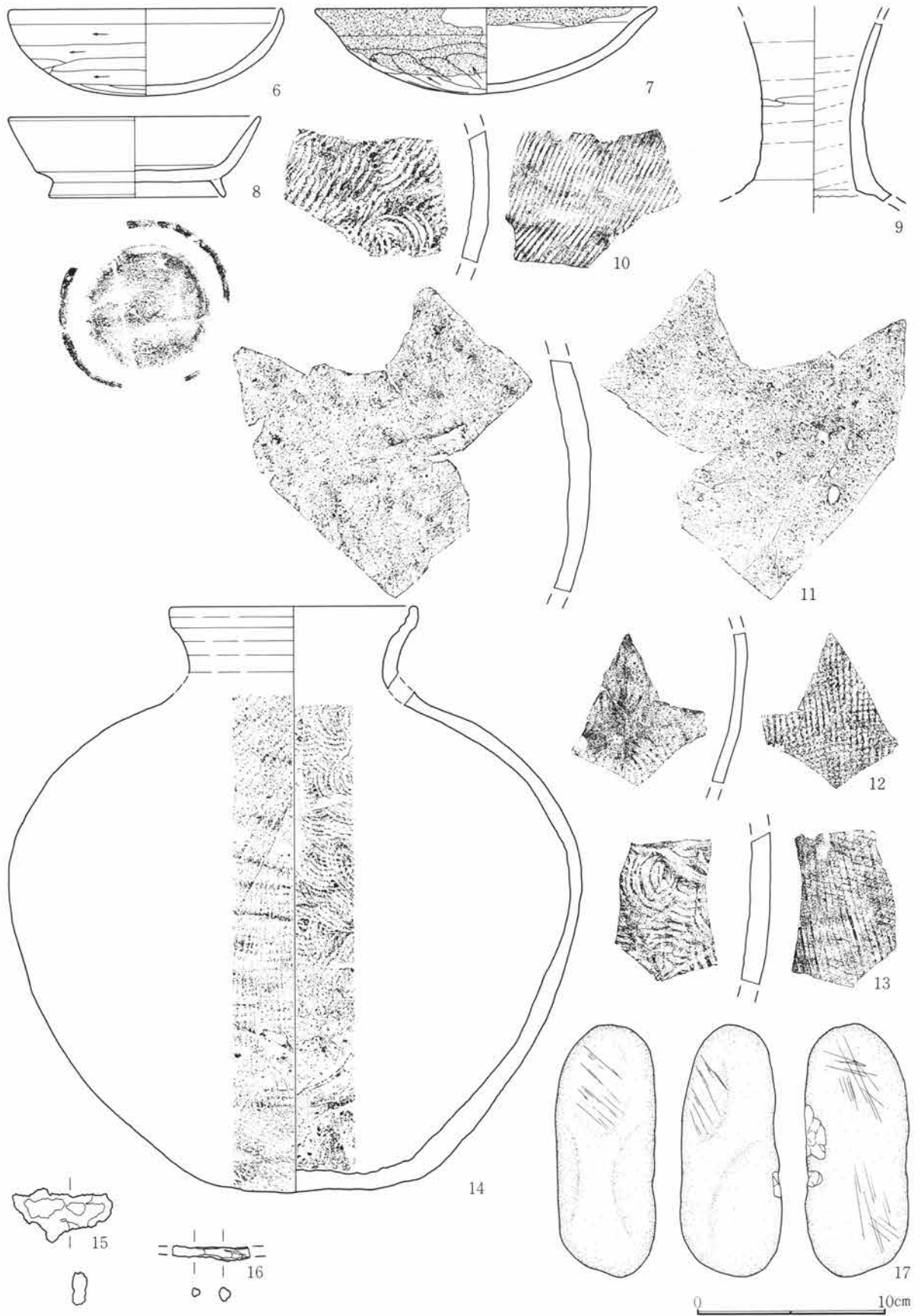
2区44号住居跡 竈

- 1 褐色土 粘土粒・炭化物粒・焼土粒を含む。
- 2 明赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。
- 3 褐色土 粘土粒・ローム粒・焼土粒を含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを含む。

- 5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 7 黒褐色土 焼土ブロックを含む。
- 8 黄褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 9 黒褐色土 焼土粒を含む。



第98図 2区44号住居跡竈・掘り方及び出土遺物実測図(1)



第99図 2区44号住居跡出土遺物実測図(2)

1区46号住居跡 (図版34・35)

位置 2M-9 主軸方位 N-16° - E

平面形状 隅丸長方形 規模 3.4×2.9m

残存深度 50cm 柱穴 なし

周溝 竈・貯蔵穴部分を除いて、住居跡を全周する。

規模は、幅10cm深さ5cmほどである。

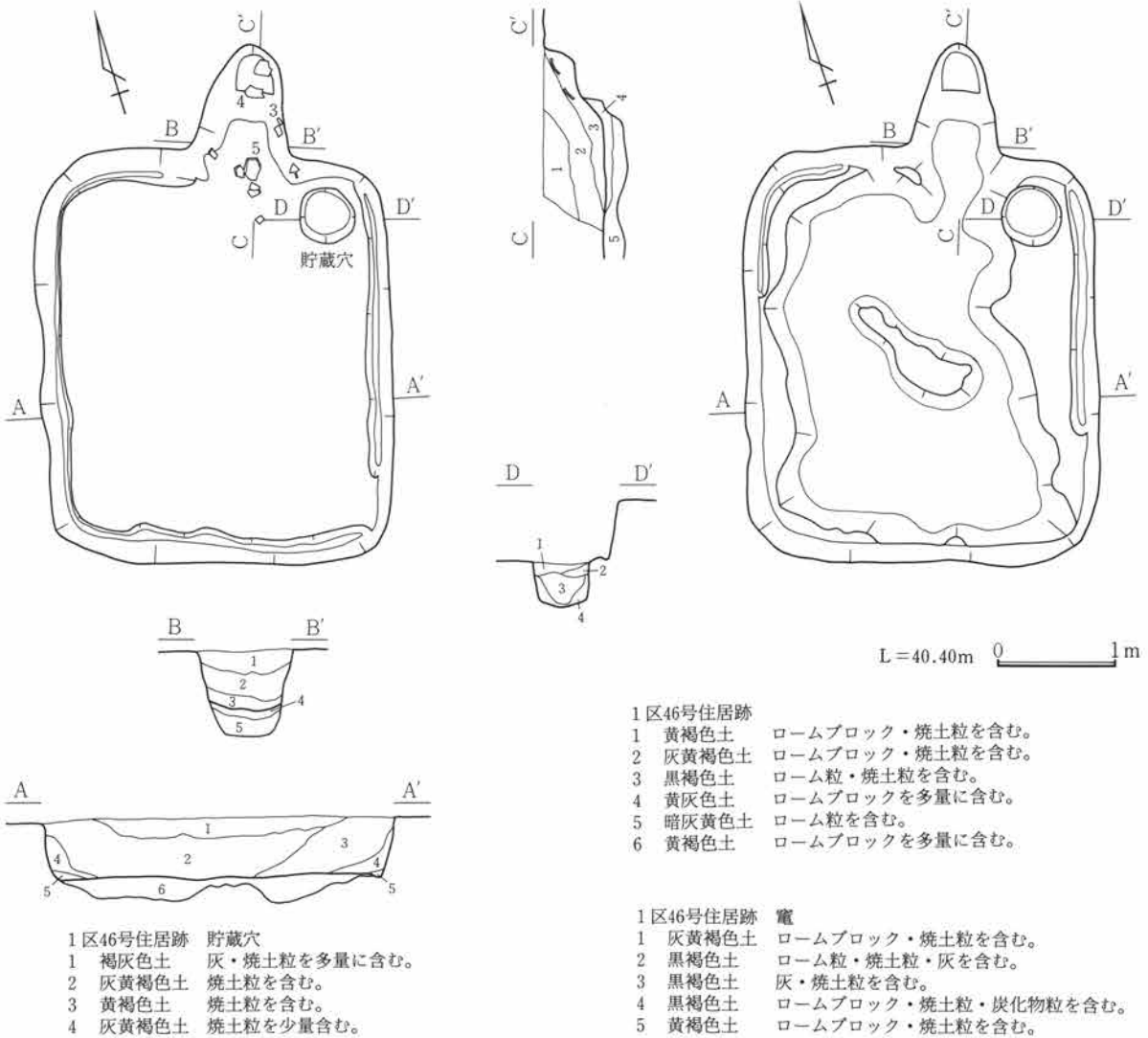
貯蔵穴 住居跡北東隅、竈右側で検出された。規模は、直径50cm深さ36cmである。壁面は、ほぼ垂直に底部まで掘り込まれる。

竈概要 主軸は、N-17° - E。住居跡北辺やや東よりに位置し、竪穴外の地山を掘り込んで構築している。燃焼部は方形に近く、住居跡内部に37cmほど

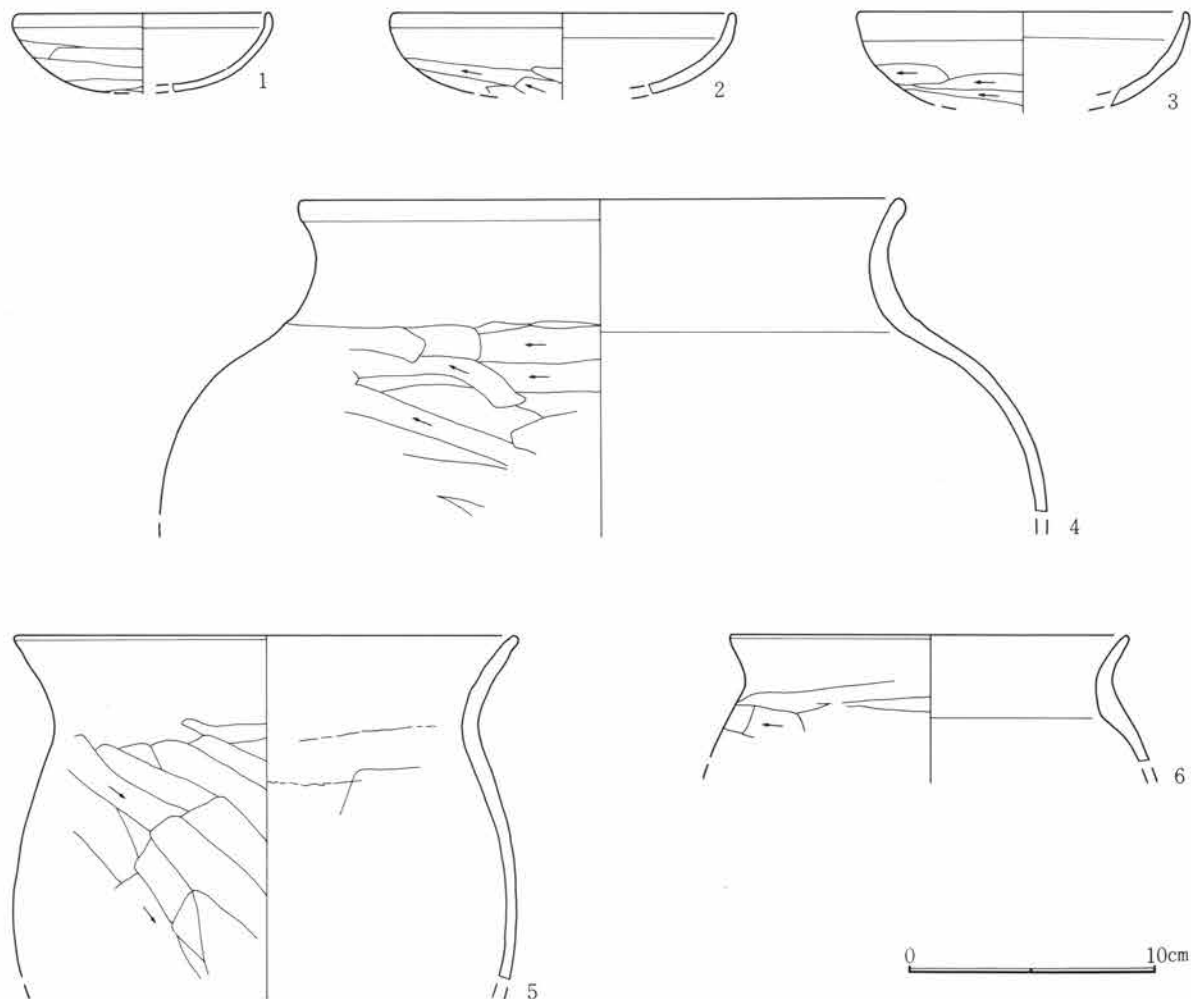
ローム地山を掘り残して、袖部分の基礎としている。また、横断面はU字形を呈する。煙道部は、燃焼部から一段高くなっており、住居跡外部に95cmほど張り出している。

遺物 土師器の坏・甕とわずかに須恵器の破片が出土している。

調査所見 本住居跡は、壁面は垂直に立ち上がり、床面も良好な状態で検出できた。掘り方は、住居跡中央部が小高く残り、その周辺が凹んでおり、深さ10cmほどの起伏を持っていた。



第100図 1区46号住居跡及び掘り方実測図



第101図 1区46号住居跡出土遺物実測図

1区47号住居跡 (図版35・36)

位置 2L・2M-10・11

主軸方位 N-126° -W 平面形状 隅丸長方形

規模 4.7×5.1m 残存深度 33cm

柱穴 柱穴1は直径24cm深さ55cm、柱穴2は直径43cm深さ50cm、柱穴3は直径30cm深さ65cm、柱穴4は直径25cm深さ65cmである。柱穴間の寸法は、2.4mほどである。また、住居跡南東辺中央付近のピット(K-K')は、出入口に伴う柱穴であった可能性もある。規模は直径15cm深さ26cmである。

周溝 竈部分を除いて、幅の広い周溝が住居跡を全周する。規模は、幅40cm深さ10cmほどである。

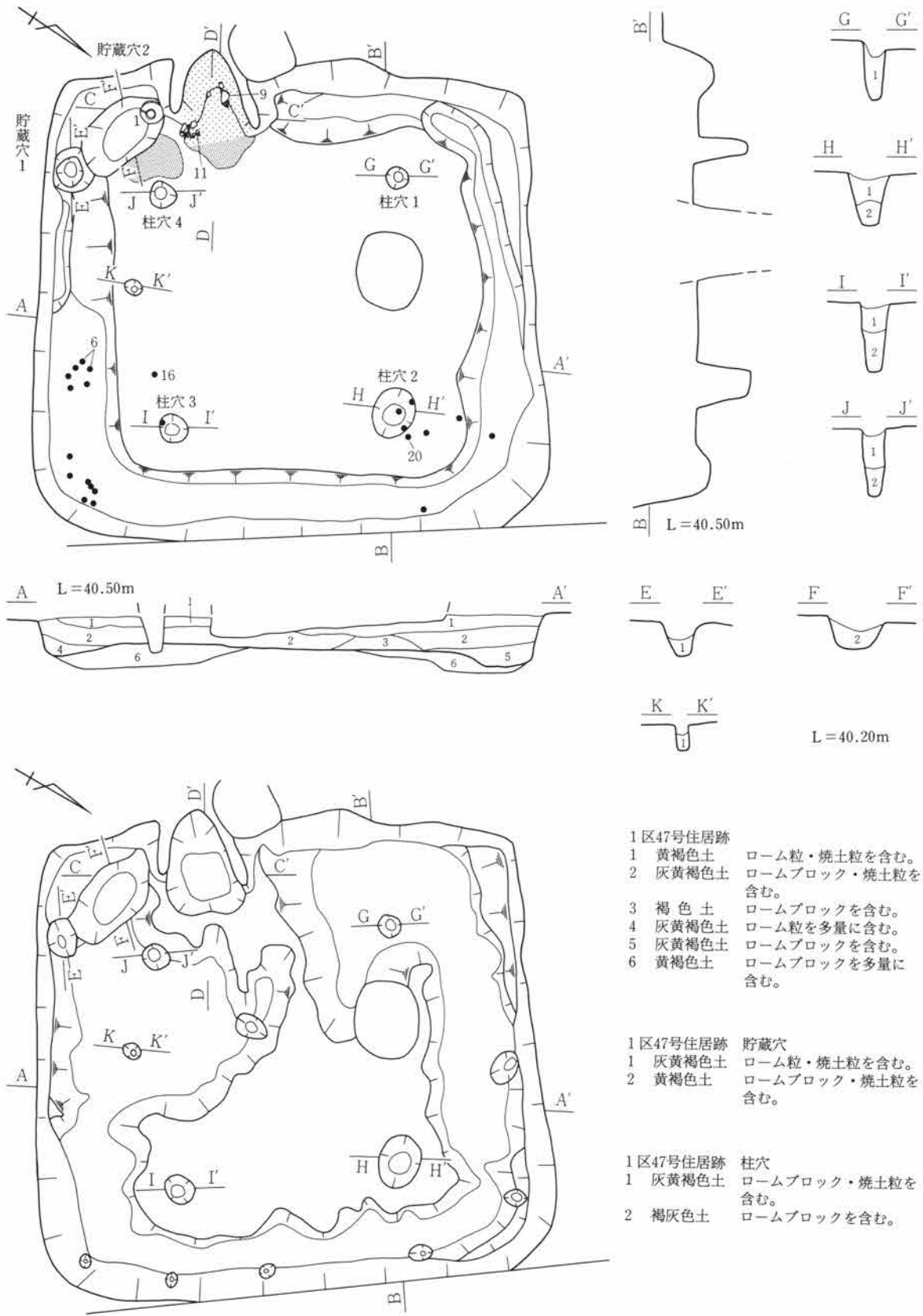
貯蔵穴 住居跡南隅、竈左側で2基検出された。規模は、貯蔵穴1は円形で直径40cm深さ35cm、貯蔵穴2は楕円形で長軸97cm短軸56cm深さ35cmである。

電概要 主軸は、N-130° -E。住居跡南西辺やや南寄りに位置し、竈穴外の地山を若干掘り込んで構築している。燃焼部平面形は三角形に近く、住居跡内部に40cmほどローム地山を掘り残して、袖部分の基礎としている。また、壁面は赤く焼けており、横断面はU字形を呈する。焚口では灰が検出された。

遺物 土師器の坏・甕、須恵器の甕、軽石・棒状礫等が出土している。特に土師器の甕は、竈周辺から多量に出土した。

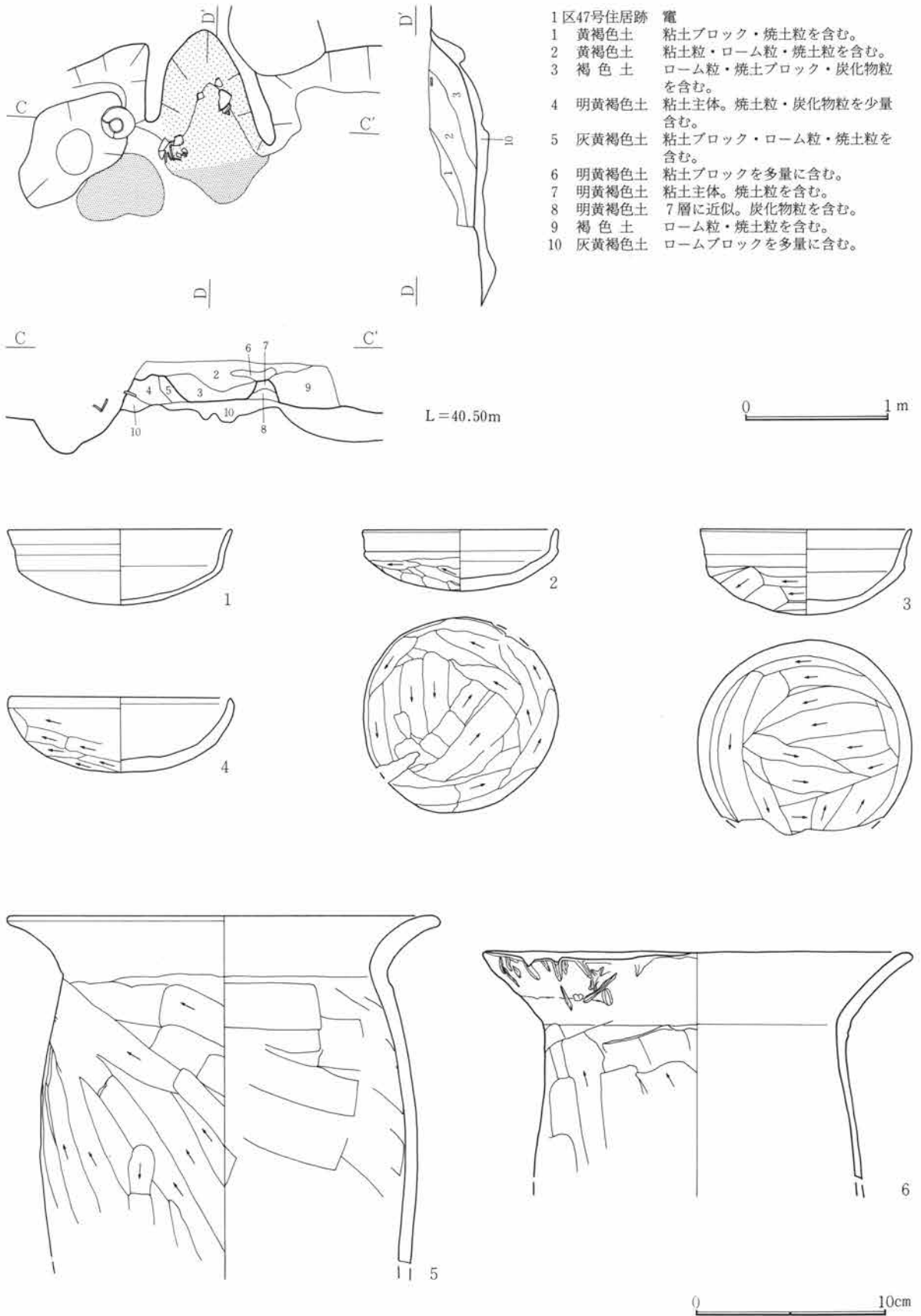
調査所見 床面は、硬く締まっていた。北東辺でほぼ等間隔に並ぶピットが検出された。住居壁の土止め関係の施設跡とは考えられないだろうか。掘り方は、住居跡中央部が小高く残り、周辺部が窪むタイプで、深さ25cmほどの起伏を持っている。

第2節 竪穴住居跡

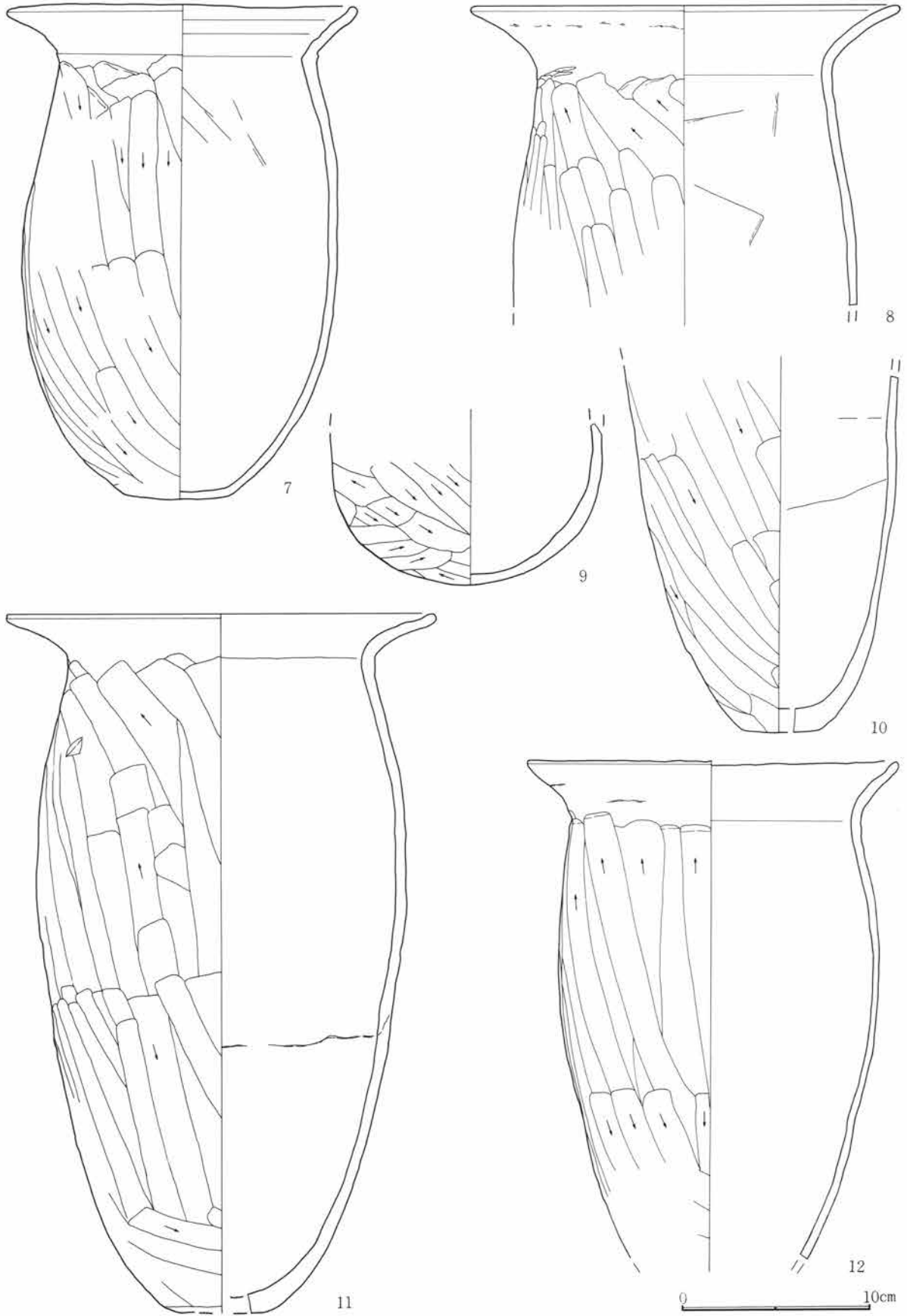


第102図 1区47号住居跡実測図

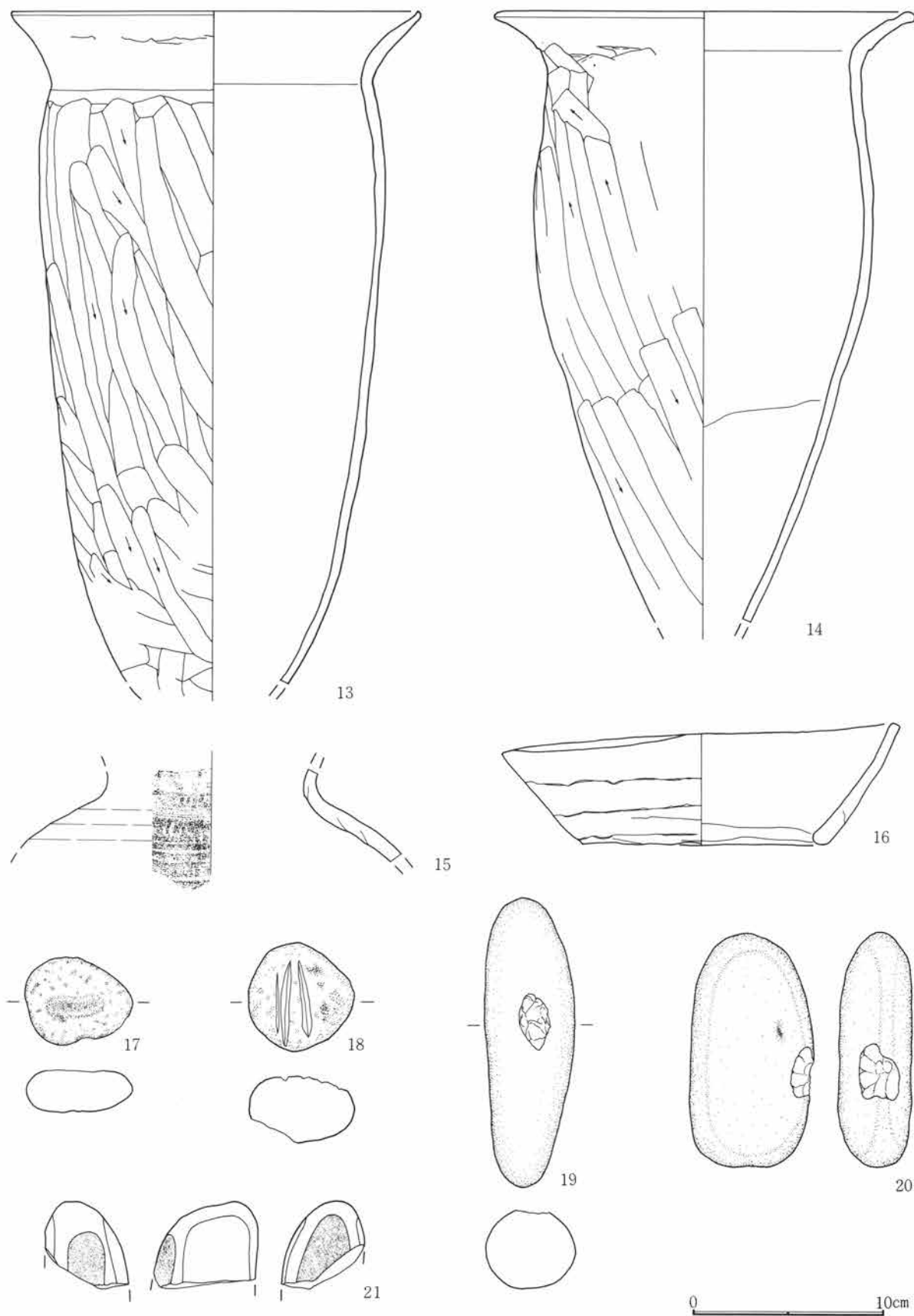
第5章 遺構と遺物



第103図 1区47号住居跡竈及び出土遺物実測図(1)



第104図 1区47号住居跡出土遺物実測図(2)



第105図 1区47号住居跡出土遺物実測図(3)

1区48号住居跡 (図版36・37)

位置 2J・2K-9 主軸方位 N-73° -W

平面形状 不明 規模 不明

残存深度 70cm 柱穴 断面でわずかに確認できた。規模は、径28cm深さ30cm程であるが、もっと大きくなる可能性がある。

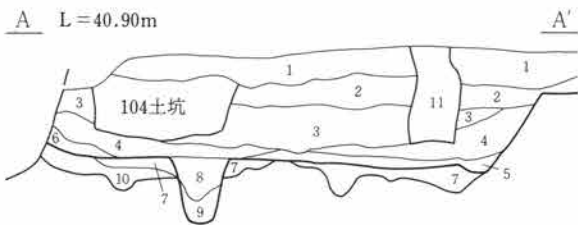
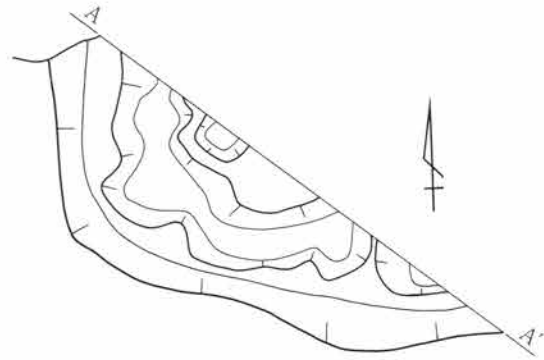
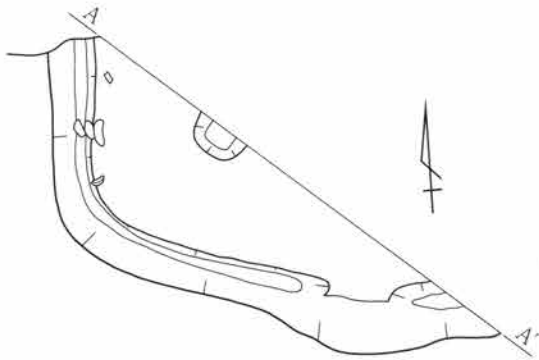
周溝 確認できた範囲全域で検出された。規模は、幅12cm深さ5cmほどである。

貯蔵穴 不明 竈位置 不明

遺物 埋土から土師器の坏・甕、土錘・棒状礫が出土

している。また、破片であるが須恵器もわずかに出土した。

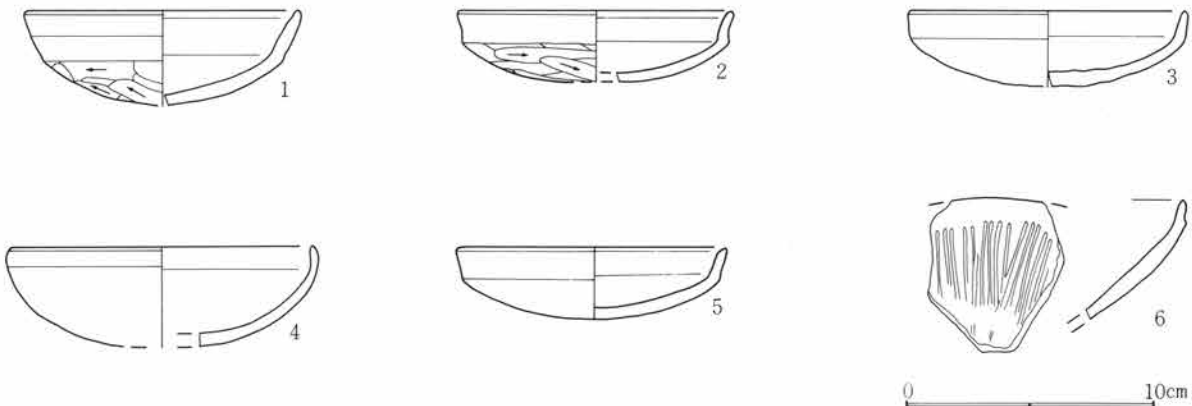
調査所見 本住居跡は、調査区外に半分以上があり、全体を調査することはできなかった。また、住居跡北西部は、攪乱によって削り取られている。西辺のちょうど調査区外との境で、覆土に焼土粒が多くなり、また土層もやや乱れることから、竈が西辺にあった可能性が高い。床面は、硬く締まっていた。掘り方は、深さ15cm程の起伏を持っていた。



1区48号住居跡

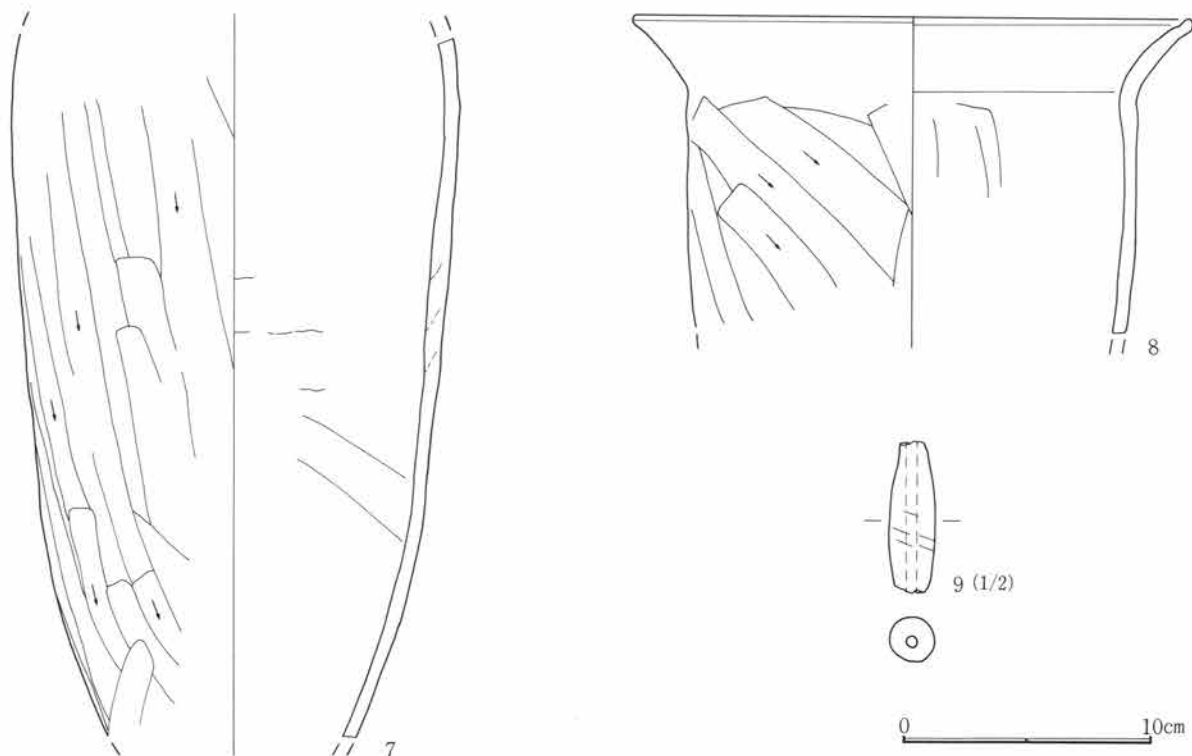
- | | |
|----------|---------------------|
| 1 灰黄褐色土 | 表土。As-Aを含む。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 3 黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 4 褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 5 黄褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |
| 6 黄褐色土 | 粘土ブロック・ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 7 黄褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |
| 8 黄褐色土 | 焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 9 灰黄褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 10 灰黄褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |
| 11 攪乱 | |

0 1 m



0 10cm

第106図 1区48号住居跡及び出土遺物実測図(1)



第107図 1区48号住居跡出土遺物実測図(2)

1区49号住居跡 (図版37・38)

位置 2I・2J-12・13

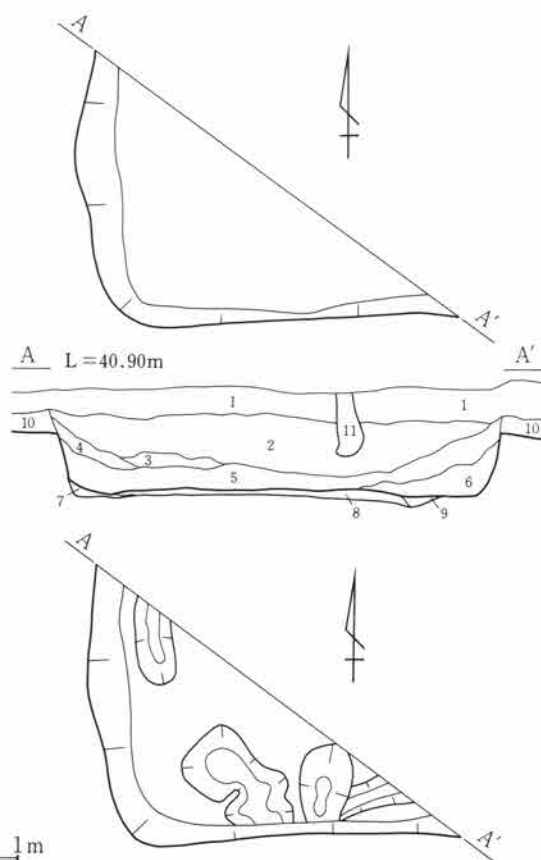
主軸方位 N-1°-W 平面形状 不明

規模 不明 残存深度 50cm 柱穴 不明

周溝 不明 貯蔵穴 不明 竈位置 不明

遺物 埋土中から土師器の坏・甕が出土している。また、須恵器の破片も少量出土した。

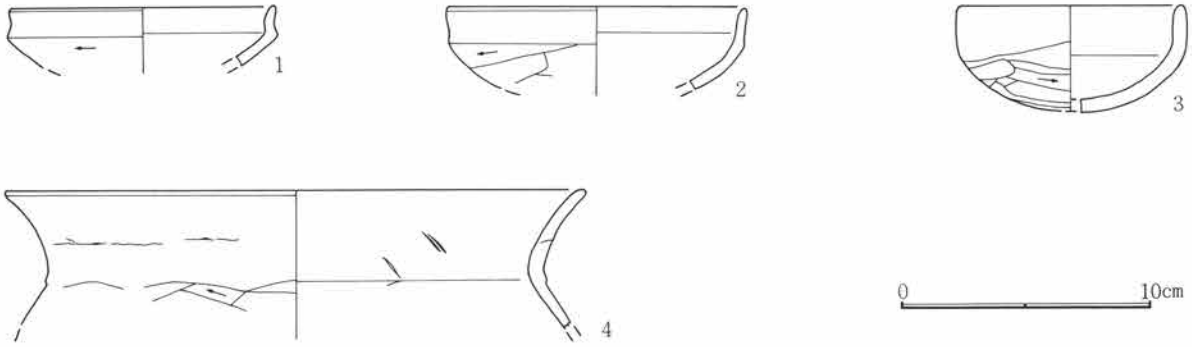
調査所見 住居跡北東部が調査区外にあり、住居跡全体は調査できなかった。床面は、硬く締まっていた。掘り方は、深さ10cmほどの起伏を持っていた。



- | | |
|----------|-----------------|
| 1区49号住居跡 | |
| 1 暗褐色土 | 表土。As-Aを含む。 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒を少量含む。 |
| 5 黒褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 6 暗褐色土 | ローム小ブロックを多量に含む。 |
| 7 褐色土 | ローム粒を多量に含む。 |
| 8 黄褐色土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 9 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 10 暗褐色土 | 粘性弱い。As-Bを含む。 |
| 11 攪乱 | |

0 1m

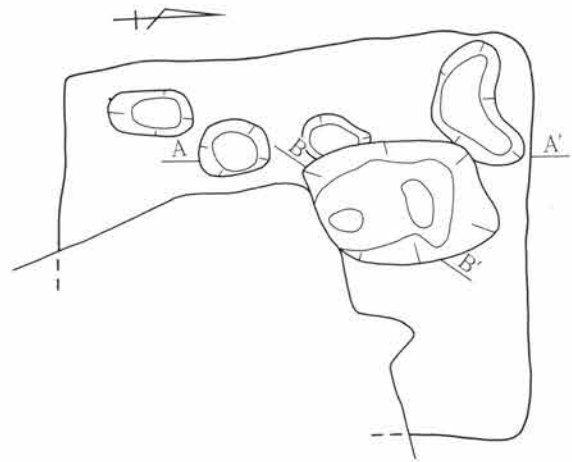
第108図 1区49号住居跡実測図



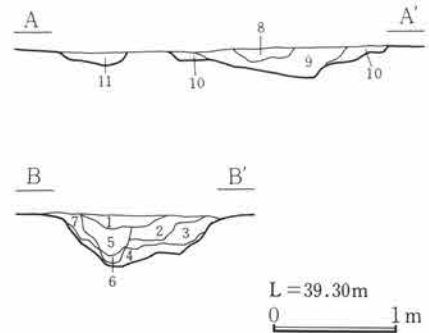
第109図 1区49号住居跡出土遺物実測図

2区51号住居跡

位置 P-12・13 主軸方位 N-1° -W
 平面形状 不明 規模 3.6×3.1m
 残存深度 10cm 柱穴 不明 周溝 不明
 貯蔵穴 不明 竈位置 不明 遺物 埋土中から土師器の破片が、少量出土している。
 調査所見 2区38号住居跡と重複しており、同住居跡によって東南部を削り取られている。床面は確認できず、掘り方を確認面から、深さ10cmほど確認したのみであった。



- | | |
|-------------|----------------|
| 2区51号住居跡 床下 | |
| 1 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 2 黒褐色土 | やや粘質。 |
| 3 黒褐色土 | 粘質。 |
| 4 褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 5 黒色土 | やや粘質。 |
| 6 黒褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 7 黒褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |
| 8 黒褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 9 暗褐色土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 10 褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 11 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |



第110図 2区51号住居跡実測図

2区52号住居跡 (図版38・39)

位置 2C・2D-17
 主軸方位 N-90° -E
 平面形状 隅丸方形 規模 4.5×4.3m
 残存深度 41cm 柱穴 なし
 周溝 竈右側から住居跡南東隅を除いて、住居跡を全周する。また、西辺で二重になっている部分がある。

規模は、幅15cm深さ10cmほどである。
 貯蔵穴 住居跡南東隅で検出された。規模は、不整形な半円形で、長軸85cm短軸65cmを測る。
 竈概要 主軸は、N-79° -E。住居跡東辺中央に位置し、竪穴外の地山を、掘り込んで構築している。燃烧部は三角形に近く、火床面は掘り鉢状の掘り方

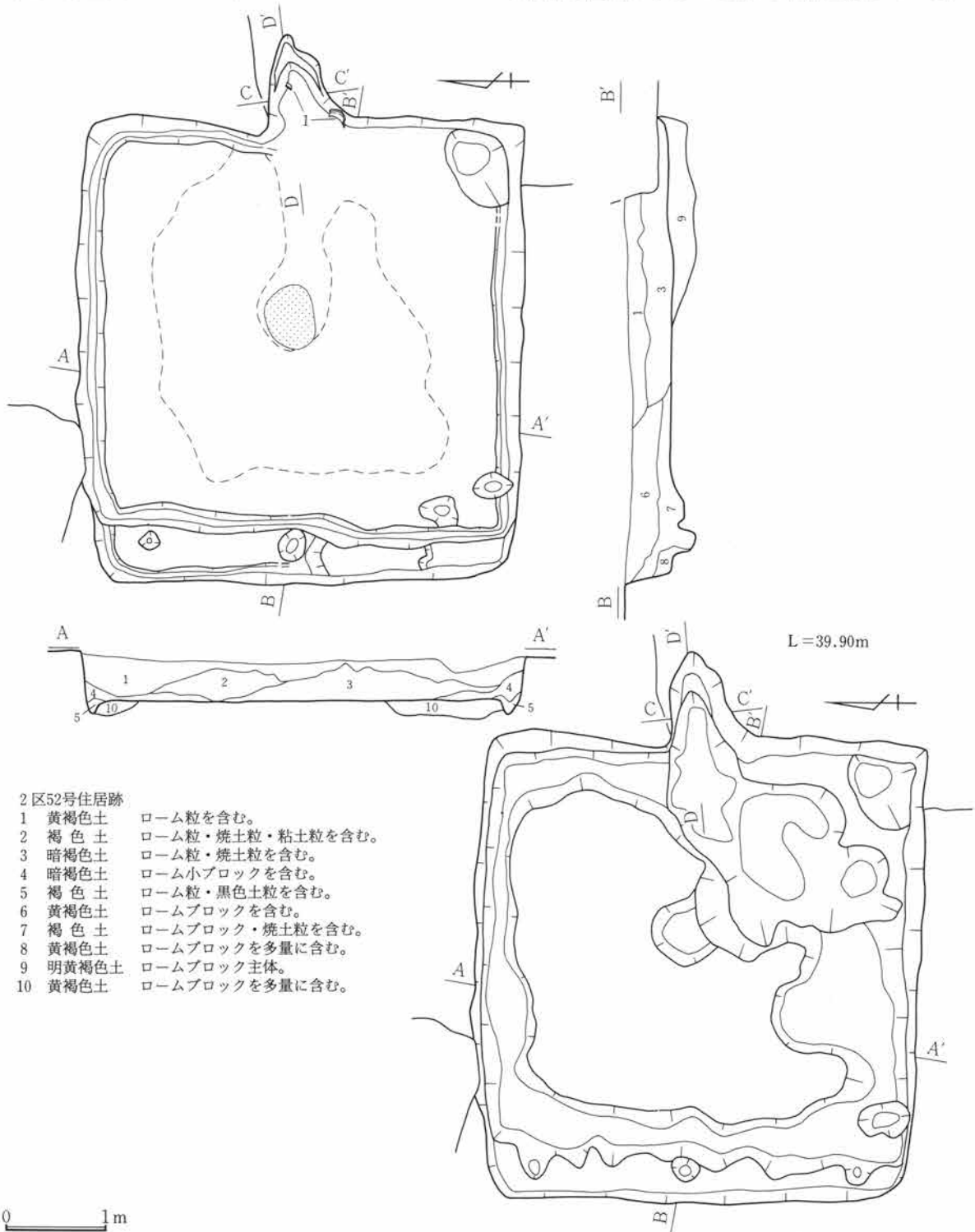
第5章 遺構と遺物

に埋土を施して整え、袖部分はローム地山を基礎としている。また、壁面は赤く焼けており、横断面はU字形を呈する。

遺物 土師器の甕、土錘1点が出土した。須恵器の破片も少量出土している。

調査所見 本住居跡は、東南部が2区27号住居跡と重複している。そのため、竈の残存状態は不良であった。

住居跡西側は、周溝が二重になっており、その内側の周溝は西壁から30~40cmほど内部を通っている。

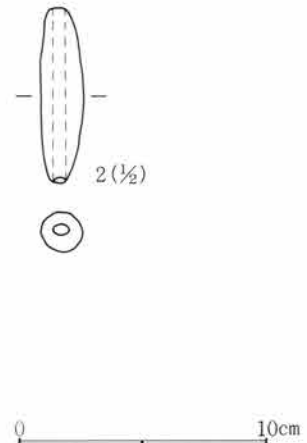
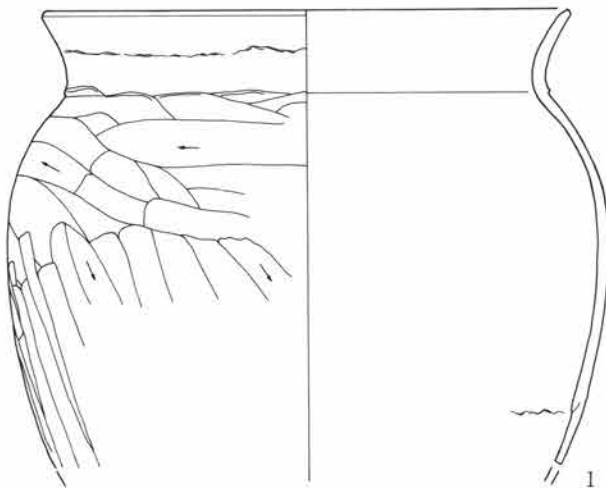
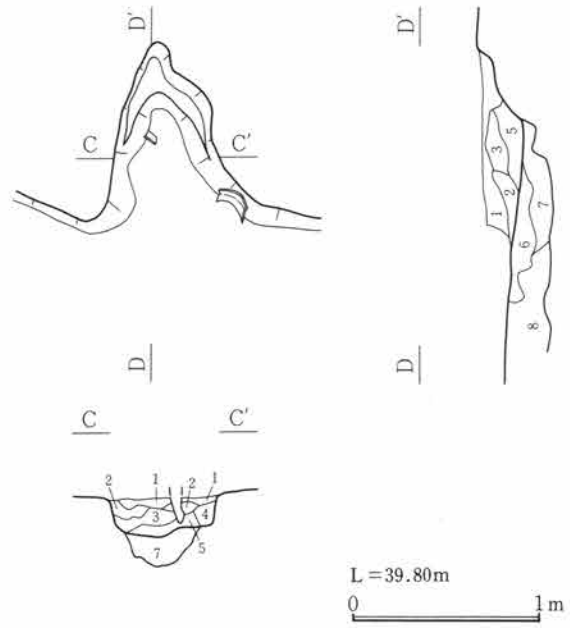


第111図 2区52号住居跡及び掘り方実測図

その周溝の中間部分は、床面より10~20cmほどローム盛土によって小高く段状になっていた。これは、西方に拡張を行った結果と思われる。

また、西壁下のピットは、ほぼ同距離(1.4m)で掘り込まれており、規模も大差がなく、壁柱穴あるいは壁材の支柱穴と考えられる。

- 2区52号住居跡 竈
- | | | |
|---|-------|------------------------|
| 1 | 黄褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 2 | 黒褐色土 | 粘土粒・焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 3 | 黒褐色土 | 焼土粒・粘土粒を多量に含む。 |
| 4 | 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 5 | 赤褐色土 | 焼土粒・粘土粒を多量に含む。 |
| 6 | 灰黄褐色土 | 灰・ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 7 | 黄褐色土 | 焼土粒・粘土粒・多量のロームブロックを含む。 |
| 8 | 黄褐色土 | ロームブロック主体。 |



第112図 2区52号住居跡竈及び出土遺物実測図

2区53号住居跡 (図版39)

位置 L・M-9・10

主軸方位 N-25° -W

平面形状 不明 規模 不明

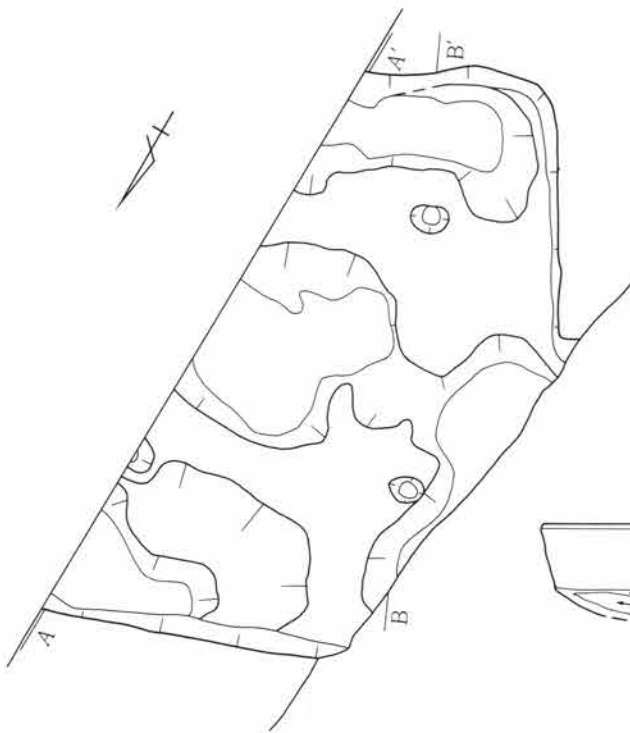
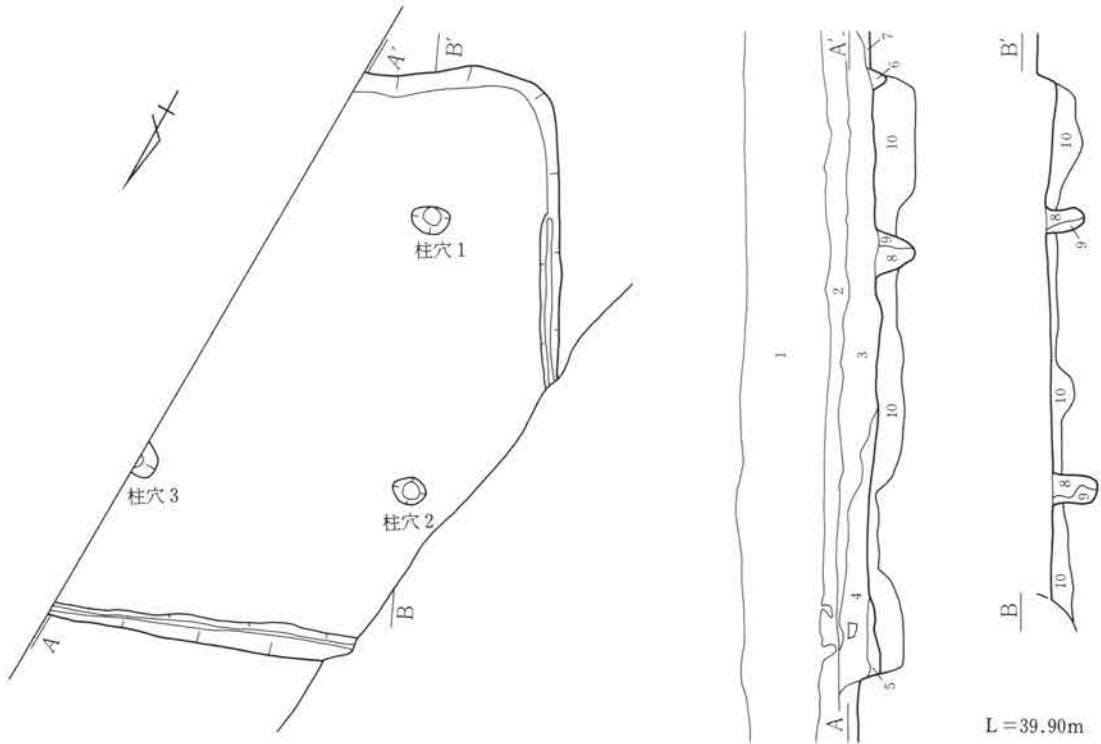
残存深度 30cm 柱穴 柱穴跡は3カ所で、確認できた。柱穴1は直径20cm深さ30cm、柱穴2は直径26cm深さ36cm、柱穴3は直径38cm深さ33cmである。柱穴間の寸法は、ほぼ2.2mである。

周溝 住居跡南隅の一部分を除いて、周溝が検出された。規模は、幅10cm深さ7cmほどである。

貯蔵穴 不明 竈位置 不明

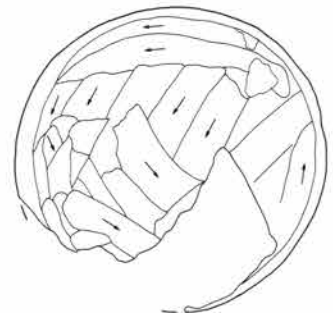
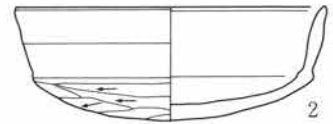
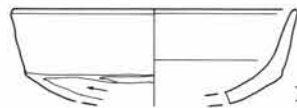
遺物 埋土中から土師器の坏が出土した。破片を含めて、全体の遺物量は少ない。

調査所見 本住居跡は、西隅を6・7号溝によって、削り取られている。また、住居跡東部は調査区外となるため、掘削できなかった。床面は締まりが弱く、湿気のある粘質土を張り床としていた。掘り方は、全体的に掘り込まれており、20cmほどの起伏を持っていた。



2区53号住居跡

- | | | |
|----|-------|----------------|
| 1 | 暗褐色土 | やや粘質。 |
| 2 | 黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 3 | 灰黄褐色土 | 焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 4 | 黒褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 5 | 灰黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 6 | 灰黄褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |
| 7 | 黄褐色土 | やや粘質。 |
| 8 | 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 9 | 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 10 | 明黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |



0 10cm

第113図 2区53号住居跡・掘り方及び出土遺物実測図

2区54号住居跡 (図版39・40)

位置 2D・2E-1・2

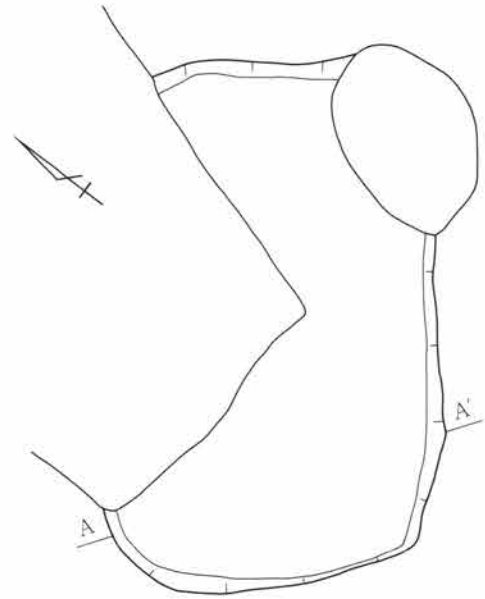
主軸方位 N-49° -E 平面形状 不明

規模 4.1×-m 残存深度 30cm 柱穴 なし

周溝 なし 貯蔵穴 なし 竈位置 不明

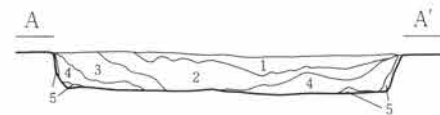
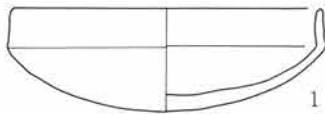
遺物 埋土中から、土師器の坏の破片が出土している。全体的に遺物量は少ない。

調査所見 住居跡北西部、及び東隅は攪乱により、削り取られている。床面はローム主体で、やや硬くなっている。



2区54号住居跡

- 1 灰黄褐色土 やや砂質。ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 褐灰色土 ローム粒を少量含む。
- 4 褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 黄褐色土 ロームブロック主体。



L = 40.30m 0 1m

0 10cm

第114図 2区54号住居跡及び出土遺物実測図

3区1号住居跡 (図版40・41)

位置 J-3・4

主軸方位 N-110° -E

平面形状 隅丸方形 規模 2.5×2.2m

残存深度 14cm 柱穴 なし

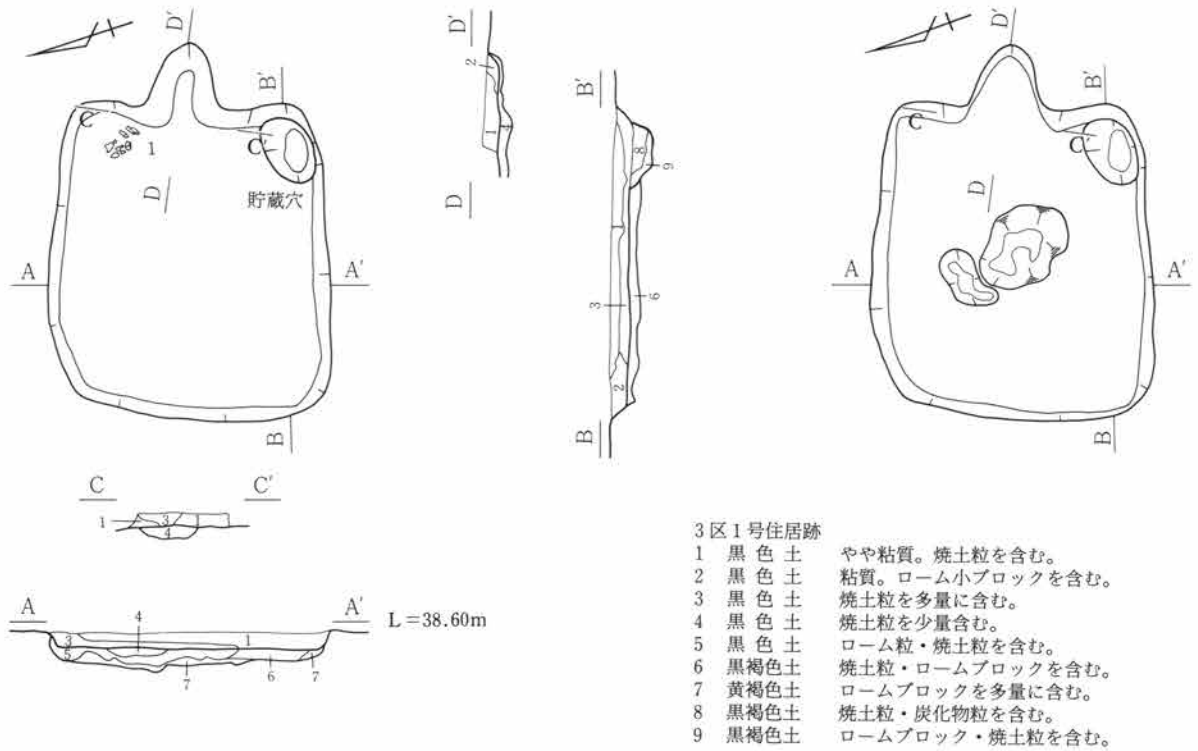
周溝 なし 貯蔵穴 住居跡東南隅、竈右側で検出された。楕円形で、規模は長軸60cm短軸37cm、深さ12cmである。竈概要 主軸は、N-108° -E。住居跡東辺やや北よりに位置し、竪穴外の地山を掘り込んで構築している。燃烧部は二等辺三角形に近く、地山ロームを袖部分の基礎としている。火床面のレベルは、床面とほぼ同じである。また、竈壁面

はわずかに赤く焼けており、横断面は緩やかなU字形を呈する。

遺物 土師器の甕が、竈左側の床面で出土している。破片を含めて全体の遺物量は少ない。

調査所見 本住居跡は、地形的に台地上から低地へと、緩やかに落ち込む場所に位置しており、床面は湿気を多く含み、やや軟質である。掘り方は、全体が一様に掘り込まれているが、特に住居跡中心部の落ち込みが目立つ。深さ10cmほどの起伏を持っていたと思われる。

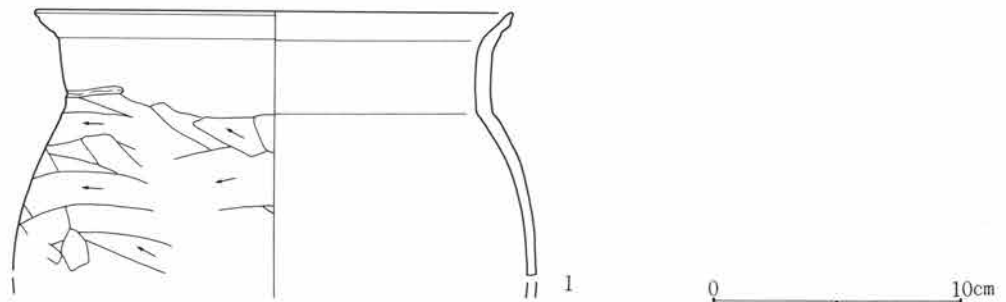
第5章 遺構と遺物



- 3区1号住居跡
- 1 黒色土 やや粘質。焼土粒を含む。
 - 2 黒色土 粘質。ローム小ブロックを含む。
 - 3 黒色土 焼土粒を多量に含む。
 - 4 黒色土 焼土粒を少量含む。
 - 5 黒色土 ローム粒・焼土粒を含む。
 - 6 黒褐色土 焼土粒・ロームブロックを含む。
 - 7 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 - 8 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒を含む。
 - 9 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。

- 3区1号住居跡 電
- 1 黒色土 焼土粒・ローム粒を含む。
 - 2 黒色土 焼土粒を多量に含む。
 - 3 黒色土 粘土粒を多量に含む。
 - 4 黒色土 粘土ブロック・ロームブロックを含む。

0 1m



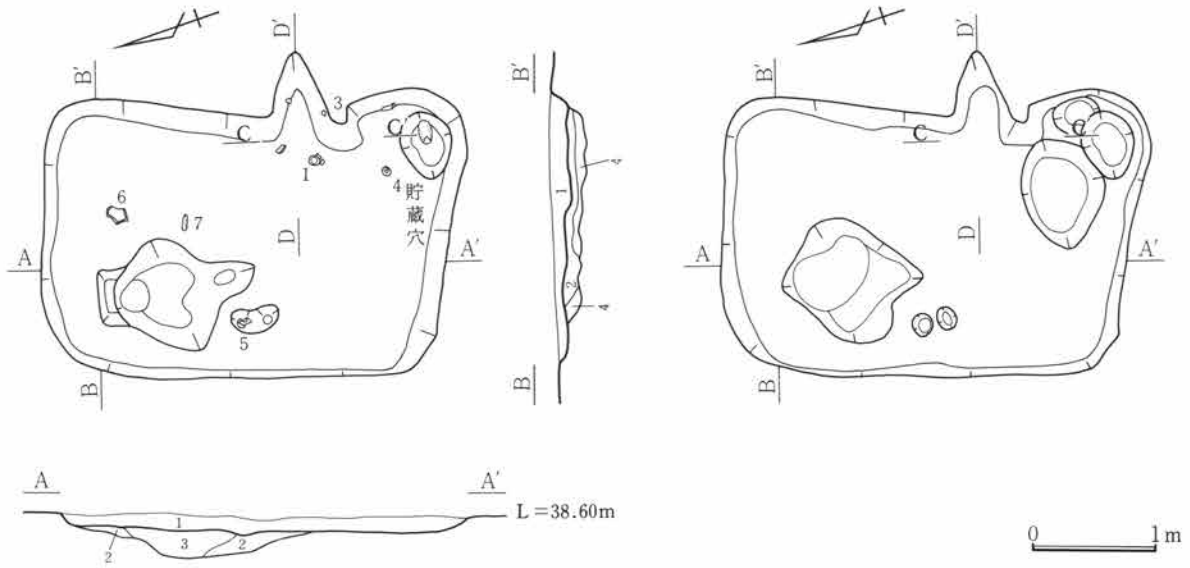
第115図 3区1号住居跡・掘り方及び出土遺物実測図

3区2号住居跡 (図版41)

位置 J・K-2・3 **主軸方位** N-113° - E
平面形状 隅丸長方形 **規模** 2.3×3.3m
残存深度 14cm **柱穴** なし **周溝** なし
貯蔵穴 竈右側、住居跡東南隅で検出された。規模は直径40cm深さ22cmほどで、円形を呈する。
電概要 主軸は、N-104° - E。住居跡東辺やや南寄りに位置する。竈穴外の地山を、掘り込んで構築している。燃焼部は三角形に近く、ローム地山を袖部分の基礎としている。また、壁面は赤く焼けており、横断面はU字形を呈する。

遺物 須恵器の坏・埴・甕、灰釉陶器の碗が出土している。また、竈焚口付近で出土している墨書土器には、「一万」と書されていた。破片を含めて、遺物量は少ない。

調査所見 貯蔵穴は、あまり判然としなかった。住居跡確認時・断面等の調査から本住居跡に伴うものと思われるが、住居跡中央やや北寄りに、大きな凹みが確認できたが、その性格は不明である。掘り方は全体的に掘り下げられ、深さ20cmほどの起伏を持っていたと思われる。

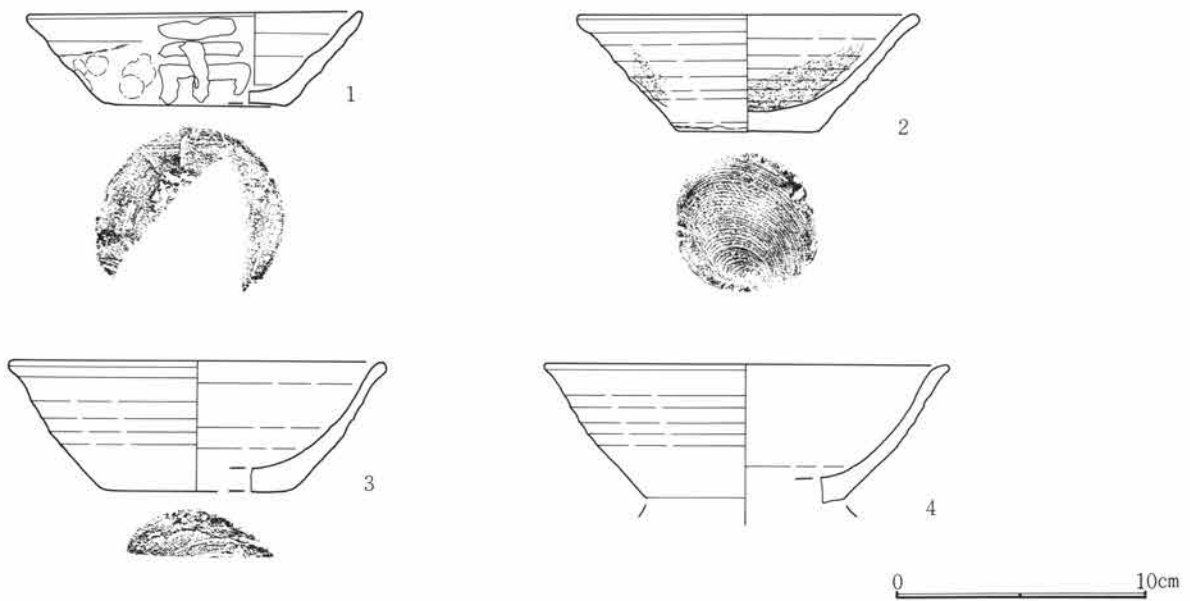
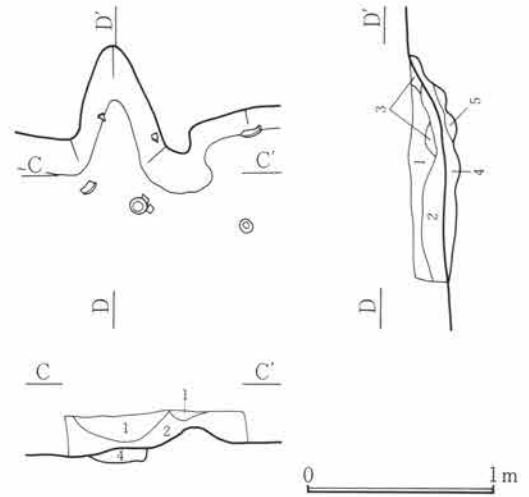


3区2号住居跡

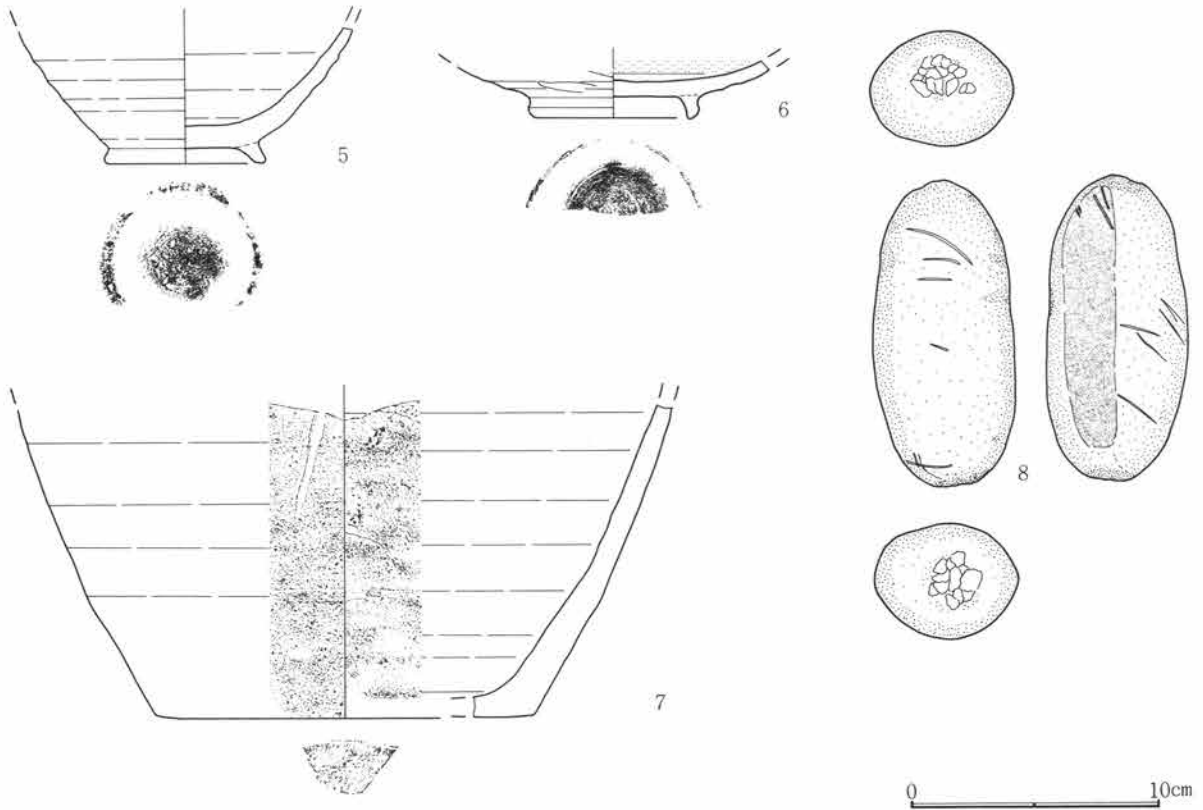
- 1 黒色土 ローム粒・焼土粒を含む。
- 2 黒色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 黒色土 やや砂質。ロームブロックを含む。
- 4 黒色土 やや砂質。ローム粒・焼土粒を含む。

3区2号住居跡 竈

- 1 黒色土 焼土粒を含む。
- 2 黒色土 焼土粒を多量に含む。
- 3 赤褐色土 焼土主体。
- 4 黒色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 5 褐色土 ロームブロックを多量に含む。



第116図 3区2号住居跡・掘り方及び出土遺物実測図(1)



第117図 3区2号住居跡出土遺物実測図(2)

第3節 井戸

1区1号井戸 (図版42)

位置 2Q-9

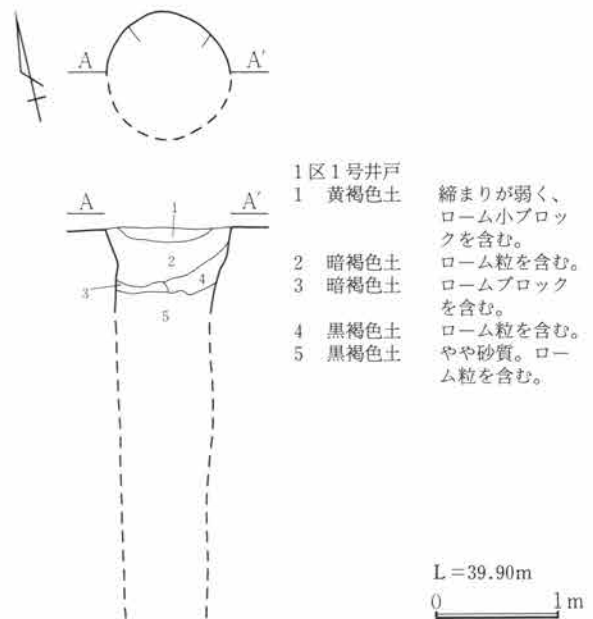
平面形状 円形

規模 直径約1m

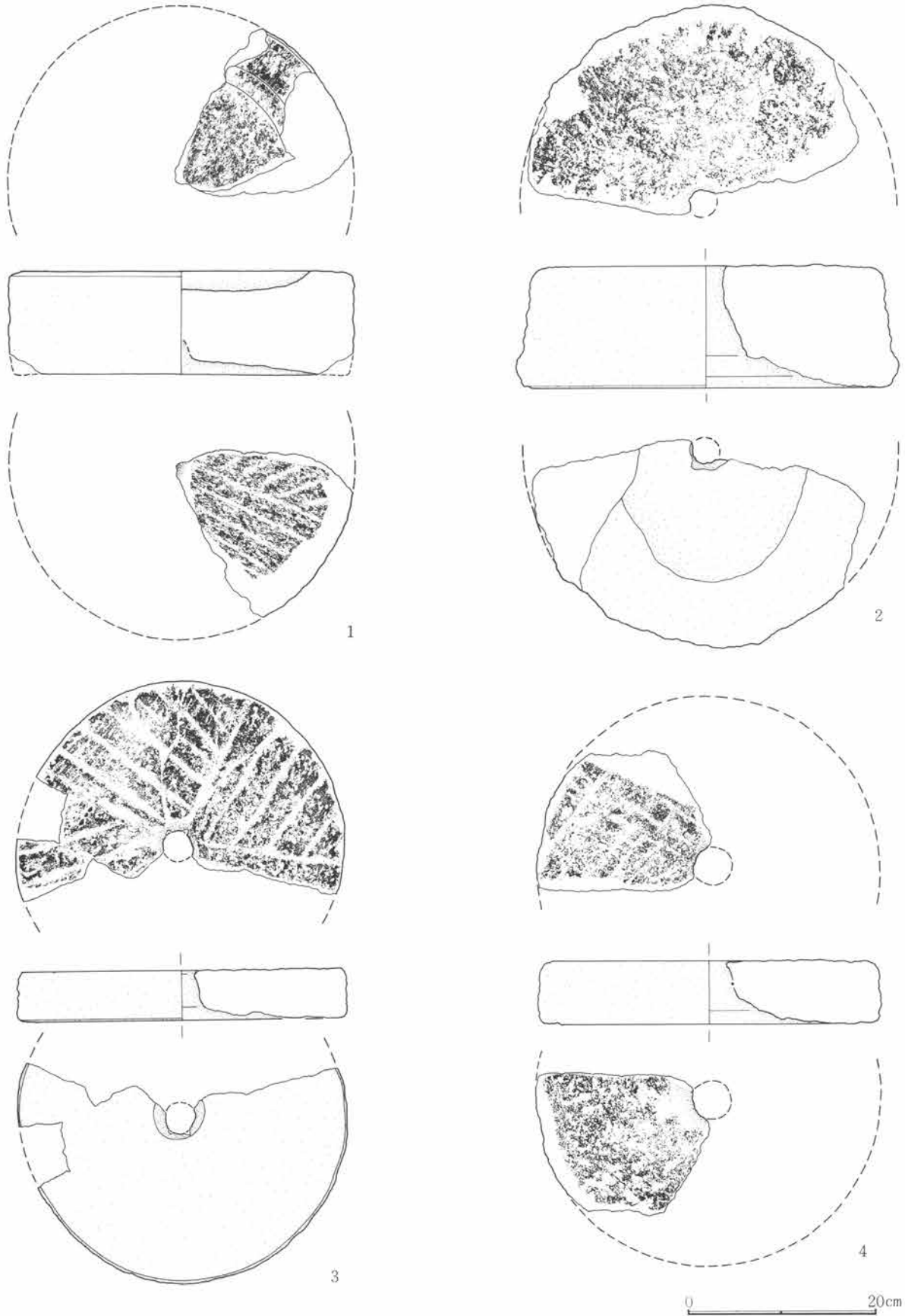
残存深度 3m10cm以上(出水のため完掘できなかった)。

遺物 石臼・陶磁器・瓦の破片や杭状の木、また竹が出土している。

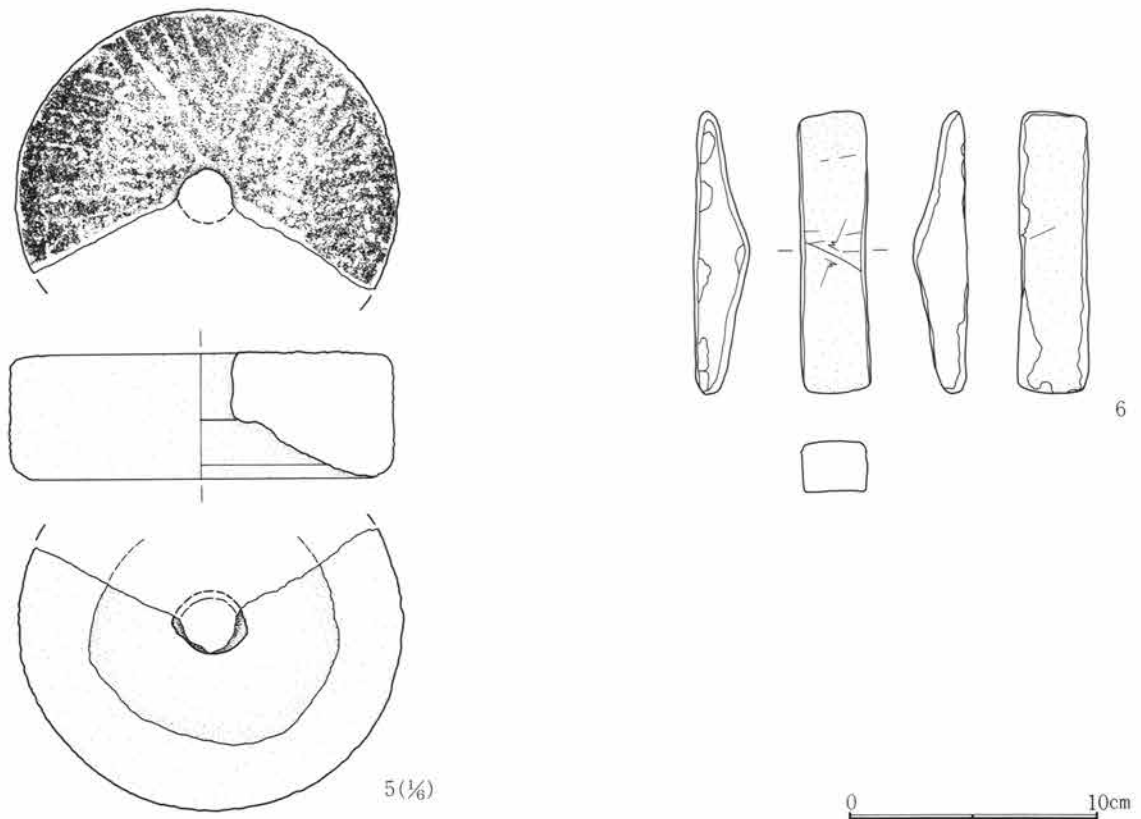
調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。壁の傾斜は、確認面付近の崩落によるためか若干緩やかとなっている以外は、ほぼ垂直に落ち込んでいる。本遺跡で検出された井戸の中では、比較的規模が大きい。時期は、大正から戦前頃と思われる。



第118図 1区1号井戸実測図



第119図 1区1号井戸出土遺物実測図(1)



第120図 1区1号井戸出土遺物実測図(2)

1区2号井戸 (図版42)

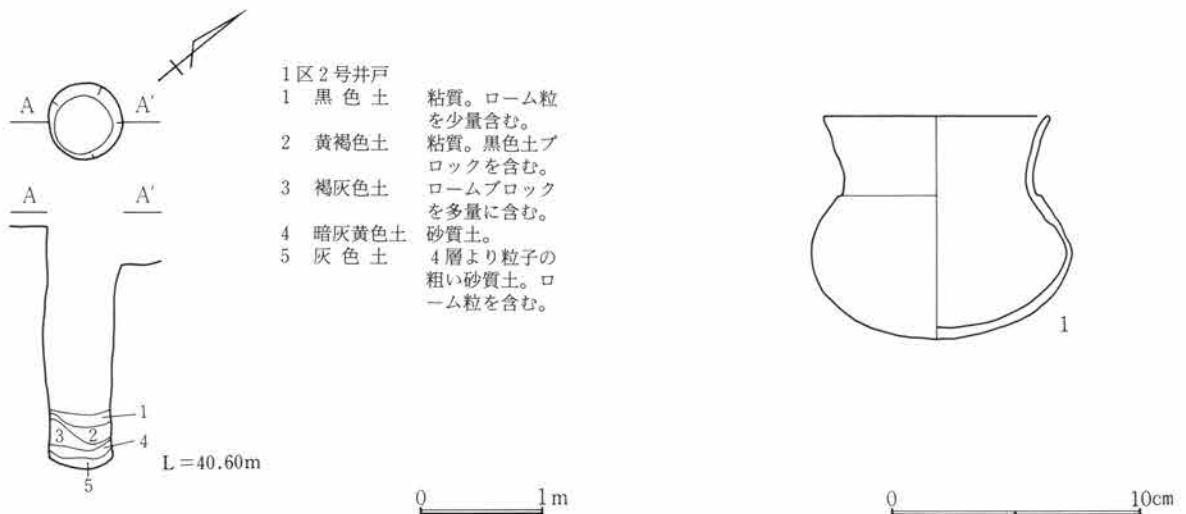
位置 20-14 平面形状 円形

規模 直径60cm 残存深度 1m91cm

遺物 土師器の小型壺が、底部から9cm上の位置から出土した。また、土師器の破片も、埋土から少量

出土した。

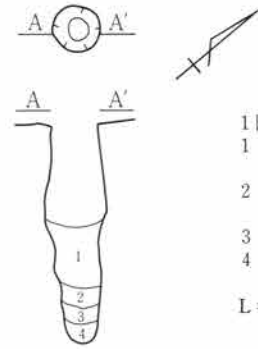
調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。出土遺物から見ると、古墳時代後期の遺構であると考えられ、集落跡との関係が推測される。



第121図 1区2号井戸及び出土遺物実測図

1区3号井戸 (図版42)

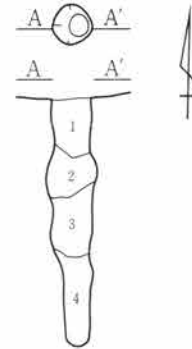
位置 2P-14 **平面形状** 円形
規模 直径35cm **残存深度** 1m73cm
遺物 土師器の坏・甕の破片が、埋土中から少量出土した。
調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。確認面から深さ60~70cmの壁面に括れがあり、崩落があったと考えられる。



- 1区3号井戸
 1 黒褐色土 砂質。ロームブロックを含む。
 2 黒褐色土 シルトブロックを含む。
 3 黒褐色土 粘性強い。
 4 褐灰色土 砂質土。
 L=40.40m

1区4号井戸 (図版42)

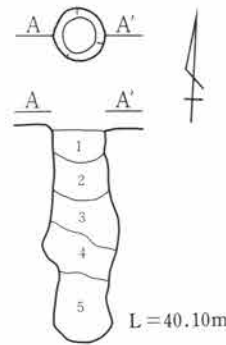
位置 2P-11 **平面形状** 円形
規模 直径34cm **残存深度** 1m95cm
遺物 埋土中から土師器の破片が、わずかに出土している。
調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。壁面が崩落のため、括れている部分があり若干不整形になっている。



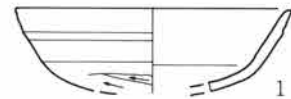
- 1区4号井戸
 1 黄褐色土 ロームブロックを含む。
 2 灰黄褐色土 ローム小ブロックを含む。
 3 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 4 灰黄褐色土 砂質土。ローム粒を多量に含む。
 L=40.30m

1区5号井戸 (図版42・43)

位置 2O-8 **平面形状** 円形
規模 直径41cm **残存深度** 1m55cm
遺物 土師器の坏・甕の破片が、埋土中からわずかに出土している。
調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。確認面から深さ1mくらいで、崩落のためか壁面が括れている。

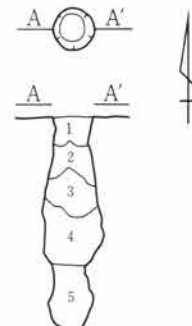


- 1区5号井戸
 1 黄褐色土 ローム粒を含む。
 2 灰黄褐色土 ローム粒を含む。
 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
 4 灰黄褐色土 ローム粒を多量に含む。
 5 褐灰色土 粘性強い。ローム小ブロックを含む。
 L=40.10m



1区6号井戸 (図版43)

位置 2N-8 **平面形状** 円形
規模 直径30cm **残存深度** 1m65cm
遺物 土師器の坏・甕の破片が、埋土中からわずかに出土した。
調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。確認面から深さ1mで、崩落による壁面の括れが確認でき、段状になっている。



- 1区6号井戸
 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
 2 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
 3 黒褐色土 ローム小ブロックを含む。
 4 黒褐色土 粘性強い。暗色帯のブロックを含む。
 5 褐灰色土 砂質土。
 L=40.10m

0 1m

第122図 1区3・4・5・6号井戸及び出土遺物実測図

第5章 遺構と遺物

1区7号井戸 (図版43)

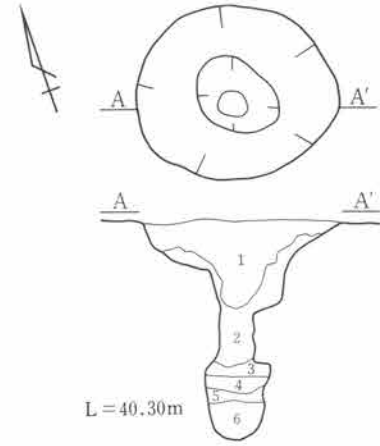
位置 2 I - 6 平面形状 楕円形

規模 1.6×1.4m 残存深度 1 m64cm

遺物 土師器の甕の破片が、埋土中からわずかに出土した。

調査所見 掘り方は、地山井筒朝顔形と思われる。確認面から深さ70cmまでは、壁面は緩やかに、その後ほぼ垂直に落ち込んでいる。また、確認面から1 m10cmほどで一度挟れており、崩落によるものと思われる。

- | | |
|---------|----------------|
| 1区7号井戸 | |
| 1 暗褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 3 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 4 黒褐色土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 5 灰黄褐色土 | シルトと黒褐色土の互層。 |
| 6 褐灰色土 | 砂質土。 |



1区8号井戸 (図版43)

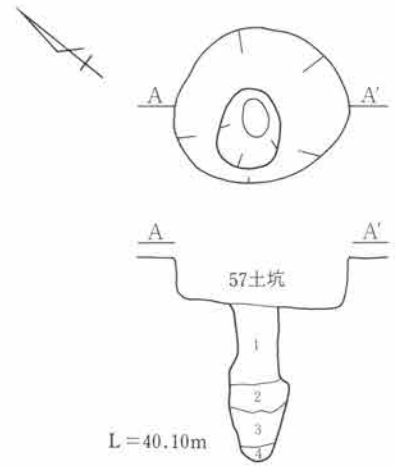
位置 2 K - 3・4 平面形状 楕円形

規模 0.6×0.5m 残存深度 1 m60cm

遺物 なし

調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。壁は、ほぼ垂直に落ち込んでいる。57号土坑との新旧関係は不明である。

- | | |
|--------|-------------------|
| 1区8号井戸 | |
| 1 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 2 黒色土 | 砂質土。ロームブロックを少量含む。 |
| 3 黒褐色土 | 砂質土。 |
| 4 黒褐色土 | 砂質土と粘質土の互層。 |



1区9号井戸 (図版43)

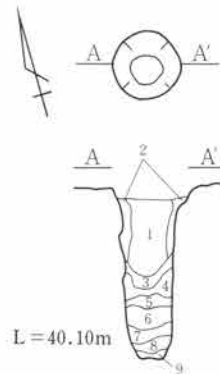
位置 2 K - 3 平面形状 円形

規模 直径55cm 残存深度 1 m35cm

遺物 なし

調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。壁は、ほぼ垂直に落ち込むが、確認面付近が部分的に崩落している。埋土全体に焼土粒が混入している。

- | | | |
|--------|-----------|-----------|
| 1区9号井戸 | | |
| 1 黒色土 | ロームブロック・ | ロームブロック・ |
| | 焼土粒を含む。 | 焼土粒を含む。 |
| 2 黒褐色土 | ロームブロック・ | ロームブロック・ |
| | 焼土粒を含む。 | 焼土粒を含む。 |
| 3 黒褐色土 | ローム小ブロック | ローム小ブロック |
| | ・焼土粒を含む。 | ・焼土粒を含む。 |
| 4 暗褐色土 | ローム小ブロック | ローム小ブロック |
| | ・焼土粒を含む。 | ・焼土粒を含む。 |
| 5 暗褐色土 | 粘質。焼土粒を含 | 粘質。焼土粒を含 |
| | む。 | む。 |
| 6 暗褐色土 | やや砂質。ローム | やや砂質。ローム |
| | 粒・焼土粒を含む。 | 粒・焼土粒を含む。 |
| 7 黄褐色土 | ローム粒・焼土粒 | ローム粒・焼土粒 |
| | を含む。 | を含む。 |
| 8 黒褐色土 | 焼土粒を少量含む。 | 焼土粒を少量含む。 |
| 9 黄褐色土 | 砂質。ローム小ブ | 砂質。ローム小ブ |
| | ロックを含む。 | ロックを含む。 |



0 1m

第123図 1区7・8・9号井戸実測図

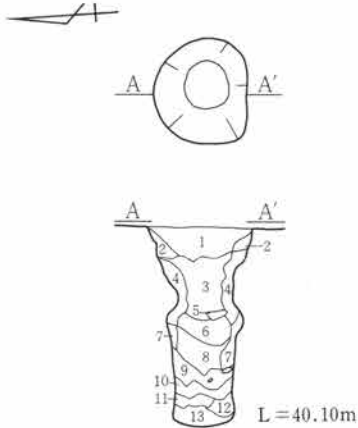
1区10号井戸 (図版44)

位置 2 I・2 J-20

平面形状 不整形な円形

規模 直径80cm 残存深度 1 m58cm

遺物 土師器の坏・甕の破片が、埋土中からわずかに



1区11号井戸 (図版44)

位置 2 M-8 平面形状 円形

規模 直径46cm 残存深度 1 m12cm (4号住居跡掘り方面から)

遺物 土師器の破片が、埋土中から少量出土した。

調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。

壁は、垂直に近い傾斜で落ち込んでいる。4号住居跡との新旧関係は不明である。

出土した。

調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。

壁は、ほぼ垂直に落ち込むが、確認面付近が崩落のため傾斜が緩やかになっている。

- 1区10号井戸
- | | |
|----------|-----------------------|
| 1 黒褐色土 | 粘質。焼土粒を含む。 |
| 2 暗褐色土 | 粘質。焼土粒・ロームブロックを多量に含む。 |
| 3 黒褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 5 黄褐色土 | 砂質。ロームブロックを含む。 |
| 6 黒褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| 7 褐色土 | 粘質。ロームブロック・焼土粒を多量に含む。 |
| 8 暗褐色土 | 粘質。ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 9 黄褐色土 | 焼土粒・多量のロームブロックを含む。 |
| 10 褐灰色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 11 灰黄褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 12 褐灰色土 | 焼土粒を少量含む。 |
| 13 黄褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |

1区12号井戸 (図版44)

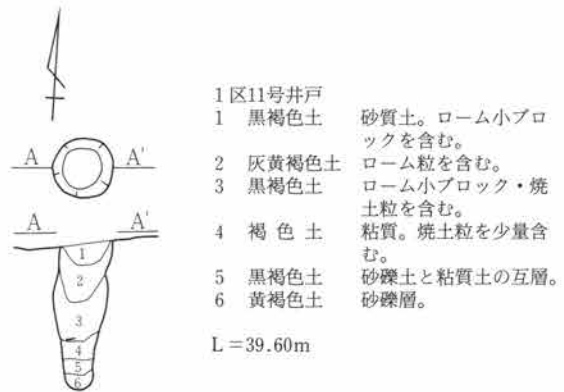
位置 2 I-5 平面形状 円形

規模 直径30cm 残存深度 1 m19cm

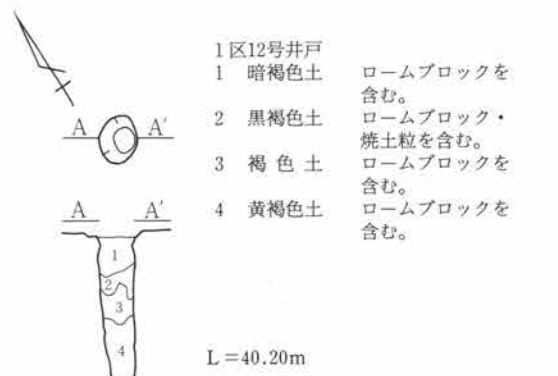
遺物 なし

調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。

壁は、ほぼ垂直に落ち込んでいる。確認面から20cmほどの部分が崩落によるものか、括れている。1号円形周溝遺構との新旧関係は不明である。



- 1区11号井戸
- | | |
|---------|------------------|
| 1 黒褐色土 | 砂質土。ローム小ブロックを含む。 |
| 2 灰黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 3 黒褐色土 | ローム小ブロック・焼土粒を含む。 |
| 4 褐色土 | 粘質。焼土粒を少量含む。 |
| 5 黒褐色土 | 砂礫土と粘質土の互層。 |
| 6 黄褐色土 | 砂礫層。 |



- 1区12号井戸
- | | |
|--------|-----------------|
| 1 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 2 黒褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 3 褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 4 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |

0 1m

第124図 1区10・11・12号井戸実測図

2区13号井戸 (図版44)

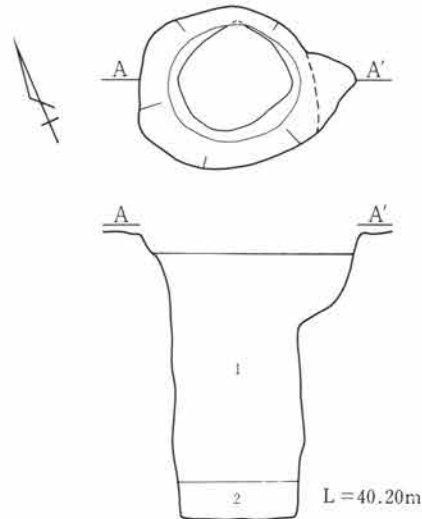
位置 2D-20

平面形状 不整形な円形

規模 直径1m30cm 残存深度 2m30cm

遺物 土師器・須恵器の破片が、埋土中より計10点出土している。

調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。確認面で東側がピットに切られている。壁は、ほぼ垂直に落ち込んでいるが、確認面から70cmほどの東壁部の傾斜が緩やかになっており、崩落によるものと思われる。また埋土は、確認面から2mの深さまでは、黒褐色砂質土であり、人為的に埋められたものである。湧水層は、確認面から深さ1.9mより下層の赤褐色粗砂層である。



2区13号井戸
1 暗褐色土 砂質土。ロームブロックを含む。
2 褐色土 砂質土。

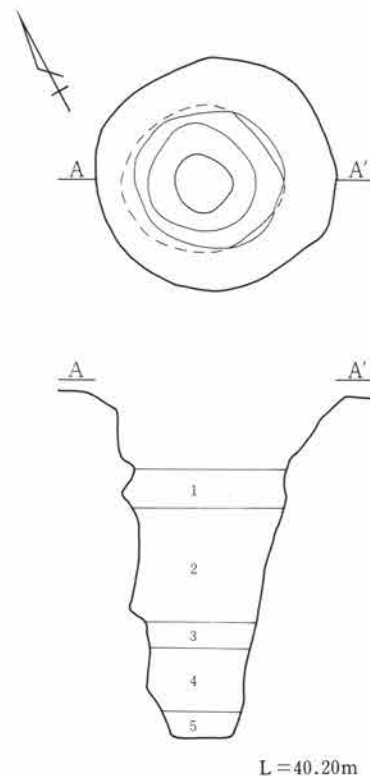
2区14号井戸 (図版44)

位置 2C・2D-20 平面形状 円形

規模 直径1m25cm 残存深度 2m70cm

遺物 土師器・陶器の破片が、埋土中からわずかに出土している。また、底面付近からこぶし大の石が若干出土した。

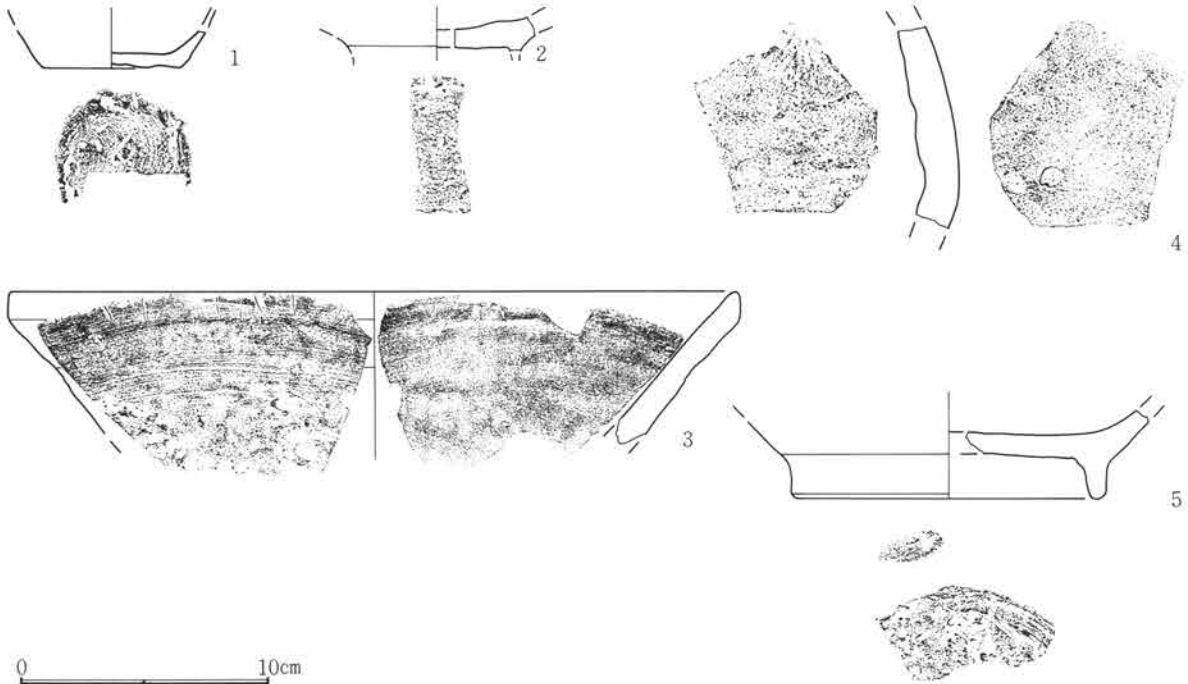
調査所見 掘り方は、地山井筒朝顔型と思われる。壁は、確認面から70cmまでは緩やかに、その下部は傾斜が急になっている。また、所々で壁面が括れているが、崩落によるものと考えられる。埋土の4層までは、人為的に埋められたものである。湧水層は、確認面から1.8~2.3mまでの褐灰色火山灰砂層である。時期は、中世(13~14世紀)と思われる。



2区14号井戸
1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
2 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
3 黒色土 砂質土。
4 黒色土 ロームブロックを多量に含む。
5 明灰色土 シルト混じり砂質土。

0 1m

第125図 2区13・14号井戸実測図

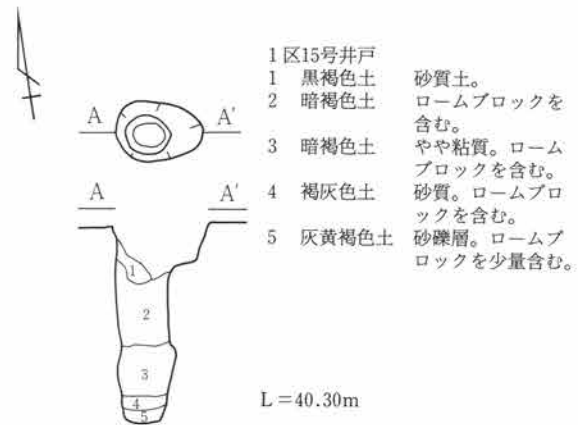


第126図 2区14号井戸出土遺物実測図

1区15号井戸 (図版44)

位置 2H-5 平面形状 楕円形
 規模 75×48cm 残存深度 1m58cm
 遺物 なし

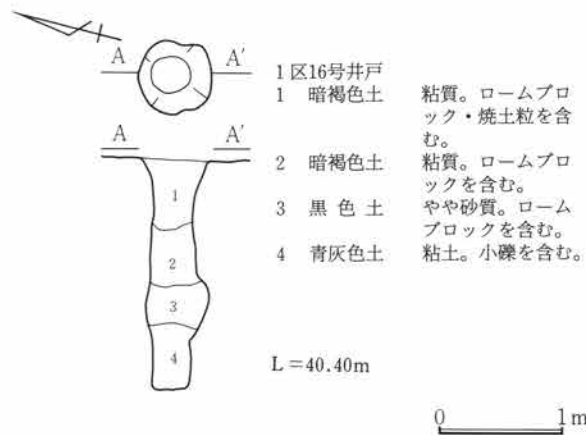
調査所見 掘り方は、地山井筒朝顔型と思われる。東壁は、確認面から深さ30cmの部分が段状になっており、崩落によるものと考えられる。1号円形周溝の土層を切っていることから、当井戸の方が新しい時期のものと思われる。



1区16号井戸 (図版45)

位置 2H-6 平面形状 円形
 規模 直径56cm 残存深度 1m70cm
 遺物 なし

調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。壁は、ほぼ垂直に落ち込む。深さ90cmほどに括れがあり、南壁で特に顕著であるが、崩落によるものと考えられる。



第127図 1区15・16号井戸実測図

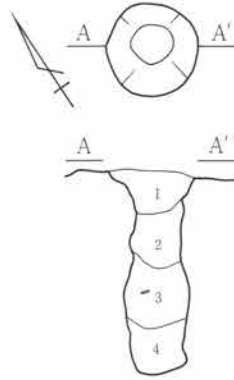
1区17号井戸 (図版45)

位置 2 I-8 平面形状 円形

規模 直径70cm 残存深度 1 m 59cm

遺物 埋土の中・上層から、土師器の坏が破片を含めて20点ほど出土した。

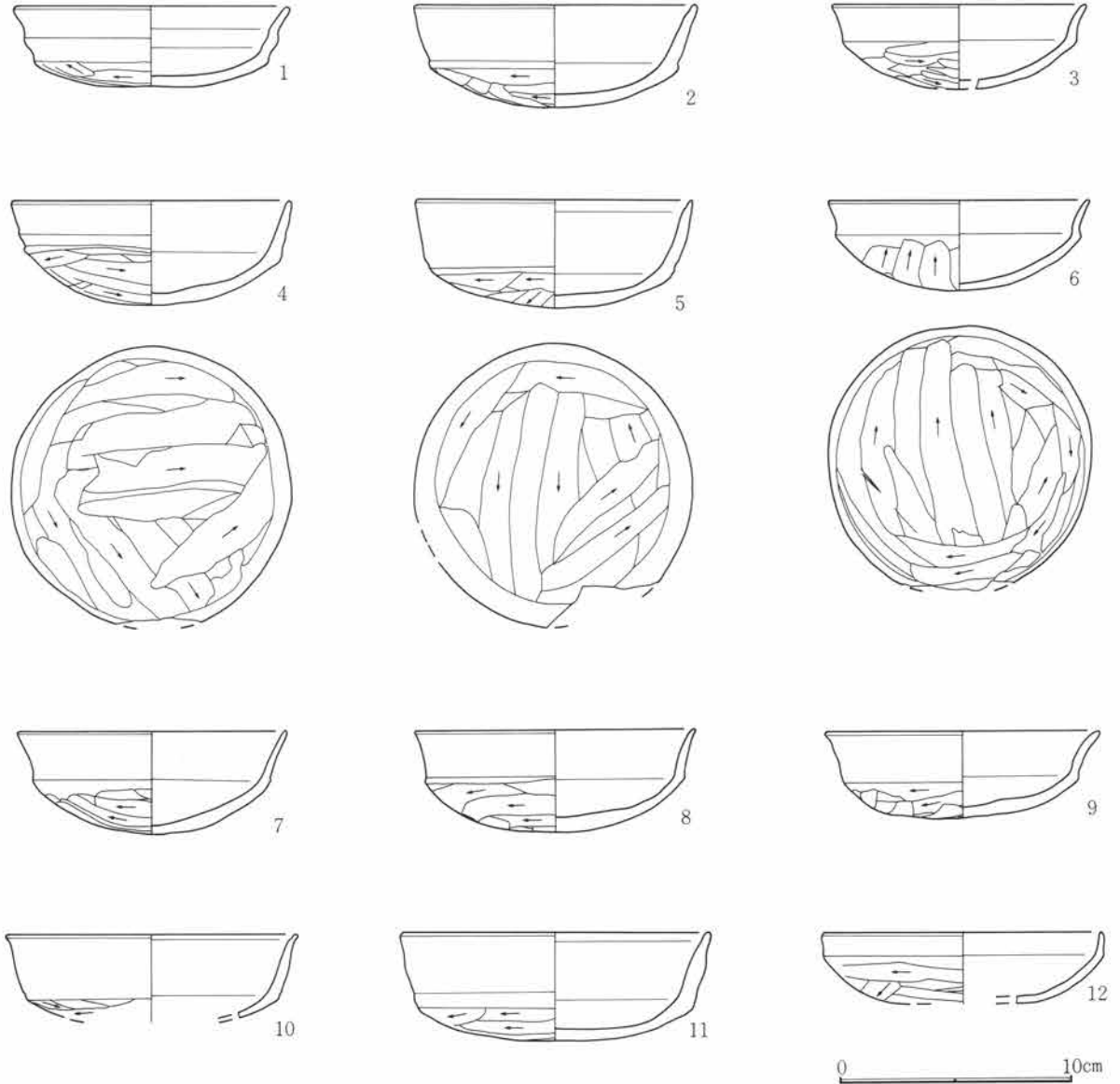
調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。壁は、確認面付近と、深さ1 mほどの部分で、崩落によると思われる括れがある。時期は、古墳時代後期(7世紀後半)と思われる。



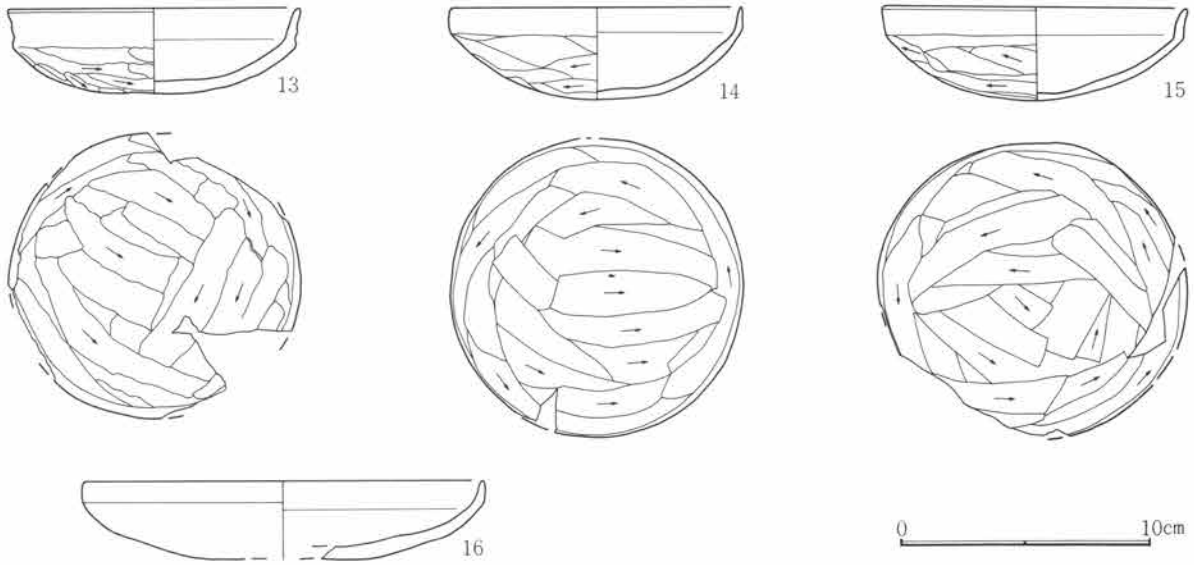
1区17号井戸

- 1 黄褐色土 砂質土。ローム粒を少量含む。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒を含む。
- 4 褐灰色土 小礫・ローム粒を含む。

L=40.30m



第128図 1区17号井戸及び出土遺物実測図(1)



第129図 1区17号井戸出土遺物実測図(2)

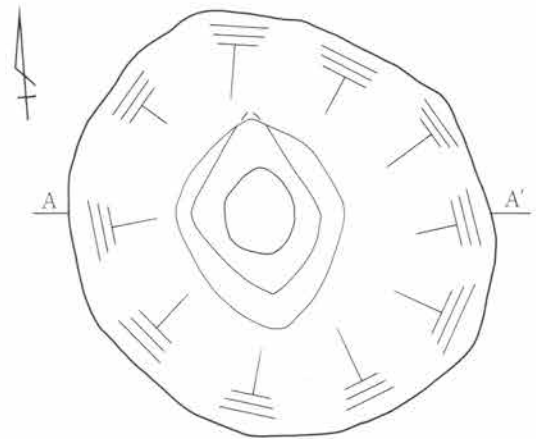
2区18号井戸 (図版45)

位置 T-16 平面形状 円形

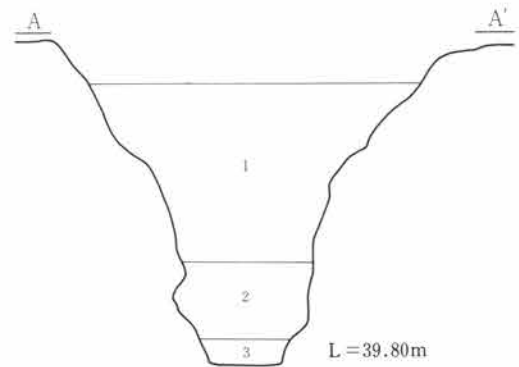
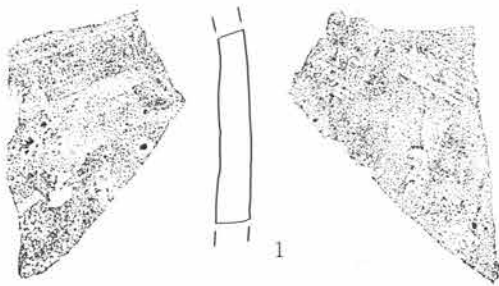
規模 直径3 m30cm 残存深度 2 m60cm

遺物 埋土中より土師器・陶器の破片、砥石や人頭大の石が出土している。

調査所見 掘り方は、地山井筒朝顔型と思われる。深さ1.2mより下層の各層より湧水している。埋土は、自然堆積と考えられる。



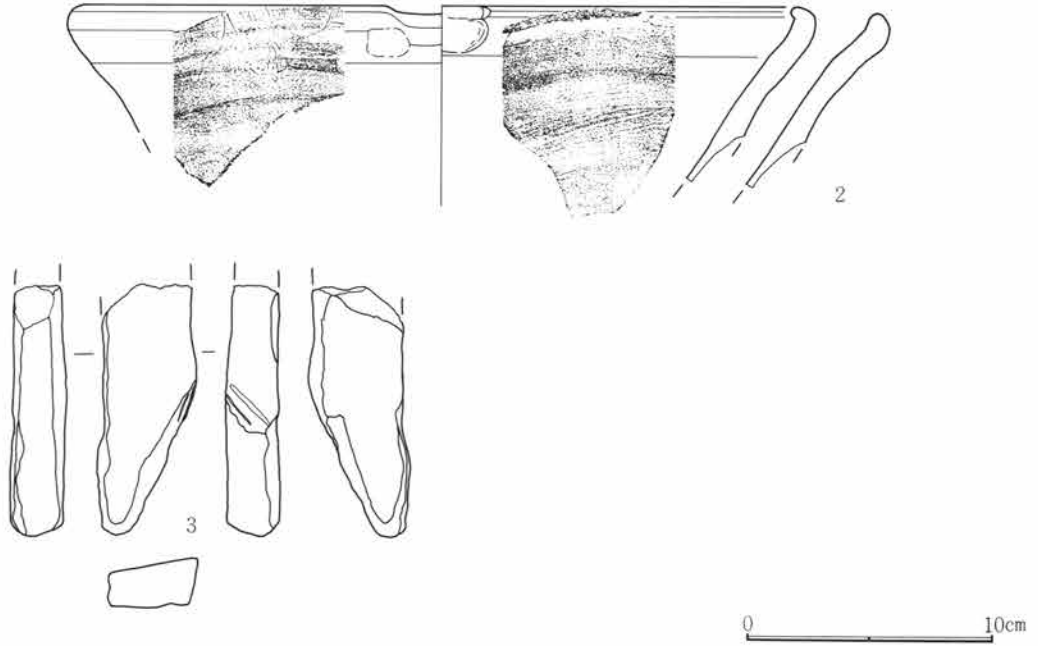
- 2区18号井戸
 1 黒色土 砂質土。
 2 黄褐色土 ローム粒を含む。
 3 褐灰色土 砂質土。



0 10cm

0 1m

第130図 2区18号井戸及び出土遺物実測図(1)



第131図 2区18号井戸出土遺物実測図(2)

2区19号井戸 (図版46)

位置 2F-20

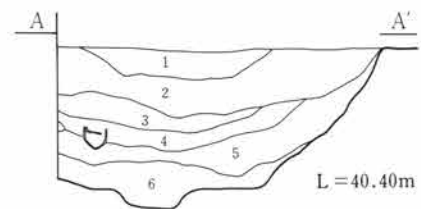
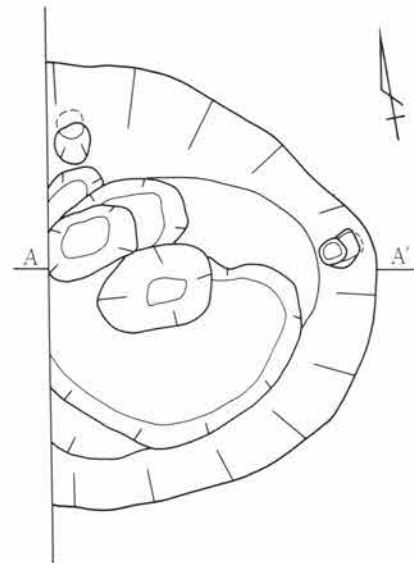
平面形状 不明

規模 3m50cm (壁面)

残存深度 1m30cm

遺物 陶器・軟質陶器の破片、馬歯(第8章第2節参照)が4・5層を中心に出土している。

調査所見 調査区外にまで遺構が存在するため、すべてを調査できなかった。そのため、全体的な規模は不明である。また、底面レベルは、地下水位まで達していないため、調査時では井戸跡として取り扱ったが、実用の井戸遺構とは考えにくい。また、底面北寄りで落ち込みが多い。

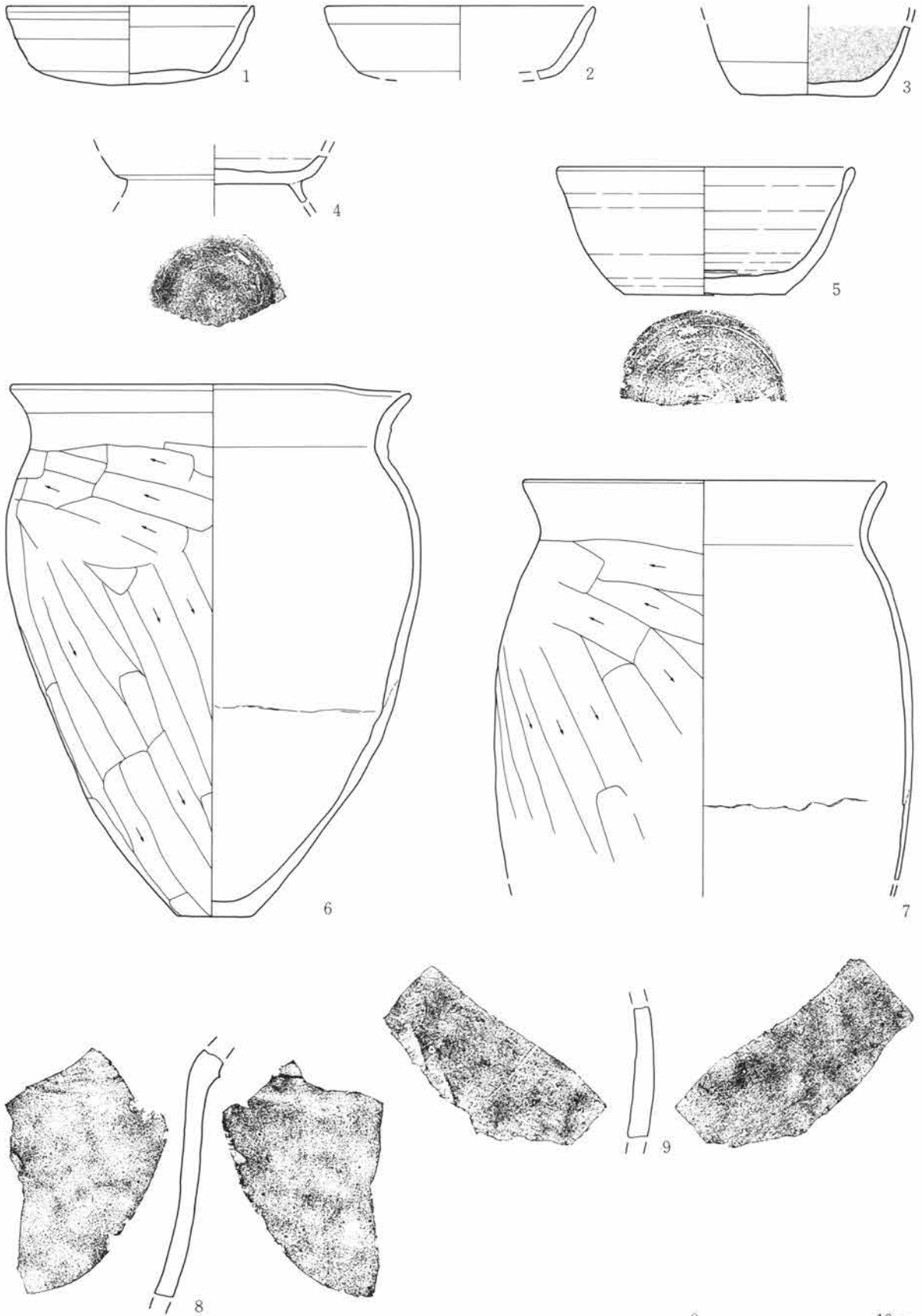


- | | |
|---------|---------------------|
| 2区19号井戸 | |
| 1 暗褐色土 | 粘性なし。軟質。 |
| 2 黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 3 黒褐色土 | 炭化物粒を含む。 |
| 4 褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |
| 5 黄褐色土 | ローム小ブロックを含む。 |
| 6 褐色土 | ロームブロック・シルトブロックを含む。 |

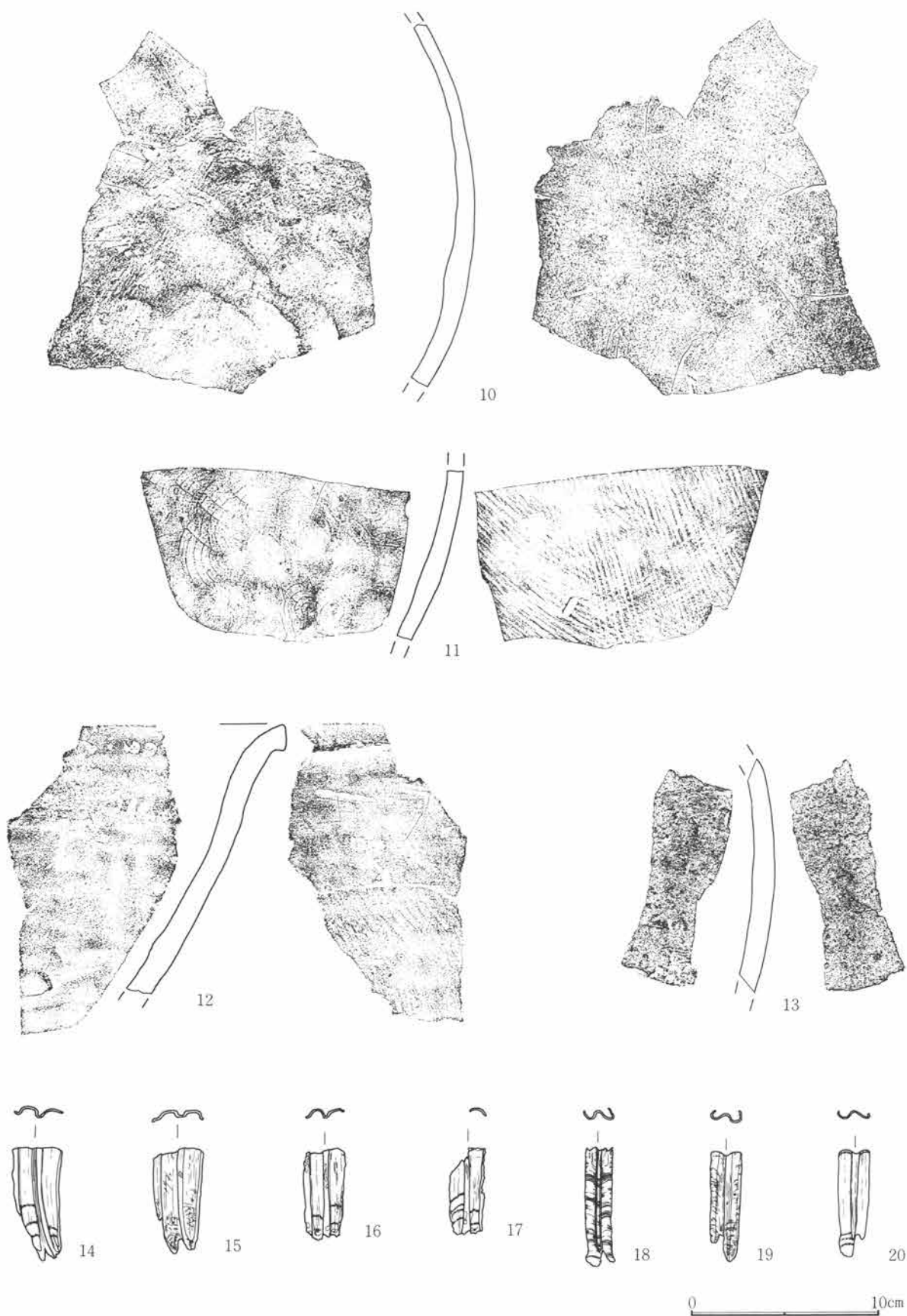


第132図 2区19号井戸実測図

第3節 井戸



第133図 2区19号井戸出土遺物実測図(1)



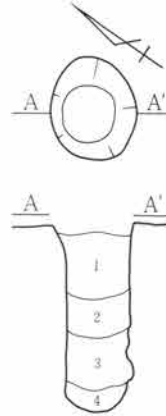
第134図 2区19号井戸出土遺物実測図(2)

1区20号井戸 (図版46)

位置 2L-11 平面形状 円形
 規模 直径67cm 残存深度 1m47cm (47号住居跡掘り方面から)

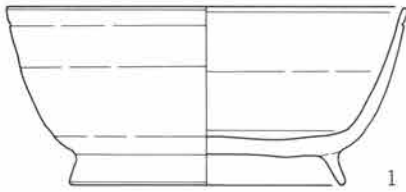
遺物 須恵器の甕・碗の破片が出土している。

調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。壁は、ほぼ垂直に落ち込んでいる。47号住居跡を切っている。

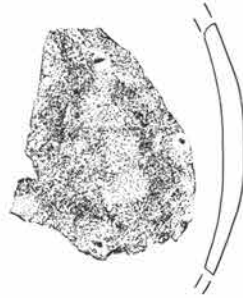


- 1区20号井戸
 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
 2 黒褐色土 ローム小ブロック・ローム粒を含む。
 3 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 4 褐灰色土 シルト層。

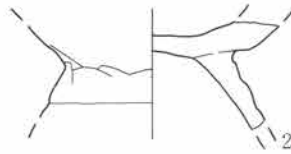
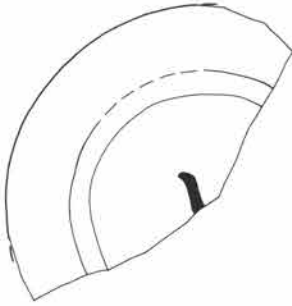
L=40.10m 0 1m



1



3



2



1



4

0 10cm

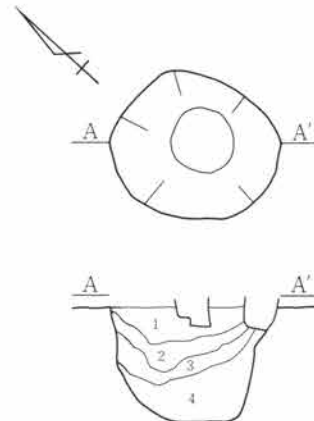
第135図 1区20号井戸及び出土遺物実測図

2区21号井戸 (図版46)

位置 N-13 平面形状 楕円形
 規模 1.38×1.13m 残存深度 91cm

遺物 底部から骨蔵器の他、人頭大の石が4点出土した。

調査所見 掘り方は、地山井筒朝顔型か。壁は、緩やかな傾斜を呈する。

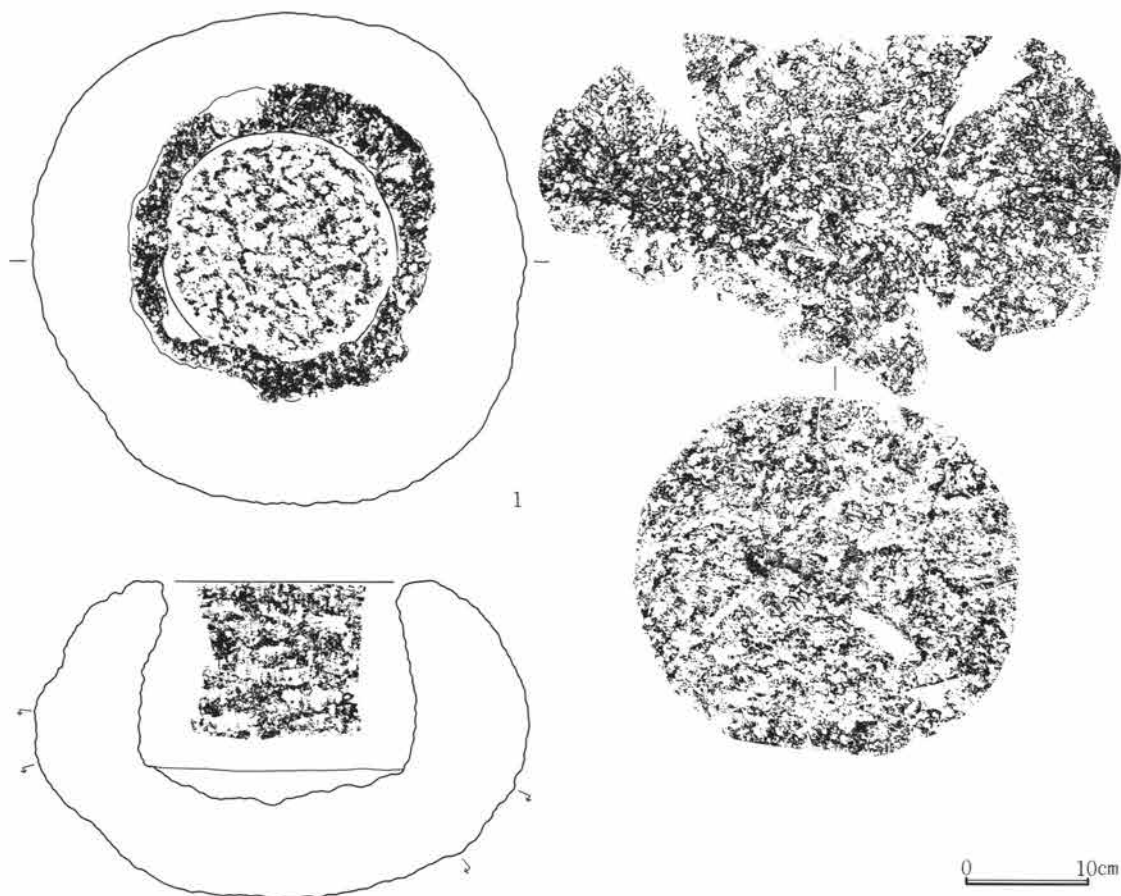


- 2区21号井戸
 1 黒褐色土 ローム粒を含む。
 2 黒色土 ロームブロックを含む。
 3 黒色土 ローム粒を含む。
 4 暗褐色土 砂礫層。底部に人頭大の石あり。

L=39.30m

0 1m

第136図 2区21号井戸実測図

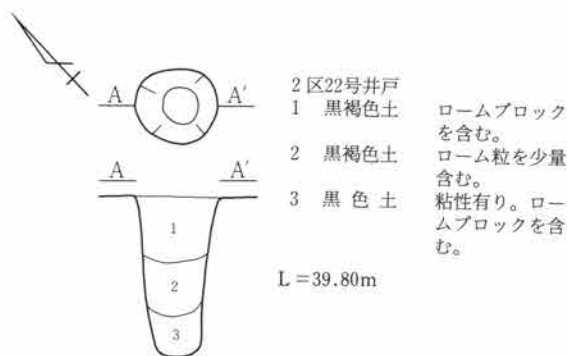


第137図 2区21号井戸出土遺物実測図

2区22号井戸 (図版46)

位置 P・Q-15 平面形状 円形
 規模 直径60cm 残存深度 1m25cm
 遺物 なし

調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。
 壁は、ほぼ垂直に近い傾斜で落ち込む。

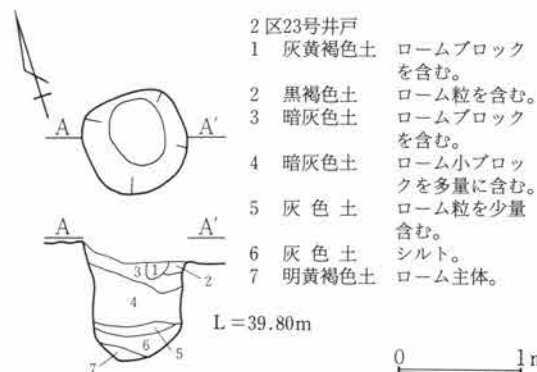


2区22号井戸
 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
 3 黒色土 粘性有り。ロームブロックを含む。

2区23号井戸 (図版46)

位置 R・S-15 平面形状 円形
 規模 直径86cm 残存深度 94cm
 遺物 なし

調査所見 掘り方は、地山井筒円筒型と思われる。
 壁は、確認面付近で傾斜が若干緩やかであるが、ほぼ垂直に落ち込む。



2区23号井戸
 1 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。
 2 黒褐色土 ローム粒を含む。
 3 暗灰色土 ロームブロックを含む。
 4 暗灰色土 ローム小ブロックを多量に含む。
 5 灰色土 ローム粒を少量含む。
 6 灰色土 シルト。
 7 明黄褐色土 ローム主体。

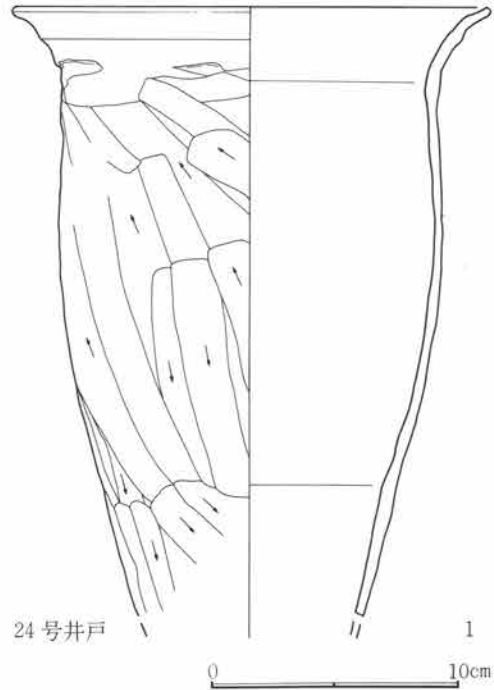
第138図 2区22・23号井戸実測図

2区24号井戸 (図版47)

位置 M-11 平面形状 円形

規模 直径35cm 残存深度 1m70cm

遺物 なし 調査所見 掘り方は地山井筒円筒型と思われる。出水のため断面調査は出来なかった。



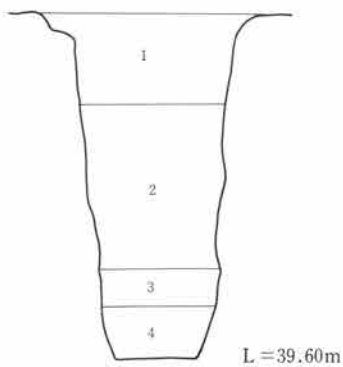
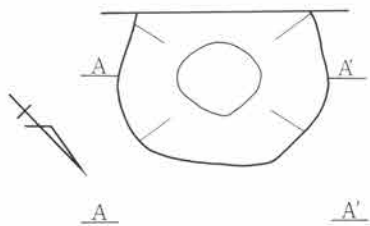
3区1号井戸 (図版47)

位置 M・N-4 平面形状 円形

規模 1m64cm 残存深度 2m70cm

遺物 土師器・須恵器の破片、こぶし大の石が若干出土している。

調査所見 掘り方は、地山井筒朝顔型と思われる。湧水層は、確認面から深さ1mより下層の砂質シルト層である。



- 3区1号井戸
- | | | |
|---|------|-------------|
| 1 | 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 2 | 黒色土 | 粘質土。 |
| 3 | 褐灰色土 | 砂質土。 |
| 4 | 黒褐色土 | やや砂質。 |



第139図 2区24号井戸出土遺物及び3区1号井戸実測図

第4節 溝

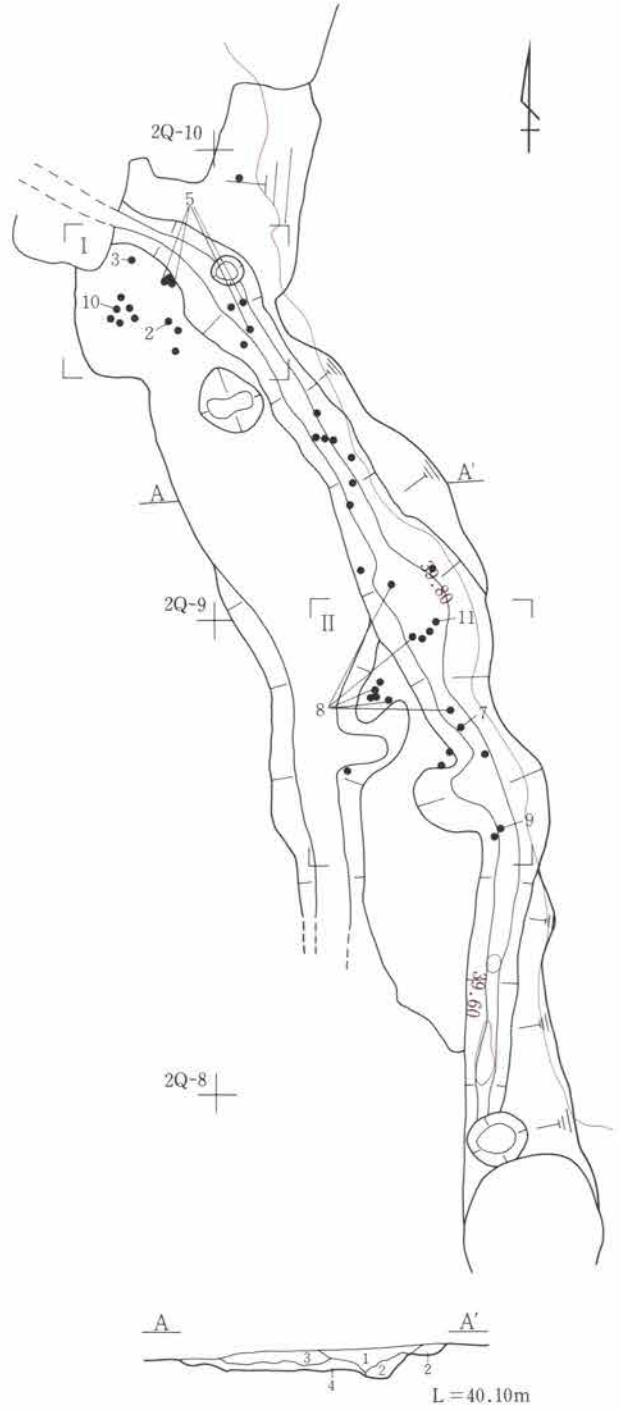
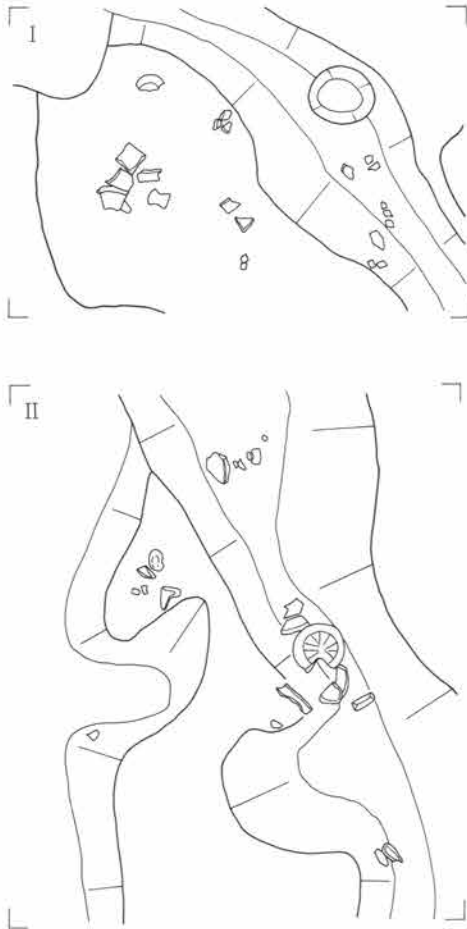
1区1号溝 (図版47・48)

位置 2P・2Q-7~9

規模 幅3m、深さ0.35m程で、断面形は皿状を呈し、溝の幅に比して深さが浅い。

調査所見 溝は北西から南南東へと流下し、検出範囲内で約8cmの比高差を持つ。埋土は、あまり締まっていなかった。また、砂質土も堆積し水流の痕跡が認められ、自然に埋没していったものとする。北側は、22号土坑群によって削り取られている。

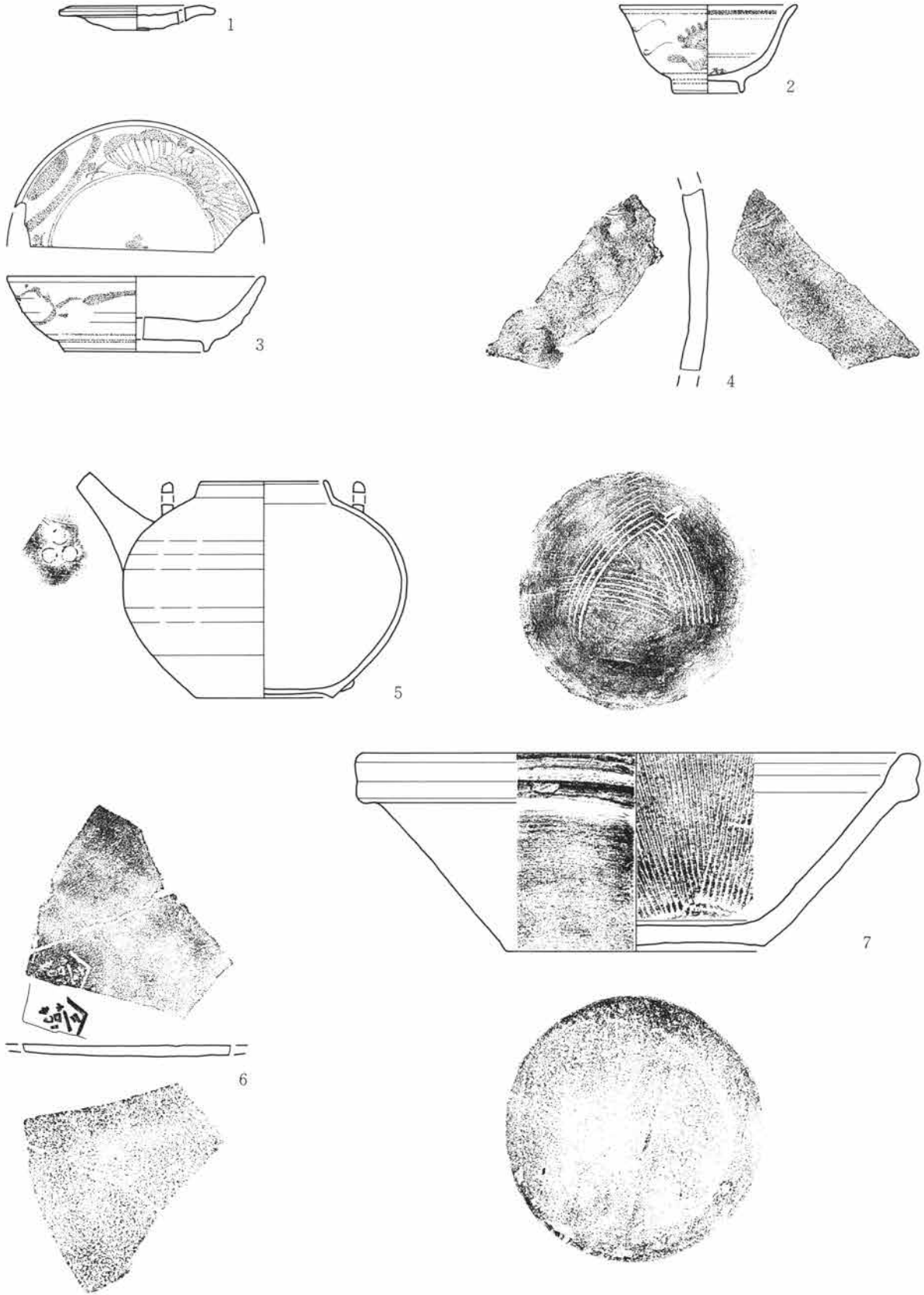
出土遺物は、溝底面や埋土中から磁器・陶器・焙烙等が出土しており、時期的には大正から昭和初期と考えられる。



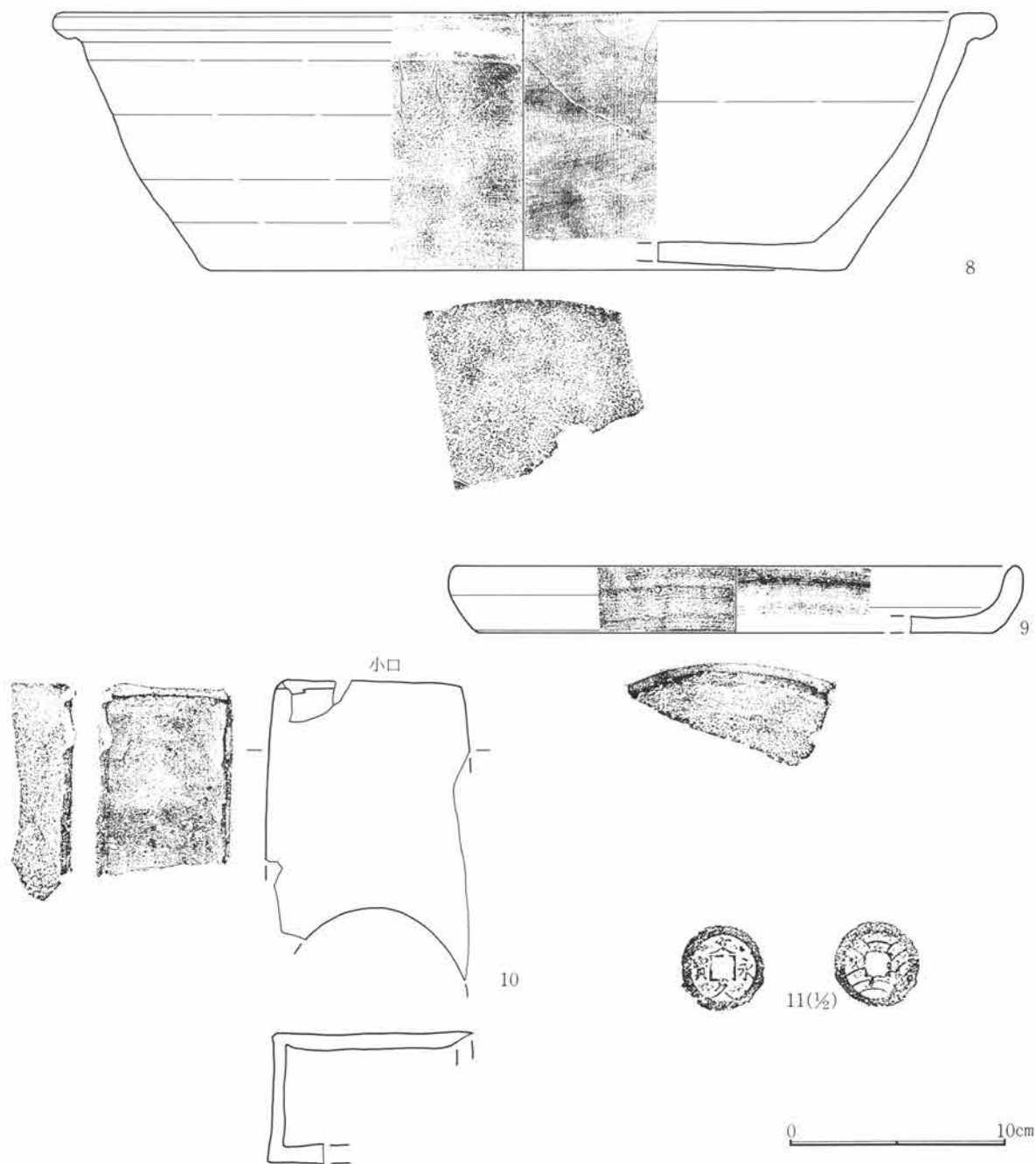
- 1区1号溝
- | | |
|--------|------------------|
| 1 暗褐色土 | 軟質。ローム粒・炭化物粒を含む。 |
| 2 暗褐色土 | 軟質。ローム粒を含む。 |
| 3 暗褐色土 | 砂質。ローム粒を含む。 |
| 4 褐色土 | ローム粒を多量に含む。 |

0 2m

第140図 1区1号溝実測図



第141図 1区1号溝出土遺物実測図(1)



第142図 1区1号溝出土遺物実測図(2)

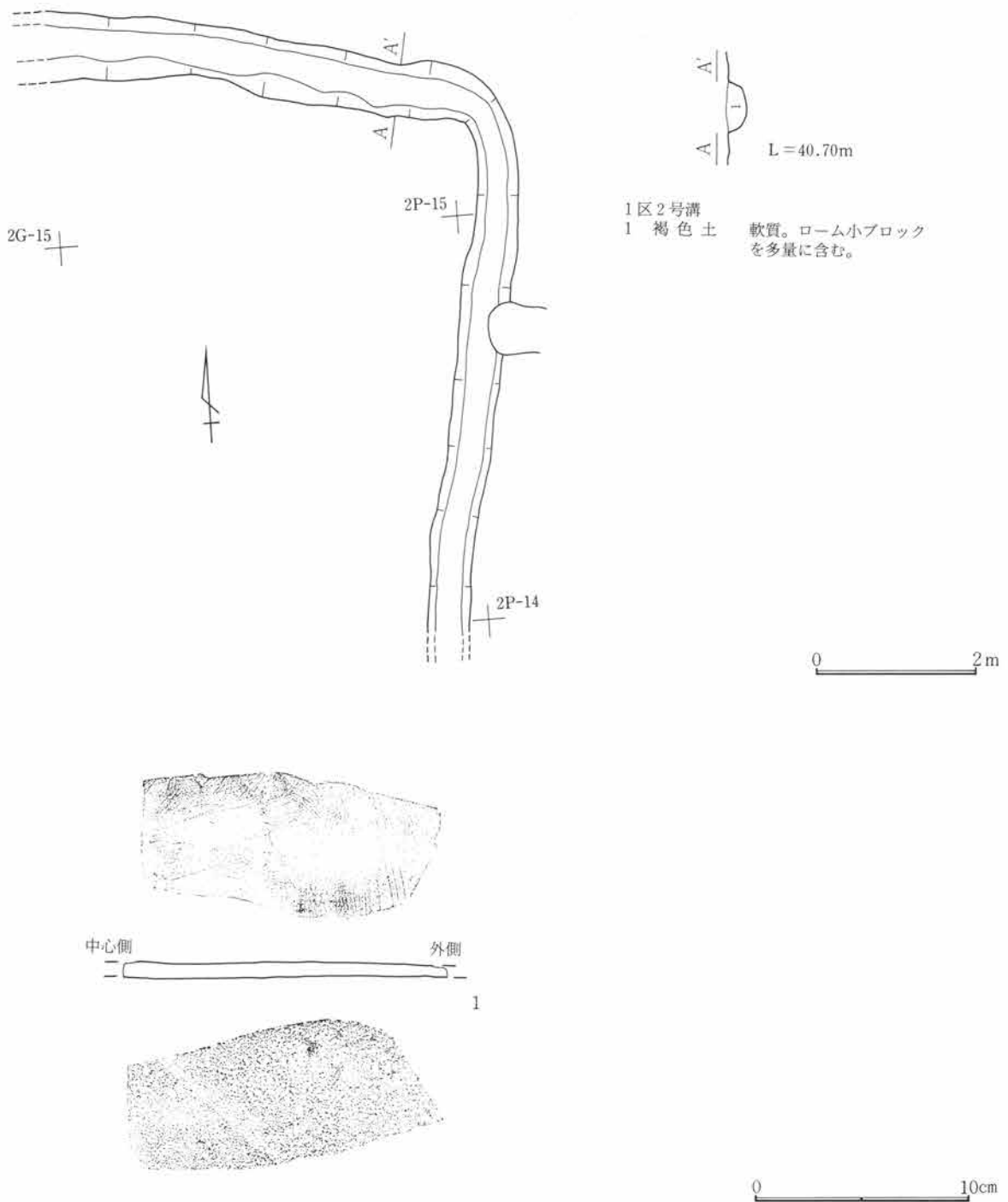
1区2号溝(図版48)

位置 20~2Q-13~15

規模 幅50~80cm、深さ20cmほどで、断面形は逆台形状を呈する。

調査所見 溝の平面形状は、逆「く」の字を呈する。検出範囲内での比高差は、南が約17cm高く、北が低くなっている。このことから、溝は南から北へ流下

し、中間ほどで西にほぼ直角に曲がっていたようである。埋土はローム粒を含み、軟質である。出土遺物は、焙烙・須恵器等で、ほとんどが破片である。埋土や遺物の状況から、時期は昭和の初め頃と考えられる。



第143図 1区2号溝及び出土遺物実測図

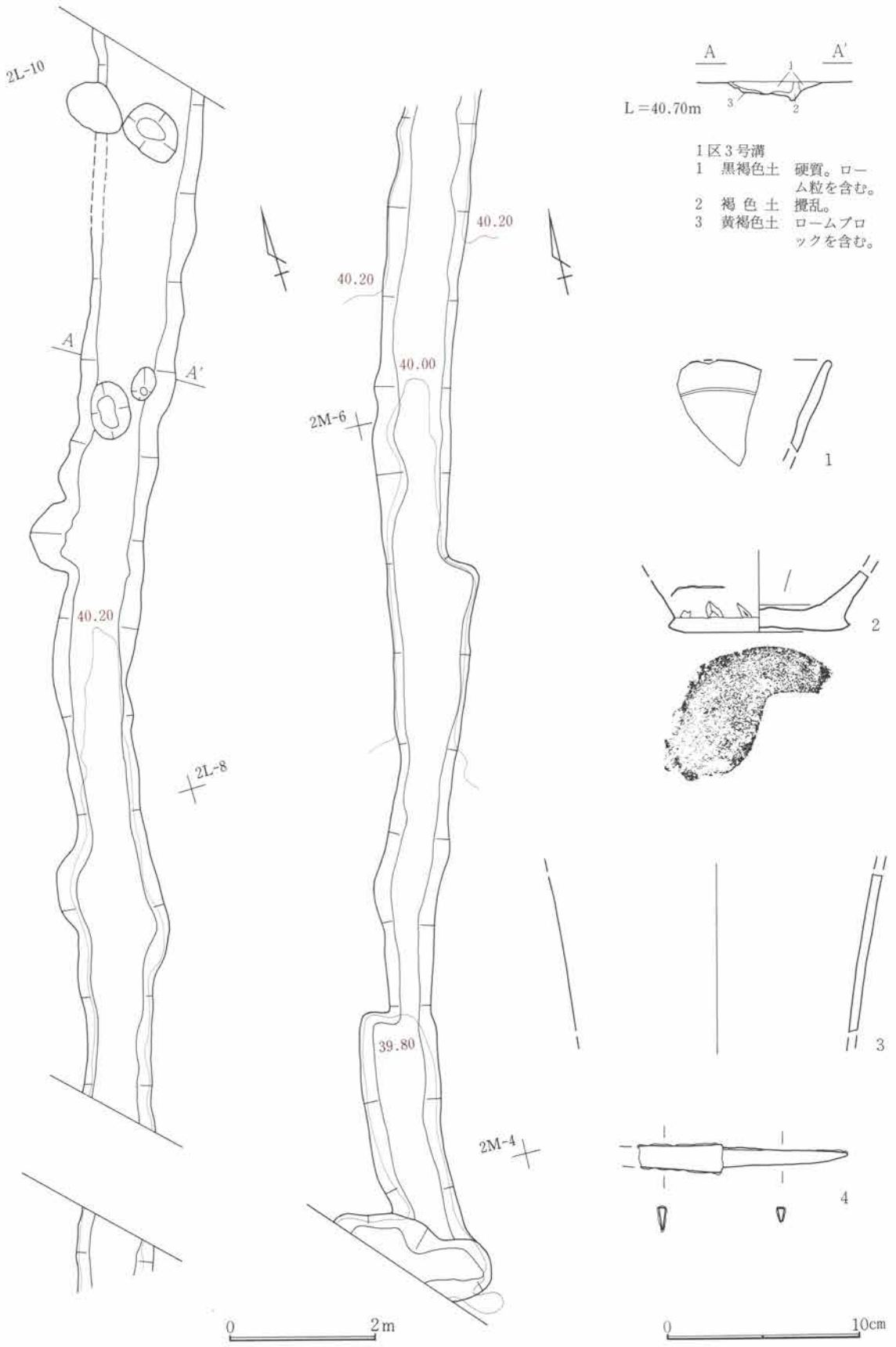
1区3号溝 (図版48)

位置 2K~2M-3~9

規模 幅1m~1.2m、深さ20cm程で、断面形は皿状を呈する。また、1区を南北に横切っており、検出された長さは約42.5mである。

調査所見 検出範囲内での比高差は、北側が約60cm

高くなっており、1区を北北東から南南西へと流下していたと考えられる。埋土は硬く締まっていた。出土遺物は、土師器の小さな破片が約300点、また植木鉢の破片が数点出土している。



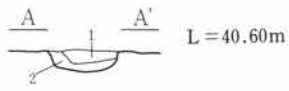
第144図 1区3号溝及び出土遺物実測図

1区4号溝 (図版48)

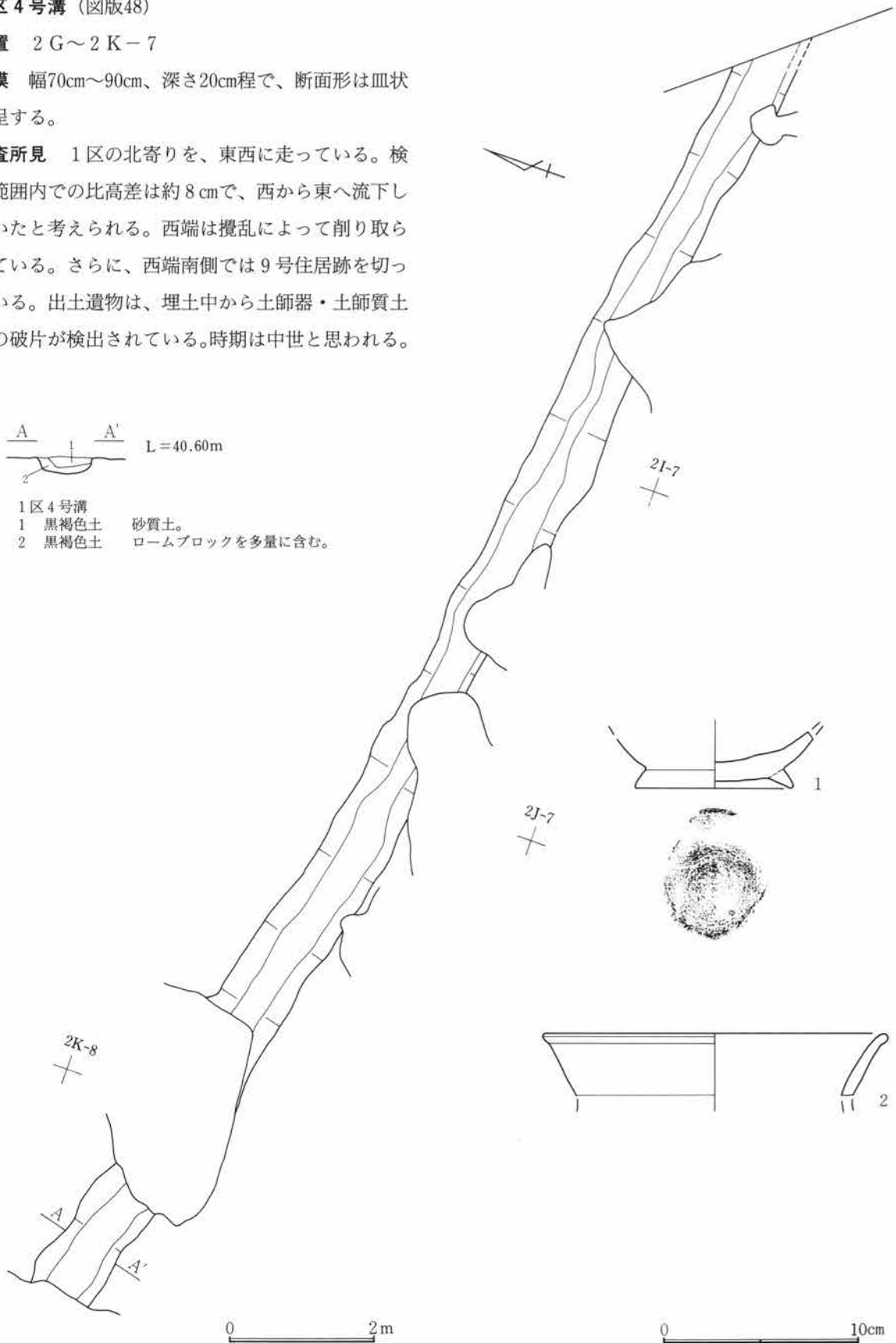
位置 2G~2K-7

規模 幅70cm~90cm、深さ20cm程で、断面形は皿状を呈する。

調査所見 1区の北寄り、東西に走っている。検出範囲内での比高差は約8cmで、西から東へ流下していたと考えられる。西端は攪乱によって削り取られている。さらに、西端南側では9号住居跡を切っている。出土遺物は、埋土中から土師器・土師質土器の破片が検出されている。時期は中世と思われる。



- 1区4号溝
 1 黒褐色土 砂質土。
 2 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。



第145図 1区4号溝及び出土遺物実測図

2区5号溝 (図版48・49)

位置 L・M-6~8、M-9~10

規模 幅60~70cm、深さ20~55cmで、断面形は皿状を呈する。**調査所見** 2区東端を南北に走る。検出範囲内での比高差は約50cmで、低台地縁辺部を北から南へ流下していたと考えられる。方位は、下流方向に向かって、N-82°-Eである。埋土は褐色で若干砂質土を含んでおり、軟質である。

2区6号溝 (図版49)

位置 L・M-10・11、M-6~9

規模 幅25~30cm、深さ25~45cmで、断面形はU字形を呈する。**調査所見** 2区東端を5・7号溝と交差しながら南北に走るが、途中で緩やかなカーブを描く。検出範囲内での比高差はほとんど無く、水流方向は不明である。土層の状況から、5号溝よりは古く、7号溝よりは新しいと考えられる。

2区7号溝 (図版49)

位置 L・M-11、M-8~10、M・N-6・7

規模 幅50~85cm、深さ40~70cmで、断面形は緩やかなU字形を呈する。**調査所見** 2区東端を、5・6・8・11号溝と交差しながら、南北に走る。検出範囲内での比高差は25cmあり、低台地縁辺部を北から南へ流下していたと考えられ、下流方向に向かって方位は、N-79°-Wである。埋土は、ロームブロックを含む黒褐色土で、水流の痕跡は定かではない。交差する各溝との新旧関係であるが、土層等の状況から、5・6・8・11号の各溝は何れも7号溝の上から掘り込まれており、7号溝が最も古い。

2区8号溝 (図版49)

位置 N・O-7、P・Q-6・7

規模 幅100cm~160cm、深さ20cmで、断面形は皿状を呈する。**調査所見** 2区東端を、7・9号溝と交差しながら、東西に走る。検出範囲内の比高差はほとんど無く、水流方向は不明である。埋土は黒褐色で粘性があるが、顕著な水流の痕跡は窺えない。土層状況から、7・9号溝よりも新しいと思われる。

2区9号溝 (図版49)

位置 N・O・P-6、N-7・8・9、M・N-10・11、

M-12 **規模** 幅60cm深さ60~75cmで、断面形はU字形を呈する。**調査所見** 2区東端を5・8・10・11号溝と交差しながら、南北方向に走り、南端部で東西方向に走向が変化する。調査区北寄り、大きな攪乱により一部削り取られている。検出範囲内の比高差は18cmで、低台地縁辺部を北から南へ流下していたと考えられる。方位は、下流方向に向かってN-72°-W~N-15°-Wで、顕著な水流の痕跡は認められない。

また、東西方向に流れが変わる部分の9号溝南側縁辺に、径20~40cmほどの、やや四角いピットが10カ所確認されており、溝に伴う何らかの施設跡と考えられる。

2区10号溝 (図版49)

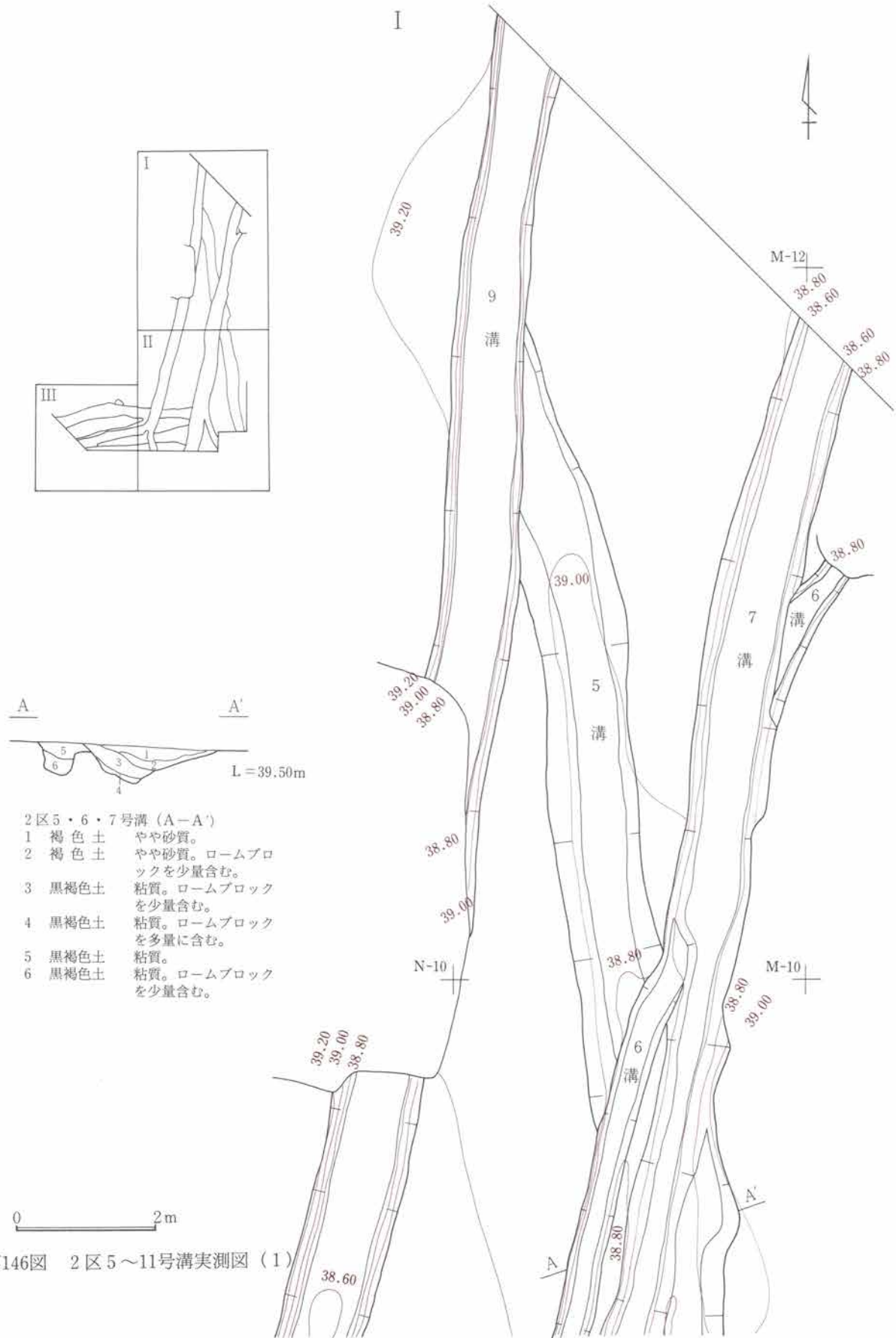
位置 N・O-6 **規模** 幅35cm深さ45cmで、断面形はU字形を呈する。**調査所見** 2区東端を11号溝と交差しながら南北方向に走り、9号溝走向が変化する、カーブ部分に接する。9号溝の北側に10号溝が確認できないこと、埋土が近似していることから、9・10号溝は同時期のものと考えられる。9号溝と10号溝の、底部の比高差は30cmである。10号溝は検出範囲内での比高差は確認できず、9号溝に流れ込んだものかまたは9号溝から取水したものかは不明である。また10号溝の西側縁辺では、南北方向で等間隔に4カ所、溝底部に2カ所、直径15~20cmのピットが検出され、溝に伴う施設跡と考えられる。

2区11号溝 (図版49)

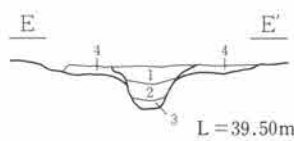
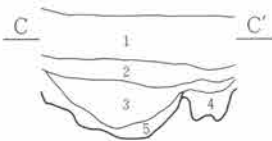
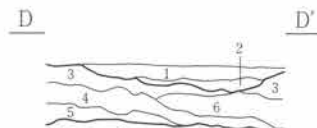
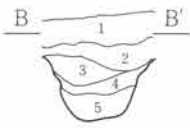
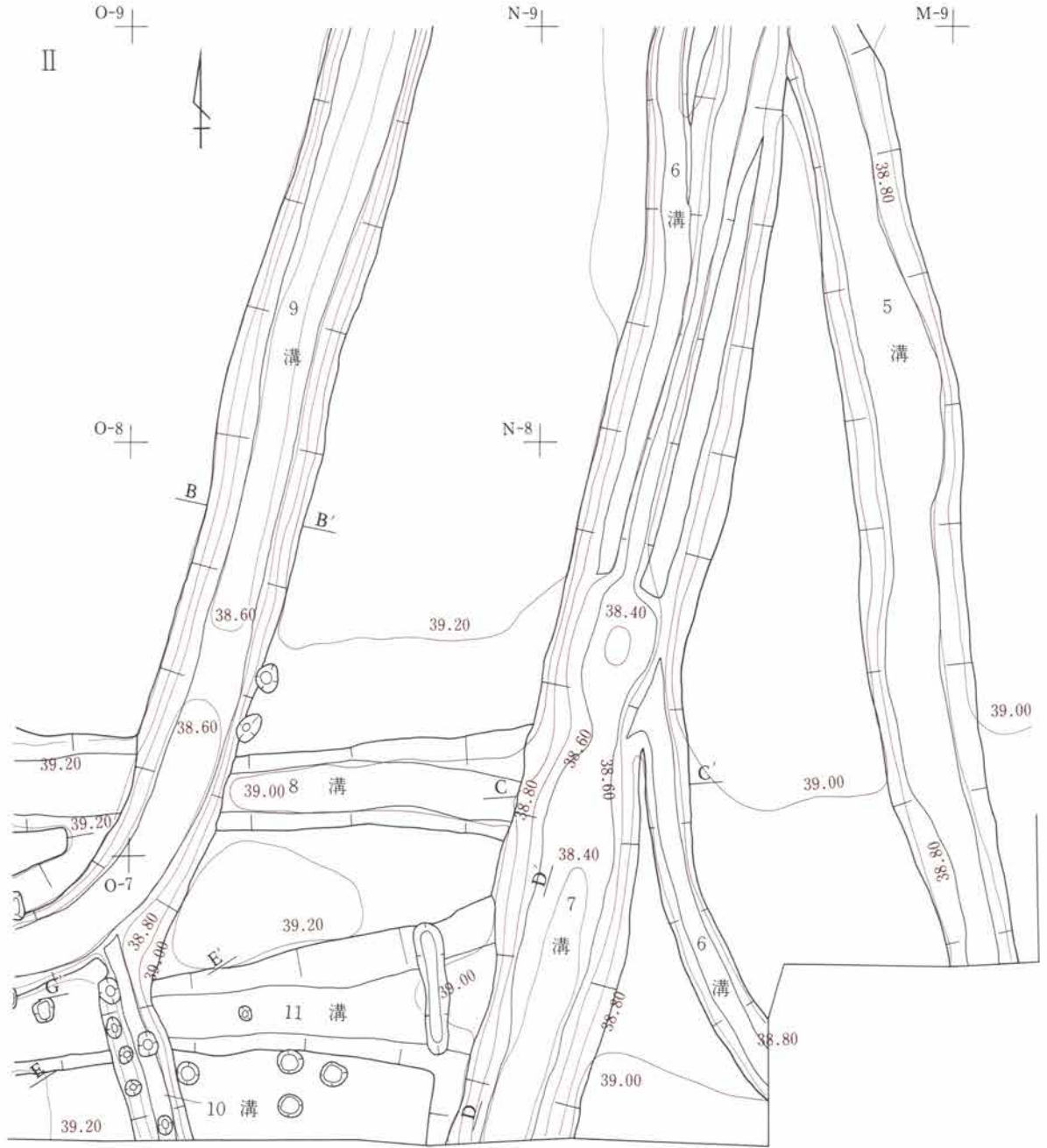
位置 N~P-6 **規模** 幅50~80cm、深さ15cmほどで、断面は皿状を呈する。**調査所見** 2区東端を7・10号溝と交差しながら、東西方向に走る。検出範囲内の比高差はほとんど無く、流下方向は不明である。土層状況から、7号溝より新しく、10号溝よりも古いと思われる。

まとめ

2区の溝は、5号溝から11号溝まですべて近世のものと思われる。新旧関係は、新しいものから8、5、9・10、11、6、7号溝の順と考えられる。



第146図 2区5～11号溝実測図(1)



2区9号溝 (B-B')

- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 黒褐色土 砂質。
- 3 黒褐色土 砂質。ローム粒を含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 黒色土 ロームブロックを多量に含む。

2区6・7号溝 (C-C')

- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 黒褐色土 粘質。ロームブロックを少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 4 黒色土 ローム小ブロックを含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。

第147図 2区5～11号溝実測図(2)

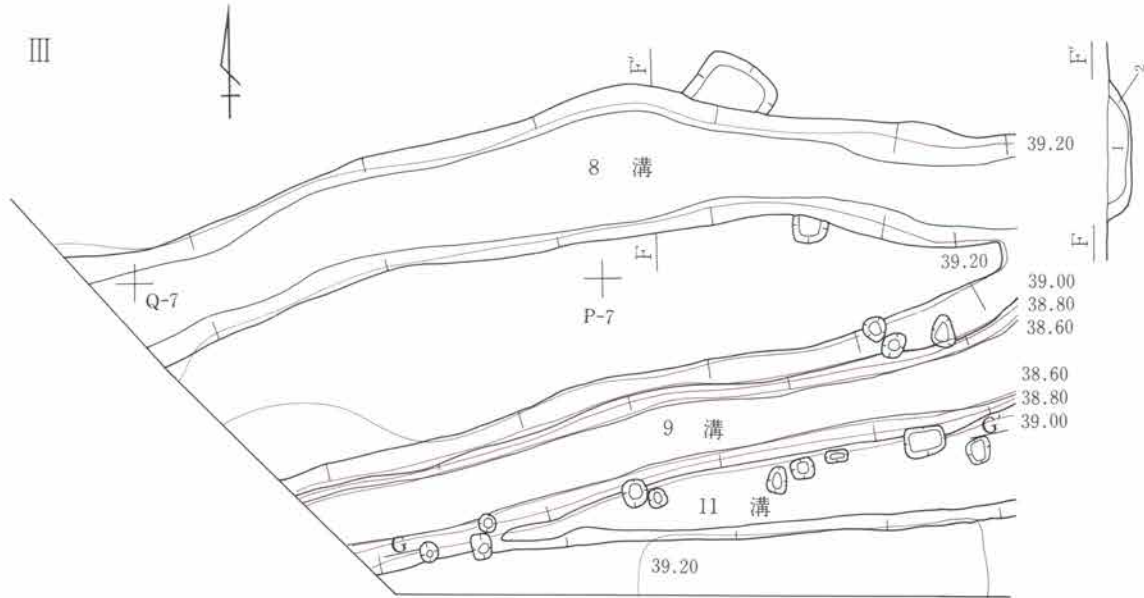
0 2m

2区7・11号溝 (D-D')

- 1 黒褐色土 砂質。
- 2 黒褐色土 やや粘質。ローム粒を含む。
- 3 黒褐色土 粘質。ローム小ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 粘質。ロームブロックを多量に含む。
- 5 黒褐色土 粘質。ロームブロックを含む。
- 6 黒褐色土 粘質。ローム小ブロックを多量に含む。

2区10・11号溝 (E-E')

- 1 黒褐色土 粘質。ロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 粘質。ローム小ブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。

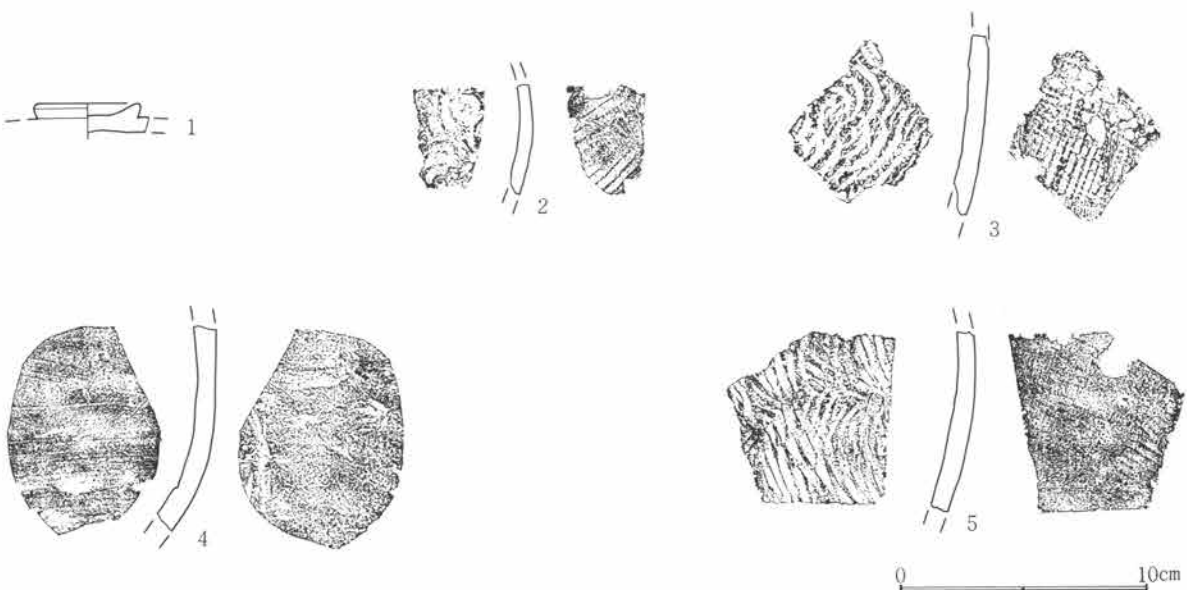


2区8号溝 (F-F')

- 1 黒褐色土 粘質。ローム粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。

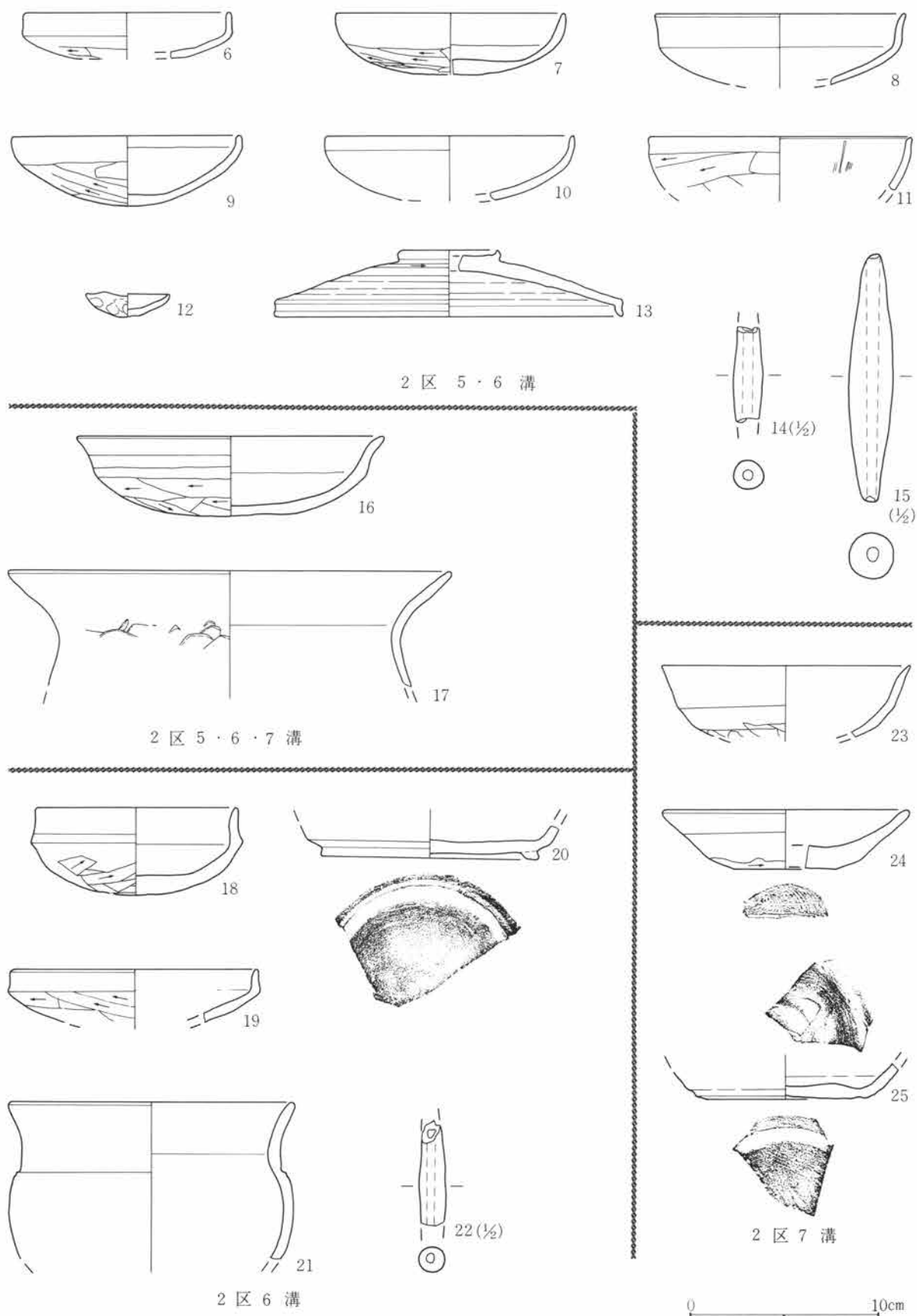
第148図 2区5～11号溝実測図(3)

L=39.50m 0 2m

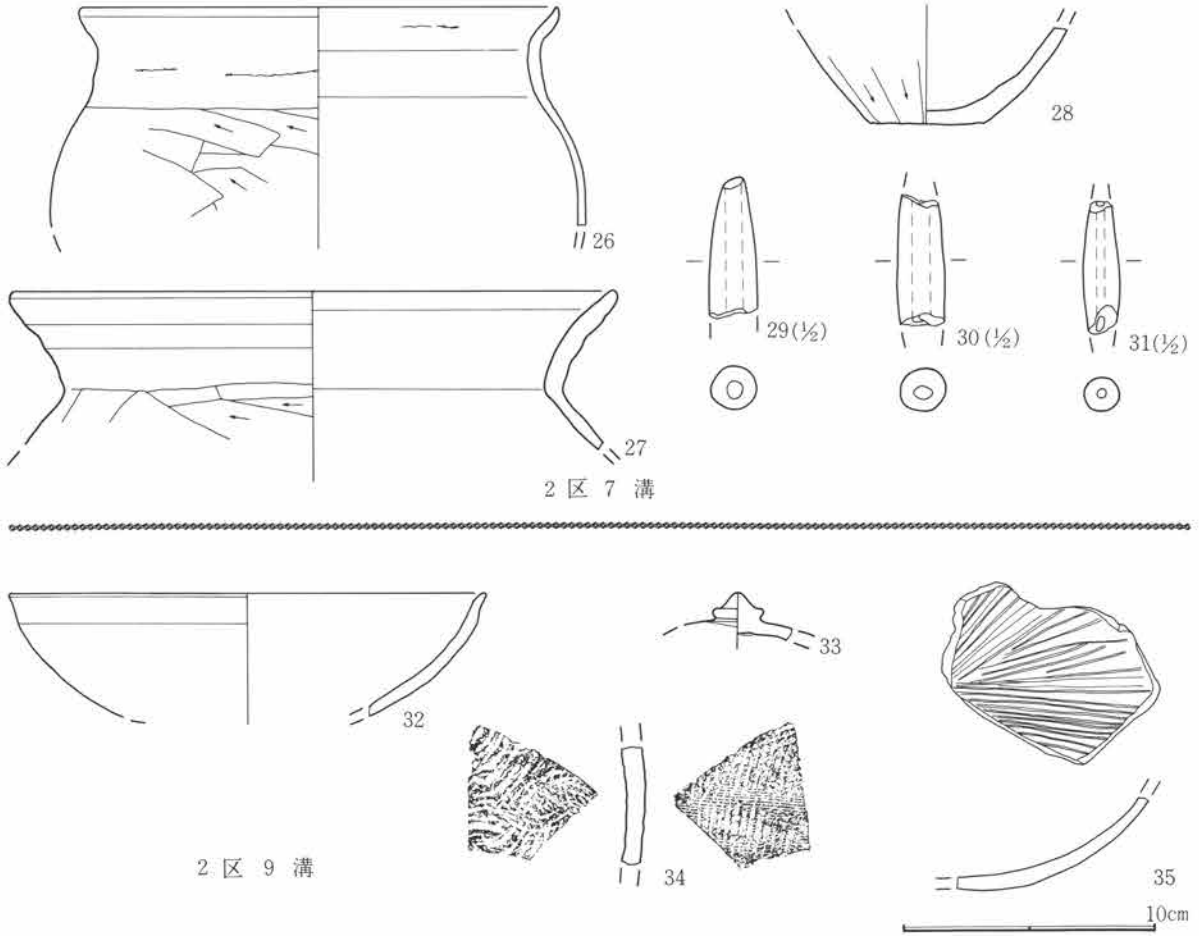


第149図 2区5号溝出土遺物実測図

第5章 遺構と遺物



第150図 2区5～7号溝出土遺物実測図



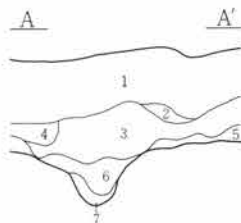
第151図 2区7・9号溝出土遺物実測図

3区1号溝 (図版50)

位置 K-1~4

規模 幅70cm深さ35cmほどで、断面はU字形を呈する。調査所見 3区1・2号住の西を南北方向に走

る。埋土にはAs-Cが混入しているが、顕著な水流の痕跡は窺えない。出土遺物には、土師器の坏・甕の破片がわずかに出土している。時期は、古墳時代と思われる。



- | | |
|---------|-------------------|
| 3区1号溝 | |
| 1 暗褐色土 | 表土。 |
| 2 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 3 灰黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 4 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 5 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 6 暗褐色土 | ローム小ブロック・As-Cを含む。 |
| 7 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |

0 1m

第152図 3区1号溝実測図

3区2号溝 (図版50)

位置 M-3・4

規模 幅30~45cm、深さ10cmで、断面は緩やかなU字形を呈する。

調査所見 3区1号井戸東を、多少蛇行しながら南北方向に走る。検出範囲内での比高差は10cmで、北から南に流下していたと思われる。北よりの部分で、3区3号土坑を切っている。

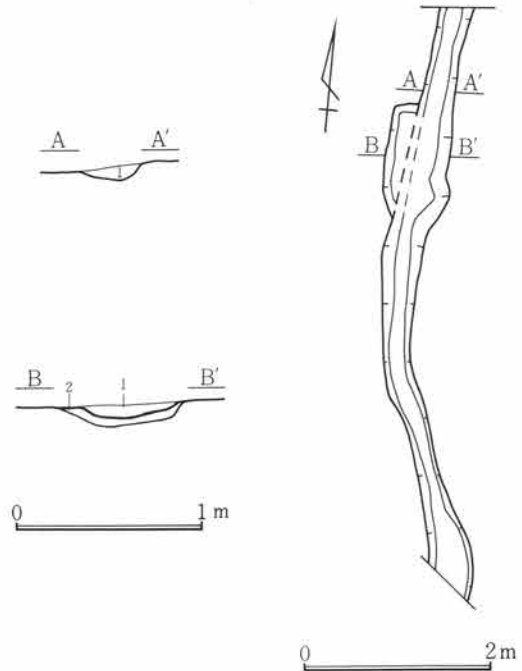
3区2号溝 (A-A')

1 暗褐色土 やや砂質。ロームブロックを含む。

3区2号溝 (B-B')

1 暗褐色土 やや砂質。ロームブロックを含む。

2 暗褐色土 ロームブロックを含む。



第153図 3区2号溝及び3号土坑実測図

第5節 土坑 (図版50~59)

本遺跡で検出された土坑は、131基である。土坑の多くは、古墳時代から近代の所産と思われ、縄文・弥生時代の土坑は見られない。この時期判別は、遺物が主体的に出土した例が少ないため、埋土や形状、周辺遺構の様相から判断した。

本報告では、個々の土坑の説明を省き、特徴を持った土坑をまとめて述べてみたい。また、各土坑の計測値や位置は後出の表を参照していただきたい。土坑番号は、1・2区と3区とで、それぞれ通番になっており、混乱を避けるため、土坑番号の前に区名を冠した。

尚、調査中に、井戸・風倒木等に名称を変更しているため、1区の63号土坑と、2区の74・97~100・106~109・112~118・134・136・146・147・149・150・152号土坑は欠番である。

当遺跡で検出されたほとんどの土坑は、その埋土中に土器の破片を含んでいるが、土坑の時期を決定

できるような遺物の出土例は少ない。

その中で、古墳時代以前に比定される土坑としては、151号土坑がある。151号土坑は、土層の堆積状況から47号住居跡によって、東側が削り取られており47号住居跡より古いものと考えられる。

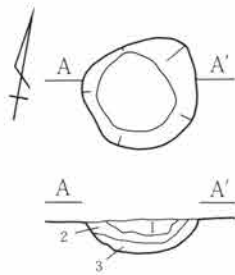
また、埋土中に浅間A軽石層が確認できたものとしては、45号土坑があげられる。45号土坑は1783年(天明3)をあまり遡らない時期の所産であろう。さらに、37号土坑埋土中で浅間B軽石粒子が検出されている。

その他、近世・近代の土坑に比定されるものとしては、前出の45号土坑の他に、9・22・46・47・60号土坑があげられる。また、遺物は伴わないが、長方形を呈する土坑の大部分は、埋土に締まりがなく、また遺物を伴わず、近世~現代の遺構であろう。

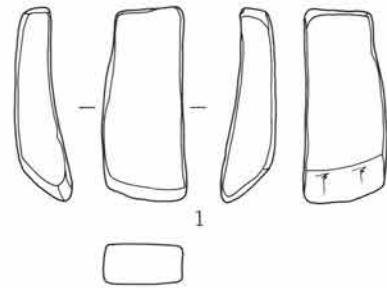
また、105号土坑は、鉄滓が多量に検出されており、時期は不明であるが鍛冶関係の廃棄坑と思われる。

22・40・41・42・131~135・138~144・148号土坑(土坑群)は、全体図を参照されたい。

1区1号土坑



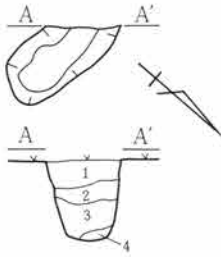
- 1号土坑
 1 黒褐色土 砂質。ローム粒少量含む。
 2 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。
 3 黄褐色土 炭化物粒を少量含む。



- 3号土坑
 1 暗褐色土

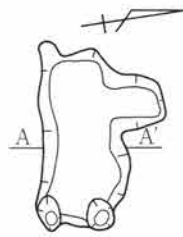
- ローム粒を多量に含む。

1区2号土坑



- 2号土坑
 1 暗褐色土 表土。
 2 黄褐色土 ローム粒を含む。
 3 灰黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 4 黄橙色土 ロームブロック主体。

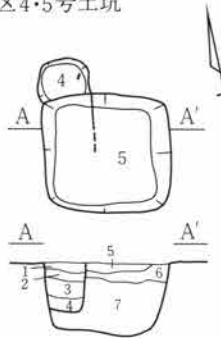
1区3号土坑



- 3号土坑
 1 暗褐色土

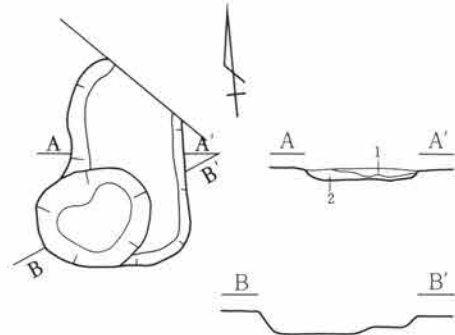
- ローム粒を多量に含む。

1区4・5号土坑



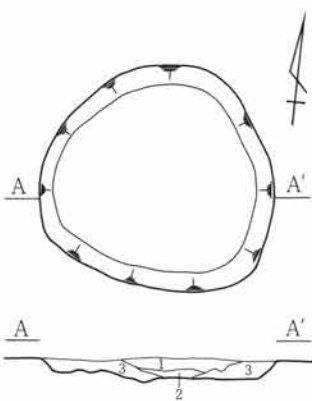
- 4・5号土坑
 1 暗褐色土 ローム粒含む。
 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。
 3 暗褐色土 ローム粒少量含む。
 4 暗褐色土 ロームブロック多量に含む。
 5 灰黄褐色土 ロームブロック多量に含む。
 6 灰黄褐色土 ロームブロックを少量含む。
 7 灰黄褐色土 ロームブロック多量に含む。

1区6号土坑



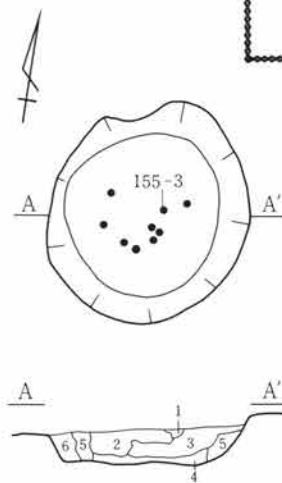
- 6号土坑
 1 暗褐色土 ローム粒含む。
 2 黄橙色土 ロームブロック主体。

1区8号土坑



- 8号土坑
 1 褐色土 締まりが弱い。
 2 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
 3 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。

1区9号土坑

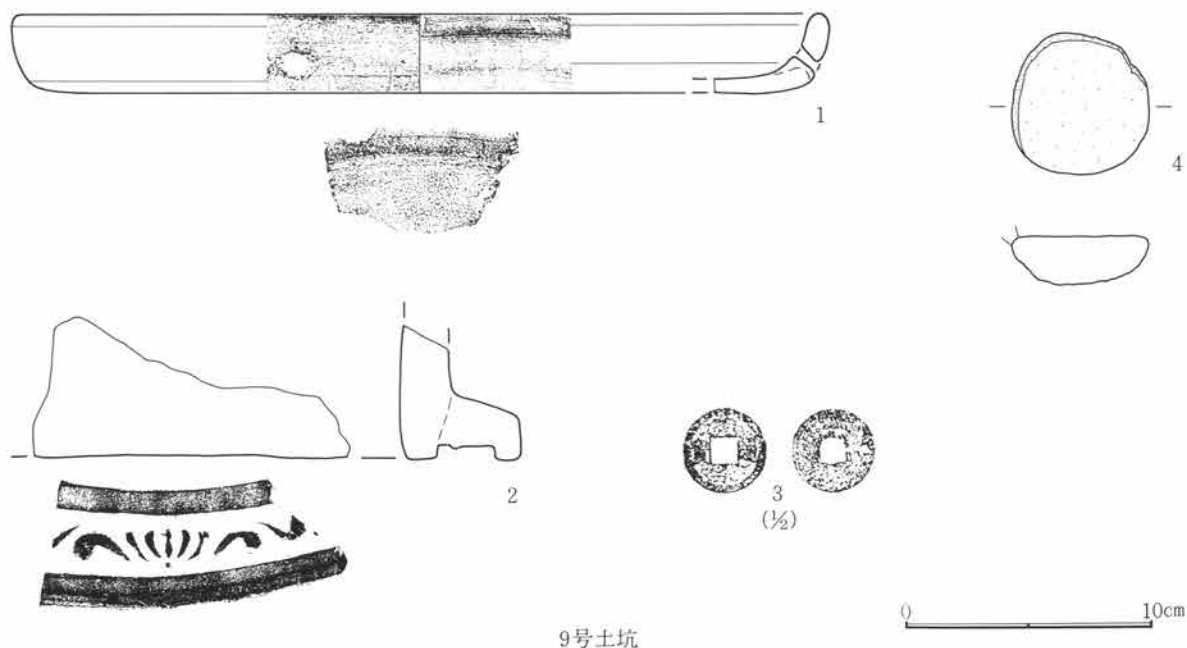


- 9号土坑
 1 黄橙色土 ロームブロック。
 2 黒褐色土 砂質土。ロームブロックを多量に含む。
 3 暗褐色土 砂質土。ローム粒を含む。
 4 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
 5 暗褐色土 砂質土。ローム粒・白色粘土粒を含む。
 6 暗褐色土 ロームブロック多量に含む。

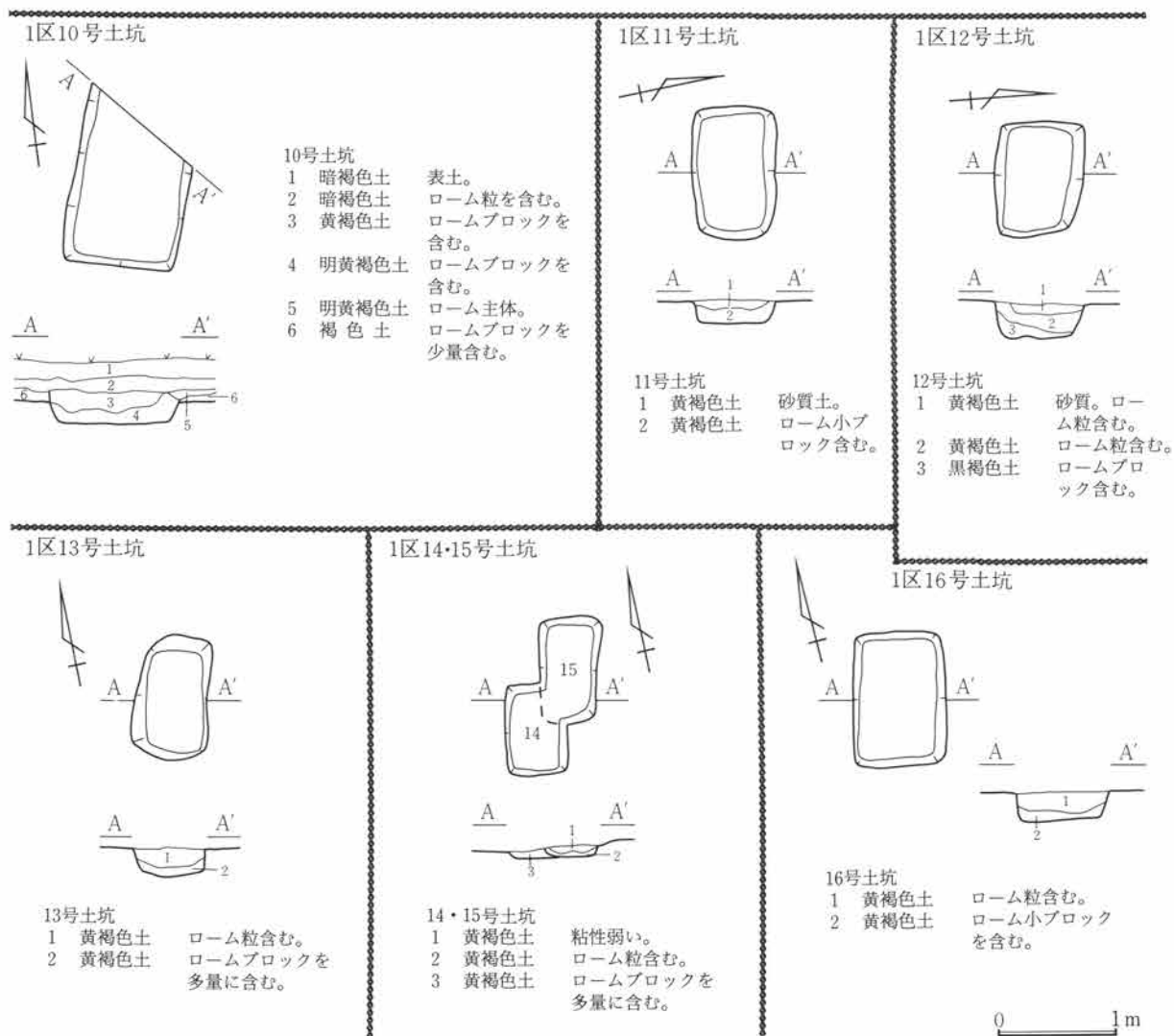
0 1m

0 10cm

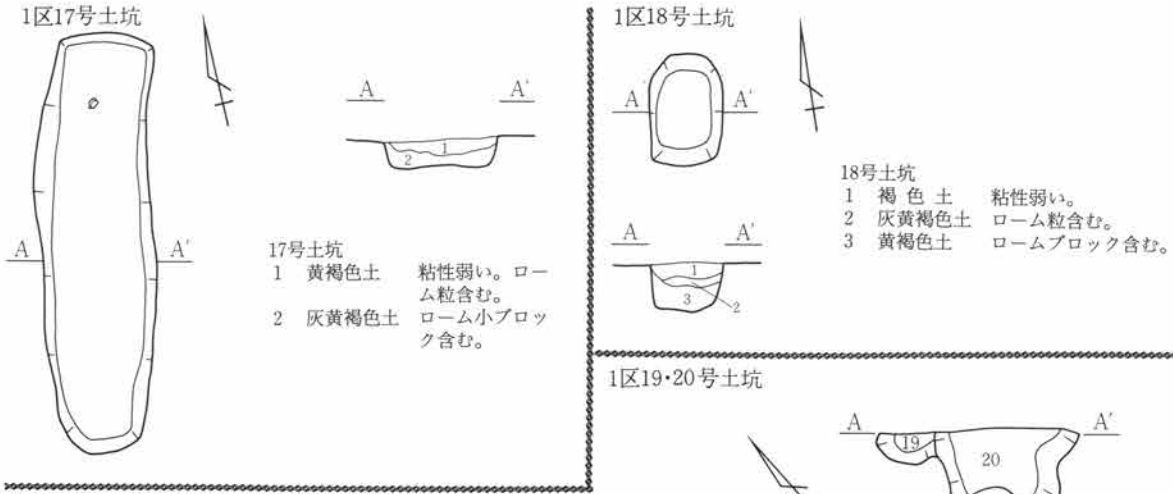
第154図 1～9号土坑及び出土遺物実測図



9号土坑



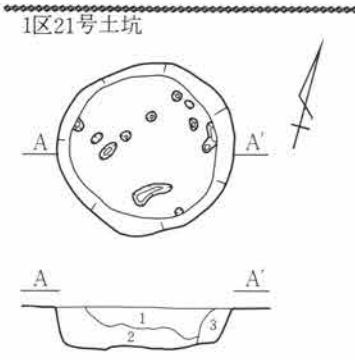
第155図 9号土坑出土遺物及び10～16号土坑実測図



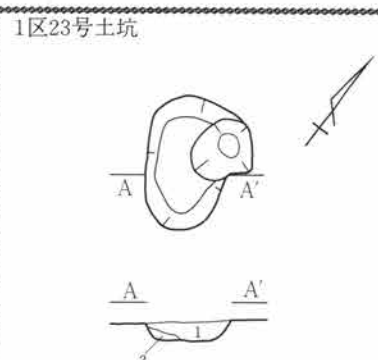
17号土坑
 1 黄褐色土 粘性弱い。ローム粒含む。
 2 灰黄褐色土 ローム小ブロック含む。

18号土坑
 1 褐色土 粘性弱い。
 2 灰黄褐色土 ローム粒含む。
 3 黄褐色土 ロームブロック含む。

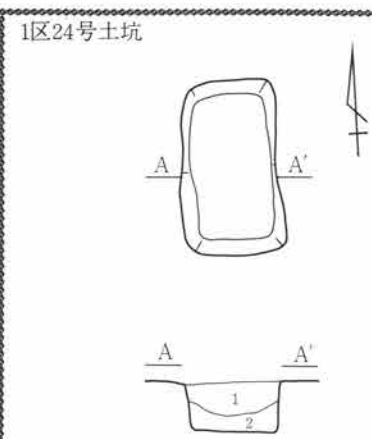
19・20号土坑
 1 黄褐色土 表土。
 2 黄褐色土 ローム粒含む。
 3 褐色土 ローム小ブロック含む。
 4 灰黄褐色土 ローム小ブロック含む。
 5 灰黄褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
 6 褐色土 ローム粒少量含む。
 7 黄褐色土 ロームブロック含む。
 8 黄褐色土 ローム粒含む。



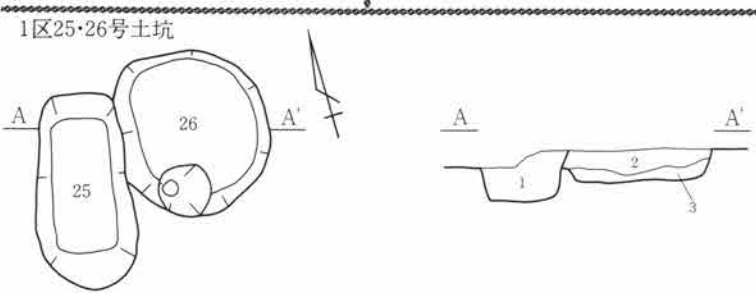
21号土坑
 1 黄褐色土 ローム粒を含む。
 2 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。
 3 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。



23号土坑
 1 黄褐色土 ローム粒少量含む。
 2 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。



24号土坑
 1 黄褐色土 ロームブロックを含む。
 2 灰黄褐色土 ロームブロックを含む。



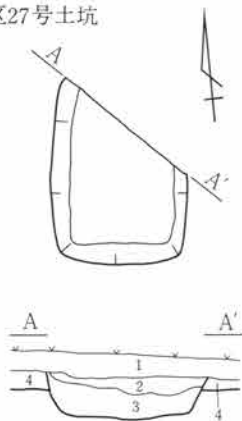
25・26号土坑
 1 暗褐色土 ロームブロック含む。
 2 灰黄褐色土 ローム粒を少量含む。
 3 黄褐色土 ロームブロック含む。



第156図 17～21・23～26号土坑実測図

第5章 遺構と遺物

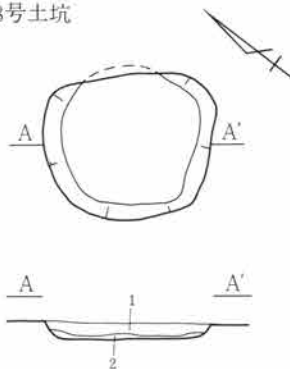
1区27号土坑



27号土坑

- 1 暗褐色土 表土。
- 2 黄褐色土 粘性弱い。ローム粒含む。
- 3 暗灰黄色土 ローム小ブロック含む。
- 4 暗褐色土 粘性弱い。

1区28号土坑



28号土坑

- 1 灰黄褐色土 粘性弱い。ローム粒含む。
- 2 灰黄褐色土 粘性弱い。ローム粒を多量に含む。

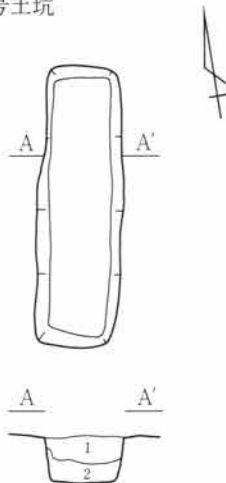
1区29号土坑



29号土坑

- 1 灰黄褐色土 粘性弱い。
- 2 黄褐色土 粘性弱い。ローム小ブロック含む。

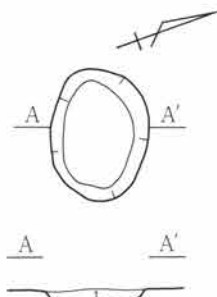
1区30号土坑



30号土坑

- 1 灰黄褐色土 粘性弱い。ローム小ブロック含む。
- 2 黄褐色土 ローム小ブロック含む。

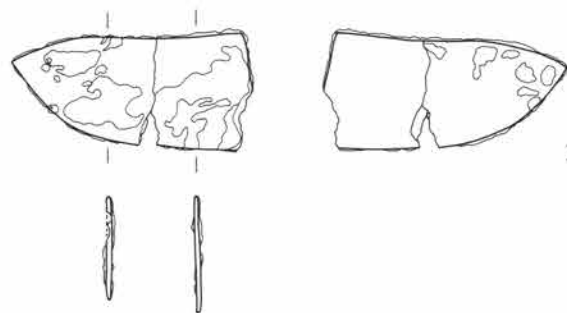
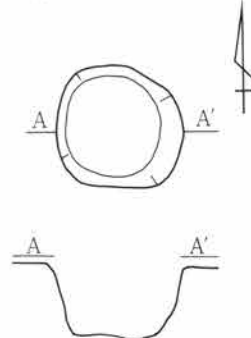
1区31号土坑



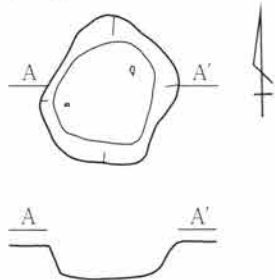
31号土坑

- 1 黒褐色土 ロームブロック・炭化物粒を含む。

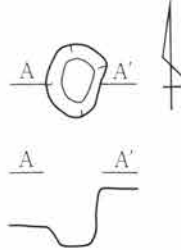
1区32号土坑



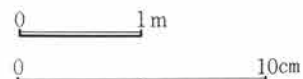
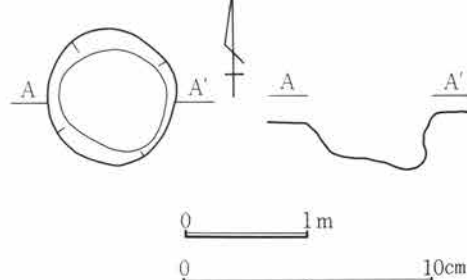
1区33号土坑



1区34号土坑

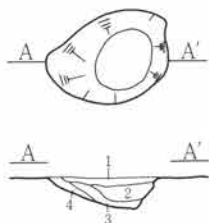


1区35号土坑



第157図 27～35号土坑及び出土遺物実測図

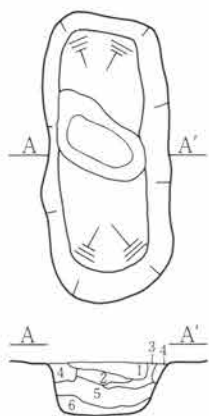
1区36号土坑



36号土坑

- 1 黄褐色土 焼土粒を少量含む。
- 2 灰黄褐色土 ローム粒含む。
- 3 黄褐色土 粘性弱い。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

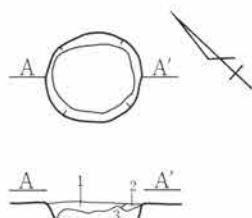
1区37号土坑



37号土坑

- 1 黄褐色土 締まり弱い。
- 2 黒褐色土 砂質。ローム粒を少量含む。
- 3 黒褐色土 砂質。ローム粒含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロック含む。
- 5 黒褐色土 砂質。ロームブロック含む。
- 6 黒褐色土 やや砂質。ロームブロック含む。

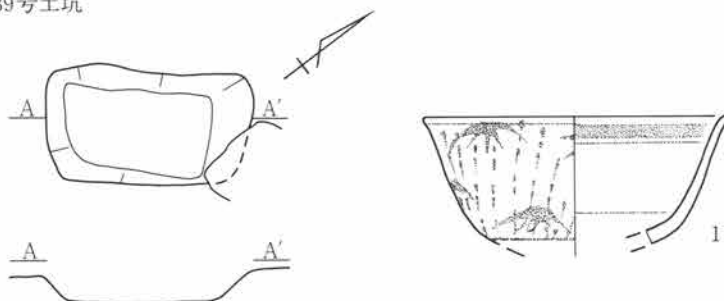
1区38号土坑



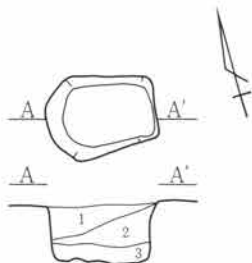
38号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を多量に含む。
- 2 黄褐色土 砂質。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを含む。

1区39号土坑



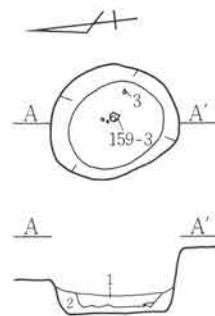
1区44号土坑



44号土坑

- 1 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。

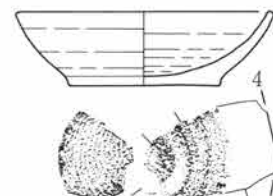
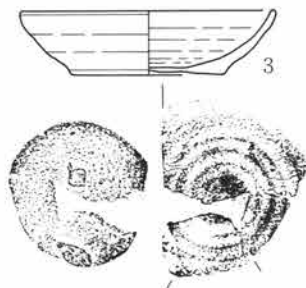
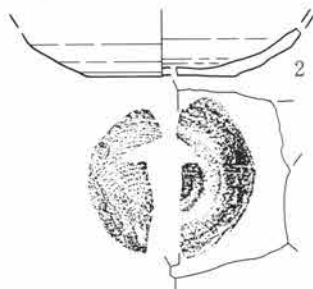
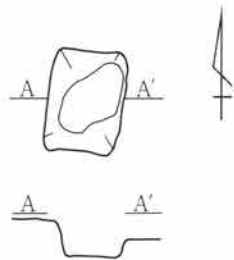
1区45号土坑



45号土坑

- 1 灰黄褐色土 浅間B軽石層。
- 2 黄褐色土 ローム粒を含む。

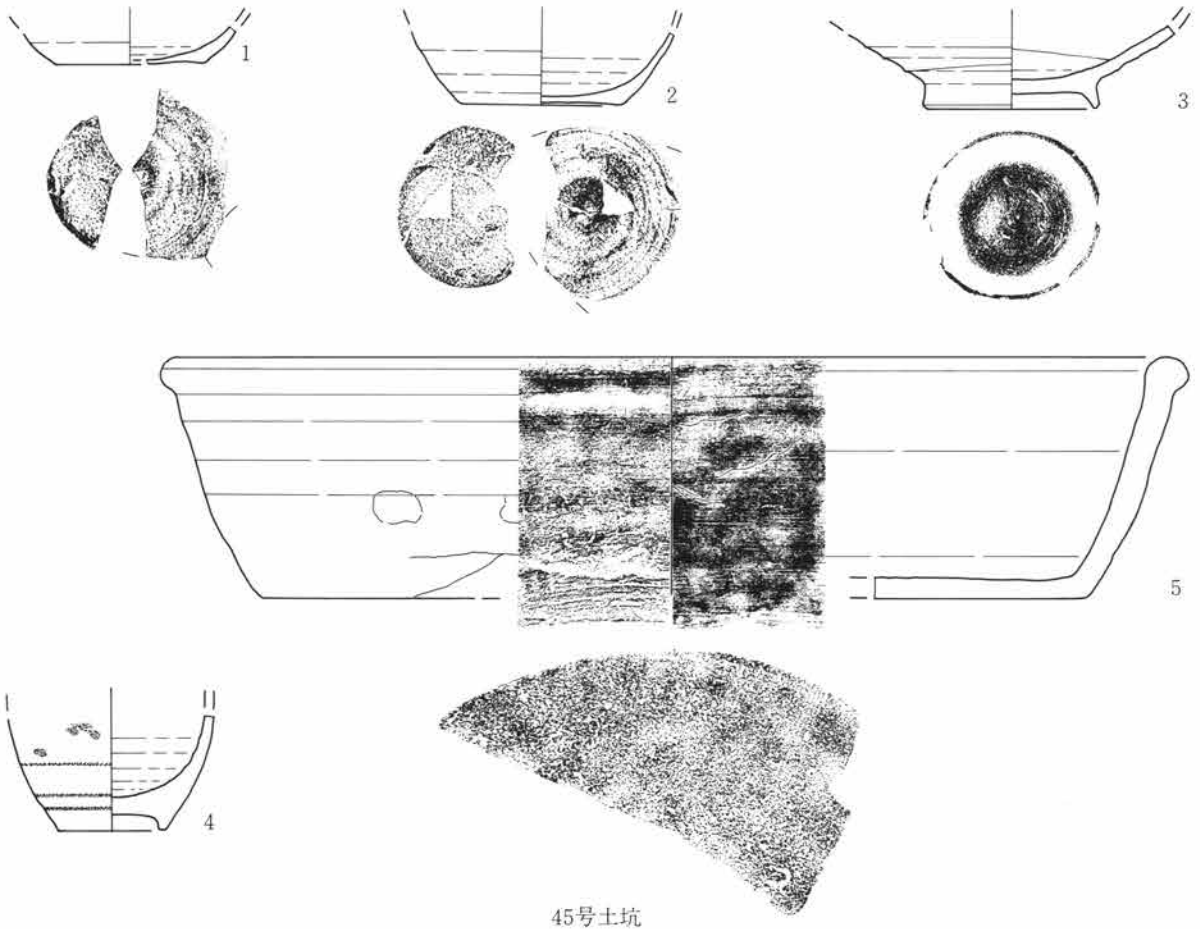
1区43号土坑



0 1m

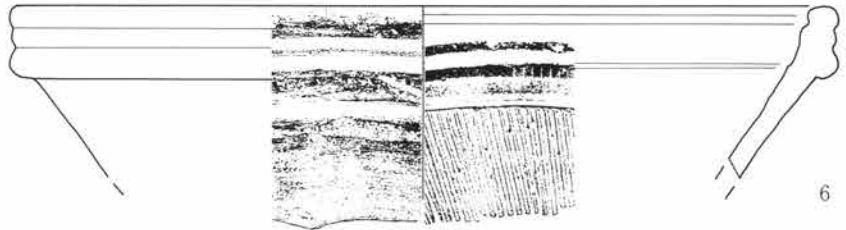
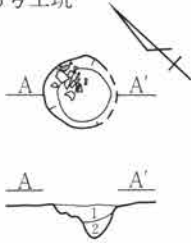
0 10cm

第158図 36~39・43~45号土坑及び出土遺物実測図



45号土坑

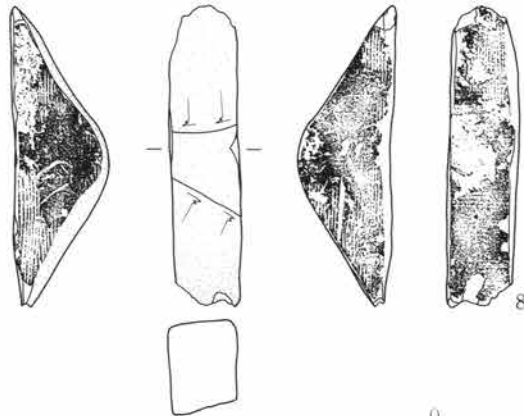
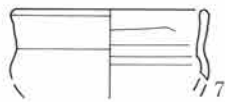
1区46号土坑



46号土坑

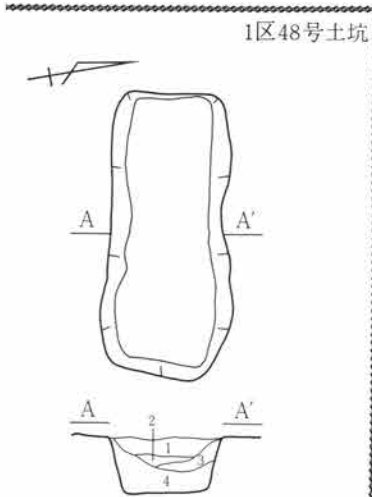
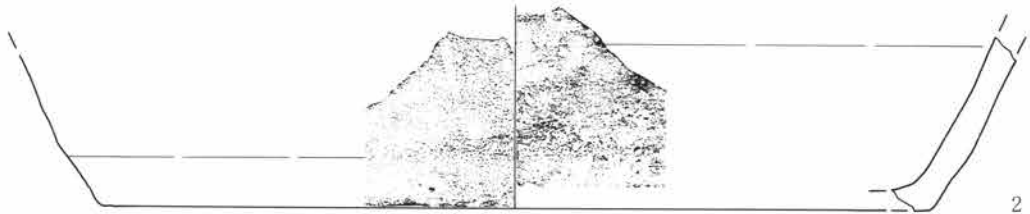
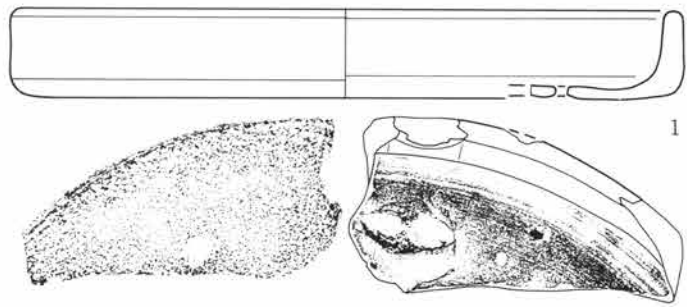
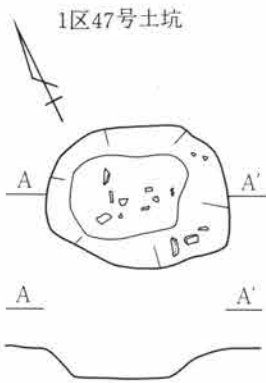
- 1 暗褐色土 ローム粒を含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。

0 1m

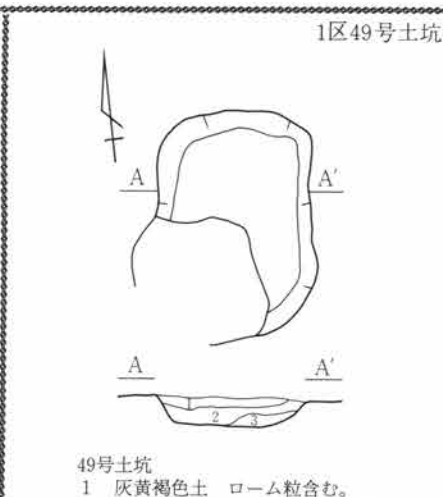


0 10cm

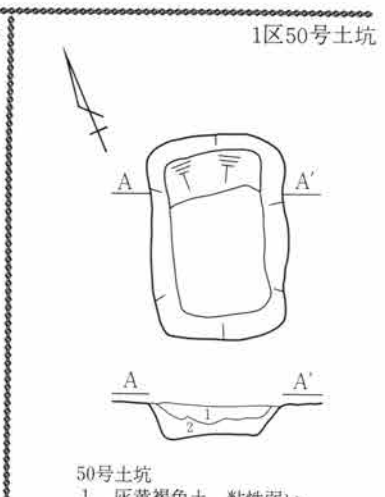
第159図 45・46号土坑及び出土遺物実測図



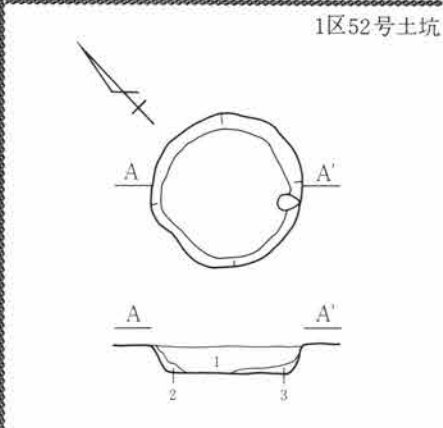
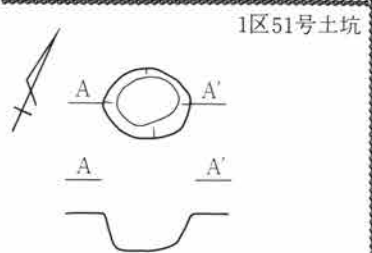
- 48号土坑
- 1 黄褐色土 ロームブロックを含む。
 - 2 褐灰色土 ロームブロックを少量含む。
 - 3 灰黄褐色土 ロームブロックを少量含む。
 - 4 褐灰色土 ロームブロックを少量含む。



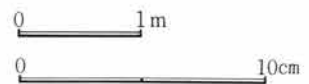
- 49号土坑
- 1 灰黄褐色土 ローム粒含む。
 - 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。
 - 3 明黄褐色土 ローム主体。



- 50号土坑
- 1 灰黄褐色土 粘性弱い。
 - 2 黄褐色土 ローム粒を含む。



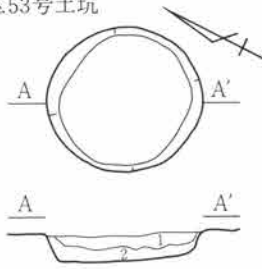
- 52号土坑
- 1 黒褐色土 ローム小ブロックを含む。
 - 2 灰黄褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
 - 3 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。



第160図 47~52号土坑及び出土遺物実測図

第5章 遺構と遺物

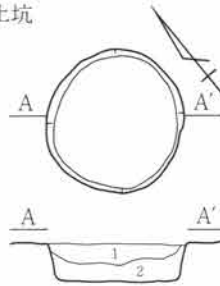
1区53号土坑



53号土坑

- 1 黒褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 2 灰黄褐色土 ローム小ブロックを含む。

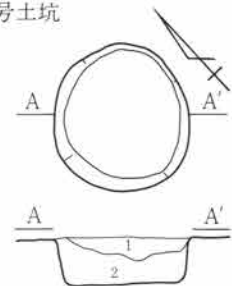
1区54号土坑



54号土坑

- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。

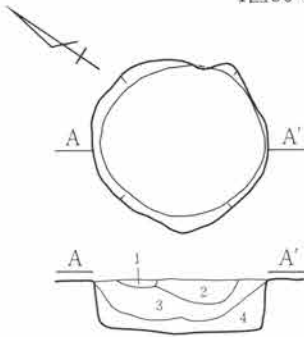
1区55号土坑



55号土坑

- 1 褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。

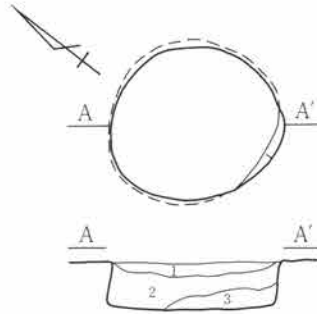
1区56号土坑



56号土坑

- 1 黄褐色土 ローム粒少量含む。
- 2 黄褐色土 黒褐色土ブロックを含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 黄褐色土 ローム粒少量含む。

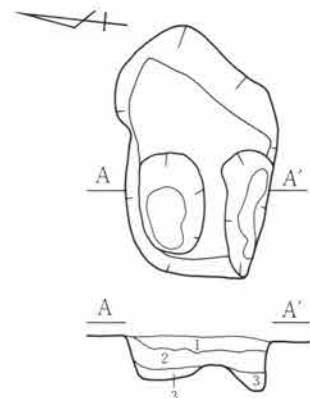
1区57号土坑



57号土坑

- 1 灰黄褐色土 ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- 3 黄褐色土 ローム小ブロックを含む。

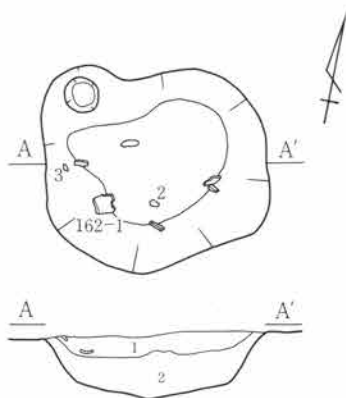
1区58号土坑



58号土坑

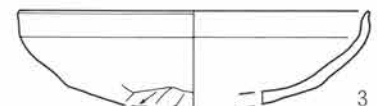
- 1 灰黄褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒を含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒を含む。

1区59号土坑



59号土坑

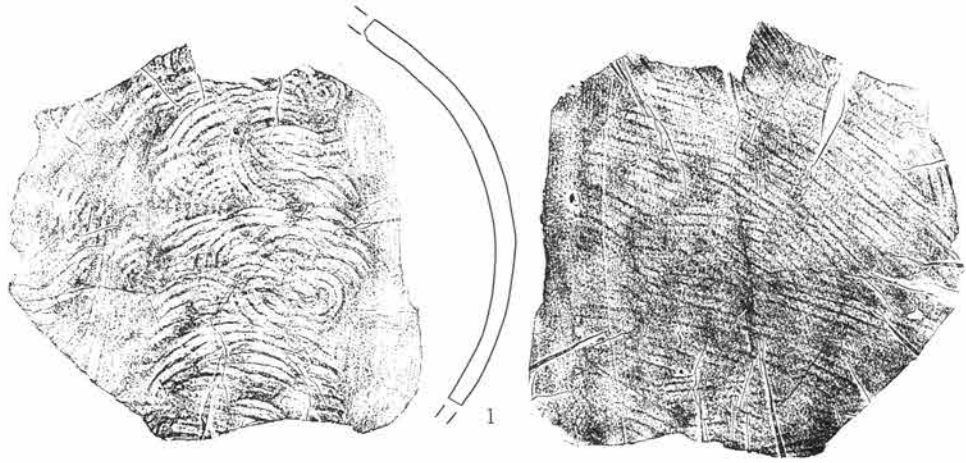
- 1 黒褐色土 ローム粒を含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを含む。



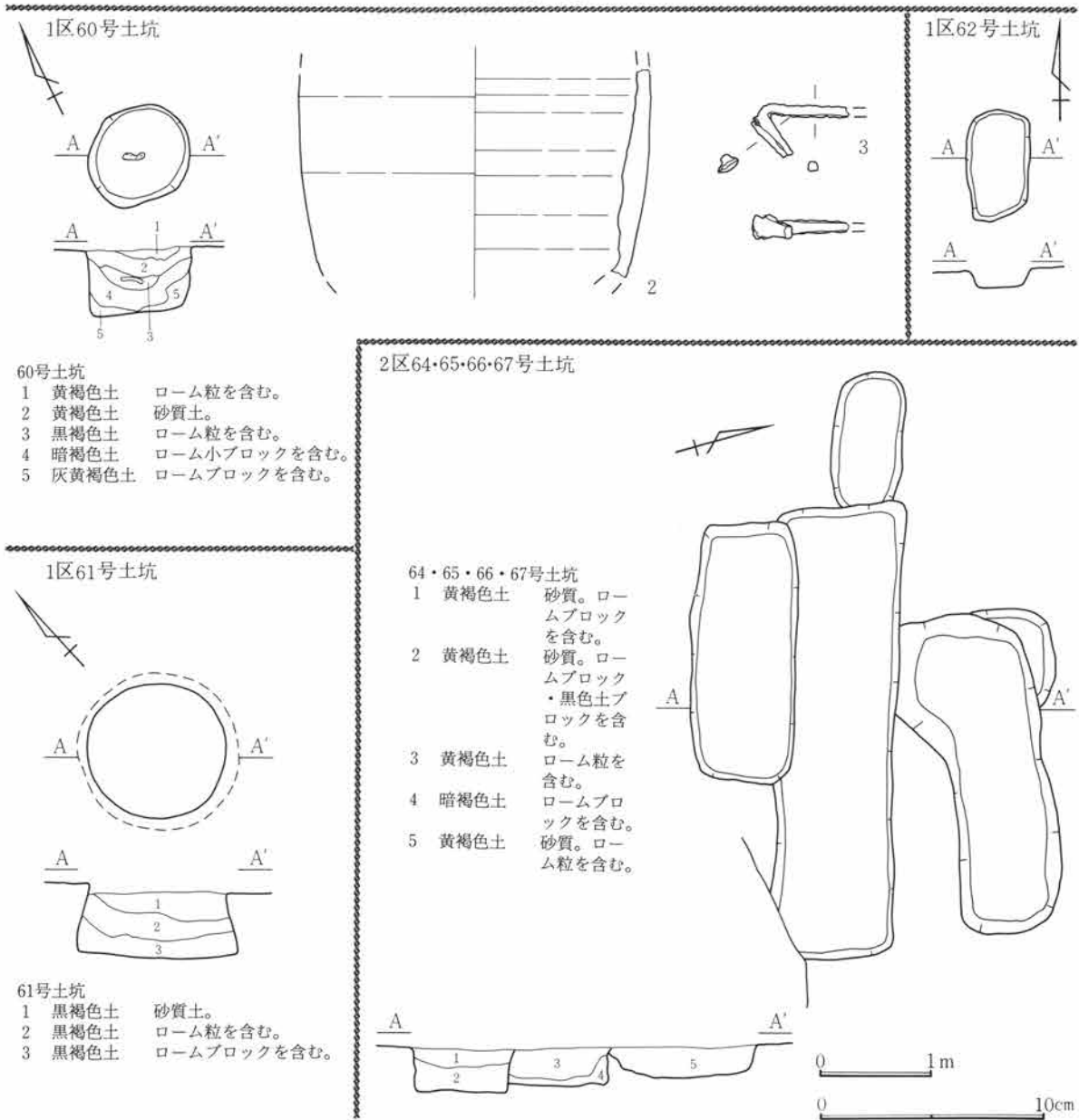
0 1m

0 10cm

第161図 53～59号土坑及び出土遺物実測図



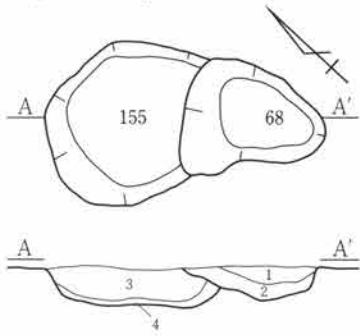
59号土坑



第162図 59号土坑出土遺物及び60~67号土坑実測図

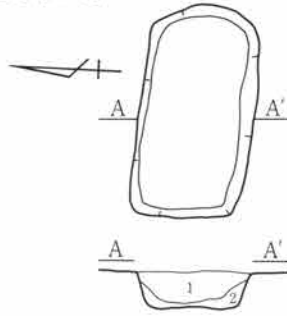
第5章 遺構と遺物

2区68・155号土坑



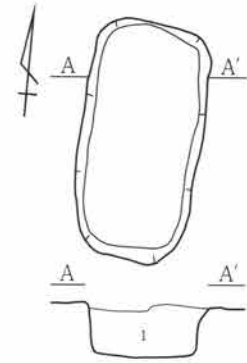
- 68・155号土坑
 1 黄褐色土 ローム粒を含む。
 2 明黄褐色土 ローム主体。
 3 黒褐色土 ローム粒を含む。
 4 明黄褐色土 ローム主体。

2区69号土坑



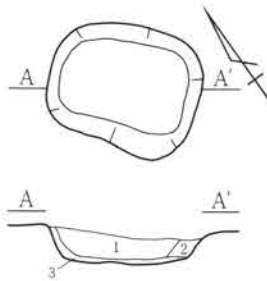
- 69号土坑
 1 灰黄褐色土 砂質。ローム粒を含む。
 2 黄褐色土 ローム粒を含む。

2区70号土坑



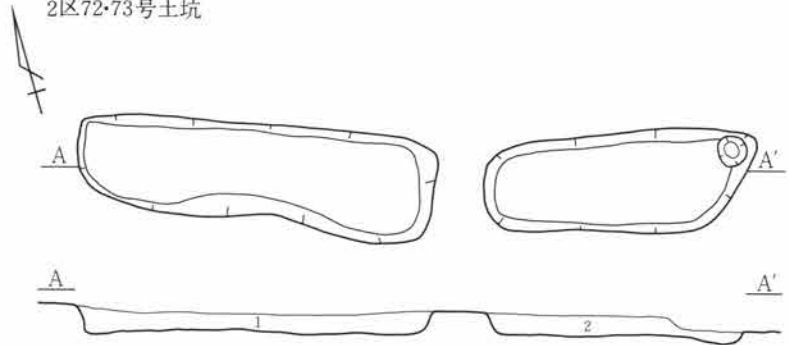
- 70号土坑
 1 灰黄褐色土 ローム小ブロックを含む。

2区71号土坑



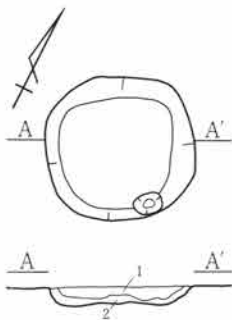
- 71号土坑
 1 黒褐色土 砂質。ロームブロックを含む。
 2 暗褐色土 やや砂質。ロームブロックを含む。
 3 褐色土 ロームブロック主体。

2区72・73号土坑



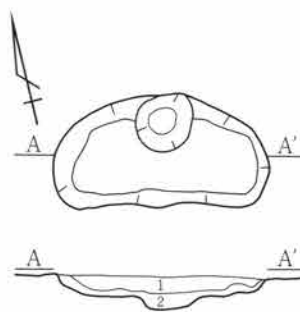
- 72・73号土坑
 1 褐灰色土 やや砂質。ローム粒を含む。
 2 灰黄褐色土 ローム粒を含む。

2区75号土坑



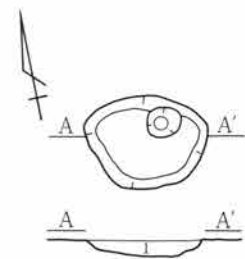
- 75号土坑
 1 暗褐色土 やや砂質。ロームブロックを少量含む。
 2 褐色土 粘質。ロームブロックを多量に含む。

2区76号土坑



- 76号土坑
 1 暗褐色土 やや砂質。ローム粒を含む。
 2 褐色土 ロームブロックを含む。

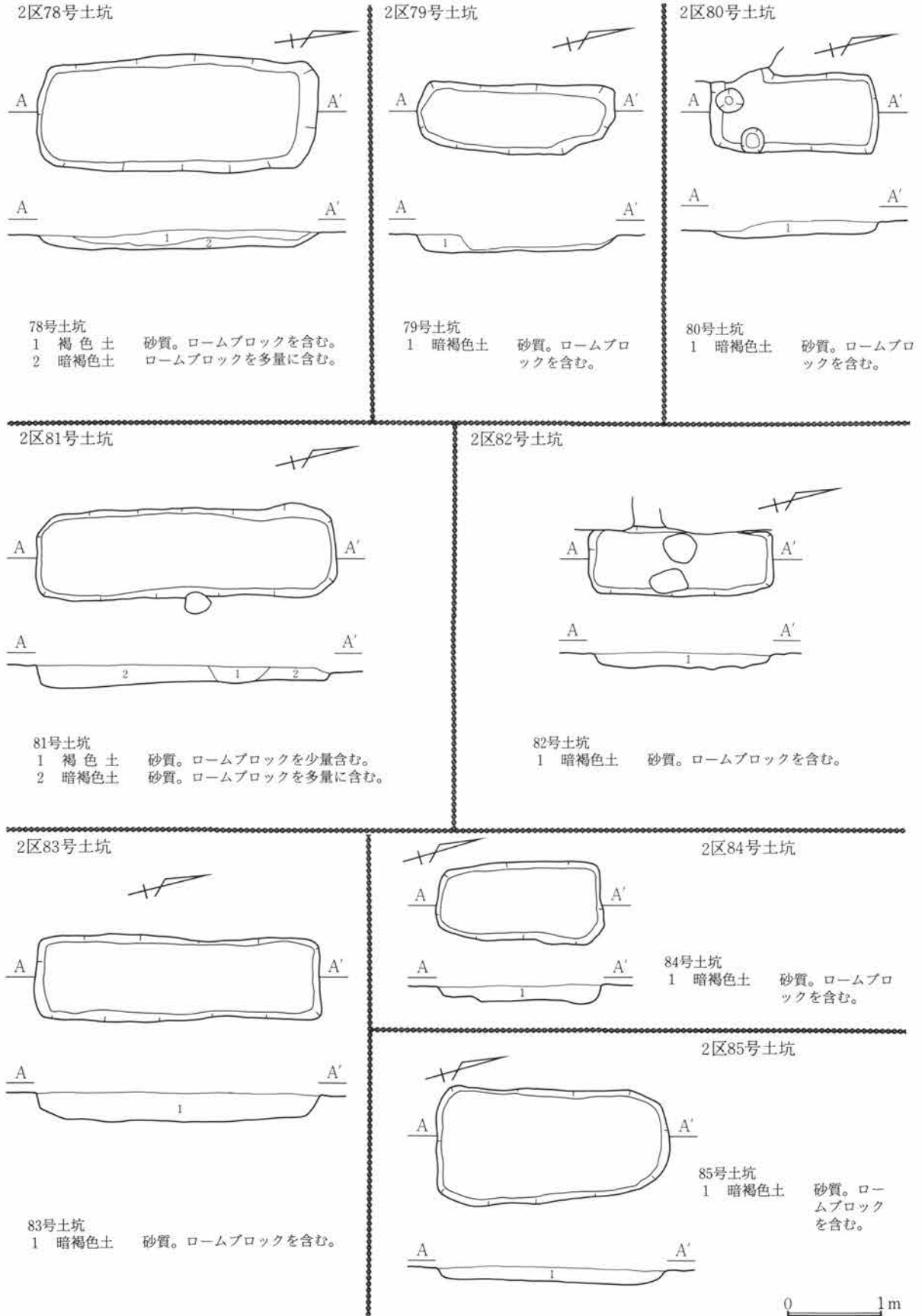
2区77号土坑



- 77号土坑
 1 暗褐色土 やや砂質。ロームブロックを少量含む。



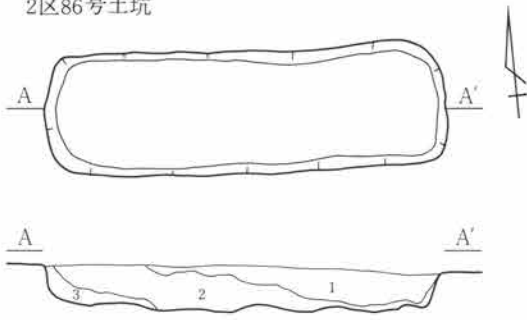
第163図 68～73・75～77号土坑実測図



第164図 78~85号土坑実測図

第5章 遺構と遺物

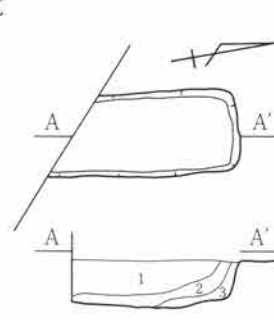
2区86号土坑



86号土坑

- 1 暗褐色土 砂質。ロームブロックを含む。
- 2 褐色土 やや砂質。ロームブロックを多量に含む。
- 3 黒褐色土 砂質。

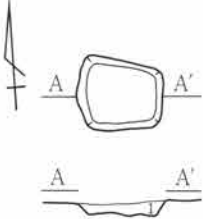
2区87号土坑



87号土坑

- 1 暗褐色土 やや砂質。ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土 粘質。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを含む。

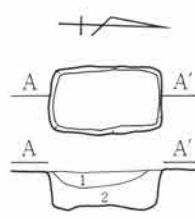
2区88号土坑



88号土坑

- 1 暗褐色土 やや砂質。ローム粒を含む。

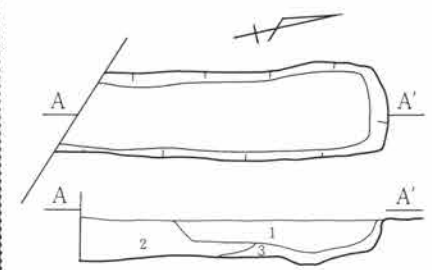
2区89号土坑



89号土坑

- 1 暗褐色土 やや砂質。ローム粒を含む。
- 2 暗褐色土 やや砂質。ロームブロックを含む。

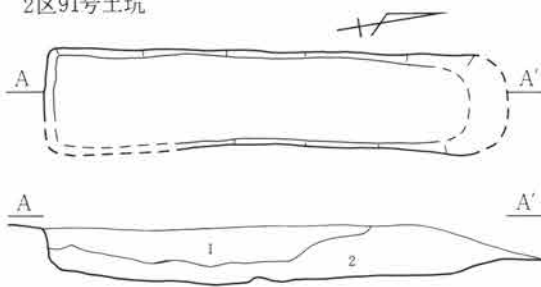
2区90号土坑



90号土坑

- 1 黒褐色土 やや砂質。
- 2 暗褐色土 やや砂質。ロームブロックを含む。
- 3 黄褐色土 粘質。ロームブロック含む。

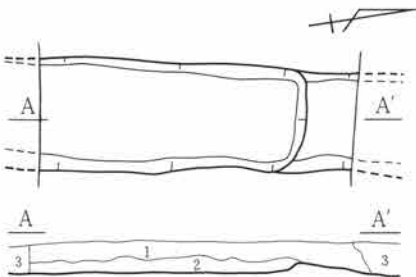
2区91号土坑



91号土坑

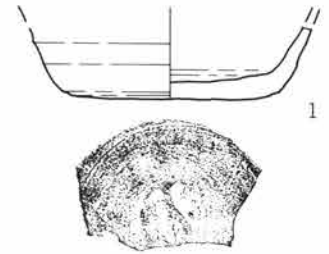
- 1 褐色土 やや砂質。ロームブロックを多量に含む。
- 2 暗褐色土 やや砂質。ロームブロックを少量含む。

2区92号土坑



92号土坑

- 1 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 2 黄褐色土 粘質。ロームブロック主体。
- 3 攪乱

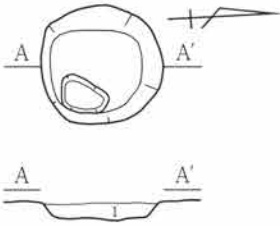


0 1 m

0 10 cm

第165図 86～92号土坑及び出土遺物実測図

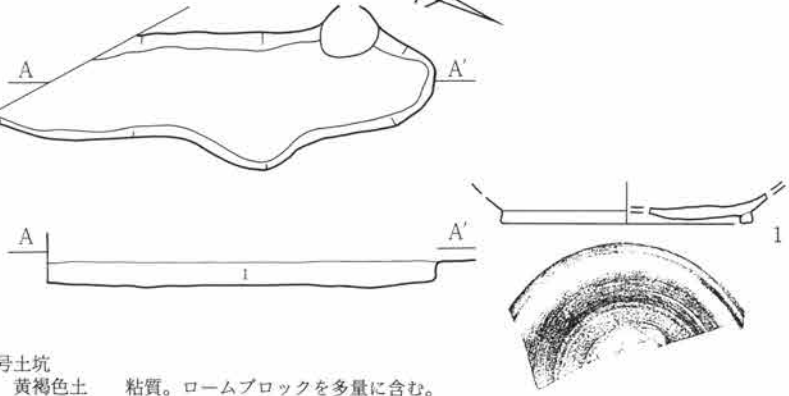
2区93号土坑



93号土坑

1 暗褐色土 砂質。ローム粒を少量含む。

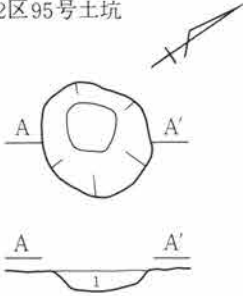
2区94号土坑



94号土坑

1 黄褐色土 粘質。ロームブロックを多量に含む。

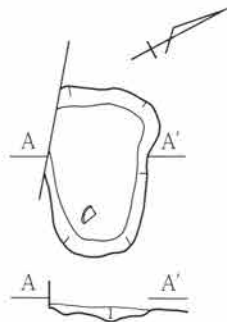
2区95号土坑



95号土坑

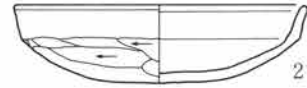
1 暗褐色土 やや砂質。ロームブロックを含む。

2区96号土坑

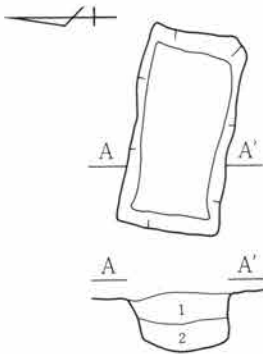


96号土坑

1 暗褐色土 ロームブロックを含む。



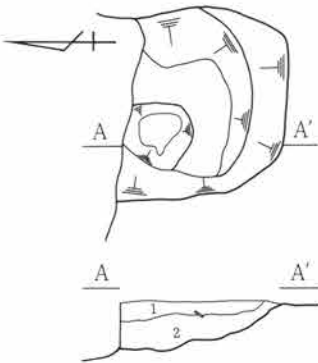
1区101号土坑



101号土坑

1 黄褐色土 ロームブロックを含む。
2 灰黄褐色土 ロームブロックを少量含む。

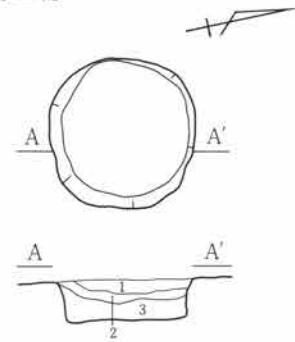
1区102号土坑



102号土坑

1 黒褐色土 ローム粒を含む。
2 暗褐色土 ロームブロックを含む。

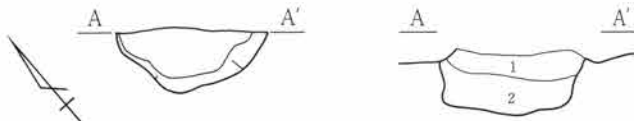
1区103号土坑



103号土坑

1 暗褐色土 砂質。
2 暗褐色土 砂質。ロームブロックを含む。
3 黒褐色土 やや砂質。ロームブロックを含む。

1区104号土坑



104号土坑

1 灰黄褐色土 砂質。ローム粒を含む。
2 黒褐色土 やや砂質。

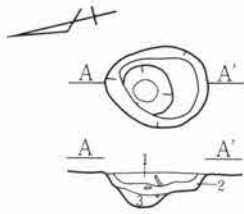
0 1 m

0 10 cm

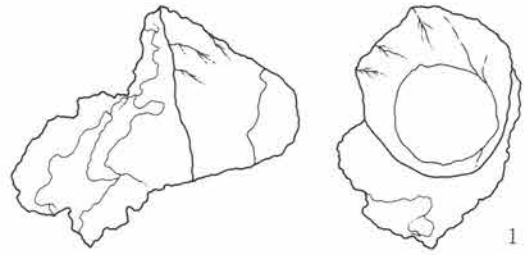
第166図 93~96・101~104号土坑及び出土遺物実測図

第5章 遺構と遺物

1区105号土坑



- 105号土坑
 1 黄褐色土 焼土粒・炭化物粒を含む。
 2 灰黄褐色土 焼土ブロックを含む。
 3 黄褐色土 焼土粒・ロームブロックを含む。

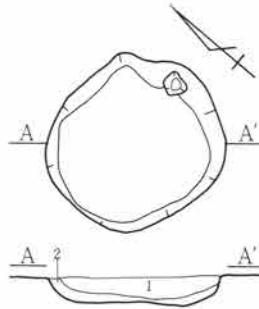


2区110号土坑



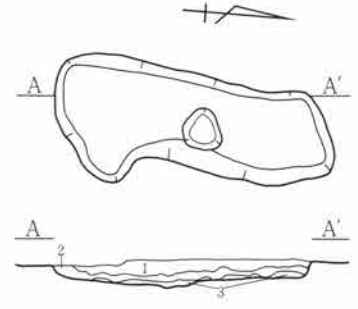
- 110号土坑
 1 黄褐色土 ローム小ブロックを含む。

2区111号土坑



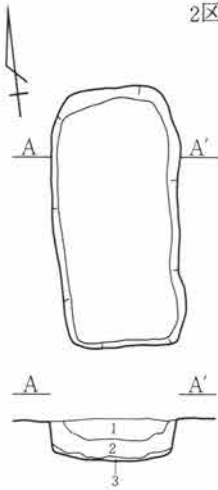
- 111号土坑
 1 灰黄褐色土 やや砂質。ローム粒を少量含む。
 2 暗灰黄色土 ローム小ブロックを含む。

2区119号土坑



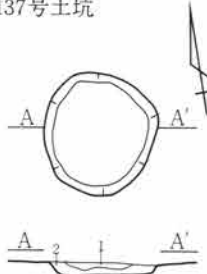
- 119号土坑
 1 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。
 2 黄褐色土 ロームブロックを含む。
 3 明黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

2区120号土坑



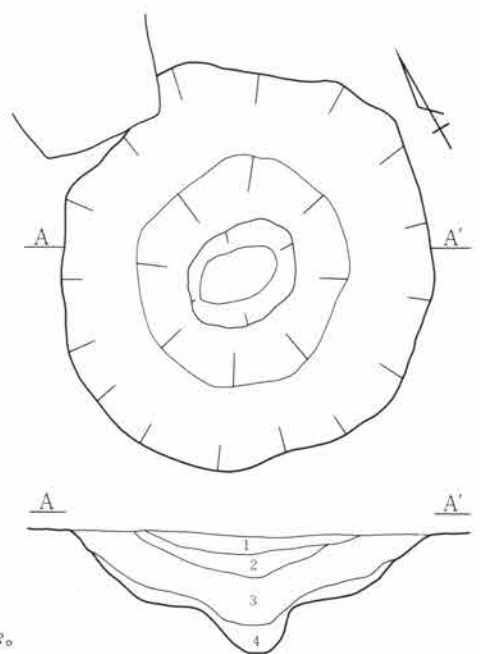
- 120号土坑
 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。
 2 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
 3 黄褐色土 ローム主体。

2区137号土坑



- 137号土坑
 1 暗褐色土 やや砂質。ロームブロックを含む。
 2 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

2区145号土坑

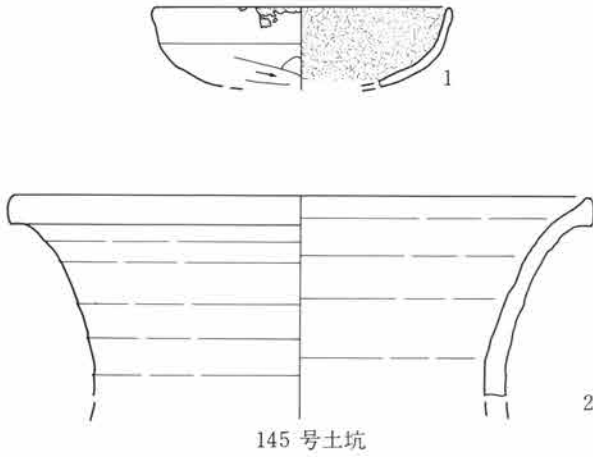


- 145号土坑
 1 黄褐色土 やや砂質。
 2 黒褐色土 炭化物粒を少量含む。
 3 黄褐色土 ローム粒を含む。
 4 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

0 1m

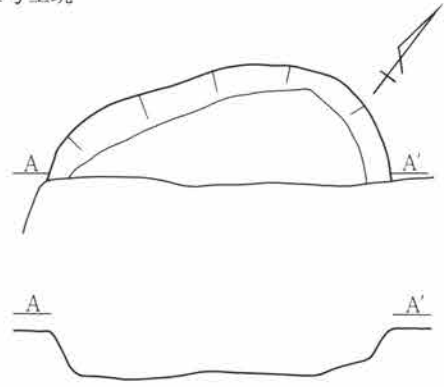
0 10cm

第167図 105・110・111・119・120・145号土坑及び出土遺物実測図

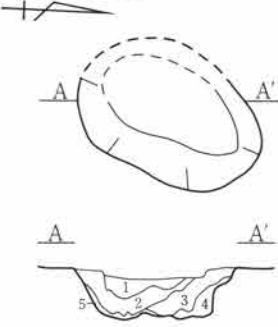


145号土坑

1区151号土坑



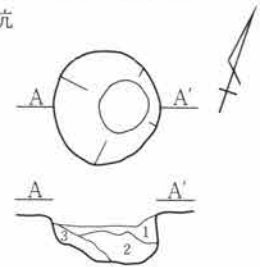
1区153号土坑



153号土坑

- | | | |
|---|-------|----------------|
| 1 | 灰黄褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 2 | 灰黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 3 | 黄褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 4 | 黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 5 | 明黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |

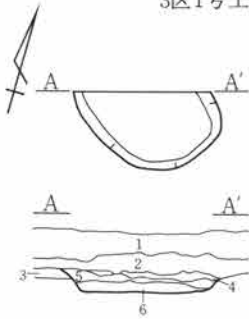
1区154号土坑



154号土坑

- | | | |
|---|------|----------------|
| 1 | 黒褐色土 | 砂質。 |
| 2 | 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 3 | 褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |

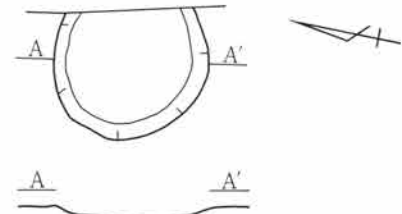
3区1号土坑



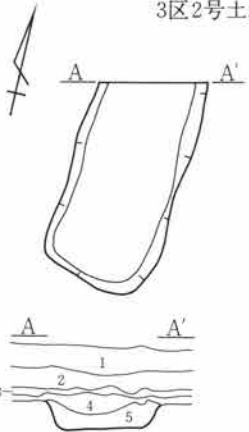
3区1号土坑

- | | | |
|---|------|------------------|
| 1 | 表土 | |
| 2 | 暗褐色土 | 砂質。硬質。 |
| 3 | 暗褐色土 | 砂質。 |
| 4 | 黄褐色土 | 砂質。 |
| 5 | 暗褐色土 | やや砂質。ロームブロックを含む。 |
| 6 | 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |

3区4号土坑



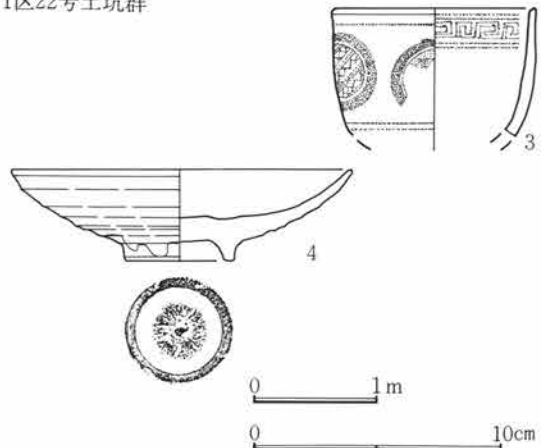
3区2号土坑



3区2号土坑

- | | | |
|---|------|-----------------|
| 1 | 表土 | |
| 2 | 暗褐色土 | 砂質。硬質。 |
| 3 | 暗褐色土 | 砂質。 |
| 4 | 暗褐色土 | 砂質。焼土粒を少量含む。 |
| 5 | 黒褐色土 | ロームブロック・焼土粒を含む。 |

1区22号土坑群



第168図 22・145・151・153・154、3区1・2・4号土坑及び出土遺物実測図

第5章 遺構と遺物

土坑一覧表

遺構名称	位置	平面形状	主軸方位	規模 (m)			備考
				長さ	幅	深さ	
1区1号土坑	2Q-8	円形		0.4	0.86	0.26	
// 2号土坑	2Q-8	不整形		1.05		0.27	
// 3号土坑	2Q-8	不整形		1.41		0.17	
// 4号土坑	2Q-8	円形		0.4		0.38	
// 5号土坑	2Q-8	隅丸方形	N-80° -W	1.01	0.93	0.56	
// 6号土坑	2Q-7・8	不整形		1.65		0.1	
// 7号土坑	2Q-7・8	円形		0.91	0.81	0.17	
// 8号土坑	2P・2Q-7	円形		1.9	1.87	0.19	
// 9号土坑	2P-7	円形		1.8	1.57	0.29	
// 10号土坑	2P-15	不整形		1.5		0.18	
// 11号土坑	2P-15	隅丸長方形	N-80° -W	1.1	0.69	0.2	
// 12号土坑	2O・2P-15	隅丸長方形	N-81° -W	0.94	0.74	0.29	
// 13号土坑	2P-15	隅丸長方形	N-18° -E	1.03	0.63	0.24	
// 14号土坑	2P-15	隅丸長方形	N-11° -E	0.75	0.51	0.07	
// 15号土坑	2P-15	隅丸長方形	N-12° -E	0.88	0.53	0.09	
// 16号土坑	2P-14	長方形	N-12° -E	1.1	0.77	0.13	
// 17号土坑	2P・2Q-14、2Q-13	長方形	N-12° -E	3.3	0.93	0.22	
// 18号土坑	2P-14	隅丸長方形	N-12° -E	0.88	0.58	0.39	
// 19号土坑	2P-15	不整形		0.45		0.16	
// 20号土坑	2P-14・15	不整形		1.13		0.34	
// 21号土坑	2O-14	円形		1.41	1.32	0.34	
// 22号土坑群	2P・2Q-9・10、2Q-11						全体図のみ
// 23号土坑	2O-12・13	不整形		1.05		0.15	
// 24号土坑	2N-12	隅丸長方形	N-2° -E	1.38	0.81	0.4	
// 25号土坑	2N-13	隅丸長方形	N-9° -E	1.14	0.79	0.26	
// 26号土坑	2N-13	楕円形	N-1° -W	1.3	1.1	0.25	
// 27号土坑	2N・2O-14	不整形	N-10° -E	1.09		0.23	
// 28号土坑	2M・2N-13	円形		1.39	1.32	0.13	
// 29号土坑	2N-12	円形		1.32	1.3	0.08	
// 30号土坑	2P-14	隅丸長方形	N-11° -E	2.2	0.69	0.37	
// 31号土坑	2O-11	楕円形	N-71° -W	1.04	0.78	0.12	
// 32号土坑	2P-12・13	楕円形	N-38° -W	1.1	1.02	0.42	
// 33号土坑	2P・2Q-13	楕円形	N-18° -W	1.15	1.11	0.27	
// 34号土坑	2P-13	楕円形	N	0.57	0.45	0.44	
// 35号土坑	2Q-13	円形		1.07	1.01	0.4	
// 36号土坑	2J-3	楕円形	N-85° -E	0.97	0.71	0.24	
// 37号土坑	2N-7	隅丸長方形	N-14° -E	2.25	1.03	0.42	
// 38号土坑	2O-6	円形		0.76	0.7	0.42	
// 39号土坑	2O・2P-7	隅丸長方形	N-39° -E	1.64	0.92	0.23	
// 40号土坑	2P-14	隅丸長方形	N-9° -E	2.6	0.55	0.31	全体図のみ
// 41号土坑	2P-14・15	不整形		4.47	0.7	0.4	全体図のみ
// 42号土坑	2P-14・15	隅丸長方形	N-9° -E	4.43	0.64	0.51	全体図のみ
// 43号土坑	2P-14	隅丸方形	N-8° -E	0.78	0.6	0.28	

第5節 土坑

遺構名称	位置	平面形状	主軸方位	規模 (m)			備考
				長さ	幅	深さ	
1区44号土坑	2 O-14	隅丸方形	N-96° -E	0.88	0.67	0.46	
// 45号土坑	2 Q-12	楕円形	N-25° -W	1.04	0.86	0.17	
// 46号土坑	2 O-7	円形		0.55		0.25	
// 47号土坑	2 Q・2 R-10	楕円形	N-60° -W	1.45	1.17	0.24	
// 48号土坑	2 J-7・8	隅丸長方形	N-76° -W	2.21	1.05	0.45	
// 49号土坑	2 J・2 K-6	不整形		1.75	0.74	0.24	
// 50号土坑	2 K-5	隅丸長方形	N-17° -E	1.61	1.1	0.29	
// 51号土坑	2 P-7	楕円形	N-64° -E	0.7	0.55	0.29	
// 52号土坑	2 L-3	円形		1.23	1.2	0.21	
// 53号土坑	2 K-3	円形		1.25	1.14	0.2	
// 54号土坑	2 K-2	円形		1.11	1.07	0.3	
// 55号土坑	2 K-3	円形		1.15	1.09	0.37	
// 56号土坑	2 J・2 K-3・4	円形		1.38	1.37	0.43	
// 57号土坑	2 K-3・4	円形		1.36	1.23	0.37	
// 58号土坑	2 K・2 L-4	不整形		1.96	1.18	0.4	
// 59号土坑	2 P・2 Q-12	不整形		1.85	1.7	0.49	
// 60号土坑	2 P-12・13	円形		0.94	0.85	0.5	
// 61号土坑	2 G-6	円形		1.22	1.16	0.57	
// 62号土坑	2 O-7	隅丸長方形	N	0.94	0.55	0.16	
2区64号土坑	2 D-17・18	隅丸長方形	N-62° -W	2.28	0.9	0.39	
// 65号土坑	2 D-18	隅丸長方形	N-68° -W	1.15	0.6		
// 66号土坑	2 D-17・18	隅丸長方形	N-73° -W	2.24	0.9	0.36	
// 67号土坑	2 C・2 D-18	不整形		3.8	1.17	0.27	
// 68号土坑	2 C-20	不整形		2.24	1.3	0.3	
// 69号土坑	2 C-19	隅丸長方形	N-86° -W	1.19	0.91	0.29	
// 70号土坑	2 B・2 C-20、2 C-19	隅丸長方形	N-4° -E	1.86	0.98	0.42	
// 71号土坑	2 B-20	楕円形	N-42° -W	1.21	0.99	0.25	
// 72号土坑	2 C-17	隅丸長方形	N-72° -W	2.86	0.86	0.22	
// 73号土坑	2 B・2 C-17	隅丸長方形	N-81° -W	2.07	0.81	0.17	
// 75号土坑	2 A-17	円形	N-15° -E	1.26	1.21	0.15	
// 76号土坑	T・2 A-17	不整形	N-75° -W	1.72	0.88	0.26	
// 77号土坑	T-17	楕円形	N-75° -W	0.98	0.72	0.12	
// 78号土坑	2 A-16	隅丸長方形	N-9° -E	2.92	1.2	0.2	
// 79号土坑	2 A-15・16	隅丸長方形	N-12° -E	2.08	0.71	0.2	
// 80号土坑	2 A-15・16	不整形	N-13° -E	1.75	0.81	0.15	
// 81号土坑	2 A-15	隅丸長方形	N-9° -E	3.14	0.84	0.24	
// 82号土坑	2 A-15	隅丸長方形	N-15° -E	1.91	0.7	0.15	
// 83号土坑	2 A-14・15	隅丸長方形	N-19° -E	2.98	0.89	0.29	
// 84号土坑	2 A-14	隅丸長方形	N-16° -E	1.74	0.85	0.2	
// 85号土坑	2 A-14	隅丸長方形	N-16° -E	2.45	1.2	0.15	
// 86号土坑	T-14	隅丸長方形	N-85° -W	3.2	0.97	0.36	
// 87号土坑	2 B-12・13	隅丸長方形?	N-5° -E	1.6	0.64	0.37	
// 88号土坑	2 A-12	隅丸方形	N-83° -W	0.68	0.59	0.12	
// 89号土坑	2 A-14	隅丸長方形	N-2° -W	0.89	0.52	0.31	
// 90号土坑	2 A-11・12	隅丸長方形?	N-13° -E	2.5	0.75	0.34	

第5章 遺構と遺物

遺構名称	位置	平面形状	主軸方位	規模 (m)			備考
				長さ	幅	深さ	
2区91号土坑	T・2A-11・12	隅丸長方形?	N-13° -E	3.7	0.79	0.44	
// 92号土坑	T-11・12	隅丸長方形?	N-12° -E	2.3	0.88	0.24	
// 93号土坑	T-11	円形		0.98	0.93	0.14	
// 94号土坑	T-11	不整形	N-21° -W	3.15	1.1	0.2	
// 95号土坑	T-11	円形		0.93	0.86	0.15	
// 96号土坑	S・T-10・11	隅丸長方形	N-59° -W	1.32	0.8	0.11	
1区101号土坑	2K・2L-9、2L-10	長方形	N-82° -W	1.58	0.78	0.47	
// 102号土坑	2K・2L-9	不整形		1.47	1.24	0.39	
// 103号土坑	2K-8・9	円形		1.24	1.23	0.32	
// 104号土坑	2K-9	不整形		1.2		0.47	
// 105号土坑	2M-10・11	楕円形	N-13° -E	0.81	0.63	0.26	
2区110号土坑	2C・2D-16	隅丸長方形	N-77° -W	1.96	0.89	0.23	
// 111号土坑	2B・2C-17・18	円形		1.41	1.27	0.23	
// 119号土坑	T-15	不整形	N-5° -W	2.15	1.02	0.21	
// 120号土坑	S・T-14	隅丸長方形	N-4° -E	2.04	1.03	0.33	
// 121号土坑	S・T-16	不整形	N-83° -W	3	1.16	0.3	
// 122号土坑	S-16	隅丸長方形	N-74° -W	2.5	0.85	0.35	
// 123号土坑	S-15・16	不整形			0.82	0.23	
// 124号土坑	S-15・16	隅丸長方形	N-10° -E	2.96	1	0.21	
// 125号土坑	S-16	不整形		1.1		0.16	
// 126号土坑	S・T-16	不整形		1.11		0.18	
// 127号土坑	S-16	不整形		0.84		0.25	
// 128号土坑	S-16	不整形		2.41	0.96	0.38	
// 129号土坑	R・S-15・16	不整形		2.75	0.97	0.39	
// 130号土坑	R・S-16	隅丸長方形	N-67° -W	2.79	0.9	0.32	
// 131号土坑	R・S-16・17	不整形		0.69		0.15	全体図のみ
// 132号土坑	S-16・17	不整形		1.61		0.3	全体図のみ
// 133号土坑	R・S-15	隅丸長方形	N-85° -W	1.63	0.86	0.22	全体図のみ
// 135号土坑	R-15	隅丸長方形	N-6° -E	1.34	0.8	0.28	全体図のみ
// 137号土坑	R・S-16	円形		0.98	0.94	0.1	
// 138号土坑	S-14	隅丸長方形	N-4° -E	2.09	0.83	0.18	全体図のみ
// 139号土坑	S-14	不整形		0.9		0.23	全体図のみ
// 140号土坑	S-14	隅丸長方形	N-2° -W	2.32	0.9	0.23	全体図のみ
// 141号土坑	S-14・15、J-15	不整形	N-3° -E	1.74		0.27	全体図のみ
// 142号土坑	S-14・15	隅丸長方形	N-3° -E	2.52	1.01	0.34	全体図のみ
// 143号土坑	S-15	不整形		0.52		0.23	全体図のみ
// 144号土坑	S-14・15	隅丸長方形	N-6° -E	1.57	0.88	0.24	全体図のみ
// 145号土坑	2D・2E-19	円形		3.23	3.04	0.91	
// 148号土坑	Q・R-11	隅丸長方形	N-62° -E	2.13	1.35	0.34	全体図のみ
1区151号土坑	2L・2M-11	不整形		2.72	0.95	0.49	
// 153号土坑	2I-3	楕円形	N-34° -E	1.3	1.05	0.4	
// 154号土坑	2M-4	円形		0.75		0.4	
2区155号土坑	2C-20	不整形		1.10	0.80	0.26	

第6節 その他の遺構

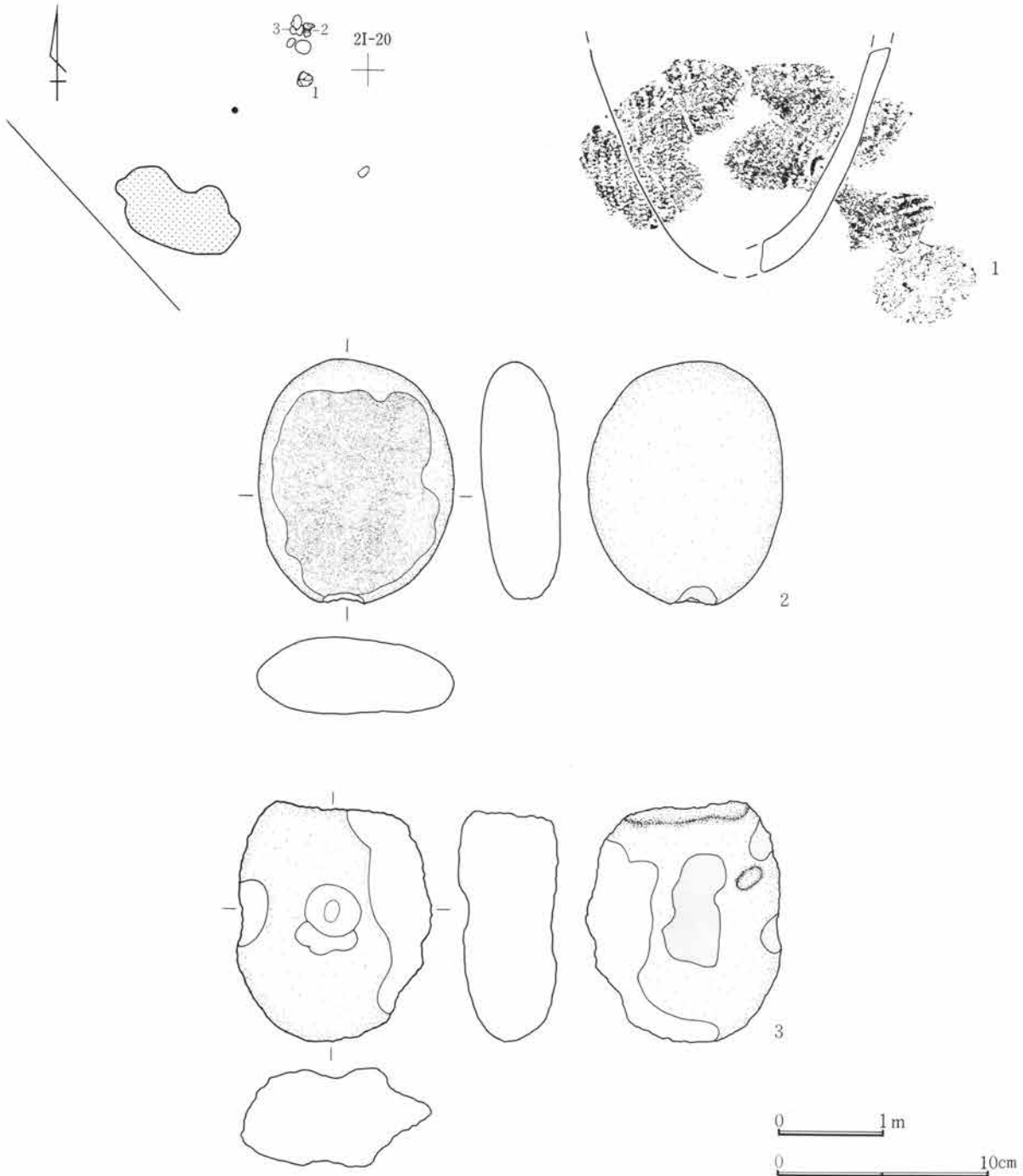
1号焼土遺構 (図版59)

位置 2 I -19 規模 100×65cm

調査所見 縄文包含層である、第III層から平面的に広がる焼土集中カ所を確認した。小さな焼土塊も見られるが、炉体を想定させるものではない。また、

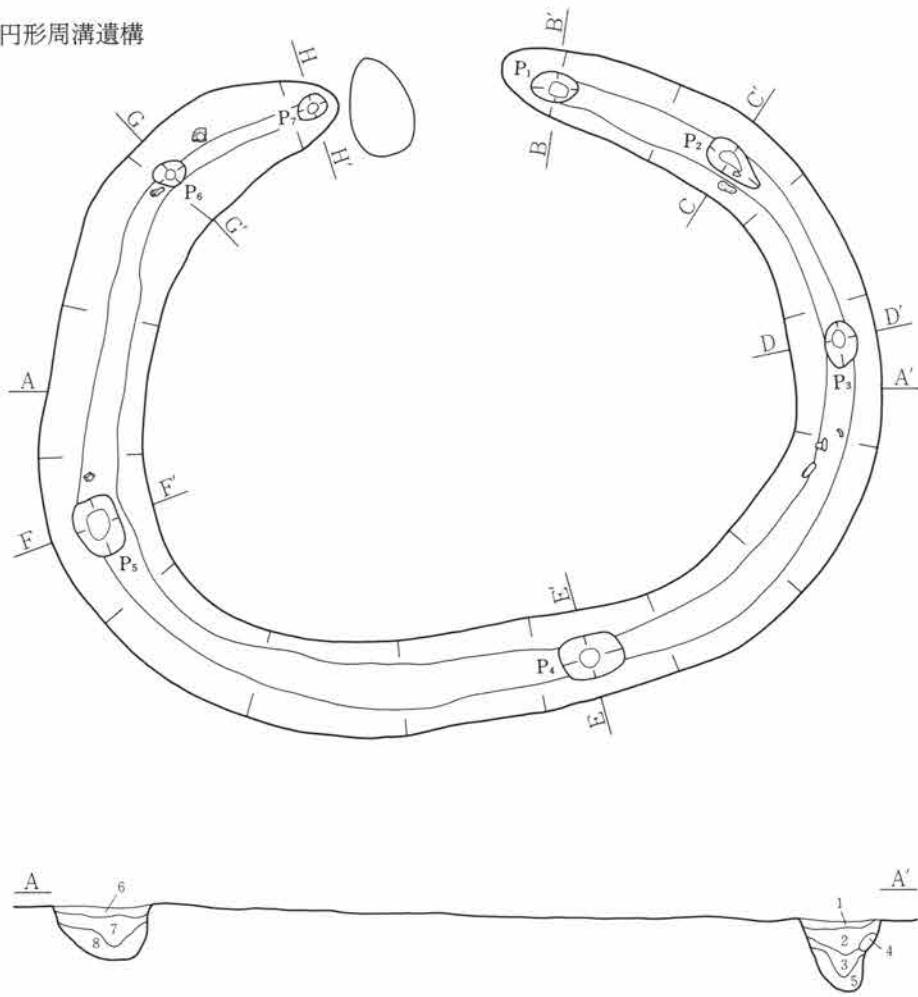
床面・柱穴等も確認できなかった。

付近から、縄文時代前期の土器、敲石・凹石が出土しているが、この遺構に伴うものかどうかは不明である。



第169図 焼土遺構及び出土遺物実測図

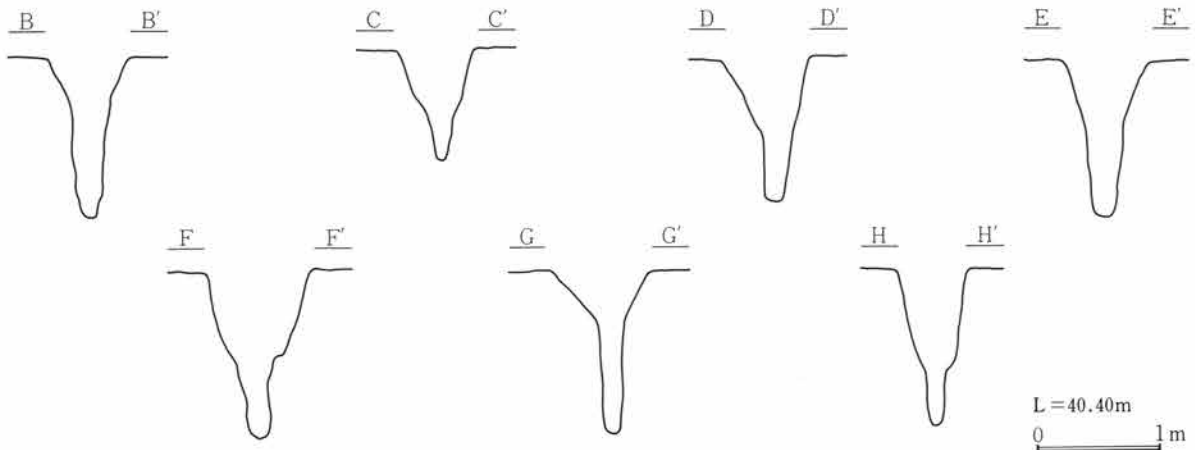
1号円形周溝遺構



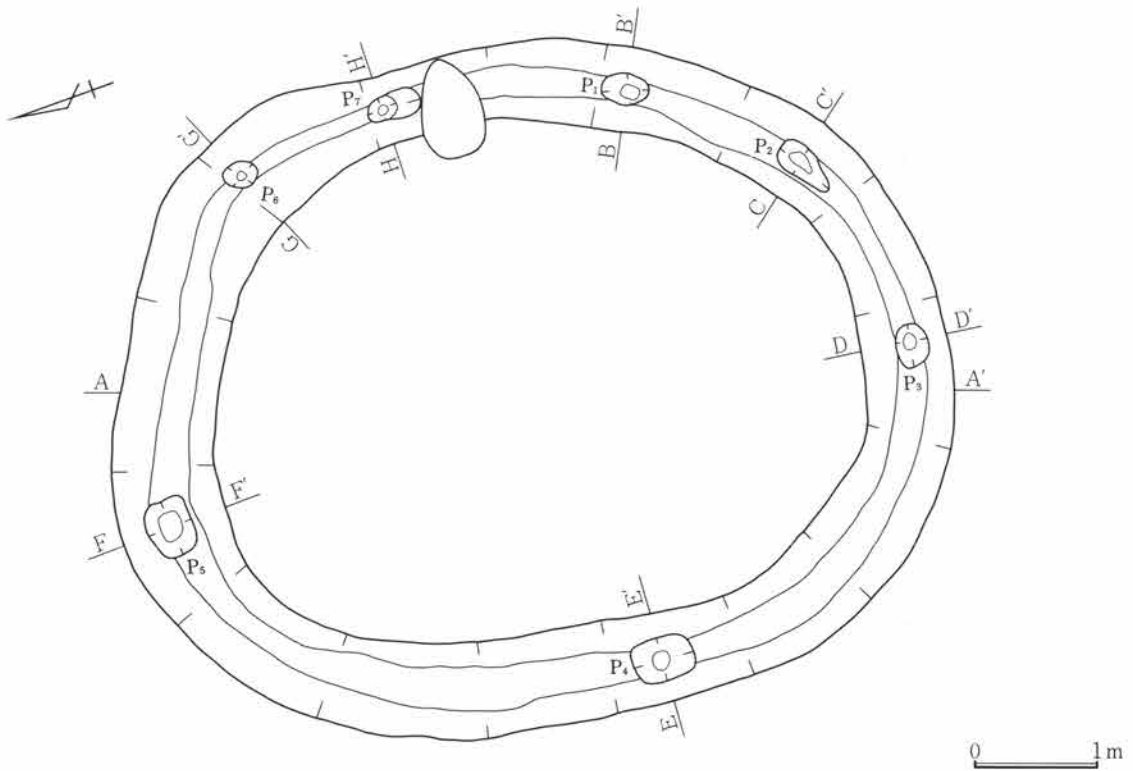
1号円形周溝遺構

- 1 黄褐色土 砂質。ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土 やや砂質。ロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
- 4 明黄褐色土 ロームブロック。

- 5 黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 6 黄褐色土 1層に近似。
- 7 黒褐色土 2層に近似。
- 8 褐色土 ロームブロックを多量に含む。



第170図 1号円形周溝遺構実測図(1)



第171図 1号円形周溝遺構実測図(2)

1号円形周溝遺構 (図版59・60)

位置 2C・2D-5・6 平面形 楕円形

規模 6.8×5.4m

遺物 すべて溝埋土からの出土で、坏・鉢、楕円礫が見られる。時期は、7世紀後半代と考えられる。

調査所見 1区12号住居跡の北西隣で検出された。楕円形に廻る幅70~90cmの溝で、全体の平面形は南北方向に長軸を持つ。溝の断面はU字形で、確認面からの深さは40~50cmを測り、一定しない。この溝で囲繞された内部は5×4mの空間を有する。内部には、これに伴う施設等は検出されず、また硬軟等の異質性も認められなかった。

溝内には7基のピットが確認された。各ピットの規模は以下の通りである。

- P 1 直径 30cm 深さ 126cm
- P 2 直径 26cm 深さ 86cm
- P 3 直径 26cm 深さ 114cm
- P 4 直径 35cm 深さ 120cm
- P 5 直径 37cm 深さ 132cm

P 6 直径 24cm 深さ 126cm

P 7 直径 20cm 深さ 123cm

深さは何れも確認面からで、溝底からは50~80cmを測る。断面はほぼ垂直で、底径は10~20cmを測る。平面形はP 4とP 5が方形を意識しており、他は円形ないし楕円形である。

P 4を通る東西軸を想定した場合、P 1とP 7、P 2とP 6、P 3とP 5が、それぞれほぼ対称となる位置に配されたと考えられる。

ピットの規模と形状・位置から、柱穴と考えたいが、上屋構造については憶測の域を出ない。溝に壁板を巡らす構造と考えられようか。

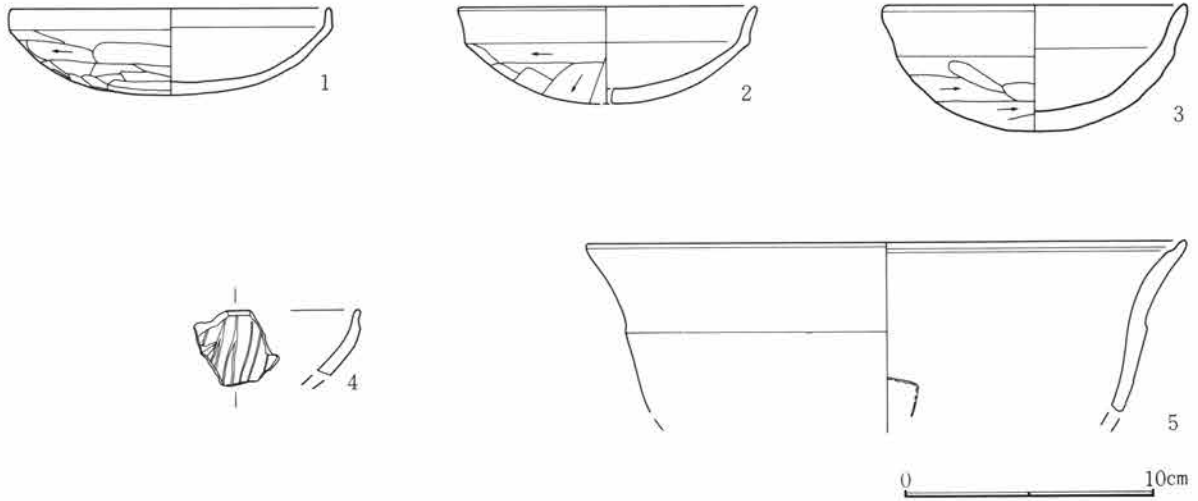
溝は、黒褐色土を主体にして人為的に埋められているが、P 1とP 7の間のみは、ローム塊主体で埋土が行われる。また、この部分の溝底レベルは両側よりも20cm弱高く掘り残されている。当初、この部分の埋土は地山と近似していたため、土橋状の掘り残し部と想定した(第170図、写真図版59参照)。

第5章 遺構と遺物

以上の特徴に、この部分が対称軸上のP4に対応する中央位置にあることを加味すれば、これを出入口部分と想定することは十分可能である。

重複関係は、溝の東側で当遺構より新しい1区15号井戸に切られている。他に内区で1区7号井戸・

12号井戸が検出されているが、本址との新旧関係は不明である。



第172図 1号円形周溝遺構出土遺物実測図

1号竪穴遺構 (図版60・61)

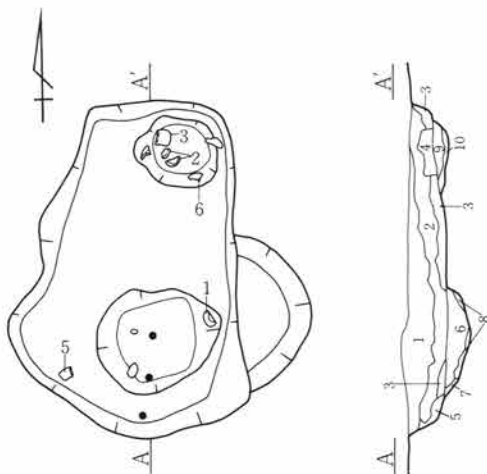
位置 2K・2L-3

主軸方位 N-2°-E

平面形 不整形な長方形 規模 2.65×1.55m

遺物 土師器の坏・甕の破片が、少量出土している。

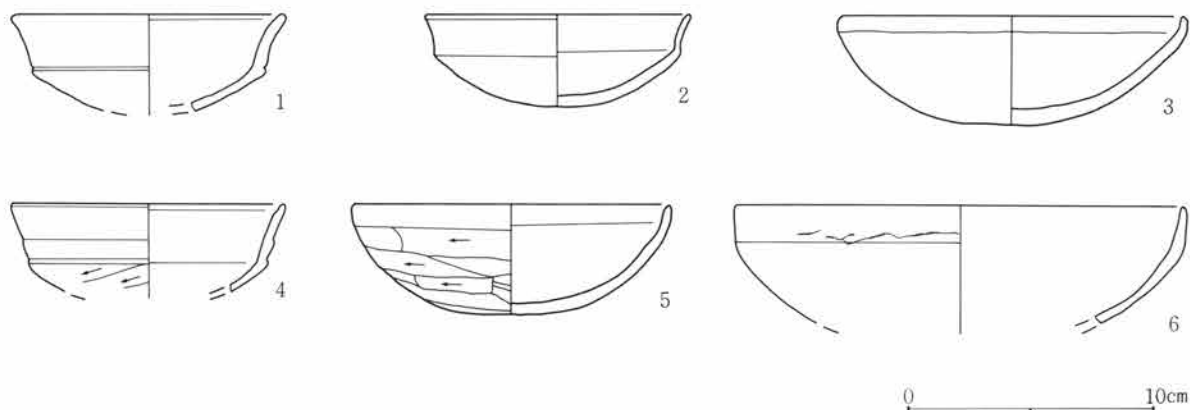
調査所見 竪穴内で、落ち込みが2カ所検出された。遺構の性格は不明である。また、東側で当遺構より新しい53号土坑と重複している。時期は、古墳時代後期と思われる。



- | | |
|---------|---------------------|
| 1号竪穴遺構 | |
| 1 黒褐色土 | やや砂質。ローム粒・焼土粒を少量含む。 |
| 2 黒褐色土 | 粘質。ローム粒・焼土粒を少量含む。 |
| 3 黄褐色土 | ロームブロック主体。 |
| 4 黒褐色土 | 焼土粒を多量に含む。 |
| 5 褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 6 黄褐色土 | 粘質。ロームブロックを含む。 |
| 7 褐色土 | 粘質。 |
| 8 明黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 9 黒褐色土 | 粘質。ロームブロック・焼土粒を含む。 |
| 10 暗褐色土 | 粘質。ロームブロックを含む。 |

L=40.40m

第173図 1号竪穴遺構実測図



第174図 1号竪穴遺構出土遺物実測図

2号竪穴遺構 (図版61)

位置 R・S-15・16 主軸方位 N-10° - E
 (真北から最も傾きの小さな辺)

平面形 不整形な正方形 規模 方2.80m

遺物 土師器の破片が、少量出土した。

調査所見 ピットが遺構を巡るように、ほぼ対称的に等間隔で、9カ所検出された。その内、P3は他のピットより浅く、性格の異なるものであろう。各ピットの規模は、

- P1 直径 24cm 深さ 15cm
- P2 直径 27cm 深さ 31cm
- P3 直径 20cm 深さ 15cm
- P4 直径 22cm 深さ 16cm
- P5 直径 40cm 深さ 43cm

P6 直径 20cm 深さ 33cm

P7 直径 36cm 深さ 45cm

P8 直径 27cm 深さ 26cm

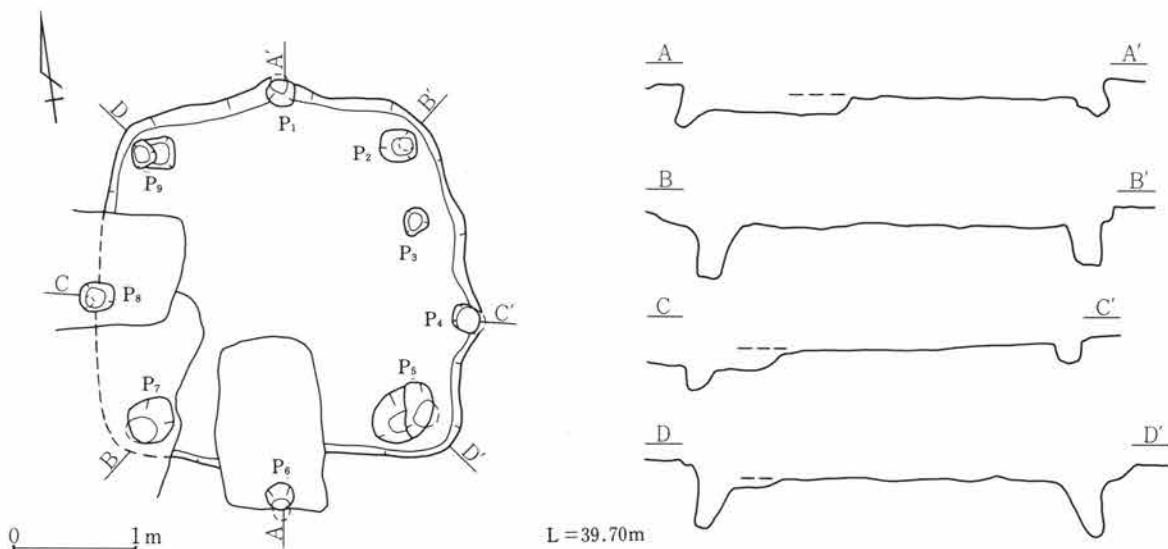
P9 長径 35cm 短径 25cm 深さ 39cm

である。等間隔に並んだピットが、9カ所検出されており、柱穴と考えられる。そのうち対称的な8カ所のピットは、底部が遺構より外側にくい込んでおり、柱が斜めに立てられていた可能性も考えられる。

上屋があったのであろうが、遺構の性格は不明である。火所や硬化床面は確認できなかった。

129号・135号土坑が、南西部で重複している。

遺構の時期は、中世以降と思われる。



第175図 2号竪穴遺構実測図

1号掘立柱建物 (図版61・62)

位置 2E・2F-2・3

主軸方位 N-30°-W 平面形 調査対象外となつた道路下にまで及んでおり、全体の形状・規模は不明である。規模 梁行は、それぞれ1.70m・1.75m・1.75m (6尺)、桁行はそれぞれ2.25m・2.35m・2.45m (8尺)である。柱穴 柱穴は何れも円形で大きさは、以下の通り。

柱穴1 直径 40cm 深さ 32cm

柱穴2 直径 36cm 深さ 45cm

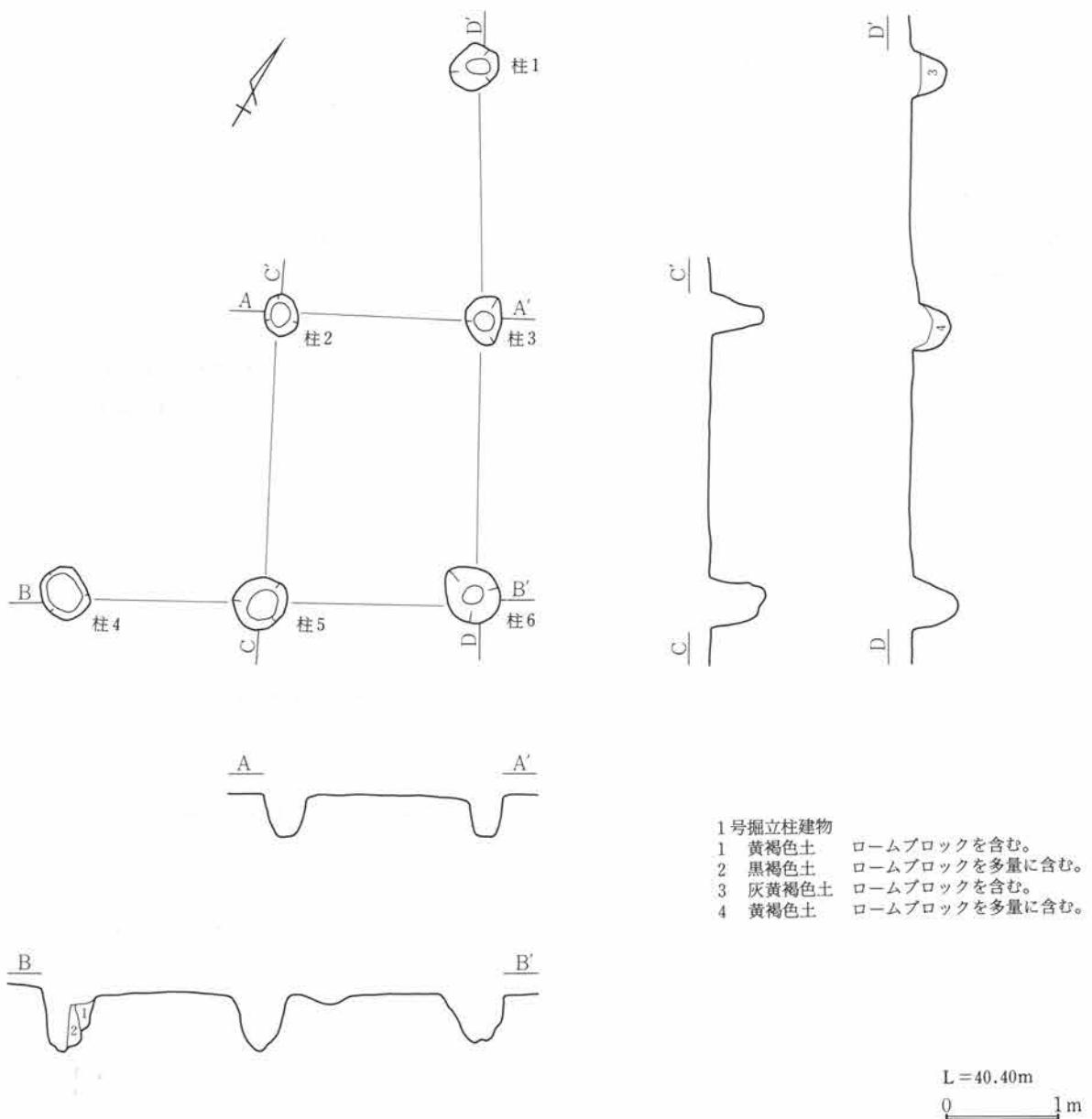
柱穴3 直径 38cm 深さ 34cm

柱穴4 直径 43cm 深さ 50cm

柱穴5 直径 50cm 深さ 46cm

柱穴6 直径 50cm 深さ 38cm

調査所見 検出された建物は、梁行・桁行とも2間以上の総柱建物で、棟は南東～北西と考えられる。構造にやや歪みがあり計測値にばらつきがあるが、梁行6尺、桁行8尺を基準にしたものと考えられる。時期は不明である。



第176図 1号掘立柱建物実測図

1号サク状遺構 (図版62)

位置 S-18、T~2 D-18・19、2 E・2 F-17~19

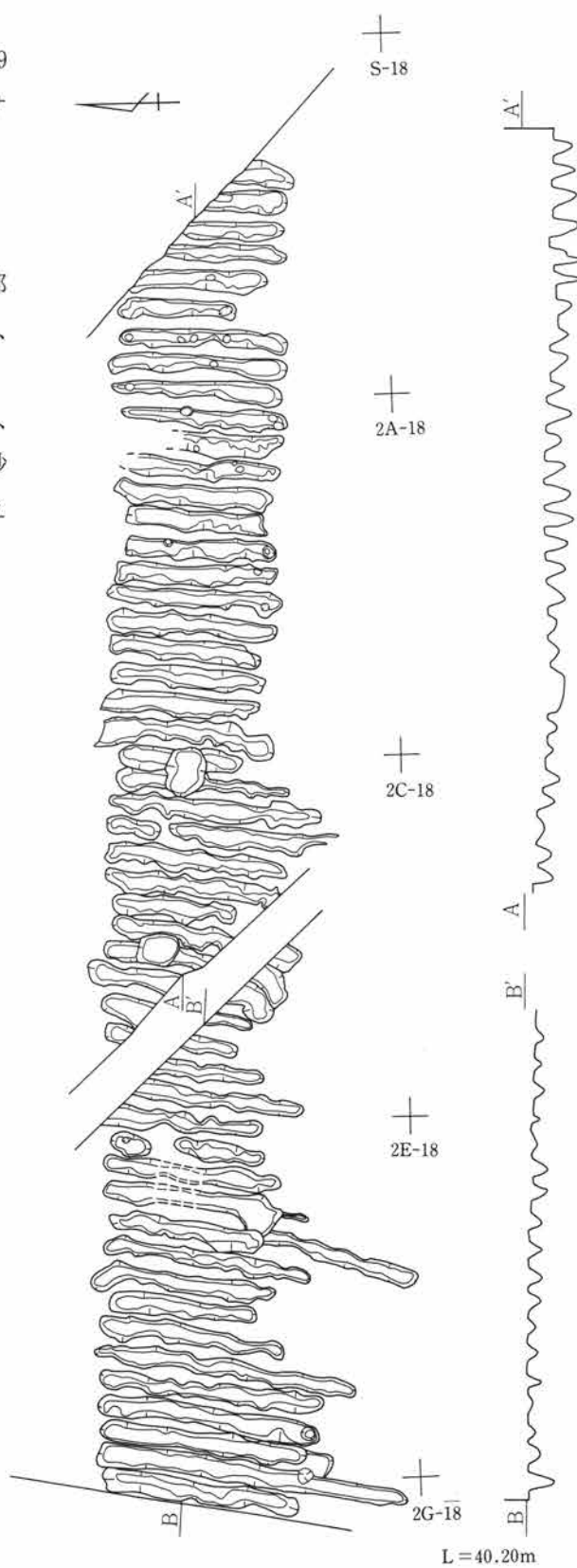
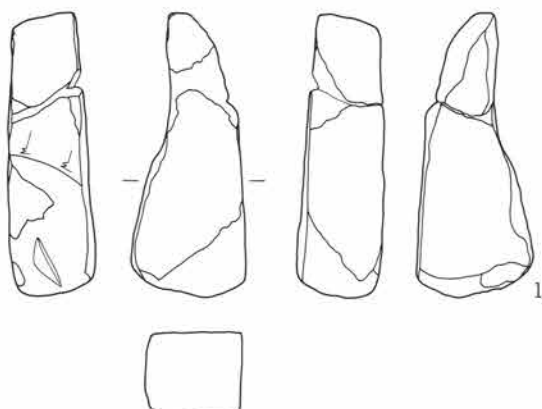
規模 長さ4~9m、幅50cm、深さ20~80cm程のサクが、東西方向に51列(38m)検出された。

サクの走向 N-3~10° - E

遺物 土師器の破片が少量出土した。

調査所見 2区の西寄りの部分で検出された。一部トレンチによって削平されているが、その状況から、畝の耕作痕と考えられる。

北側は、東西方向でほぼ直線的に区切られており、何らかの区画があったものと思われる。覆土は、砂質土で締まりが弱かった。時期は、中世以降と考えられる。



第177図 サク状遺構及び出土遺物実測図

1号畝状遺構 (図版63)

位置 I-7、J・K-6~8、K-9

遺物 なし

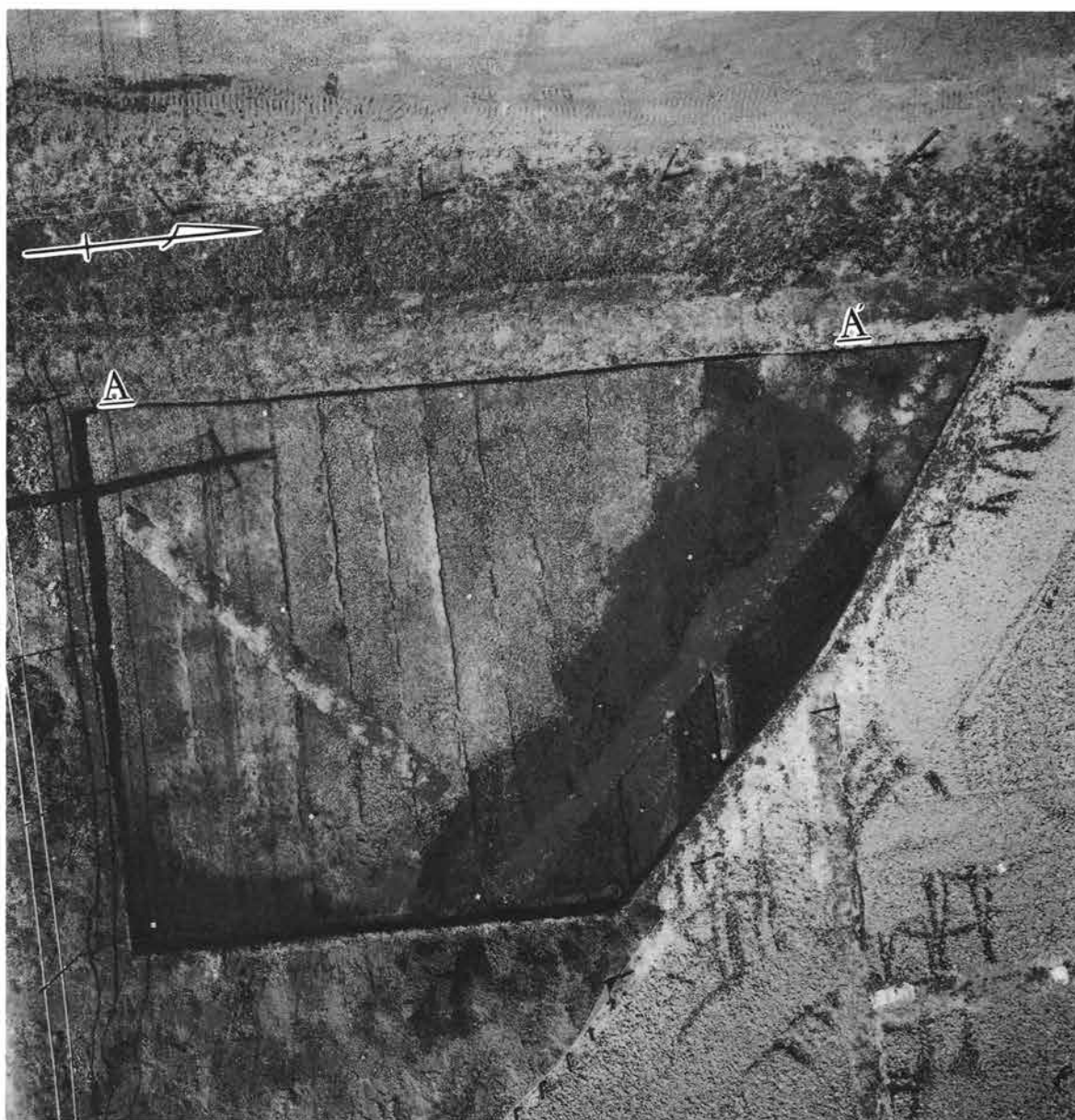
規模 長さ2~10m、幅10~20cm、高さ10~15cm程
の細長い高まりが、11列検出された。

調査所見 3区道路北側で検出された。ほぼ1mお
きに、東西方向の細長い高まりが検出された。遺構
の性格・時期は不明である。

走向 N-82~90° -W



L=38.70m 0 10m



第178図 1号畝状遺構実測図及び写真

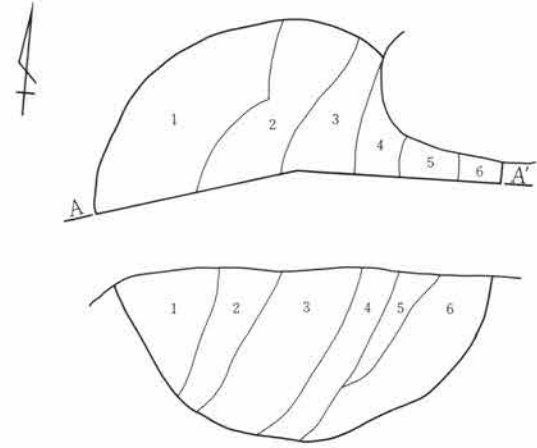
第7節 風倒木

1号風倒木 (図版63)

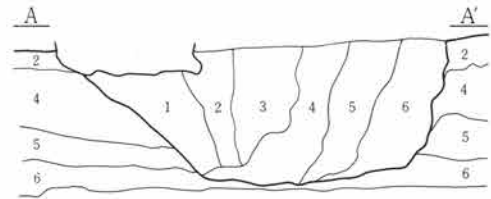
位置 2M-7、2N-6・7

規模 直径3m20cm、深さ1m8cm

調査所見 1区5号住居跡の北東側に接して検出された。土層断面から、上層の黒褐色土・暗褐色土が西側に巻き込まれ、東側で下部のローム層が持ち上げられていることから、転倒方向は西向きと考えられる。



- 1号風倒木
- | | |
|--------|------------------|
| 1 黒褐色土 | やや粘質。 |
| 2 暗褐色土 | 縄文包含層。 |
| 3 黄褐色土 | ローム第2層。 |
| 4 褐色土 | ローム第3層。 |
| 5 黄褐色土 | ローム第3層。As-BPを含む。 |
| 6 褐色土 | 暗色帯。 |



L=40.20m 0 1m

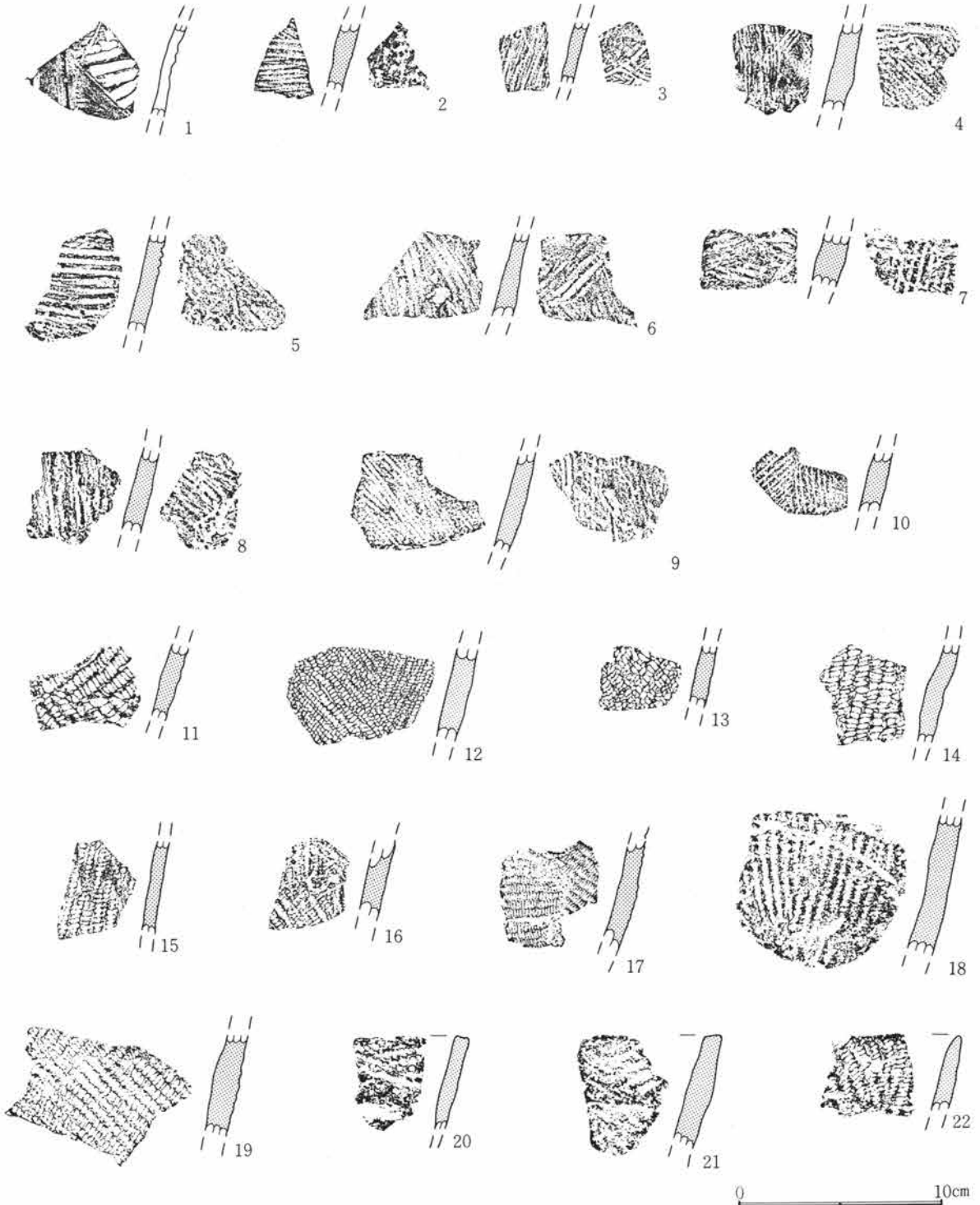


第179図 1号風倒木実測図及び写真

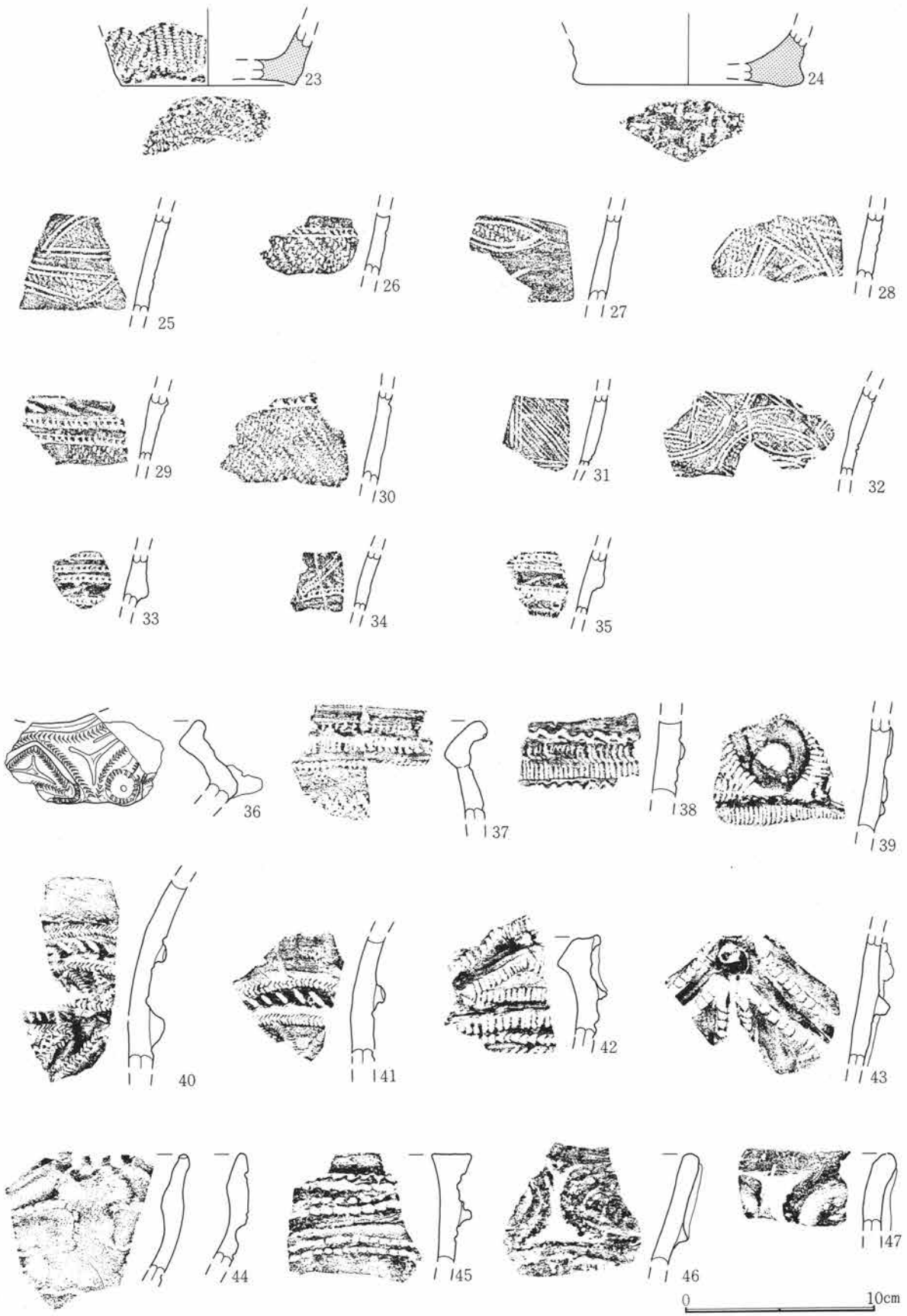
第8節 遺構外遺物

本節では、住居跡・溝・土坑等の遺構出土以外の遺物を扱う。表土掘削時出土のものや、遺構出土ながら帰属の不詳なものを、何れもグリッドごとに取り上げたものである。

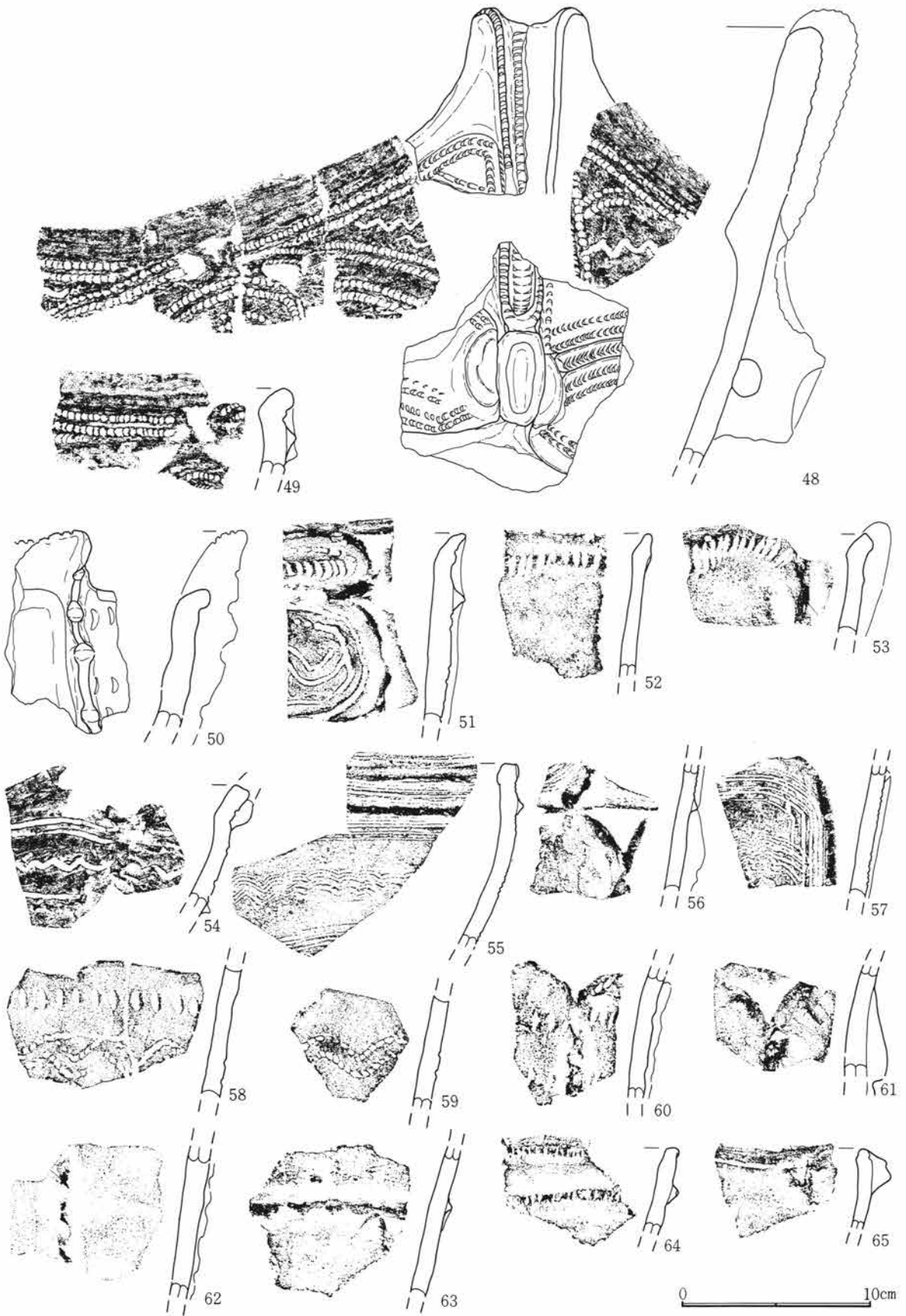
縄文時代前期から後期にかけての土器と、打製石斧・スクレイパー・石鏃等の石器、古墳時代から奈良・平安時代の土師器・須恵器、中世以降の陶磁器・石臼等がある。



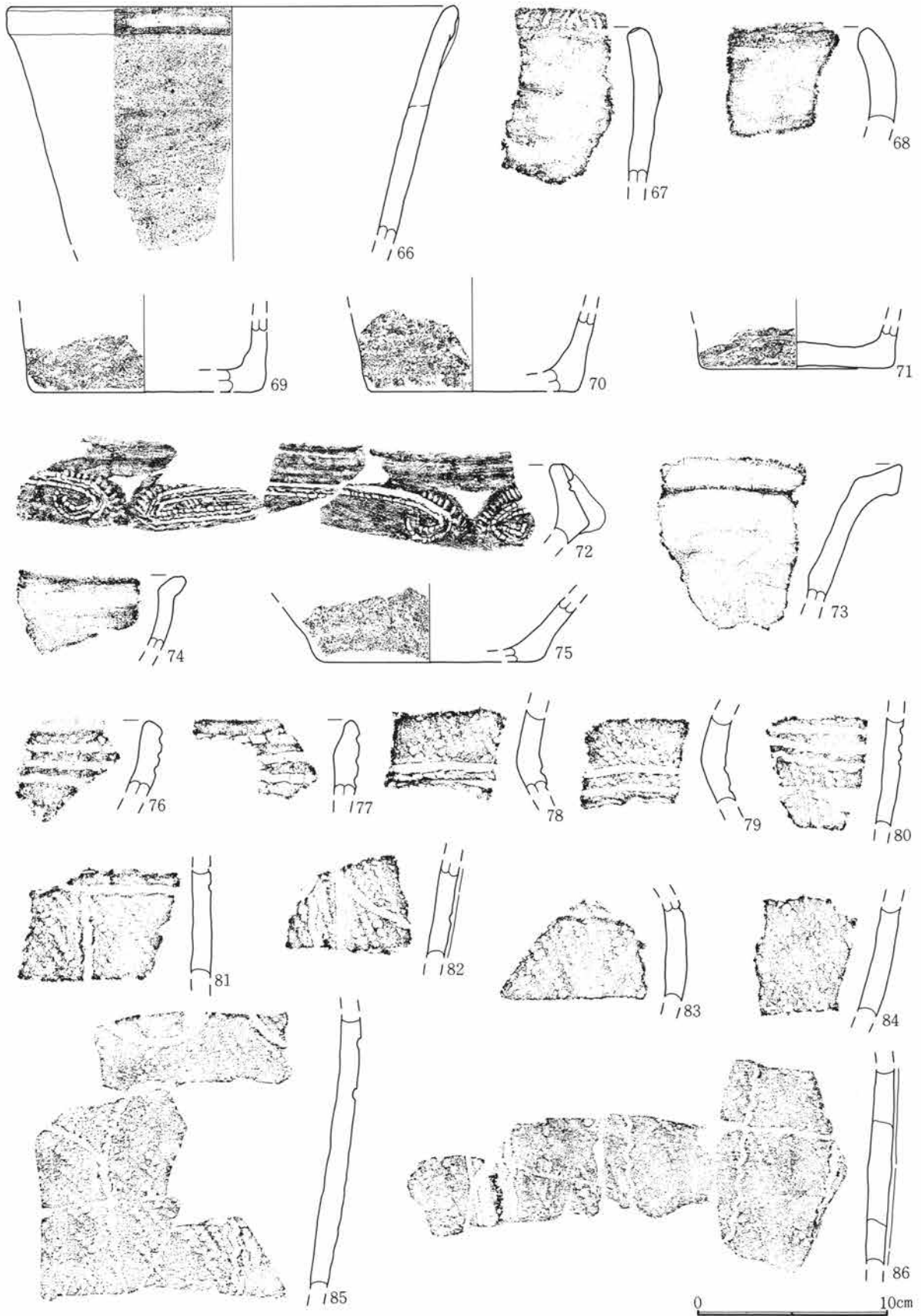
第180図 遺構外出土遺物実測図(1)



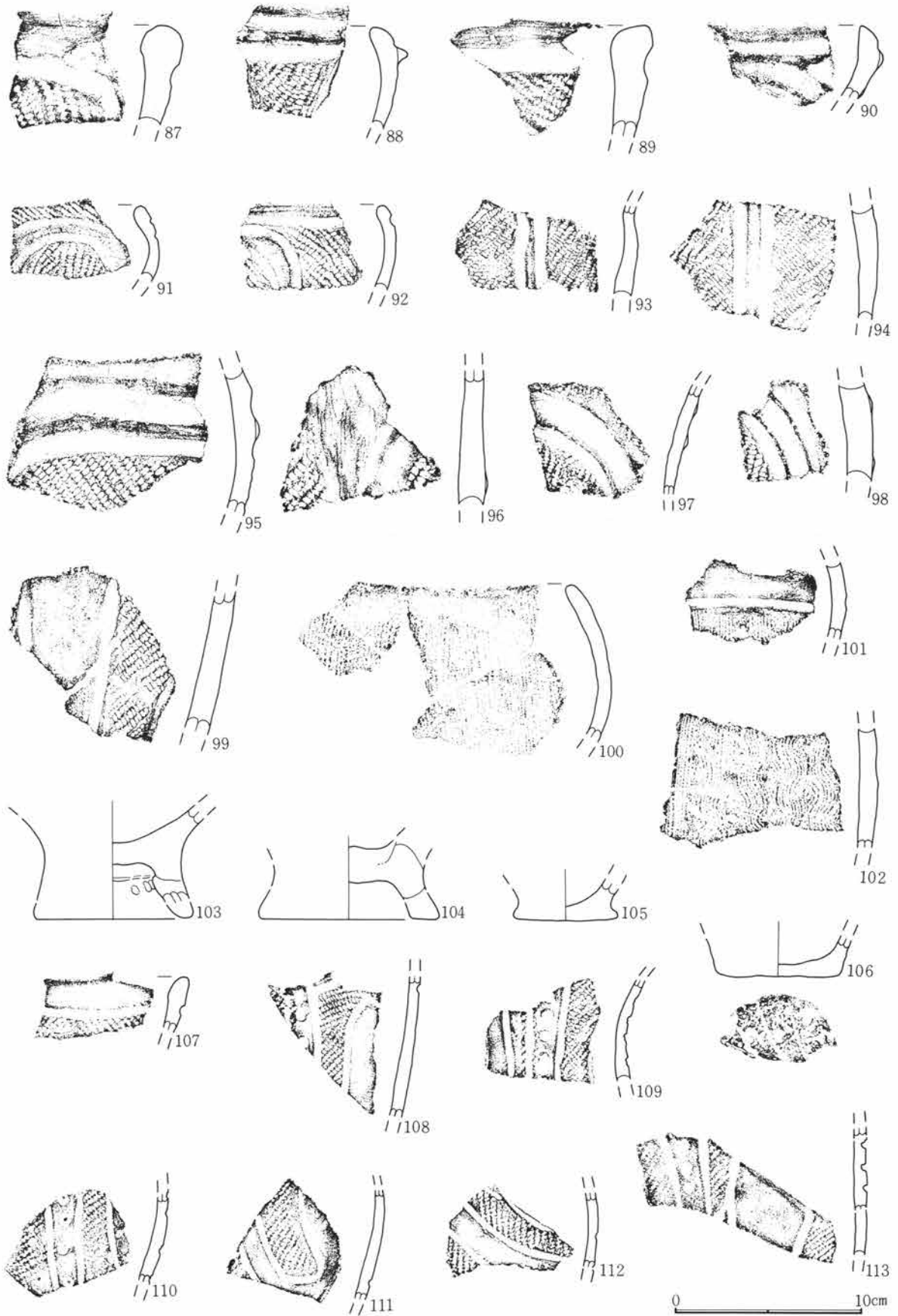
第181図 遺構外出土遺物実測図(2)



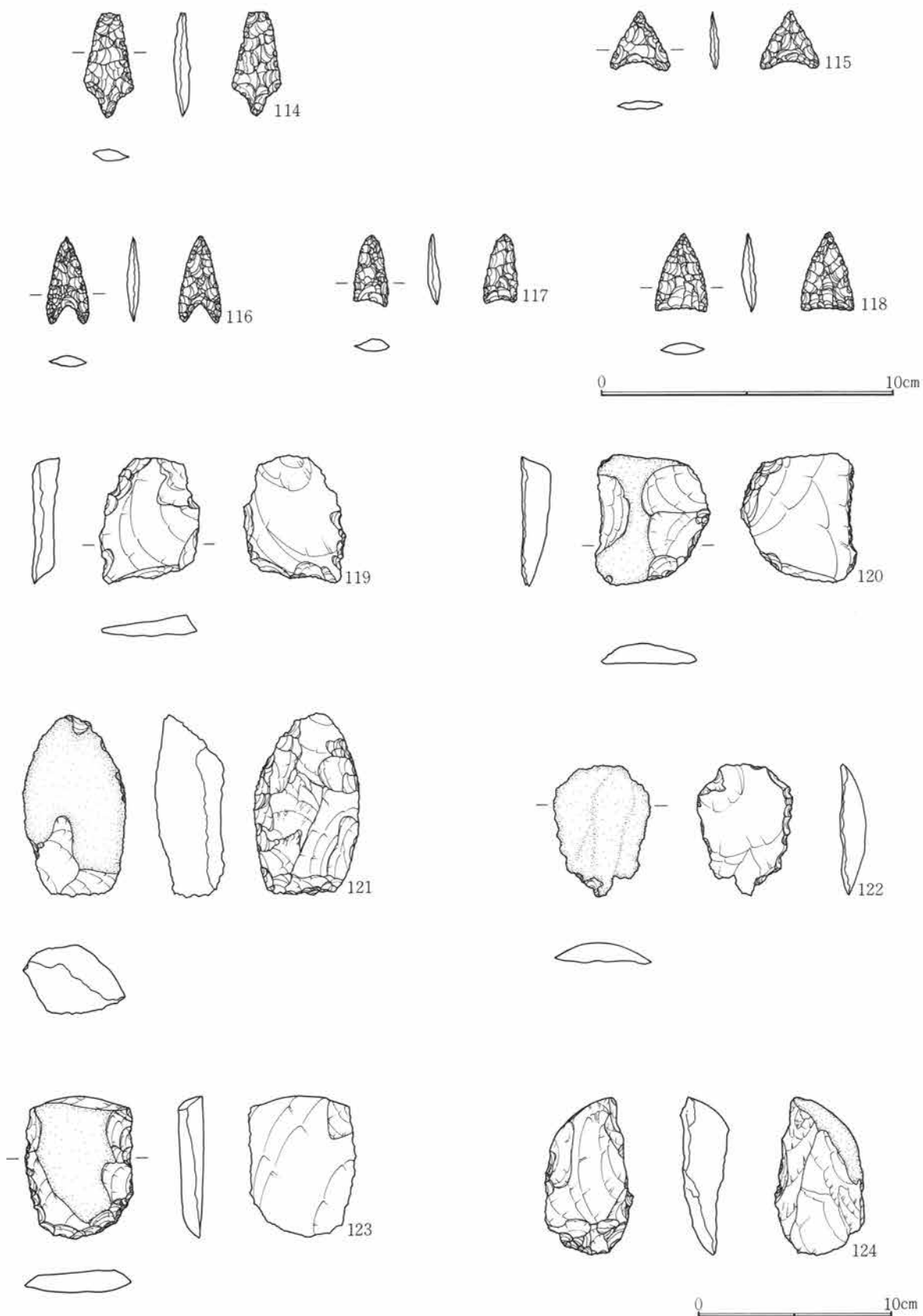
第182図 遺構外出土遺物実測図(3)



第183図 遺構外出土遺物実測図(4)



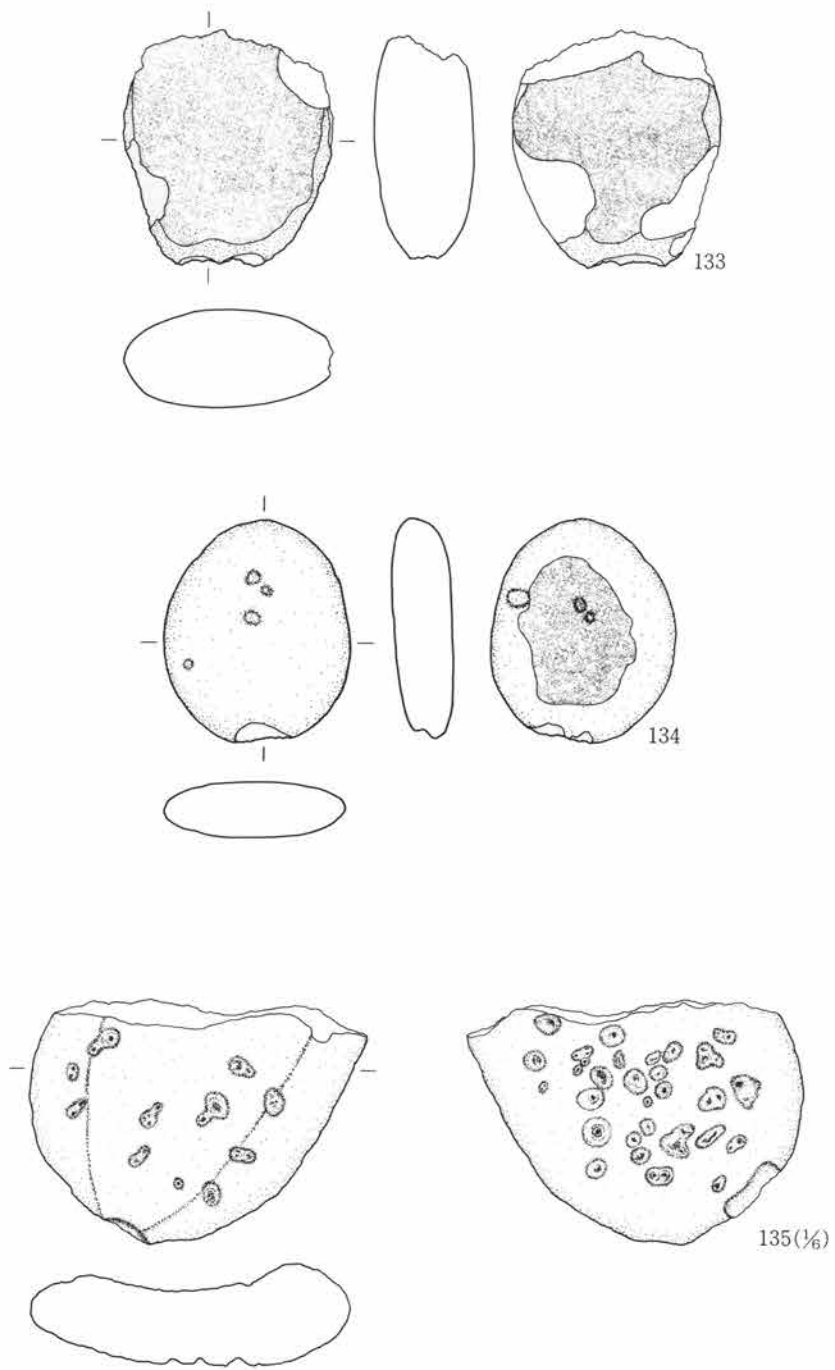
第184図 遺構外出土遺物実測図(5)



第185図 遺構外出土遺物実測図(6)

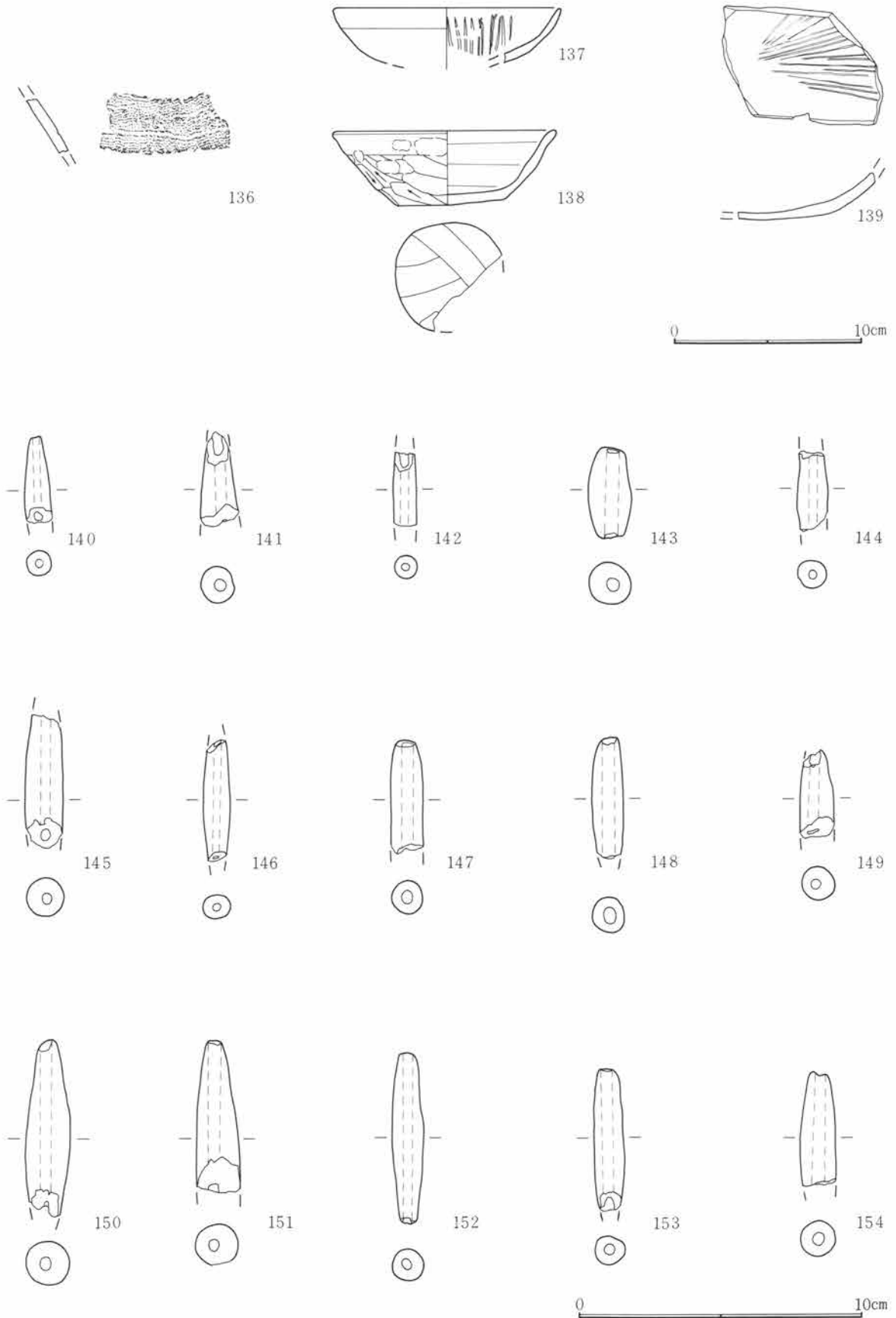


第186図 遺構外出土遺物実測図(7)

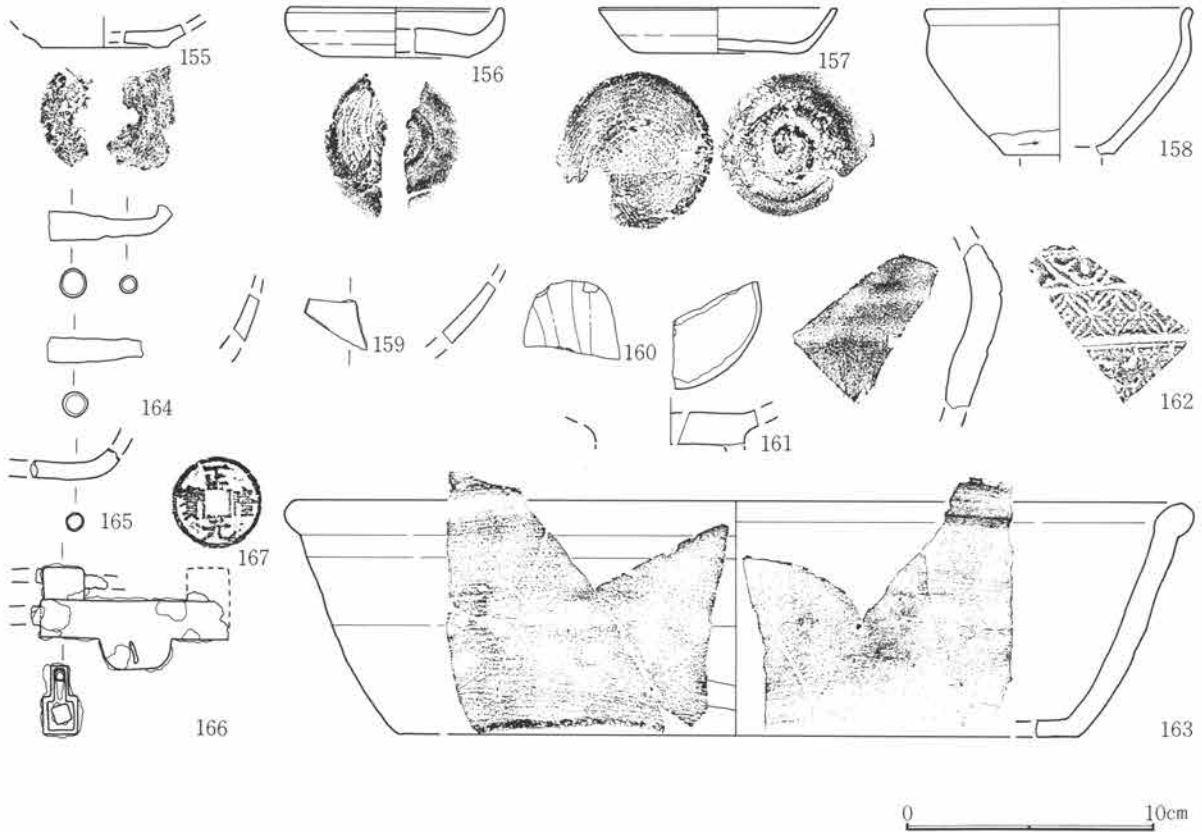


0 10cm

第187図 遺構外出土遺物実測図(8)



第188図 遺構外出土遺物実測図(9)



第189図 遺構外出土遺物実測図 (10)

中世以降～現代遺物数量表

遺構	時代	遺物数	石	土師器	須恵器	軟陶	土師質土器	陶器	磁器	その他	実測個体
1号溝	大正・戦前	112	2	31	2	43	0	23	9	ガラスビン1、古銭1	磁器2・陶器5・軟陶3・古銭1
2号溝	戦前	23	1	18	3	1	0	0	0		軟陶1
3号溝	昭和	343	16	318	8	1	0	0	0		土師器2・植木鉢1
4号溝	As-B混?	16	0	16	0	0	0	0	0		土師器1・土師質1
1土坑		3	1	1	0	0	0	0	0	カマド材1、(砥石1)	砥石1
9土坑	18・19世紀	13	1	0	0	3	0	3	5	瓦1	石1・瓦1・軟陶1
22土坑群	17～19世紀	17	0	0	0	0	0	10	7		磁器2
39土坑		1	0	0	0	0	0	0	1		磁器1
45土坑	19世紀	28	0	9	0	4	10	3	2		土師質土器皿5・磁器1・陶器1
46土坑	19世紀後半	22	1	5	0	11	0	2	3	(砥石1)	砥石1・磁器1・陶器1
47土坑	19世紀後半	16	4	3	0	8	0	0	0	瓦1	軟陶2
60土坑	19世紀	2	0	0	0	0	0	2	0		陶器1
66土坑	13世紀	1	0	0	0	0	0	0	1		磁器1
146土坑	17世紀	1	0	0	0	0	0	1	0		陶器1
1井戸		46	5	16	0	10	0	7	3	瓦5	石臼5
14井戸	13・14世紀	20	0	13	2	1	1	3	0		陶器3・土師質1・軟陶1
18井戸	14世紀	8	0	4	2	1	0	1	0		陶器1・軟陶1
21井戸	10・11世紀	1	1	0	0	0	0	0	0	(石骨蔵器1)	石骨蔵器1
2B-18G	13世紀	1	0	0	0	0	0	0	1		磁器1
2P-12G		9	0	2	0	0	0	2	4	キセル1	キセル1
1号住理土	19世紀後半	8	0	0	0	5	0	3	0		軟陶1
2号住理土		1	0	0	0	0	0	0	1		磁器1
3号住理土	18・19世紀	3	0	0	0	0	0	3	0		
44号住理土		3	0	0	1	1	0	0	1		
確認面		202	1	29	5	74	0	34	59	グリッド遺物含	土師質土器皿3・軟陶1・鉄錠1

◎遺物の盛期は、中世においては13・14世紀頃に集中の時期があり、近世においては19世紀以降に集中がある。

◎実測個体は、58点である。

第6章 まとめ

1 土器の編年

本遺跡出土土器の編年にあたり、分類と組列を検討する基準とした器種として、組成主要器種である坏と甕を用いた。なおここで検討する土器編年は本遺跡を対象に限っており、周辺地域をも対象とした普遍性をもつものではないことを付記しておく。

(1) 形式分類

土師器坏

坏A 口縁は弱く外反し、底部は浅い丸底。須恵器坏蓋の模倣。口径12cm前後に集中。口唇内側に面取り、口縁と底部の境の稜が強いA1と、口唇部が丸く稜の弱いA2がある。

坏B 坏Aに近似し、口縁が2回のなでによる段状を呈する(いわゆる「有段口縁坏」と呼称されるもの)。口径11~12cmに集中。口唇内側に面取り、境の稜の強いB1、口唇内側に面取りを残し口縁の段と境の稜が弱いB2、段と稜が丸みを帯びるB3、口縁の段が沈線状のB4がある。

坏C 口縁が外反して開き、浅い丸底で器高に比べ口径の大きい皿形を呈する。口径は15~16cm、18~19cmの2種がある。器高が深く、口縁と底部の境の稜がやや突出するC1、器高が浅く稜の弱いC2、器高が浅く口縁から底部に曲線的に連続するC3がある。また坏Bに類する有段口縁も若干見られる。C1はA1の大型品でC2~3とは別系列の可能性もある。

坏D 口縁から体部が曲線状で扁平な半球形を呈する。口径は12cmと15cmが主で9~10cmの小型が少数見られる。器高深く口縁幅の狭いD1、浅く口縁幅の広いD2がある。

坏E 坏Aに近似し、口縁の外反度が強く、幅が狭い。口径は11~12cmが大部分を占め、15cmの大型と10cmの小型が少数見られる。口縁下の稜が強く器高の深いE1、稜が弱く器高の浅いE2がある。

坏F 口縁は屈折して内傾。口径は10~11cm、13cm、15~16cmの3種が見られる。器高深く口縁幅狭く端部の尖るF1、器高浅く口縁幅やや広く端部の丸いF2

がある。屈折の弱いものは坏Dとの区別が困難。

坏G 口縁が「S」字状に屈曲する。内面に放射状暗文を施すものが多い。器高深く口縁屈曲の強いものと器高浅く口縁屈曲の弱いものに大別できるが、口縁幅の広狭など変化がある。口径は12~13cmと15cm前後が見られるが、数量少なく画一的な集中傾向は把めない。

坏H 口縁から体部の形状が坏Dに近似し、丸みを帯びた平底。口径は12cm、15cm、17cmの3種が見られるが、集中傾向は不明。器高深く、口縁幅の広いH1、器高のやや浅いH2、皿状で口縁幅の狭いH3がある。

なお、G類に多い放射状暗文は、D~F類にも見られることから、暗文の有無による分類は避けた。

須恵器坏

坏A 口縁~体部が内湾ぎみに開く。底部回転篋削り。径高指数35前後。口径13~14cm。

坏B 口縁~体部が直状に開き、腰部でくびれる。底部回転糸切り。口径13cm前後。

坏C 口縁~体部が直状に開き、口縁端部は弱く外反する。底部回転糸切り。径高指数34。中性焰。

坏D 口縁端部が弱く外反し、体部は内湾ぎみ。底部回転糸切り。口径は12cm以下で、径高指数は33~50とばらつく。酸化焰。

須恵器高台坏・埴

高台坏・埴A 口縁~体部が内湾ぎみに開き、器壁の薄い華奢な高台を付す。口径13cm。

高台坏・埴B 高台は短く、丸みが強い。口径14cmと16cm前後がある。体部内湾し口縁外反するB1と、体部から直状に開くB2がある。

甕

甕A 口縁は外反、長胴で、器壁は比較的厚い。胴の篋削りは縦ないしやや斜位。縦篋削りを主体とし胴最大径が中位付近にあるA1、胴上半は斜篋削りで胴最大径が上位にくるA2、強い篋削りで器厚を薄くし、口唇部がつまみ撫でで弱く屈曲するA3がある。

甕B 口縁は中位で弱く屈曲するものから「コ」字状を呈するものまでを含み、胴短で「無花果」形。

器壁は全体に薄い。胴の篋削りは上位が横、下半は縦。口縁が僅かに屈曲して外反するB1、屈曲部から上半が外反するB2、口縁屈曲強く典型的な「コ」字状で口唇部に撫で沈線が入るB3、口縁下半が内傾し上半が短く外折するB4がある。

甕C 口縁は小さく外反、胴は「無花果」形か半球形に近く甕Bより短い。器壁は厚い。胎土に細礫～粗砂を含む。焼成にむらはあるが堅緻。胴の篋削りは上半が横で下半は縦。口縁「コ」字形がくずれ上半のみ発達して外反するC1、短く外反する単純口縁で頸部径が広くしまりが弱いC2、口縁器壁やや薄く外面にナデによる弱い段ができ半球形胴のC3がある。

以上の坏類と甕類の他に、鉢、小型丸底甕、小型台付甕、短頸壺、脚付短頸壺、球胴甕、羽釜、須恵器蓋、土師質の坏と高台塚が構成器種に加わるが、数量が少ないため型式把握が偏るおそれがあると考え、細分の対象から除いた。

(2) 形式組列

土師器坏の組列は、坏Aと坏Bに関しては、須恵器坏蓋の忠実な模倣形態から粗略化の変遷を想定してA1→A2、B1→B2→B3→B4が考えられ、坏C～坏Hは、口唇部が尖りやや器高の深いものから口唇部丸く浅いものへの変遷を想定して、C1→C2・C3、D1→D2、E1→E2、F1→F2、G1→G2、H1→H2・H3と考えた。また、A～G類は同時存在するバラエティーととらえうるが、H類はD～F類のいずれかの系統を引く後続型式と考える。須恵器坏は、A→B→C→Dの組列が考えられる。甕の組列は、口縁～胴部形状の変化と、これと相関関係にある篋削り技法と器厚の漸移的変遷から、A1→A2→A3→B1→B2→B3→B4→C1→C2→C3と想定される。また型式分類は行わなかったが、球胴甕は口頸部径の拡大と器厚の減少、鉢は器高浅く口縁下の稜の弱いものへ、短頸壺は口縁下稜が弱く器壁の薄いものへと変化することが推測される。この変化は大部分の器種間を通して見られる共通の傾向である。以上に掲げた各器種の型式組列については、住居跡一括遺物の相伴関係の検討により、相互に矛盾するものでないことが

判明している。したがって、これらは編年上の時間軸となりうるものであり、さらに変化の画期をとらえて時期区分も可能である。

(3) 時期区分

上記の検討をもとに、住居一括遺物の相伴関係から各類別器種相互の組成を抽出し、それぞれの組列にしたがって時間軸上に並べることで以下の10時間区分を行った。

I期 土師器坏A2・B2・E1～2・F1～2・G1、甕A1を主とする。坏Fのように大小の法量分化が見られる。器種組成に器壁の厚い球胴甕、小型丸底甕、土師器の短頸壺と脚付短頸壺が見られる。2区35住、同40住が代表。坏A・B類の比較から40・53住は35住より古相を示す。

II期 土師器坏B2～3・C2・D1～2・E2・F1～3、甕A2を主とする。坏G2がみられる。坏DとFに大中小の法量分化が見られる。最も坏のバラエティーに富む。器種組成はI期と同様。1区8・同12・2区38・1区47住を代表とする。器高の浅い坏類が多いこと。口縁つまみ撫でを行うこと、短頸壺や鉢の口縁下稜が弱くなることを新相ととらえれば、古相（1区7・12・47・2区33住など）と中相（1区8住など）と新相（1区17・2区34住など）の3時期に細分することも可能である。

III期 土師器坏A・B・Gは消滅し、D2とF2が主体を占める。両者は口唇部が丸みもち器高が低くなることで、前段階ほどの差異がなくなる。II期に比べてC2～3が多く、E2は少ない。甕はA3を主とする。1区2・同4・2区44住を代表とする。

IV期 土師器坏H1～3を主体とし、坏C2～3が残る。甕は全形を知り得ないがA3とB1の中間形態が見られる。1区15・20住を代表とする。

V期 坏類は不明確。甕はB1が位置付けられる。2区28住坏出土・同52住の甕をあてる。

VI期 坏類は不明確。甕はB2が位置付けられる。1区10住坏出土の甕をあてる。

VII期 坏類は不明確。甕はB3が位置付けられる。3区1住の甕をあてる。

VIII期 須恵器坏C2～3、高台埴B1、甕B4・C1を主とする。甕B4とC1のそれぞれを主体とする時期に二分される可能性がある。光ヶ丘1号窯式期、大原2号窯式期の灰釉碗皿が伴う。3区2・2区31住が代表で、後者は新相を示す。

IX期 須恵器坏D、高台埴B1～2、甕C2を主とし、体部篋削りの土師質の坏と高台埴を伴う。羽窯の存否は不明。虎溪山1号窯式期の碗を伴う。1区18・2区27住が代表。

X期 須恵器坏D、高台埴B2、甕C2・C3、羽窯を主とする。1区14住を代表とする。

以上の10時期のうち、V～VII期は甕以外の器種が不明であるが、想定される甕の組列に従って位置付けた。以上の土器編年によれば、概ね時間的連続性は保たれているが、V期～VIII期には一細分型式程度の空白時期が断続的に入る可能性がある。各時期の実年代観については、共伴する須恵器と灰釉陶器の年代観を援用すれば、I期－7世紀前、II期－7世紀中～後、III期－8世紀前、IV期－8世紀中、V期－8世紀後、VI期－9世紀前、VII期－9世紀中、VIII期－9世紀後～10世紀前、IX期－10世紀後、X期－10世紀末と考えられよう。

2 集落の動向

前項で検討した編年案に基づいて、検出された古代の各遺構を時期別に細分し、遺構群の分布の状況と変遷を概観してみたい。

I期 2区40・35・53住・1区17井戸（3軒うち大型1軒）

東側の谷に臨む台地端に竪穴住居の小群とこれより北西に約120m離れて井戸1基がある。35住は他より新しいと思われる。

II期 古段階－1区3・5・7・12・47・2区33・38住（7軒うち大型1軒）

中段階－1区6・8・16・48・2区36住（5軒うち大型1軒）

新段階－1区17・49・2区34・39住（4軒）
南東と北西に約60m離れて2カ所に竪穴住居群が

分布する。同時存在が困難なほど近接する位置関係から2～3の複数時期にわたる可能性が高い。近接して存在する同軸竪穴について同期土器群に見られる新旧相を根拠に時期別分類を行った。これに1号円形周溝、5・24井戸が加わる。なお主軸方向の一致を根拠にすれば、1号掘立柱建物跡はこの時期に帰属する可能性がある。

III期 1区1・2・4・19・2区41・29・44住（7軒）
竪穴住居は調査区全体に散在する。1区2号住と4住は南北に並行して隣接する同軸住居であり、土器の様相から4→2号住の新旧関係が考えられる。

IV期 1区15・20・46住（3軒うち大型1軒）

竪穴住居は調査区北西半に散在する。

V期 2区28・29住（2軒）

中央部に連続して営まれたと思われる時期差のある竪穴住居が単独で存在。52→28住と思われる。

VI期 1区10住下部・19井戸（1軒）

調査区での竪穴住居の分布はほとんど見られない。

VII期 3区1住（1軒）

台地縁辺の低い部分にあたる調査区南東端にのみ、竪穴住居が単独で存在。

VIII期 2区31・42・3区2号住（3軒）

VIIから継続したと思われる竪穴住居1軒と、調査区中央に2軒が分布する。ただしこれは同時存在ではなく、土器の様相差から42→31住と移動した可能性が高い。

IX期 1区9・10上部・18・23・2区27住（5軒）

中央部に1軒、北西部に4軒の竪穴住居が分布。23住は比較的古相の土器をもつことから、2時期に細分される可能性あり。

X期 1区14住（1軒）

北西部に竪穴住居1軒が存在。

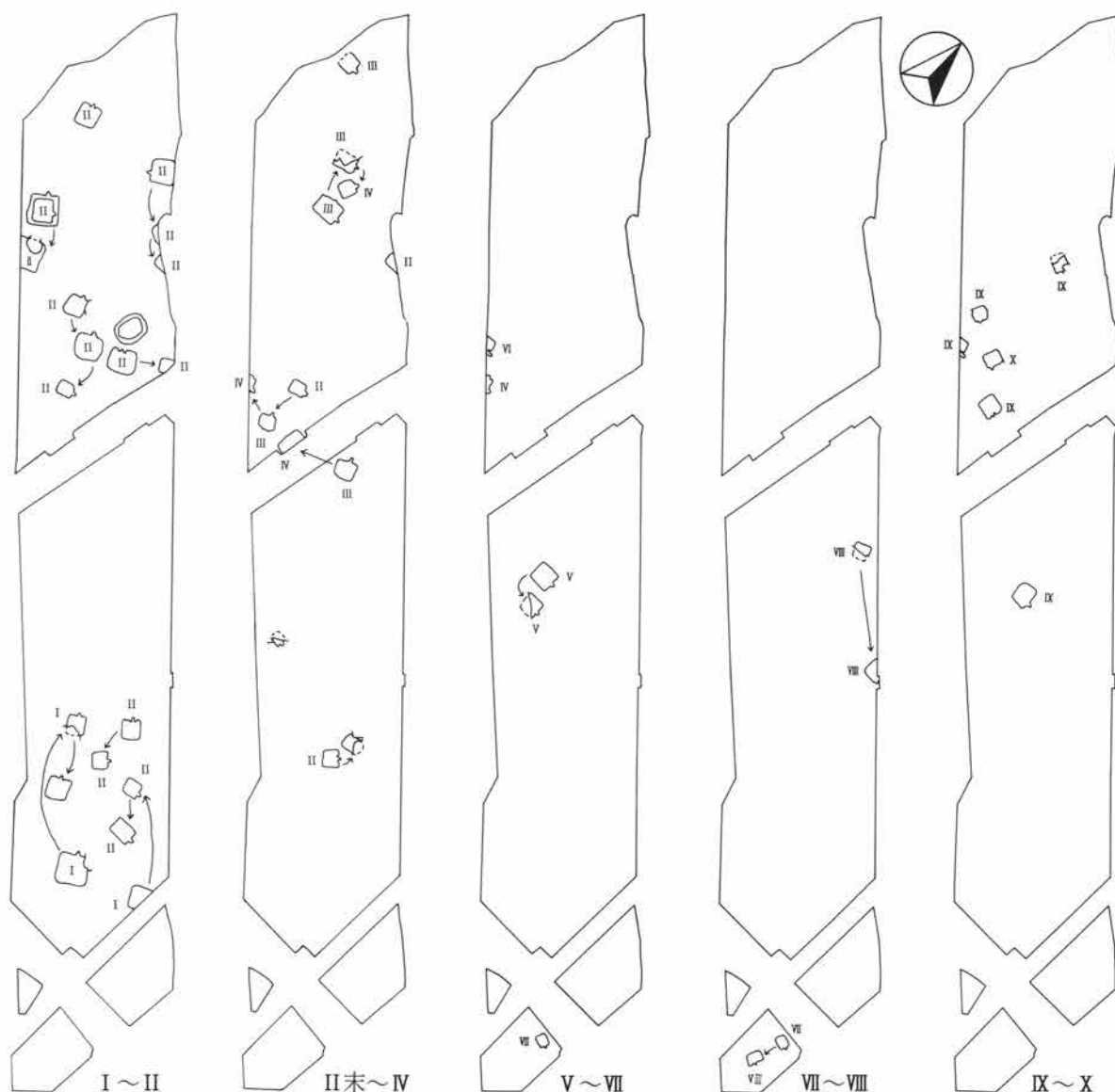
以上の遺構分布状況と変遷についてまとめる。

①竪穴住居は7前～10世紀末まで継続して存在。

②I～II期は、竪穴住居2～3軒で一群をつくる。

③III期以降は、竪穴住居が単独で散在する。

④調査区内では、I～II期に竪穴住居軒数が増し、III期以降は減少する。



遺構の分布と建て替えの想定

⑤ほぼ同じ土器型式の範囲内で、同軸で同形態の竪穴住居を隣接して建て替える例が多い。

①に関しては、古墳時代以来の伝統と別に木崎台地南半の谷の開発を目指してつくられた新開集落と推測されるが、6世紀以前と思われる土器を出土した井戸（2号）の存在から、より古い集落が別地点に存在した可能性を残す。②～③にみられる竪穴住居の粗密増減は人口の増減や集落としての発展衰退を直接表すものではない。それは平地住居等の建物の存在や集落域全体の拡大縮小を検討することで初めて明らかになる。ただし、宅地や畠地や空地など

の台地上における土地利用の仕方やバランスが大きく変化していることは明らかだろう。⑤は竪穴住居を建てる宅地がある程度限定されていたことを示唆している。なお、ここで判明したのは台地上に占地する集落の一部に過ぎず、全体像を明らかにすることはできないが、北側の浅い窪地を隔てて隣接する台地上には、新田町教育委員会によってほぼ同時期の竪穴住居や掘立柱建物跡群が検出されており、本遺跡を含む同一集落であった可能性が高い。報告を待つ次第である。

第7章 遺物觀察表

中江田ハツ繩遺跡1区1号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
9図1 図版64	土師器 坏	カマド 1/3	口(13.2) 底— 高—	黒色鉾物粒微 白色細粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	明赤褐	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
9図2 図版64	土師器 坏	掘り方 1/3	口(13.0) 底— 高—	白・黒色鉾物粒 微	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
9図3 図版64	土師器 坏	埋土 1/4	口(13.2) 底— 高 3.4	黒色鉾物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
9図4 図版64	土師器 坏	カマド 2/3	口 13.3 底— 高 3.9	白色鉾物粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はやや外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
9図5 図版64	土師器 坏	カマド 1/2	口(14.8) 底— 高 4.1	黒・白色鉾物粒 微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
9図6 図版64	土師器 甕	掘り方 破片	口 20.0 底— 高—	黒・白色鉾物粒 少 白色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。	
9図7 図版64	土師器 甕	カマド 破片	口(24.0) 底— 高—	白・黒色鉾物粒 微 細砂粒少 白色粒微	酸化焰 硬質	明赤褐	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たずに続く。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削りを施す。	
10図8 図版64	土師器 甕	埋土 破片	口— 底— 高—	黒色鉾物粒微 白色粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	橙	口唇部に刻みが見られる。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質		特徴・その他		
10図9 図版64	石製品 滑車?	埋土 完形	長 8.5 幅 8.4 厚 3.8 重 178g	二ツ岳軽石		穿孔は両方向からで、側面に環状に溝が廻る。孔 0.8		
10図10 図版64	石製品 砥石	埋土 2/3	長(11.7) 幅 8.1 厚(5.8) 重 744g	輝緑岩		3面使用で上下端部及び1面欠損。		
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特徴・その他				
10図11 図版64	鉄器 釘	埋土 一部欠損	長 3.7+a 幅 0.5 厚 0.5 重 1.9g	頭部は、本来の折り曲げから、さらに曲がり、使用釘である。錆ぶくれ少なく良鉄を思わせる。欠損は調査時以降。錆は古代鉄様。				
10図12 図版64	鉄器 釘	埋土 一部欠損	長 4.4+α 幅 0.6 厚 0.5 重 2.1g	少し曲がり、使用釘を思わせる。錆ぶくれ少なく良鉄を思わせる。欠損は調査時以降。錆は古代鉄様。				
10図13 図版64	鉄器 釘	埋土 一部欠損	長 8.1+α 幅 0.5 厚 0.5 重 5.6g	頭部の欠損は旧時、中途は調査時以降。曲がり、使用鉄を示す。錆ぶくれ少なく良鉄を思わせる。錆は古代鉄様。				
10図14 図版64	鉄器 楔状の鉄	埋土 一部欠損	長 13.2+α 幅 1.6 厚 0.8 重 73.1g	楔もしくは、突込み用の道具らしく、頭部の一部は、叩かれたらしく広がる。頭部端・先端は調査時以降の欠損。錆ぶくれ少、古代鉄様。				

中江田ハツ繩遺跡1区2号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
12図1	土師器 坏	埋土 破片	口(12.0) 底— 高 2.4	黒色鉾物粒微 白色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は扁平な丸底で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削り。	
12図2	土師器 坏	埋土 破片	口(11.0) 底— 高 2.8	黒色鉾物粒微 白色細粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。底部篋削り、口縁部横撫で。	底部穿孔?
12図3 図版64	土師器 坏	床直 1/3	口(12.6) 底— 高 3.4	黒色鉾物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
12図4 図版64	土師器 坏	貯蔵穴 1/4	口(13.2) 底— 高—	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は直立する。底部は扁平な丸底。口縁部横撫で、底部篋削り。体部は整形不明瞭。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
12図5 図版64	土師器 坏	貯蔵穴 ほぼ完形	口 13.8 底 - 高 3.7	黒色鉱物粒微 砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削り。	カーボン付着
12図6 図版64	土師器 坏	貯蔵穴 1/2	口(14.7) 底 - 高 4.0	黒色鉱物粒微 白色細粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐	底部は丸底で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
12図7 図版64	土師器 坏	カマド・ 埋土 1/4	口(15.0) 底 - 高 -	黒色粒多 白色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は扁平な丸底で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削り。	
12図8 図版64	須恵器 蓋	埋土 1/2	口(20.0) 口径 - 高 -	白色細粒少 細砂粒多	還元焰 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。天井部は偏平で、口縁部は短く屈曲する。天井部外面に回転篋削りを施す。摘部欠損。	
12図9 図版64	土師器 甕	床直 1/4	口(25.0) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多 白色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部はあまり張りを持たずに続く。口縁部横撫で、胴部は斜位の篋削りを施す。内面撫で。	
12図10 図版64	須恵器 甕	埋土 破片	厚 1.1	白色粒多	還元焰 硬質	灰褐	叩き整形。外面は平行叩き、内面は青海波文。	
13図11 図版64	須恵器 甕	埋土 破片	厚 0.7	白色粒多	還元焰 硬質	灰	叩き整形。外面は平行叩き、内面は青海波文。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他			
13図12 図版64	石器 敲石	周溝 完形	長 9.6 幅 5.9 厚 2.6 重 184g	粗粒安山岩	両端部と側縁にも一部敲打痕が認められる。			
13図13 図版64	石器 敲石	埋土 1/2	長(7.6) 幅 6.8 厚 3.4 重 255g	粗粒安山岩	側縁に敲打痕が認められる。			

中江田八ツ縄遺跡1区3号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
15図1 図版65	土師器 坏	床直 3/4	口 12.4 底 - 高 4.8	黒色鉱物粒微 白色細粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	内面器面荒れ
15図2 図版65	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口 12.8 底 - 高 4.4	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部は横撫で、底部篋削りを施す。	
15図3 図版65	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口 11.7 底 - 高 4.5	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
15図4 図版65	土師器 甕	埋土 1/2	口 19.0 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。	
15図5 図版65	土師器 甕	埋土 破片	口 21.0 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
15図6 図版65	土師器 甕	埋土 1/2	口 20.5 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は中位にわずかに張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
16図7 図版65	土師器 甕	埋土 ほぼ完形	口 14.4 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は中位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	内面器面荒れ
16図8 図版65	土製品 土錘	埋土 2/3	長 3.8 径 1.0 孔 0.3	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	両端部欠損。	
16図9 図版65	土製品 土錘	埋土 ほぼ完形	長 5.8 径 0.9 孔 0.3	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	端部は面取りを施している。直線的で中央部がふくらまない。	

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他
16図10 図版65	石器 敲石	埋土 ほぼ完形	長 12.8 幅 4.2 厚 4.8 重 369g	粗粒安山岩	側縁部に敲打痕が見られる。

中江田八ツ縄遺跡1区4号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
19図1 図版65	土師器 坏	埋土 破片	口(13.0) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	器面磨減
19図2 図版65	土師器 坏	カマド掘り方 2/3	口 11.9 底— 高 3.3	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
19図3 図版65	土師器 坏	埋土 1/4	口(12.6) 底— 高 3.2	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
19図4 図版65	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 14.5 底— 高 4.7	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
19図5 図版65	土師器 坏	埋土 1/3	口 15.0 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 軟質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	器面磨減
19図6 図版65	土師器 坏	埋土 3/4	口 14.4 底— 高 3.5	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
19図7 図版65	土師器 坏	埋土 破片	口(16.0) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	体部は浅い皿状で、口縁は体部との境に稜を持ち外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
19図8 図版65	土師器 小型甕	埋土 破片	口(7.6) 底— 高—	細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	胴部は球状で、口縁部との境に稜を有し、口縁部は直立する。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。	
19図9 図版65	土師器 鉢	埋土 破片	口(20.4) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	黒褐	口縁部は体部との間に強い稜を有し、外反し、1条の沈線が廻る。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
19図10 図版65	土師器 甕	カマド袖 2/3	口 24.0 底— 高—	白・黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は中位にやや張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。	
19図11 図版66	土師器 甕	カマド内 破片	口(19.0) 底— 高—	白・黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反する。胴部は中位にわずかに張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。	
19図12 図版66	土師器 甕	カマド袖 1/3	口— 底 4.7 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	胴部下位斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
19図13 図版66	土師器 甕	埋土 破片	口 21.6 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は直線的に続く。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。	
20図14 図版66	土師器 甕	埋土 破片	口(27.0) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反し、胴部中位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。	

中江田八ツ縄遺跡1区5号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
23図1 図版66	土師器 坏	埋土 完形	口(11.0) 底— 高 3.4	白・黒色鉱物粒微 黒色粒微	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
23図2 図版66	土師器 坏	埋土 破片	口(11.0) 底— 高 3.5	白色鉱物粒微	酸化焰 硬質	橙	口縁部は体部との境に稜を持ち、やや内傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
23図3 図版66	土師器 坏	埋土 破片	口— 底— 高—	黒色粒少	酸化焰 硬質	橙	内面撫で後、放射状の磨きを施す。	
23図4 図版66	土師器 坏	掘り方 破片	口— 底— 高—	赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	内面撫で後、放射状の磨きを施す。	
23図5 図版66	土師器 甕	掘り方 (P-22) 破片	口18.8 底— 高—	白・黒色鈳物粒 少 細砂粒多 白色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを 持たない。口縁部横撫で、胴部斜位の磨削り、 内面磨撫でを施す。	
23図6 図版66	土師器 甕	埋土・貯 蔵穴 破片	口(21.8) 底— 高—	黒色鈳物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを 持たない。口縁部横撫で、胴部斜位の磨削り、 内面磨撫でを施す。	
23図7 図版66	土師器 甕	埋土・床 直 破片	口(25.0) 底— 高—	黒色鈳物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部は外反し、胴部上位に張りを持つ。口 縁部横撫で、胴部斜位の磨削り、内面撫でを 施す。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)		石質	特 徴 ・ そ の 他		
23図8 図版66	石製品 紡錘車	P-1内 完形	径 4.0 孔 0.7 厚 2.1 重 54g		蛇文岩	穿孔は一方向からで、周囲は丁寧に研磨されている。上・下 面に鋸歯状の線刻が施されている。		
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)		特 徴 ・ そ の 他			
23図9 図版66	鉄器 板状の鉄 残片	貯蔵穴 残片	長 5.6+ α 幅 3.9 厚 0.5 重 26.6g		大きく層状の剥離があり、古代鍛鉄製品には見えず、粗鍛の状態を呈す。 23図10と同一個体の質感があり、4辺は調査時以降の欠損。			
23図10 図版66	鉄器 板状の鉄 残片	貯蔵穴 残片	長 7.3+ α 幅 5.6 厚 0.5 重 40.3g		23図9と同一個体の質感あり。状態・質感も同じ。4辺のうち、2辺は 調査時以降の欠損で、他の2辺は不明瞭。			

中江田八ツ縄遺跡1区6号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
24図1 図版66	土師器 坏	埋土 破片	口(10.1) 底— 高 2.4	黒色鈳物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は直立する。口縁 部横撫で、底部磨削りを施す。	
24図2 図版66	土師器 坏	埋土 破片	口13.4 底— 高 3.0	白・黒色鈳物粒 微 赤褐色粒	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁 部横撫で、底部磨削りを施す。	
24図3 図版66	土師器 坏	埋土 破片	口14.4 底— 高 4.1	細砂粒少	酸化焰 やや硬 質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横 撫で、底部磨削りを施す。	
24図4 図版66	土師器 坏	埋土 破片	口11.6 底— 高 2.3	白・黒色鈳物粒 微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は短く外反する。 口縁部横撫で、底部磨削りを施す。	外面黒斑あ り
24図5 図版66	土師器 坏	埋土 破片	口12.8 底— 高 3.7	白・黒色鈳物粒 微 白色細粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横 撫で、底部磨削りを施す。	
25図6 図版66	土師器 坏	埋土 破片	口(15.4) 底— 高—	白色鈳物粒微 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横 撫で、底部磨削りを施す。	
25図7 図版66	土師器 坏	埋土 破片	口(18.0) 底— 高—	細砂粒少	酸化焰 やや硬 質	橙	底部は扁平な丸底で、口縁部はほぼ直立する。 口縁部横撫で、底部磨削りを施す。	
25図8 図版66	土師器 坏	埋土 破片	口— 底— 高—	黒色鈳物粒微	酸化焰 硬質	橙	内面撫で後、放射状暗文を施す。	
25図9 図版66	土師器 甕	埋土 破片	口(22.0) 底— 高—	黒色鈳物粒多 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを 持たずに続く。口縁部横撫で後、胴部縦位の 磨削り、内面を磨撫でを施す。	
25図10 図版66	土師器 小型甕	埋土 破片	口(11.0) 底— 高—	黒・白色鈳物粒 微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は短く外反し、胴部は張りを持つ。口 縁部横撫で、胴部斜位の磨削り、内面撫でを 施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
25図11 図版66	須恵器 甕	埋土 破片	口— 底— 高—	細砂粒多 白色粒少	還元焰 硬質	灰	紐作り轆轤整形。外面カキ目を施す。	厚 1.0
25図12 図版66	須恵器 甕?	埋土 破片	口— 底— 高—	細砂粒少 白色粒少	還元焰 硬質	灰	外面平行叩きを施す。	厚 1.0
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)		石質	特徴・その他		
25図13 図版66	石製品 紡錘車	埋土 完形	径 4.0 孔 0.8	厚 2.1 重 56 g	蛇文岩	穿孔は両方向からで、側面には細い擦痕が見られる。		

中江田ハツ縄遺跡1区7号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
27図1 図版67	土師器 坏	埋土 3/4	口(10.0) 底— 高 2.6	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
27図2 図版67	土師器 坏	埋土 完形	口 10.6 底— 高 3.0	黒・白色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
27図3 図版67	土師器 坏	床直 3/4	口(10.2) 底— 高 2.8	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
27図4 図版67	土師器 坏	埋土 3/4	口 11.4 底— 高 3.7	黒色鉱物粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	カーボン付着 外面黒斑
27図5 図版67	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 10.6 底— 高 3.7	黒・白色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は短く内湾する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
27図6 図版67	土師器 坏	床直 1/2	口 11.2 底— 高 3.5	黒・白色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに内湾する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
27図7 図版67	土師器 坏	床直 完形	口 11.0 底— 高 3.6	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
27図8 図版67	土師器 坏	埋土 完形	口 12.3 底— 高 4.2	黒色鉱物粒微 黒色細粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに内湾する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
27図9 図版67	土師器 坏	床直・埋土 ほぼ完形	口 13.8 底— 高 3.9	白・黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
27図10 図版67	土師器 坏	埋土 破片	口— 底— 高—	黒色鉱物粒微 白色粒少	酸化焰 硬質	黒	内面寛磨き後、黒色処理(内・外面)を施す。	
27図11 図版67	土師器 小型甕	床直 2/3	口 10.6 底— 高 9.6	黒色鉱物粒微 細砂粒少 白色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	丸底で胴部に張りを持ち、口縁部はほぼ直立し、胴部との境に稜を有する。口縁部横撫で、胴部寛削りを施す。	内外面器面の荒れ
27図12 図版67	土師器 甕	埋土 破片	口(19.6) 底— 高—	黒色鉱物粒微 砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たずに続く。口縁部横撫で後、胴部縦位の寛削りを施す。内面寛撫で。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)		石質	特徴・その他		
27図13 図版67	石製品 砥石	床直 完形	長 14.0 厚 4.5	幅 3.9 重 221 g	流紋岩	4面使用。残石した痕部には線状のえぐりが認められる。		

第7章 遺物観察表

中江田ハツ繩遺跡1区8号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
29図1 図版67	土師器 坏	埋土 2/3	口 11.0 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	明赤褐	口縁部は体部との境に稜を有し、段を持って外反する。口唇部は折り返されたような状態を呈している。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図2 図版67	土師器 坏	埋土 1/2	口 10.4 底 - 高 2.6	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は直立する。口縁部は横撫で、底部篋削りを施す。	
29図3 図版67	土師器 坏	埋土 1/4	口 12.0 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図4 図版67	土師器 坏	埋土 完形	口 11.4 底 - 高 3.0	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図5 図版67	土師器 坏	埋土 2/3	口 11.2 底 - 高 3.4	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部は横撫で、底部篋削りを施す。	
29図6 図版67	土師器 坏	埋土 3/4	口 12.0 底 - 高 3.7	白・黒色鉱物粒 微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図7 図版68	土師器 坏	埋土 2/3	口 13.4 底 - 高 3.9	白・黒色鉱物粒 微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図8 図版68	土師器 坏	埋土 2/3	口 11.4 底 - 高 3.8	黒色鉱物微	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図9 図版68	土師器 坏	埋土 2/3	口 12.4 底 - 高 6.9	黒色鉱物粒微	酸化焰 軟質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図10 図版68	土師器 坏	埋土 2/3	口 13.2 底 - 高 3.7	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図11 図版68	土師器 坏	埋土 1/3	口 12.0 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図12 図版68	土師器 坏	埋土 破片	口 (13.6) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は内傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図13 図版68	土師器 坏	埋土 破片	口 14.4 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 白色細粒少	酸化焰 硬質	黒	底部は体部との境に稜を持って外反する。放射状篋磨きを施す。	内外面黒色処理？
29図14 図版68	土師器 坏	床直 1/2	口 (13.1) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図15 図版68	土師器 坏	埋土 1/2	口 (13.2) 底 - 高 4.3	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図16 図版68	土師器 坏	埋土 1/4	口 (15.4) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部はやや偏平な丸底で、口縁部はわずかに内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
29図17 図版68	土師器 坏	埋土 破片	口 - 底 - 高 -	細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	橙	内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	
29図18 図版68	土師器 坏	埋土 破片	口 - 底 - 高 -	細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	橙	内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	
30図19 図版68	土師器 小型甕	埋土 破片	口 12.2 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部はわずかに外反し、胴部にやや張りを持つ。口縁部横撫で、胴部横位の篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
30図20 図版68	土師器 甕	埋土 破片	口(17.0) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	にふい 黄褐	口縁部は「く」字状に強く外反する。口縁部横撫で後、胴部縦位の篋削りを施す。	
30図21 図版68	土師器 甕	埋土・P —1 破片	口(22.6) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は中位にやや張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
30図22 図版68	土師器 甕	埋土 破片	口— 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒少 白色細粒少	酸化焰 硬質	明赤褐	胴部下位斜位の篋削りを施す。胴部は中位に張りを持つ。	
30図23 図版68	土師器 甕	埋土 破片	口22.0 底— 高—	黒色鉱物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	にふい 橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部はあまり張りを持たない。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。	
30図24 図版68	土師器 甕	埋土 破片	口(19.2) 底— 高—	黒色鉱物粒微 白色細粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部上位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部横位の篋削りを施す。	
30図25 図版68	土師器 小型甕	埋土 2/3	口8.6 底— 高9.1	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	胴部は中位に強い張りを有し、口縁部は直立する。口縁部横撫で、胴部横位の篋削りを施す。	
30図26 図版68	土師器 鉢	埋土 破片	口21.6 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒多	酸化焰 硬質	褐	口縁部は外反する。口縁部横撫で、体部篋削りを施す。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他			
30図27 図版68	石製品 砥石	埋土 1/3	長 5.5 幅 4.9 厚 3.9 重 126g	流紋岩	4面使用？			
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
30図28 図版68	土製品 土錘	埋土 完形	長 5.2 径 1.2 孔 0.3	黒色鉱物粒微 白・黒色粒少 赤褐色粒微	酸化焰	にふい 黄橙	両端部未調整。	
30図29 図版68	土製品 土錘	埋土 完形	長 5.4 径 1.1 孔 0.3	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰	灰黄	端部未調整。	
30図30 図版68	土製品 土錘	埋土 完形	長 5.0 径 1.1 孔 0.3	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰	にふい 黄橙	両端部未調整。	
30図31 図版68	土製品 土錘	埋土 完形	長 5.3 径 1.2 孔 0.4	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少 白・黒色粒少	酸化焰	にふい 褐	両端部未調整。	
30図32 図版68	土製品 土錘	カマド ほぼ完形	長 4.9 径 1.4 孔 0.4	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰	にふい 橙	端部未調整。指頭痕あり。	
30図33 図版68	土製品 土錘	埋土 1/2	長— 径 0.9 孔 0.4	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰	にふい 黄橙	欠損した端部は磨滅している。	
30図34 図版68	土製品 土錘	埋土 1/2	長— 径 0.9 孔 0.3	黒色鉱物粒微 白・黒色粒少	酸化焰	にふい 黄橙	端部未調整。	
30図35 図版68	土製品 土錘	埋土 完形	長 3.3 径 0.9 孔 0.3	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰	にふい 褐	両端部未調整。	
30図36 図版68	土製品 土錘	埋土 2/3	長— 径 0.9 孔 0.4	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰	にふい 黄橙	端部未調整。	
30図37 図版68	土製品 土錘	埋土 1/2	長 3.1 径 0.9 孔 0.3	黒色鉱物粒少 黒色粒多 赤褐色粒少	酸化焰	にふい 黄橙	欠損した端部は磨滅している。	
30図38 図版68	土製品 土錘	埋土 完形	長 1.8 径 1.0 孔 0.5	細砂粒少	酸化焰	にふい 橙	径に比較し、長さが短い。	

第7章 遺物観察表

中江田八ツ縄遺跡1区9号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
31図1 図版69	土師器 埴	埋土 破片	口— 底 7.2 高—	黒色鉱物粒微 白色細粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 褐	付高台。	
31図2 図版69	土師器 甕	カマド 破片	口(16.4) 底— 高—	黒色鉱物粒微 白色細粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 褐	口縁部は外反し、胴部中位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部横位の篋削り、内面撫でを施す。	
31図3 図版69	須恵器 甕	埋土 破片	口— 底— 高—	黒・白色細粒多	還元焰 硬質	灰	外面叩き不明。内面青海波文。	

中江田八ツ縄遺跡1区10号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
33図1 図版69	土師器 坏	埋土 破片	口(12.4) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	体部は張りを持たず、口縁部は外反する。口縁部横撫で、体部篋削りを施す。	口縁部カーボン付着
33図2 図版69	土師器 埴	埋土 1/2	口(14.6) 底 7.6 高 5.8	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	浅黄橙	体部は張りを持たず、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、体部下位に篋削りを施す。付高台。高台部に刺突痕あり。	体部指頭痕
33図3 図版69	土師器 埴	埋土 1/3	口(14.7) 底— 高—	黒色鉱物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	体部は張りを持たず、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、体部篋削りを施す。高台部欠損。	
33図4 図版69	須恵器 埴	埋土 1/2	口(14.2) 底— 高—	細砂粒多	酸化焰 やや軟質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部にわずかに張りを持ち、口縁部は強く外反する。高台部は磨滅しており、中央部が突出する。切り離し技法不明。	
33図5 図版69	須恵器 坏	カマド内 1/2	口 15.3 底 7.4 高 6.3	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	轆轤整形(右回転)。体部下位に張りを持ち、口縁部は外傾する。底部回転系切り未調整。	
33図6 図版69	土師器 甕	カマド内 破片	口 21.2 底— 高—	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部は「コ」字状に外反し、端部は強く屈曲する。口縁部横撫で、底部篋削り、内面撫でを施す。口縁部指頭痕顕著。	粘土接合痕
33図7 図版69	土師器 甕	カマド 3/4	口 20.6 底 4.0 高 28.0	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「コ」字状を呈し、胴部上位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部上位横位、下位斜位の篋削りを施す。口縁部粘土接合痕顕著。	内面コゲ状付着物
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)		石質	特徴・その他		
33図8 図版69	石器 磨石	埋土 完形	長 15.7 厚 3.0	幅 4.9 重 342g	黒色片岩	両端部が磨滅している。		

中江田八ツ縄遺跡1区12号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
36図1 図版69	土師器 坏	埋土 1/2	口 13.0 底— 高 5.3	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。底部外面器面荒れ。	底部外面黒斑あり
36図2 図版69	土師器 坏	埋土 1/2	口 11.0 底— 高 3.7	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
36図3 図版69	土師器 坏	床下土坑 床直 ほぼ完形	口 11.8 底— 高 3.6	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。底部に焼成後の穿孔が見られる。	
36図4 図版69	土師器 坏	埋土 破片	口(14.0) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒少 白色細粒少	酸化焰 硬質	明黄褐	口縁部は体部との境に稜を有し、段を持って外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
36図5 図版69	土師器 坏	埋土 2/3	口 11.8 底 - 高 4.5	黒色鉱物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。内面篋跡あり。	
36図6 図版69	土師器 坏	埋土 1/2	口 10.2 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は直立する。底部篋削りを施す。	
36図7 図版69	土師器 坏	埋土 2/3	口 11.1 底 - 高 3.8	細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
36図8 図版69	土師器 坏	埋土 1/2	口 10.2 底 - 高 3.7	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫でを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	外面黒斑 内面カーボン付着
36図9 図版69	土師器 坏	埋土 1/2	口 11.2 底 - 高 3.8	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや軟質	明褐	底部は偏平な丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	口縁部カーボン付着
36図10 図版69	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 10.8 底 - 高 3.3	白・黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
36図11 図版69	土師器 坏	埋土 完形	口 10.4 底 - 高 3.1	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに内傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
36図12 図版69	土師器 坏	カマド掘り方	口 12.0 底 - 高 4.5	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	底部外面黒斑あり
36図13 図版70	土師器 坏	埋土 1/2	口 10.2 底 - 高 3.2	白・黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
36図14 図版70	土師器 坏	埋土 1/2	口 12.5 底 - 高 4.6	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	浅黄橙	底部は丸底で、口縁部は一条の沈線が廻り、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
36図15 図版70	土師器 坏	埋土 2/3	口 (11.1) 底 - 高 3.3	白・黒色鉱物粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
37図16 図版70	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 10.9 底 - 高 3.5	黒・白色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	底部外面黒斑あり
37図17 図版70	土師器 坏	埋土 完形	口 10.5 底 - 高 3.3	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
37図18 図版70	土師器 坏	埋土 3/4	口 11.2 底 - 高 3.4	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	底部外面黒斑あり
37図19 図版70	土師器 坏	床下土坑 床直 完形	口 10.9 底 - 高 3.1	白・黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。底部外面被熱による剥離が見られる。	底部外面黒斑
37図20 図版70	土師器 坏	埋土 3/4	口 10.0 底 - 高 2.9	細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
37図21 図版70	土師器 坏	埋土 3/4	口 12.0 底 - 高 3.4	黒・白色鉱物粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに内傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	内面カーボン付着
37図22 図版70	土師器 坏	埋土 完形	口 10.6 底 - 高 3.5	白・黒色鉱物粒微 砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
37図23 図版70	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 10.3 底 - 高 3.1	白・黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
37図24 図版70	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 11.0 底 - 高 3.2	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
37図25 図版70	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 11.0 底 - 高 3.3	白・黒色鉱物粒 微 細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
37図26 図版70	土師器 坏	埋土 完形	口 10.9 底 - 高 3.4	白・黒色鉱物粒 微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
37図27 図版70	土師器 坏	埋土 3/4	口 10.9 底 - 高 3.8	白・黒色鉱物粒 微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
37図28 図版70	土師器 坏	埋土 1/2	口 11.2 底 - 高 3.1	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はわずかに内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図29 図版70	土師器 坏	埋土 3/4	口 10.2 底 - 高 3.2	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	底部外面黒斑あり
38図30 図版70	土師器 坏	埋土 1/2	口 10.4 底 - 高 3.4	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図31 図版70	土師器 坏	埋土 1/2	口 10.1 底 - 高 2.9	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図32 図版70	土師器 坏	埋土 1/2	口(11.3) 底 - 高 3.7	黒色鉱物粒微 赤褐色粒多	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐	底部は偏平な丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図33 図版70	土師器 坏	埋土 2/3	口 10.3 底 - 高 3.5	白・黒色鉱物粒 微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図34 図版70	土師器 坏	埋土 2/3	口 10.8 底 - 高 3.1	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図35 図版70	土師器 坏	埋土 2/3	口 10.9 底 - 高 3.2	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図36 図版70	土師器 坏	埋土 3/4	口 10.5 底 - 高 3.1	白色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	口縁部カーボン付着
38図37 図版70	土師器 坏	埋土 3/4	口 11.0 底 - 高 2.9	白・黒色鉱物粒 微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はわずかに外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図38 図版70	土師器 坏	床下土坑 1/2	口(10.8) 底 - 高(3.4)	黒色鉱物粒微 細砂粒少 白色粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	口縁部カーボン付着
38図39 図版70	土師器 坏	埋土 1/2	口(11.2) 底 - 高 3.6	細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図40 図版71	土師器 坏	埋土 3/4	口 11.0 底 - 高 3.2	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図41 図版71	土師器 坏	カマド 1/2	口(11.2) 底 - 高 3.2	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図42 図版71	土師器 坏	埋土 2/3	口 12.0 底 - 高 3.9	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図43 図版71	土師器 坏	埋土 1/2	口 11.0 底 - 高 3.6	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
38図44 図版71	土師器 坏	埋土 1/2	口(11.2) 底 - 高 3.6	黒色鉱物粒微 細砂粒少 白色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
38図45 図版71	土師器 坏	埋土 1/2	口 12.0 底 - 高 3.5	細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図46 図版71	土師器 坏	埋土 2/3	口 11.6 底 - 高 3.3	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図47 図版71	土師器 坏	埋土 1/2	口(11.5) 底 - 高 4.2	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図48 図版71	土師器 坏	埋土 2/3	口 11.8 底 - 高 4.0	細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図49 図版71	土師器 坏	埋土 1/2	口 13.5 底 - 高 4.6	白・黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図50 図版71	土師器 坏	埋土 1/2	口 11.3 底 - 高 3.6	細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図51 図版71	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 13.0 底 - 高 4.1	白・黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図52 図版71	土師器 坏	埋土 2/3	口 15.8 底 - 高 5.2	白・黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図53 図版71	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 14.4 底 - 高 5.2	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図54 図版71	土師器 坏	埋土 1/3	口(13.8) 底 - 高 4.3	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐	底部は丸底で、口縁部はわずかに内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図55 図版71	土師器 坏	埋土 1/3	口 14.7 底 - 高 6.2	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は深い丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図56 図版71	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 16.2 底 - 高 5.6	白・黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図57 図版71	土師器 坏	埋土 破片	口(15.0) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 白色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図58 図版71	土師器 坏	埋土 1/4	口 16.6 底 - 高 -	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は短く屈曲する。口縁部横撫で、体部横位の篋削りを施す。	
38図59 図版71	土師器 坏	埋土 1/2	口 15.6 底 - 高 5.3	細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
38図60 図版71	土師器 坏	埋土 1/2	口 10.6 底 - 高 3.4	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底気味の平底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部の整形は不明瞭。	
39図61 図版71	土師器 坏	埋土 1/3	口 12.2 底 - 高 4.0	黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はやや内傾する。口縁部横撫で、底部は篋削りを施す。内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	
39図62 図版71	土師器 坏	埋土 破片	口(11.0) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 白色細粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、体部篋削りを施す。内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	
39図63 図版71	土師器 坏	埋土 破片	口(13.4) 底 - 高 -	白色細粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、体部篋削り、内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	
39図64 図版71	土師器 坏	埋土 破片	口(12.4) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反する。口縁部横撫で、体部篋削り、内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
39図65 図版72	土師器 坏	埋土 破片	口(11.6) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は外反する。口縁部横撫で、体部篋削りを施す。内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	
39図66 図版72	土師器 坏	埋土 破片	口(15.8) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	
39図67 図版72	土師器 坏	埋土 破片	口(12.8) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 褐	口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、体部篋削り、内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	
39図68 図版72	須恵器 坏	埋土 ほぼ完形	口 9.4 底 - 高 3.5	細砂粒多	還元焰 やや軟質	灰白	轆轤整形(右回転)。体部は張りを持たず、底部は浅い丸底である。底部回転篋削りを施す。	
39図69 図版72	土師器 短頸壺	埋土 3/4	口 10.4 底 - 高 8.9	白・黒色鉱物粒 少 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	胴部は中位に張りをもち、口縁部は直立する。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。	
39図70 図版72	土師器 鉢	埋土 1/4	口 19.0 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は体部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、体部横位の篋削りを施す。	
39図71 図版72	土師器 鉢	埋土 1/3	口(17.4) 底 - 高 7.8	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は深い丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、わずかに外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
39図72 図版72	土師器 甕	床直・柱 穴内 1/2	口 22.0 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面は篋撫でを施す。	
39図73 図版72	土師器 甕	埋土 破片	口 22.4 底 - 高 -	黒色鉱物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
39図74 図版72	土師器 甕	埋土 1/4	口 22.9 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たずに続く。口縁部横撫で、胴部縦位の篋削りを施す。	
40図75 図版72	土師器 甕	埋土 破片	口(16.4) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。輪積痕顕著。	
40図76 図版72	土師器 甕	埋土 1/4	口 18.8 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、胴部篋削り、内面篋撫でを施す。	
40図77 図版72	土師器 甕	埋土 破片	口 23.2 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反する。口縁部は横撫で後、胴部横位の篋削り、内面篋撫でを施す。	
40図78 図版72	土師器 甕	床直 3/4	口 23.6 底 4.4 高 37.0	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部はあまり張りを持たない。口縁部横撫で、胴部上位・下位は斜位、中位は縦位の篋削りを施す。内面は篋撫でを施す。	
40図79 図版72	土師器 甕	カマド 3/4	口 22.0 底 4.0 高 35.1	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部上位にわずかに張りを持つ。口縁部横撫で、胴体上位斜位、下位は縦位の篋削りを施す。内面撫でを施す。	
40図80 図版72	土師器 甕	床直 1/4	口 21.6 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、胴部縦位の篋削り、内面撫でを施す。	
40図81 図版72	土製品 土錘	埋土 1/2	長 - 径 1.2 孔 0.3	黒色鉱物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰	橙	端部は未調整。	

中江田八ツ縄遺跡1区14号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
42図1 図版72	須恵器 坏	カマド	口(10.6) 底 4.4 高 3.9	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。体部に張りは持たない。	
42図2 図版72	須恵器 坏	埋土 完形	口 10.8 底 5.4 高 3.8	白・黒色鉱物粒 微	酸化焰 硬質	淡黄	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。体部に張りは持たない。	内外面カー ボン付着
42図3 図版72	須恵器 坏	埋土 完形	口 11.6 底 5.2 高 4.2	白・黒色鉱物粒 微 細砂粒少	酸化焰 硬質	淡黄	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。体部に張りは持たない。	内外面カー ボン付着
42図4 図版73	須恵器 坏	床直	口(12.4) 底 5.4 高 3.8	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	轆轤整形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。口唇部は面取りが施されている。	
42図5 図版73	須恵器 碗	カマド ほぼ完形	口 14.1 底 7.3 高 5.0	砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 軟質	橙	轆轤整形(右回転)。底部切り離し後の付高台。	
42図6 図版73	須恵器 羽釜	床直・南 壁 破片	口 20.6 底 - 高 -	白・黒色鉱物粒 微 砂粒多	酸化焰 硬質	橙	紐作り轆轤整形。口縁部は内傾し、口唇部は平坦である。鐙の貼付は丁寧。胴部に篋削りを施す。	
42図7 図版73	須恵器 羽釜	埋土	口(18.0) 底 - 高 -	赤褐色粒少 小礫	酸化焰 硬質	橙	紐作り轆轤整形。胴部上半に張りを有し、口縁部は内傾する。鐙の貼付は丁寧。胴部下半に斜位の篋削りを施す。	
42図8 図版73	土釜	埋土	口(21.0) 底 - 高 -	黒・白色鉱物粒 微 細砂粒少	酸化焰 軟質	にぶい 黄橙	口縁部はわずかに外反し、口唇部に1条の沈線が廻る。胴部は上位にやや張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削りを施す。	
42図9 図版73	土師器 甕	カマド 破片	口(24.6) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	浅黄橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部上位にやや張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部上位斜位、下位縦位の篋削りを施す。	粘土接合痕 顕著
43図10 図版73	土師器 甕	カマド	口 22.0 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部上位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部上位横位～斜位、下位斜位の篋削りを施す。	粘土接合痕 顕著
43図11 図版73	土師器 坏	埋土 破片	口 - 底 - 高 -	赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	浅黄橙	内面撫で後、放射状暗文を施す。	

中江田八ツ縄遺跡1区15号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
45図1 図版73	土師器 坏	埋土	口(15.0) 底 - 高 4.0	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は平底気味で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
45図2 図版73	須恵器 坏	カマド右 ほぼ完形	口 12.8 底 8.3 高 3.7	黒色鉱物粒微 細砂粒多	還元焰 軟質	灰	轆轤整形(右回転)。体部はあまり張りを持たず、外傾する。底部は回転篋削りを施す。	内面篋書き 「×」
45図3 図版73	土師器 甕	床直 破片	口(18.0) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒多	酸化焰 軟質	橙	口縁部は外反する。胴部上位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部上位斜位、下位は縦位の篋削りを施す。	
45図4 図版73	土師器 甕	カマド右	口(22.4) 底 - 高 -	黒・白色鉱物粒 微 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部上位に張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡1区16号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
47図1 図版73	土師器 坏	埋土	口 12.4 底 - 高 4.2	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は体部との境に稜を有し、段を持って外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
47図2 図版73	土師器 甕	埋土 1/4	口 23.2 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反し、胴部は中位に張りを持つ。 口縁部横撫で後、胴部篋削り、内面撫でを施す。 口縁部粘土接合痕顕著。	47-2と同一体と思われるが接点なし
47図3 図版73	土師器 甕	埋土 1/4	口 - 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	胴部は中位に張りを持つ。胴部下位は斜位の 篋削りを施すが、他は磨滅により不明。	47-3と同一体か
47図4 図版73	土製品 土錘	埋土 2/3	長 - 径 1.1 孔 0.3	細砂粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	端部未調整。	
47図5 図版73	土製品 土錘	埋土 1/2	長 3.2 径 1.2 孔 0.4	細砂粒少	酸化焰	橙	端部未調整。	
47図6 図版73	須恵器 甕	埋土 破片	口 - 底 - 高 -	細砂粒少 白色粒少	還元焰 硬質	灰	外面正格子叩き、内面青海波文。	厚 1.5
48図7 図版74	須恵器 甕	埋土 破片	口 - 底 (15.2) 高 -	細砂粒少 白色粒少 赤褐色粒少	還元焰 やや硬質	灰	紐作り轆轤整形。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他			
48図8 図版74	礫	床直 完形	長 9.6 幅 6.9 厚 4.6 重 485g	粗粒安山岩	剝離面が見られる。			
48図9 図版74	礫	埋土 完形	長 10.0 幅 7.4 厚 3.3 重 392g	変質安山岩	剝離が見られるが、使用に伴うものか不明。			
48図10 図版74	石器 敲石	埋土 完形	長 10.4 幅 8.8 厚 4.9 重 578g	ひん岩	中央部に敲打痕があり、一面にカーボンが付着している。			
48図11 図版74	石器 敲石	床直 完形	長 13.6 幅 6.0 厚 3.6 重 408g	粗粒安山岩	側縁部に敲打痕が見られる。			

中江田八ツ縄遺跡1区17号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
50図1 図版74	土師器 坏	カマド内 破片	口 (13.2) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少 白色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。底部篋削り、 口縁部横撫で、体部に整形不明瞭な部分を残す。	
50図2 図版74	土師器 坏	埋土 破片	口 (16.0) 底 - 高 -	白・黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は外湾する。口縁部 横撫で、底部篋削りを施す。	
50図3 図版74	土師器 坏	埋土 1/4	口 (11.2) 底 - 高 -	白色鉱物粒少	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	底部は浅い丸底で、口縁部との境に段を有し、 口縁部はわずかに外反する。底部篋削り、口 縁部横撫でを施す。	底部黒斑あり
50図4 図版74	土製品 土錘	埋土 1/2	長 - 径 (0.9) 孔 0.4	黒色鉱物粒微 細砂粒多 白色粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	直線的で張りを持たず、端部は未調整。磨滅 が見られる。	

中江田八ツ縄遺跡1区18号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
52図1 図版74	土師器 坏	埋土 1/4	口 (14.0) 底 - 高 -	白色粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	体部は張りを持たず、口縁部はわずかに外反する。 口縁部横撫で、体部篋削りを施す。指頭圧痕・粘土接合痕顕著。	内外面共器面の荒れが激しい
52図2 図版74	土師器 埴	埋土 1/4	口 (13.8) 底 (7.2) 高 6.2	赤褐色粒少 細砂粒少 白色粒微	酸化焰 硬質	明黄褐	体部に張りはなく、口縁部は外傾する。口縁部 横撫で、体部篋削りで指頭痕顕著。付高台で 底部は調整不明瞭な部分が残る。	内面器面の荒れが激しい
52図3 図版74	須恵器 埴	カマド内 ほぼ完形	口 13.2 底 6.4 高 6.5	黒色鉱物粒微 細粒少 白色粒少		にぶい 黄橙	轆轤整形(?)。体部の張りを持たず、口縁部 はわずかに外反する。底部回転糸切り後の付高台。	内外面共器面の荒れが激しい

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
52図4 図版74	須恵器 碗	埋土 1/4	口(13.8) 底 6.0 高 5.7	細砂粒少 白色細粒少	還元焰 硬質	灰白	轆轤整形(?)。体部の張りはなく、口縁部は短く外反する。底部糸切り後の付高台で、底部は撫でられている。	
52図5 図版74	須恵器 碗	床直 1/3	口(15.0) 底 6.9 高 4.9	黒色鉾物粒微 細砂粒少 白色粒少	還元焰 硬質	灰～橙	轆轤整形(?)。体部の張りはなく、口縁部は外反する。高台は付高台。	
52図6 図版74	緑釉 陶器 碗	埋土 破片	口(15.0) 底 - 高 -	緻密	還元焰 硬質		轆轤整形(?)。体部は回転篋削りか。施釉は全面に施され、釉調はやや透明感のある濃緑色を呈す。	虎渓山 1号窯式期
52図7 図版74	土師器 甕	カマド 破片	口(19.0) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に屈曲する。口縁部横撫でで沈線が2条廻る。胴部の整形は不明瞭。	内面カーボン附着
52図8 図版74	土師器 甕	床直 破片	口(17.6) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 白色粒多 赤色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐	口縁部は「く」字状に屈曲し、胴部の張りは比較的弱い。胴部上半は横位、下半は縦位の篋削り後、口縁部横撫で、内面は横位篋撫でを施す。	
52図9 図版74	土師器 甕	床直 破片	口(23.0) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 白色粒少 赤色粒多	酸化焰 硬質	赤褐	口縁部は「く」字状に屈曲し、胴部上位に張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部上半は横位、下半は縦位の篋削り、内面は篋痕あり。	
52図11 図版74	土師器 坏	埋土 破片	口 - 底 - 高 -	黒・白色鉾物粒 微 細砂粒微 白色粒微	酸化焰 硬質	明赤褐	口縁部横撫で、体部篋削り、内面撫で後、放射状暗文を施す。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)		石質	特徴・その他		
52図10 図版74	石器 磨石	床直 ほぼ完形	長 14.8 厚 5.2	幅 13.8 重 1,339 g	粗粒安山岩	側縁の一面が磨滅している。		

中江田八ツ縄遺跡1区19号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
53図1 図版74	土師器 坏	埋土 1/3	口 10.4 底 - 高 4.0	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との間に稜を持ち直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
53図2 図版74	土師器 坏	埋土 破片	口(12.6) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	にぶい 橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
53図3 図版75	土師器 坏	埋土 1/2	口(14.4) 底 - 高 4.8	黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤褐色粒多	酸化焰 やや硬質	橙	底部やや偏平な丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
53図4 図版74	土師器 坏	埋土 完形	口 11.5 底 - 高 3.6	白・黒色鉾物粒 微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	内面カーボン附着
53図5 図版75	土師器 坏	埋土 2/3	口 15.8 底 - 高 3.7	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は強く外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
54図6 図版75	土師器 坏	埋土 2/3	口 16.2 底 - 高 4.6	黒色鉾物粒少 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	橙	底部はやや偏平な丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
54図7 図版75	須恵器 坏	埋土 1/3	口(12.8) 底 6.8 高 3.7	細砂粒多 白色細粒少	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。体部は張りを持たず、口縁部は外傾する。底部は回転糸切り未調整。	
54図8 図版75	土師器 甕	埋土 1/4	口(23.6) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は外反し、胴部は上位にやや張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部篋削り、内面篋撫でを施す。	
54図9 図版75	土師器 甕	埋土 1/3	口 22.2 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は上位にやや張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他
54図10 図版75	石製品 砥石	埋土 1/2	長 ー 幅 9.2 厚 7.9 重 471 g	粗粒安山岩	5面使用。
54図11 図版75	石製品 砥石?	埋土 完形	長 9.5 幅 8.6 厚 4.4 重 210 g	二ツ岳軽石	磨滅と擦痕が見られる。
54図12 図版75	礫	埋土 完形	長 14.6 幅 5.6 厚 4.4 重 441 g	溶結凝灰岩	使用痕不明。

中江田ハツ縄遺跡1区20号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
56図1 図版75	土師器 坏	埋土 1/3	口(12.4) 底 ー 高 3.1	白・黒色鈹物粒 微 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	明赤褐	底部は扁平な丸底で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部横撫で、底部篋削り、間の整形は不明瞭。	
56図2 図版75	土師器 坏	埋土 1/4	口(14.4) 底 ー 高 4.2	黒色鈹物粒微 細砂粒少 白色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底気味の平底で、体部中位に弱い稜を有し、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、体部は横位の篋削り、底部は篋削りを施す。	
56図3 図版75	土師器 坏	埋土 1/2	口(17.0) 底 ー 高 ー	黒色鈹物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底気味の平底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、体部外面及び底部に篋削りを施す。	
56図4 図版75	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口 16.5 底 ー 高 4.2	黒色褐色粒微 細砂粒少 白色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は扁平な丸底で、口縁部は強く外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
57図5 図版75	土師器 坏	埋土 破片	口 ー 底 ー 高 ー	白色鈹物粒微 黒色細粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部横撫で。内面撫で後、放射状暗文を施す。	
57図6 図版75	土師器 坏	埋土 破片	口 ー 底 ー 高 ー	白色鈹物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部横撫で、底部篋削り。内面撫で後、放射状暗文を施す。	
57図7 図版75	土師器 坏	埋土 破片	口 ー 底 ー 高 ー	白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	明赤褐	内面撫で後、放射状暗文を施す。	
57図8 図版75	土師器 坏	埋土 破片	口 ー 底 ー 高 ー	白色粒微	酸化焰 硬質	明赤褐	内面撫で後、放射状暗文を施す。	
57図9 図版75	土師器 坏?	埋土 破片	口 ー 底 ー 高 ー	黒色鈹物粒少 白色粒少 赤褐色粒微	還元焰 硬質	橙	内面撫で後、放射状暗文を施す。	
57図10 図版75	須恵器 坏	埋土 破片	口(17.7) 底(11.8) 高 3.2	細砂粒少 白色粒微	還元焰 硬質	灰白	轆轤整形(?)。底部は回転篋削りを施す。体部は直線的に外傾し、口縁部は外反する。	
57図11 図版75	土師器 甕	埋土 破片	口 ー 底 2.8 高 ー	黒色鈹物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	褐灰	底部木葉痕。	
57図12 図版75	土師器 甕	埋土 破片	口(20.2) 底 ー 高 ー	黒色鈹物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反する。胴部横位→斜位の篋削り、口縁部横撫でを施す。口縁部粘土紐接合痕顕著。	
57図13 図版76	須恵器 瓶	埋土 1/3	口 4.8 底 ー 高 ー	黒色粒多	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(?)。口縁部は外反し、上端に段を有する。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他			
57図14 図版75	石器 敲石	埋土 1/2	長 ー 幅 ー 厚 3.3 重 232 g	粗粒安山岩	上端に敲打痕あり。			
57図15 図版76	石器 敲石	埋土 縁辺欠損	長 11.7 幅 9.8 厚 2.7 重 391 g	粗粒安山岩	縁辺3ヶ所が欠けている。			

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	特 徴 ・ そ の 他
57図16 図版76	鉄器 鎌	床直 完存	長 19.3 幅 3.4 厚 0.3 重 49.6g	完存品。図は左利用に耳の折り返し。研磨は表・裏の刃部とも研かれる。使用減りは、丁寧に先まで平均的。古代鉄様、錆ぶくれあり。

中江田八ツ縄遺跡1区23号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
59図1 図版76	黒色 土器 坏?	埋土 破片	口 - 底 - 高 -	白・黒色鉾物粒 微 白色粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	内面寛磨き後、黒色処理を施す。	
59図2 図版76	須恵器 坏	床直 2/3	口 11.5 底 5.0 高 4.2	黒色鉾物粒微 白色粒少 赤褐色粒微	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。体部は張りを持たず、口縁部は外反する。底部回転糸切り未調整。	
59図3 図版76	須恵器 坏	埋土 1/3	口 11.2 底 4.4 高 3.8	白・黒色鉾物粒 微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 褐	轆轤整形(右回転)。体部は張りを持たず、口縁部はわずかに外反する。底部回転糸切り未調整。	
59図4 図版76	土釜	カマド 2/3	口 21.5 底 - 高 21.8	白色鉾物粒微 赤褐色粒多 砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反し、胴部は中位に張りを持って続く、胴部斜位、胴部中位の寛削りを施す。	
59図5 図版76	土釜	カマド 破片	口 - 底(6.0) 高 -	黒・白色鉾物粒 微 砂粒多 赤褐色粒多	酸化焰 硬質	褐	外面斜位寛削り、内面撫でを施す。底部砂底。	59-4同一 個体の可能 性あり
59図6 図版76	土釜	埋土 破片	口 22.0 底 - 高 18.2	黒色鉾物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬 質	橙	口縁部は外反し、胴部に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部上半横位、下半縦位の寛削り、内面撫でを施す。粘土接合痕顕著。	内面カーボ ン付着
59図7 図版76	土師器 甕	カマド 破片	口(21.0) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬 質	橙	口縁部は段を有し、胴部に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部上半横位、下半縦位の寛削り、内面撫でを施す。	内面カーボ ン付着
59図8 図版76	須恵器 壺?	カマド 1/4	口 - 底 9.5 高 -	黒色鉾物粒微 細砂粒多	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(?)。底部は平底。	
挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	特 徴 ・ そ の 他				
60図9 図版76	鉄器 刀子	床直 大破あり	長 7.8+ α 幅 1.0 厚 0.3 重 6.0g	茎様を呈し、図右端側につれ刃様に尖る。錆ぶくれ少なく精鍛に見える。両端の欠損は旧か不明。古代鉄様。錆色やや黒ずむ。				
60図10 図版76	鉄器 刀子	埋土 大破あり	長 3.5+ α 幅 1.3 厚 0.2 重 2.0g	刀子の切先直前の箇所。図右側は旧時、左側は調査時以降の欠損。錆ぶくれ少なく粗鍛に思える。古代鉄様。錆色やや黒ずむ。				
60図11 図版76	鉄器 刀子	埋土 大破あり	長 6.4+ α 幅 0.9 厚 0.3 重 3.9g	刀子の刃部。錆ぶくれあり。左・右端とも調査時以降の欠損。古代鉄様。錆色やや黒ずむ。				
60図12 図版76	鉄器 刀子	埋土 大破あり	長 10.0+ α 幅 1.5 厚 0.3 重 6.0g	刀子刃元は、調査時以降の欠損。茎には、旧時の木質が残る。錆ぶくれ少なく精鍛を思わせる。古代鉄様。錆色やや黒ずむ。				

中江田八ツ縄遺跡2区27号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
63図1 図版76	土師器 坏	埋土 1/2	口(12.6) 底 6.2 高 4.1	黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は平底で、体部は張りを持たず、口縁部は外反する。口縁部横撫で、体部・底部寛削りを施す。体部指頭痕、底部離れ砂痕。	内面カーボ ン付着
63図2 図版76	土師器 坏	埋土 1/4	口(13.6) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 赤褐色粒少 白色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外傾し、沈線が廻る。口縁部横撫で、体部寛削りを施す。体部指頭痕、粘土接合痕顕著。	
63図3 図版76	須恵器 壺	埋土 破片	口(14.0) 底 - 高 -	黒色細粒少	還元焰 やや硬 質	灰白	轆轤整形。回転方向は、不明。	
64図4 図版76	須恵器 坏	埋土 2/3	口 12.8 底 5.6 高 4.1	白色細粒少 砂粒少	還元焰 やや硬 質	灰	轆轤整形(右回転)。体部は張りを持たず、口縁部は外反する。底部回転糸切り未調整。	カーボン付 着

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
64図5 図版76	須恵器 碗	カマド掘り方 1/4	口(15.4) 底(7.0) 高4.9	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	轆轤整形(?)。体部は張りを持たず、口縁部は外傾する。付高台。	
64図6 図版76	灰釉 陶器 碗	埋土 破片	口— 底— 高—			浅黄	轆轤整形。回転方向は不明。施釉方法は印毛塗りか、釉調は透明感のない浅黄色。	厚 0.4
64図7 図版76	土師器 小型甕	P2 破片	口(13.0) 底— 高—	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部は「コ」字状を呈し、胴部上位にやや張りを持つ。口縁部横撫で、胴部横位の篋削りを施す。口縁部指頭痕顕著。	内面カーボン付着
64図8 図版76	土師器 甕	カマド 破片	口(18.2) 底— 高—	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部は外反する。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。口縁部粘土接合痕顕著。	外面カーボン付着
64図9 図版76	土師器 甕	埋土 破片	口(20.0) 底— 高—	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少 白色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部は外反し、胴部上位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。口縁部粘土接合痕顕著。	内外面カーボン付着
64図10 図版76	土師器 甕	床直 破片	口— 底(4.4) 高—	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	浅黄橙	胴部は縦位～斜位の篋削り、内面撫でを施す。	外面粘土付着
64図11 図版76	土製品 土錘	埋土 1/2	長(4.2) 径1.2 孔0.3	細砂粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	端面取りを施す。	
64図12 図版77	土製品 羽口	床直 ほぼ完形	長8.6 径7.0 孔3.3	細砂粒少 白色細粒少	酸化焰	灰	先端部～基部まで発泡部分が見られる。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特 徴 ・ そ の 他				
64図13 図版77	鉄器 刀子	床直 大破あり	長 10.0+ α 厚 0.2	幅 1.3 重 6.9g	欠損は調査時以降。茎には、旧時の木質が残る。錆ぶくれ少なく精鍛を思わせる。古代鉄様。			

中江田八ツ縄遺跡2区28号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
65図1 図版77	土師器 坏	埋土 破片	口— 底— 高—	黒色鉱物粒微 白色粒少	酸化焰 硬質	明赤褐	口縁部横撫で、体部篋削り、内面撫で後、放射状暗文を施す。	カーボン付着
65図2 図版77	須恵器 蓋	埋土 1/3	口(10.4) 底— 高—	細砂粒少 白色粒少	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。天井部は偏平で篋削りを施す。摘部欠損。	
66図3 図版77	土師器 甕	埋土 1/4	口(21.6) 底— 高—	黒色鉱物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、胴部縦位の篋削りを施す。内面撫でを施し、口縁部内面に沈線が廻る。	
66図4 図版77	土師器 甕	カマド右 釉 1/2	口(21.6) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は外反し、胴部は上位に張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡2区29号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
68図1 図版77	土師器 坏	カマド 破片	口(11.8) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は平底気味で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
68図2 図版77	土師器 坏	埋土 破片	口(11.8) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他
68図3 図版77	礫	埋土 完形	長 12.3 幅 7.8 厚 2.3 重 359g	粗粒安山岩	端部にわずかに敲打痕が見られる。

中江田八ツ縄遺跡2区31号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
70図1 図版77	土師器 埴	埋土 2/3	口(14.4) 底(5.6) 高 5.1	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	体部は張りを持たず、口縁部は外傾する。体部指頭痕、粘土接合痕顕著。高台は付高台。	
70図2 図版77	須恵器 坏	埋土 1/4	口(14.0) 底(6.0) 高 4.2	黒色鉱物粒微 白色細粒多 砂粒多	酸化焰 硬質	橙	轆轤整形(?)。体部はあまり張りを持たず、口縁部は外反する。底部は回転糸切り無調整。	
70図3 図版77	須恵器 埴	埋土 2/3	口(14.0) 底(6.0) 高 5.3	黒色粒少 白色細粒微 赤褐色粒少	還元焰 硬質	灰白	轆轤整形(?)。体部は張りを持たず、口縁部は外反し、口唇部は肥厚する。高台は付高台で、底部は無でが施されている。	
70図4 図版77	灰釉 陶器 碗	埋土 1/4	口(14.0) 底(6.6) 高 5.1			オリーブ灰	轆轤整形。回転は右廻りか。底部は回転糸切り後高台を貼付。施釉方法は、漬け掛けか。釉調は、透明感のない濃灰緑色を呈す。	大原2?
70図5 図版77	須恵器 埴	カマド 1/3	口(16.8) 底 - 高 -	黒・白色鉱物粒微 白・赤褐色粒微	酸化焰 硬質	橙	轆轤整形(?)。体部の張りは弱く、口縁部は外反する。高台部欠損。	
70図6 図版77	灰釉 陶器 長頸瓶	埋土 破片	口(14.8) 底 - 高 -			灰白	轆轤整形。回転方向は不明。施釉方法は、漬け掛けか。釉調は、やや透明感のある灰緑色。	
70図7 図版77	土師器 台付甕	掘り方 2/3	口(10.2) 底 8.4 高 12.0	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少 白色細粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部はやや外傾し、胴部中位に張りを持ち、脚部は「ハ」字状に強く開く。口縁部横撫で、胴部斜位→縦位の篋削りを施す。内面撫で。	粘土接合痕顕著
70図8 図版77	土師器 小型甕	埋土 破片	口(13.0) 底 - 高 -	黒色鉱物粒少 赤褐色粒少 白色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 褐	胴部の張りはやや弱く、口縁部は外反する。口縁部横撫で、胴部横位～斜位の篋削りを施す。口縁部粘土紐接合痕顕著。	
70図9 図版77	土師器 甕	カマド 破片	口(18.0) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	胴部に張りを持ち、口縁部は外反する。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削りを施す。口縁部粘土紐接合痕、指頭圧痕顕著。	
70図10 図版77	土師器 甕	カマド・ 埋土 3/4	口(19.0) 底 4.7 高 24.9	黒色鉱物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「コ」字状を呈し、胴部上位に張りを持つ。胴部上位斜位、下位縦位の篋削りを施す。底部篋削り、内面撫で。	口縁部指頭痕顕著
70図11 図版77	土師器 甕	カマド 1/4	口(18.0) 底 - 高 -	黒色粒多 褐色粒多	酸化焰 やや硬質	にぶい 黄橙	口縁部は外反し、胴部は中位に最大径を有する。口縁部横撫で後、胴部上位横位、胴部中位斜位の篋削りを施す。内面撫で。	
70図12 図版77	土製品 土錘	埋土 ほぼ完形	長 7.4 径 1.6 孔 0.6	黒色細粒少	酸化焰	浅黄	両端部未調整。粘土板接合痕あり。	
70図13 図版77	土製品 土錘	埋土 3/4	長 - 径 1.2 孔 0.5	黒色鉱物粒少 黒色粒少 赤褐色粒微	酸化焰	にぶい 黄橙	不整円形。平滑な面が見られる。	
71図14 図版77	土師器 甕	埋土 1/3	口 19.6 底 - 高 -	黒・白色鉱物粒微 白色細粒多 赤褐色粒多	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐	口縁部は「コ」字状を呈し、胴部中位に最大径を持つ。口縁部横撫で後、胴部上位斜位、下位縦位の篋削りを施す。内面刷毛状工具による撫で。	
71図15 図版77	土師器 甕	カマド 1/4	口 18.5 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 白色細粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部は崩れた「コ」字状を呈し、肥厚する。口縁部横撫で後、胴部斜位→縦位の篋削りを施す。内面は篋撫でを施す。	

第7章 遺物観察表

中江田八ツ縄遺跡2区33号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
73図1 図版78	土師器 坏	床直 破片	口(12.0) 底— 高—	白色鉾物粒微 白色粒微	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部は短く外反し、体部との間に弱い稜を有する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	外面黒斑あり
73図2 図版78	土師器 小型甕	床直 1/3	口(12.6) 底— 高—	黒色鉾物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	褐	口縁部は外反し、胴部は中位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部縦位の篋削り、内面撫でを施す。	
73図3 図版78	土師器 小型甕	床直 1/2	口17.6 底— 高—	黒色鉾物粒少 細砂粒多 白色粒多	酸化焰 やや硬質	にぶい 褐	口縁部は外反し、胴部中位に張りを持つ。口縁部横撫で後、斜位の篋削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡2区34号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
75図1 図版78	土師器 坏	埋土 1/2	口(11.0) 底— 高3.0	白色鉾物粒微	酸化焰 やや硬質	にぶい 橙	底部は浅い丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
75図2 図版78	土師器 坏	貯蔵穴 1/2	口11.5 底— 高3.1	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
75図3 図版78	土師器 坏	埋土 破片	口(14.0) 底— 高3.8	白・黒色鉾物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	黒	体部との境に稜を有し、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
75図4 図版78	土師器 坏	埋土 破片	口— 底— 高—	黒色鉾物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	内面撫で後、放射状暗文を施す。	
75図5 図版78	土師器 鉢	埋土 1/3	口(22.0) 底— 高—	黒色鉾物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	にぶい 黄橙	底部は丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、体部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
75図6 図版78	須恵器 塊	カマド 破片	口— 底6.4 高—	白・黒色鉾物粒微 白色粒微	還元焰 やや硬質	灰白	轆轤整形(?)。底部切り離し後の付高台で、貼付は雑。	
75図7 図版78	土師器 甕	カマド 破片	口— 底4.2 高—	黒色鉾物粒少 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	にぶい 褐	外面斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。	底部木葉痕?
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)		石質	特徴・その他		
75図8 図版78	石器 敲石	床直 完形	長12.3 厚3.8	幅5.6 重383g	砂岩	両端部に剥離が見られる。		
75図9 図版78	石器 敲石	床直 完形	長14.4 厚3.0	幅4.9 重272g	頁岩	下端部に敲打痕あり。		

中江田八ツ縄遺跡2区35号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
77図1 図版78	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口11.8 底— 高—	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部との境に段を有し、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。底部に焼成後の穿孔が認められる。	
77図2 図版78	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口11.2 底— 高3.3	黒色鉾物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
77図3 図版78	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口9.8 底— 高3.2	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	底部黒斑あり
78図4 図版78	土師器 坏	床直 2/3	口10.5 底— 高3.2	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
78図5 図版78	土師器 短頸壺	床直 ほぼ完形	口 10.7 底 — 高 8.3	細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、胴部中位に張りをもち、口縁部は直立する。口縁部横撫で、胴部横位の篋削りを施す。	底部黒斑あり
78図6 図版78	土師器 甕	床直 完形	口 13.7 底 — 高 12.2	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は中位に張りをもち、底部は丸底を呈する。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	底部黒斑
78図7 図版78	土師器 台付甕	カマド 完形	口 9.3 底 7.4 高 10.0	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は体部との境に稜をもち、やや内傾する。脚部は「ハ」字状に開く。口縁部横撫で、体部上位横位の篋削り、下位～脚部は縦位の篋削り、内面撫でを施す。	
78図8 図版78	土師器 鉢	床直・カマド右脇 3/4	口 18.8 底 — 高 —	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削りを施す。	
78図9 図版78	土師器 甕	床直 1/2	口 15.2 底 — 高 —	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少 砂粒多	酸化焰 硬質	赤	口縁部は「く」字状に外反し、胴部中位に張りをもち、口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
78図10 図版78	土師器 甕	床直 2/3	口 19.0 底 — 高 —	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部の中位に張りをもち、口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削り、内面は篋撫でを施す。口縁部粘土接合痕顕著。	
78図11 図版78	土師器 甕	カマド 破片	口 17.6 底 — 高 —	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は直線的に続く。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
78図12 図版79	土師器 甕	カマド 完形	口 15.5 底 — 高 26.5	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反し、胴部中位にわずかに張りをもち、口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
79図13 図版79	土師器 甕	カマド 2/3	口 14.5 底(3.4) 高 27.9	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部はあまり張りを持たない。口縁部横撫で、胴部縦位の篋削り、内面篋撫でを施す。	
79図14 図版79	土師器 甕	床直 3/4	口 20.9 底 — 高 —	細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。	
79図15 図版79	土師器 甕	貯蔵穴 3/4	口 20.6 底 — 高 —	細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部上位にわずかに張りをもち、口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
79図16 図版79	土師器 甕	床直 3/4	口 20.4 底(2.9) 高 —	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部はあまり張りを持たない。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
79図17	土製品 土錘	埋土? 破片	長 — 径 0.9 孔 0.4	白色粒少	酸化焰	橙	両端部は欠損。形状はやや偏平。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	特徴・その他	
79図18 図版79	石器 磨石	床直 完形	長 12.0 幅 4.2 厚 4.5 重 348g			粗粒安山岩	側縁部に磨減面が見られる。	

中江田八ツ縄遺跡2区36号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
81図1 図版79	土師器 坏	掘り方 破片	口(11.0) 底 — 高 —	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
81図2 図版79	土師器 坏	掘り方 破片	口(13.0) 底 — 高 —	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
81図3 図版79	土師器 小型甕	埋土 破片	口(10.0) 底 — 高 —	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	明赤褐	胴部は張りをもち、口縁部との境に稜を有し、口縁部は直立する。口縁部横撫で、胴部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
81図4 図版79	土製品 土錘	埋土 ほぼ完形	長 5.2 径 1.0 孔 0.3	白色細粒少	酸化焰	橙	両端部がわずかに欠損している。細長く小形である。	

中江田八ツ縄遺跡2区38号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
84図1 図版79	土師器 坏	カマド 破片	口(10.6) 底 - 高 -	黒色鈳物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	外面黒斑あり
84図2 図版79	土師器 坏	埋土 破片	口(10.0) 底 - 高 -	赤褐色粒少 白色細粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
84図3 図版79	土師器 坏	埋土 2/3	口(10.4) 底 - 高 3.4	黒色鈳物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
84図4 図版79	土師器 坏	埋土 3/4	口 12.0 底 - 高 4.7	赤褐色粒多 白色粒少 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	外面黒斑あり
84図5 図版79	土師器 坏	埋土 1/3	口(12.4) 底 - 高 -	赤褐色粒少 白色粒少	酸化焰 やや硬質	にぶい 赤褐	底部は丸底で、口縁部は体部との境に稜を有してほぼ直立し、沈線が廻る。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
84図6 図版79	土師器 坏	掘り方 3/4	口 11.8 底 - 高 3.8	黒色鈳物粒微 赤褐色粒多	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
84図7 図版79	土師器 坏	カマド・ 埋土 2/3	口 14.3 底 - 高 -	黒色鈳物粒微 赤褐色粒少	酸化焰	橙	口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
84図8 図版79	土師器 坏	カマド 破片	口(13.8) 底 - 高 -	黒色鈳物粒微 赤褐色粒少 白色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は体部との境に稜を有し、外傾する。外面に段を内面に沈線が廻る。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	黒斑あり
84図9 図版79	土師器 坏	カマド 1/2	口 19.6 底 - 高 -	赤褐色粒多 白色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐	口縁部は体部との境に稜を有し、外反する。口縁部横撫で、体部篋削りを施す。浅い皿状で、中央部に焼成前の穿孔あり。	
84図10 図版79	須恵器 蓋	埋土 1/3	口(10.0) 底 - 高 -	細砂粒少	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。天井部外面は回転篋削りを施す。	
84図11 図版80	土師器 台付甕	埋土 1/2	口 11.2 底 7.5 高 11.4	黒色鈳物粒微 赤褐色粒少 白色粒少	酸化焰 軟質	明赤褐	口縁部は直立し、体部との境に稜を有する。脚部は「ハ」字状に開く。口縁部横撫で、胴部～脚部に篋削りを施す。	
84図12 図版80	土師器 甕	カマド・ 埋土 1/4	口(17.0) 底 - 高 -	赤褐色粒多	酸化焰 やや軟質	明赤褐	口縁部は「く」字状に外反し、胴部中位～下位にやや張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。	
84図13 図版80	土師器 甕	埋土 3/4	口(17.2) 底 - 高 -	黒色鈳物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に段を持って外反し、胴部は張りを持たずに続く。口縁部横撫で、胴部縦位の篋削りを施す。	
85図14 図版80	土師器 甕?	カマド右 袖 3/4	口(23.6) 底 - 高 -	黒色鈳物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たずに続く。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。	底部欠損甕に転用か?
85図15 図版80	土師器 甕	カマド右 脇床直 1/4	口(20.2) 底 - 高 -	黒色鈳物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反し、胴部は中位に張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
85図16 図版80	土師器 甕	床直 1/3	口(21.8) 底 - 高 -	黒色鈳物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反し、胴部は中位に強い張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
85図17 図版80	土師器 甕	カマド左 袖 2/3	口(20.3) 底 2.8 高 38.3	黒色鈳物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 軟質	にぶい 橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は長胴を呈する。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	

中江田ハツ縄遺跡2区39号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
87図1 図版80	土師器 坏	床直	口(11.6) 底— 高3.3	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	粘土の亀裂あり
87図2 図版80	土師器 坏	貯蔵穴	口(14.0) 底— 高—	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 軟質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	内外面器面磨減
87図3 図版80	須恵器 蓋	カマド	口(10.4) 底— 高—	白色粒少	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。天井部に張りを持ち、内面のかえりは内傾する。天井部外面に2段の回転篋削りを施す。	
87図4 図版80	土製品 土錘	埋土	長さ4.9 直径1.2 孔0.4	黒色鉱物粒微	酸化焰	浅黄	両端部わずかに欠損。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他			
87図5 図版80	石器 敲石	掘り方 完形	長11.6 幅4.7 厚3.0 重229g	流紋岩	下端に剝離が見られる。			
87図6 図版80	石器 敲石	掘り方 完形	長13.1 幅5.4 厚3.6 重407g	粗粒安山岩	下端と一部に剝離が見られる。			
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特徴・その他				
87図7 図版80	鉄器 鎌	埋土 大破あり	長 $3.7+\alpha$ 幅2.6 厚0.2 重6.0g	鎌様の破片。片側は刃部。錆ぶくれ少々。欠損は調査時以降。87図8と類似の錆化のため同一個体か。87図9と接合。古代鉄様。				
87図8 図版80	鉄器 鎌	埋土 大破あり	長 $5.5+\alpha$ 幅2.4 厚0.2 重9.2g	鎌様の破片。片側は刃部。錆ぶくれ少々。欠損は調査時以降。87図7と類似の錆化のため同一個体か。古代鉄様。				
87図9 図版80	鉄器 鎌	埋土 大破あり	長 $2.1+\alpha$ 幅3.0 厚0.4 重5.9g	87図7と接合、87図8と近似の錆化のため一個体か。欠損は調査時以降。鎌部の耳部。図下方か刃部。古代鉄様。				

中江田ハツ縄遺跡2区40号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
90図1 図版80	土師器 坏	カマド左 脇	口11.4 底— 高4.1	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
90図2 図版80	土師器 坏	カマド右 脇	口11.8 底— 高4.5	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
90図3 図版80	土師器 坏	カマド右 脇	口11.4 底— 高4.4	細砂粒多	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部との境に段を有して外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図4 図版80	土師器 坏	埋土	口11.3 底— 高4.0	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を持ち、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	底部外面黒斑あり
91図5 図版81	土師器 坏	埋土	口11.0 底— 高4.0	黒色鉱物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	にぶい 赤褐	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を持って外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図6 図版81	土師器 坏	埋土・カ マド	口11.0 底— 高3.9	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	にぶい 黄褐	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図7 図版81	土師器 坏	埋土	口11.1 底— 高3.9	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	褐	底部は丸底で、口縁部は体部との境と中位に段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図8 図版81	土師器 坏	埋土	口11.0 底— 高4.0	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 褐	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を持ち、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図9 図版81	土師器 坏	埋土	口12.0 底— 高4.2	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
91図10 図版81	土師器 坏	カマド左 脇 ほぼ完形	口 11.7 底 - 高 4.5	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬 質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	底部外面黒 斑あり
91図11 図版81	土師器 坏	カマド右 脇 完形	口 11.9 底 - 高 4.4	黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図12 図版81	土師器 坏	カマド 完形	口 11.4 底 - 高 4.2	黒色鉾物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや軟 質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図13 図版81	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 10.9 底 - 高 3.4	黒色鉾物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図14 図版81	土師器 坏	カマド ほぼ完形	口 11.5 底 - 高 4.2	黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 やや軟 質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図15 図版81	土師器 坏	カマド左 脇 3/4	口 12.0 底 - 高 4.1	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を持ち、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図16 図版81	土師器 坏	埋土 1/2	口 10.7 底 - 高 -	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	底部外面黒 斑あり
91図17 図版81	土師器 坏	埋土 1/2	口 12.0 底 - 高 3.7	黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図18 図版81	土師器 坏	カマド 3/4	口(10.7) 底 - 高 3.4	細砂粒少	酸化焰 やや軟 質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	内外面器面 荒れ、赤色
91図19 図版81	土師器 坏	カマド掘 方 ほぼ完形	口 10.8 底 - 高 3.3	細砂粒少	酸化焰	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図20 図版81	土師器 坏	埋土 1/2	口 11.0 底 - 高 3.2	細砂粒少	酸化焰 やや軟 質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図21 図版81	土師器 坏	カマド 2/3	口 11.6 底 - 高 3.8	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、体部との境に段を有し、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図22 図版81	土師器 坏	埋土 1/2	口 12.0 底 - 高 3.6	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
91図23 図版81	土師器 坏	埋土 2/3	口 11.2 底 - 高 3.7	黒色鉾物粒微 細砂粒少 白色粒含	酸化焰 やや硬 質	にぶい 黄橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	外面黒斑あ り
91図24 図版81	土師器 坏	埋土 3/4	口 9.9 底 - 高 3.4	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
92図25 図版81	土師器 坏	埋土 完形	口 12.8 底 - 高 5.3	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は深い丸底で、口縁部は短く内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
92図26 図版81	土師器 坏	埋土 3/4	口 10.2 底 - 高 3.1	細砂粒少	酸化焰 やや硬 質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
92図27 図版81	土師器 坏	埋土 1/2	口 11.0 底 - 高 2.8	細砂粒少	酸化焰 やや軟 質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
92図28 図版81	土師器 坏	埋土 3/4	口 11.1 底 - 高 3.4	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
92図29 図版81	土師器 坏	埋土 2/3	口 11.5 底 - 高 3.6	赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	内外面器面 荒れ

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
92図30 図版81	土師器 坏	埋土 2/3	口(12.1) 底－ 高 3.8	黒色鈳物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はやや内傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
92図31 図版81	土師器 坏	埋土 1/3	口 13.9 底－ 高－	黒色鈳物粒微 砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
92図32 図版82	土師器 坏	埋土 1/3	口 15.0 底－ 高－	黒色鈳物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
92図33 図版82	土師器 坏	カマド 1/2	口 15.0 底－ 高 4.8	細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	内面器面荒れ
92図34 図版82	土師器 坏	埋土 破片	口(10.4) 底－ 高－	黒色鈳物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は短く直立する。口縁部横撫で、体部篋削りを施す。内面撫で後、放射状の篋磨きを施す。	
92図35 図版82	土師器 坏	埋土 破片	口(11.8) 底－ 高－	白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	にぶい 黄橙	口縁部は短く直立する。口縁部横撫で、体部篋削りを施す。内面撫で後、放射状の篋磨きを施す。	
92図36 図版82	土師器 坏	埋土 破片	口－ 底－ 高－	黒色鈳物粒微	酸化焰 硬質	にぶい 褐	内面格子状篋磨きを施す。	
92図37 図版82	土師器 坏	埋土 1/4	口(12.9) 底－ 高－	黒色鈳物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	にぶい 黄橙	体部はやや張りを持ち、口縁部はやや内傾する。口縁部横撫で後、体部篋削りを施す。内面撫で後、放射状の篋磨きを施す。	
92図38 図版82	土師器 坏	掘り方 破片	口(12.8) 底－ 高－	白・黒色鈳物粒 多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は浅く、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。内面撫で後、放射状の篋磨きを施す。	
92図39 図版82	土師器 坏	埋土 1/3	口 13.6 底－ 高－	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	黒褐	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削り、内面撫で後、篋磨きを施す。	
92図40 図版82	土師器 坏	埋土 1/2	口 11.0 底－ 高 4.2	黒色鈳物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。内面撫で後、放射状の篋磨きを施す。	
92図41 図版82	土師器 坏	カマド 1/3	口 13.3 底－ 高 4.7	黒色鈳物粒微 細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 やや硬質	にぶい 橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削り、内面撫で後、放射状の篋磨きを施す。	
92図42 図版82	土師器 坏	埋土 1/4	口(17.6) 底－ 高 5.3	細砂粒少	酸化焰 軟質	浅黄橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削り、内面撫で後、格子状篋磨きを施す。	
92図43 図版82	土師器 坏	埋土 1/2	口 11.6 底－ 高 4.0	黒色鈳物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	にぶい 褐	底部は丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。内面撫で後、格子状の篋磨きを施す。	外面一部赤色
92図44 図版82	須恵器 蓋	埋土 1/4	口 13.0 底－ 高－	細砂粒少	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(?)。口縁部は直線的に開き、2条の沈線が廻る。天井部外面に回転篋削りを施す。	
92図45 図版82	須恵器 坏	床直 1/2	口 12.6 底－ 高 2.9	細砂粒少 赤褐色粒少	還元焰 やや硬質	灰白	轆轤整形(?)。底部は偏平で、手持ち篋削りを施す。	
93図46 図版82	土師器 甕	埋土 破片	口 17.4 底－ 高－	黒色鈳物粒多 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反する。口縁部は横撫で、胴部縦位の篋削りを施す。口縁部に面取り状の磨減が見られる。	
93図47 図版82	土師器 甕	埋土 破片	口(15.4) 底－ 高－	黒色鈳物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 褐	口縁部は内・外面に、段を有してわずかに外反し、胴部は張りを持つ。口縁部は横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。	
93図48 図版82	土師器 甕	カマド 破片	口(22.0) 底－ 高－	黒色鈳物粒多 細粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反する。口縁部は横撫で後、胴部斜位の篋削りを施す。内面は篋状工具による撫でを施す。	内面カーボン付着
93図49 図版82	土師器 甕	埋土 破片	口(18.6) 底－ 高－	黒色鈳物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	明黄褐	口縁部は段を有し、外反する。内面に沈線が廻る。口縁部横撫で、胴部横位の篋削りを施す。内面撫でを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
93図50 図版82	土師器 甕	埋土 破片	口(21.6) 底— 高—	黒色鉾物粒微 砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反し、胴部は張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面篋撫でを施す。	
93図51 図版82	須恵器 短頸壺	埋土 1/2	口— 底— 高—	白色粒多	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(左回転)。胴部中位に強い張りを持つ。底部は篋削りを施す。外面自然釉付着。	
93図52 図版82	須恵器 提瓶	カマド 破片	口— 底— 高—	白色細粒少	還元焰 やや軟質	灰	外面カキ目を施す。内面接合痕顕著。	
93図53 図版82	須恵器 甕	カマド右脇 破片	口— 底— 高—	白色粒少 褐色粒多	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(?)。胴部上位に張りを持つ。外面自然釉付着。	
94図54 図版83	土製品 土錘	埋土 1/3	長 2.2 径 1.2 孔 0.3	黒色鉾物粒微 赤褐色粒少 白色粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	両端部欠損。	
94図55 図版83	土製品 土錘	埋土 1/2	長— 径 1.1 孔 0.3	黒色鉾物粒微 白色粒少	酸化焰	にぶい 橙	端部未調整。	
94図56 図版83	土製品 土錘	埋土 1/2	長— 径 1.1 孔 0.4	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	端部未調整。	
94図57 図版83	土製品 土錘	埋土 完形	長 5.2 径 1.1 孔 0.4	黒色鉾物粒微 細砂粒少 白色粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	両端部は未調整。	
94図58 図版83	土製品 土錘	埋土 3/4	長— 径 1.2 孔 0.4	白色粒多	還元焰	灰	端部一方向欠損。	
94図59 図版83	土製品 土錘	カマド 3/4	長— 径 1.4 孔 0.4	黒色鉾物粒微 赤褐色粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	端部調整は不明。	
94図60 図版83	土製品 土錘	埋土 完形	長 4.9 径 1.2 孔 0.4	黒色鉾物粒微	酸化焰	にぶい 黄橙	両端部未調整。粘土接合痕あり。	
94図61 図版82	土製品 土錘	埋土 ほぼ完形	長— 径 1.2 孔 0.2	白色粒微	酸化焰	にぶい 橙	両端部欠損。両端部は細く、中央部のみやや脹む。	
94図62 図版82	土製品 土錘	埋土 ほぼ完形	長— 径 1.1 孔 0.4	黒色鉾物粒微 細砂粒少 白色粒多	中性焰	灰	端部は一方向のみ面取りされている。	
94図64 図版83	須恵器 環	カマド掘り方 破片	口— 底(6.6) 高—	細砂粒少	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(?)。底部回転系切り未調整。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特 徴 ・ そ の 他				
94図63 図版83	鉄器 鎌	埋土 小破あり	長 3.0+α 幅 2.2 厚 0.1 重 1.9g	有柄脇扶の形状。欠損は調査時以降。板金状に平らで、側部端の両端際に至り刃部をなす。錆ぶくれ少々。古代鉄様。錆色やや黒ずむ。				

中江田八ツ縄遺跡2区41号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
95図1 図版83	須恵器 環	貯蔵穴 破片	口(13.4) 底(8.3) 高 4.0	黒色鉾物粒微 白色細粒少 赤褐色粒少	中性焰 硬質	黒褐	轆轤整形(右回転)。体部は張りを持たず、口縁部は直線的に外傾する。底部切り離した後、回転篋削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡2区42号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
96図1 図版83	土師器 甕	埋土 破片	口(20.2) 底— 高—	黒色鉾物粒微 細砂粒少 白・赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は崩れた「コ」字状を呈し、胴部は上位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部上位横位、下位は縦位の篋削りを施す。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特 徴 ・ そ の 他				
96図2 図版83	鉄器 鎌	床直 小破あり	長 11.6+ α 厚 0.1	幅 3.6 重 29.0g	図右端上は旧時に折り曲げて返した状態。左端は調査時以降の欠損。錆ぶくれあり。錆色やや茶味おびる。古代鉄様。			

中江田八ツ縄遺跡2区44号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
98図1 図版83	土師器 坏	埋土 完形	口 12.2 底— 高 3.6	白・黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
98図2 図版83	土師器 坏	P5 完形	口 12.6 底— 高 3.6	黒色鉾物粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
98図3 図版83	土師器 坏	埋土 1/2	口(11.8) 底— 高 2.9	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
98図4 図版83	土師器 坏	床直 完形	口 12.0 底— 高 3.6	黒色鉾物粒微 砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
98図5 図版83	土師器 坏	埋土 1/3	口(16.2) 底— 高 4.9	黒色鉾物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや軟質	橙	底部は平底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、体部は横位、底部篋削りを施す。	
99図6 図版83	土師器 坏	床直 完形	口 14.4 底— 高 4.5	黒色鉾物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は短くわずかに内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
99図7 図版83	土師器 皿	床直 ほぼ完形	口 18.0 底— 高 4.5	黒色鉾物粒微 砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。底部篋削り、口縁部横撫でを施す。	内外面カーボン付着
99図8 図版83	須恵器 埴	埋土 2/3	口(13.2) 底 9.1 高 4.2	細砂粒多 白色細粒多	還元焰 やや軟質	灰	轆轤整形(右回転)。体部は直線的に外傾し、高台は底部回転篋削り後の付高台。	
99図9 図版83	須恵器 瓶	埋土 破片	口— 底— 高—	砂粒多	還元焰 硬質	灰	頸部に沈線が廻る。	
99図10 図版83	須恵器 甕	埋土 破片	口— 底— 高—	白色粒多	還元焰 硬質	灰	外面平行叩き、内面青海波文。	厚 1.0
99図11 図版83	須恵器 甕	埋土 破片	口— 底— 高—	砂粒少	還元焰 硬質	灰	外面撫で。内面素文。	厚 1.3 20住出土破片と接合
99図12 図版83	須恵器 甕	埋土 破片	口— 底— 高—	砂粒少	還元焰 硬質	灰白	外面格子状叩き、内面青海波文?。	厚 0.6
99図13 図版83	須恵器 甕	埋土 破片	口— 底— 高—	砂粒少	還元焰 硬質	灰	外面斜格子状叩き、内面青海波文。	厚 1.1
99図14 図版83	須恵器 甕	床直 1/2	口(13.0) 底— 高—	白色粒多	還元焰 硬質	黒褐	口縁部は外反し、上半に段を有し、短く直立する。外面格子状叩き、内面青海波文。	内外面自然釉付着
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特 徴 ・ そ の 他				
99図15 図版83	鉄器 鉄片	埋土 小破あり	長 5.2+ α 厚 0.6	幅 2.7 重 20.0g	鉄片で本来形状は不明。錆化に方向性顕著。古代鉄であるか否か不明。器肉は一定でない。			

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	特 徴 ・ そ の 他	
99図16 図版83	鉄器 釘	埋土 小破あり	長 4.1+α 幅 0.7 厚 0.6 重 3.1g	断面隅丸万形のため釘か。下方は調査時以降の欠損。上方は不明。錆化少ない。錆色黒ずむ。古代鉄様。	
挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	石 質	特 徴 ・ そ の 他
99図17 図版83	石器 敲石	P1 完形	長 13.1 幅 5.2 厚 3.7 重 358g	流紋岩	側縁部に剥離、2面に擦痕が見られる。

中江田八ツ縄遺跡1区46号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
101図1 図版84	土師器 坏	埋土 破片	口(10.1) 底 — 高 —	黒色鉍物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はやや内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
101図2 図版84	土師器 坏	カマド 1/4	口(13.0) 底 — 高 —	黒色鉍物粒微 砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
101図3 図版84	土師器 坏	カマド 1/3	口(13.6) 底 — 高 —	白・黒色鉍物粒 微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	内面カーボン付着
101図4 図版84	土師器 甕	カマド 破片	口(24.0) 底 — 高 —	黒色鉍物粒少 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 褐	口縁部は外反し、胴部は張りを持って続く。口縁部横撫で、胴部横位の篋削りを施す。内面は撫で。	
101図5 図版84	土師器 甕	カマド 貯蔵穴 破片	口(20.0) 底 — 高 —	黒色鉍物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反する。胴部はやや張りを持って続く。口縁部横撫で後、胴部は斜位の篋削りを施す。内面篋削り撫でを施す。	
101図6 図版84	土師器 甕	埋土 破片	口(16.0) 底 — 高 4.9	黒色鉍物粒微 細砂粒少 白色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部は外反し、胴部に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部横位の篋削りを施す。内面は撫でを施す。	

中江田八ツ縄遺跡1区47号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
103図1 図版84	土師器 坏	カマド 2/3	口(11.6) 底 — 高 3.9	黒色鉍物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟 質	橙	底部は丸底で、体部との境に稜を有し、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	外面器面の磨減
103図2 図版84	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口 10.2 底 — 高 3.1	黒・白色鉍物粒 微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に稜を有し、わずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
103図3 図版84	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口 11.0 底 — 高 4.3	黒色鉍物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟 質	橙	底部は丸底で、体部との境に稜を持ち、口縁部は段を持って外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施し、内面黒色処理を施す。	
103図4 図版84	土師器 坏	埋土 1/3	口(11.4) 底 — 高 3.8	黒色鉍物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟 質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
103図5 図版84	土師器 甕	埋土 1/2	口 22.4 底 — 高 —	黒色鉍物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部はあまり張りを持たない。口縁部横撫で、胴部は斜位の篋削りを施す。内面篋削り撫でを施す。	
103図6 図版84	土師器 甕	床直 破片	口(22.2) 底 — 高 —	黒色鉍物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 褐	口縁部は「く」字状に外反し、胴部はあまり張りを持たずに続く。口縁部横撫で後、胴部縦位の篋削りを施す。	口縁部篋痕顕著
104図7 図版84	土師器 甕	カマド 埋土 2/3	口 18.5 底(5.0) 高 25.6	黒色鉍物粒微 細砂粒多 白色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、胴部中位～下位に張りを持つ。口縁部横撫で内面に段を有し、胴部斜位の篋削りを施す。内面篋削り撫でを施す。	
104図8 図版84	土師器 甕	埋土 1/4	口(22.6) 底 — 高 —	黒色鉍物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 褐	口縁部は「く」字状に屈曲し、胴部中位にやや張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削りを施す。口縁部粘土接合痕顕著。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
104図9 図版84	土師器 甕	カマド	口－ 底－ 高－	黒色鉾物粒微 白色粒多	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	球胴状で底部は丸底。胴部は外面斜位寛削り、内面撫でを施す。	
104図10 図版84	土師器 甕	カマド 埋土	口－ 底(4.0) 高－	黒色鉾物粒微 細砂粒多 白色粒多	酸化焰 硬質	にぶい 橙	外面は斜位の寛削り、内面は撫でを施す。	
104図11 図版84	土師器 甕	カマド	口(22.6) 底(4.6) 高36.0	黒色鉾物粒微 細砂粒多	酸化焰	橙	口縁部は「く」字状に強く外反し、長胴で胴部中位にやや張りを有する。口縁部横撫で、胴部斜位～縦位の寛削り、内面寛撫でを施す。接合痕顕著。	
104図12 図版84	土師器 甕	カマド 埋土	口(19.5) 底－ 高－	黒色鉾物粒微 砂粒多 白色粒少	酸化焰 やや軟質	にぶい 橙	口縁部は「く」字状に強く外反し、胴部中位にやや張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部縦位の寛削りを施す。内面は撫でを施す。	
105図13 図版85	土師器 甕	カマド 埋土	口21.4 底－ 高－	黒色鉾物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反し、長胴で張りを持たずに続く。	
105図14 図版85	土師器 甕	カマド	口(22.0) 底－ 高－	黒色鉾物粒微 細砂粒多 白色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部は「く」字状に屈曲し、胴部の張りは弱い。口縁部横撫で後、斜位→縦位の寛削りを施す。内面は寛撫でを施す。	
105図15 図版85	須恵器 甕	床直 破片	口－ 底－ 高－	白色細粒多	還元焰 硬質	灰	外面カキ目。	
105図16 図版85	土師器 土器台 ?	カマド ほぼ完形	口20.5 底12.7 高6.3	黒色鉾物粒微 細砂粒多 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	にぶい 褐	両端部とも面取りされており、内面は撫でられているが、外面は粘土接合痕顕著である。器種・天地共に不明で、土器を置く台か竈掛け調整に使用されたものか?	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他			
105図17 図版85	石製品 不明	埋土 完形	長4.5 幅5.5 厚2.1 重37g	二ツ岳軽石	中央部がわずかに凹み、側面にも見られる。			
105図18 図版85	石製品 砥石	埋土 完形	長5.6 幅5.5 厚3.4 重51g	二ツ岳軽石	一面に刃調整痕が見られる。			
105図19 図版85	石器 敲石	埋土 完形	長14.8 幅4.7 厚4.0 重456g	粗粒安山岩	側面に剝離が見られる。			
105図20	石器 敲石	埋土 完形	長12.0 幅6.4 厚3.8 重461g	粗粒安山岩	側面に剝離が見られる。			
105図21 図版85	石器 磨石	埋土 破片	長－ 幅－ 厚4.3 重115g	粗粒安山岩	両側面に磨減が見られる。			

中江田八ツ縄遺跡1区48号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
106図1 図版85	土師器 坏	掘り方	口(11.0) 底－ 高－	黒色鉾物粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外傾し、底部との境に稜を有する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
106図2 図版85	土師器 坏	カマド	口(11.0) 底－ 高2.8	黒・白色鉾物粒微 白色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は外反し、底部との間に稜を有する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
106図3 図版85	土師器 坏	埋土	口(11.0) 底－ 高－	黒色鉾物粒微 小礫	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はわずかに外傾する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。外面器面の荒れ。	外面黒斑あり
106図4 図版85	土師器 坏	カマド	口(12.0) 底－ 高－	黒色鉾物粒微 砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
106図5 図版85	土師器 坏	床直	口10.8 底－ 高2.8	黒色鉾物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	外面黒斑あり

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
106図6 図版85	土師器 坏	カマド 破片	口 - 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 白色粒少 砂粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は短く直立し、体部との境に稜を有する。口縁部横撫で、体部外面篋削り、内面撫で後放射状暗文を施す。	
107図7 図版85	土師器 甕	床直 1/3	口 - 底 - 高 -	黒色鉾物粒少 砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 橙	胴部はあまり張りを持たず直線的で、縦位の篋削りを施す。	
107図8 図版85	土師器 甕	カマド 破片	口(22.2) 底 - 高 -	黒色鉾物粒少 砂粒多 白色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部は「く」字状に外反し、内面に沈線が1条廻る。胴部は張りを持たずに続く。口縁部横撫で後、胴部斜位の篋削りを施す。内面撫で。	
107図9 図版85	土製品 土錘	埋土 3/4	長 - 幅 1.2 厚 0.2	黒色鉾物粒微 黒色粒少	酸化焰	にぶい 橙	端部は面取りされている。粘土接合痕あり。	

中江田八ツ縄遺跡1区49号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
109図1 図版85	土師器 坏	埋土 破片	口(10.5) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は短く外反し、底部との境に強い稜を有する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	外面黒斑あり
109図2 図版85	土師器 坏	埋土 破片	口(12.0) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 白色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立し、底部との境に稜を有する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
109図3 図版85	土師器 坏	埋土 1/4	口(9.0) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 白色粒少	中性焰 硬質	黄灰	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	器肉が厚く 小型である
109図4 図版85	土師器 甕	埋土 破片	口(23.0) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反する。口縁部横撫で、胴部横位篋削りを施す。内面は撫で。粘土接合痕顕著。	

中江田八ツ縄遺跡1区52号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
112図1 図版86	土師器 甕	カマド脇 破片	口(21.0) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部は外反し、胴部上位に張りを持つ。口縁部横撫で後、胴部上位横位の篋削り、下位は縦位の篋削りを施す。	
112図2 図版86	土製品 土錘	埋土 完形	長 4.6 幅 1.1 厚 0.3	黒色鉾物粒微 細砂粒多 白色粒少	酸化焰	橙	両端部未調整。	

中江田八ツ縄遺跡1区53号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
113図1 図版86	土師器 坏	埋土 破片	口(11.4) 底 - 高 -	黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	橙	口縁部は外傾し、底部との境に稜を有する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
113図2 図版86	土師器 坏	埋土 3/4	口 12.4 底 - 高 4.5	黒色鉾物粒微 白色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	底部は丸底で、口縁部は底部との境に稜を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡1区54号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
114図1 図版86	土師器 坏	埋土 2/3	口 12.4 底 - 高 4.1	黒色鉾物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	橙	口縁部は内傾し、底部との間に稜を有する。底部は丸底を呈する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	内面器面荒れ

中江田ハツ繩遺跡3区1号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
115図1 図版86	土師器 甕	埋土 破片	口(19.0) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰	橙	口縁部は「コ」字状をし、胴部やや張りを持つ。口縁部横撫で、胴部横位の篋削り、内面撫でを施す。	

中江田ハツ繩遺跡3区2号住居跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
116図1 図版86	土師器 坏	P1 2/3	口13.4 底7.4 高3.6	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	体部は張りを持たず、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。底部中央に離れ砂痕あり。	内面カーボン附着 墨書「一市」
116図2 図版86	須恵器 坏	埋土 ピット 1/3	口(13.6) 底(5.8) 高4.6	細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	轆轤整形(右回転)。体部は張りを持たず、口縁部は外反する。底部回転糸切り未調整。	カーボン附着
116図3 図版86	須恵器 坏	埋土 1/4	口(15.0) 底(7.6) 高5.2	細砂粒少	還元焰 やや軟質	灰	轆轤整形(右回転)。体部はわずかに張りを持ち、口縁部は外反する。底部回転糸切り。	
116図4 図版86	須恵器 壺	埋土 破片	口(16.0) 底— 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒少	還元焰 やや軟質	灰	轆轤整形(?)。体部は張りを持たず、口縁部はわずかに外反する。高台部欠損。	
117図5 図版86	須恵器 壺	床直 1/4	口— 底(6.2) 高—	黒色鉱物粒微 細砂粒多 褐色粒少	還元焰 硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。底部回転糸切り後付高台。	
117図6 図版86	灰釉 陶器 碗	ピット 破片	口— 底(6.4) 高—			灰白	轆轤整形。回転は右回りか。底部切離し技法は高台貼付後の撫でのため不明。施釉方法は刷毛塗りか。釉調は、透明感のない灰色。	光ヶ丘1
117図7 図版86	須恵器 甕	床直 破片	口— 底(15.0) 高—	砂粒少	還元焰 硬質	灰	紐作り轆轤整形。胴部外面に篋痕あり。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他			
117図8 図版86	石器 敲石	埋土 完形	長12.2 幅5.7 厚4.6 重430g	粗粒安山岩	上下端部に敲打痕、一面に磨滅、多数の擦痕が見られる。			

中江田ハツ繩遺跡1区1号井戸跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他
119図1 図版86	石臼 穀臼、上臼	埋土 破片	長(18.6) 幅(16.1) 厚10.9 重3,800g	花崗岩	硬質の石材のためか、目跡と面は旧時か、消耗は少ない。割れ口の先端に軸受穴あり。
119図2 図版86	石臼 穀臼、下臼	埋土 1/3	長(21.8) 幅(34.5) 厚12.9 重10,000g	粗粒安山岩	硬質安山岩でありながら、よく消耗し目無しとなる。ふくみは約1.2cm程あり、やや弱い。割れ口は摩耗し、旧時である。裏面は、石ノミ痕不明瞭。
119図3 図版86	石臼 穀臼、下臼	埋土 1/2	長(22.8) 幅34.8 厚5.2 重6,300g	花崗岩	硬質石材でありながらよく消耗している。溝の分割は、6分割で主溝副溝ともに、同じ巾で浅い。左回り。
119図4 図版86	石臼 穀臼、下臼	埋土 破片	長(15.4) 幅(36.5) 厚6.7 重2,600g	粗粒安山岩	硬質安山岩でありながら、目無し臼に近い程消耗。表面に交叉方向で主溝と副溝が見え、さらに刃ならし傷と裏面にも砥石としたらしい研磨痕あり。
120図5 図版86	石臼 穀臼、下臼	埋土 2/3	長(22.2) 幅30.5 厚10.0 重8,000g	粗粒安山岩	硬質の安山岩でありながら消耗している。主溝と副溝はかろうじて6分割、左回りであることがわかる。裏面は突きノミ痕あり。
120図6 図版87	砥石 中砥	埋土 完形	長11.2 幅2.9 厚2.9 重85g	流紋岩	側部に削り跡あり、表・裏が使用面。その両端は尖り、刃付砥か。中砥級。

第7章 遺物観察表

中江田八ツ縄遺跡1区2号井戸跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
121図1 図版87	土師器 小型壺	埋土 3/4	口 8.8 底 - 高 8.8	黒色鈳物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや軟質	橙	胴部から底部は半球状で、口縁部との境に段を有し、口縁部は外反する。口縁部横撫で、胴部篋削りを施す。	外面器面荒れ

中江田八ツ縄遺跡1区6号井戸跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
122図1 図版87	土師器 坏	埋土 破片	口(11.0) 底 - 高 -	細砂粒少	酸化焰 硬質	灰褐	口縁部は段を持って外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡2区14号井戸跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
126図1 図版87	須恵器 土器 皿	埋土 破片	口 - 底 5.6 高 -	夾雑物微	並 燻		外面に黒色燻。底面に轆轤左回転の糸切あり。内面に轆轤目あり。	14・15世紀
126図2 図版87	須恵器 塊	埋土 破片		白灰色、石英分多	締 還元焰		内面摩耗あり。高台端部旧時欠損。	10・13世紀 県外搬入
126図3 図版87	軟質陶器 鉢	埋土 破片	口 - 底 - 高 -	陶土質 夾雑物微 石英分含	並 外面黒色燻		内面にわずかに摩耗痕あるものの、その他は近來使用。口縁部の内・外面横撫で、体部外面下方指痕あり。	14世紀 東毛以東製か
126図4 図版87	焼締陶器 甕	埋土 破片	厚 1.4	夾雑穀物粒多 石英粒多	締り 酸化焰		内・外面酸化気味。内面に紐作痕あり。割口は灰色を呈し、還元気味。	13・14世紀 県外搬入
126図5 図版87	焼締陶器 鉢	埋土 破片	底(12.0) 高 -	夾雑物に白色の小礫多い	還元気味 軟質		内面に摩耗顕著。高台貼付。底面にワラ様の圧痕多く、山茶碗窯製品を思わせる。	東海地方製か。13世紀

中江田八ツ縄遺跡1区17号井戸跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
128図1 図版87	土師器 坏	中層以下 埋土 1/2	口(11.6) 底 - 高 3.4	黒色鈳物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
128図2 図版87	土師器 坏	上層 2/3	口 11.8 底 - 高 4.3	黒色鈳物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は体部との境に稜を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
128図3 図版87	土師器 坏	中層以下 埋土 1/4	口(10.8) 底 - 高 -	黒色鈳物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
128図4 図版87	土師器 坏	中層以下 埋土 ほぼ完形	口 11.9 底 - 高 4.4	細砂粒少 赤褐色粒多	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は体部との境に段を有し、外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
128図5 図版87	土師器 坏	中層以下 埋土 ほぼ完形	口 11.8 底 - 高 4.5	細砂粒多 赤褐色粒多	酸化焰 やや軟質	浅黄橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
128図6 図版87	土師器 坏	上層 ほぼ完形	口 11.0 底 - 高 3.8	黒色鈳物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
128図7 図版87	土師器 坏	上層 1/2	口(11.4) 底 - 高 4.3	白・黒色鈳物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	底部外面黒斑あり
128図8 図版87	土師器 坏	上層 2/3	口(12.0) 底 - 高 4.3	黒色鈳物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に稜を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
128図9 図版87	土師器 坏	上層 3/4	口 11.6 底 - 高 3.6	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
128図10 図版87	土師器 坏	上層 1/4	口(12.2) 底 - 高 -	細砂粒少 赤褐色粒多	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は外反し、内面に沈線が廻る。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
128図11 図版87	土師器 坏	中層以下 埋土 1/2	口(13.0) 底 - 高 4.5	細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は外傾し、内面に沈線状に廻る。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	底部外面黒斑
128図12 図版87	土師器 坏	上層 1/4	口(12.0) 底 - 高 -	黒褐色粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
129図13 図版87	土師器 坏	中層以下 埋土 3/4	口 11.6 底 - 高 3.4	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は体部との境に稜を有し、外反する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
129図14 図版87	土師器 坏	中層以下 埋土 ほぼ完形	口 11.6 底 - 高 3.6	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
129図15 図版87	土師器 坏	上層 3/4	口 12.0 底 - 高 3.7	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	
129図16 図版87	土師器 坏	中層以下 埋土 破片	口(15.8) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部寛削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡2区18号井戸跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	器形・技法等の特徴	備考
130図1 図版88	焼締陶器 甕	埋土 破片	厚 1.3	白色鉱物粒多く含 み石英か	締り、外面 酸化焰、割 れ口還元焰	内面に紐作痕と工具痕、外面に削り目と平行状叩目あり。	13・14世紀か。東海地方製品か
131図2 図版88	軟質陶器 鉢	埋土 破片		鉱物粒わずか含む	並、外面黒 割れ口灰 燻と還元焰	内面最下方が少し摩耗のほか、整形痕良く残り、使用浅い。片口の作出しは指。轆轤右回転。	14世紀 県内東毛製
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	器形・技法等の特徴	備考
131図3 図版88	砥石 中砥	埋土 1/2	長(9.8) 厚 2.2	幅 4.0 重 90g	砥沢石	4面使用。一面に刃調整痕が見られ半載されている。	

中江田八ツ縄遺跡2区19号井戸跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
133図1 図版88	土師器 坏	埋土 1/2	口 12.4 底 5.6 高 4.0	細砂粒少 白色細粒少	酸化焰 軟質	橙	底部は丸底気味の平底で、口縁部は外傾する。器面磨滅により整形不明。	
133図2 図版88	土師器 坏	埋土 破片	口(14.0) 底 - 高 -	細砂粒少 白色粒微	酸化焰 硬質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部はわずかに内湾し、底部との境に弱い稜を有する。底部寛削りは磨滅のため不明瞭。口縁部横撫で、内面撫で。	
133図3 図版88	土師質 土器 坏	埋土 破片	口 - 底 7.0 高(3.5)	細砂粒少 白色細粒少 赤褐色粒微	酸化焰 硬質	橙	内面撫で後、黒色処理を施す。	
133図4 図版88	須恵器 埴	埋土 1/3	口 - 底(9.6) 高 -	細砂粒多 白色粒多	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。高台は底部回転寛削り後の付高台。	
133図5 図版88	須恵器 坏	埋土 1/3	口 14.4 底 8.4 高 6.9	細砂粒多 白色細粒多	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。体部下半にやや張りをも持ち、口縁部はわずかに外反する。底部回転寛削りを施す。底部にわずかに糸切痕を残す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
133図6 図版88	土師器 甕	埋土 ほぼ完形	口 20.8 底 3.9 高 27.1	白色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「コ」字状に外反し、胴部は上位に張りを持つ。口縁部横撫で、胴部上位横位、下位斜位の篋削りを施す。	
133図7 図版88	土師器 甕	埋土 1/4	口(16.8) 底 - 高 -	細砂粒多 白色細粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は上位にやや張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削り、内面撫でを施す。	
133図8 図版88	須恵器 甕	埋土 破片	厚 0.9	白色細粒多	還元焰 硬質	灰	内外面素文。	
133図9 図版88	須恵器 甕	埋土 破片	厚 1.0	白色粒多 少礫混	還元焰 硬質	灰	外面叩き不明、内面素文。	
134図10 図版88	須恵器 甕	埋土 破片	厚 1.2	白色粒多	還元焰 硬質	灰	内外面素文。	
134図11 図版88	須恵器 甕	埋土 破片	厚 1.0	白色細粒少 赤褐色粒多	還元焰 硬質	灰	外面平行叩き、内面青海波文を施す。	
134図12 図版88	須恵器 甕	埋土 破片	厚 1.3	細砂粒多 白色細粒少	還元焰 やや軟質	灰白	口縁部は断面三角形状を呈す。	
134図13 図版88	須恵器 甕	埋土 破片	厚 1.3	白色粒多 小礫混	還元焰 軟質	灰	外面叩き不明、内面素文。	
134図14～134図20 図版88	馬歯	243～244頁参照						

中江田八ツ縄遺跡1区20号井戸跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
135図1 図版88	須恵器 壺	埋土 1/3	口(15.8) 底(10.8) 高 7.0	細砂粒多	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。腰部にやや張りを持ち、口縁部は直線的に外傾する。底部回転篋調整、付高台。	底部墨書
135図2 図版89	土師器 台付甕	埋土 破片	口 - 底 - 高 -	黒色鉱物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐	外面篋削りを施す。脚部は粘土貼付痕顕著。	
135図3 図版89	須恵器 瓶	埋土 破片	厚 0.8	白色粒多	還元焰 硬質	灰	内面素文、外面カキ目を施す。	
135図4 図版89	須恵器 甕	埋土 破片	厚 0.8	白・黒色粒多	還元焰 硬質	灰	外面平行叩き、内面青海波文。	

中江田八ツ縄遺跡2区21号井戸跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他			
137図1 図版97	石製 骨蔵器 身部	埋土 完形	長 39.1 幅 39.2 厚 25.2 重 23,400g	角閃岩 安山岩	9世紀後半から11世紀頃の石製骨蔵器の身部に見えるが、骨の遺存はなかった。上面の合せ面に削りと磨り合わせによる平滑面があり、外面中位下半以下に酸化鉄付着があり、地下水の上下移動を思わせ、さらに旧時の石表面の剥落が見られる。上半部に部分的に削り跡が見えるが多くはない。内面の穴部は壁面に削り跡と、底面に尖き込みの跡が見られるが、削り跡は近世の石ノミの刃跡より狭く、幅約3cmで始刃状となって残る。			

中江田八ツ縄遺跡2区24号井戸跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
139図1 図版89	土師器 甕	埋土 1/4	口 18.6 底 - 高 -	白・黒色鉱物粒 少 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	にぶい 褐	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は張りを持たない。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。	

中江田ハツ繩遺跡1区1号溝跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
141図1 図版89	陶器 蓋	埋土 完形	口 8.0 底 — 高 1.2	陶胎は白色	締り 還元焰	外面のみ白土か白磁釉を施し底部側は露胎。 摘み部は欠損しているものの形象摘み。	19世紀後半 から20世紀 初頭
141図2 図版89	磁器 染付小椀	埋土 破片		磁胎	締り 還元焰	内・外面に草花・唐草などを染付。高台端部 を露胎とするほか施釉する。	19世紀後半
141図3 図版89	磁器 染付皿	埋土 1/2	口(13.2) 底(7.3) 高 3.8	磁胎	締り 還元焰	内面に菊花文・中央にこんやく判裏に唐草 文・丸「福か」を、染付。高台端部に細砂付 着。	18世紀中頃
141図4 図版89	陶器 甕	埋土 破片	厚 1.0	白色粒子含む	締りあり 酸化焰	内面に紐作痕、外面に撫で痕あり。外面に自然 釉か施釉不明瞭な光沢があり、近世の常滑 焼か。	常滑焼か
141図5 図版89	陶器 急須	埋土 1/2	口 6.5 底 7.0 高 10.9	陶胎	締り 中性焰的	外面に銅と思われる緑釉が施される。その他 内面・口縁端部・外面は露胎。胎土はやや白 黄灰色を呈し焼き甘く地方窯の製品か。	19世紀後半 から20世紀 初頭 益子
141図6 図版89	軟質陶器 焙烙	埋土 底部片	厚 0.5	夾雑鉱物少ない	やや軟質 やや酸化	外面底型肌痕あり。内面に文字の押型あり。	19世紀
141図7 図版89	焼締陶器 播鉢	埋土 完形	口 28.4 底 13.3 高 10.0	夾雑鉱物含む	締 酸化焰	内面に9条前後を単位とする卸目あり、全体 に焼締り、口縁部周辺は自然釉様の光沢あり。 外面体部は、轆轤左回転の削・撫であり、底 面に細砂付着。	
142図8 図版89	軟質陶器 鉢	埋土 破片	口(42.2) 底(29.0) 高 11.6	夾雑物微	並 黒色～暗灰色燻	内面に研磨の光沢と燻の吸炭顕著。外面は轆 轤の撫で条痕。底面に石目状の凹凸あり。型 への押圧痕か。	小泉焼か 19・20世紀
142図9 図版89	軟質陶器 焙烙	埋土 破片	口(25.6) 底(23.3) 高 3.0	白色粒子微	並 外面燻 割れ口酸化焰	外面黒色燻。内・外面の口縁部周辺横撫で痕。 体部外面下方、轆轤左回転の篋削り目あり。 底面は石目状の凹凸があり、型痕か。	東毛製品か 19世紀か
142図10 図版89	軟質陶器 不明	埋土 破片	高 5.8	夾雑物微	並	器種不明で箱物。粘土板材を貼る。小口面は 空き、木製の引出し用か。丸い透しは筒物が入 るためか。	東毛製か 19・20世紀
挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	特 徴 ・ そ の 他				
142図11 図版89	銭	埋土 完形	日本。徳川幕府。「文久永宝」文久3年(1863)初鋳。				

中江田ハツ繩遺跡1区2号溝跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
143図1 図版89	軟質陶器 焙烙	埋土 破片	厚 0.7	夾雑物粒微	酸化気味	焙烙の底面で、底外面に型押し状の凹凸あり。 内面は撫で。断面の薄い方が外面。	東毛製か 19・20世紀

中江田ハツ繩遺跡1区3号溝跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
144図1 図版89	須恵器 壺	埋土 破片	厚 0.6	夾雑物少ない	やや酸化	内面と外面の口縁部、周辺に横撫であり。体 部外面に篋削りがわずかにはいる。	10世紀後半 から11世紀 前半
144図2 図版89	須恵器 釜形か	埋土 底部片	口 — 底(9.2) 高 —	夾雑物少ない	やや酸化 軟質	内面に篋撫で痕。体部外面に粘土の接合痕あ り。底面は粘土版か。底外面に細砂付着。	10世紀後半 から11世紀 前半
144図3 図版89	陶器 植木鉢	埋土 破片	厚 0.4	夾雑物微	やや酸化 締りあり	内・外面に轆轤左回転あり。	20世紀
挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)		特 徴 ・ そ の 他		
144図4 図版89	鉄器 刀子	埋土 小破あり	長 10.5+ α 厚 0.5	幅 1.1 重 14.7g	茎は完存。刃部先側は、調査時以降の欠損。刃部の研磨消耗は少ない。錆ぶ くれ少ない。錆色黒・茶おびる。古代鉄様		

第7章 遺物観察表

中江田ハツ繩遺跡1区4号溝跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	器形・技法等の特徴	備考
145図1 図版90	土師質 埴	埋土 底部片		夾雑鉱物多い	やや軟質 酸化焰気味	内・外・底面に轆轤右回転の撫であり。内面に研磨見える回転の工具痕あり。	10世紀後半
145図2 図版90	土師器 甕	埋土 破片	口(17.0) 底 - 高 -	夾雑鉱物多い	並 酸化焰気味	内・外面横撫であり。	9世紀中頃

中江田ハツ繩遺跡2区5号溝跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
149図1	須恵器 蓋	埋土 破片	口 - 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 白・黒色細粒少	還元焰 やや硬質	灰白	環状摘。	摘径 4.0
149図2 図版90	須恵器 甕	埋土 破片	厚 0.6	白色細粒多	還元焰 硬質	灰	外面平行叩き、内面青海波文を施す。	
149図3 図版90	須恵器 甕	埋土 破片	厚 0.8	白色細粒少	還元焰 硬質	灰	外面格子状叩き、内面青海波文。	
149図4 図版90	須恵器 甕	埋土 胴部片	厚 0.8	黒色細粒少 白色細粒多	還元焰 硬質	灰	内面粘土接合痕。	
149図5 図版90	須恵器 甕	埋土 胴部片	厚 0.8	黒色粒少 白色細粒多	還元焰 硬質	灰	外面叩き不明。内面青海波文。	

中江田ハツ繩遺跡1区4号溝跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
150図6 図版90	土師器 坏	C-10 破片	口(10.8) 底 - 高 -	白・黒色鉱物粒 微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
150図7 図版90	土師器 坏	埋土 1/3	口(12.0) 底 - 高 3.1	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
150図8 図版90	土師器 坏	C-10 破片	口(13.0) 底 - 高 -	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
150図9 図版90	土師器 坏	埋土 1/2	口(12.0) 底 - 高 3.6	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
150図10 図版90	土師器 坏	C-10 破片	口(13.0) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	外面器面荒れ
150図11 図版90	土師器 坏	C-10 破片	口(13.8) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 白・黒色細粒少	酸化焰 硬質	橙	口唇部内面に沈線が廻る。内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	
150図12 図版90	土師器 手捏	埋土 1/2	口 4.5 底 - 高 1.2	白・黒色鉱物粒 微 細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰 軟質	浅黄橙	浅い皿状を呈している。	
150図13 図版90	須恵器 蓋	C-10 1/4	口(18.0) 底 - 高 3.4	細砂粒少	還元焰 やや硬質	灰	轆轤整形(右回転)。摘は、環状摘で、天井部に2段の回転篋削りを施す。	摘径(5.2)
150図14 図版90	土製品 土錘	H-12G 2/3	長(3.3) 径 1.0 孔 0.3	黒色鉱物粒微	酸化焰	浅黄橙	両端部欠損。	
150図15 図版90	土製品 土錘	埋土 完形	長 8.6 径 1.6 孔 0.5	白・黒色鉱物粒 微 白色細粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	大形で、細長い紡錘形を呈している。	
150図16 図版90	土師器 坏	埋土 1/3	口 16.0 底 - 高 4.1	白・黒色鉱物粒 微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
150図17 図版90	土師器 甕	C-11G 破片	口(23.0) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反する。口縁部横撫で、胴部は斜位の篋削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡2区6号溝跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
150図18 図版90	土師器 坏	埋土 1/3	口 10.6 底 - 高 4.5	黒色鉱物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	褐灰	底部は丸底で、口縁部は体部との境に段を有し、ほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
150図19 図版90	土師器 坏	埋土 1/4	口(12.8) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部はほぼ直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
150図20 図版90	須恵器 埴	埋土 破片	口 - 底 11.3 高(1.7)	黒色鉱物粒微 白・黒色細粒少	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。付高台。底部回転篋削りを施す。	
150図21 図版90	土師器 小型甕	埋土 破片	口(15.0) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 白色粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反し、胴部は張りを持つ。口縁部横撫で、胴部篋削りを施す。	
150図22 図版90	土製品 土錘	埋土 2/3	長(3.6) 径 0.9 孔 0.3	黒色鉱物粒微 赤褐色粒微	酸化焰	浅黄橙	両端部欠損。	

中江田八ツ縄遺跡2区7号溝跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
150図23 図版90	土師器 坏	埋土 1/4	口(13.0) 底 - 高 -	白色細粒少	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
150図24 図版90	土師質 皿	埋土 1/2	口(13.0) 底(5.4) 高 3.0	黒色鉱物粒微 白色粒少 赤褐色粒多	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反する。底部回転糸切り後、周囲に篋削りを施す。	
150図25 図版90	須恵器 埴	埋土 破片	口 - 底(9.4) 高(1.3)	細砂粒少	還元焰 やや軟質	灰白	轆轤整形(?)。削り出し高台。	
151図26 図版90	土師器 甕	埋土 破片	口(19.0) 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は「コ」字状に外反し、胴部は張りを持つ。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。	151-28と同一個体
151図27 図版90	土師器 甕	埋土 破片	口(24.0) 底 - 高 -	白・黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	橙	口縁部は「く」字状に外反する。口縁部横撫で、胴部斜位の篋削りを施す。	
151図28 図版90	土師器 甕	埋土 破片	口 - 底 4.5 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	胴部縦位の篋削りを施す。	151-26と同一個体
151図29 図版90	土製品 土錘	埋土 2/3	長(3.6) 径 1.3 孔 0.4	黒色鉱物粒微 白色細粒少 赤褐色粒少	酸化焰	灰白	一端部欠損。	
151図30 図版90	土製品 土錘	埋土 1/2	長(3.5) 径 1.2 孔 0.3	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰	浅黄橙	両端部欠損。	
151図31 図版90	土製品 土錘	埋土 3/4	長(3.5) 径 1.0 孔 0.2	白色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	両端部欠損。小型。	

第7章 遺物観察表

中江田ハツ繩遺跡2区7・9号溝跡出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
151図32 図版91	土師器 坏	埋土 破片	口(19.0) 底— 高—	細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
151図33	須恵器 蓋	埋土 破片	口— 底— 高—	白・黒色細粒少	還元焰 硬質	灰	宝珠摘の摘部。	摘径 2.0
151図34 図版91	須恵器 甕	埋土 破片	厚 0.8	細砂粒少	還元焰 硬質	灰	外面格子叩き、内面青海波文を施す。	
151図35 図版91	土師器 坏	埋土 破片	口— 底— 高—	黒色鉍物粒微 白色細粒多	酸化焰 硬質	橙	内面撫で後、放射状暗文を施す。	

中江田ハツ繩遺跡1号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他
154図1 図版91	砥石 中砥	埋土 完形	長 7.6 幅 3.4 厚 2.3 重 70g	砂岩	消耗は手持砥を思わせる。細砂目の中砥級の用途。小口面の尖るのは刃付砥としてか。

中江田ハツ繩遺跡9号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	器形・技法等の特徴	備考
155図1 図版91	軟質陶器 焙烙	埋土 破片	口— 底— 高 3.1	夾雑鉍物少	並 酸化焰	体部外面に煤附着。体部に穿孔あり、焼成前。底面に細砂附着。口縁部の内・外面に横撫であり。	補修後も使用
155図2 図版91	瓦 字瓦	埋土 破片		夾雑鉍物微	並 外面に黒色燻	表面に銀瓦光沢あり、棧瓦の軒部かもしれない。顎部との接合は貼付け。	20世紀 地方製
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	特 徴 ・ そ の 他				
155図3 図版91	銭	埋土 完形	文字は「□□通宝」。厚さは薄い。				
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特 徴 ・ そ の 他		
155図4 図版91	砥石か	埋土 完形	長 5.6 幅 5.5 厚 2.0 重 37g	二ツ岳軽石	一面とその側部に研磨面あり、摩耗面は金属か。摩耗面に一方方向の擦痕あり。		

中江田ハツ繩遺跡32号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特徴・その他
157図1 図版91	鉄器 板状の鉄	埋土 小破あり	長 9.5+α 幅 4.6 厚 0.3 重 23.6g	図下方側が、刃様に薄くなる。下方側の一部を除き旧時の状態。小さなふくれはあるが精鍛か。左平面の右側は上方にわずかめくれる。

中江田ハツ繩遺跡39号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
158図1 図版91	磁器 碗	埋土 破片	白色	締	釉青白 染付青	外面に竹文と内面に圏線の染付あり。2か所の割口に焼継あり。	19・20世紀 補修

中江田ハツ繩遺跡45号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
158図2 図版91	土師器 土器 皿	埋土 破片	口— 底(6.0) 高—	夾雑鉍物微	並 酸化気味	内面に左回転の轆轤目あり。底面に糸切り痕あり。欠損の面に削り痕あり。	14～15世紀 転用

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	器形・技法等の特徴	備考
158図3 図版91	土師質 土器 皿	埋土 破片	口 10.0 底 6.0 高 2.5	夾雑物微	並 酸化気味	内面に轆轤左回転の轆轤目、底面に轆轤左回転の糸切り痕あり。欠損の面に削り痕あり、その口は研磨のようである。	15世紀 転用
158図4 図版91	土師質 土器 皿	埋土 破片	口 10.0 底 6.0 高 2.9	夾雑物微	並 酸化気味	底面に糸切り痕あり。内面に右回転の轆轤目あり。欠損の面に削り痕あり。	15世紀 転用
159図1 図版91	土師質 土器 皿	埋土 破片	口 — 底 (6.0) 高 —	夾雑物微	並 酸化気味	底面に左回転の糸切り痕あり。内面に轆轤目あり。欠損の面に削り痕あり。	13~15世紀 転用
159図2 図版91	土師質 土器 皿	埋土 破片	口 — 底 6.4 高 —	夾雑物微	並 酸化気味	内面に轆轤目あり。底面は轆轤左回転に見える糸切りであるが、やや不明瞭。欠損の面に削り痕あり。	14・15世紀 転用
159図3 図版91	灰釉陶器 碗	埋土 1/4	口 — 底 6.6 高 —	夾雑物微	締 胎土還元灰色 釉透明気味	内・外面に灰釉かかり、内面底は蛇目、外面下方は露胎となる。	17世紀
159図4 図版91	磁器 瓶 染付	埋土 1/3	口 — 底 (4.3) 高 —	わずか黒色粒子入る	締 釉乳濁 染付暗青	外面に染付施文と染付の圏線あり、内面に轆轤目あり、部分的に白磁釉かかる。神棚の瓶か。	伊万里系 18世紀
159図5 図版91	軟質陶器 鉢	埋土 破片		夾雑物粒微	並 暗褐色を呈し、 還元燻気味	内面は研磨、口縁の内・外面横撫で。体部外面下方寛削り。中位指圧痕。	小泉焼か 18・19世紀

中江田八ツ縄遺跡46号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	器形・技法等の特徴	備考
159図6 図版91	焼締陶器 播鉢	埋土 破片		夾雑物粒微	酸化焰	内面に8+α条の卸し目あり。外面に轆轤左回転の削り目あり。	西国 18・19世紀
159図7 図版91	磁器 青磁 香炉か	埋土 破片		白色	締 釉青緑	内面上方と外面に釉。内面の露胎との境目は鉄足状に酸化する。	伊万里系で 18世紀以後か
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)		石質	特徴・その他	
159図8 図版91	砥石 中砥	埋土 ほぼ完形	長 11.8 厚 3.8	幅 2.9 重 146g	砥沢石	側部に猫掻状の削り目跡あり、表・裏は研磨面。その先端は尖り刃付砥。欠損は旧時である。17世紀以降。中砥級。	

中江田八ツ縄遺跡47号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	器形・技法等の特徴	備考
160図1 図版91	軟質陶器 焙烙	埋土 破片	口 — 底 — 高 4.5	夾雑物微	並 酸化焰	内面と体部外面に撫であり。内面に内耳の剝落痕あり。底面に型押状の縮れあり。	小泉焼 19世紀か
160図2 図版91	軟質陶器 盤形	埋土 破片		夾雑物微	並 還元焰 器面黒~灰の燻	内面に研磨。体部外面上方に撫で痕あり。内面下方は、カセ多く、剝落あり。	小泉焼か 18・19世紀

中江田八ツ縄遺跡50号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
160図3 図版91	土師器 坏	埋土 1/3	口 (10.8) 底 — 高 —	白・黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部黄撫で、底部寛削りを施す。	底部外面黒斑あり

第7章 遺物観察表

中江田八ツ縄遺跡59号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
161図1 図版91	土師器 坏	埋土 2/3	口(11.1) 底— 高 3.4	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
161図2 図版91	土師器 坏	埋土 1/4	口(14.0) 底— 高—	黒色鉱物粒微	酸化焰 硬質	にぶい 橙	口縁部はわずかに外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
161図3 図版91	土師器 坏	埋土 破片	口(14.0) 底— 高—	細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	
162図1 図版92	須恵器 横瓶	埋土 破片	口— 底— 高—	白・黒色粒少 細砂粒少	還元焰 硬質	灰	外面平行叩き、内面青海波文を施す。	

中江田八ツ縄遺跡60号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
162図2 図版92	陶器 甕鉄釉	埋土 破片		夾雑物微	縮りあり		外面に鉄釉が塗られ、その中に同調の掛け流しが入る。下方端に露胎あり。内面露胎。	
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特徴・その他				
162図3	鉄器 釘	埋土 小欠あり	長 4.2+ α 厚 0.4	幅 0.5 重 2.9g	図左側が頭側であるが、頭部は旧時欠損。下方は調査時以降の欠損。錆ぶくれ少なく、錆色はやや黒ずむ。古代鉄様。			

中江田八ツ縄遺跡92号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
165図1 図版92	須恵器 坏	埋土 破片	口— 底 7.9 高(2.7)	白・黒色粒少	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。底部切り離し後篋調整。	

中江田八ツ縄遺跡94号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
166図1 図版92	須恵器 埴	埋土 破片	口— 底(10.0) 高—	細砂粒少	還元焰 やや硬質	灰白	轆轤整形(右回転)。付高台。底部回転篋削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡96号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
166図2 図版92	土師器 坏	埋土 1/3	口 11.5 底— 高 3.0	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は浅い丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡105号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	特徴・その他				
167図1 図版92	鉄器 00123		長 11.5 厚 9.6	幅 7.2 重 499.0g	形状の粘土・細砂の円錐形状の中に鉄滓塊が入り込む特異遺物。図左は側面で、その先端が重く、左側が軽い。銚か銚滓。平安後期以降。			

中江田ハツ繩遺跡145号土坑出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
168図1 図版92	土師器 坏	埋土 破片	口(13.8) 底— 高—	黒色鉍物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部は偏平な丸底で、口縁部は外傾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。体部に整形不明瞭な部分を残す。	内面漆付着
168図2 図版92	須恵器 甕	埋土 破片	口23.0 底—	細砂粒少	還元焰 硬質	灰	上端に段を有し、外反する。	

中江田ハツ繩遺跡22号土坑群出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成・色調	器形・技法等の特徴	備考
168図3 図版92	磁器 碗、染付	埋土 破片		白色	締 釉は透明と青	外面に丸文、内面に雷文を染付る。白磁釉は透明感があり、染付は青色味強い。	伊万里系か 19世紀
168図4 図版92	磁器 碗、白磁	埋土 1/4	口(13.6) 底4.4 高3.6	夾雑鉍物なし	締 釉は青白磁色	内面蛇目、底部外面周辺露胎となる。高台は削り出し。	18世紀初頭

中江田ハツ繩焼土遺構出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
169図1	尖底土器 底部	確認面 破片		繊維を含む	良好	橙	尖底土器の底部片。縄文LRが施文される。一部に羽状施文が見られる。	花積下層式
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)		石質		特徴・その他	
169図2 図版92	縄文石器 磨石	確認面 完形	長11.3 厚3.7	幅9.2 重534g	粗粒安山岩		偏平な円礫の片面に使用による磨耗面あり。一端に敲打痕。	
169図3 図版92	縄文石器 凹石	確認面 ほぼ完形	長11.2 厚4.5	幅9.2 重511g	粗粒安山岩		偏平な円礫の形面中央に凹み1個。裏面中央および側面の一部に敲打痕。片側破損。	

中江田ハツ繩遺跡1号円形周溝出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
172図1 図版92	土師器 坏	周溝内 1/2	口12.8 底— 高3.4	細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は直立する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
172図2 図版92	土師器 坏	周溝内 1/3	口(12.0) 底— 高—	黒色鉍物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は底部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
172図3 図版92	土師器 坏	周溝内 1/3	口(12.0) 底— 高5.0	黒色鉍物粒微 細砂粒多 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
172図4 図版92	土師器 坏	周溝内 破片	口— 底— 高—	黒色鉍物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	明赤褐	内面撫で後、放射状磨きを施す。	
172図5 図版92	土師器 鉢	周溝内 破片	口(24.0) 底— 高—	黒色鉍物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 黄橙	口縁部は内面に沈線が廻り、外反する。口縁部横撫で、体部篋削りを施す。	

中江田ハツ繩遺跡1号堅穴出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
174図1 図版92	土師器 坏	P2内 1/3	口(10.0) 底— 高—	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は底部との境に段を有し、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	内外面器面 荒れ
174図2 図版92	土師器 坏	P1内 ほぼ完形	口10.6 底— 高3.6	黒色鉍物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
174図3 図版92	土師器 坏	P1内 2/3	口(13.8) 底— 高4.3	黒色鉍物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	橙	底部は丸底で、口縁部は内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	外面器面磨減
174図4 図版92	土師器 坏	埋土 破片	口(11.0) 底— 高—	黒色鉍物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	淡黄	口縁部は体部との境に段を有、外反する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
174図5 図版92	土師器 坏	P2内 1/2	口12.6 底— 高4.4	黒色鉍物粒微 細砂粒少 赤褐色粒多	酸化焰 硬質	橙	底部は丸底で、口縁部はわずかに内湾する。口縁部横撫で、底部篋削りを施す。	
174図6 図版92	土師器 坏	P1内 破片	口(18.0) 底— 高—	白・黒色鉍物粒 微	酸化焰 硬質	橙	口縁部は直立する。口縁部は横撫で、底部篋削りを施す。	

中江田八ツ縄遺跡サク状遺構出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	石質	特徴・その他
177図1 図版92	石製品 砥石	埋土 ほぼ完形	長 11.1 幅 4.6 厚 3.1 重 189g	砥沢石	4面使用。一面に刃調整痕が見られる。

中江田八ツ縄遺跡遺構外出土遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・文様等の特徴	備考
180図1 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.5	繊維を少量含 む	良好	にぶい 黄	微隆線、細沈線による区画と太い集合沈線による文様が見られる。内面には条痕が見られる。	野島式
180図2 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.9	繊維を少量含 む	良好	にぶい 褐	内面・外面に条痕文を有す。	条痕文系
180図3 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7	繊維を少量含 む	良好	にぶい 褐	内面・外面に条痕文を有す。	条痕文系
180図4 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.0	繊維を少量含 む	良好	にぶい 褐	内面・外面に条痕文を有す。	条痕文系
180図5 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.8	繊維を少量含 む	良好	黄褐	内面・外面に条痕文を有す。	条痕文系
180図6 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7	繊維を少量含 む	良好	にぶい 黄橙	内面・外面に条痕文を有す。	条痕文系
180図7 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.3	繊維を多量に 含む	良好	橙	内面・外面に条痕文を有す。	条痕文系
180図8 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.9	繊維を多量に 含む	良好	黄褐	内面・外面に条痕文を有す。	条痕文系
180図9 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.9	繊維を多量に 含む	良好	にぶい 黄橙	内面・外面に条痕文を有する。	条痕文系
180図10 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.9	繊維を少量含 む	良好	橙	外面に条痕文を有す。	条痕文系
180図11 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.9	繊維を多量に 含む	良好	にぶい 黄橙	横方向に羽状縄文。	花積下層式
180図12 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.1	繊維を多量に 含む	良好	浅黄	縦方向の羽状縄文。	花積下層式
180図13 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.8	繊維を多量に 含む	良好	にぶい 黄橙	縄文施文。施文が重なった部分であろうか、複雑に見える。	花積下層式
180図14 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.9	繊維を多量に 含む	良好	にぶい 黄	L Rの斜縄文であるが、羽状構成をとるものと思われる。	花積下層式
180図15 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.6	繊維を多量に 含む	良好	にぶい 黄	L Rの斜縄文で、羽状構成をとるものと思われる。	花積下層式
180図16 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.0	繊維を多量に 含む	良好	にぶい 黄	横方向の羽状縄文。	花積下層式
180図17 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.9	繊維を多量に 含む	良好	にぶい 黄橙	縦方向の羽状縄文であるが、方向が乱れる。	花積下層式

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 文 様 等 の 特 徴	備 考
180図18 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.1	繊維を多量に 含む	良好	褐	縦方向の羽状縄文を施す。	花積下層式
180図19 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.2	繊維を多量に 含む	良好	褐	横方向の羽状縄文。	花積下層式
180図20 図版93	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.7	繊維を多量に 含む	良好	にぶい 黄橙	口縁部。端部が平坦をなし、LRの縄文が施文される。	花積下層式
180図21 図版93	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.1	繊維を多量に 含む	良好	にぶい 黄橙	口縁部。端部平坦で内斜し、口縁部やや肥厚する。施文は縦の羽状縄文。	花積下層式
180図22 図版93	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.7	繊維を多量に 含む	良好	黄橙	口縁部。端部がやや薄く仕上げられ、LR、RLで縦の羽状縄文。	花積下層式
181図23 図版93	深鉢 底部	遺構外 破片	厚 1.1	繊維を多量に 含む	良好	明褐	底部片、縦方向の羽状縄文。底部にも縄文が施文され、僅かな上げ底を呈す。	花積下層式
181図24 図版93	深鉢 底部	遺構外 破片	厚 1.1	繊維を多量に 含む	良好	黄褐	底部片。厚手で外面に篋状工具による整形痕が見られる。底部には網代痕。	花積下層式
181図25 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7	石英粒・雲母 を多く含む	良好	褐	第181図-25~30は同一個体。半截竹管による平行線で木の葉文、三角文を描き、その区画外の縄文をすり消している。	諸磯a式
181図26 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7	石英粒・雲母 を多く含む	良好	にぶい 黄橙	地にRLの縄文、半截竹管による平行線を描き、その中に連続爪形文を施す。	諸磯a式
181図27 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.8	石英粒・雲母 を多く含む	良好	褐	半截竹管による平行線で木の葉文を描き、その区画外の縄文をすり消している。	諸磯a式
181図28 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.8	石英粒・雲母 を多く含む	良好	褐	平行線で三角文を描き、その中の縄文をすり消している。	諸磯a式
181図29 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7	石英粒・雲母 を多く含む	良好	褐	半截竹管による2段の連続爪形文。太めの刻みを持つ隆線、その下部にRLの縄文。	諸磯a式
181図30 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7	石英粒・雲母 を多く含む	良好	褐	RLの縄文を施文後、横方向の連続爪形文。	諸磯a式
181図31 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7		良好	にぶい 赤褐	地にRLの縄文施文後、平行線で縦・横に区画し、中を斜め方向の集合平行線で埋める。	諸磯a式
181図32 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7		良好	褐	半截竹管による入り組み文を描き、中をRLの縄文、区画外は縄文をすり消す。	諸磯a式
181図33 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.0	片岩粒を多く 含む	良好	浅黄	33・34・35は同一個体。文様帯を画すやや太く刻み目を持つ隆線の両側に連続爪形文が多段施文される。	諸磯a式
181図34 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7	片岩粒を多く 含む	良好	にぶい 黄	半截竹管による連続爪形文で三角形文を描き、中に縄文を充填、また円形刺突文が見られる。	諸磯a式
181図35 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.6	片岩粒を多く 含む	良好	浅黄	文様帯を画すやや太く、刻み目を持つ隆線の両側に複数の連続爪形文、隆線下に円形竹管文が見られる。	諸磯a式
181図36 図版93	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.0	黒色粒・白色 粒	良好	橙	波状口縁。口縁部交互三角区画配列。隆線と小型の円環状突起による区画。三角連続刺突文が縁取り、三叉文が丁寧に印刻される。	勝板1式
181図37 図版93	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.0	黒色粒・高温 石英	良好	橙	平縁か。小さく外傾する口縁部。口唇部に沿って幅広のキャタピラ文・三角連続刺突文、横位蛇行三角連続刺突文が施される。	勝板1式
181図38 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.2	粗 白色粒	良好	明赤褐	横位隆帯に半割状の連続爪形文。波状沈線文と小型のキャタピラ文が平行する。	勝板1式
181図39 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.9	粗 白色粒	良好	橙	横位隆帯と逆d字状のモチーフ。幅広のキャタピラ文が沿う。	勝板1式か
181図40 図版93	深鉢 体部上	遺構外 破片	厚 1.1	粗 白色粒	良好	明赤褐	頸部無文部以下、刻みを付す横位隆帯で多段に分帯される。三角区画文か。三角連続刺突文を側線・充填要素として施す。	勝板1式
181図41 図版93	深鉢 体部上	遺構外 破片	厚 1.1	粗 白色粒	良好	明赤褐	あるいは40と同一個体か。頸部無文部以下の破片。三角連続刺突文は丁寧な施文である。	勝板1式
181図42 図版93	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.2	粗 片岩・白 色粒	良好	橙	口縁部三角区画文。隆帯による主描線でキャタピラ文が沿う。三角連続刺突文も横位に施す。	勝板1式か
181図43 図版93	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.0	粗 雲母 白 色粒	良好	橙	渦巻状小突起を中核に3条の隆線が派生する。側線として小型の角押文が施される。	勝板1式併 行

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・文様等の特徴	備考
181図44 図版93	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.0	粗 雲母 石 英 白色粒	良好	にぶい 赤褐	緩山形状の波状口縁。波頂部に刻みを付し、剥落するがX字状の小突起が付される。側の線として1条の結節沈線が施される。未貫孔の補収孔。	阿玉台I b式
181図45 図版93	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.0	粗 雲母 石 英 白色粒	良好	橙	波底部破片。2条一組の結節沈線が口縁部と頸部隆線に沿う。口唇部端部は面を持つ。	阿玉台II式
181図46 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.0	粗 石英 少 量の雲母	良好	明赤褐	波底部破片。隆線によるX字状の区画。区画内は無文。	阿玉台II式
181図47 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.0	粗 少量の雲 母 白色粒	軟質	浅黄橙	平縁か。隆線によるX字状の区画。区画内は無文ながら丁寧な撫でられている。	阿玉台II式
182図48 ・49 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.1	粗 雲母 石 英 白色粒	良好	にぶい 橙	大波状口縁下の突起意匠。波頂部より垂下派生した隆線は下端の双環状突起部で連鎖状突起となる。波底部は幅狭の楕円区画を配し、双環状突起より派生する隆線と連結する。側線として2条一組の三角連続刺突文が施される。	阿玉台II式
182図50 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.4	粗 雲母 石 英 白色粒	良好	にぶい 黄橙	扇状把手。把手外縁には強い刻みが施され、把手外には横位刻み目列が連続する。	阿玉台II式
182図51 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.1	粗 少量の雲 母 石英	良好	にぶい 赤褐	平縁か。幅狭の口縁部文様帯は楕円に画され、結節沈線と刻み目列が施される。体部も口縁部に対応し隆線が波状懸垂する。	阿玉台II式
182図52 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.8	粗 雲母 石 英	良好	橙	平縁か。口縁部に沿って、横位刻み目列が施される。	阿玉台II式
182図53 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.9	粗 雲母 石 英	良好	橙	突起下の破片か。垂下降線が付され、口唇部に幅広の刻み目列を施す。	阿玉台II式
182図54 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.9	粗 雲母 白 色粒	良好	橙	波状口縁波頂部。欠損するが突起が付される。平行沈線、波状沈線が横位に施される。	阿玉台II式
182図55 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.9	粗 白色粒 少量の雲母	良好	橙	平縁か。口縁下に横位隆線が付される。3条一組の条線状沈線が横位・波状に施される。	阿玉台II式
182図56 図版94	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.8	粗 雲母 石 英 白色粒	良好	橙	横位隆線を挟み上下が対応するように上区画文とY字状懸垂文が配される。条線状沈線施す。	阿玉台II式
182図57 図版94	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.8	粗 石英 少 量の雲母	良好	橙	隆線による懸垂文。2条一組の沈線が数条沿い中位に波状沈線が横位に施される。	阿玉台II式
182図58 図版94	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.9	粗 白色粒 少量の雲母	良好	にぶい 橙	横位刻み目列と結節沈線による波状文。	阿玉台II式
182図59 図版94	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.0	粗 少量の雲 母	良好	にぶい 橙	2条一組の結節沈線が波状に施文される。	阿玉台II式
182図60 図版94	深鉢 体部上	遺構外 破片	厚 0.9	粗 石英 少 量の雲母	良好	にぶい 橙	隆線によるY字状懸垂文。横位刻み目列を多段に施す。結節沈線も看取される。	阿玉台II式
182図61 図版94	深鉢 体部上	遺構外 破片	厚 1.1	粗 白色粒 少量の雲母	良好	橙	隆線によるY字状懸垂文上端部。	阿玉台II式
182図62 図版94	深鉢 体部中	遺構外 破片	厚 1.1	粗 少量の白 色粒	良好	橙	押圧を加える垂下降線による懸垂文構成。	阿玉台II式
182図63 図版94	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.9	粗 雲母 石 英 白色粒	良好	橙	横位隆線が付される。以下に強い撫でが看取され、突起貼付が想起される。	阿玉台II式
182図64 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.9	粗 白色粒 少量の雲母	良好	橙	口縁部に平行して横位隆線が付され、刻みが施される。	阿玉台II式
182図65 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.8	粗 白色粒 少量の雲母	良好	橙	平縁。小突起が付され、口唇部に沈線が巡る。	阿玉台式
183図66 図版95	深鉢 口縁部	遺構外 破片	口(23.4)	粗 少量の雲 母・白色粒	良好	にぶい 黄橙	平縁。無文。口縁部肥厚し顕著な横位撫でを施す。	阿玉台式
183図67 図版95	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.3	粗 多量の石 英 雲母	良好	橙	平縁。僅かに内彎する口縁部。口唇端部に刻みを施す。他は無文。	阿玉台式
183図68 図版95	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.3	粗 石英 白 色粒	良好	にぶい 黄橙	平縁。内彎する口縁部。無文。	阿玉台式か
183図69 図版95	深鉢 底部	遺構外 破片	底(12.0)	粗 雲母 石 英	良好	明黄褐	直立気味の立ち上がり。比較的薄手の器厚。	阿玉台式
183図70 図版95	深鉢 底部	遺構外 破片	底(11.0)	粗 雲母 石 英	良好	橙	開き気味の立ち上がり。底面に僅かに網代痕が看取されるが判然としない。	阿玉台式

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・文様等の特徴	備考
183図71 図版95	深鉢 底部	遺構外 破片	底 10.0	粗 石英	良好	橙	僅かに開き気味の立ち上がり。やや上げ底。	阿玉台式
183図72 図版96	浅鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.0	粗 雲母 石 英 白色粒	良好	灰黄褐	屈曲する口縁部。口縁部文様帯はV字状小突起によって画され2条一組の結節沈線が沿う。	阿玉台Ⅱ式
183図73 図版95	浅鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.1	粗 石英 白 色粒	良好	橙	赤色塗彩僅かに残る。外反する口縁部。内縁は2段設けられる。無文。	阿玉台式
183図74 図版96	浅鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.8	粗 雲母 白 英 白色粒	良好	橙	緩やかな波状口縁。無文。	阿玉台式
183図75 図版96	浅鉢 底部	遺構外 破片	底(11.4)	粗 雲母 白 英 白色粒	良好	橙	強く開き立ち上がる。無文。内面研磨。	阿玉台式
183図76 ～86 図版96	深鉢 口縁～ 体部	遺構外 破片	厚 1.1	粗 大粒の石 英 白色粒を 多量に含む	良好	にぶい 橙	口縁部に横位結節沈線を単独施文で2条施し、以下に波状沈線(結節沈線)を平行させる。体部文様は明瞭ではないが、垂下隆線が看取される86のように懸垂構成と思われる。懸垂構成は縦位波状沈線文でも保証されているが、81・82・85のように孤状・Y字状を描く沈線文も見られ、連結した構成が考えられよう。地文の縄文は縦位LRを施す。76～86は同一個体も含まれ、当地域の該期土器群の一樣相を呈す。	東関東系 「諏訪タイプ」
184図87 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.2	細	良好	橙	肥厚する口縁部。凹線による楕円状区画か。横位LR縄文を施す。	加曾利EⅢ式
184図88 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.9	細 白色粒	良好	にぶい 黄橙	口縁部内彎。口縁下に横位隆帯を付し両脇を撫でる。斜位の沈線も施す。縄文は縦位LR。	加曾利EⅢ式
184図89 図版94	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 1.5	細 少量の砂 粒	良好	にぶい 黄橙	口縁部肥厚し、幅広の凹線を施す。縄文は横位LR。	加曾利EⅢ式
184図90 図版95	注口? 口縁部	遺構外 破片	厚 1.0	細 石英 白 色粒 黒色粒	良好	橙	弧形注口土器か。口縁下に隆線が沿い、2条の隆線が弧状を描く。	加曾利EⅢ式
184図91 図版95	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.6	細 白色粒	良好	橙	内彎する口縁部。平行する凹線が弧を描く。縄文は口縁部横位RL、体部縦位RLの充填施文。	加曾利EⅣ式
184図92 図版95	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.6	細 白色粒	良好	にぶい 赤褐	内彎する口縁部。口縁下に1条の凹線が巡り、以下平行凹線が弧を描く。縄文は縦位RL充填。	加曾利EⅣ式
184図93 図版95	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7	細 白色粒 少量の石英	良好	明黄橙	2条の凹線が垂下する懸垂文構成。縄文は縦位RL充填施文。	加曾利EⅢ式
184図94 図版95	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.1	細 白色粒 石英	良好	明黄褐	2条の凹線による懸垂文構成。凹線間はやや幅広。縄文は縦位RL充填施文。	加曾利EⅢ式
184図95 図版95	深鉢 口縁下	遺構外 破片	厚 1.0	粗 白色粒	良好	橙	口縁下破片。隆帯両脇を幅広の凹線が撫でる。縄文は横位RL充填施文。	加曾利EⅢ式
184図96 図版95	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.2	粗 白色粒	良好	黄橙	弧状の隆帯と顕著な磨消し。隆帯脇を撫で、縦位RL縄文を充填する。	加曾利EⅢ式
184図97 図版95	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7	細 白色粒	良好	明黄褐	平行する2条の細隆線が弧を描く。隆線間は撫でられる。縄文は縦位・斜位RL充填施文。	加曾利EⅣ式
184図98 図版95	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.5	粗 白色粒 石英	良好	にぶい 黄橙	平行する2条の細隆線が弧を描く。隆線間・両脇は撫でられる。縄文は縦位RLの充填施文。	加曾利EⅣ式
184図99 図版95	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.2	粗 白色粒 石英	良好	明赤褐	垂下する凹線によって分割し、磨消し部と縄文施文部が交互する。縦位RL充填施文。	
184図100 図版95	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.8	粗 砂礫 石 英	軟質	橙	内彎する口縁部。櫛歯状条線が縦位に充填施文される。器厚薄手。	加曾利EⅣ式
184図101 図版95	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.8	細 黒色粒 白色粒 石英	良好	橙	1条の沈線が巡り、以下6・7条単位の櫛歯状条線が縦位充填施文される。	加曾利EⅣ式
184図102 図版95	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 1.0	細 黒色粒 白色粒	良好	橙	6・7本単位の櫛歯状条線を縦位に充填施文する。直線的な垂下と波状垂下2者が見られる。	加曾利EⅣ式
184図103 図版95	浅鉢? 脚部	遺構外 破片	厚 1.0	粗 黒色粒 白色粒	良好	にぶい 黄橙	台付き浅鉢か。体部は大きく開き内面研磨する。脚部内面は折り返される。器面磨滅著しい。	中期

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・文様等の特徴	備考
184図104 図版95	? 脚部	遺構外 破片	厚 1.3	細 少量の白 色粒	良好	橙	残存部少なく判然としない。脚部外面は無文輪積痕明瞭に残る。	中期か
184図105 図版95	深鉢 底部	遺構外 破片	底 5.4	粗 白色粒 石英	良好	橙	小型の底部。端部突出し、比較的強く立ち上がる。内底面形状丸底。外面は平滑。	中期
184図106 図版95	深鉢 底部	遺構外 破片	底 6.6	細 少量の石 英	軟質	にぶい 黄橙	緩やかに立ち上がる。比較的薄手の器厚。底面に木葉痕残る。	晩期か
184図107 図版95	深鉢 口縁部	遺構外 破片	厚 0.7	緻密 白色粒 やや砂質	良好	浅黄橙	緩やかな波状口縁。口縁下に沈線を平行し、縦位・横位RL縄文を施す。口縁内面に段を持つ。	称名寺I式
184図108 ~113 図版95	深鉢 体部	遺構外 破片	厚 0.7	緻密 白色粒 やや砂質	良好	浅黄橙	沈線による施文部分割。無文部・縄文施文部・刺突文施文部が配される。縄文は縦位RL。全体のモチーフは判然としないが、同一個体であろう。107も含む。	称名寺I式
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm)		石質	特 徴 ・ そ の 他		
185図114 図版96	縄文石器 有舌尖頭器	遺構外 ほぼ完形	長 3.5 厚 0.5	幅 1.7 重 2.5g	チャート	両面全面を丁寧な剥離によって調整。両側をえぐるようにして短い舌部を作出。先端欠損。		
185図115 図版96	縄文石器 石鏃	遺構外 完形	長 2.0 厚 0.3	幅 2.0 重 0.9g	黒色安山岩	凹基無茎鏃。幅に比べ長さ短い。		
185図116 図版96	縄文石器 石鏃	遺構外 完形	長 2.9 厚 0.4	幅 1.5 重 1.4g	チャート	凹基無茎鏃。両面全面を丁寧な押圧剥離によって調整。やや細身。		
185図117 図版96	縄文石器 石鏃	遺構外 完形	長 2.4 厚 0.4	幅 1.2 重 1.1g	チャート	凹基無茎鏃。両面全面を丁寧な押圧剥離によって調整。やや細身で厚手。		
185図118 図版96	縄文石器 石鏃	遺構外 完形	長 2.6 厚 0.5	幅 1.8 重 1.8g	チャート	基部がわずかに内湾する凹基無茎鏃。両面全面丁寧な押圧剥離により調整。		
185図119 図版96	縄文石器 スクレイパー	遺構外 完形	長 6.3 厚 1.3	幅 5.1 重 46g	黒色頁岩	剥片を素材とし、周辺両面に不規則な調整加える。		
185図120 図版96	縄文石器 スクレイパー	遺構外 完形	長 6.6 厚 1.5	幅 5.9 重 63g	黒色頁色	素材剥片の両側に調整加え刃部作出。一方は凸状他方は凹状に形作られる。		
185図121 図版96	縄文石器 スクレイパー	遺構外 完形	長 5.3 厚 3.5	幅 9.2 重 167g	黒色頁色	厚手の素材の主に片面に調整加える。裏面の先端・左側縁に刃部作出。石核素材か。		
185図122 図版96	縄文石器 スクレイパー	遺構外 完形	長 6.7 厚 1.3	幅 4.9 重 36g	黒色頁色	素材剥片の腹面に調整加える。右側はやや大きな剥離加え鋸歯状の刃部作出。左側の調整は不規則で小さい。		
185図123 図版96	縄文石器 エンドスクレイパー	遺構外 完形	長 7.2 厚 1.3	幅 5.5 重 70g	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、背面周辺に調整加える。基部欠損。		
185図124 図版96	縄文石器 エンドスクレイパー	遺構外 完形	長 8.0 厚 2.3	幅 4.5 重 80g	黒色頁色	横長の剥片を素材とし、腹面の先端に調整加え刃部作出。		
186図125 図版96	縄文石器 コア	遺構外 完形	長 2.8 厚 1.7	幅 3.5 重 12g	チャート	やや厚手の剥片の両面で、両極打法によって小型の剥片剥離。上半欠損。		
186図126 図版96	縄文石器 コア	遺構外 完形	長 2.8 厚 2.7	幅 5.6 重 93g	黒色頁岩	厚手の剥片を素材とする。主に自然面を打面とし、側面において小型の剥片を剥離。		
186図127 図版96	縄文石器 コア	遺構外 完形	長 10.2 厚 3.8	幅 7.1 重 341g	黒色頁岩	素材の主に片面において、素材の周辺を回るように打面を90°移動させながら剥片剥離。裏側には大きく自然面残す。		
186図128 図版96	縄文石器 コア	遺構外 完形	長 10.3 厚 2.4	幅 8.6 重 234g	黒色頁岩	厚手の剥片素材か。自然面を打面とし、求心状に小型の剥片を剥離。		
186図129 図版96	縄文石器 打製石斧	遺構外 完形	長 10.5 厚 1.8	幅 5.2 重 116g	黒色頁岩	剥片を素材とし、両面の周辺に加工し整形。刃部に比べ、基部はやや細く仕上げる。刃部に使用による弱い磨耗見られる。		
186図130 図版96	縄文石器 打製石斧	遺構外 ほぼ完形	長 10.2 厚 1.6	幅 5.2 重 98g	黒色頁岩	両面の周辺に調整加える。基部に比べ刃部が広がるバチ形。風化による表面の劣化著しい。		
186図131 図版97	縄文石器 打製石斧	遺構外 ほぼ完形	長 8.5 厚 2.8	幅 5.3 重 133g	黒色頁岩	厚手の剥片素材とし、腹面の全周に調整加える。調整は急加度で、刃部は片刃状になっている。		
186図132 図版97	縄文石器 打製石斧	遺構外 ほぼ完形	長 7.2 厚 2.4	幅 4.4 重 70g	黒色頁岩	両面のほぼ全面に調整およぶが、一部に自然面残す。刃部欠損。		
187図133 図版97	縄文石器 磨石	遺構外 ほぼ完形	長 9.3 厚 3.9	幅 8.3 重 409g	粗粒安山岩	偏平な円礫の両面による磨耗面あり。周辺には、一部敲打痕。上部を欠損。		
187図134 図版97	縄文石器 磨石	遺構外 完形	長 8.8 厚 2.3	幅 7.5 重 233g	粗粒安山岩	偏平な円礫の片面に使用による磨耗面。下端の側面に一部敲打痕。		
187図135 図版97	縄文石器 石皿	35住床面 1/2	長(22.6) 厚 7.0	幅 23.6 重4,390g	粗粒安山岩	表面皿状にえぐれる。表裏に凹み見られるが、裏面により多い。		

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	目 度 (cm)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
188図136 図版97	弥生 土器 甕	埋土 肩破片	厚 0.6	赤褐色と白色の 粗粒が目立つ	硬質	にぶい 黄褐	振幅の小さい櫛描波状文を多段に重ねる。内面は篋状工具による撫で。	樽式と思われる
188図137 図版97	土師器 坏	埋土 破片	口 12.0 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	褐	口縁部は外傾する。口縁部横撫で、体部篋削り、内面撫で後、放射状篋磨きを施す。	
188図138 図版97	土師器 坏	S 3 III層 2/3	口 11.8 底 5.7 高 3.8	細砂粒少 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	浅黄橙	底部は平底で、体部は張りを持たず、口縁部は外反する。口縁部横撫で、体部と底部は篋削りを施す。口縁～体部指頭圧痕顕著。	
188図139 図版97	土師器 坏	C-10 破片	口 - 底 - 高 -	黒色鉱物粒微 赤褐色粒少	酸化焰 やや硬質	橙	内面撫で後、放射状暗文を施す。	
188図140 図版97	土製品 土錘	埋土 1/2	長(3.0) 径 0.9 孔 0.3	細砂粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	一端部欠損。小形。	
188図141 図版97	土製品 土錘	埋土 1/3	長(3.3) 径 1.3 孔 0.3	黒色鉱物粒微 白色細粒少 赤褐色粒少	酸化焰	灰褐	両端部欠損。	
188図142 図版97	土製品 土錘	埋土 2/3	長(2.6) 径 0.8 孔 0.3	赤褐色粒微	酸化焰	浅黄	両端部欠損。	
188図143 図版97	土製品 土錘	埋土 完形	長 3.2 径 1.5 孔 0.4	細砂粒少	酸化焰	にぶい 橙	径に比較して長さが短く、両端が切り落とされたような形を呈している。	
188図144 図版97	土製品 土錘	埋土 2/3	長(2.8) 径 1.1 孔 0.3	細砂粒少 白色細粒少	酸化焰	にぶい 橙	両端部欠損。	
188図145 図版97	土製品 土錘	攪乱 1/2	長(4.7) 径 1.3 孔 0.3	黒色鉱物粒微 白色細粒少	酸化焰	浅黄	両端部欠損。	
188図146 図版97	土製品 土錘	埋土 3/4	長(4.2) 径 1.0 孔 0.2	細砂粒少	酸化焰	橙	端部は押されて断面が方形状を呈している。小形。	
188図147 図版97	土製品 土錘	埋土 2/3	長(3.9) 径 1.2 孔 0.4	黒色鉱物粒微 白色細粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	端部面取りを施す。直線的な形を呈す。	
188図148 図版97	土製品 土錘	G-16 ほぼ完形	長 4.2 径 1.1 孔 0.5	細砂粒少	酸化焰	浅黄橙	直線的で、孔径が大きい。	
188図149 図版97	土製品 土錘	2 D-8 G 1/2	長 - 径 1.2 孔 0.3	細砂粒多	酸化焰	浅黄橙	両端部欠損。	
188図150 図版97	土製品 土錘	表採 2/3	長 6.2 径 1.6 孔 0.4	白・黒色鉱物粒 微 白色細粒少	酸化焰	にぶい 黄橙	端部欠損。紡錘形を呈し、大形である。	
188図151 図版97	土製品 土錘	埋土 1/2	長(5.3) 径 1.5 孔 0.4	白・黒色鉱物粒 微 細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰	褐灰	端部未調整。大形で細長い紡錘形を呈する。	
188図152 図版97	土製品 土錘	R-4 G 攪乱 完形	長 5.9 径 1.1 孔 0.4	黒色鉱物粒微 白色細粒少	酸化焰	浅黄橙	両端部未調整。	
188図153 図版97	土製品 土錘	H-12 G ほぼ完形	長 5.0 径 1.1 孔 0.3	細砂粒少 赤褐色粒微	酸化焰	にぶい 黄橙	端部は未調整。直線的な形を呈する。	
188図154 図版97	土製品 土錘	C-7 2/3	長 3.9 径 1.2 孔 0.4	細砂粒多	酸化焰	淡黄	一端部欠損。端部未調整。	

第7章 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度 目 (cm)	胎 土	焼 成	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
189図155 図版97	土師質 土器 皿	遺構外 破片	口 - 底(5.2) 高 -	夾雑鉱物微	軟質 酸化焰	二次被熱のためか全体に淡い桃色がかかる。底面は、轆轤左回転の糸切り痕あり。	13・14世紀か
189図156 図版97	土師質 土器 皿	遺構外 1/3	口(7.0) 底(4.4) 高 1.9	夾雑物微	軟質 酸化焰、被熱	桃色がかかる橙色と、灰黄色部とに被熱差あり。体部外面に轆轤右回転の篋削り目あり。底面糸切り。	13世紀か または14世紀
189図157 図版97	土師質 土器 皿	遺構外 2/3	口 9.5 底 6.0 高 1.8	夾雑鉱物微	並 酸化気味	内面に轆轤左回転の轆轤目、底面に轆轤左回転の糸切り痕あり。	11世紀前半か
189図158 図版97	陶器 天目碗	遺構外 破片		陶胎	締	内面・外面上方に黒褐釉を施す。轆轤左回転の篋削り目が露胎部に見える。	17世紀
189図159 図版97	磁器 碗、青磁	遺構外 破片		淡灰色	締	釉調は、オリーブ色を呈し発色すぐれず。内面に劃文条線らしき刻文あり。	中国龍泉系 13世紀頃
189図160 図版97	磁器 碗、青磁	遺構外 破片		淡灰色	締	外面に鐏手の蓮弁文あり、内・外面に青磁釉かかる。釉は青磁色を呈するが、薄い。	龍泉窯系 13世紀
189図161 図版97	磁器 碗、青磁	遺構外 破片		淡灰色	締	高台外面底を露胎とし、内・外面に青磁釉かかる。釉はやや暗い暗緑色を呈するが施釉は厚く、貫入あり。	龍泉窯系 13世紀
189図162 図版97	軟質陶器 火鉢か	遺構外 破片		夾雑鉱物粒微	酸化気味	焙烙の底面で、底外面に型押し状の凹凸あり。内面撫で。	東毛製か 19・20世紀
189図163 図版97	軟質陶器 盤形	遺構外 破片		夾雑鉱物微	並	内面は研磨、外面上位に撫で、中位に指圧痕、下方に轆轤左回転の削り目。底面に石目状の凹凸があり型痕か。	18・19世紀か
挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	材 質	特 徴 ・ そ の 他			備 考
189図164 図版97	煙筒	遺構外 破片	銅主材	雁首と口端部を失なう。旧時欠損。鑢継の色調差は、別個体を合わせた取り合わせたか。			18・19世紀
189図165 図版97	煙筒 雁首部	遺構外 1/2	銅主材	雁首部を失う。鑢継部ほとんど見えず。			17・18世紀
189図166 図版97	鉄製 錠	遺構外 3/4	鉄製	錆化は、層状の剝落が発達し、和鉄製か。錠穴は錆化のため、形状やや不明瞭。			19世紀以降か
189図167 図版97	銭	遺構外 完形	銅主材	中国。「正隆元宝」。金正隆3年(1158)初鋳。			

第 8 章 中江田八ツ縄遺跡の科学分析

- 第 1 節 中江田八ツ縄遺跡の自然科学分析
 - I 中江田八ツ縄遺跡 1 区の自然科学分析
 - II 中江田八ツ縄遺跡 3 区のテフラ分析
 - III 中江田八ツ縄遺跡 3 区の植物珪酸体分析

- 第 2 節 中江田八ツ縄遺跡出土の馬骨

- 第 3 節 中江田八ツ縄遺跡出土の鉄製品

中江田八ツ縄遺跡の自然科学分析

古環境研究所

I 中江田八ツ縄遺跡1区の自然科学分析

1. はじめに

中江田八ツ縄遺跡のうち台地部に相当する1区の発掘調査では、住居址や土壌などの遺構が検出された。ここでは良好な火山灰土の断面である2C-4G深掘トレンチと、代表的な土壌である45号覆土の土層についての記載を行うと共に、これらの土層について火山ガラス比分析およびテフラ検出分析を合わせて行い、示標テフラの層位を明らかにして、土層の堆積年代と土壌の構築年代に関する資料を収集することになった。またすでに調査担当者により採取されていた37号土壌覆土試料についてもテフラ検出分析を行うことになった。

2. 土層の層序

(1) 中江田八ツ縄遺跡1区2C-4G深掘トレンチ

ここでは、下位より礫混じり灰色砂質シルト層（層厚6cm以上、礫の最大径21mm）、黄褐色シルト層（層厚4cm）、砂混じり黄灰色シルト層（層厚7cm）、黄色粘質土（層厚10cm）、暗褐色粘質土（層厚13cm）、黄灰色粘質土（層厚11cm）、褐灰色土（層厚17cm）、黄橙色および黒色の粗粒火山灰混じり暗灰色砂質土（層厚15cm）、褐色土（層厚16cm）、白色細粒軽石混じり褐色土（層厚12cm、軽石の最大径2mm）、褐色土（層厚17cm）、黄色軽石に富む褐色土（層厚6cm、軽石の最大径3mm）、褐色土（層厚27cm、縄文時代早・前・中期遺物包含層）、黒褐色土（層厚13cm）、褐色粗粒火山灰混じり褐色砂質土（層厚29cm）の連続が認められた（図1）。

これらのうち暗灰色土に含まれる粗粒火山灰は、その特徴から約1.8-2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻褐色軽石群（As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1994未公表資料）に由来するものと考えられる。またその上位の褐色土に含まれる白色軽石は、その層位や岩相から約1.7万年前に浅間一大窪沢第1軽石（As-OP1, 約1.7万年前, 中沢ほか, 1984, 早田, 未公表資料）に由来する可能性が考えられる。さらにいわゆるローム層最上部に濃集する黄色軽石は、その層位や岩相から約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石（As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992）に由来するものと考えられる。

(2) 中江田八ツ縄遺跡1区45号土壌

45号土壌の覆土は、下位より黒褐色土（層厚5cm）、白色細粒軽石層（層厚3cm）、白色軽石に富む褐色砂質土（層厚6cm）から構成されている。これらのうち褐色砂質土の上位からは、陶磁器が検出されている。（図2）

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と方法

関東地方北西部においては、ローム層上部のいわゆる暗色帯の上位で、As-BP Groupの下位に、透明のバブル型火山ガラスで特徴づけられる始良Tn火山灰（AT, 約2.1-2.5万年前, 町田・新井, 1976, 1992）の降灰層準のあることが知られている。そこで、本遺跡2C-4G深掘トレンチにおいてもいわゆる暗色帯に相当する

と考えられる部分とその上位付近の土層を対象に火山ガラス比分析を行い、ATの降灰層準を求めることを試みた。試料は基本的に5 cmごとに採取された試料のうち、5 cmおきの5点である。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80° Cで恒温乾燥。
- 4) 1/4-1/8mmの粒子。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別比率を求める。

(2) 分析結果

分析結果をダイヤグラムにして図3に、その内訳を表1に示す。それによれば、それほど顕著ではないものの、試料番号8および6に透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスの出現ピークが認められた。試料番号8でのバブル型ガラスの割合は6.8%である。その下位の試料からバブル型ガラスが検出されていないことから、試料番号8付近に透明なバブル型ガラスの層位があるものと考えられる。この透明なバブル型ガラスは、その層位と火山ガラスの特徴からATに由来するものと考えられる。つまり本地点においてATの降灰層準は、試料番号8付近にあると推定される。

4. テフラ検出分析

(1) 分析試料と方法

示標テフラとの同定を行うために、45号土壌覆土中で認められた軽石層（試料番号1）と発掘調査担当者により採取された37号土壌覆土5層中の砂について、テフラ検出分析を行うことになった。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80° Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

分析結果を表2に示す。45号土壌覆土中で認められた軽石層（試料番号1）には、比較的良好に発泡した白色軽石が多く含まれている。軽石の最大径は3.1mmである。斑晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A）に由来すると考えられる。したがって産状を合わせて考えると、軽石層はAs-Aに同定される。このように45号土壌覆土中にAs-Aが認められたことから、その構築年代は1783（天明3）年以前と推定される。

また37号土壌覆土5層中の砂には、比較的良好に発泡した淡褐色軽石が多く含まれている。軽石の最大径は5.9mmである。斑晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B, 新井, 1979）に由来すると考えられる。詳しい産状については不明であるが、この砂についてはAs-Bまたはその再堆積層の可能性が考えられる。

なお1区2C-4G深掘トレンチの土層のうち、最上部の土層中に多く認められる粗粒火山灰も、その岩相や産状

などからAs-Bに由来するものと考えられる。

5. 小結

中江田ハツ縄遺跡1区において地質調査、火山ガラス比分析、テフラ検出分析を合わせて行った。その結果、台地部の基本的な土層断面である2C-4グリッド深掘トレンチのローム層中に、下位より始良Tn火山灰(AT, 約2.1-2.5万年前)、浅間-板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.8-2.1万年前)、浅間-大窪沢第1軽石(As-OP1, 約1.7万年前)、浅間-板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3-1.4万年前)に各々由来するテフラ粒子の濃集層準が検出された。さらに45号土壌覆土中には浅間A軽石(As-A, 1783年)、また37号土壌覆土中には浅間Bテフラ(As-B, 1108年)のテフラ粒子が認められた。この結果、45号土壌の構築年代は1783(天明3)年を遡ると推定された。

参考文献

新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 大島 治(1985) 榛名火山. 日本の地質関東地方編集委員会編「関東地方」, 222-224.
 坂口 一(1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 鈴木正男(1976) 過去をさぐる科学. 講談社, 234p.
 早田 勉(1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉(1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.
 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984) 浅間火山, 黒斑～前掛期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
 町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義. 科学, 46, p.339-347.
 町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

表1 中江田ハツ縄遺跡2C-4グリッドの火山ガラス比分析結果

試料	bw	md	pm	その他	合計
4	3	0	2	245	250
6	15	0	2	233	250
8	17	3	1	229	250
10	0	0	1	249	250
12	0	1	3	246	250

数字は粒子数. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型.

表2 中江田ハツ縄遺跡1区のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
45号土壌	1	+++	白	3.1
37号土壌	5層	+++	淡褐	5.9

++++:とくに多い, +++:多い, ++:中程度, +:少ない, -:認められない, 最大径の単位は, mm.

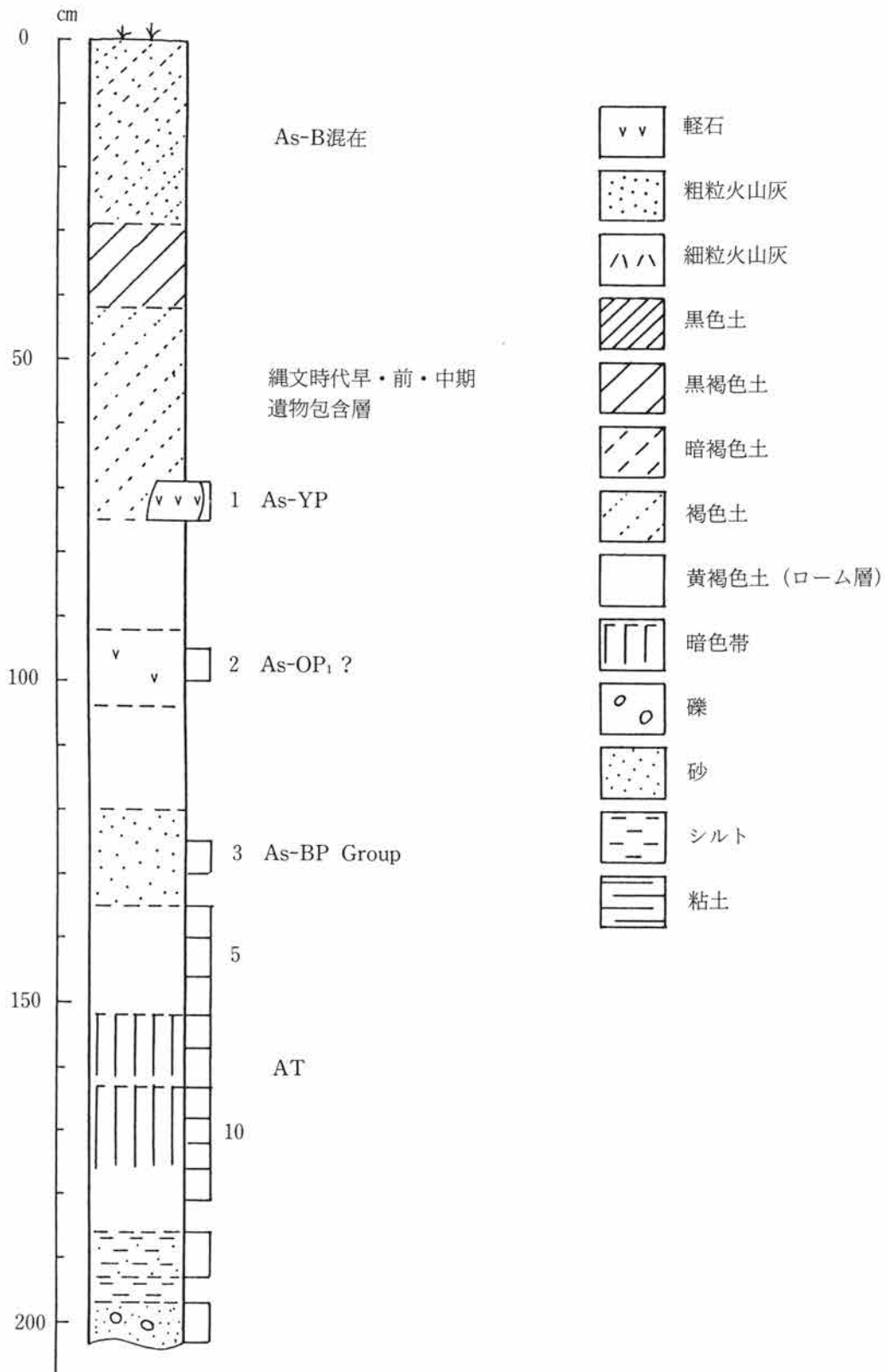


図1 中江田ハツ縄遺跡1区2C-4G深堀トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

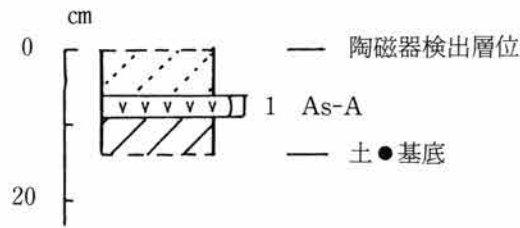


図2 中江田八ツ縄遺跡1区45土壌覆度の土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

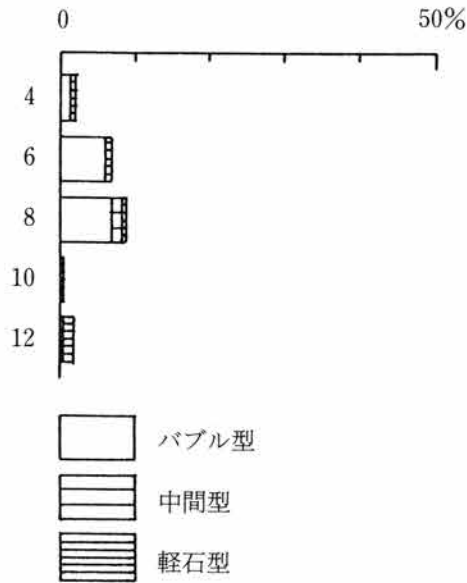


図3 中江田八ツ縄遺跡1区の火山ガラス比ダイヤグラム

II 中江田八ツ縄遺跡3区のテフラ分析

1. はじめに

中江田八ツ縄遺跡のうち、谷部に位置する3区では、水田遺構の有無の確認を主な目的として自然科学分析が行われた。ここではプラント・オパール分析に先だって行われた地質調査と土層の堆積年代を知るためのテフラ検出分析を行った結果について述べる。調査の対象となった地点は、南トレンチ東寄地点、南トレンチ西寄地点、北・南北トレンチ南寄地点、北・南北トレンチ北寄地点、そして北トレンチ西端地点の合計5地点である。

2. 土層の層序

(1) 南トレンチ東寄地点

ここでは黄白色土(層厚34cm以上)の上位に、下位より黄色軽石混じり黄白色土(層厚9cm、軽石の最大径3mm)、灰色がかった暗褐色土(層厚13cm)、黒褐色土(層厚17cm)、黄褐色粗粒火山灰混じり黒褐色土

(層厚9cm)、白色軽石混じり黒褐色土(層厚10cm、軽石の最大径3mm)、褐色粗粒火山灰混じり暗褐色砂質土(層厚22cm)の連続が認められた(図1)。これらのうち、下位より2層目の黄白色土に含まれる黄色軽石については、その岩相から約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1979, 町田・新井, 1992)に由来するものと考えられる。

(2) 南トレンチ西寄地点

本地点では、灰色砂層(層厚10cm以上)の上位に、下位より青灰色シルト質砂層(層厚12cm)、白色軽石混じり灰色砂層(層厚13cm)、砂混じり灰色粘土層(層厚18cm)、黄褐色土(層厚51cm)、ロームブロック混じり暗褐色土(層厚9cm)、黄白色軽石層(層厚3cm、軽石の最大径3mm)、暗褐色土(層厚14cm)、暗褐色土(層厚51cm)が認められた(図2)。

(3) 北, 南北トレンチ南寄地点

ここでは、灰褐色粘土層(層厚20cm以上)の上位に、下位より黒褐色土(層厚8cm)、不淘汰な黄白色火山灰層(層厚2cm)、黒褐色土(層厚19cm)、褐色粗粒火山灰混じり暗褐色砂質土(層厚24cm)が認められた(図3)。

(4) 北, 南北トレンチ北寄地点

本地点では、灰色粘土層(層厚5cm以上)の上位に、下位より暗褐色土(層厚9cm)、黒色土(層厚6cm)、橙色シルト層(層厚0.9cm)、黒色土(層厚4cm)、成層した火山灰層、黒色土(層厚0.2cm)、成層した火山灰層、黒色土(層厚0.1cm)、暗褐色土(層厚19cm)が認められた(図4)。これらの土層のうち下位の成層した火山灰層は、下部の黄色粗粒火山灰層(層厚6cm)と上部の桃色細粒火山灰層(層厚1cm)から構成されている。また上位の成層した火山灰層は、下部の青灰色細粒火山灰層(層厚0.2cm)と上部の黄色粗粒火山灰層(層厚0.5cm)から構成されている。

(5) 北トレンチ西端地点

ここでは、灰色粘土層(層厚15cm以上)の上位に、下位より灰色砂層(層厚18cm)、黄灰色粘土層(層厚38cm)、暗褐色土(層厚32cm)が認められた(図5)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と方法

テフラの降灰層準と示標テフラとの同定を行うために、テフラ検出分析を行うことになった。分析の対象となった地点は、南トレンチ東寄、南トレンチ西寄、北, 南北トレンチ南寄、北, 南北トレンチ北寄の4地点である。また試料については基本的に5cmごとに採取された試料の中から15点を選定した。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

1) 南トレンチ東寄地点

ここでは試料番号5に、スポンジ状によく発泡した灰白色の軽石が少量認められた。軽石の最大径は1.3mmで、班晶に斜方輝石が認められる。この軽石はその特徴から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979)に由来すると考えられる。その上位の試料番号3には、あまり発泡のよくない白色軽石が少量含まれている。軽石の最大径は1.5mmで、班晶に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その特徴から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)、または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来するものと考えられる。本遺跡の位置とテフラの分布を検討すると、前者の可能性の方が大きいものと考えられる。また試料番号1には、発泡の比較的よい淡褐色の軽石が比較的多く認められる。軽石の最大径は3.0mmで、班晶に斜方輝石が認められる。

2) 南トレンチ西寄地点

本地点では、試料番号2に発泡のよくない白色軽石が少量含まれている。軽石の最大径は2.9mmで、班晶に角閃石が認められる。この軽石については、層位とその特徴から約4.0-4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名一八崎軽石(Hr-HP, 新井, 1962, 鈴木, 1976)に由来する可能性が考えられる。ただし水成堆積の砂層中に含まれていることから、再堆積の可能性が大きい。試料番号1には、発泡のよい灰白色の軽石が多く含まれている。軽石の最大径は4.9mmで、班晶には斜方輝石が認められる。この軽石はその特徴からAs-Cに由来しているものと考えられる。

3) 北, 南北トレンチ南寄地点

ここでは試料番号1の火山灰層中には、あまり発泡のよくない白色軽石が比較的多く含まれている。軽石の最大径は1.3mmで、班晶に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石についても、その特徴からHr-FAに由来している可能性が大きいものと考えられる。したがってこの火山灰層はHr-FAに同定される可能性が非常に高い。

4) 北, 南北トレンチ北寄地点

本地点では、試料番号8から試料番号3にかけて、As-Cに由来すると考えられる灰白色の軽石(最大径1.7mm)が含まれている。この産出状況から試料番号8付近にAs-Cの降灰層準のあるものと考えられる。また試料番号7および5にHr-FAに由来する可能性の大きい白色軽石(最大径1.7mm)が含まれている。したがってその降灰層準は試料番号7付近にあるものと推定される。

また試料番号1の黄色粗粒火山灰層中には、淡褐色で発泡の比較的よい軽石がとくに多く認められた。軽石の最大径は3.1mmで、班晶に斜方輝石が認められる。この軽石は、その特徴から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に由来すると考えられることから、試料番号1の火山灰層はAs-Bに同定される。したがってその直上付近にある成層した火山灰層は、層相上の特徴も併せて考えると、1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと考えられる浅間一粕川テフラ(As-Kk, 早田, 1991, 未公表資料)に同定される。

4. 小結

中江田ハツ縄遺跡の台地部に相当する3区において、地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った結果、5層準に示標テフラの降灰層位が認められた。5層準のテフラは、下位より浅間-板鼻黄色軽石（As-YP、約1.3-1.4万年前）、浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）、榛名ニツ岳渋川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）または榛名ニツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、6世紀中葉）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）、浅間-粕川テフラ（As-Kk、1128年）に同定された。

参考文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79。
 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル，no.157，p.41-52。
 坂口 一（1986）榛名ニツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119。
 鈴木正男（1976）過去をさぐる科学，講談社。
 早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究，27，p.297-312。
 早田 勉（1991）浅間火山の生い立ち。佐久考古通信，no.53，p.2-7。
 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会，276p。

表1 中江田ハツ縄遺跡3区のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
南トレンチ東寄	1	++	淡褐	3.0
	3	+	白	1.5
	5	+	灰白	1.3
	7	-	-	-
	9	-	-	-
	11	-	-	-
南トレンチ西寄	1	+++	灰白	4.9
	2	+	白	2.9
	3	-	-	-
北，南北トレンチ南寄	1	++	白	1.3
北，南北トレンチ北寄	1	++++	淡褐	3.1
	3	++	灰白	1.3
	5	++	灰白，白	1.4,1.7
	6	++	灰白，白	1.7,1.6
	8	+	白	1.3

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない，最大径の単位は，mm。

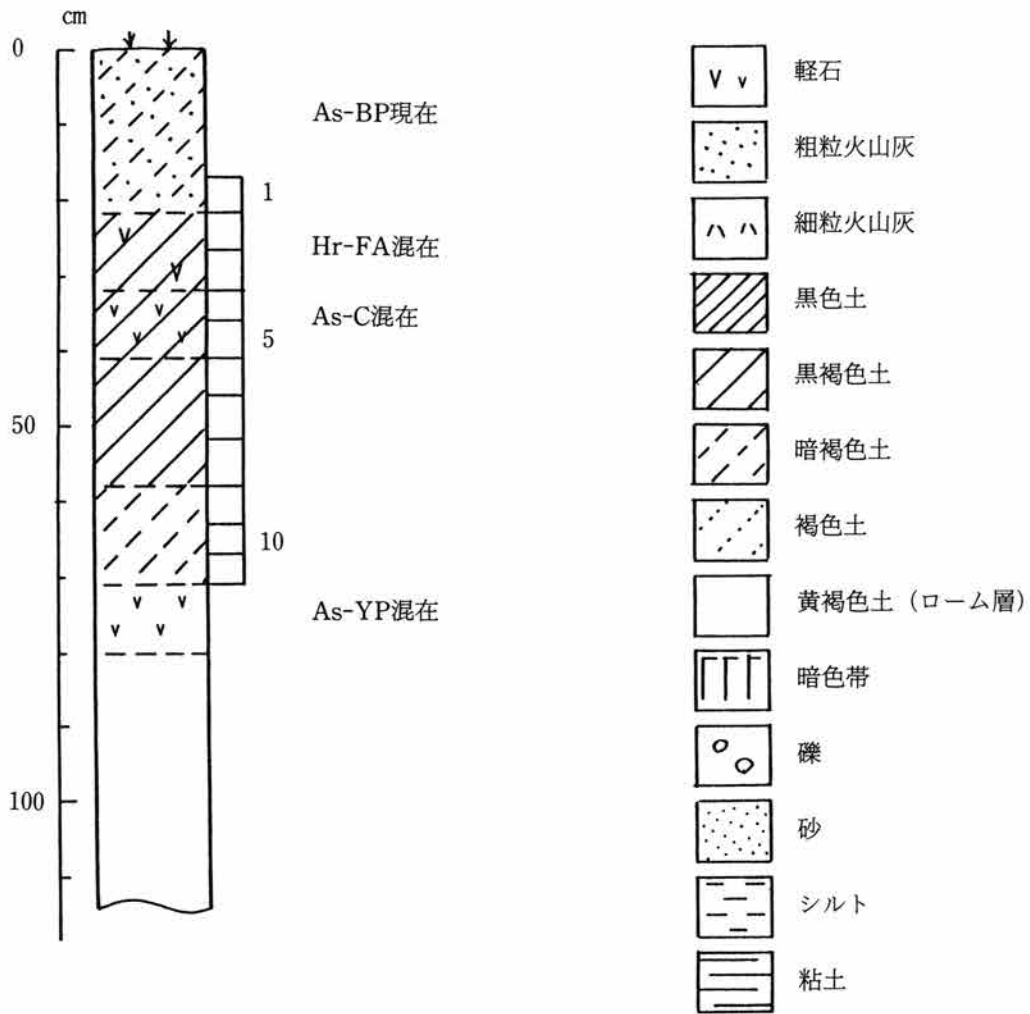


図1 中江田ハツ縄遺跡3区南トレンチ東寄地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

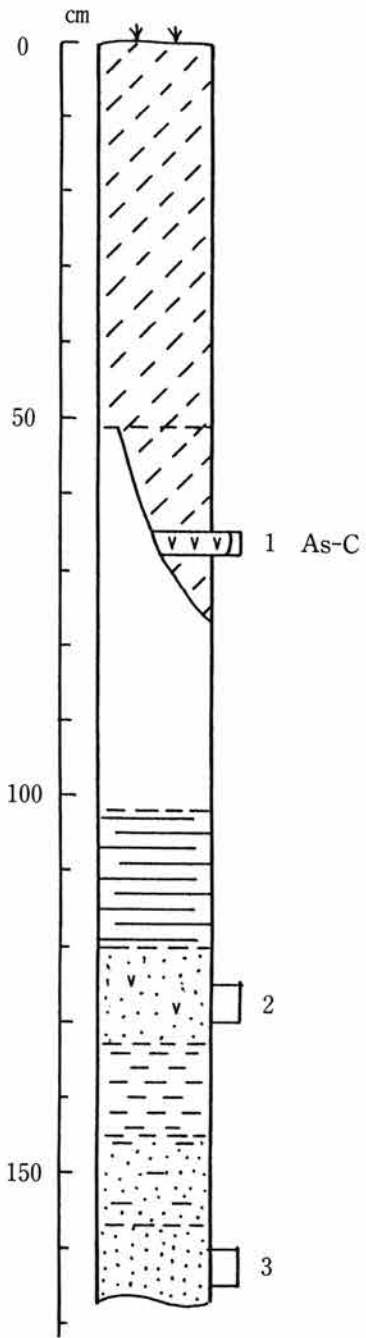


図2 中江田ハツ縄遺跡3区南トレンチ西寄地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

第8章 中江田ハツ縄遺跡の科学分析

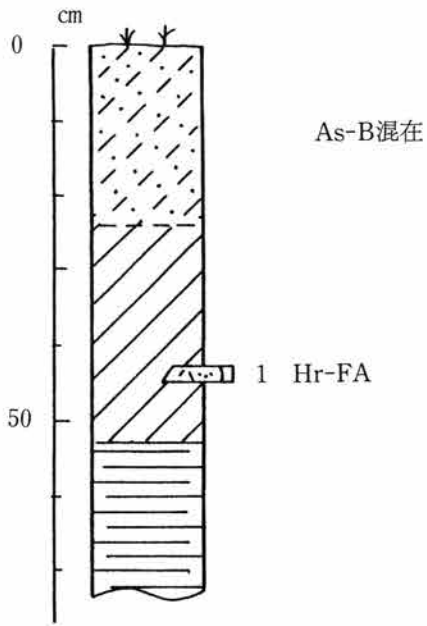


図3 中江田ハツ縄遺跡3区北、南北トレンチ南寄り地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

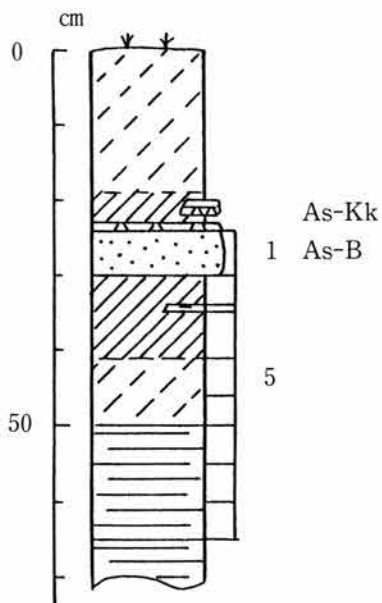


図4 中江田ハツ縄遺跡3区北、南北トレンチ北寄り地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

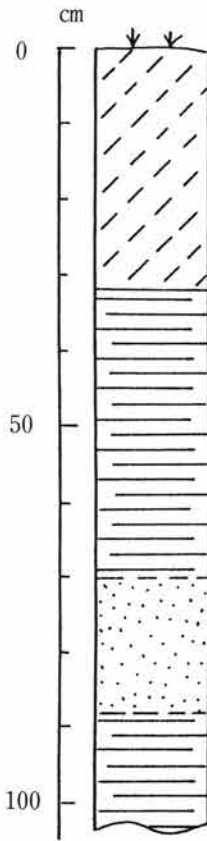


図5 中江田八ツ縄遺跡3区北、北トレンチ西端地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

III 中江田八ツ縄遺跡3区の植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。この微化石は大きさや形態が植物群により固有であることから、土壤中から検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生 (おもにイネ科) を復元することができる (杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

ここでは、中江田八ツ縄遺跡3区の試料について植物珪酸体分析を行い、イネはじめとするイネ科栽培植物の検討および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

2. 試料

試料は、南北トレンチの南寄地点で2点、北寄地点で5点の計7点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40 μ m、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20 μ m以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は2.94（種実重は1.03）、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、表2および図1～図3に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）、ジュズダマ属、シバ属、キビ族型、ウシクサ族型、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

穎の表皮細胞由来：オオムギ族

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

5. 考察

（1）稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層に植物珪酸体密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

1) 南北トレンチ南寄地点

Hr-FA (6世紀初頭)の直下層と直上層について分析を行った。その結果、いずれの試料からもイネの植物珪酸体は検出されなかった(図1)。

2) 南北トレンチ北寄地点

As-Kk (1128年)直下層からHr-FA (6世紀初頭)混層までの層準について分析を行った。その結果、As-Kk直下層(試料0)、As-B (1108年)直下層(試料1、2)およびその下層(試料3)でイネの植物珪酸体が検出された(図2)。

このうち、As-B直下層の下部(試料2)では密度が3,000個/gと比較的高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As-Kk直下層(試料0)では密度が2,300個/g、As-B直下(試料1)でも1,000個/g未満と比較的低い値であるが、いずれも直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、これらの層準の時期に同地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族(ムギ類が含まれる)やキビ族(ヒエやアワ、キビなどが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属、トウモロコシ属などがある。このうち、本遺跡の試料からはオオムギ族とジュズダマ属が検出された。

オオムギ族(穎の表皮細胞)は、南北トレンチ北寄地点のAs-B直下層の下部(試料2)から検出された。密度は1,000個/g未満と低い値である。オオムギ族については標本の検討が十分とは言えないが、ここで検出されたのはムギ類(コムギやオオムギなど)と見られる形態のもの(杉山・石井, 1989)である。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

ジュズダマ属は、南北トレンチ北寄地点のAs-B直下(試料1)から検出された。密度は1,000個/g未満と低い値である。同属には野草のジュズダマの他に栽培種のハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別するのは困難である。したがって、ここでハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

(3) 植生および環境の推定

Hr-FA直下層では、クマザサ属型やウシクサ族型が比較的多量に検出され、ウシクサ族(ススキ属など)やネザサ節型、ヨシ属なども検出された。Hr-FA直上層でも同様の分類群が検出されたが、クマザサ属型は大幅に減少している。

As-B直下層およびその下層では、ヨシ属やウシクサ族(ススキ属など)、ウシクサ族型、ネザサ節型、棒状珪酸体などが増加傾向を示しており、とくにAs-B直下では棒状珪酸体が著しく増加している。また、As-B直下層の下層では上述のようにイネが出現している。As-Kk直下層ではほとんどの分類群が大幅に減少しているが、イネはやや増加している。

第8章 中江田八ツ縄遺跡の科学分析

おもな植物の推定生産量によると、Hr-FA直下層ではクマザサ属型が卓越しており、次いでヨシ属やウシクサ族（ススキ属など）が多くなっている。Hr-FAより上位ではヨシ属が継続的に卓越しており、As-B直下層ではウシクサ族（ススキ属など）も多くなっている。

以上の結果から、中江田八ツ縄遺跡3区における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

Hr-FA（6世紀中葉）直下層の堆積当時は、クマザサ属を主体としてススキ属やヨシ属なども見られるイネ科植生であったものと推定される。ススキ属やヨシ属は森林の林床には生育しにくいことから、当時の遺跡周辺は比較的開かれた環境であったものと考えられる。

Hr-FAより上位では、ヨシ属を主体とする湿地的な環境に移行したものと考えられ、As-B（1108年）直下層の下層の時期にはこのような湿地を利用して水田稲作が開始されたものと推定される。なお、稲作の開始以降も遺跡周辺などでヨシ属やススキ属などが見られたものと推定される。

6. まとめ

本遺跡ではAs-B（1108年）直下層の下層の時期に、ヨシ属などの生育する湿地を拓いて水田稲作が開始されたものと推定される。その後、稲作はAs-B層の堆積によって一時的に中断されたと考えられるが、As-Kk（1128年）直下層の時期には比較的早い時期に再開されたものと推定される。なお、As-B直下層ではイネ以外にもムギ類などが栽培されていた可能性が考えられる。

参考文献

- 杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究，第2号：p.27-37
- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告，第31号：p.70-83.
- 杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村、F P直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析。日本第四紀学会要旨集，19：p.94-95.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学，9：p.15-29.
- 藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O.sativa* L.）生産総量の推定－。考古学と自然科学，12：p.29-41.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学，17：p.73-85.

表1 群馬県、中江田八ツ縄遺跡3区北、南北トレンチの植物珪酸体分析結果

(単位：×100個/g)

分類群 \ 試料	北寄り地点					南寄り地点	
	0	1	2	3	4	1	2
イネ科							
イネ	23	7	30	8			
オオムギ (穎の表皮細胞)			8				
ヨシ属	23	44	23	31	7	26	13
ウシクサ族 (ススキ属など)	8	95	23	31	7	33	64
ジュズダマ属		7					
シバ属		7	8				
キビ族型	8	7	30		22	13	
ウシクサ族型	137	220	106	23	52	106	122
タケ亜科							
ネザサ節型	23	73	60	54	15	132	52
クマザサ属型	15	15	30	8	37	53	187
未分類等	23	88	8	62	30	46	84
その他のイネ科							
表皮毛起源		51	38	23		20	13
棒状珪酸体	296	822	309	62	194	245	142
茎部起源						20	
地下茎部起源			8				
未分類等	197	653	53	116	410	510	528
植物珪酸体総数	751	2091	769	425	774	1206	1205

表2 主な分類群の植物体量の推定量

(単位：kg/m²・cm)

分類群 \ 試料	北寄り地点南					南寄り地点	
	0	1	2	3	4	1	2
イネ科							
イネ	0.67	0.22	0.89	0.23			
ヨシ属	1.44	2.78	1.43	1.95	0.47	1.67	0.81
ウシクサ族 (ススキ属など)	0.99	1.18	0.75	0.48	0.09	0.41	0.80
タケ亜科							
ネザサ節	0.11	0.35	0.29	0.26	0.07	0.64	0.25
タマザサ属	0.11	0.11	0.23	0.06	0.28	0.40	1.40

※表1の値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数をかけて算出。

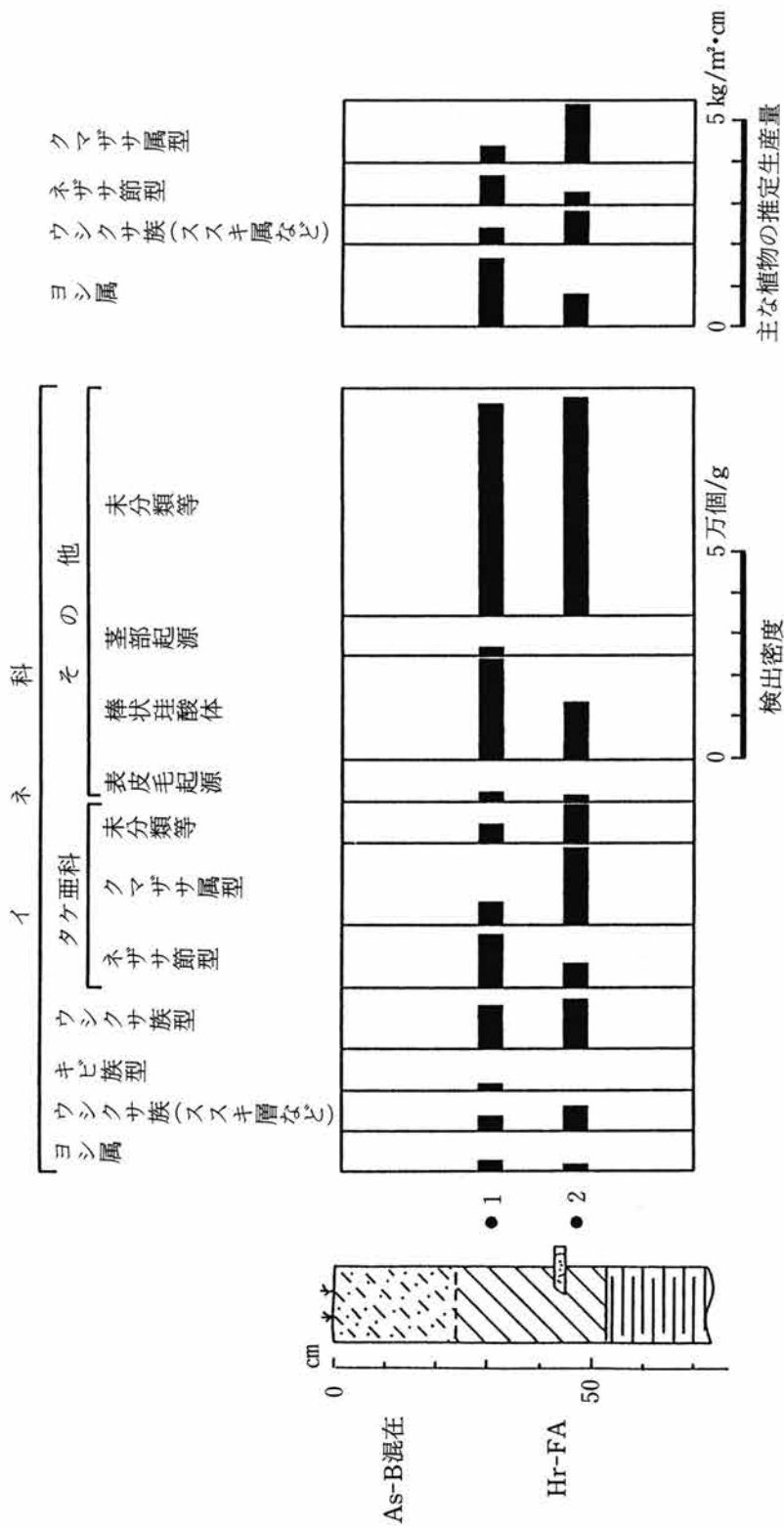


図1 中江田ハツ繩遺跡3区北、南北トレンチ南寄り地点の植物珪酸体分析結果

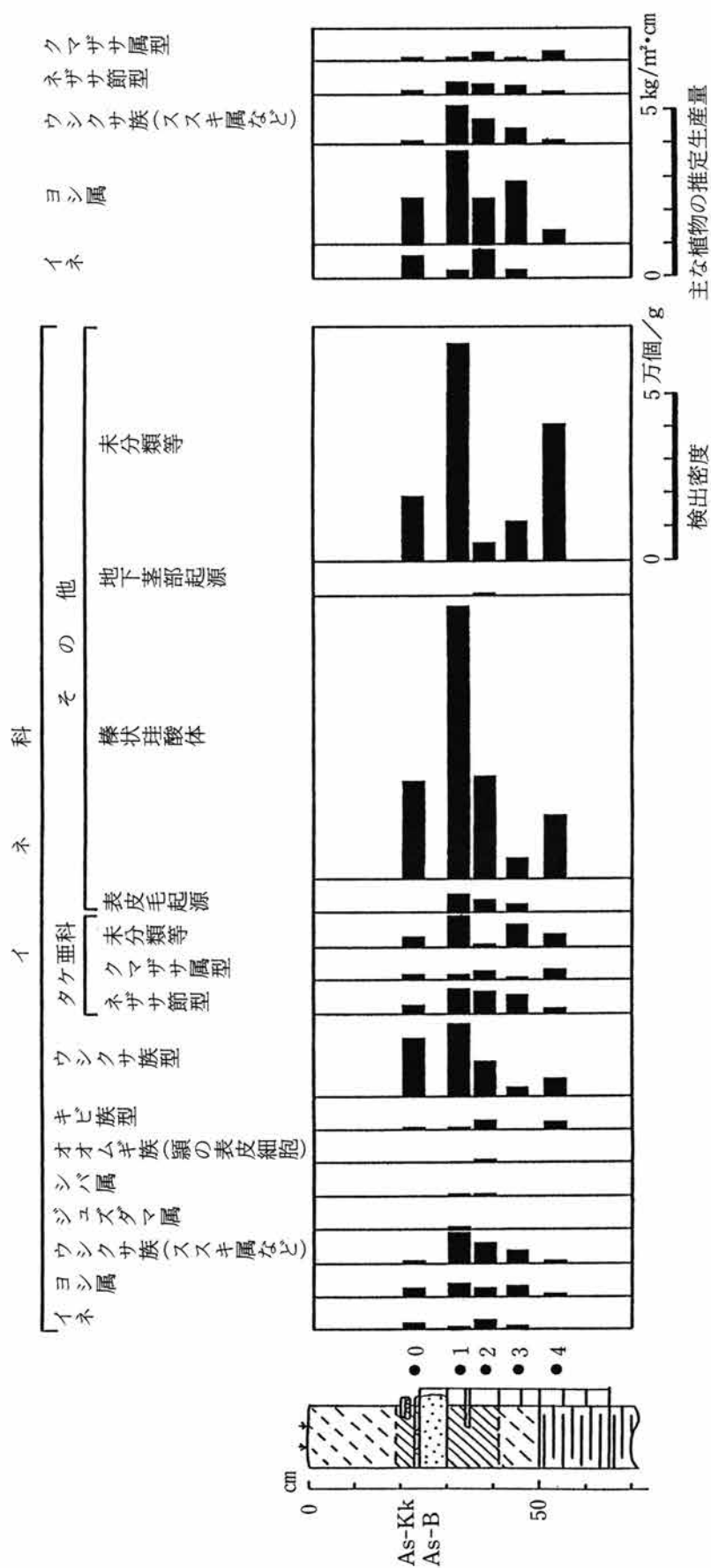
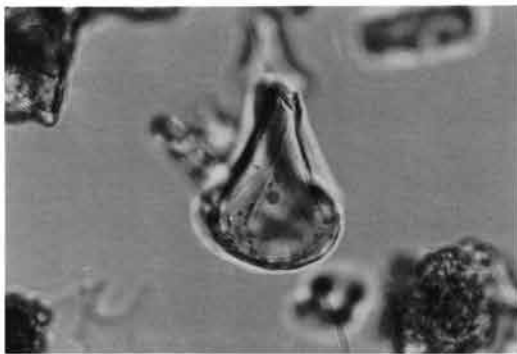


図2 中江田ハツ繩遺跡3区北、南北トレンチ北寄り地点の植物珪酸体分析結果

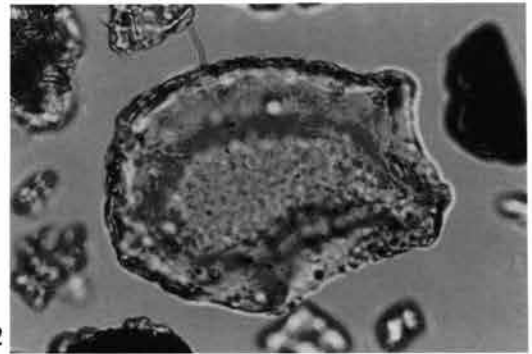
植物珪酸体の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

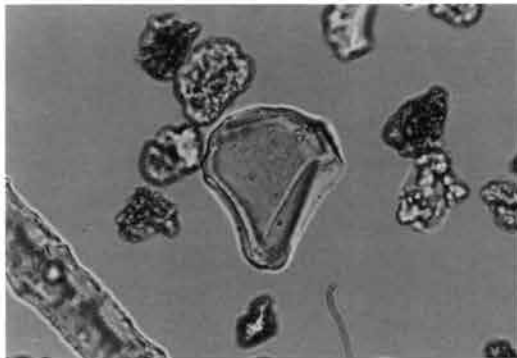
No.	分類群	地点	資料名
1	イネ	北寄り	2
2	ヨシ属	北寄り	0
3	ウシクサ族 (ススキ属など)	北寄り	1
4	ジュズダマ属	北寄り	1
5	シバ属	北寄り	1
6	キビ属型	北寄り	0
7	ネザサ節型	北寄り	1
8	クマザサ属型	北寄り	2
9	棒状珪酸体	北寄り	1



1

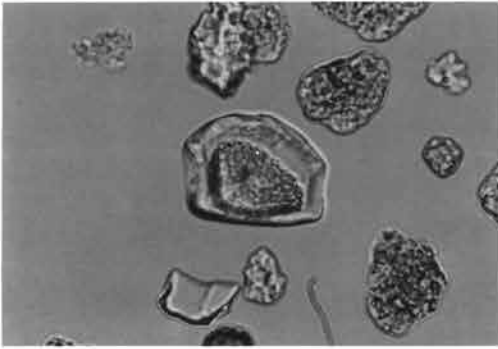


2

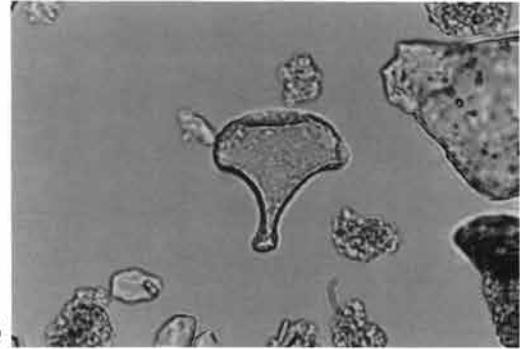


3

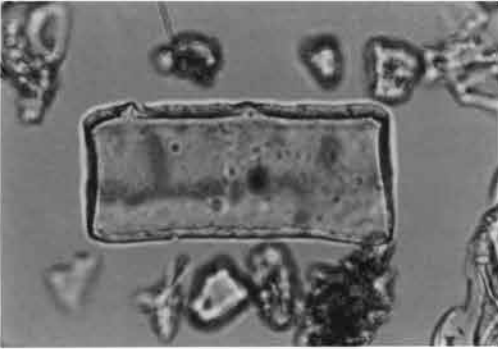
0 50 100 μ m



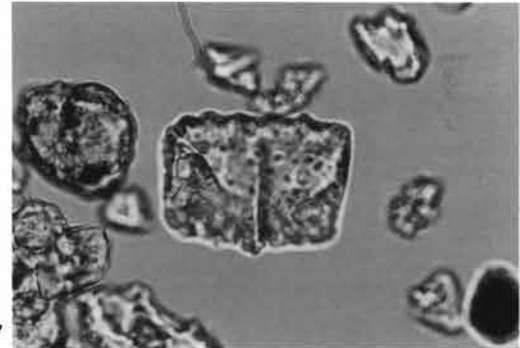
4



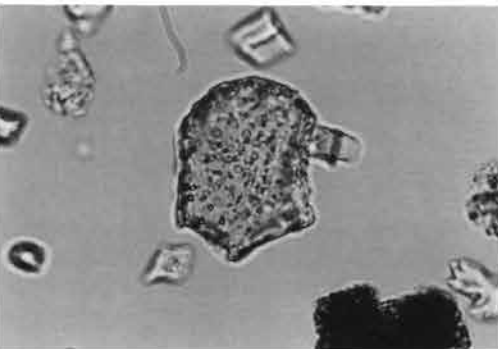
5



6

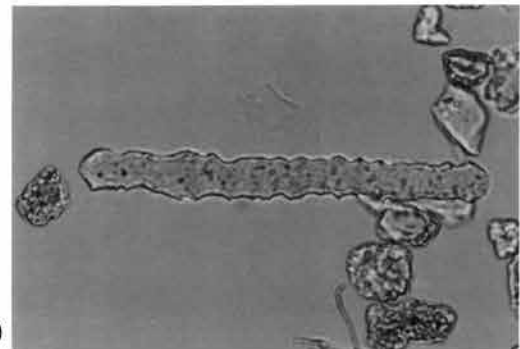


7



8

0 50 100 μ m



9

中江田八ツ縄遺跡出土の馬歯

宮崎 重雄

中江田八ツ縄遺跡は、群馬県新田郡新田町中江田字八ツ縄にある。この遺跡の2区19号井戸から多数の馬歯片が出土した。この井戸は地下水位にまで達してなく、実用とされることはなかったようである。8世紀代の土器が共伴していることで、馬歯は8世紀代のものと思われる。

一般的に、動物の前臼歯は大白歯より小さいが、ウマでは「前臼歯の大白歯化」といわれるように前臼歯と後臼歯の大きさおよび形態にあまり差がなく、よく似ている。このため、遊離した単独歯では、他の動物に比べて、歯種鑑定が難しい。その上、本遺跡の馬歯は完存するものではなく、すべてが破片となっているため、一層の困難が伴った。そこで、今回は出土した歯片を既報のウマの歯の形態や計測値と詳細に比較するという方法によって、歯種鑑定を試みた。

馬歯は乾燥に弱く、特に湿った土中にあったものが空気にさらされると、亀裂を生じ、破片化しやすい。本遺跡の馬歯も破片化したのは、多くが出土時以降の乾燥のためであったろうと思われる。

本遺跡では、臼歯以外の部品は検出されていない。部位確認をできなくても、歯片の総量から見ると、ほぼ全部の臼歯が出土しているように思われる。おそらく当初は、頭骨まるごとが投入され、埋存中に、風化に弱い頭蓋骨が腐食し、切歯、犬歯も小型で風化に弱いために、残存しなかったのであろう。

出土した歯には、赤色化しているものが多く、一見人工的な着色を思わせるが、いくつかの歯では、歯根部まで赤色化していて、抜去でもしない限り、この部分への着色は不可能である。歯は上記のように、顎骨に植立した状態で投入されたと思われることから、土中に埋存している間に土の成分あるいは水の成分と反応して、変色したと見るのが妥当と思われる。

出土馬歯は左側に比べると、右側の方が残存率が良く、特に右の上顎臼歯は全歯種が確認される。このことは頭蓋骨が右側をしたにし、左側を上にして埋存していたことを示している。

後述のようにウマの年齢は10歳前後の壮齢馬であり、寿命の半分程度にしか至っていない。事故あるいは疾病による死も考えられるが、歯の破片にその証拠を見ることはできず、井戸に馬歯・馬骨を投入する殺馬の祭祀(土肥、1983)を考えてみる必要もあろう。

破片のうち、歯種鑑定ができたものは、上顎臼歯が7本、下顎臼歯が4本である。このうち、右上顎第2前臼歯、同第3前臼歯(第134図-14)、同第4前臼歯(第134図-15)、同第1後臼歯(第134図-16)、同第2後臼歯、同第3後臼歯、左上顎第1後臼歯(第134図-17)は、すべて前附錐、中附錐、次附錐を含む頬側のエナメル質壁が残存したもので、これらの形態的特徴により歯種鑑定を行った。

いずれも頬側歯冠高が測定可能であり、この値から推測される年齢(Levine、1982)は、10歳前後である。

このほか、第2後臼歯を含む、少なくとも2本分の左上顎臼歯歯片が確認されている。

下顎では、原錐の頬側エナメル質壁を保存する左第2前臼歯とDouble knotの舌側エナメル質を保存する左下顎臼歯1本(第134図-20)、右下顎臼歯2本(第134図-18・19)が検出された。

歯の大きさを既報の馬歯と比較すると、本遺跡のウマは中型在来馬程度の馬格であったことを推定させる。

引用文献

土肥 孝 (1983) 日本古代における犠牲馬. 文化財論叢、383-400.

Levine M.A., (1982) The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horse teeth. In Wilson B., Grigson C., and Payne S., eds., *Ageing and sexing animal bones from archaeological sites*, Bar British Series 109, 223-250.

歯の計測値

上顎歯

	整理番号	歯冠長	頰側歯冠高	中附錐幅	咬合面の傾斜
右上顎第2前臼歯			37.6		
同 第3前臼歯	第134図-14	26.2+	43.6	4.4	95°
同 第4前臼歯	第134図-15	25.5+	50.3	4.3	85°
右上顎第1後臼歯	第134図-16	22.0+	41.2	3.3	92°
同 第2後臼歯			53.0		
同 第3後臼歯		17.0+	44.8+	3.5	
左上顎第1後臼歯	第134図-17	18.6+	42.3	2.7+	92°

下顎歯

	整理番号	Double knot長	舌側歯冠高
右下顎第3前臼歯	第134図-18	15.4	40.6
同 第4前臼歯	第134図-19	14.6	51.1
左下顎第2前臼歯			24.7
同 第3前臼歯	第134図-20	15.5	40.6

遺物の金属学的解析結果からみた 中江田八ツ縄遺跡における鉄器の製作と流通

岩手県立博物館 赤沼英男

1 はじめに

国道354号線の道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査によって、群馬県新田郡新田町に立地する中江田八ツ縄遺跡は、古墳時代から平安時代にわたる複合遺跡であることが明らかとなった。7世紀後半から10世紀後半にわたる住居跡群では、鎌・刀子を主体とする鉄器が見いだされた。また、8世紀前半に比定される住居跡の廃棄後その上に新たに掘込まれた土坑状の遺構からは鍛造薄片が、そしてそれに近接する土坑からは鉄塊、鉄滓、あるいは鉄滓が付着したふいごの羽口までもが出土した。

鍛造薄片や鉄滓の検出によって、奈良時代以降のしかるべき時期に遺跡内において鍛造鉄器の製作がなされていたことは確実となったが、製作された鉄器と外部からもたらされたものの関係や、小鍛冶操作に加え鋼の製造までもが行われていたかどうかを判定することは困難であった。

こうした状況をふまえ、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の依頼により、遺跡内における生産活動の内容と、鉄器や鉄素材の供給の実態をより明確にすることを目的として、鉄器ならびに鉄塊、鉄滓の金属学的解析を行った。その結果、8世紀前半には銑鉄を素材とし脱炭材として砂鉄を使用するという“鋼精錬”によって製造された鋼を用いて製作されたとみなすことのできる鍛造鉄器の流通を確認でき、10世紀代においても同様の状況が認められた。また、土坑から出土した鉄塊と供伴する鉄滓の組成を考慮すると、供給された銑鉄を素材とする鋼の製造までもがなされていた可能性の高いことが判明した。さらに、時代の特定は困難であるが、地金の材質とその形態を考え合わせると鋼素材と判定可能な遺物の存在も確かめられた。

中江田八ツ縄遺跡では8世紀後半以降のしかるべき時期には外部から銑鉄や鋼の供給を受け、それらを素材として鍛造鉄器を製作するという生産活動が営まれていたことが明らかになったわけである。

これまでの出土遺物の金属学的解析によって、静岡県浜松市に立地する天王中野遺跡¹⁾、青森県百石町に立地する根岸(2)遺跡²⁾では、奈良時代、あるいは奈良時代末から平安時代始めには鋼精錬が行われていた可能性の高いことが指摘されている。中江田八ツ縄遺跡出土遺物の組成は、奈良時代から平安時代における鍛造鉄器の製作が、銑鉄や鋼といった鉄素材の広域的な供給に依拠していたことを支持しているといえよう。

2 分析資料

分析を行った資料は住居跡内より出土した19点の鉄器とスケール(鍛造薄片)、ならびに4点の鉄滓である。資料の名称と検出遺構、および推定年代を表1に、鉄器の実測図を図1に、鉄滓の外観を図8に示す。なお、44号住居跡から検出されたNo.7鉄釘とNo.8鉄片、およびNo.20スケールは44号住居跡廃棄後新たに掘込まれた土坑に伴う遺物、No.9鉄釘、No.10の楔状の鉄は近世もしくは近代のものである可能性もあり、年代の特定が困難とされている。No.7鉄釘とNo.8鉄片、No.20鍛造薄片が土坑に伴うものであるとすれば、それらが出土した地点から50m離れたところの105土坑から検出された鉄滓との関係が重要となる。

No.10楔状の鉄については地金の材質と他地域から検出された同形態の資料との比較によって、鋼素材である可能性の高いことが判明した。また、No.21鉄滓は羽口先で生成したスラグ融液が羽口の中に流入し固化したものである。

3 分析用試料の調整

鉄器からの分析用試料の摘出は、全体の形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、ダイヤモンドカッターを使って慎重に行った。採取した試料をさらに2分し、大きい方の試料片を組織観察に、もう一方の試料片を化学成分分析に供した。なお、No10楔状の鉄についてはA、B2つの箇所から分析用試料片を採取した。また、試料を摘出した部位はエポキシ樹脂で補修し、原形に復した。

既述のとおりNo21鉄滓は羽口先の中にスラグ融液が貫入しそのまま固化したものであるが、これについてはダイヤモンドカッターを使って羽口ごと2つに、他の鉄滓については中心部分から切断した。つぎに鉄滓の切断面を注意深く観察し、錆層に鉄滓が付着している領域がないかどうかを調べた。該当する領域が認められた場合にはその部分とそれに対応するもう一方の切断面から、認められない場合にはそれぞれの切断面の中心部分から試料片を抜き出した。

鉄器からの分析用試料片の採取位置を図1に、鉄滓の切断位置を図8に示す。

4 分析方法

鉄器ならびに鉄滓から取り出した試料片のうちの大きい方は樹脂で固定し、エメリー紙、さらにはダイヤモンドペーストを使って研磨した後、金属顕微鏡で組織の観察を行った。また、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された鉄器に残存する非金属介在物（鋼を製造する過程で分離・除去することができずに残った異物）、および鉄滓中の鉱物については、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）によりその組成を決定した。

摘出したもう一方の試料片はエチルアルコール、さらにアセトンで洗浄し十分に乾燥した後、粉碎し化学成分分析に供した。分析はT.Fe, Cu, Mn, P, Ni, Co, Ti, Si, Ca, Al, Mg, Vについては誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法）により、鉄滓中のT.Fe, M.Fe, FeO, Fe₂O₃はクロム酸カリウム適定容量法、Siは重量法によった。なお、No21鉄滓についてはその溶融温度を推定するため化学成分分析用に準備した試料の一部を分け取り示差熱・熱重量同時分析（TG-DTA）に供した。

5 分析結果

5-1 鉄器の化学組成

鉄器から採取した試料片の化学組成を表2に示す。No.7鉄釘, No.9鉄釘, およびNo.10楔状の鉄のA部から採取した試料片のT.Feはいずれも94%を越えており、ほぼ健全なメタルが分析に供されたことがわかる。それに比べ他の17点についてはいずれも64%以下の低いレベルにある。特にNo.18板状の鉄のT.Feは32.90%である反面、Si分は18.3%含有されている。錆化が相当に進み土砂の固着が著しい試料であったとみなければならぬ。

No.2鎌, No.3鎌, No.5鉄鎌にはCu分がそれぞれ0.272%, 0.332%, 0.098%, No.1板状の鉄にはMn分が0.142%, No.18板状の鉄にはMn分、P分がそれぞれ0.143%, 0.963%含有されている。No.10楔状の鉄のA、B部から採取した試料片からはともにNi分が0.050%, 0.060%, No.6鎌, No.7鉄釘, No.19刀子からはCo分が0.064%, 0.058%, 0.088%, No.13とNo.15の刀子, およびNo.17鉄釘にはP分が0.096%, 0.184%, 0.183%, 0.225%検出されている。

分析を行った鉄器には鉄以外の金属の付着は認められない。0.1%を越えるCu分, Mn分, 0.05%を越えるNi分, Co分が埋蔵環境下から付加される可能性はきわめて低い。従って、上述の鉄器に含有されるCu分, Ni

分, Co分のほとんどはもとの健全な地金に含まれていたとみることができる。一方, P分については埋蔵環境からの富化の可能性を考慮する必要がある⁴⁾。健全なメタルの分析が困難であった場合、同じ埋蔵環境にあったとみなすことのできる他の鉄器のP分と比較を行うことにより富化の可能性の有無を評価できるが、No.17鉄釘とNo.18板状の鉄とは同じ遺構面から出土した他の鉄器に関する分析値がないため困難であった。ここではもとの健全な地金の中に相当量のP分が含有されていた可能性のあることを指摘するとどめておく。これに対しNo.13刀子, No.14刀子, No.15刀子, No.16刀子は同一の埋蔵環境下にあったとみることができる。これら4点については錆化が同程度であるにもかかわらず、P含有量レベルには相当のばらつきがある。従って検出されたP分のほとんどはもとの健全な鋼に含有されていたとみることができる。なお、No.13刀子, No.14刀子, No.8鉄片, およびNo.19刀子にも通常の砂鉄よりも高レベルのCu分, Co分, Ni分が含まれている。また、No.12刀子については採取できた試料量が少なく、化学成分分析を実施することは困難であった。

5-2 鉄器から採取した試料片のマイクロ組織

No.8鉄器から採取した試料片は健全なメタルと錆層によって構成されている(図2 a₁)。メタル部分に近接する黒錆層(図2 a₁の枠で囲んだ部分)には、金属光沢を呈する微細な線状の結晶Cmによって構成される島状の組織が観察される(図2 a₂, a₃)。図2 a₄のE PMAによる反射電子像によると、結晶Cmが規則正しく層状に並び、全体として島状の組織を形成していることがわかる。結晶Cmはもとの健全な鋼におけるパーライト中のセメンタイトと判定できる⁵⁾。この結晶によって構成される領域をもとの健全な地金におけるパーライトとし、錆化による結晶の膨張を無視すると、結晶Cmはマイクロ組織の全域に様に分布することから、もとの健全な地金は炭素含有量が0.5%を越えた共析鋼(炭素含有量0.86%の鋼)に近い組成の鋼とみなすことができる。図3 c₂, g₂(それぞれ図3 c₁, g₁の枠で囲んだ部分のマイクロ組織)から明らかなように同様の組織はNo.9鉄釘, No.19刀子にも認められ、結晶Cmの分布状況から前者は炭素含有量が0.1~0.2%、後者は炭素含有量が0.5%を越える鋼と評価される。

No.6鎌から採取した試料片には微細な黒点群からなる島状の組織が認められる(図3 b₂)。この組織は上述のセメンタイトの欠落によって形成されたものと推定される。そして、黒点群の分布状況からもとの健全な地金は炭素含有量0.2~0.3%の鋼と判定できる。図3から明らかなように、No.4鎌の耳, No.14刀子, No.15刀子, No.16刀子にも同様の組織がみられ、いずれも炭素含有量0.1~0.2%の鋼であることがわかる。

なお、No.8鉄片, No.9釘, ならびにNo.10楔状の鉄のA部から採取した試料片には健全なメタルが残存していた。これらについては、酸で腐食させることによりもとの健全な地金の組織の観察も可能ではあるが、腐食による非金属介在物の喪失を考慮し今回は見合わせた。また、No.1板状の鉄を始めとする他の11点の試料片については錆化の進行が著しく、もとの健全な地金の状態を推定できる組織を見いだすことができなかった(図4)。組織観察結果を整理すると、表2右欄のごとくになる。

5-3 鉄器に見いだされた非金属介在物組成

No.19刀子には複数の薄層状を呈した非金属介在物(鋼の製造過程で除去することができずに残った異物)が観察され、その多くは灰色の結晶Tと黒色領域Sによって構成されていた。代表的なものをE PMAにより分析した結果が図5であるが、結晶TにはFe, Ti, V, Al, 酸素(O)が高濃度に含有されており、FeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅系のチタン化合物、黒色領域SはFeO-SiO₂-Al₂O₃-CaO-MgO系のガラス質けい酸塩と判定される。図7のE PMAによる分析結果から明らかなように、No.6鎌, No.10楔状の鉄, No.12刀子, No.14刀子,

No.15刀子, No.16刀子に残存する非金属介在物にもチタン化合物Tが見いだされた。

No.8鉄片には灰色の粒状化合物Wと微細な結晶が析出したマトリックス(M)からなる非金属介在物が認められる。図6のE PMAによる分析結果によると、化合物Wはマグネシウムを固溶したウスタイト(理論組成: FeO)と同定でき、マトリックスにはFe, Siが高濃度に含まれ、他にAl, Mg, Ca, P, Oが含有されていることがわかる。析出した微細な結晶FはFeO-MgO-SiO₂系の化合物と思われる。図6が示すように、No.9釘, No.17鉄釘の非金属介在物もウスタイト、FeO-MgO-SiO₂系の化合物、およびマトリックスによって構成されていることがE PMAによる分析によって確かめられた(図7)。

なお、No.1板状の鉄を始めとする10点の試料については錆化が著しく、非金属介在物を見いだすことができなかった。上述の分析結果をまとめると、表2の最右欄に示すごとくになる。

5-4 鉄塊, 鉄滓の化学組成

表3に鉄塊と鍛造薄片、表4に鉄滓の化学組成を示す。No.23鉄塊のT.Feは76.50%と高レベルにある。錆層と健全なメタルとからなる試料が分析されたことがわかる。また、この鉄塊からは通常の砂鉄よりもやや高いレベルのCo分が検出されている。

No.20の鍛造薄片には0.044%のCo分が含有されている。後述のとおりこの資料は鋼を加熱・鍛打して目的とする鉄器を製作するという、小鍛冶操作に伴って排出されたものである。従って検出されたCo分は鋼に由来するとみることができる。遺跡内の小鍛冶操作で使用された鋼には0.05%前後のCo分が含まれていたと推定される。No.21鉄滓は羽口の中で固化したものであるが、この鉄滓のFeOの含有量レベルから相当量のウスタイトが残存していると推測される。No.22鉄滓AはFeO分, SiO₂分, Fe₂O₃分を、No.24鉄滓はSiO₂分, Al₂O₃分を主成分とする。前者はFeO-SiO₂系化合物からなる鉄滓と黒錆が混在した試料、後者はその大半がガラス質けい酸塩からなる試料であると考えられる。

5-5 鉄滓のマクロおよびマイクロ組織

No.23鉄塊(図8 c₁)から採取した試料片のマクロ組織(図8 c₂)は、そのほとんどが錆層によって構成されているが、ところどころに健全なメタルも残存している。図8 c₂の領域C₁, C₂部にはいずれにも金属光沢を呈する線状の結晶PCmとその欠落孔が観察され、さらに領域C₂部にはレーデブライト組織が認められる。E PMAによる分析によって、結晶PCmには高濃度のFeと炭素(C)が含有されていることが確認され、初析セメントイトと同定できた(図11)。この分析によってNo.23鉄塊は過共析鋼と銑鉄からなる資料であることが判明した。

図8 a₁から明らかのように、No.21鉄滓は羽口先の中に鉄滓が貫入し固化した資料である。図8 a₁に従って羽口先を2つに切断し、切断面のほぼ中心部分から摘出した試料片のマクロ組織を図8 a₂に示す。灰色の結晶が一様に析出し、いたるところに空隙も存在する。図8 a₃は図8 a₂の領域A部のマイクロ組織、図8 a₄は図8 a₃の枠で囲んだ部分をさらに高倍で観察したものであるが、灰色の粒状結晶Wが組織のかなりの部分を占め、やや暗灰色を呈す結晶Fとマトリックス(M)がそのまわりを取り囲んでいる。さらに結晶Wの中には微細な灰色の結晶T1が析出している。図9のE PMAによる分析結果によると、結晶T1はFeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅系のチタン化合物と同定される。同様にして結晶Wはウスタイト、結晶FはFeO-MgO-SiO₂系の化合物[マグネシウムを固溶した鉄かんらん石: 2(Fe, Mg)O・SiO₂と推定される]であり、マトリックスにはFe, Si, Ca, Al, K, Si, Na, P, Vが含まれていることが確かめられている。また、ところどころに

暗灰色の角状結晶T₂も観察される。図9のEPMAによる定性分析結果が示すように、結晶T₂は結晶T₁よりもAlの濃度が高く、Ti濃度の低いチタン化合物であることがわかる。

No.22は鉄滓の中に錆層が深く貫入した試料である(図8 b₂)。鉄滓は暗灰色の柱状結晶FとマトリックスMからなる。図10のEPMAによる分析結果によると結晶FはFeO-MgO-SiO₂系化合物であり、マトリックスにはFe, Si, Al, Ca, Mg, K, Na, Pが含有されている。

No.24鉄滓から採取した試料片はその全域がガラス質けい酸塩によって構成され、いたるところに空隙も観察される(図8 d₂, d₃)。5-4で述べたように、No.21鉄滓からは62%を越えるFeO分が、一方、No.22鉄滓からは31%を越えるFeO分とSiO₂分、そしてNo.24鉄滓からは63.55%ものSiO₂分が検出されているが、組織観察の結果も化学成分分析結果と合致する。なお、鉄滓の鉱物組成を整理すると、表4の右欄のごとくなる。

6 No.21鉄滓の示差熱・熱重量変化曲線の測定

No.21鉄滓のTG-DTA変化曲線を図12に示す。1350~1400°Cにブロードな吸熱のピークが認められる。この分析結果から、No.21鉄滓が溶融する温度は1350~1400°Cにあったとみなすことができる。

7 鉄器地金の材質

7-1 鍛造鉄器と鑄造鉄器の分類

鉄器は鋼を素材とする鍛造鉄器と銑鉄を素材とする鑄造鉄器の2つに分類される。分析を行った鉄器の中でNo.4鎌の耳, No.6鎌, No.8鉄片, No.9鉄釘, No.14刀子, No.15刀子, No.16刀子, およびNo.19刀子はそれらの組織観察結果から鍛造鉄器であることが明らかである。No.10楔状の鉄, No.12刀子, No.17鉄釘についても非金属介在物組成からやはり鍛造鉄器に分類できる。No.1板状の鉄, No.2鎌, No.3鎌, No.5鉄鎌, No.7鉄釘, No.11鎌, No.13刀子, No.18板状の鉄に関しては、鍛造鉄器か鑄造鉄器かに分類するための自然科学的根拠を得ることができなかったが、No.1とNo.18の板状の鉄を除く6点については器種を考え合わせると、やはり鍛造鉄器の可能性が高いものと判断される。No.1およびNo.18の板状鉄器は目的とする鉄器を製作するための鉄素材であった可能性がある。古代・中世においては銑鉄もしくは鋼といった鉄素材の流通があったことが指摘されているので^{6) 7)}、これら2つの資料については残存状態の良好な試料片の調査を基に、慎重に判断すべきであろう。

7-2 原料鉱石からみた地金の分類

地金の製造に使用される原料鉱石として砂鉄と鉄鉱石の2つを挙げるができる。鋼の製造に際し砂鉄が使用された場合、砂鉄の還元により生成するチタン化合物が鋼に残存する非金属介在物の中に見いだされることになる。表2の中で非金属介在物中にチタン化合物が見いだされたNo.6鎌, No.10楔状の鉄, No.12刀子, No.14刀子, No.15刀子, No.16刀子, No.19刀子の製作に使用された鋼は砂鉄の使用によって、一方、非金属介在物中にチタン化合物が見いだされなかったNo.8鉄片, No.9鉄釘, No.17鉄釘については、それらの製作に用いられた鋼の製造過程で砂鉄が使用されなかったとみなければならない。また、No.1板状の鉄, No.2鎌のように非金属介在物を見いだすことができなかったものに関しては、地金の製造過程で砂鉄が使用されたか否かを判定することができない。このように非金属介在物組成から鍛造鉄器は、(イ)鋼の製造過程で砂鉄の使用が認められないもの、(ロ)砂鉄の使用により製造された鋼を素材とするもの、(ハ)砂鉄の使用の有無が不明なもの3つに分類できる。以下では(イ)に分類されたものをOグループ、(ロ)をSグループ、

(ハ) をUグループに区別して扱うことにする。

Oグループに分類されたものの化学組成に着目すると、No.8鉄片にはCo分が0.05%近く含有されている。鋼の製造には脈石中にCo鉱物を随伴する鉄鉱石が用いられた可能性が高い。No.8鉄片については化学組成上の特徴を考慮し、O_{Co}グループに、また、化学組成上の特徴が認められなかったNo.9鉄釘についてはO_uに細分することにする。No.17鉄釘には0.225%のP分が含まれている。既述のとおりNo.17鉄釘と同じ埋蔵環境下にあったとみなすことができる鉄器が存在しないため、ただちに検出されたP分がもとの健全な鋼に含有されていたものとして扱うことは危険である。ここでは一応O_Pに分類できる可能性があることを指摘するにとどめておく。

Sグループに分類された鍛造鉄器の中で、No.6鎌には0.05%を越えるCo分が、No.19刀子には0.05%を越えるCo分に加え0.045%のNi分も含まれている。No.10楔状の鉄から採取した2つの試料片からはともに0.05%以上のNi分が、No.14刀子からは0.184%のP分と0.047%のCu分、No.15刀子からは0.183%のP分が検出されている。5-1で述べたように、これら5点の鉄器から検出されたCu分、Ni分、Co分、P分はもとの健全な地金に含有されていたとみなすことができ、それらは脈石中にCu、Ni、Co、P鉱物を随伴する特殊な鉄鉱石に起因する可能性が高い。化学成分上の特徴を考慮し、No.6鎌はS_{Co}、No.10楔状の鉄はS_{Ni}、No.14刀子はS_{Cu,P}、No.15刀子はS_P、No.19刀子はS_{Co,Ni}とする。なお、Sグループに分類されたものの中で化学組成上の特徴がみられないNo.12刀子、No.16刀子についてはS_Uに帰属する。

Uグループに分類された鍛造鉄器の中にもCu分、Ni分、Co分、P分の含有量レベルの高いものが認められる。中でも、0.1%を越えるCu分、もしくは0.1%にきわめて近いレベルのCu分を含むNo.2鎌、No.3鎌、No.5鉄鏃、0.05%を越えるCo分が含有されるNo.7鉄釘、0.096%のP分と0.045%のCo分とを含有するNo.13刀子についてはそれぞれの元素含有量レベルに応じ、U_{Cu}、U_{Co}、U_{P,Co}のいずれかに細分することにした。なお、No.4鎌の耳、No.11鎌については化学組成上の特徴がみられないことからUUとした。

上述の分類結果をまとめると表5のごとくになる。

8 古代ならびに中世における鋼の製造

古代および中世における鋼の製造方法にはいまだに不明な点が多く、いくつかの仮説が出されているが、それらを整理すると以下のごとくになる。

- 1) 原料鉱石(砂鉄もしくは鉄鉱石)を還元し鉄を生産する段階
 - 2) アで生産された鉄中から目的とする鋼を製造する段階
 - 3) 2)で製造された鋼を素材とし目的とする鉄器を製作する段階
- ここではとりあえず1)を製錬、2)を精錬、3)を小鍛冶とする。

1)の製錬によって得られる鉄は炭素含有量に応じ、鋼と銑鉄の2つに分類できる。製錬炉で得られた鉄から極力前者の鋼部分を摘出して、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そしてその鋼を使って製品鉄器が製作されたとする見方がある⁸⁾⁹⁾。製錬炉で直接に鋼が作り出されるという意味でこの方法は直接製鋼法と呼ばれている。さらに製錬によって得られた粗鉄を精製し目的とする鋼に変えるという上述の操作は精錬鍛冶とされている。しかし、ここでいう精錬鍛冶がどのような設備を用いどのようにしてなされたかという点に関しての具体的な記述はない。不純物の除去と炭素量の増減という複数の操作工程があったと推測されるが、具体的な操作方法が不明である以上、その操作の過程でどのような鉄滓が排出されたのかを論ずることは困難と考えられる¹⁰⁾。

1) の製鉄では銑鉄も生産される。銑鉄は再び溶解炉で溶解し、鑄型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器となる。また、銑鉄中の炭素を低減させる、すなわち脱炭を行うことによって鋼を得ることもできる。この場合の脱炭の方法としては、半地下式堅型炉もしくは火窪炉の中にあらかじめ用意された銑鉄を投入して炉床部に銑鉄浴を生成させた後、その上から砂鉄、もしくは鉄石粉を投入する方法がとられていた可能性の高いことが遺物の金属学的解析結果に基づき指摘されている¹¹⁾¹²⁾。銑鉄を素材とし脱炭材として砂鉄もしくは鉄石粉を使用し鋼を製造するというこの方法は、銑鉄を経由して鋼が得られるという意味で間接製鋼法と呼ばれるが、本論では“鋼製錬”という用語を用いることにする。脱炭材に鉄石粉が使用された場合、鉄石中の酸化鉄は銑鉄中の炭素、もしくはCOガスにより還元されてFeO、さらに還元が進めばFeに変わって溶鉄に付け加わる。一方、砂鉄が用いられた場合にはFeO-Fe₂O₃-TiO₂系のチタン化合物中の酸化鉄は還元により鉄浴に加わり、スラグ浴には還元雰囲気と炉内温度によってウルボスピネル (2FeO・TiO₂)、イルメナイト (FeO・TiO₂)、Ti-O系化合物、Ti (C,N) が析出することになる¹³⁾¹⁴⁾。実際の操作では投入された脱炭材と炉壁材などが反応しスラグ浴が形成される。脱炭材に鉄石粉が使用された場合にはウスタイト、FeO-MgO-SiO₂系化合物、ガラス質けい酸塩を主成分とする鉄滓が、砂鉄の場合にはそれらにチタン化合物が加わったものが鉄浴から分離され排出される。この脱炭・精製の工程で生ずる鉄滓を鋼精錬滓という。そして、このような方法により製造された鋼を用い、小鍛冶によって目的とする鉄器がつくりだされることになる。

鍛冶操作では鍛打・加熱を繰り返して目的とする鉄器への造形が行われるので、鍛打のときは加熱された鋼の表面に生成する酸化鉄（スケール）が剥離（これは鍛造薄片と呼ばれる）する。一方、加熱のときは酸化鉄が半熔融状態になり、火窪炉の底部に溜まる。そこで炉壁材と反応して鉄分に富む半熔融状態の鉄滓状物質を生成し、加熱炉の底で固化する。このようにして生成した“椀形状”（供え餅を逆さにした形）の鉄滓状物質が、鉄生産関連遺跡の発掘調査では鍛冶滓として扱われている。従って、鍛冶滓は金属鉄、錆層、ウスタイト (FeO) を主成分とし、他にスケールが炉材と反応した際に生成するFeO-SiO₂系化合物が混在した組成をとるものと推測される。なお、この操作はしばしば鍛錬鍛冶、あるいは小鍛冶ともいわれる。

上述から明らかなように、2) でいう精錬の中には直接製鋼法の精錬鍛冶と間接製鋼法の鋼精錬という2つの異なった概念が存在することがわかる。精錬鍛冶についてはその操作内容をより明確にする必要があると考えられるが、その問題についてはともかく、ここでは銑鉄を脱炭し鋼を製造するという鋼精錬とは区別して扱うことにしたい。上述を整理すると図13のごとくなる。

9 鉄器、鉄塊、および鉄滓の組成からみた中江田八ツ縄遺跡における生産活動

直接製鋼法では製錬によってただちに鋼を得ることができるから、製錬が行われる場所で実際に使用される原料鉄石は鉄石か砂鉄のいずれかであり、両者が混合して使われることはまずない。一方、間接製鋼法の場合、まず銑鉄が生産され、その銑鉄をもとに鋼が製造される。銑鉄と鋼の製造場所は同じ場合もあるが、生産された銑鉄が他の場所に運ばれ鋼の製造に供されることも考えられる。この場合、脱炭材としては砂鉄と鉄石のうち鋼を製造するところで入手容易なものが利用されることになる。

表5のSグループに分類された鉄器の中で、S_{Co}、S_{Ni}、S_{Cu,P}、S_Pに細分されるNo.6 鎌を始めとする5点の鉄器については、砂鉄と鉄石の両者、すなわち脈石中にCo、Ni、Cu、P鉄物を随伴する鉄石を始発原料として生産された銑鉄を素材とし、脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬によって製造された鋼を用いて製作されたと解釈することができる。ただし、0.1%以上ものP分を含有する砂鉄が存在しないわけではない。そこでS^Pに細分されたNo.15 刀子についてはP含有量レベルの高い砂鉄を始発原料とする直接製鋼法によって

製造された鋼を素材としていると解釈することもできる。しかし、表3から明らかなように、Na15刀子には0.03%を越えるCu分が含有されている。通常の砂鉄に比べやや高い値である。P鉱物を随伴する鉄鉱石を始発原料に用いたとみることのできるO_Pに分類が可能な鉄器が存在すること、平安期には東北地方を始めとする広い地域で高りんの銑鉄が流通していること¹⁵⁾、さらにそれを使って鋼の製造がなされていたとみなすことのできる遺跡が存在することなどを考慮し¹⁶⁾¹⁷⁾、ここではNa15刀子の製作に使用された鋼についても鋼精錬によるものとした。S_Uに分類される鉄器についてもただちに砂鉄を始発原料とするものとして扱うことはできない。鋼の製造を直接製鋼法のみ限定すればそれは可能であるが、O_Uグループに分類される鉄器の存在からも明らかなように、化学成分上の特徴のない鉄鉱石を始発原料として生産された銑鉄を基に脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬によって製造された鋼、あるいはP鉱物やCu鉱物を随伴する鉄鉱石が使われたにもかかわらず鋼精錬操作の段階で不純物が相当量除去されてしまった可能性も考えられるからである。これまで、非金属介在物中にチタン化合物が見いだされ化学組成上の特徴が認められない場合、その始発原料は砂鉄とされがちであったが、鋼精錬という操作の導入によってS_Uグループに分類される鉄器であっても始発原料の特定は困難であることがわかる。

Uグループに分類された鉄器の中にもU_{Cu}、U_{Co}、U_{P,Co}に細分されるものがある。これらについては少なくとも始発原料として脈石中にCu、Co、P鉱物を随伴する鉄鉱石が用いられた可能性が高いとみななければならない。

中江田八ツ縄遺跡では44号住居跡廃棄後新たに掘り込まれた土坑状の遺構から鍛造薄片が検出されており、8世紀前半以降のある時期に住居跡で小鍛冶が行われていたことは確実である。鍛造薄片の中に0.044%ものCoが含まれていたことから、製品鉄器の製作に使用された鋼にも相当量のCo分が含有されていたと推定される。既述のとおりNa7鉄釘、Na8鉄片は、Na44号住居跡か、あるいはNa20の鍛造薄片同様新たに掘り込まれた土坑状の遺構のいずれかに伴うものである。Na7鉄釘、Na8鉄片はそれぞれUC_{Co}、OC_{Co}に細分されており、鍛造操作により製作された、もしくは製作途上にあった製品、または製品の一部とみなすことができる。分析の結果はこれら2点が後者の土坑に伴う資料であることを支持している。

さらに、鍛造薄片が発見された地点から約50m離れた105土坑からは銑鉄と過共析鋼からなる鉄塊が鉄滓とともに出土している。羽口内に流入し固化したNa21鉄滓にはウスタイトの中にチタン化合物の析出がみられ、その回りはFeO-MgO-SiO₂系の化合物が晶出したガラス質けい酸塩が取り囲まれていた。試料の熔融温度が1350~1400°Cにあったことを考慮すると、砂鉄と炉壁材粘土によって構成されるスラグ融液からチタン化合物、ついでウスタイト、FeO-MgO-SiO₂系化合物が析出したものと思われる。銑鉄と過共析鋼からなる鉄塊も同じ遺構から見いだされていることをふまえれば、Co含有量レベルの高い銑鉄を溶融し、脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬が遺跡内でなされていたと解釈することができる。また、1350~1400°Cという操業温度を想定すれば、銑鉄中のCo分のほとんどは鋼中にとどまったと推測される。製造された鋼には少なくとも銑鉄と同レベルのCo分が含まれることになるが、Na7鉄釘、Na8鉄片、そしてNa20鍛造薄片の組成はそれと合致する。鉄塊と鉄滓の検出によって、中江田八ツ縄遺跡では8世紀前半以降のある時期に、Co分を相当量含有する銑鉄の供給を受け、鋼の製造と鉄器の製作がなされていた可能性の高いことが明らかとなったわけである。FeO-MgO-SiO₂化合物とマトリックス、あるいはガラス質けい酸塩からなるNa22とNa24の鉄滓は炉壁材付近で生成したスラグ融液が冷却し固化したものとみることができ、やはり上述の鋼精錬操作の過程で排出されたものと考えられる。なお、Na21鉄滓の(CaO+MgO)/SiO₂、(CaO+MgO)/Al₂O₃を求めるとそれぞれ0.238、0.610となり、通常の粘土のそれに比べやや高い値となる。鋼精錬時、CaO分、あるいはMgO

分を含む物質が使用された可能性についても考慮する必要がある。

中江田八ツ縄遺跡からは楔状の鉄も発見された。同様の器形の鉄器は15世紀～16世紀に比定される青森県の浪岡城跡からも出土している¹⁸⁾。図14にはその代表的なものの実測図を示した。浪岡城跡からは30本以上にもものぼる資料が確認され、分析によって鋼素材であることが判明している。No.10楔状の鉄はS_Mに細分され、Co分は0.02%であることから、上述で明らかになった遺跡内での鋼精錬操作と結び付けて考えることはできない。この資料は8世紀前半か、近世・近代のいずれかのもので推定されている。前者であるとすれば、既に奈良時代から銑鉄塊の他に鋼素材の流通があったことが、一方後者であれば中世以降も引き続き鋼素材の流通が継続されていたことになる。この点についても時期の特定可能な同形態の遺物の出土を待つて明確にすべき問題と考える。

なお、7世紀後半に比定される5号住居跡、および時代不明の32土坑からは0.1%を越えるMn分またはP分を含む板状の鉄が出土している。既述のとおりこれらについては鉄素材の可能性はあるが、もとの健全な地金の組織が不明であることから本論では議論から除外した。なお、表5に細分した鍛造鉄器の中で、No.7鉄釘、No.8鉄片の他にNo.11鎌もその組成の上からは遺跡内で製作されたとみなすことに問題はない。

住居跡群から検出された遺物の金属学的解析によって、中江田八ツ縄遺跡では8世紀前半以降のある時期に、銑鉄の供給を受け脱炭材として砂鉄を使用する鋼の製造とそれを素材としての鉄器の製作がなされており、さらに鋼素材までもがもたらされていたらしいことが明らかになった。

最後に問題となるのは銑鉄塊、あるいは鋼素材の供給地である。考古学の発掘調査によって、6世紀後半には列島内に製錬技術が定着したことが指摘されている。そこで、まず、列島内での供給を考える必要がある。そのためには製錬跡が存在する遺跡において何が生産されているのかを明確にしなければならない。その上で上述の鉄素材との組成上の対比を行い、供給地域を絞り込む作業が不可欠である。ただし、分析によって鉄素材はもちろん、相当量のCu分、Ni分、Co分を含む製品鉄器が確認されている。列島内において銅含有量レベルの高い鉄鉱山としては岩手県釜石市に立地する釜石鉱山、新潟県豊浦市の赤谷鉱山を挙げることができるが、それは大陸の山東半島から揚子江下流域にかけても分布する(図15)。時代を考慮すれば後者からの供給を無視することはできない。分析の結果は国内はもとより大陸にまで視野を広げ、流通問題について検討する必要があることを示している。

10 まとめ

群馬県新田郡新田町に立地する中江田八ツ縄遺跡の住居跡群から出土した鉄器を分析したところ、8世紀前半には銑鉄を素材とし脱炭材として砂鉄を使用するという鋼精錬によって製作されたとみなすことのできる鍛造鉄器の流通が認められ、10世紀後半においても同様の状況を確認できた。また、7世紀後半、8世紀前半、10世紀後半の各住居跡群からは、少なくとも始発原料として脈石中にCu鉱物やP鉱物、あるいはNi、Co鉱物を随伴する鉄鉱石が用いられたと解釈可能な鍛造鉄器の存在も確かめられた。

8世紀前半以降のある時期には、銑鉄塊の供給を受け鋼を製造し、それを用いて鉄器の製作までもがなされていた可能性の高いことが明らかになった。併せて中世の館跡から出土するものと同じ形態の鋼素材も発見され、出土状況からその流通が奈良時代にまでさかのぼるか、あるいは中世以降も継続されたかのいずれかであることが判明した。

奈良時代以降、製品鉄器に加え、供給された銑鉄を基に遺跡内での鋼の製造と鉄器の製作活動が営まれていたことが明らかになったわけである。そして、それらの供給地域としては列島内はもとより、大陸をも視

野に入れて検討する必要のあることが指摘された。

註)

- 1) 佐々木稔「浜松市天王中野遺跡出土の鉄塊と奈良時代の鋼精錬法」『浜松市博物館館法-VIII-』浜松市立博物館, PP.5~18, 1995年。
- 2) 青森県百石町に立地する根岸(2)遺跡では、奈良時代末から平安時代初頭に比定可能住居跡から火窯炉が検出された。供判して出土した鉄塊を分析したところ、銑鉄と鉄滓の界面にTi(C,N)が一様に析出した組織が見いだされた。この組織の発見によって、砂鉄により銑鉄が脱炭される途上のものであることが明らかとなり、火窯炉においても鋼精錬が行われていた可能性の高いことが判明した³⁾。
- 3) 赤沼英男「根岸(2)遺跡出土小札および鉄滓の金属学的解析」『根岸(2)遺跡発掘調査報告書』青森県百石町教育委員会, 1995年, PP.104-112。
- 4) 佐々木稔, 伊藤薫「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鋤先の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要II』静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1987年, pp.63-80。
- 5) 佐々木稔, 村田朋美「古墳出土鉄器の材質と製法」『季刊考古学』8, 1984年, pp.27-33。
- 6) 赤沼英男, 岡田康博, 川上貞雄「遺物の解析からみた半地下式堅型炉の性格」『平成4年度たたら研究会大会発表要旨』たたら研究会, 1992年。
- 7) 赤沼英男, 佐々木稔「金属学的解析からみた九州北部地域における中世出土鉄器の製法と流通」『古文化談叢』30, 1993年, pp.1155-1172。
- 8) 大澤正巳「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始」『季刊考古学』8, 雄山閣出版, 1984年, pp.36-46。
- 9) 少なくとも精錬鍛冶には脱炭, 滲炭, 鉍滓の絞り出しという工程が含まれていることが大澤正巳氏によって指摘されている。これら3つの操作を同時に行うことは困難であるから、精錬鍛冶には最低3つの操作が存在したことになる。当然、それぞれの操作に対応する3種類の鉄滓が排出されることになるが、その点に関する検討が不十分であることが佐々木稔氏からも指摘されている¹⁰⁾。
- 10) 佐々木稔「遺構をはなれて製錬滓と断定できるか - 潤崎遺跡出土鉄滓の場合 -」『たたら研究』34号, 1993年, pp.43-47。
- 11) 佐々木稔「ふたたび炒鋼法について」『たたら研究』27号, 1985年, pp.40-50。
- 12) 赤沼英男「いわゆる半地下式堅型炉の性格の再検討 - 杣沢・北沢両遺跡遺物の金属学的解析結果から -」『たたら研究』35号, 1995年, 印刷中。
- 13) 11) に同じ。
- 14) 12) に同じ。
- 15) 7) に同じ。
- 16) 3) に同じ。
- 17) 12) に同じ。
- 18) 7) に同じ。

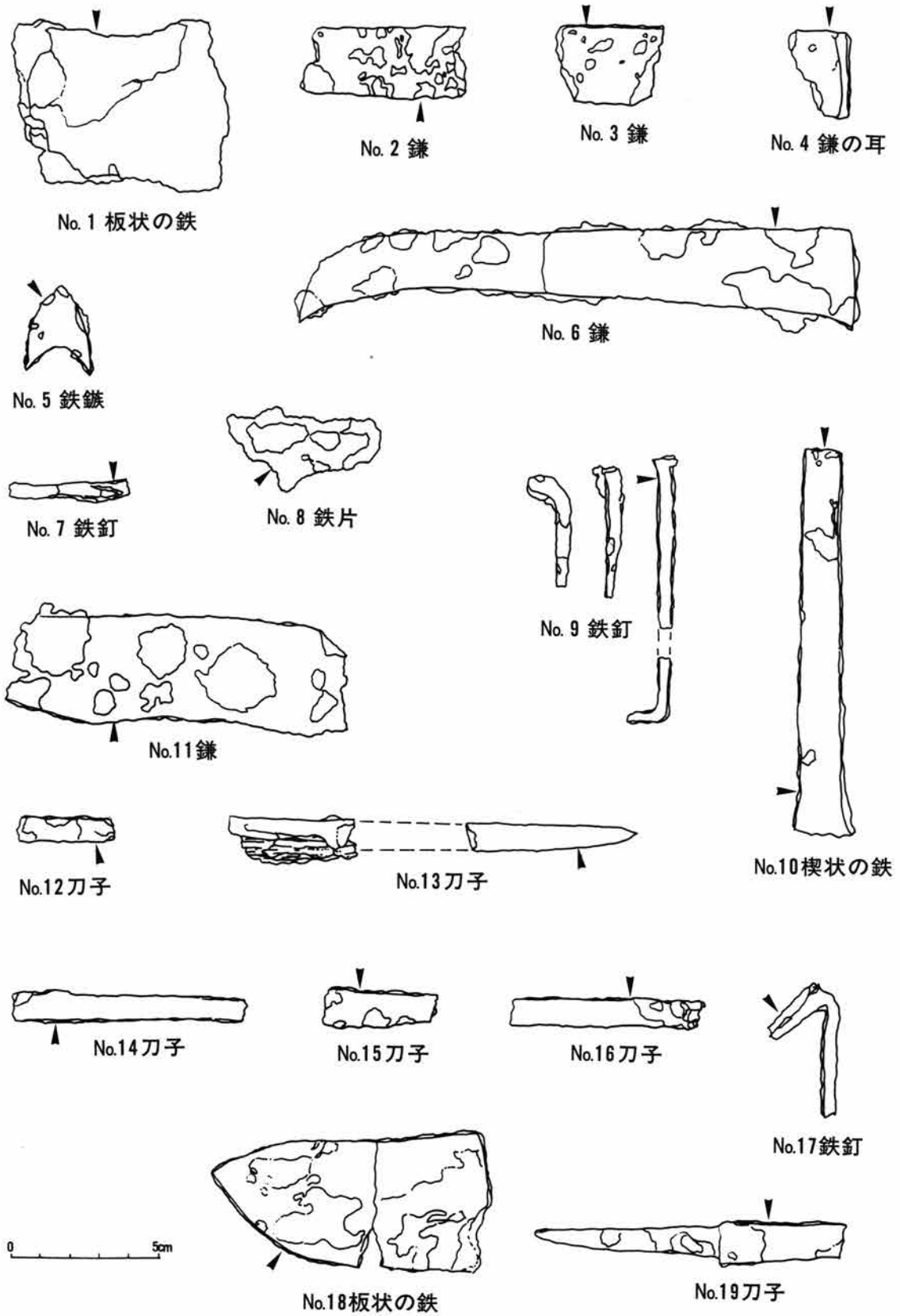


図1 分析を行った鉄器の実測図 矢印は試料採取位置である。

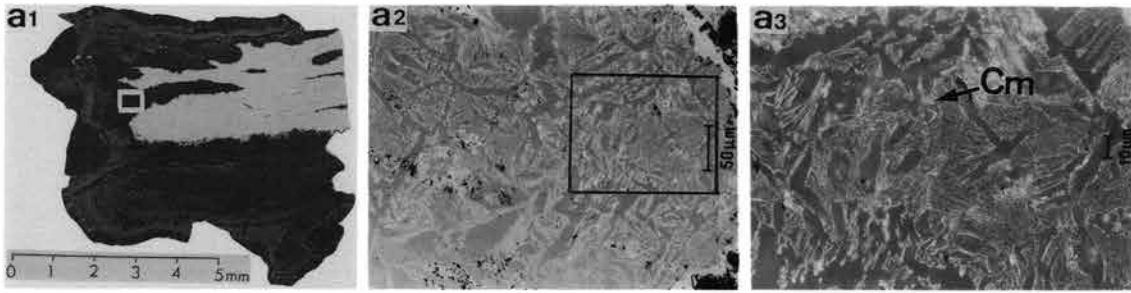
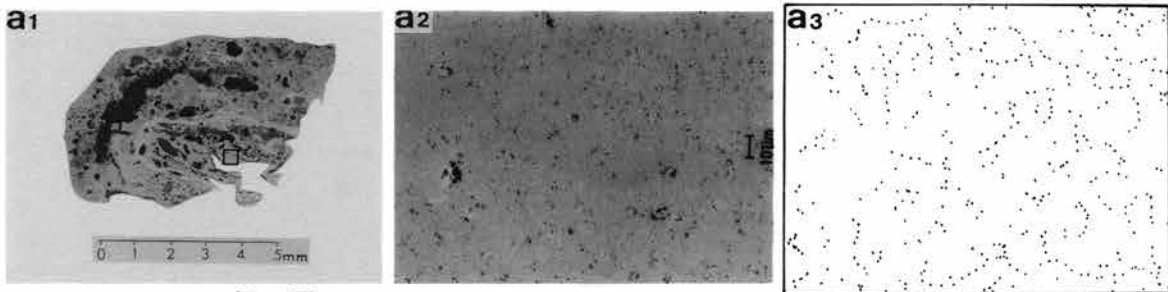
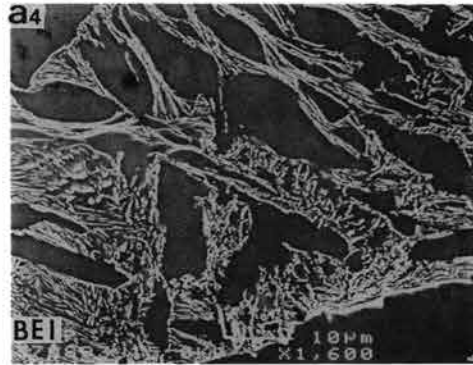


図2 No. 8 鉄片から採取した試料片のマクロおよびミクヨ組織

外観に記した線は試料切断位置、マクロ組織の枠で囲んだ部分はミクロ組織観察位置。



a₁, a₂, a₃: No. 4 鎌の耳



b₁, b₂, b₃: No. 6 鎌

図3 鉄器から採取した試料片のマクロならびにミクロ組織 (その1)

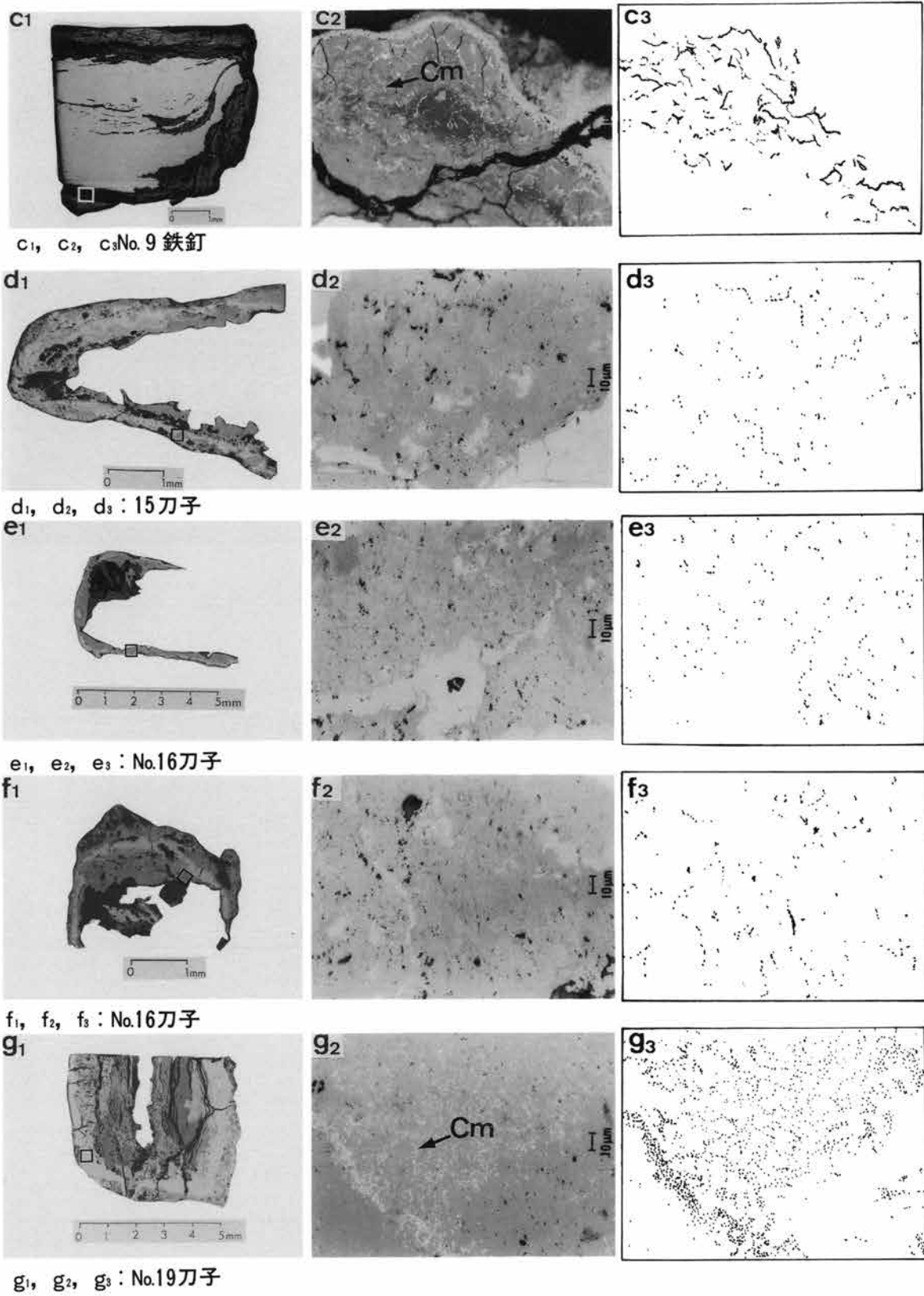


図3 鉄器から採取した試料片のマクロならびにマイクロ組織（その2）

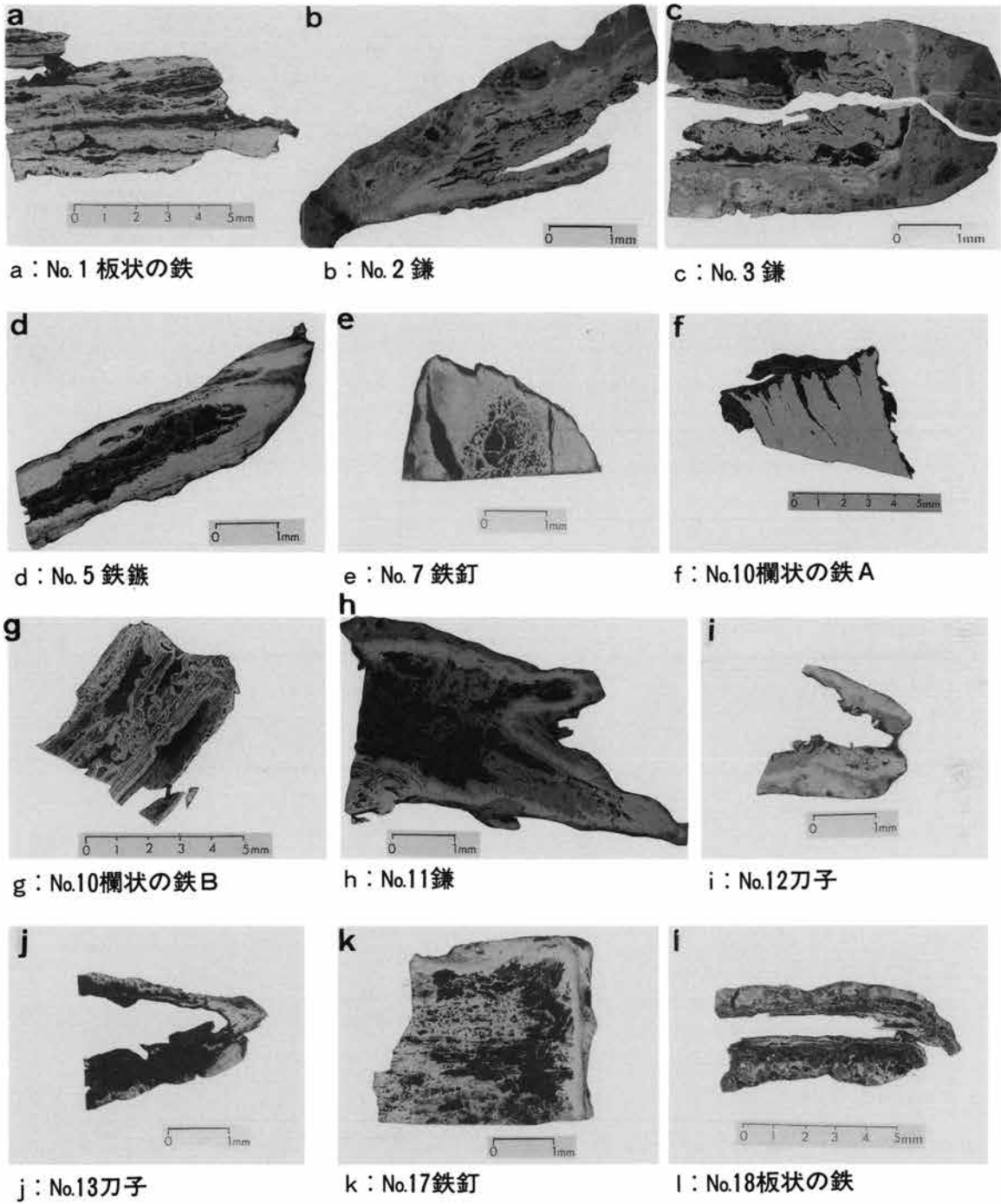


図4 鉄器から採取した試料片のマクロ組織

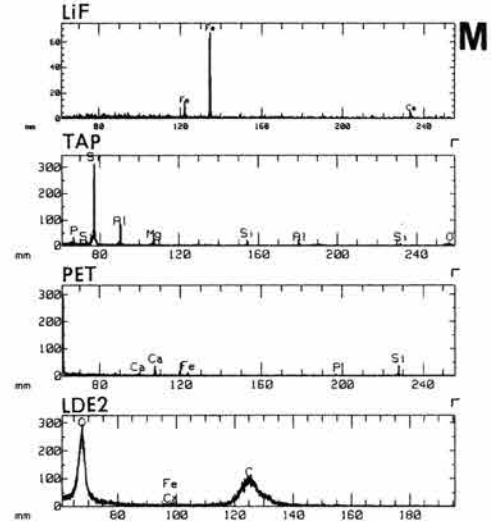
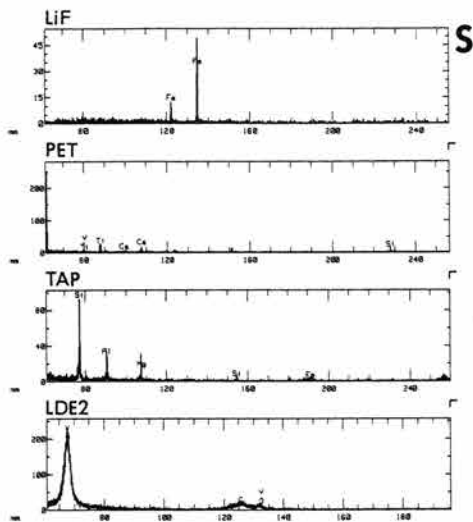
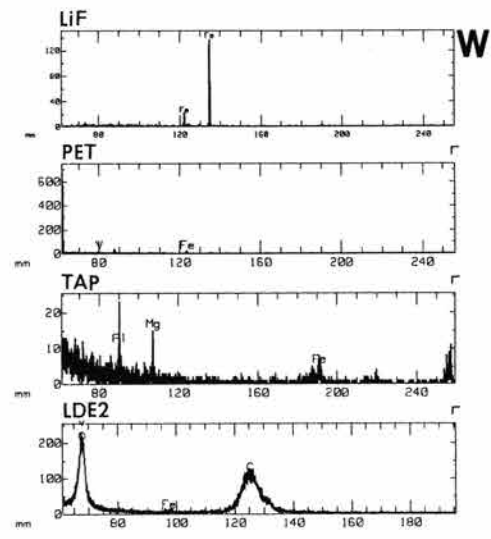
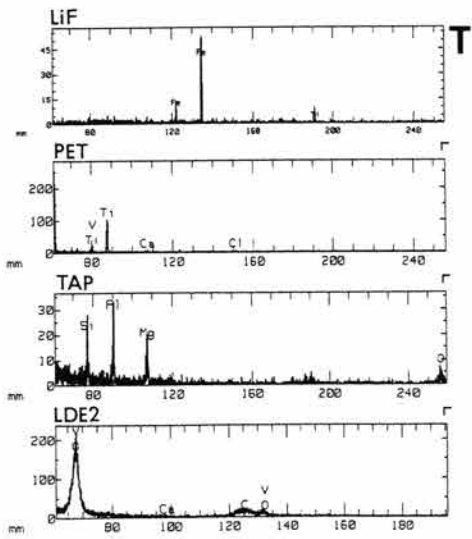
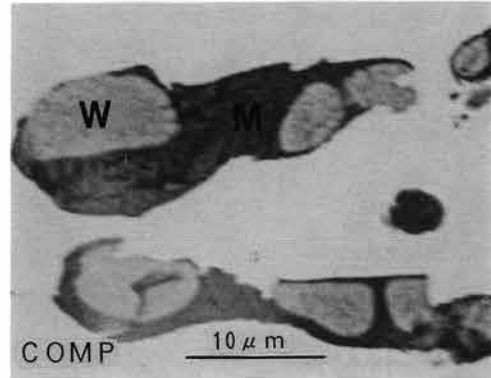
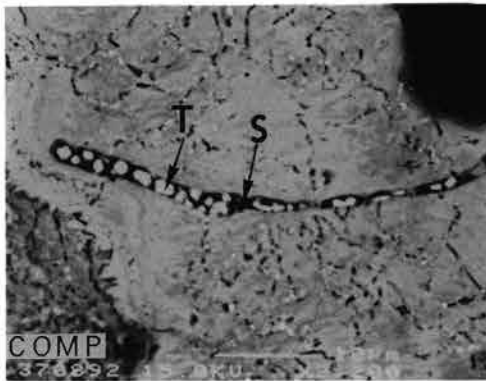


図5 No.19刀子に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

図6 No.8 鉄片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

COMP : 組成像
 T : チタン化合物
 S : ガラス質けい酸塩

COMP : 組成像
 W : ウスタイト
 M : マトリックス

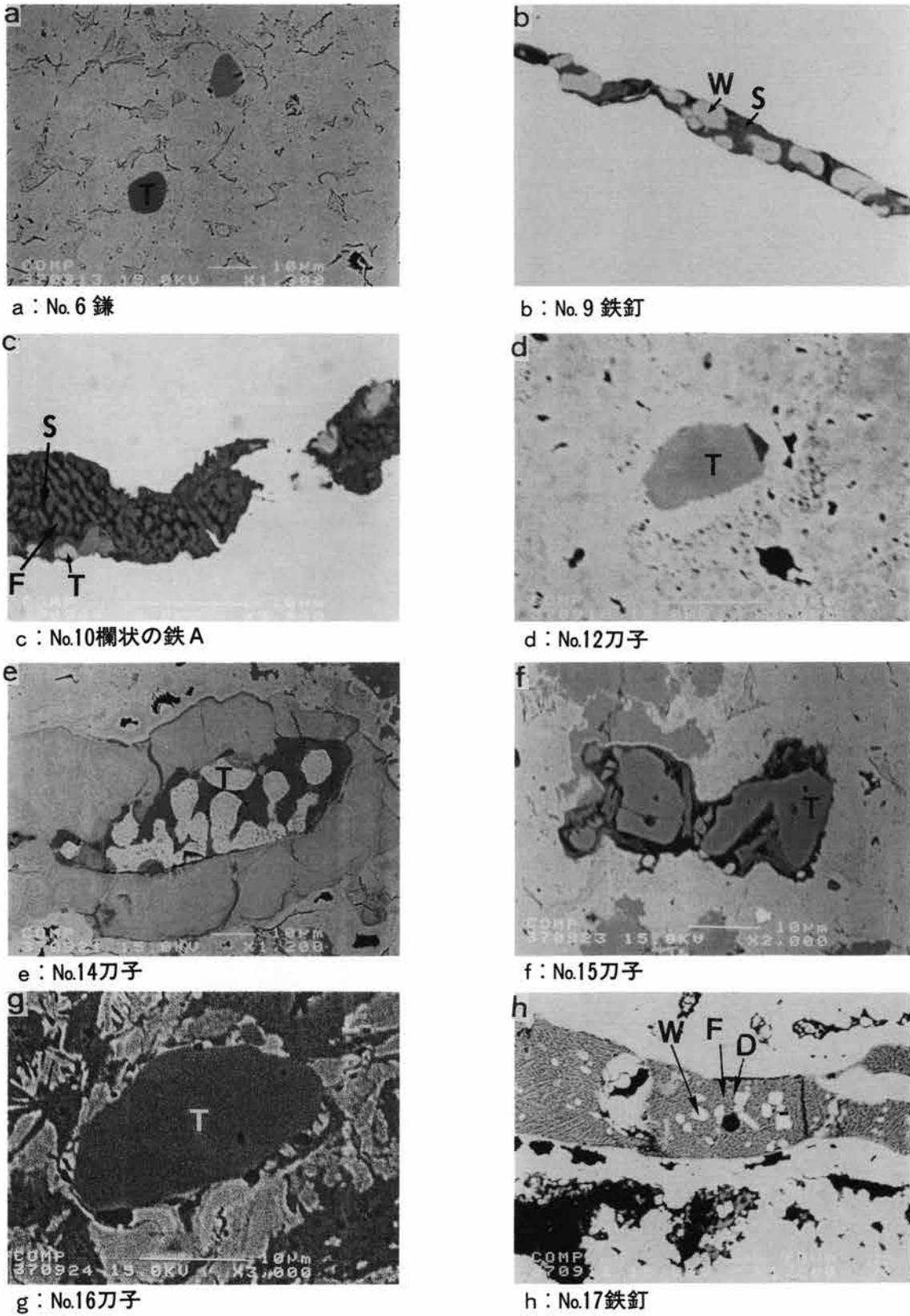
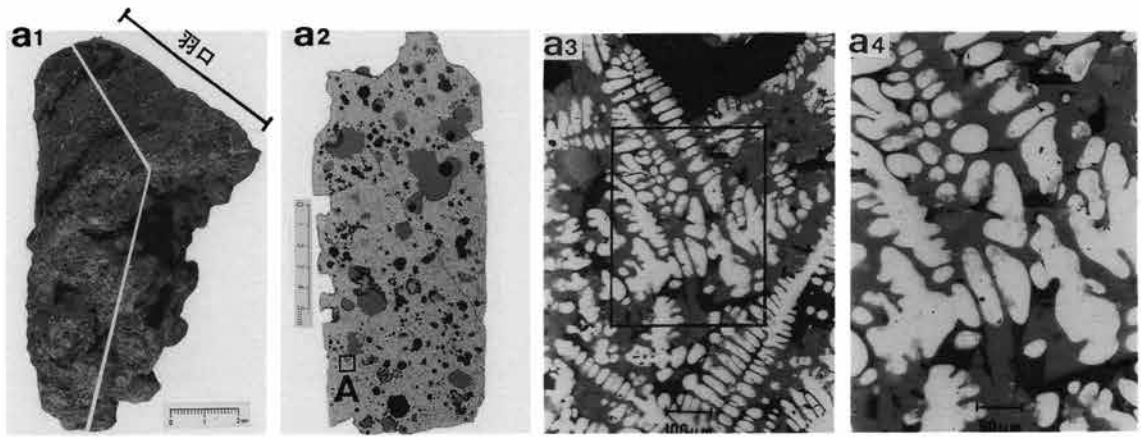
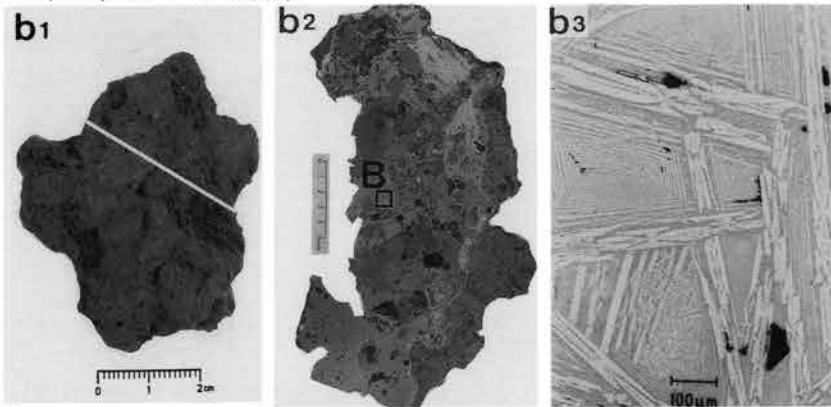


図7 鉄器から採取した試料片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

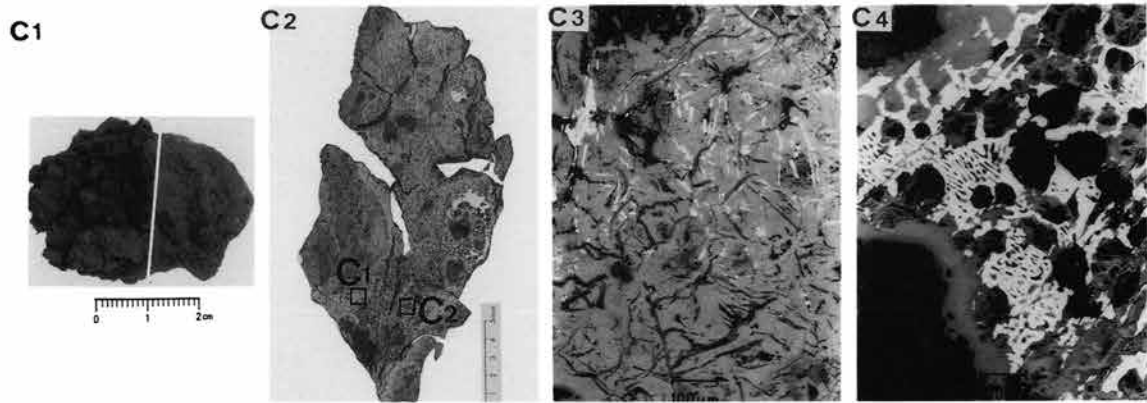
COMP：組成像，W：ウスタイト，F：FeO-MgO-SiO₂系化合物
T：チタン化合物，S：ガラス質けい酸塩，M：マトリックス。



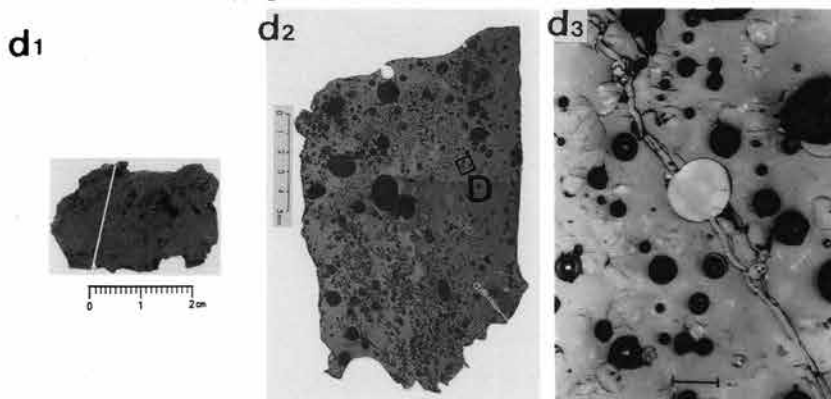
a₁, a₂, a₃ : No.21鉄滓



b₁, b₂, b₃ : No.22鉄滓 A



c₁, c₂, c₃ : No.23鉄塊



d₁, d₂, d₃ : No.24鉄滓 C

図8 鉄滓の外観とマクロ

およびミクロ

a₁の枠はミクロ組織観察位置,
a₃はa₂の枠の枠で囲んだ部分
を拡大観察したもの。

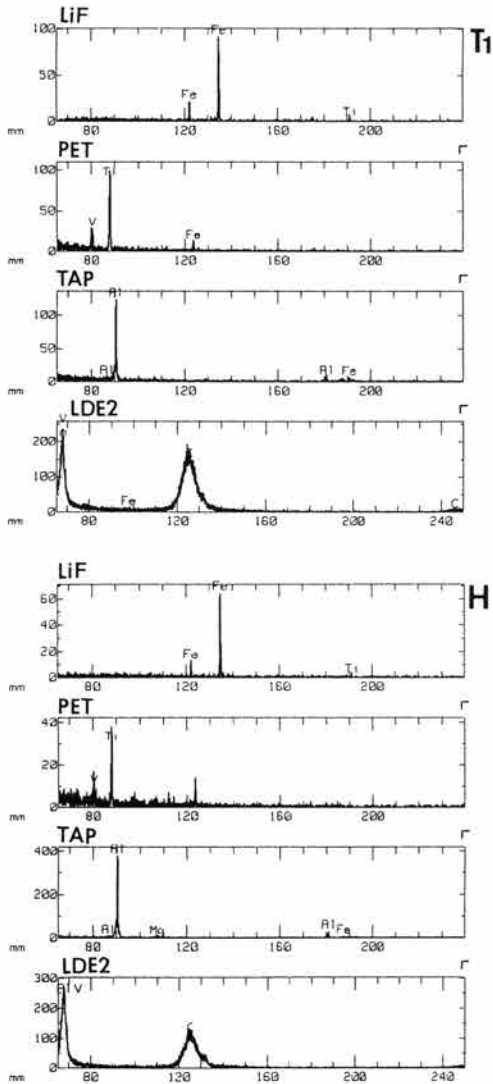
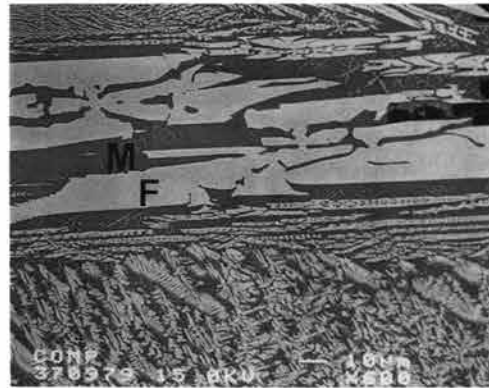
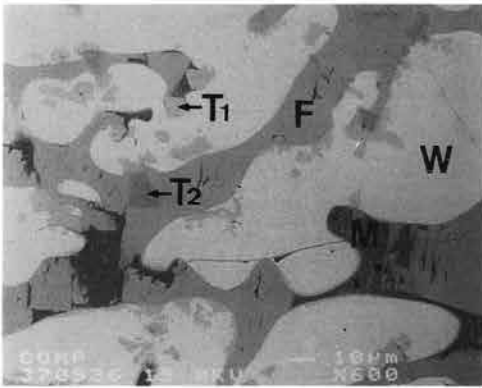


図9 No.21鉄滓のEPMAによる分析結果

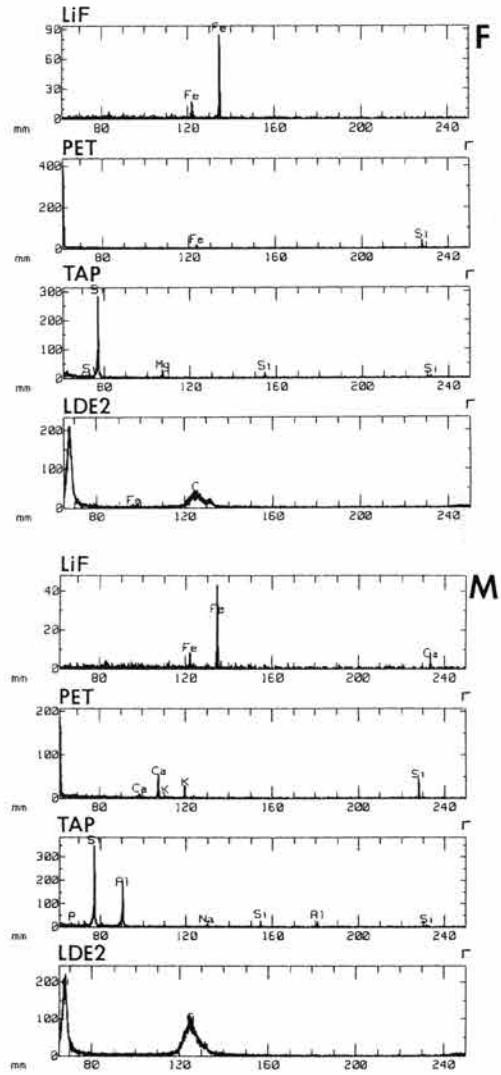


図10 No.22鉄滓のEPMAによる分析結果

COMP：組成像，W：ウスタイト，T1，T2：チタン化合物，
F：FeO-MgO-SiO₂系化合物，M：マトリックス。

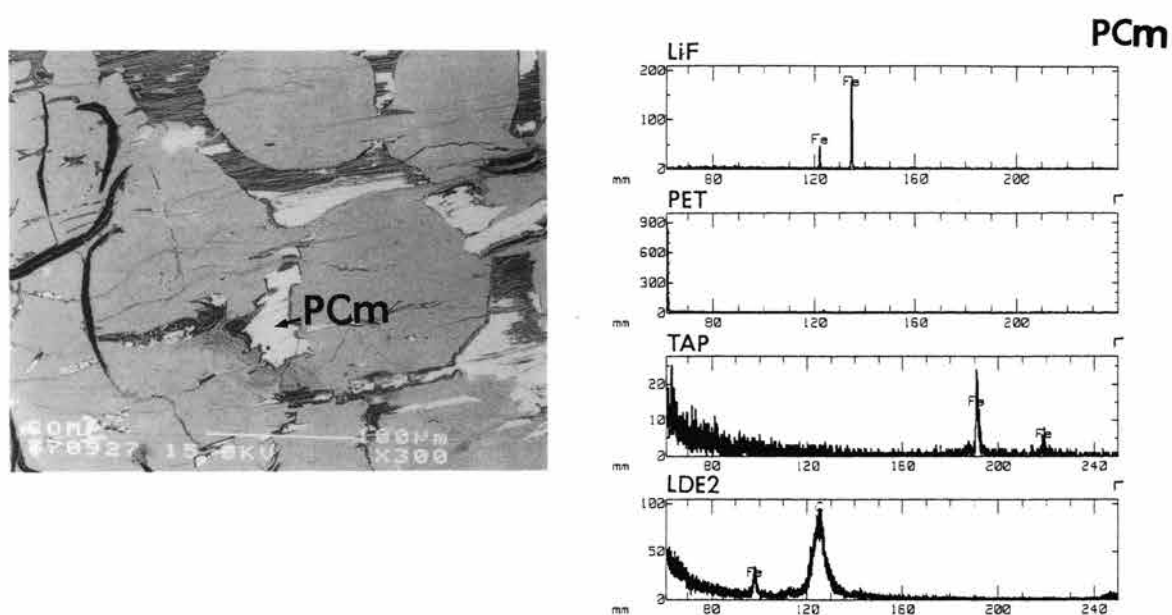


図11 No.23鉄塊に見いだされた結晶PCmのEPMAによる分析結果

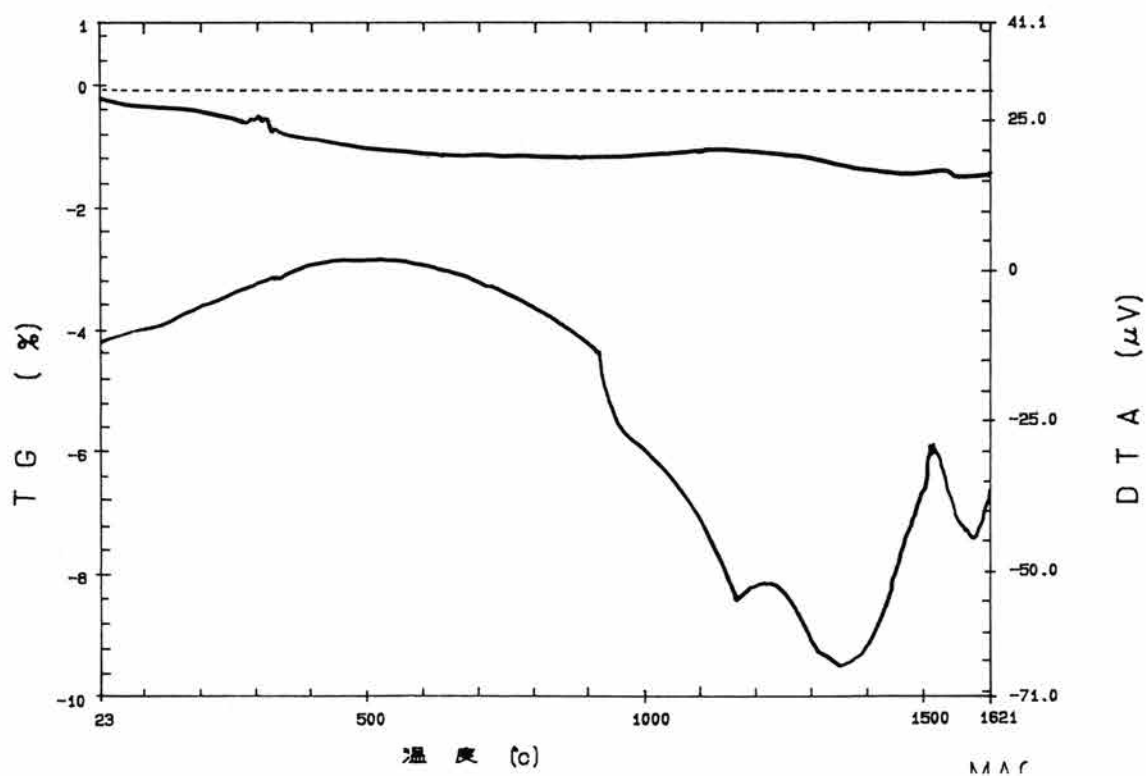


図12 No.21鉄滓のTG-DTA曲線

分析はアルゴン気流中で実施した。

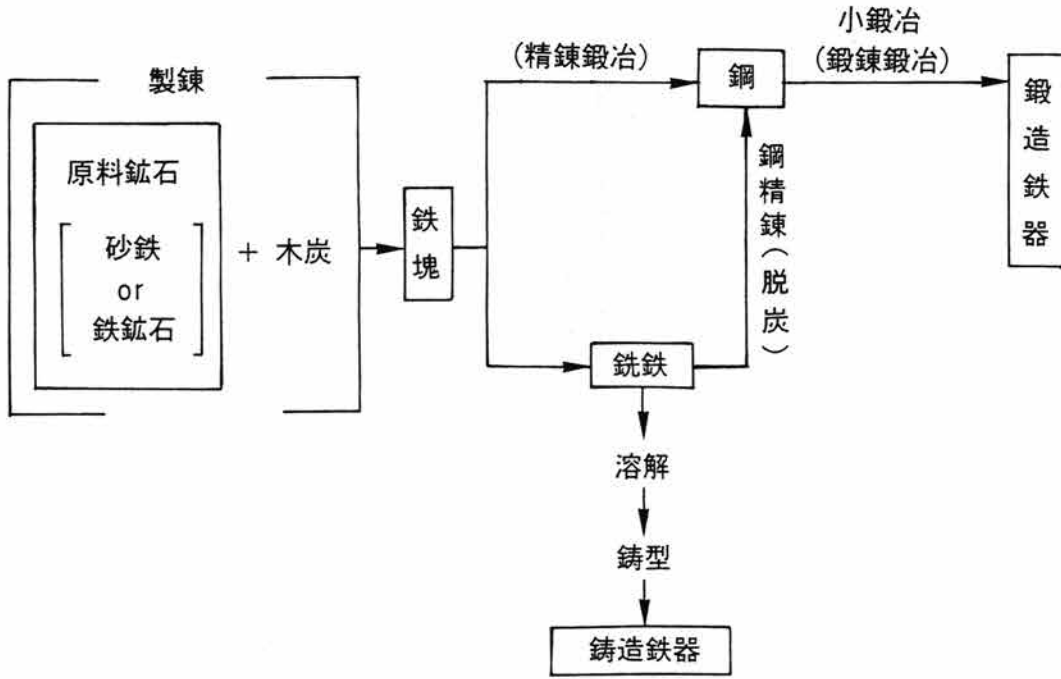
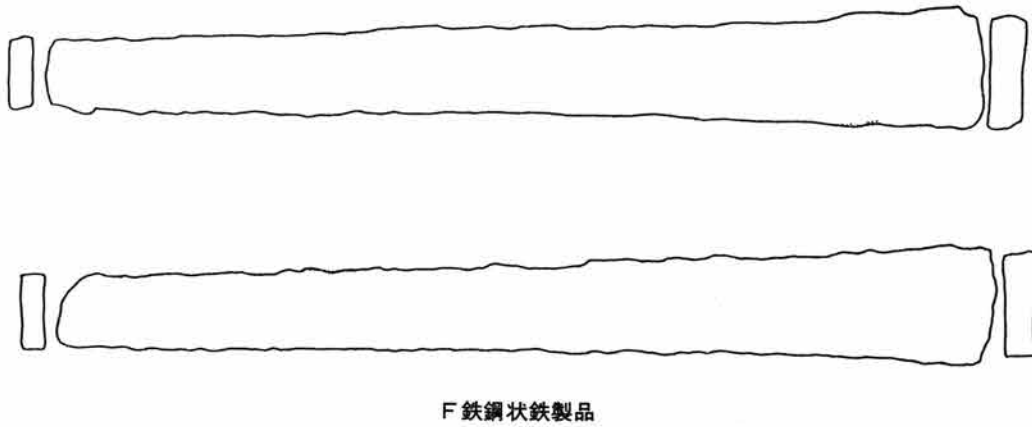


図13 推定される鋼の製造法 F 3鉄鋼状鉄製品



F鉄鋼状鉄製品

3 cm

図14 青森県浪岡城出土鉄鋼状鉄製品(鋼素材)の実測図

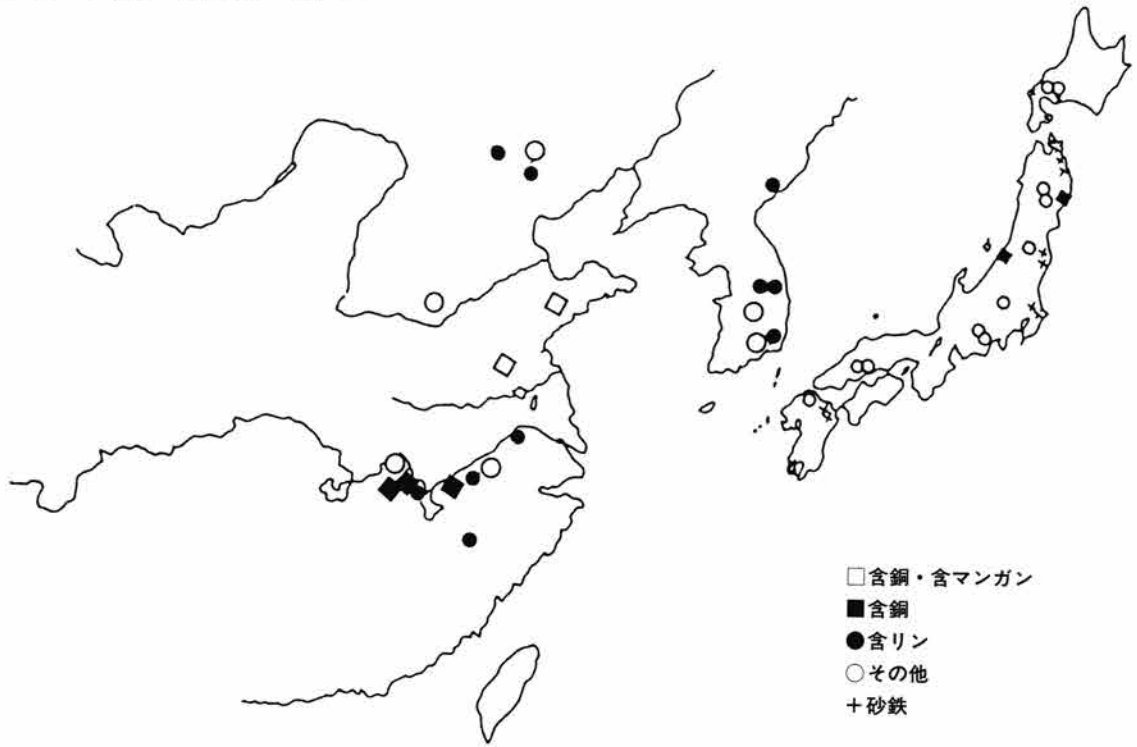


図15 日本列島・中国・朝鮮半島に分布する主な鉄鉱山

表1 分析資料

No.	資料名	出土遺構	推定年代	No.	資料名	出土遺構	推定年代
1	板状の鉄	5号住	7世紀後半	15	刀子	23号住	10世紀後半
2	鎌	39号住	〃	16	刀子	〃	〃
3	鎌	〃	〃	17	鉄釘	60土坑	不明
4	鎌の耳	〃	〃	18	板状の鉄	32土坑	不明
5	鉄鏃	40号住	〃	19	刀子	3号溝	不明
6	鎌	20号住	8世紀前半	20	スケール	44号住居跡上層	8世紀前半以降
7	鉄釘	44号住居跡上層	8世紀前半?	21	鉄滓	105土坑	不明
8	鉄片	〃	〃	22	鉄滓A	〃	不明
9	鉄釘	1号住	〃	23	鉄滓B	〃	不明
10	楔状の鉄	〃	〃	24	鉄滓C	〃	不明
11	鎌	42号住	9世紀後半				
12	刀子	27号住	10世紀前半				
13	刀子	23号住	10世紀後半				
14	刀子	〃	〃				

注) No.7、No.8、No.20は44号住居廃棄後、新たに掘りこまれた土坑に伴う遺物、No.9、No.10は近世・近代の土坑に伴うものの可能性が指摘される。

表2 鉄器の分析結果

No	資料名	化学成分 (%)											ミクロ組織	N.M.I	
		T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg			V
1	板状の鉄	63.50	0.031	0.142	0.005	0.015	0.007	0.002	<0.001	0.015	0.014	0.007	tr	no	no
2	鎌	55.50	0.272	0.011	0.035	0.015	0.008	0.049	1.80	0.110	0.935	0.104	0.002	no	no
3	鎌	55.90	0.332	0.007	0.013	0.014	0.008	0.049	1.85	0.131	1.02	0.094	0.002	no	no
4	鎌の耳	49.90	0.033	0.015	0.009	0.006	0.005	0.083	3.08	0.163	1.42	0.142	0.004	Cm(0.1~0.2)	no
5	鉄鎌	63.40	0.098	0.003	0.030	0.041	0.016	0.007	0.297	0.050	0.092	0.006	<0.001	no	no
6	鎌	63.80	0.042	0.003	0.033	0.033	0.064	0.027	0.642	0.060	0.448	0.040	0.002	Cm(0.2~0.3)	T
7	鉄釘	97.20	0.022	<0.001	0.031	0.011	0.058	0.024	0.531	0.006	0.017	0.010	0.002	no	no
8	鉄片	62.60	0.026	0.002	0.024	0.029	0.048	0.015	0.387	0.059	0.197	0.037	0.002	Cm(0.5 <)	(W,M), (M)
9	鉄釘	96.10	0.011	0.007	0.031	0.005	0.017	0.008	0.137	0.017	0.041	0.003	<0.001	Cm(0.1~0.2)	W,S
10	楔状の鉄A	94.40	0.013	<0.001	0.007	0.050	0.020	0.073	0.436	0.015	0.026	0.007	0.003	no	(F,S), (T,F,S)
	楔状の鉄B	52.50	0.016	0.005	0.034	0.060	0.036	0.220	0.217	0.214	0.181	0.034	0.044	no	no
11	鎌	61.80	0.025	tr	0.025	0.017	0.043	0.015	1.16	0.005	0.037	0.006	0.002	no	no
12	刀子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	no	T
13	刀子	60.40	0.019	0.006	0.096	0.017	0.045	0.023	0.482	0.026	0.104	0.032	0.008	no	no
14	刀子	59.50	0.047	0.007	0.184	0.012	0.018	0.142	1.21	0.107	0.526	0.055	0.054	Cm(0.1~0.2)	T
15	刀子	58.70	0.032	0.006	0.183	0.012	0.022	0.104	1.01	0.055	0.311	0.043	0.041	Cm(0.1~0.2)	T
16	刀子	60.60	0.033	0.001	0.075	0.023	0.037	0.019	0.775	0.014	0.188	0.011	0.001	Cm(0.1~0.2)	T
17	鉄釘	59.30	0.007	0.003	0.225	0.007	0.011	0.006	0.881	0.040	0.357	0.019	<0.001	no	W,F
18	板状の鉄	32.90	0.003	0.143	0.963	<0.001	0.008	0.819	18.3	1.11	2.07	2.14	0.040	no	no
19	刀子	61.30	0.022	0.005	0.033	0.045	0.088	0.077	0.768	0.038	0.342	0.046	0.011	Cm(0.5 <)	T,S

注1) -は分析せず、trは痕跡を表す。

注2) Cmはセメントタイトもしくはその欠落孔、ミクロ組織カッコン内の数字は組織観察結果から推定される炭素含有量、noは見いだされずを表す。

注3) N.M.I は非金属介在物組成、Wはウスタイト (理論組成FeO)、FはFeO-SiO₂系化合物、Sはガラス質けい酸塩、Mはマトリックスである。

表3 No.20鍛造薄片とNo.23鉄塊の分析結果

No	資料名	化 学 成 分 (%)											
		T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V
20	鍛造薄片	66.10	0.014	0.004	0.023	0.019	0.044	0.031	0.297	0.025	0.155	0.018	0.003
23	鉄塊	76.50	0.026	0.001	0.024	0.022	0.046	0.066	<0.001	0.018	0.016	0.001	tr

表4 鉄滓の分析結果

No	化 学 成 分 (%)											CaO+MgO	CaO+MgO	鉱物組成
	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	P ₂ O ₅	TiO ₂	SiO ₂	CaO	Al ₂ O ₃	MgO	V ₂ O ₅			
21	57.81	0.56	62.23	12.70	—	1.91	11.80	1.44	4.61	1.37	—	0.238	0.610	W, T ₁ , T ₂ , F, M
22	37.31	<0.10	33.77	15.80	—	0.45	31.88	2.43	10.08	1.752	—	0.131	0.415	F, M
24	13.10	—	—	—	0.775	0.550	63.55	2.76	11.53	1.04	0.032	0.060	0.330	S

注1) M.Fe, FeO, Fe₂O₃はクロム酸カリウム滴定容量法、他はICP-AES法による。

注2) Wはウスタイト、T₁, T₂はチタン化合物、FはFeO-MgO-SiO₂系化合物、Sはガラス質けい酸塩、Mはマトリックス。

表5 化学組成と非金属介在物組成に基づく鍛造鉄器の分類

大分類	細分類	資料名
O	O _{co}	No.8 鉄片
	O _u	No.9 鉄釘
	(O _p)	No.17 鉄釘
S	S _{co}	No.6 鎌
	S _{ni}	No.10 楔状の鉄
	S _{cu,p}	No.14 刀子
	S _p	No.15 刀子
	S _{co,ni}	No.19 刀子
	S _u	No.12 刀子, No.16 刀子
U	U _{cu}	No.2 鎌, No.3 鎌, No.5 鉄鎌
	U _{co}	No.7 鉄釘
	U _{p,ni}	No.13 刀子
	U _u	No.4 鎌の耳, No.11 鎌

注1) Oグループは鋼の製造過程で砂鉄の使用が認められないもの、Sグループは砂鉄の使用により製造された鋼を素材とするもの、Uは砂鉄使用の有無が不明なもの。

注2) (Op)はもとの健全な地金に相当量のP分を含有する可能性のあるものを表す。

写真図版



1. 中江田八ツ縄遺跡全景（南東から）

図版 2



1. 調査1区全景 (南東から)



2. 調査2区全景 (左上が北)



1. 旧石器試掘土層断面1 (南から)



2. 旧石器試掘土層断面2 (南から)

図版 4



1. 1区1号住居跡全景（西から）



2. 1区1号住居跡竈遺物出土状態（西南から）



3. 1区1号住居跡竈掘り方（西から）



4. 1区2号住居跡竈（西から）



5. 1区2号住居跡竈土層断面（西から）



1. 1区2号住居跡全景（西から）



2. 1区2号住居跡掘り方（西から）



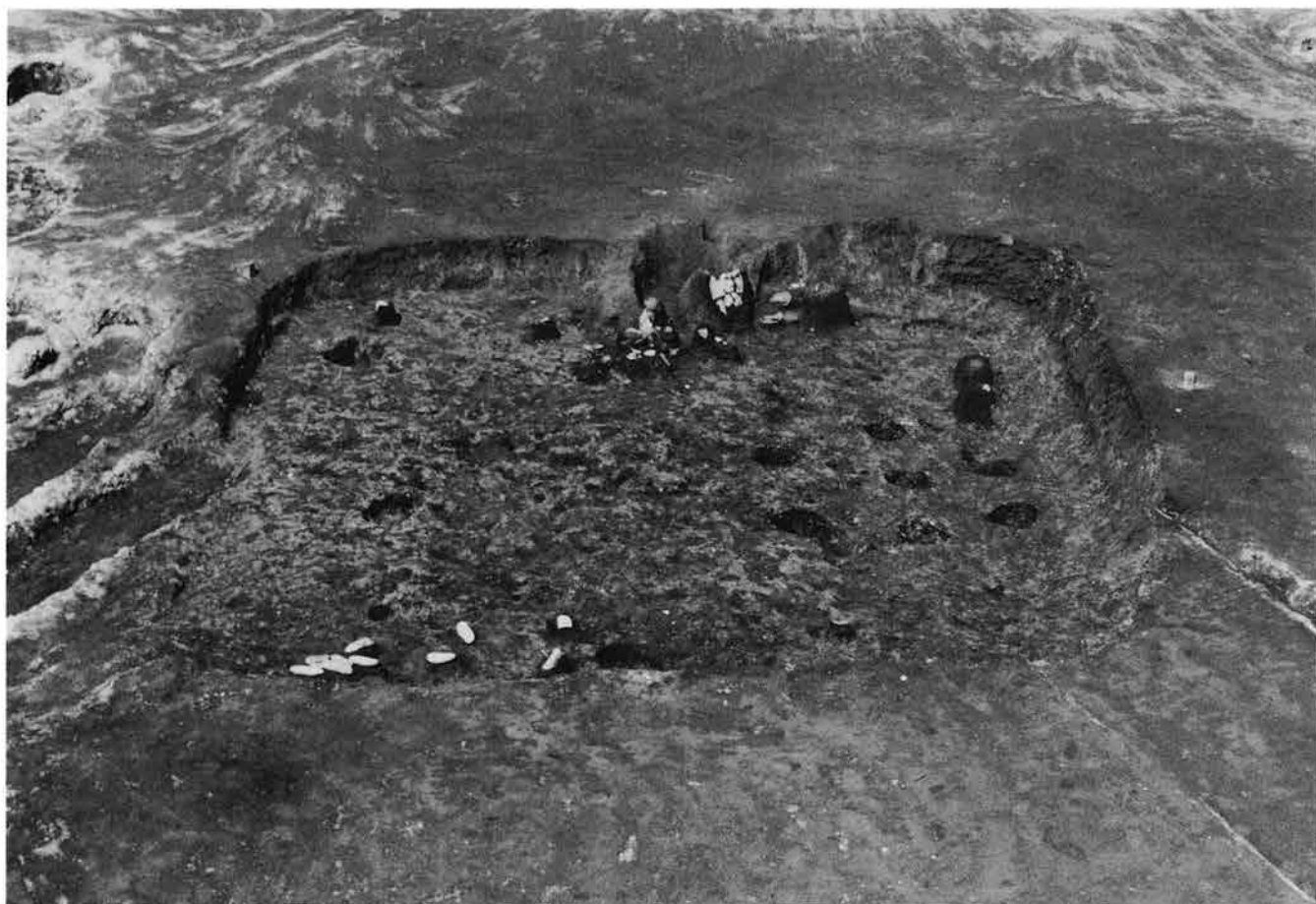
3. 1区3号住居跡竈（南から）



4. 1区3号住居跡竈掘り方（南から）



5. 1区3号住居跡遺物出土状態（東から）



1. 1区3号住居跡全景（南から）



2. 1区4号住居跡全景（西から）



1. 1区4号住居跡掘り方（西から）



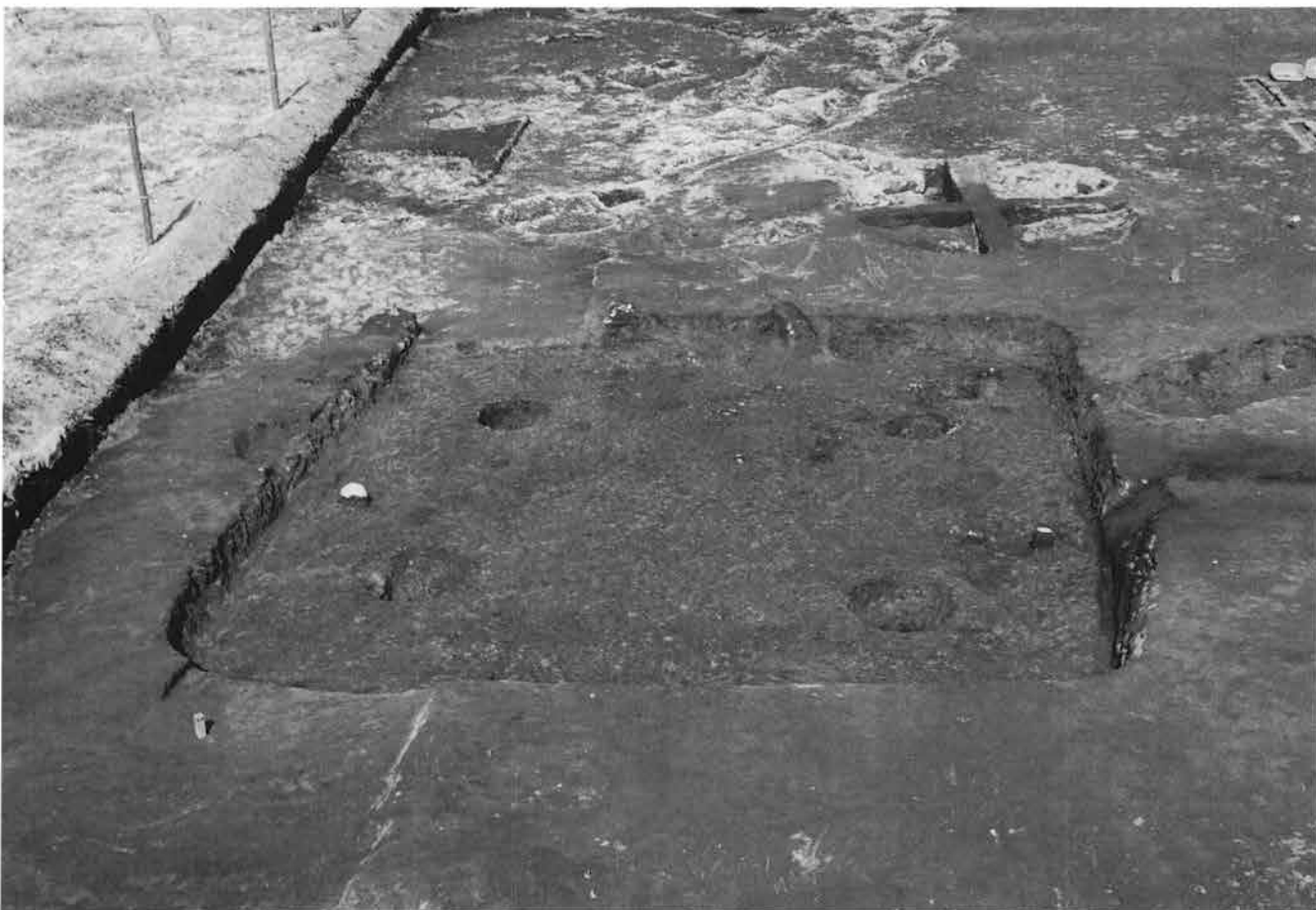
2. 1区4号住居跡2号竈（西から）



3. 1区4号住居跡2号竈掘り方（西から）



4. 1区4号住居跡遺物出土状態（北西から）



5. 1区5号住居跡全景（南東から）

図版 8



1. 1区5号住居跡竈 (南東から)



2. 1区5号住居跡貯蔵穴土層断面 (南から)



3. 1区5・21号住居跡全景 (南西から)



4. 1区21号住居跡竈掘り方 (南西から)



5. 1区5・21号住居跡掘り方 (南西から)



1. 1区21号住居跡柱穴7土層断面 (南から)



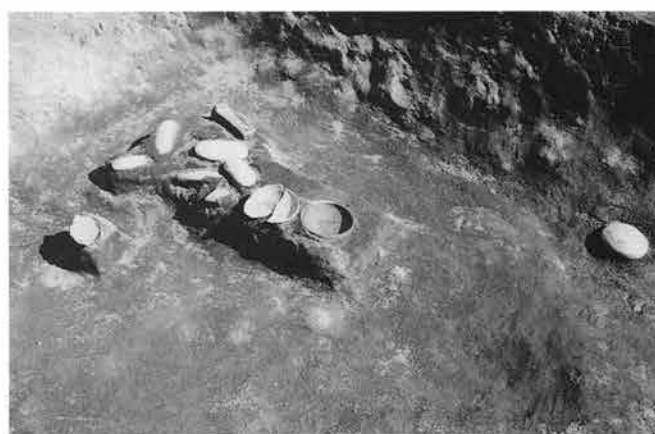
2. 1区6号住居跡土層断面 (南東から)



3. 1区6号住居跡全景 (北東から)



4. 1区6号住居跡掘り方 (北東から)



5. 1区7号住居跡遺物出土状態 (西から)



1. 1区7号住居跡全景（南から）



2. 1区7号住居跡竈（南から）



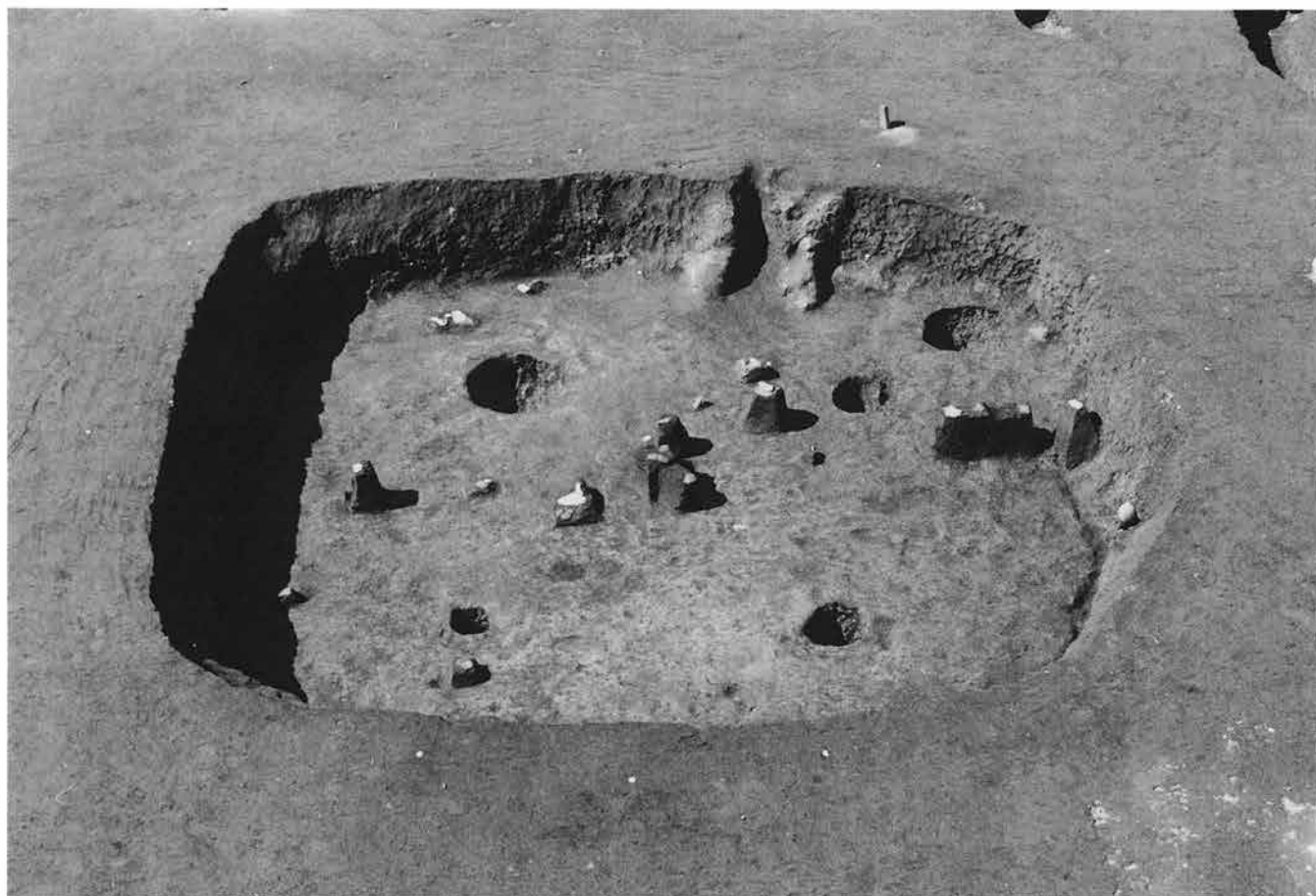
3. 1区7号住居跡掘り方（南から）



4. 1区8号住居跡竈（南東から）



5. 1区8号住居跡遺物出土状態（北東から）



1. 1区8号住居跡全景（南東から）



2. 1区8号住居跡遺物出土状態（東から）



3. 1区8号住居跡竈掘り方（南から）



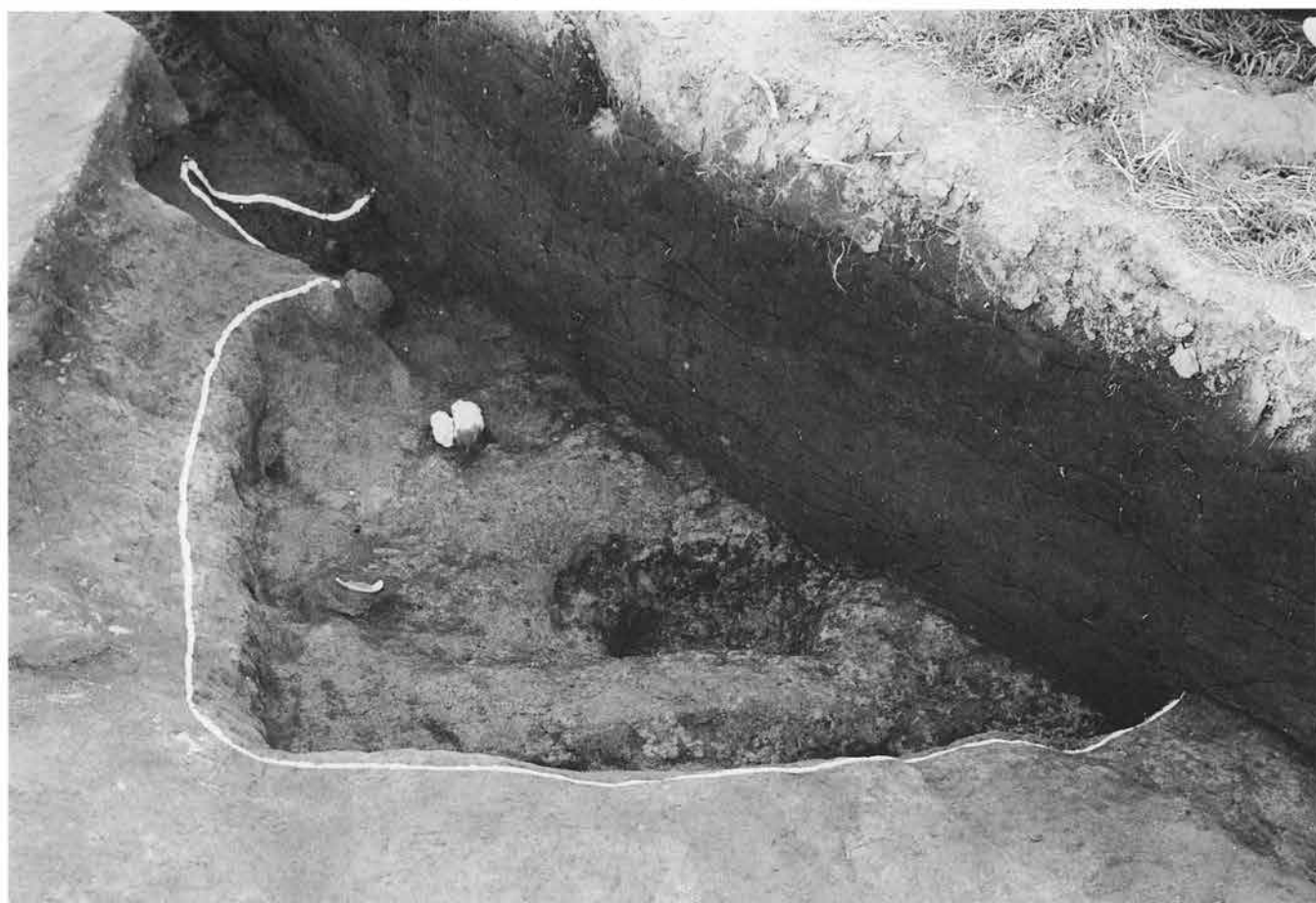
4. 1区8号住居跡掘り方（南東から）



5. 1区9号住居跡土層断面（西から）



1. 1区9号住居跡全景（西から）



2. 1区10号住居跡全景（北から）



1. 1区10号住居跡掘り方（北東から）



2. 1区10号住居跡竈遺物出土状態（南西から）



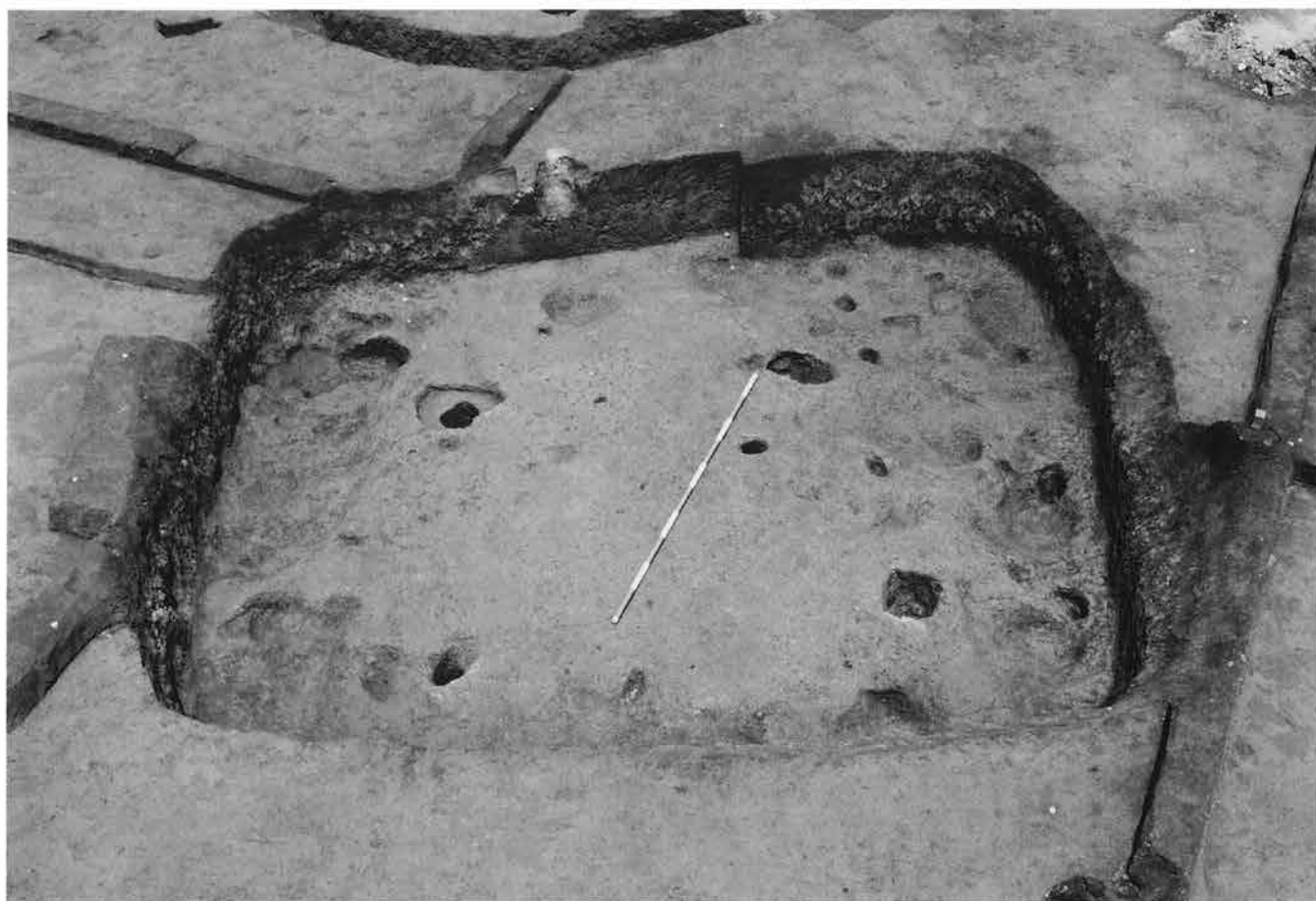
3. 1区10号住居跡竈土層断面（南西から）



4. 1区12号住居跡上層遺物出土状態（南西から）



5. 1区12号住居跡全景（北東から）



1. 1区12号住居跡掘り方（南東から）



2. 1区12号住居跡竈①（南東から）



3. 1区12号住居跡竈②（南東から）



4. 1区12号住居跡貯蔵穴土層断面（南東から）



5. 1区12号住居跡遺物出土状態（西から）



1. 1区14号住居跡掘り方・36号土坑全景（西から）



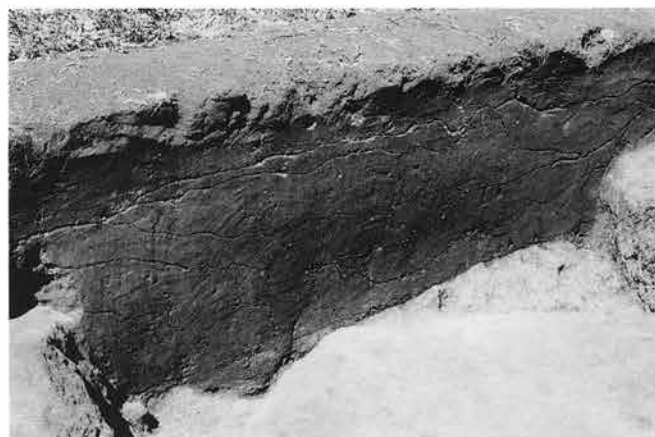
2. 1区14号住居跡竈（西から）



3. 1区14号住居跡竈掘り方土層断面（南から）



4. 1区14号住居跡遺物出土状態（西から）



5. 1区15号住居跡土層断面（東から）



1. 1区15号住居跡全景（北から）



2. 1区15号住居跡掘り方（北東から）



3. 1区15号住居跡竈（西から）



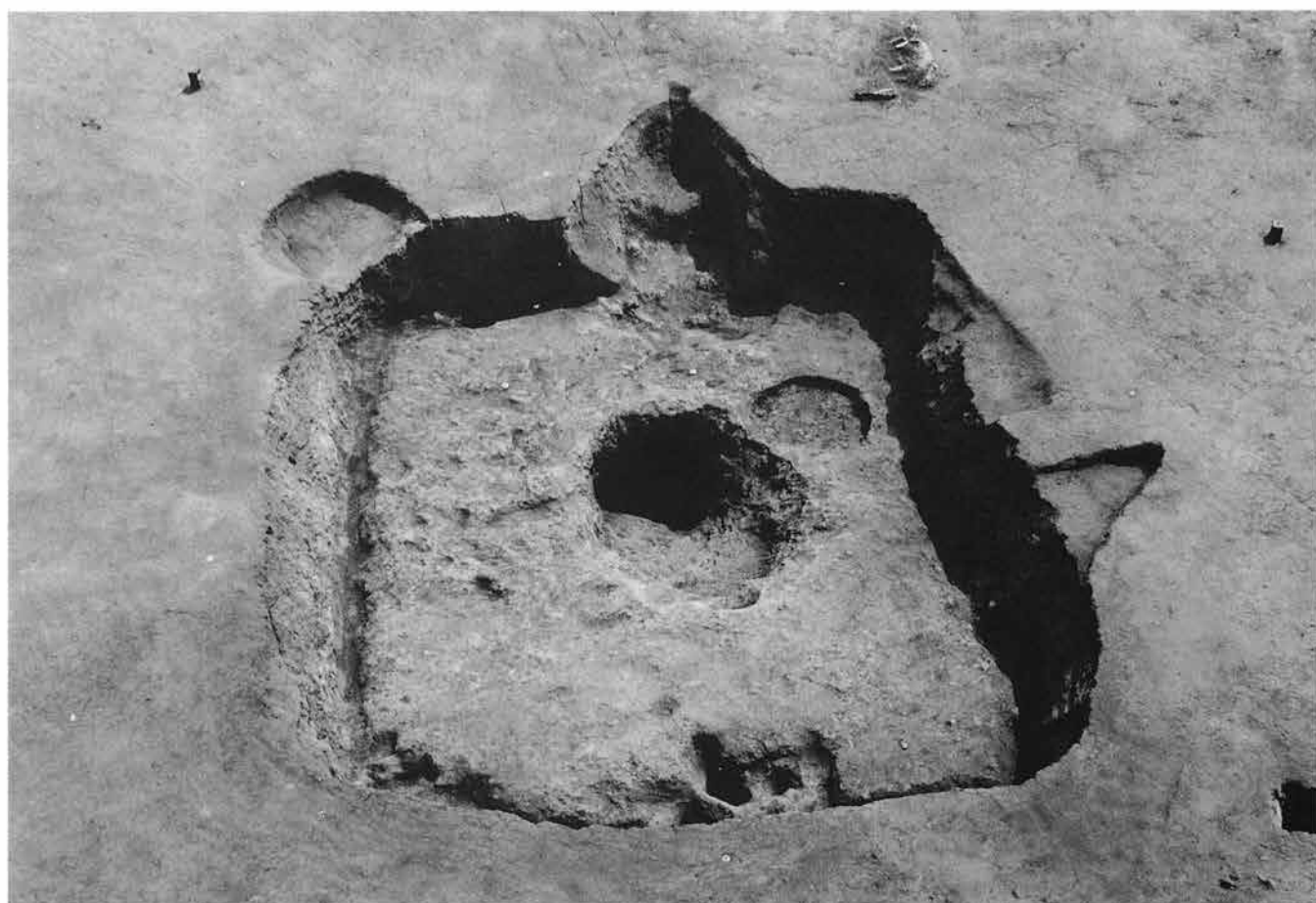
4. 1区16号住居跡遺物出土状態（北から）



5. 1区16号住居跡掘り方（北西から）



1. 1区16号住居跡全景（南西から）



2. 1区17号住居跡全景（南西から）



1. 1区17号住居跡土層断面 (南東から)



2. 1区17号住居跡竈 (西から)



3. 1区17号住居跡竈掘り方 (西から)



4. 1区17号住居跡遺物出土状態 (西から)



5. 1区18号住居跡全景 (西から)



1. 1区18号住居跡掘り方（西から）



2. 1区18号住居跡竈（西から）



3. 1区18号住居跡竈掘り方（西から）



4. 1区18号住居跡緑釉陶器出土状態（北から）



5. 1区19号住居跡全景（南から）



1. 1区19号住居跡土層断面（南から）



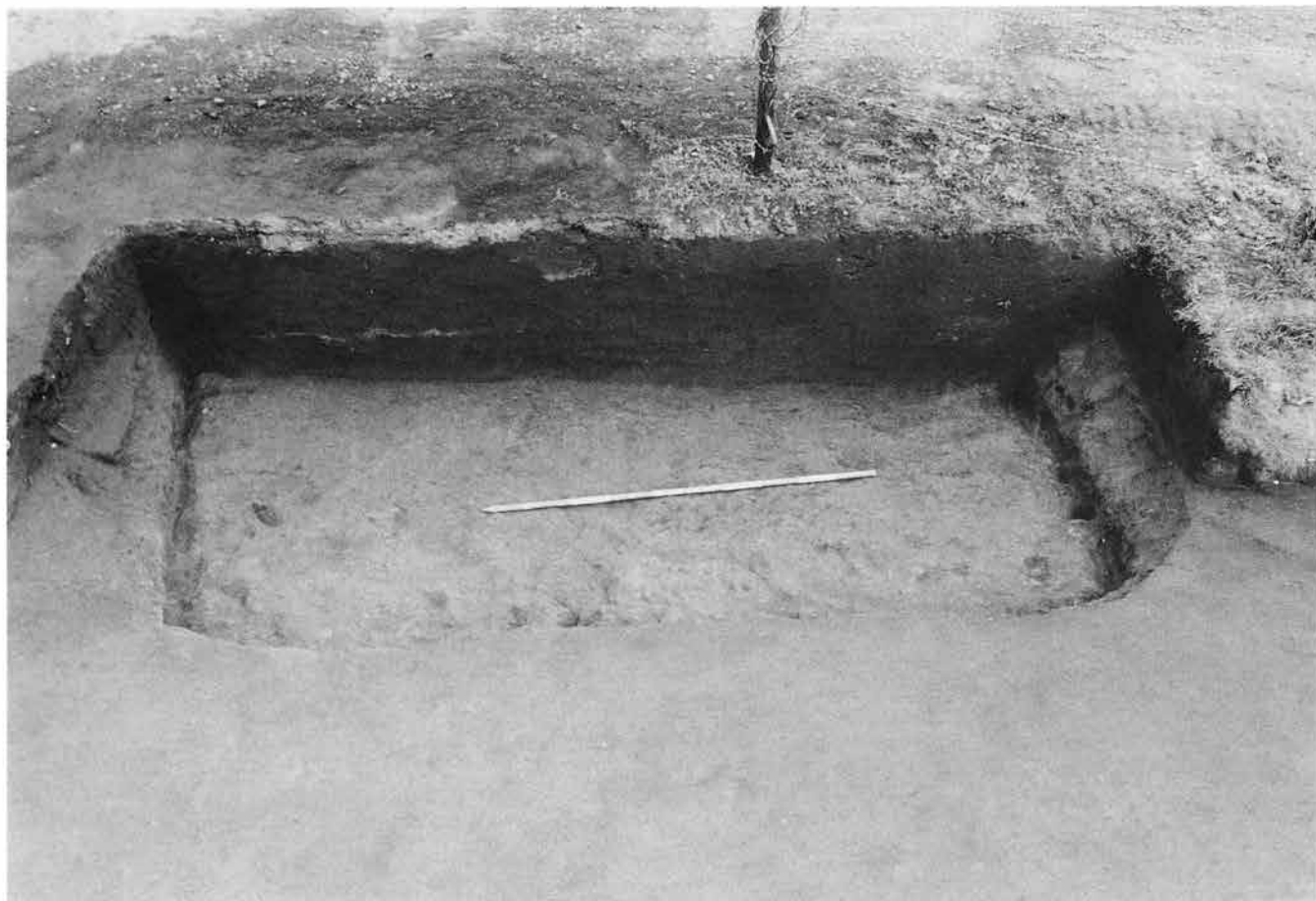
2. 1区19号住居跡竈土層断面（南から）



3. 1区19号住居跡竈（南から）



4. 1区19号住居跡遺物出土状態（南から）



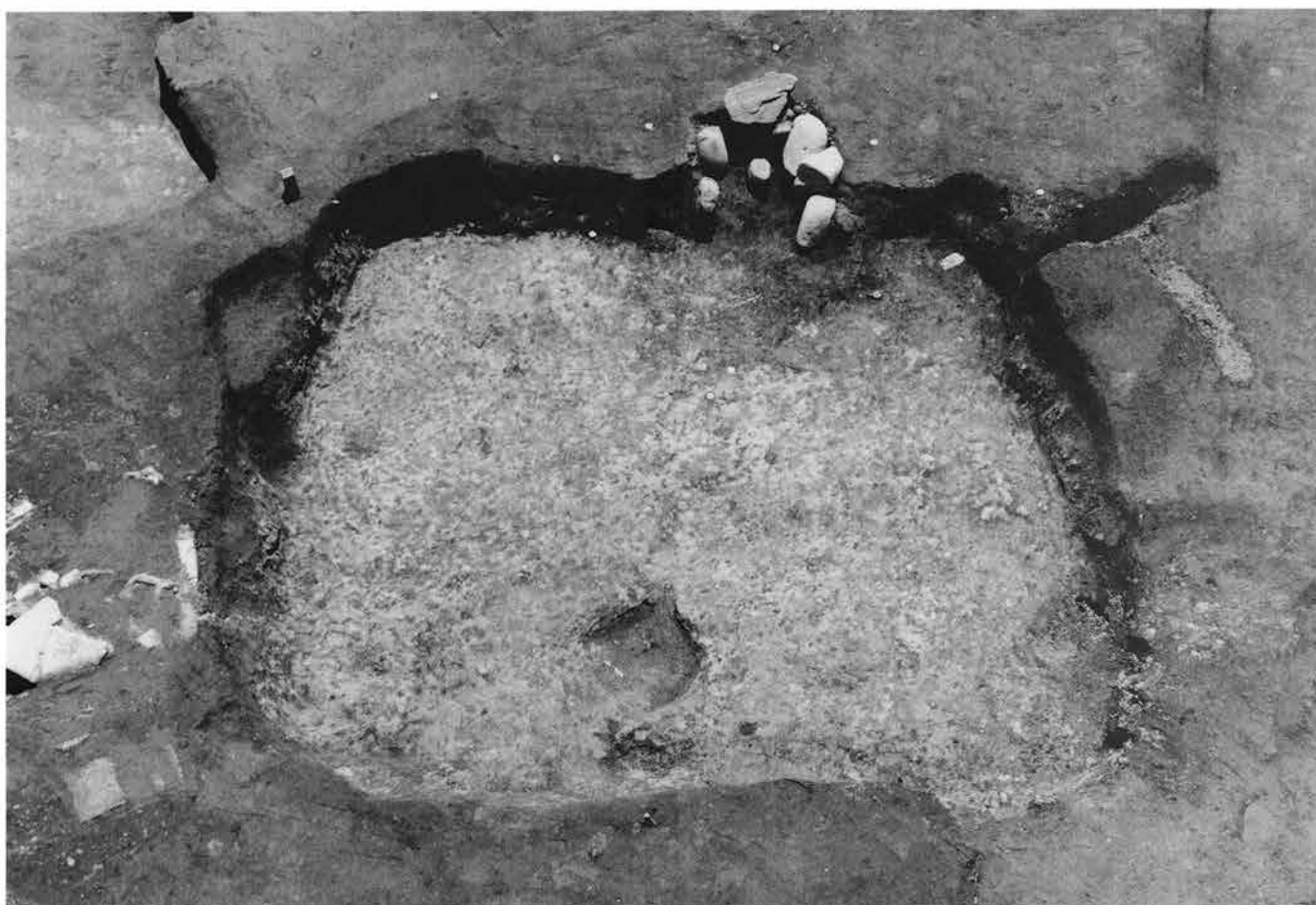
5. 1区20号住居跡全景（西から）



1. 1区20号住居跡遺物出土状態（西から）



2. 1区20号住居跡鎌出土状態（東から）



3. 1区23号住居跡全景（北西から）



4. 1区23号住居跡掘り方（北西から）



5. 1区23号住居跡竈（北西から）



1. 1区24号住居跡全景（南西から）



2. 2区27号住居跡全景（西から）



1. 2区27号住居跡掘り方 (西から)



2. 2区27号住居跡竈 (西から)



3. 2区28号住居跡全景 (西から)



4. 2区28号住居跡竈土層断面 (西から)



5. 2区28号住居跡竈 (西から)



1. 2区29号住居跡全景（西から）



2. 2区29号住居跡掘り方（西から）



3. 2区29号住居跡竈土層断面（西から）



4. 2区31号住居跡竈（西から）



5. 2区31号住居跡遺物出土状態（南から）



1. 2区31号住居跡全景（西から）



2. 2区31号住居跡掘り方（西から）



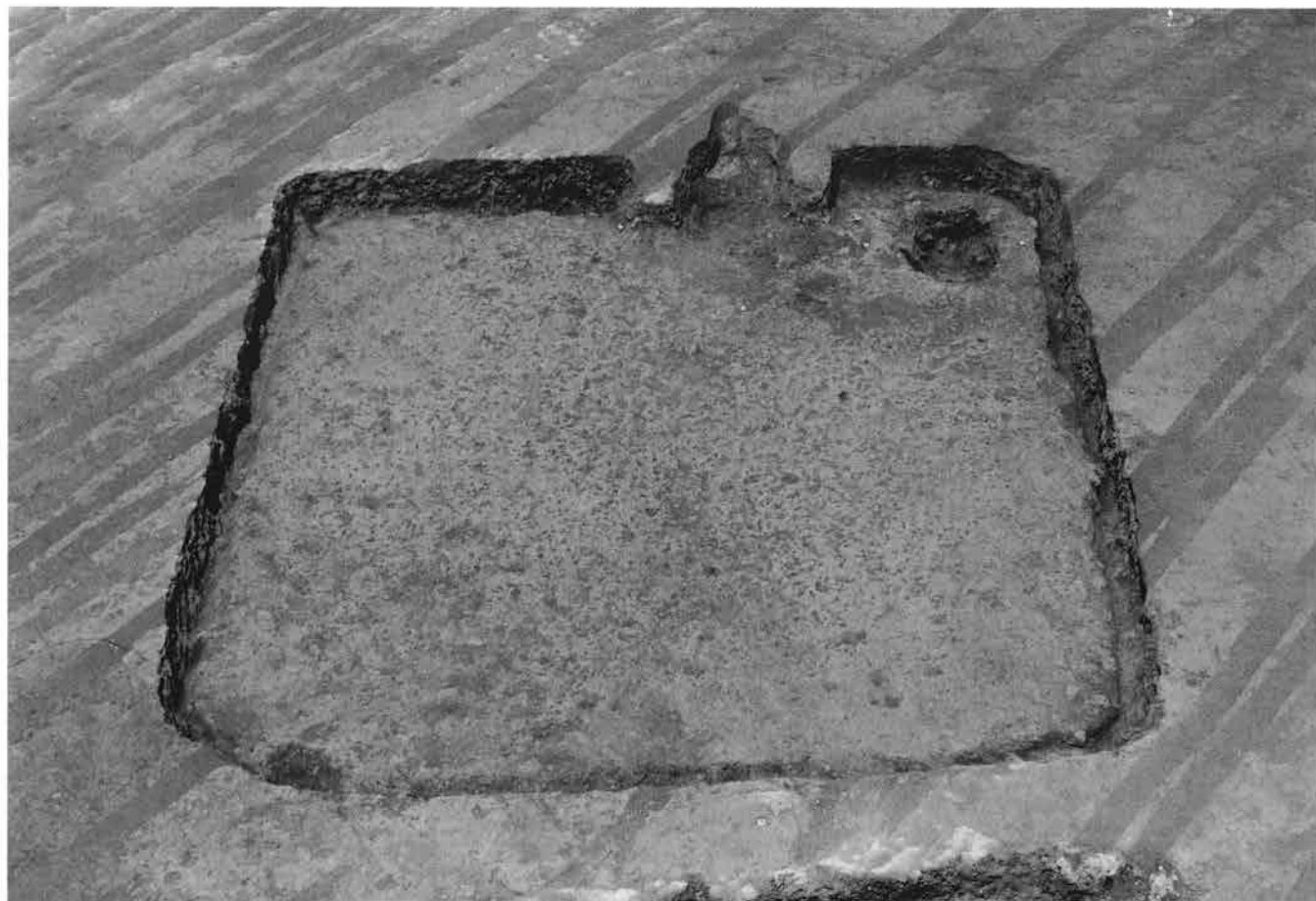
3. 2区33号住居跡竈（南東から）



4. 2区33号住居跡遺物出土状態（南から）



5. 2区33号住居跡掘り方（南東から）



1. 2区33号住居跡全景（南東から）



2. 2区34号住居跡全景（南西から）



1. 2区34号住居跡掘り方(南西から)



2. 2区34号住居跡遺物出土状態(南東から)



3. 2区34号住居跡竈(南西から)



4. 2区34号住居跡竈掘り方(南西から)



5. 2区35号住居跡全景(南東から)



1. 2区35号住居跡掘り方（南東から）



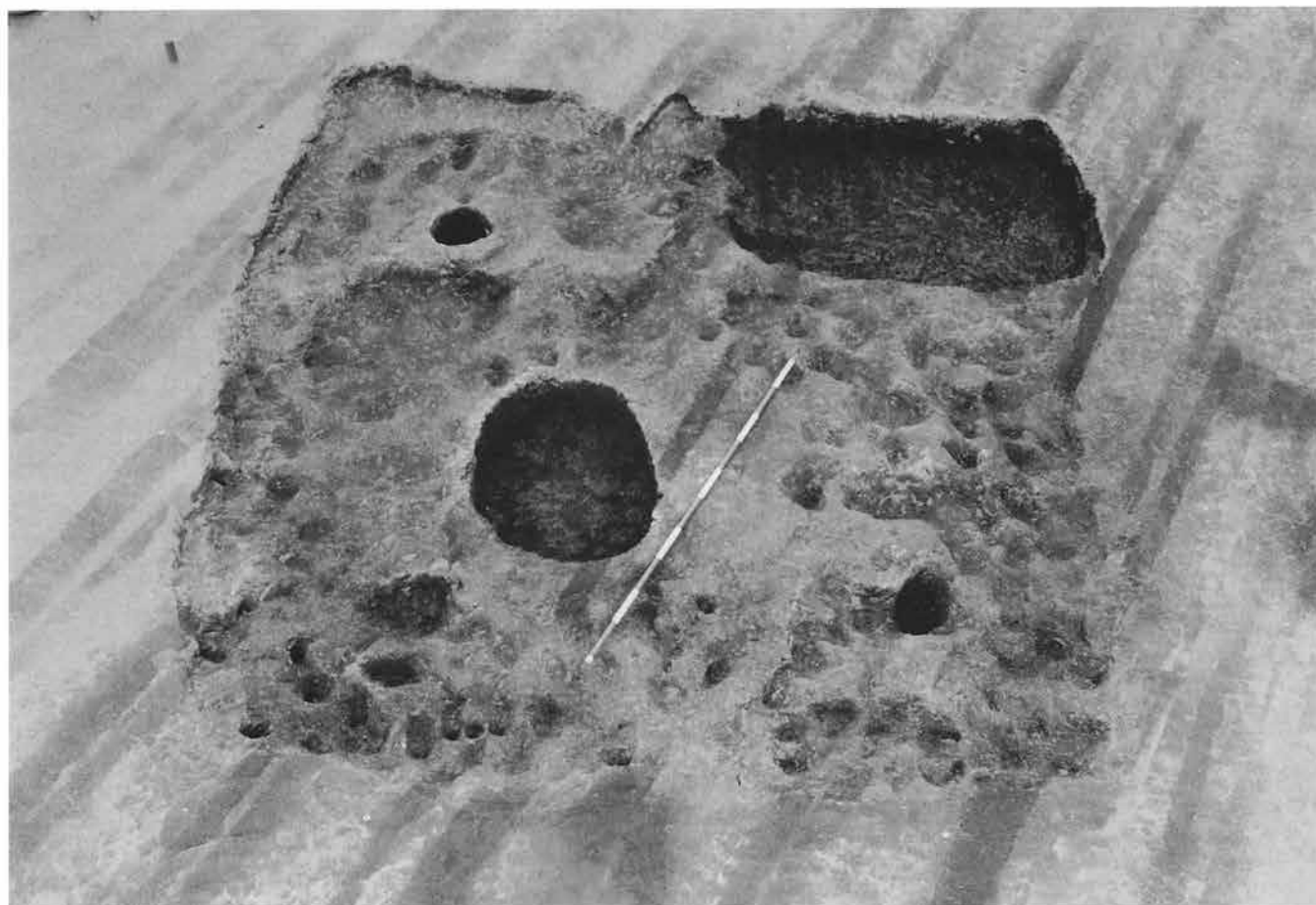
2. 2区35号住居跡竈土層断面（南東から）



3. 2区35号住居跡竈（南東から）



4. 2区35号住居跡貯蔵穴土層断面（南から）



5. 2区36号住居跡全景（南東から）



1. 2区36号住居跡竈土層断面（南西から）



2. 2区36号住居跡掘り方土層断面（東から）



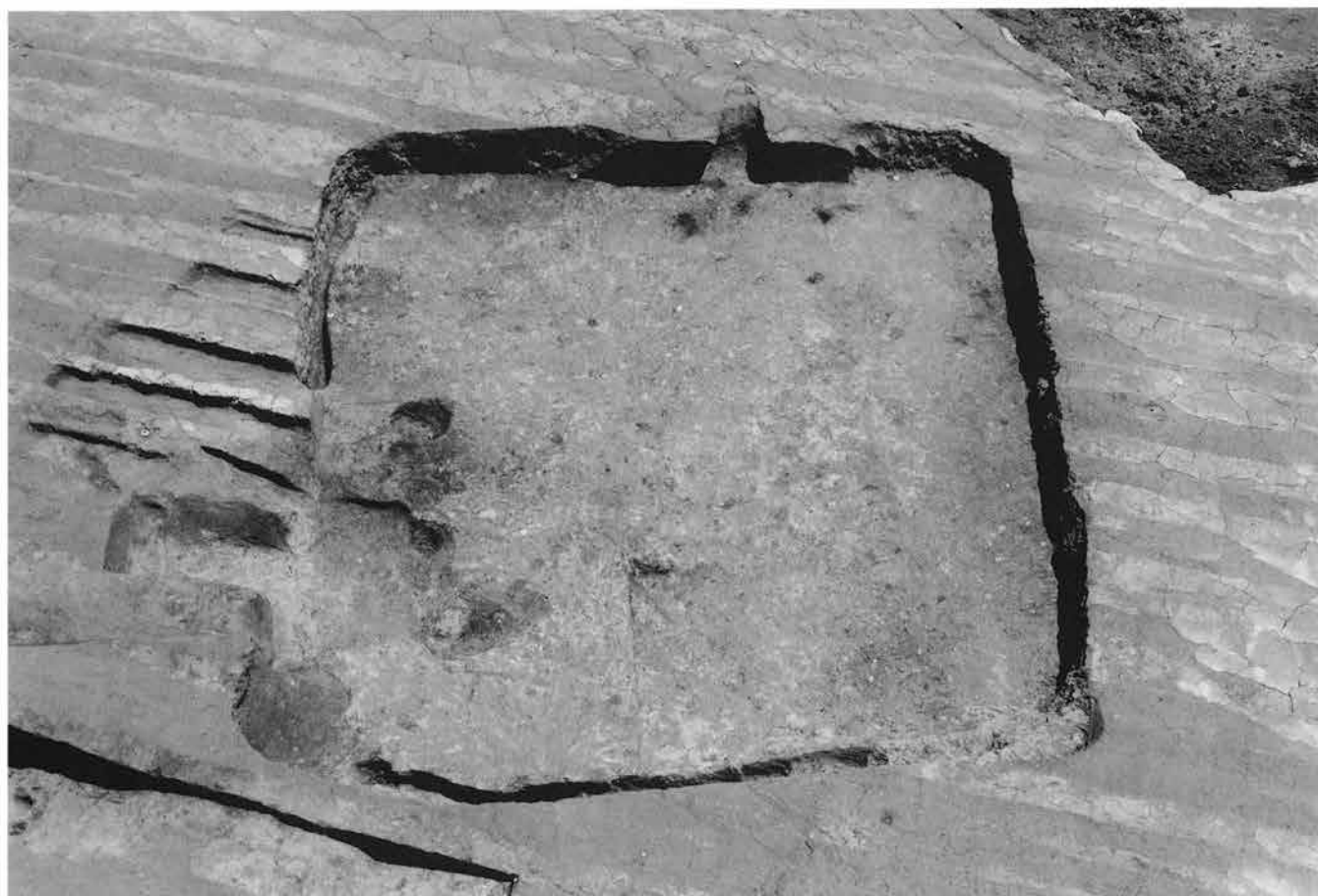
3. 2区37号住居跡全景（南から）



4. 2区38号住居跡1号竈土層断面（西から）



5. 2区38号住居跡1号竈（西から）



1. 2区38号住居跡全景（西から）



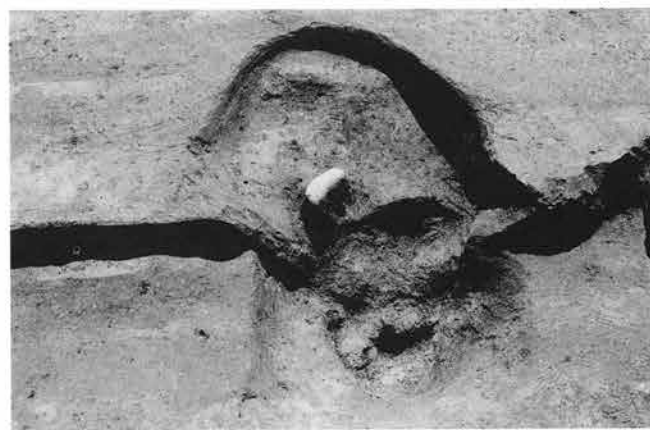
2. 2区38号住居跡掘り方（南から）



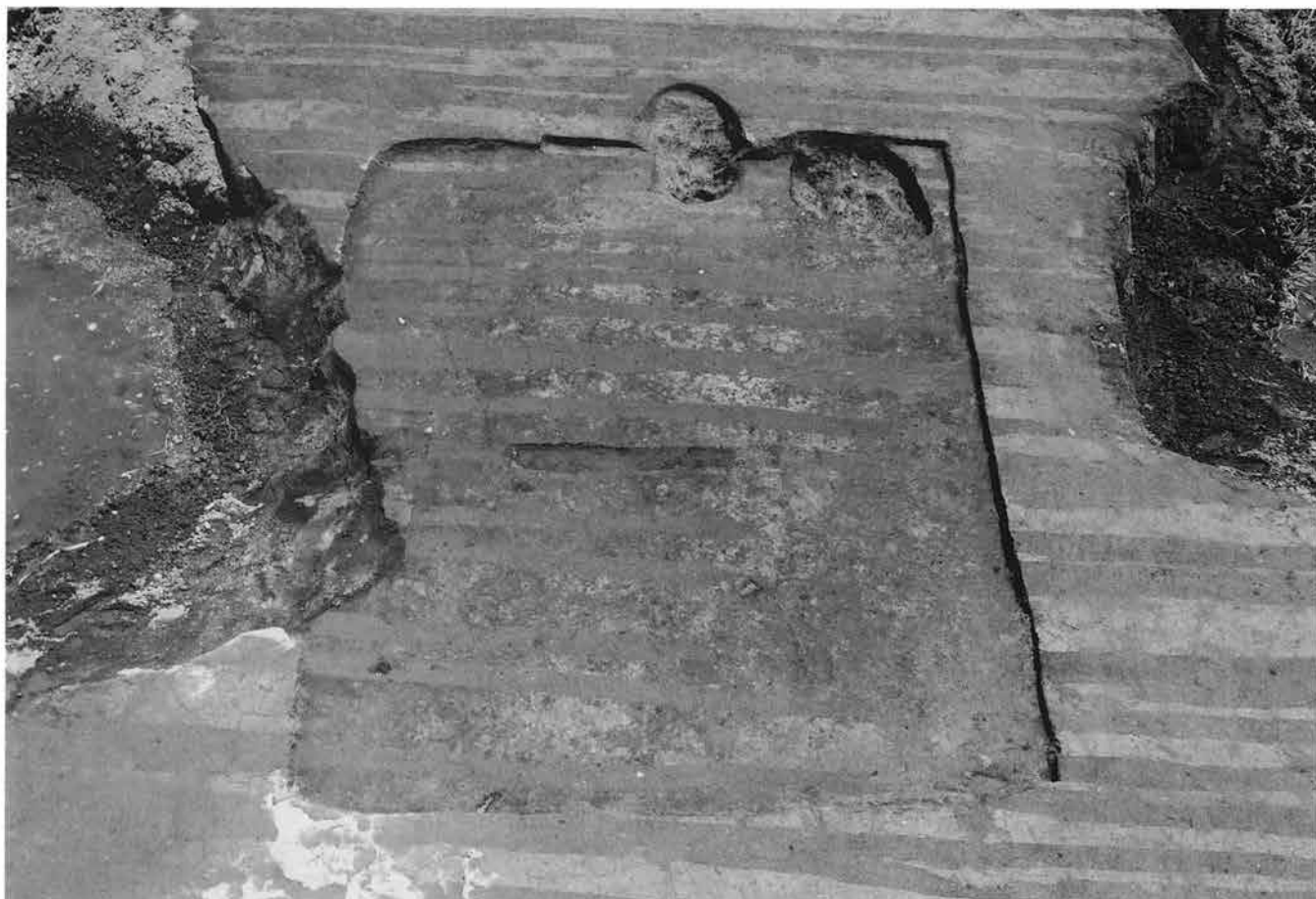
3. 2区38号住居跡遺物出土状態（東から）



4. 2区38号住居跡遺物出土状態（東から）



5. 2区39号住居跡竈（西から）



1. 2区39号住居跡全景（西から）



2. 2区39号住居跡掘り方（西から）



3. 2区39号住居跡貯蔵穴土層断面（西から）



4. 2区40号住居跡竈土層断面（南から）



5. 2区40号住居跡竈（南東から）



1. 2区40号住居跡全景（南東から）



2. 2区40号住居跡遺物出土状態（南東から）



3. 2区40号住居跡掘り方（南東から）



4. 2区40号住居跡遺物出土状態（南西から）



5. 2区40号住居跡柱穴4土層断面（南西から）



1. 2区42号住居跡全景（南から）



2. 2区42号住居跡土層断面（南から）



3. 2区42号住居跡遺物出土状態（東から）



4. 2区44号住居跡竈（南東から）



5. 2区44号住居跡竈土層断面（北東から）



1. 2区44号住居跡全景（南東から）



2. 2区44号住居跡遺物出土状態（北から）



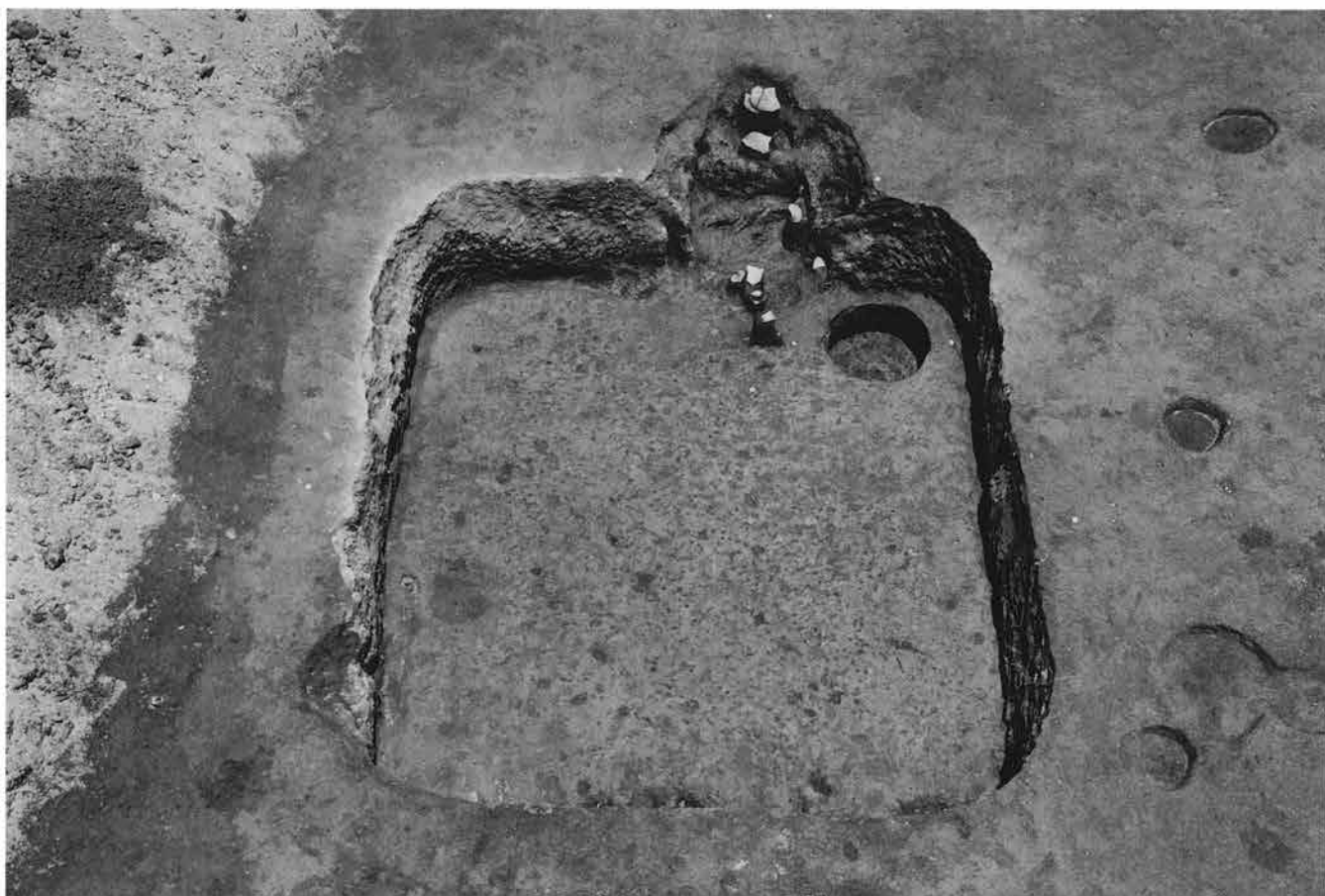
3. 2区44号住居跡遺物出土状態（南西から）



4. 1区46号住居跡竈（南から）



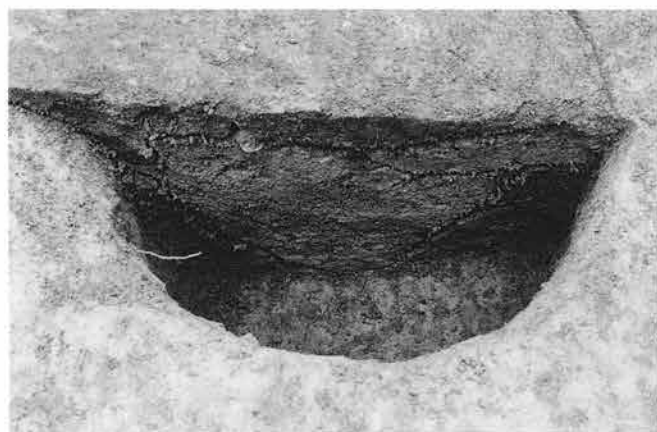
5. 1区46号住居跡竈土層断面（南から）



1. 1区46号住居跡全景（南から）



2. 1区46号住居跡掘り方（南から）



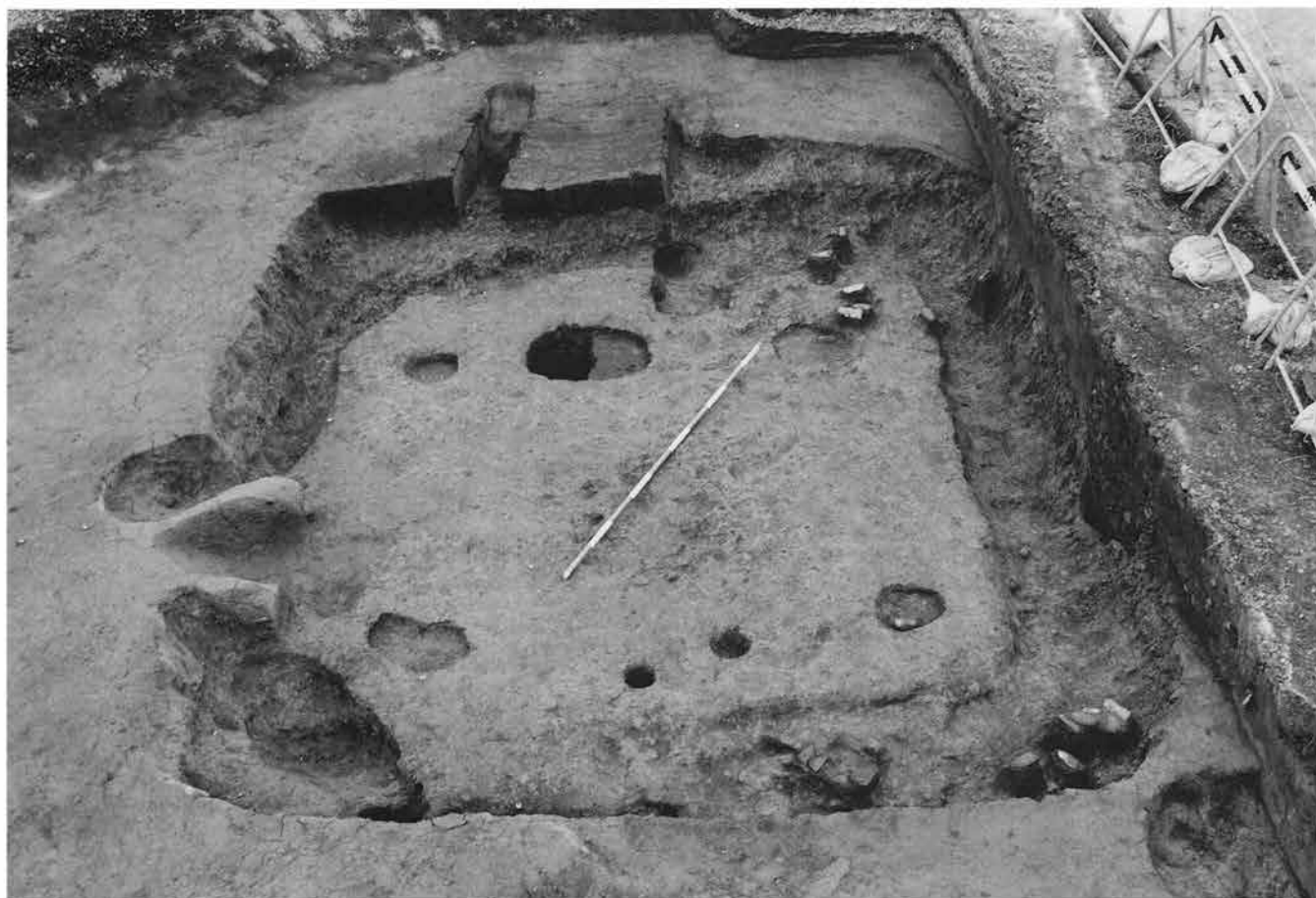
3. 1区46号住居跡貯蔵穴土層断面（南から）



4. 1区47号住居跡竈土層断面（北東から）



5. 1区47号住居跡竈（北東から）



1. 1区47号住居跡全景（南東から）



2. 1区47号住居跡掘り方（南東から）



3. 1区47号住居跡遺物出土状態（北東から）



4. 1区48号住居跡遺物出土状態（南から）



5. 1区48号住居跡掘り方（東から）



1. 1区48号住居跡全景（南から）



2. 1区49号住居跡全景（南西から）



1. 1区49号住居跡土層断面（南西から）



2. 1区49号住居跡掘り方（南から）



3. 2区52号住居跡全景（西から）



4. 2区52号住居跡掘り方（西から）



5. 2区52号住居跡土層断面（西から）



1. 2区52号住居跡竈掘り方（西から）



2. 2区52号住居跡西側土層断面（南から）



3. 2区53号住居跡全景（西から）



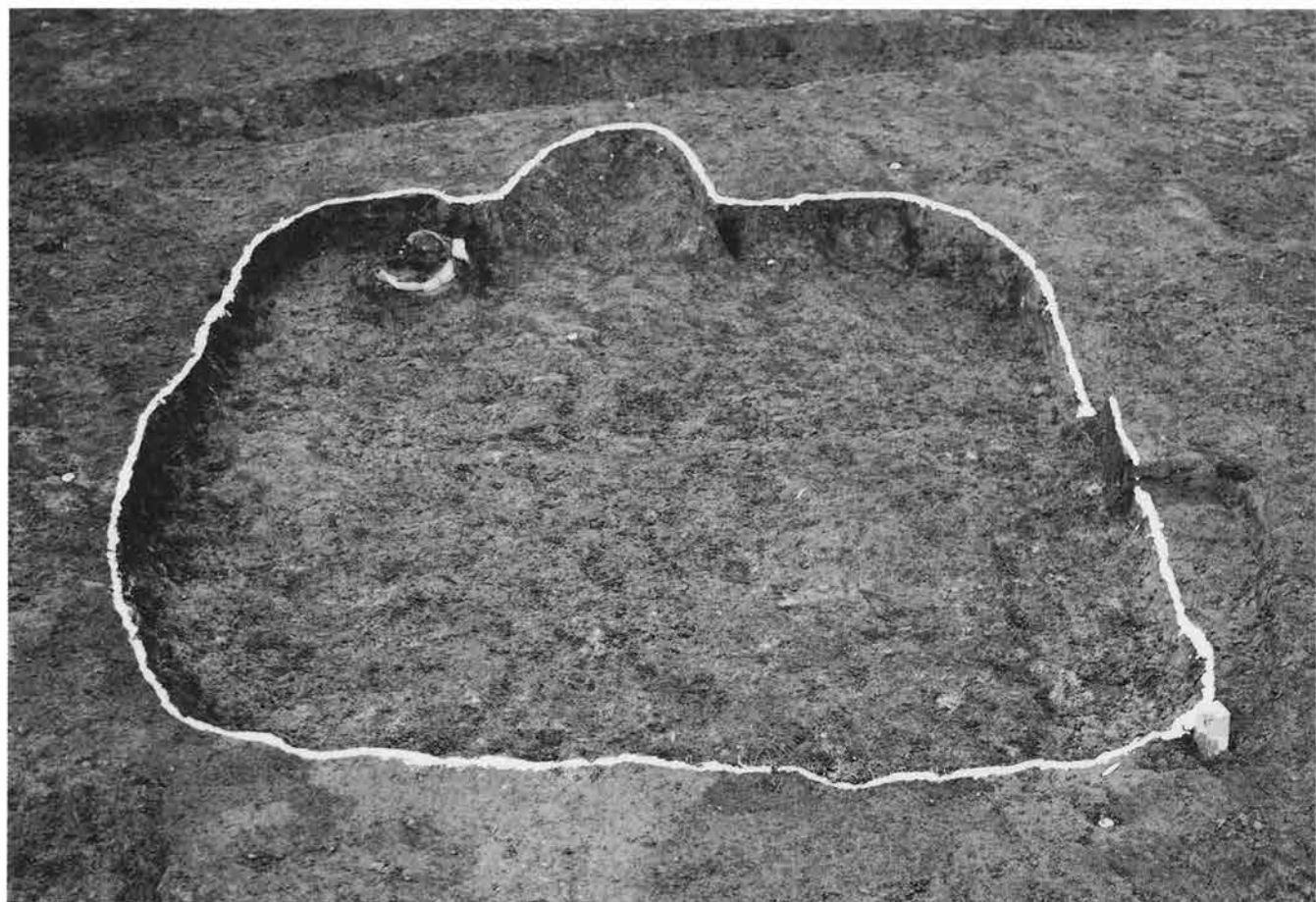
4. 2区53号住居跡掘り方（西から）



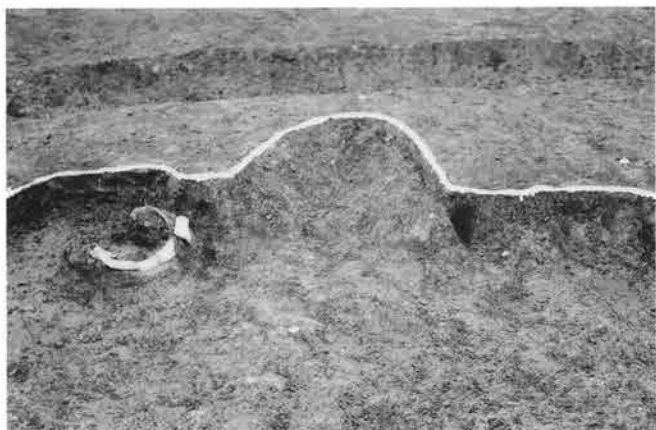
5. 2区54号住居跡土層断面（南西から）



1. 2区54号住居跡全景（北西から）



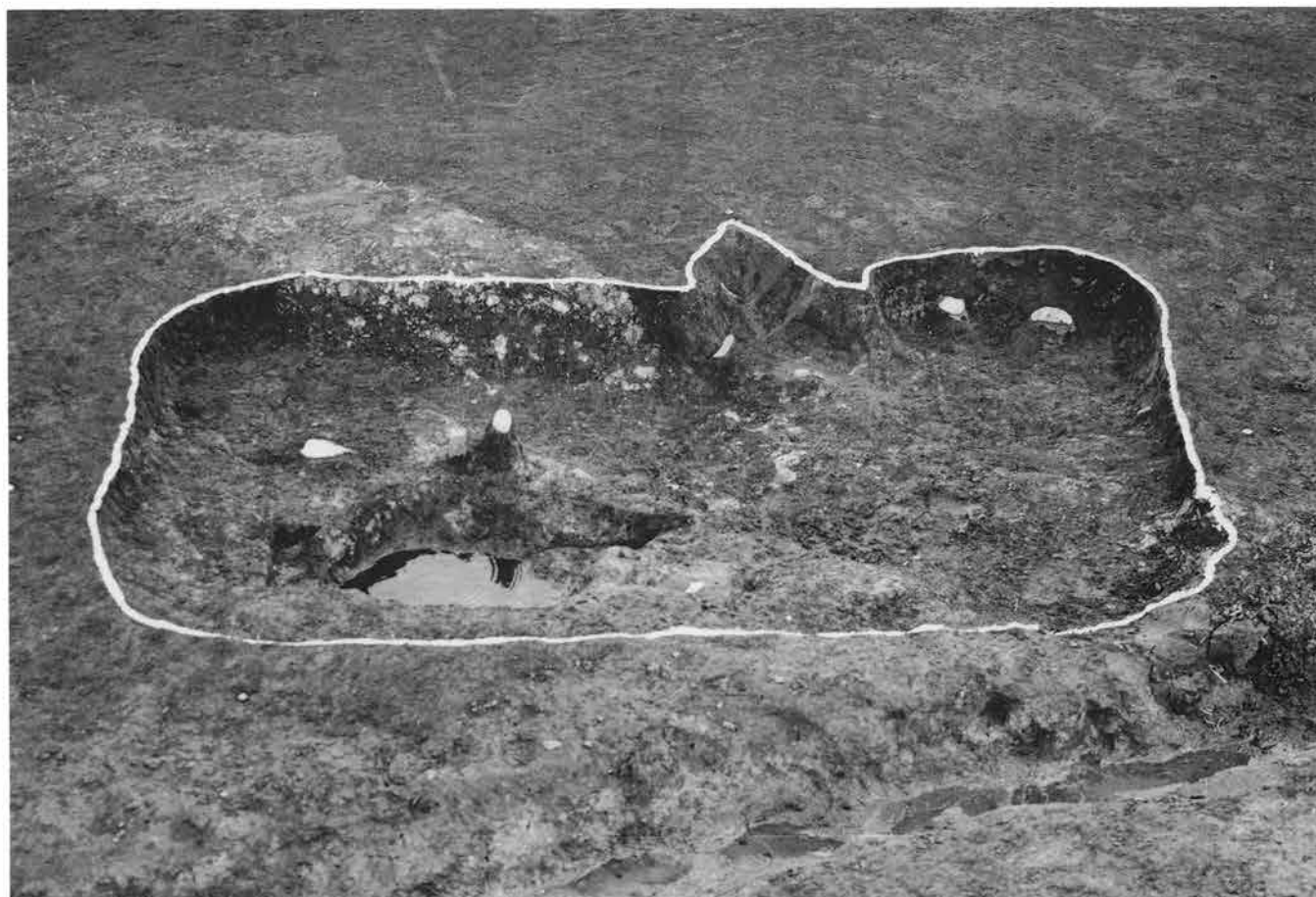
2. 3区1号住居跡全景（西から）



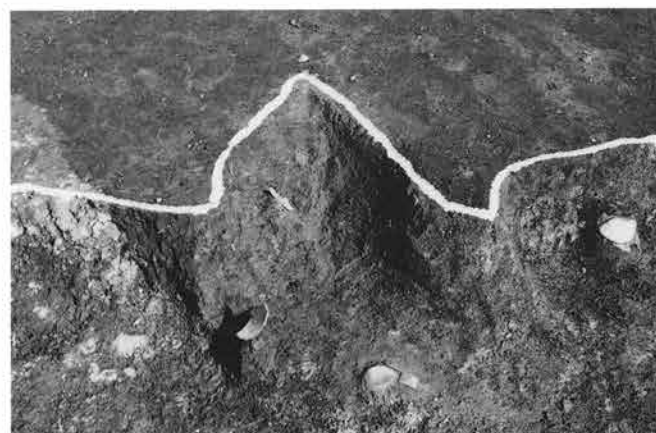
1. 3区1号住居跡竈（西から）



2. 3区1号住居跡掘り方（西から）



3. 3区2号住居跡全景（西から）



4. 3区2号住居跡竈（西から）



5. 3区2号住居跡掘り方（西から）



1. 1区1号井戸全景（南西から）



2. 1区1号井戸掘削状況（南西から）



3. 1区2号井戸全景（南東から）



4. 1区2号井戸遺物出土状態（南東から）



5. 1区3号井戸全景（南から）



6. 1区4号井戸土層断面（南から）



7. 1区4号井戸全景（南から）



8. 1区5号井戸土層断面（南から）



1. 1区5号井戸全景 (南から)



2. 1区6号井戸全景 (南から)



3. 1区7号井戸土層断面 (南から)



4. 1区7号井戸全景 (南から)



5. 1区8号井戸土層断面 (南から)



6. 1区8号井戸全景 (南から)



7. 1区9号井戸土層断面 (南から)



8. 1区9号井戸全景 (南から)



1. 1区10号井戸全景（西から）



2. 1区11号井戸全景（南から）



3. 1区12号井戸土層断面（南西から）



4. 1区12号井戸全景（南西から）



5. 2区13号井戸全景（東から）



6. 2区14号井戸全景（東から）



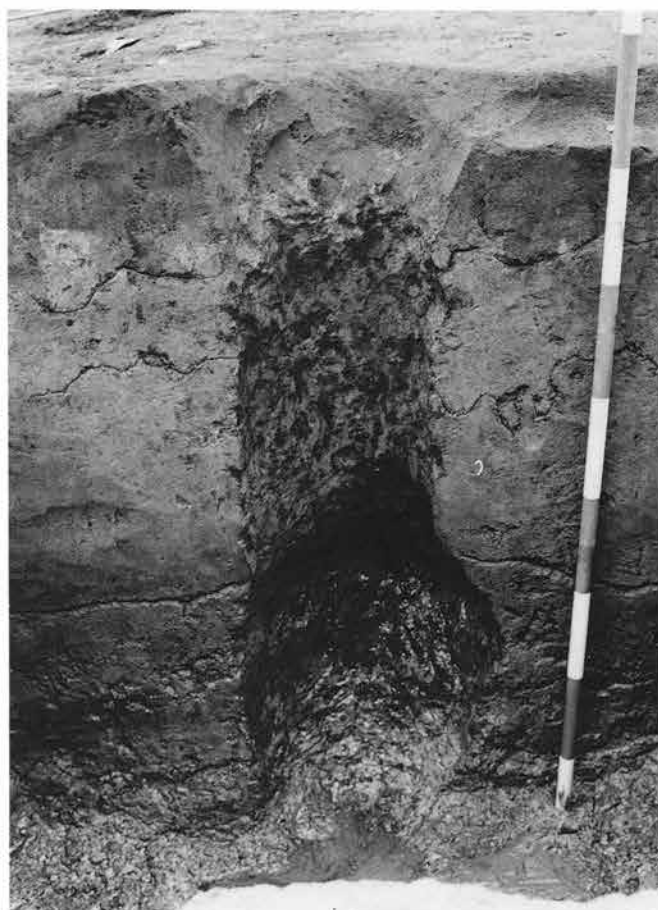
7. 1区15号井戸土層断面（南西から）



8. 1区15号井戸全景（南西から）



1. 1区16号井戸土層断面（南から）



2. 1区16号井戸全景（南から）



3. 1区17号井戸全景（南から）



4. 1区17号井戸上層遺物出土状態（南から）



5. 2区18号井戸全景（東から）



1. 2区19号井戸土層断面 (南から)



2. 2区19号井戸馬歯出土状態 (東から)



3. 2区20号井戸土層断面 (南から)



4. 2区20号井戸全景 (南から)



5. 2区21号井戸土層断面 (南から)



6. 2区21号井戸全景 (南から)



7. 2区22号井戸土層断面 (南から)



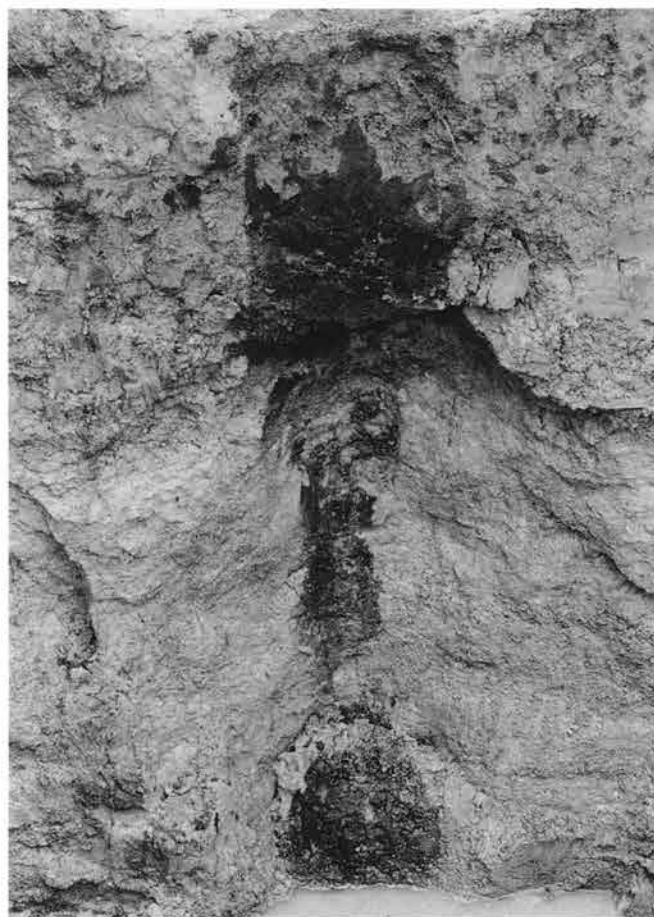
8. 2区23号井戸土層断面 (南から)



1. 2区23号井戸全景 (南から)



2. 3区1号井戸全景 (南から)



3. 2区24号井戸全景 (南から)



4. 1区1号溝全景 (北東から)



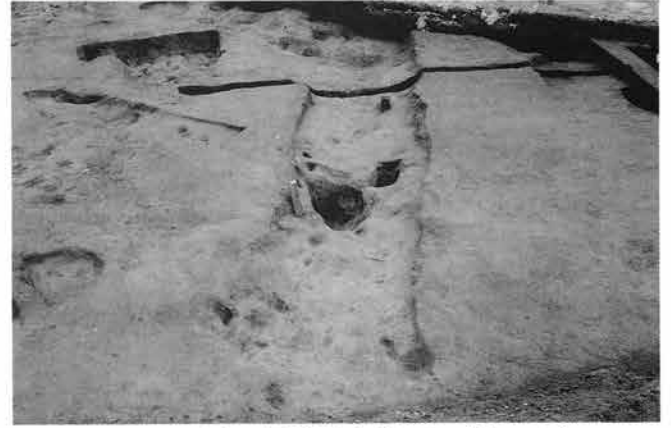
1. 1区1号溝遺物出土状態（北から）



2. 1区1号溝遺物出土状態（北から）



3. 1区2号溝土層断面（西から）



4. 1区3号溝北側部分（南から）



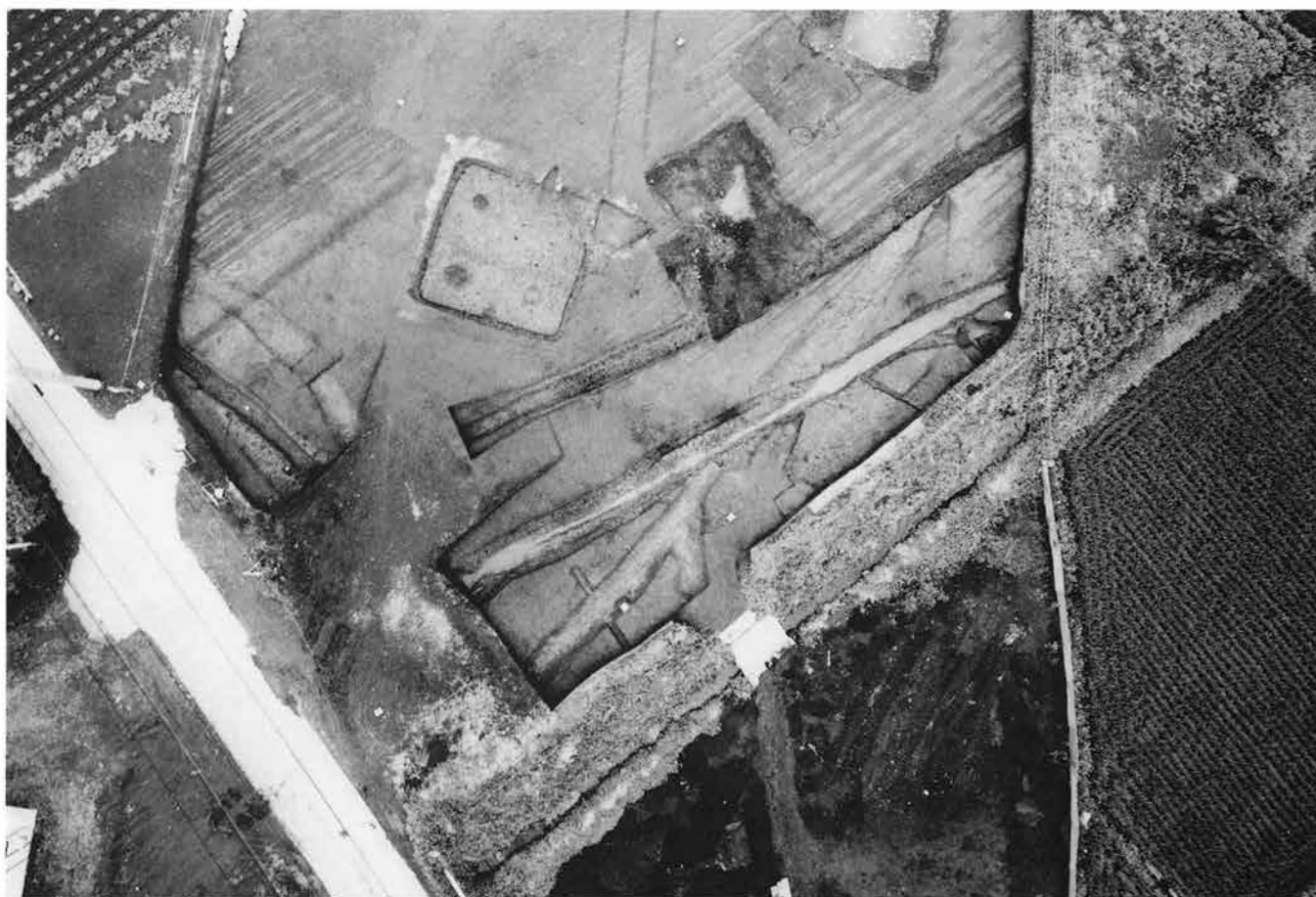
5. 1区3号溝全景（北から）



6. 1区4号溝全景（西から）



7. 2区5号溝全景（南から）



1. 2区5～11号溝全景 (右上が北)



2. 2区5～9号溝全景 (南西から)



3. 2区8号溝土層断面 (東から)



4. 2区5～11号溝 (東から)



5. 2区10号溝土層断面 (北から)



1. 3区1号溝全景（北東から）



2. 3区2号溝全景（東から）



3. 1区1号土坑（北から）



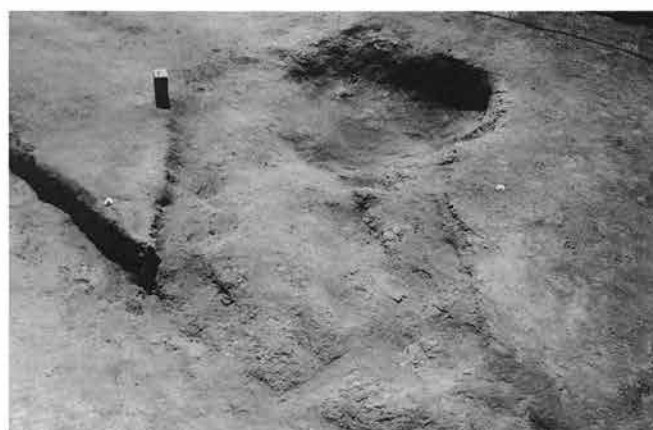
4. 1区2号土坑（北から）



5. 1区3号土坑（西から）



6. 1区4・5号土坑（北から）



7. 1区6・7号土坑（北から）



8. 1区8号土坑（北から）



1. 1区9号土坑 (北から)



2. 1区10号土坑 (南から)



3. 1区11~13号土坑 (南から)



4. 1区14・15号土坑 (南から)



5. 1区16号土坑 (南から)



6. 1区17号土坑 (北から)



7. 1区18号土坑 (南から)



8. 1区19・20号土坑 (南から)



1. 1区21号土坑 (南から)



2. 1区22号土坑群 (東から)



3. 1区23号土坑 (北から)



4. 1区24号土坑 (北から)



5. 1区25・26号土坑 (北から)



6. 1区27号土坑 (北から)



7. 1区28号土坑 (北から)



8. 1区29号土坑 (北から)



1. 1区2号溝・30・40~44号土坑 (南から)



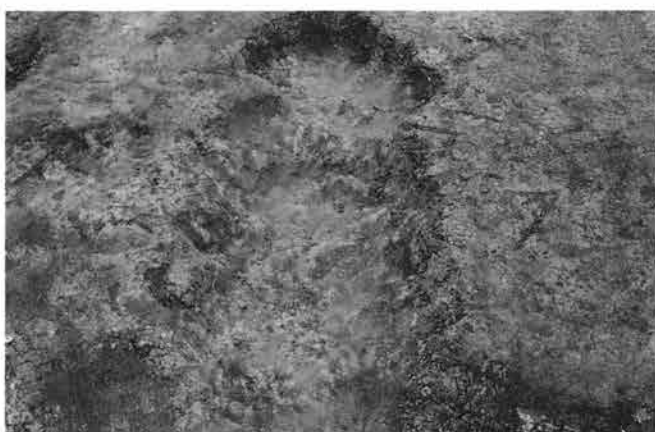
2. 1区31号土坑 (東から)



3. 1区37号土坑 (北から)



4. 1区38号土坑 (北から)



5. 1区39・62号土坑 (南から)



6. 1区45号土坑 (西から)



7. 1区46号土坑 (南から)



8. 1区47号土坑 (南から)



1. 1区48号土坑 (東から)



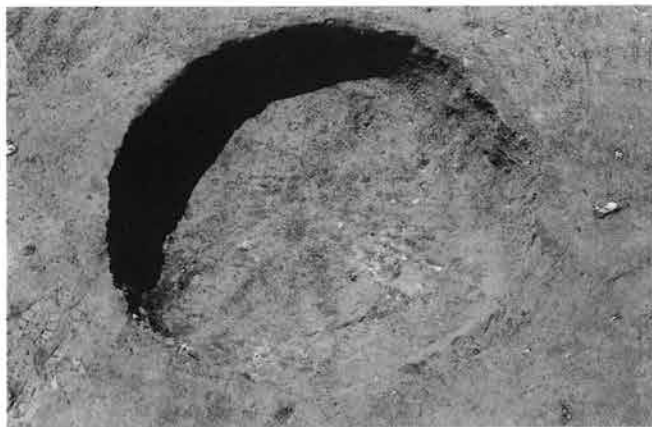
2. 1区49号土坑 (南から)



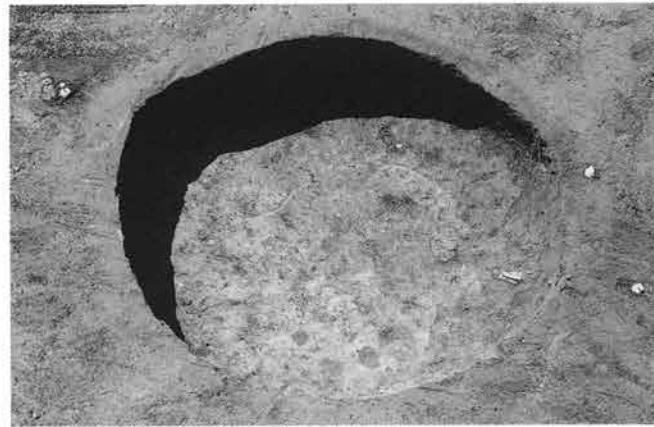
3. 1区50号土坑 (北から)



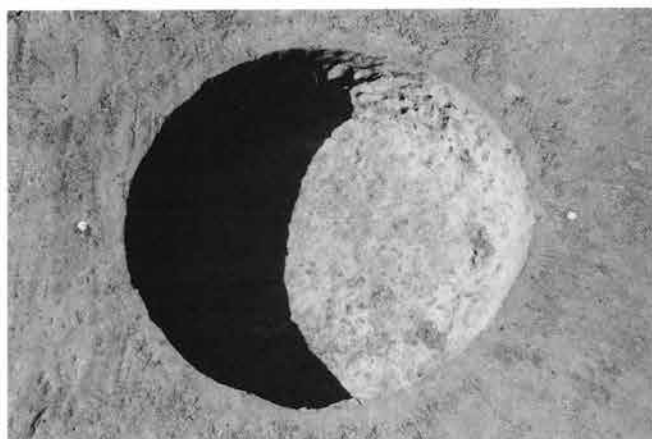
4. 1区51号土坑 (南から)



5. 1区52号土坑 (北から)



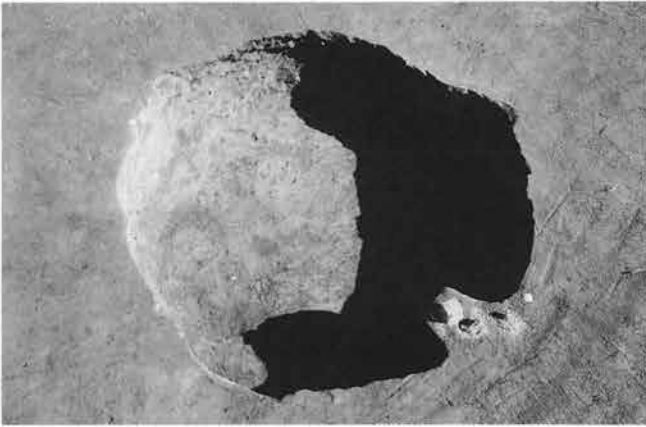
6. 1区53号土坑 (北から)



7. 1区54号土坑 (北から)



8. 1区55号土坑 (南から)



1. 1区56号土坑 (南から)



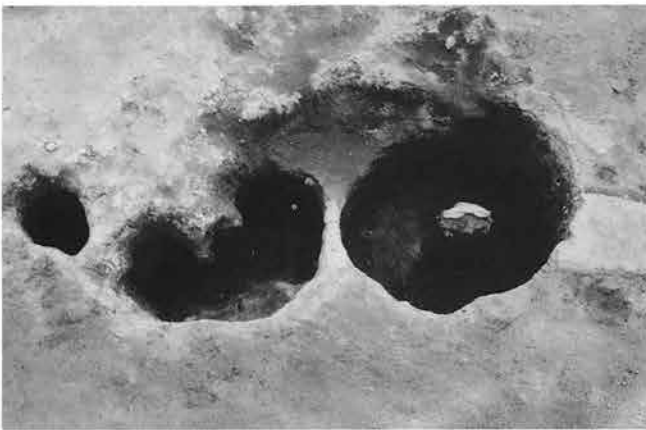
2. 1区57号土坑 (南から)



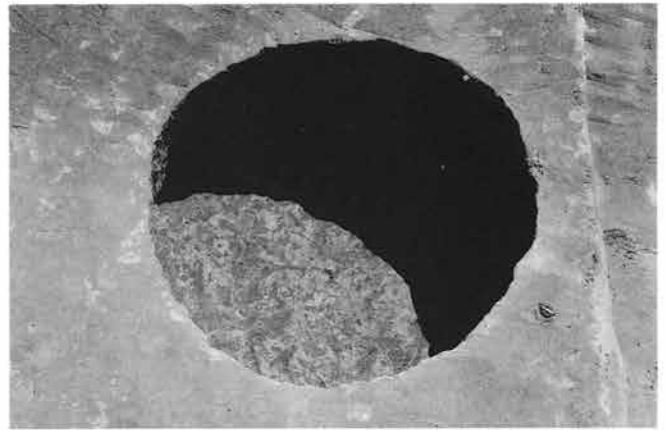
3. 1区58号土坑 (南から)



4. 1区59号土坑 (南から)



5. 1区60号土坑 (北から)



6. 1区61号土坑 (西から)



7. 2区65~67・72・73号土坑 (西から)



8. 2区68号土坑 (南から)



1. 2区69号土坑 (西から)



2. 2区70号土坑 (南から)



3. 2区71号土坑 (南から)



4. 2区75号土坑 (南から)



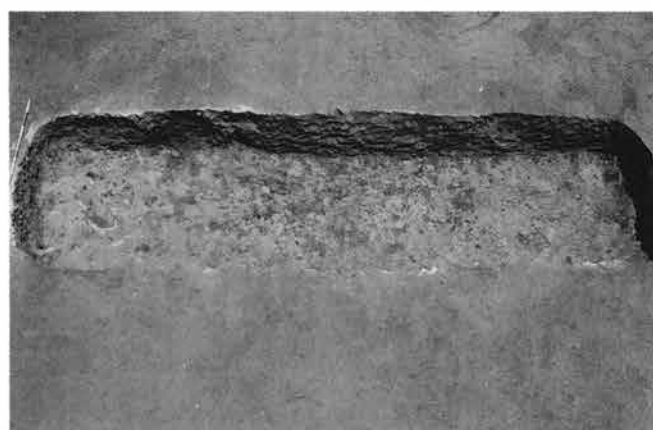
5. 2区76号土坑 (南から)



6. 2区77号土坑 (南から)



7. 2区78~85号土坑 (北から)



8. 2区86号土坑 (南から)



1. 2区87~96号土坑 (北西から)



2. 2区90~92号土坑 (北から)



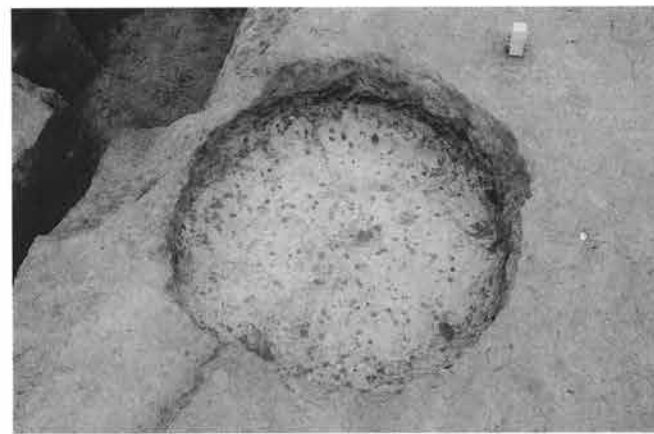
3. 2区94号土坑 (東から)



4. 2区96号土坑 (北から)



5. 1区101・102号土坑 (西から)



6. 1区103号土坑 (西から)



7. 1区104号土坑 (南から)



8. 1区105号土坑 (西から)



1. 2区110号土坑 (北から)



2. 2区111号土坑 (西から)



3. 2区120・138~144号土坑 (西から)



4. 2区121~133・135・137号土坑 (西から)



5. 2区145号土坑 (南東から)



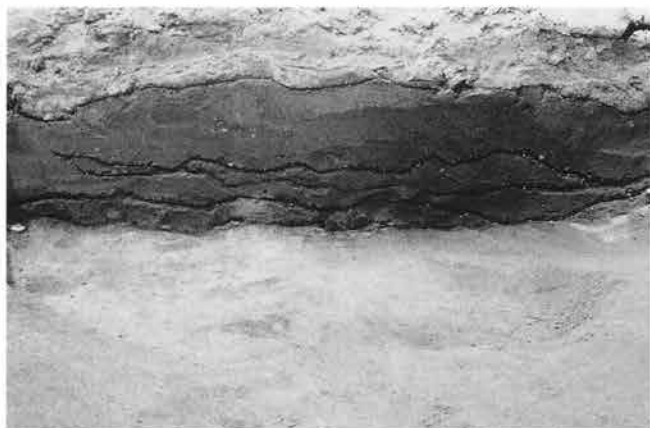
6. 2区148号土坑 (南東から)



7. 1区153号土坑土層断面 (西から)



8. 1区153号土坑遺物出土状態 (西から)



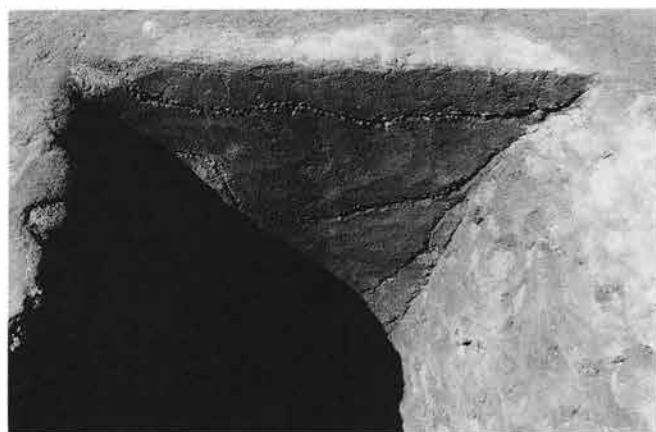
1. 3区1号土坑土層断面（北から）



2. 3区2号土坑土層断面（北から）



3. 1号焼土遺構遺物出土状態（南から）



4. 1号円形周溝遺構土層断面（東から）



5. 1号円形周溝遺構全景（南東から）



1. 1号円形周溝遺構遺物出土状態（南西から）



2. 1号円形周溝遺構P-1（北から）



3. 1号円形周溝遺構P-3（南から）



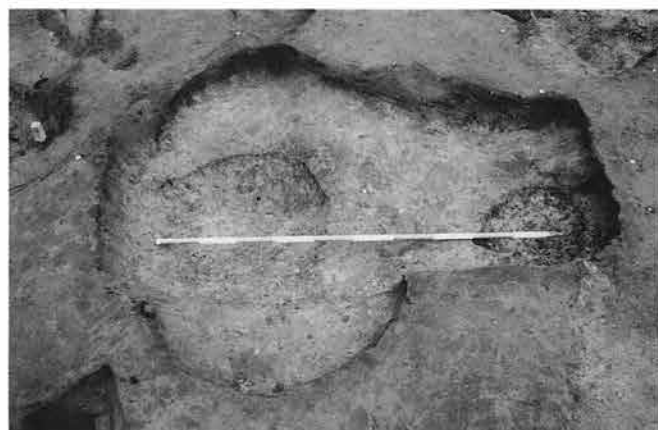
4. 1号円形周溝遺構P-4（西から）



5. 1号竪穴遺構遺物出土状態（東から）



1. 1号竖穴遺構土層断面（東から）



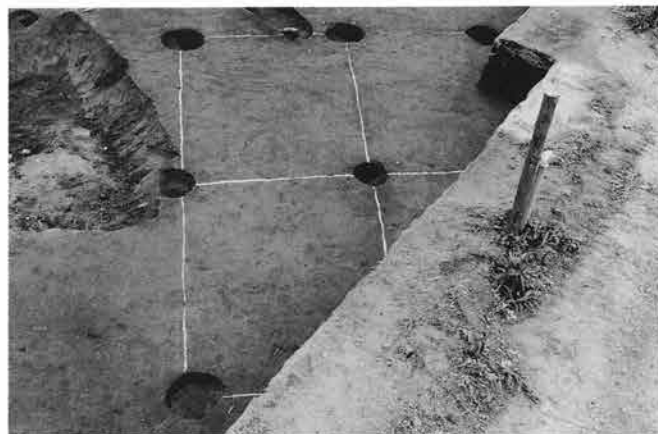
2. 1号竖穴遺構全景（東から）



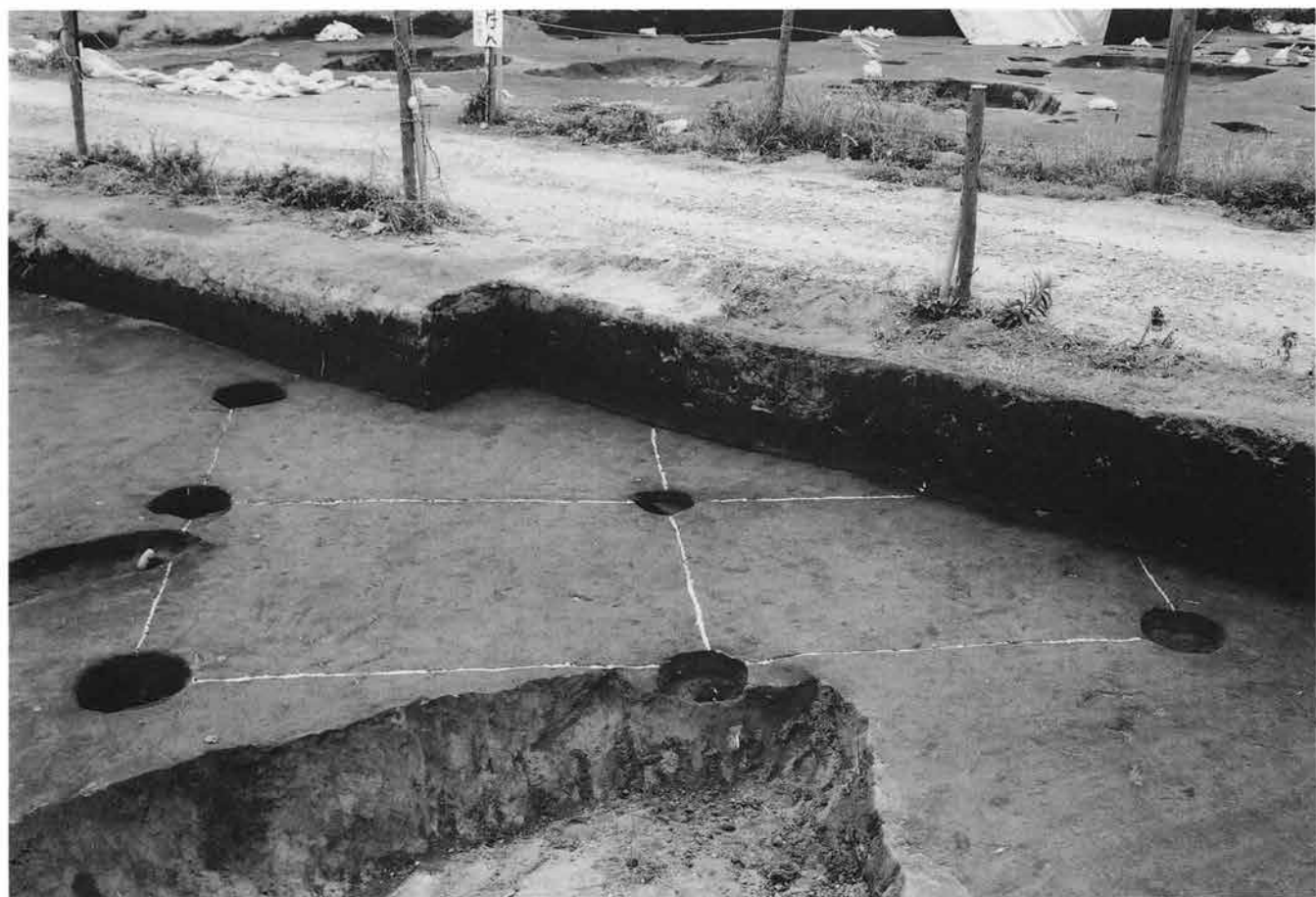
3. 2号竖穴遺構全景（東から）



4. 1号掘立柱建物柱穴土層断面（北東から）



5. 1号掘立柱建物全景（北西から）



1. 1号掘立柱建物全景（北東から）



2. 1号サク状遺構全景（西から）



1. 1号畝状遺構全景（南東から）



2. 1号畝状遺構（東から）



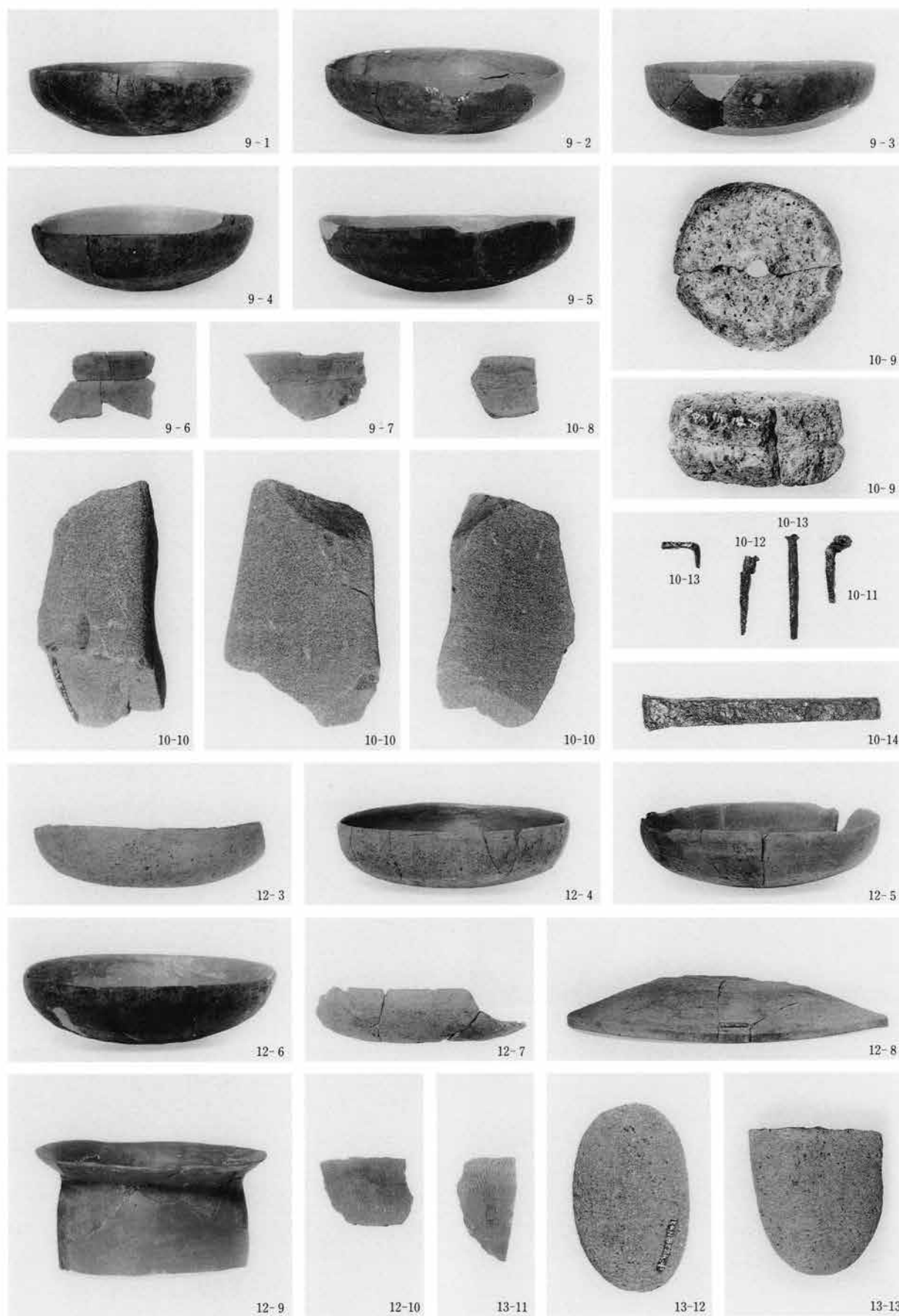
3. 1号畝状遺構土層断面（東から）



4. 1号風倒木（東から）



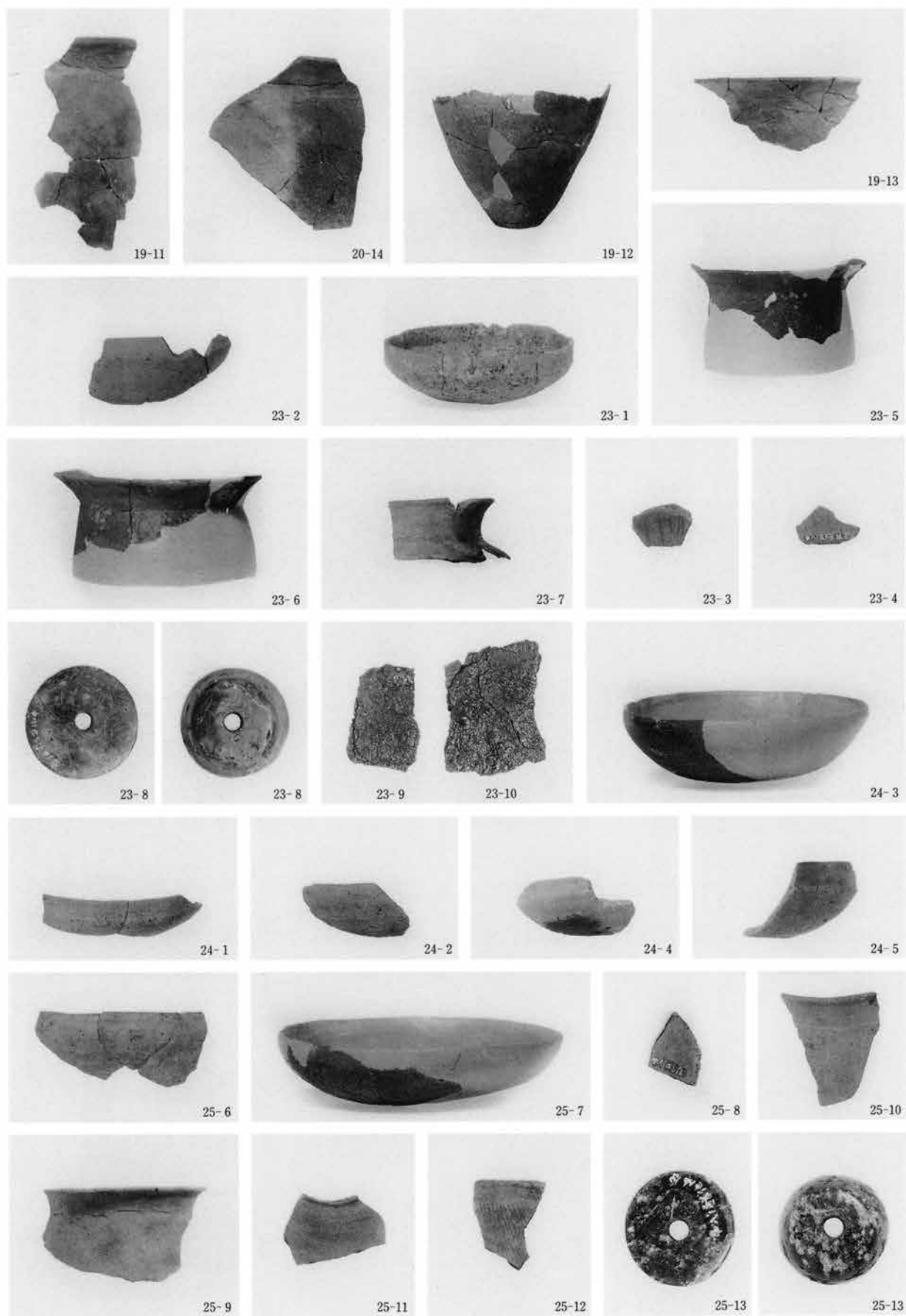
5. 1号風倒木土層断面（南西から）



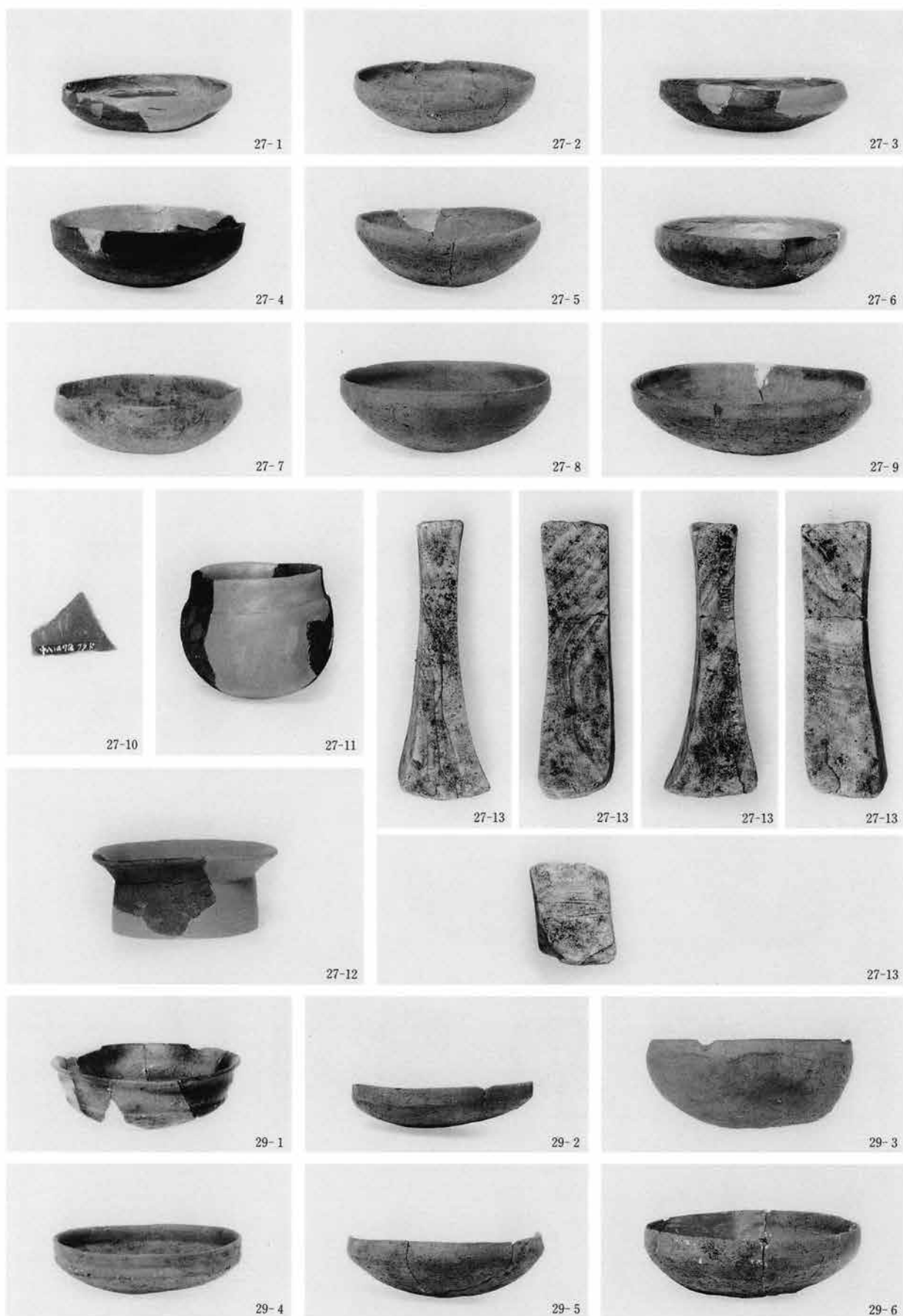
1区1・2号住居跡出土遺物



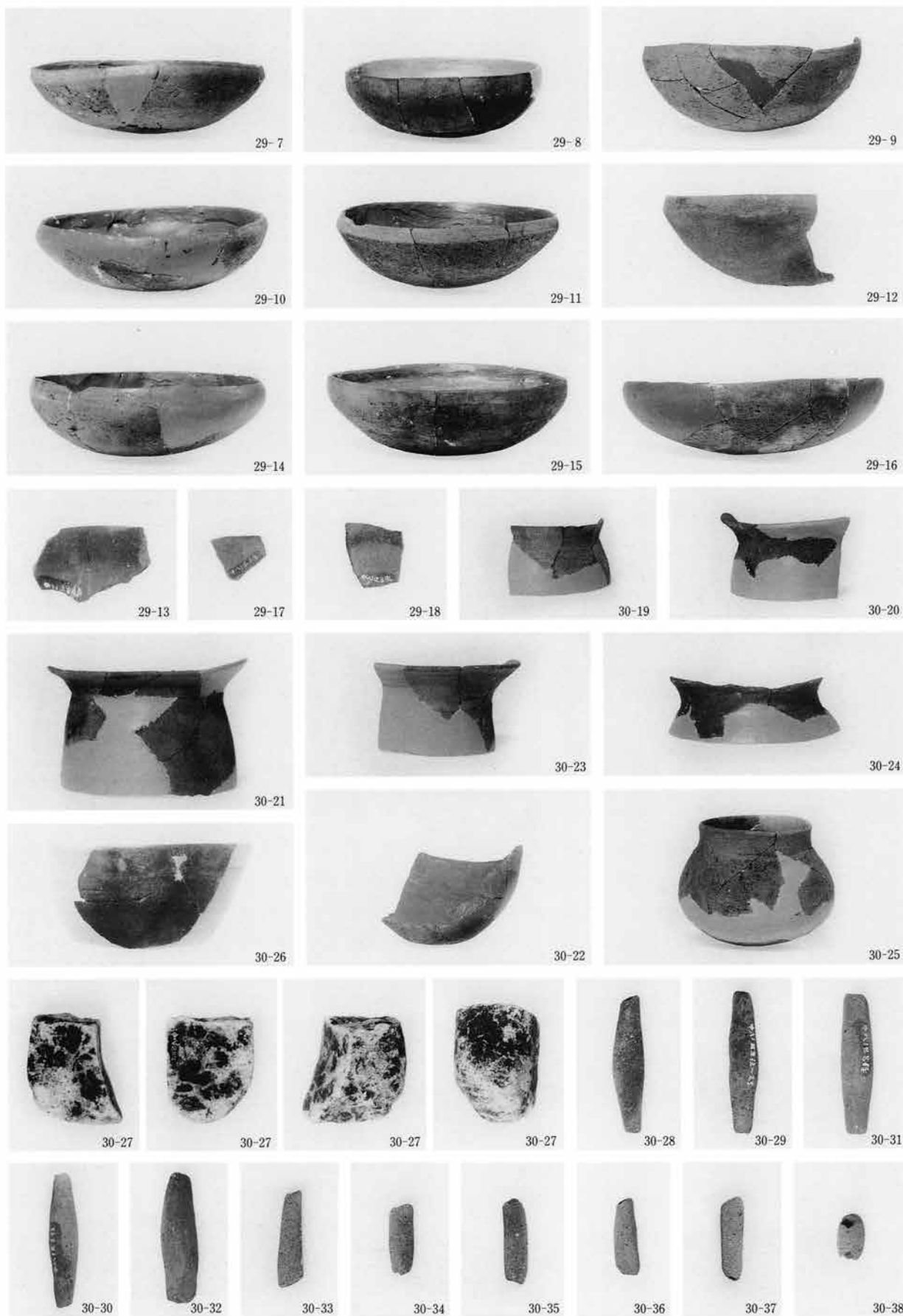
1区3・4号住居跡出土遺物



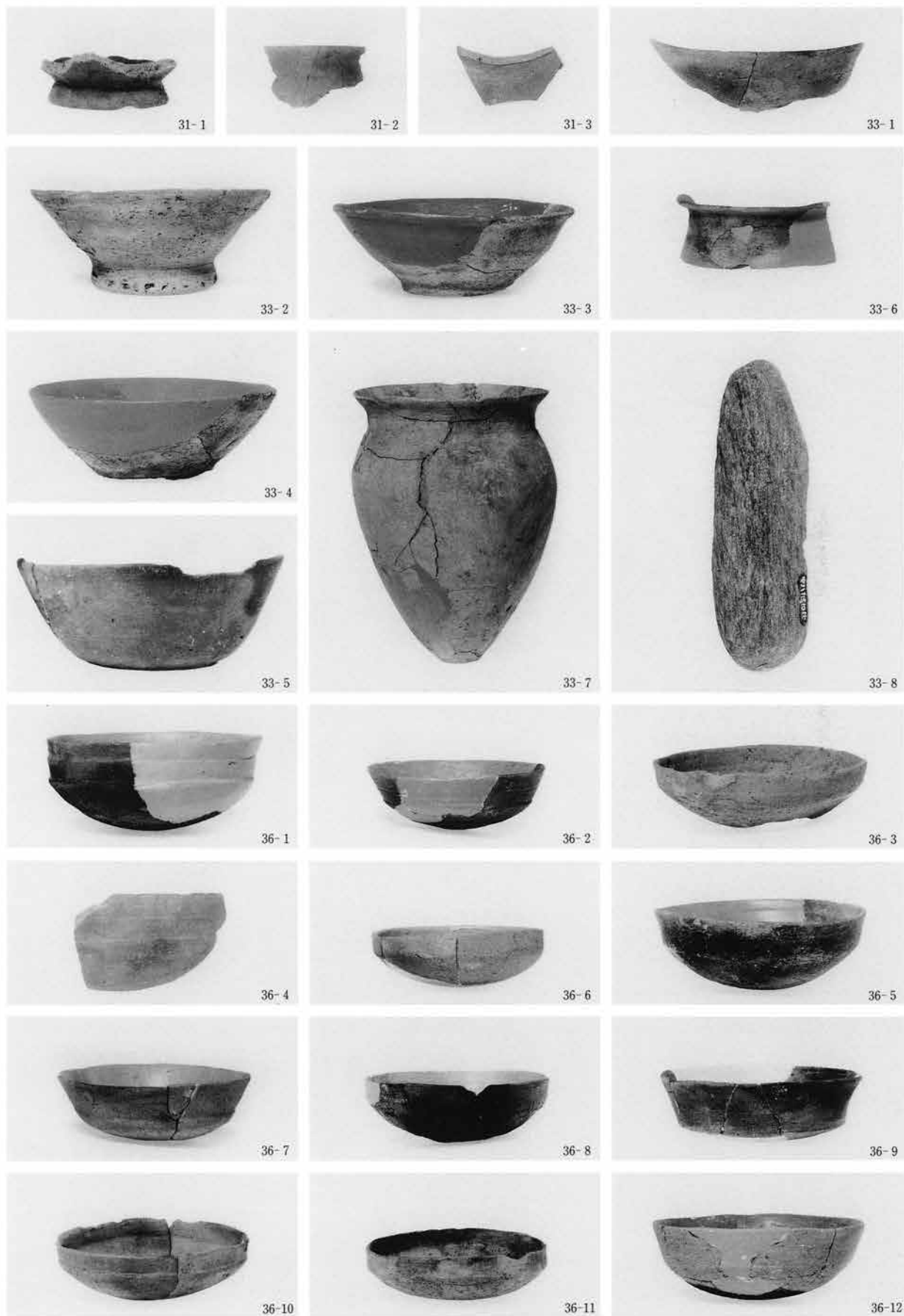
1区4~6号住居跡出土遺物



1区7・8号住居跡出土遺物



1区8号住居跡出土遺物

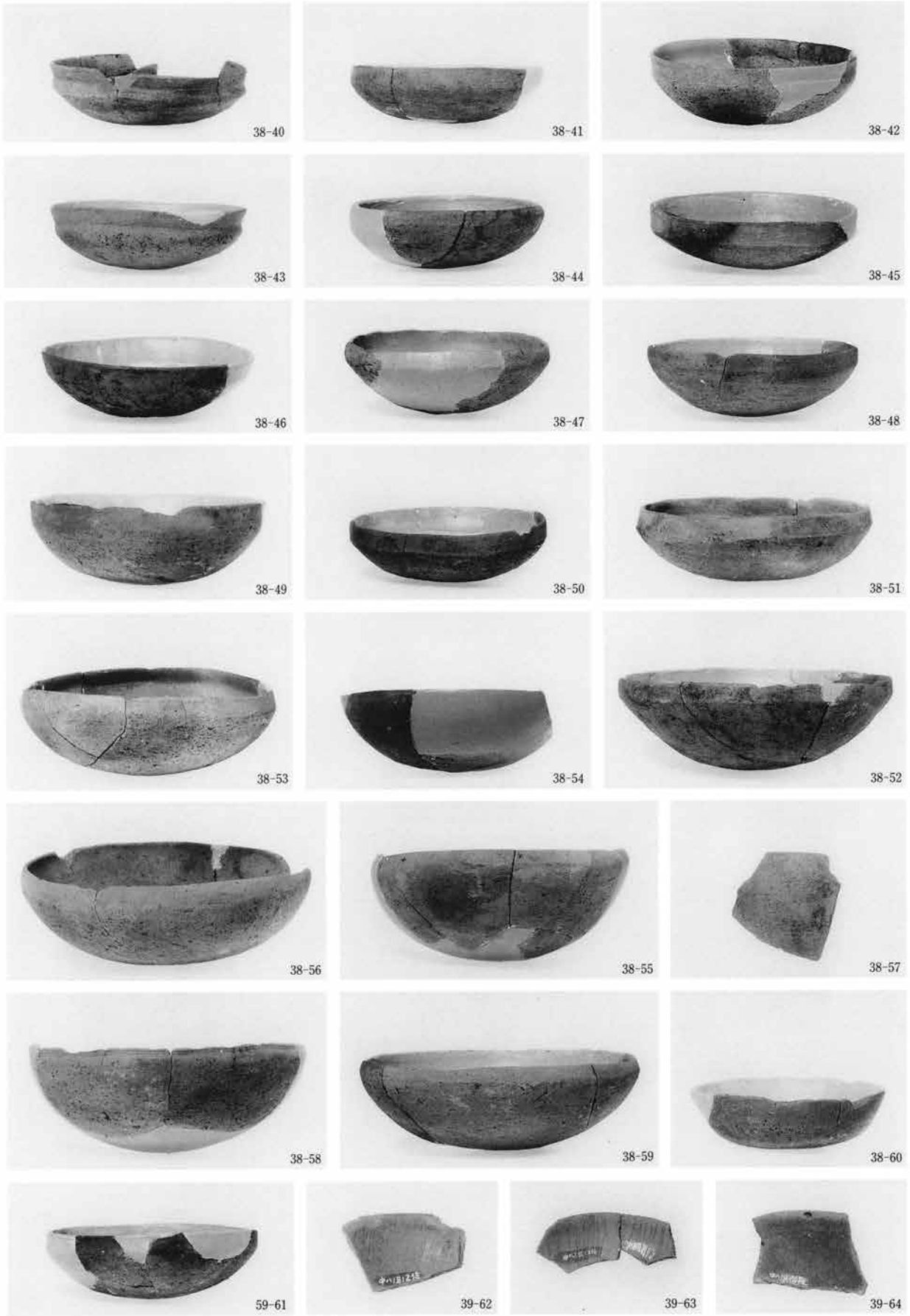


1区9・10・12号住居跡出土遺物

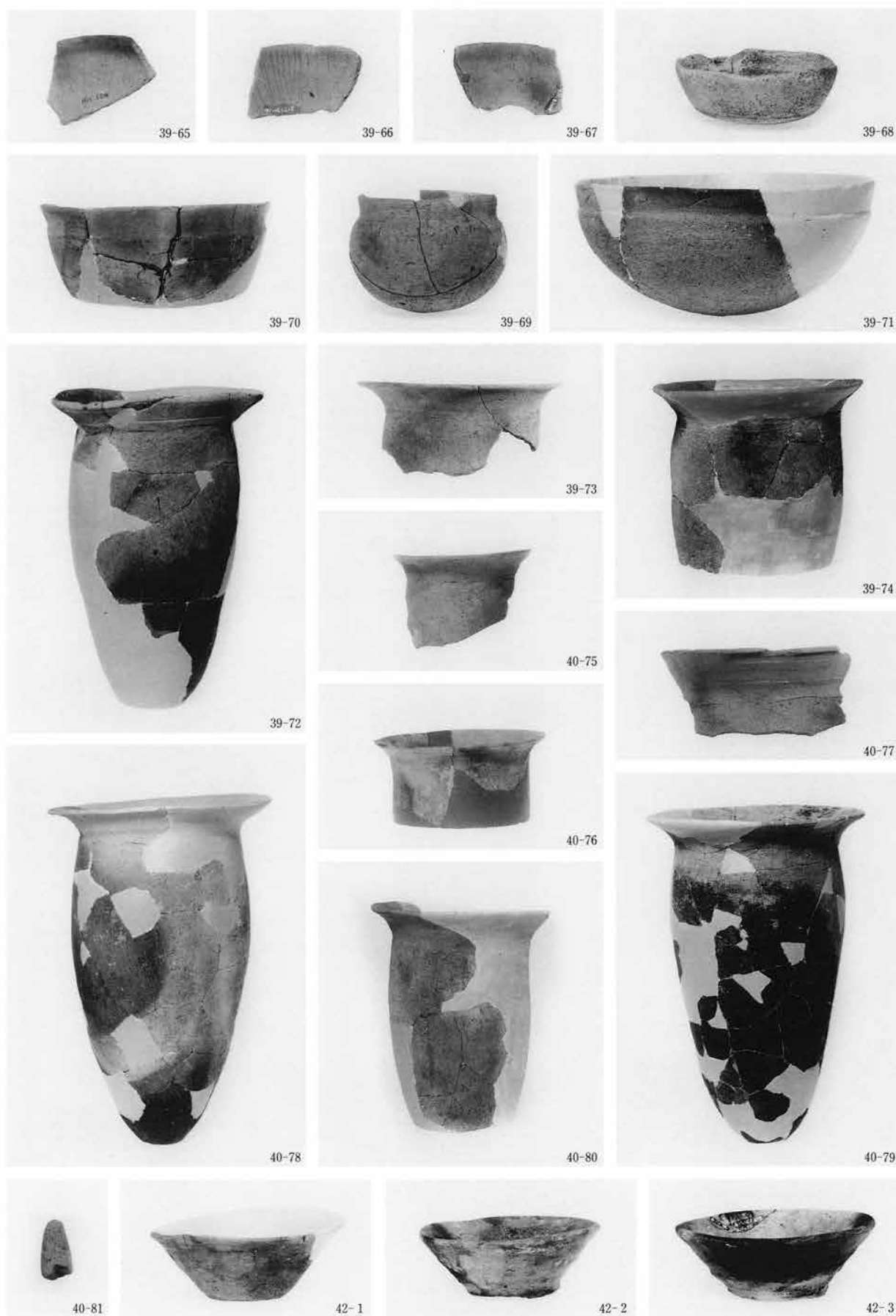
图版70



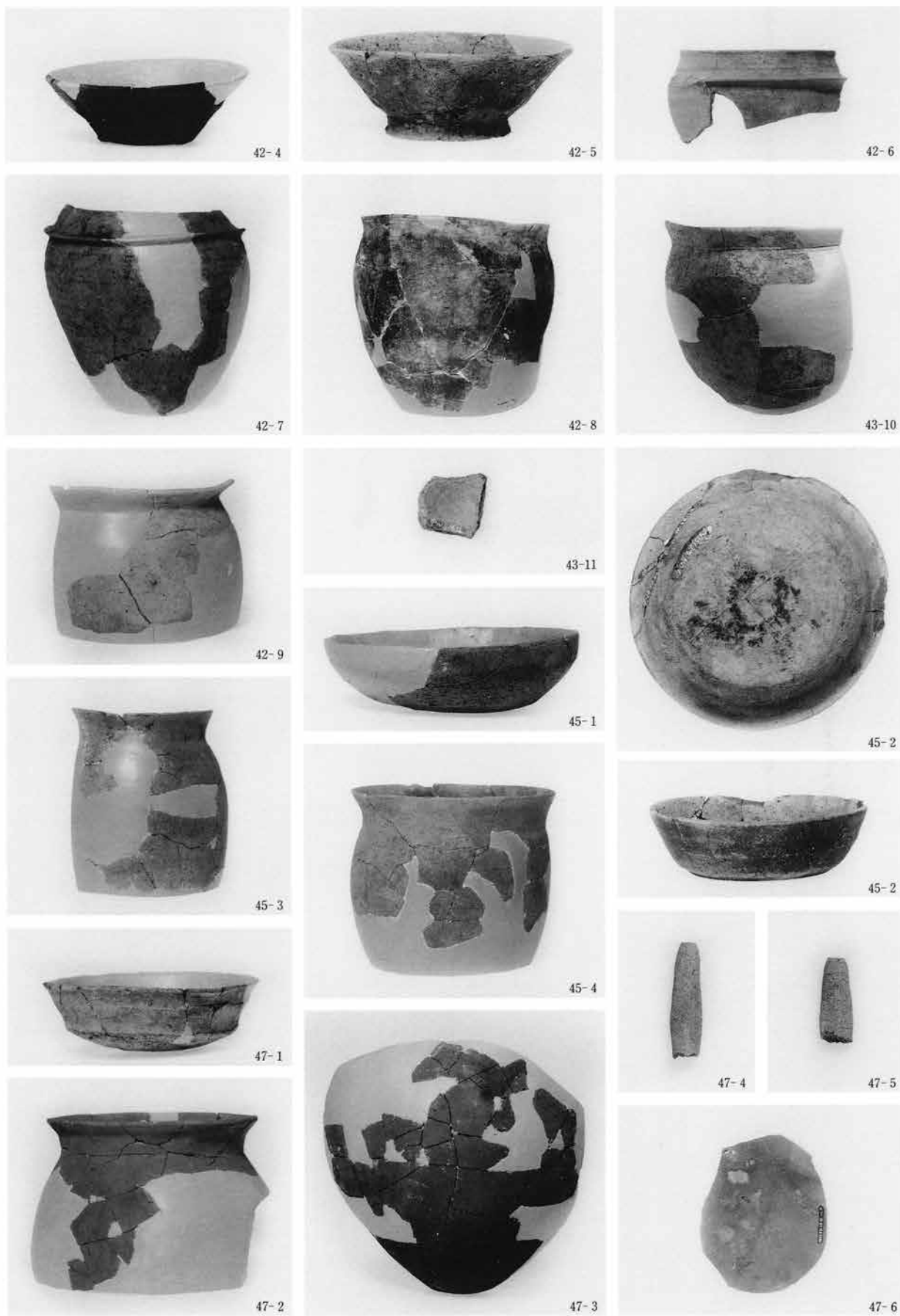
1区12号住居跡出土遺物



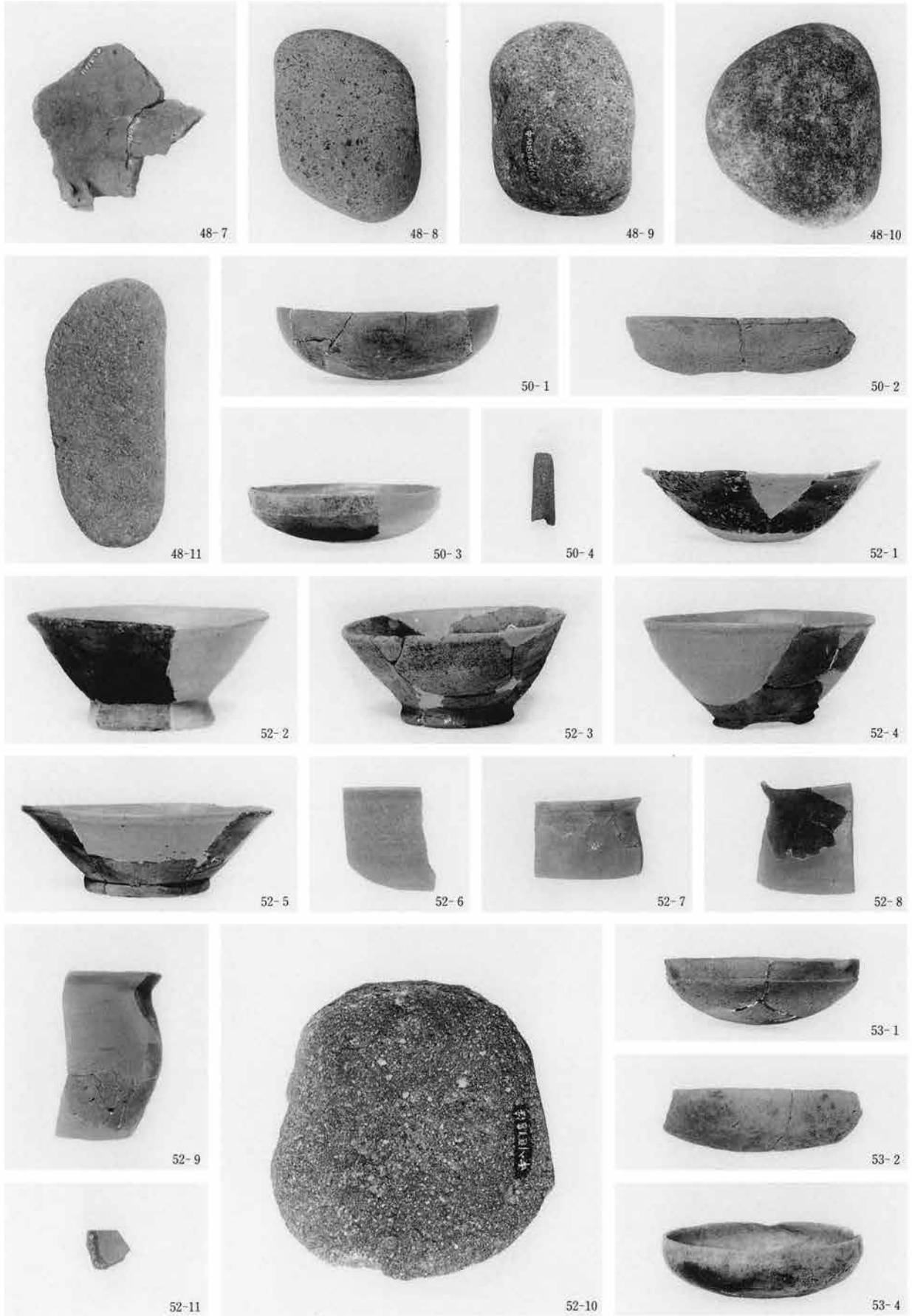
1区12号住居跡出土遺物



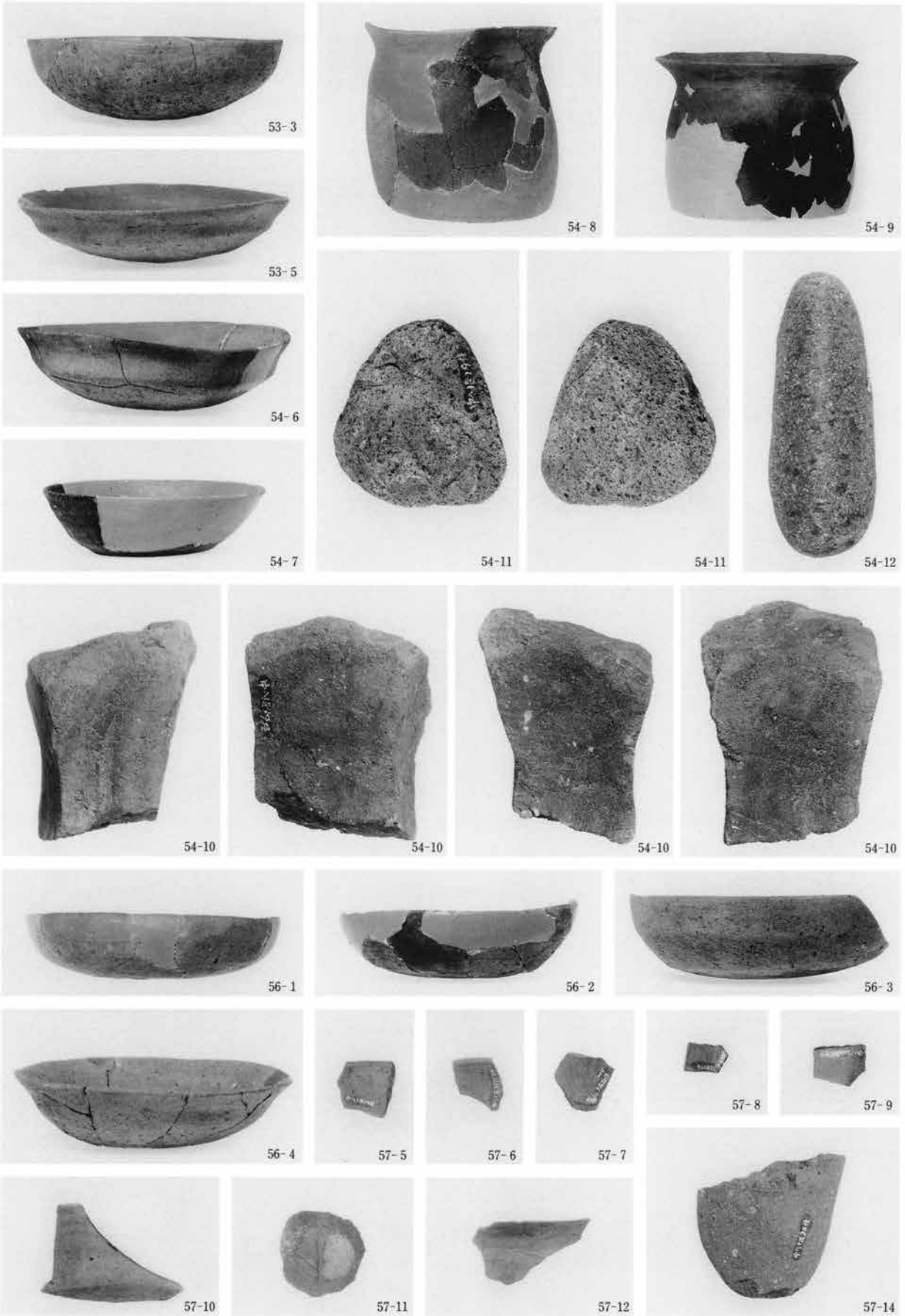
1区12・14号住居跡出土遺物



1区14~16号住居跡出土遺物



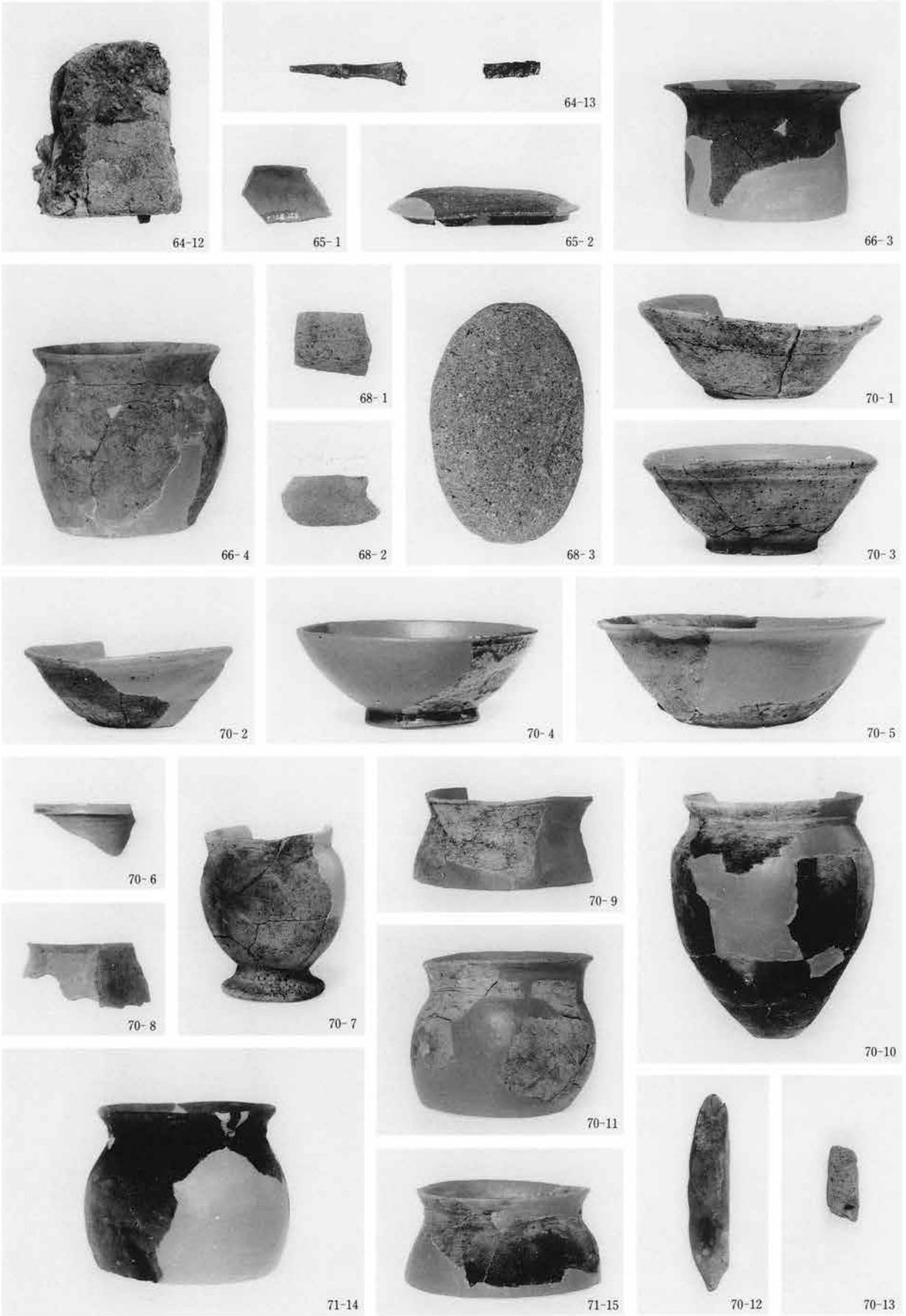
1区16~19号住居跡出土遺物



1区19・20号住居跡出土遺物



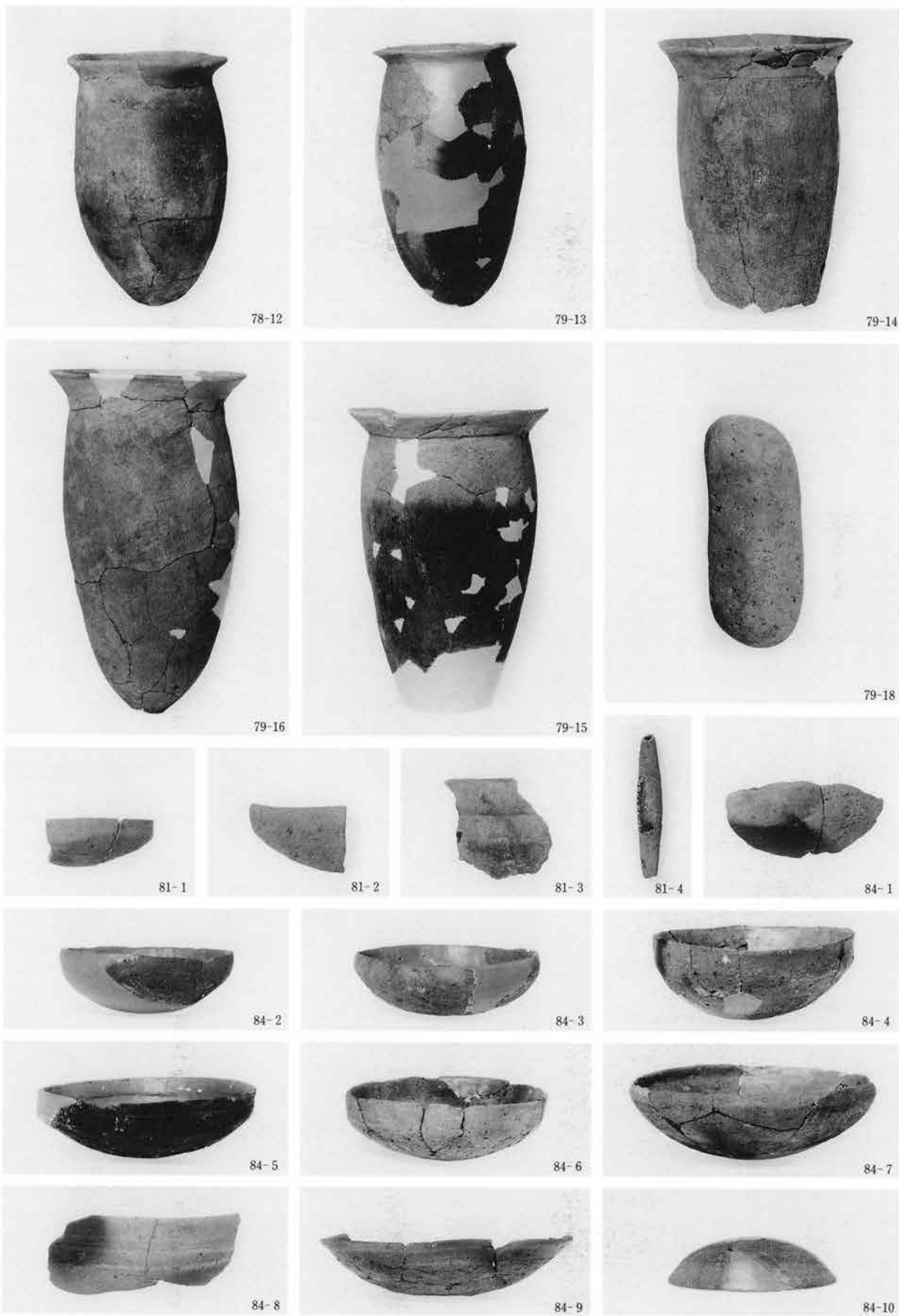
1区20・23・24・2区27号住居跡出土遺物



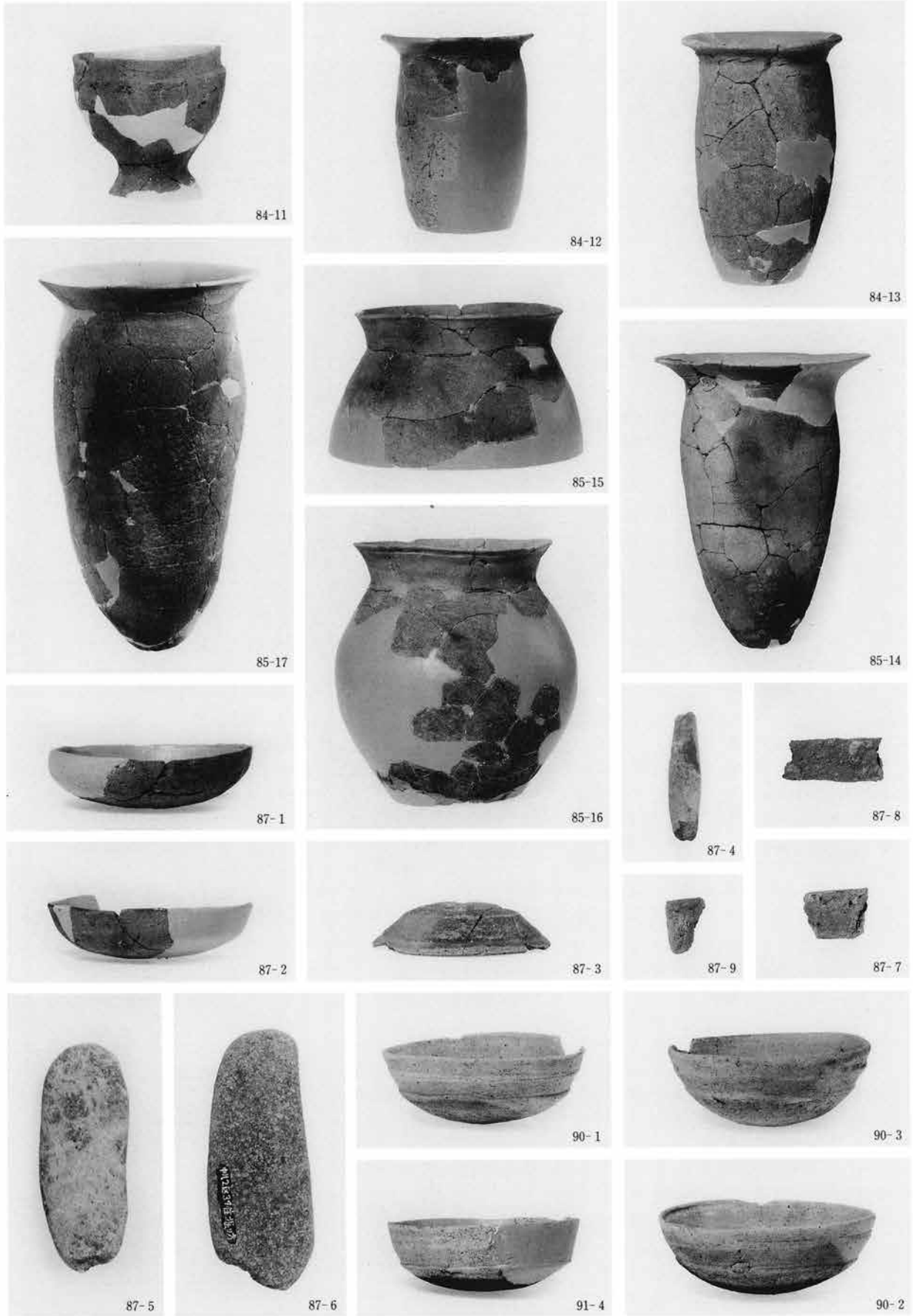
2区27~29・31号住居跡出土遺物



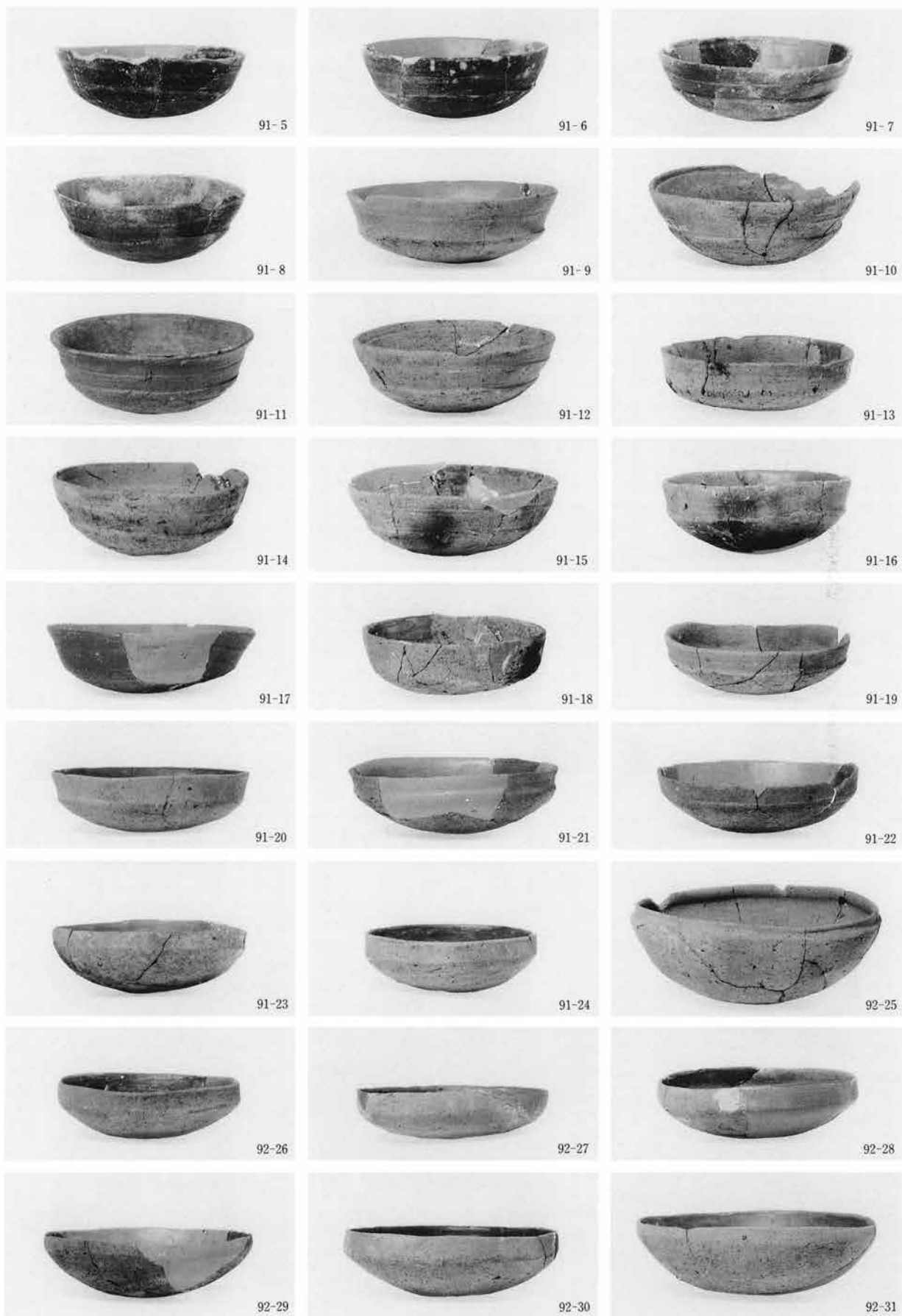
2区33~35号住居跡出土遺物



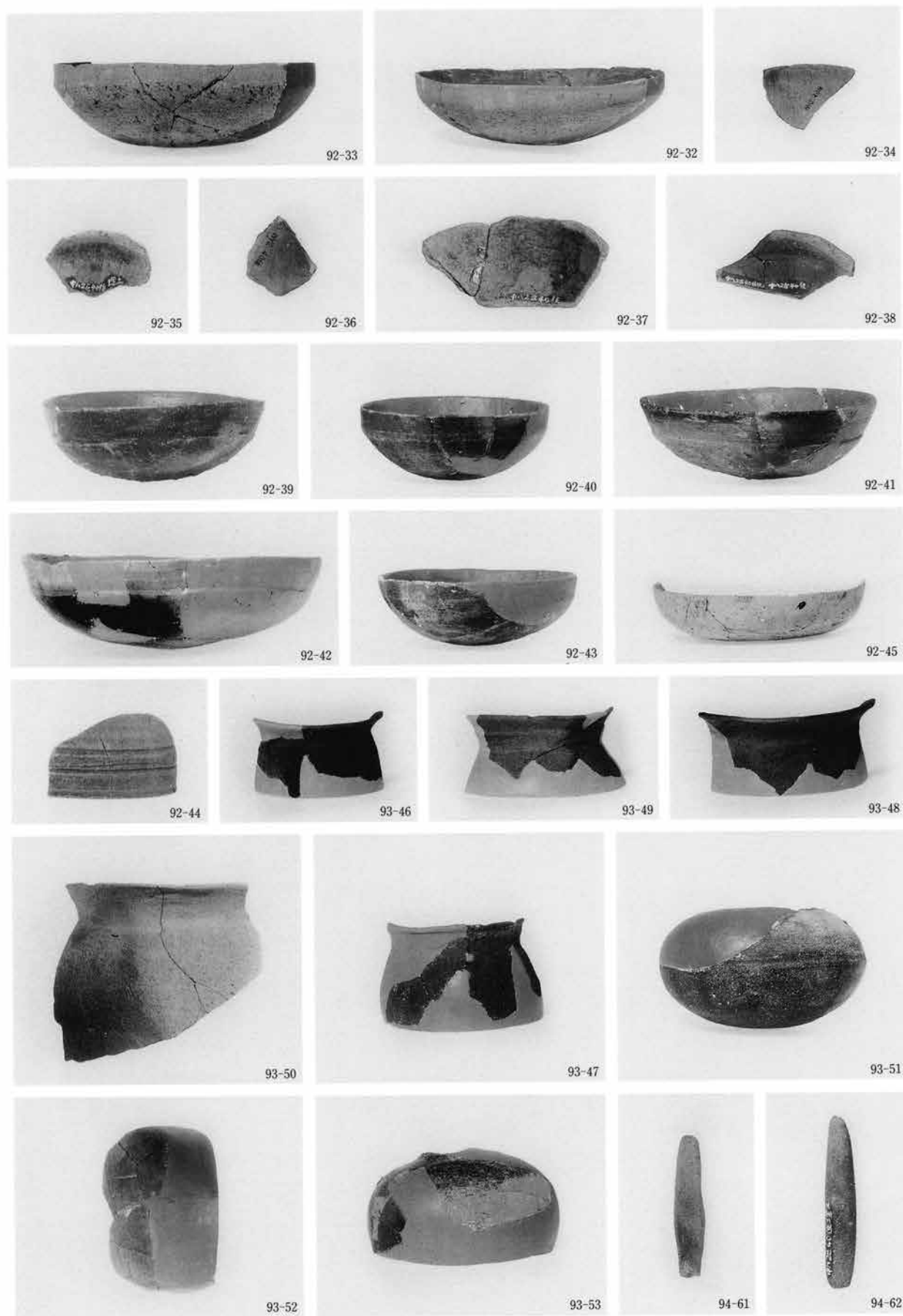
2区35・36・38号住居跡出土遺物



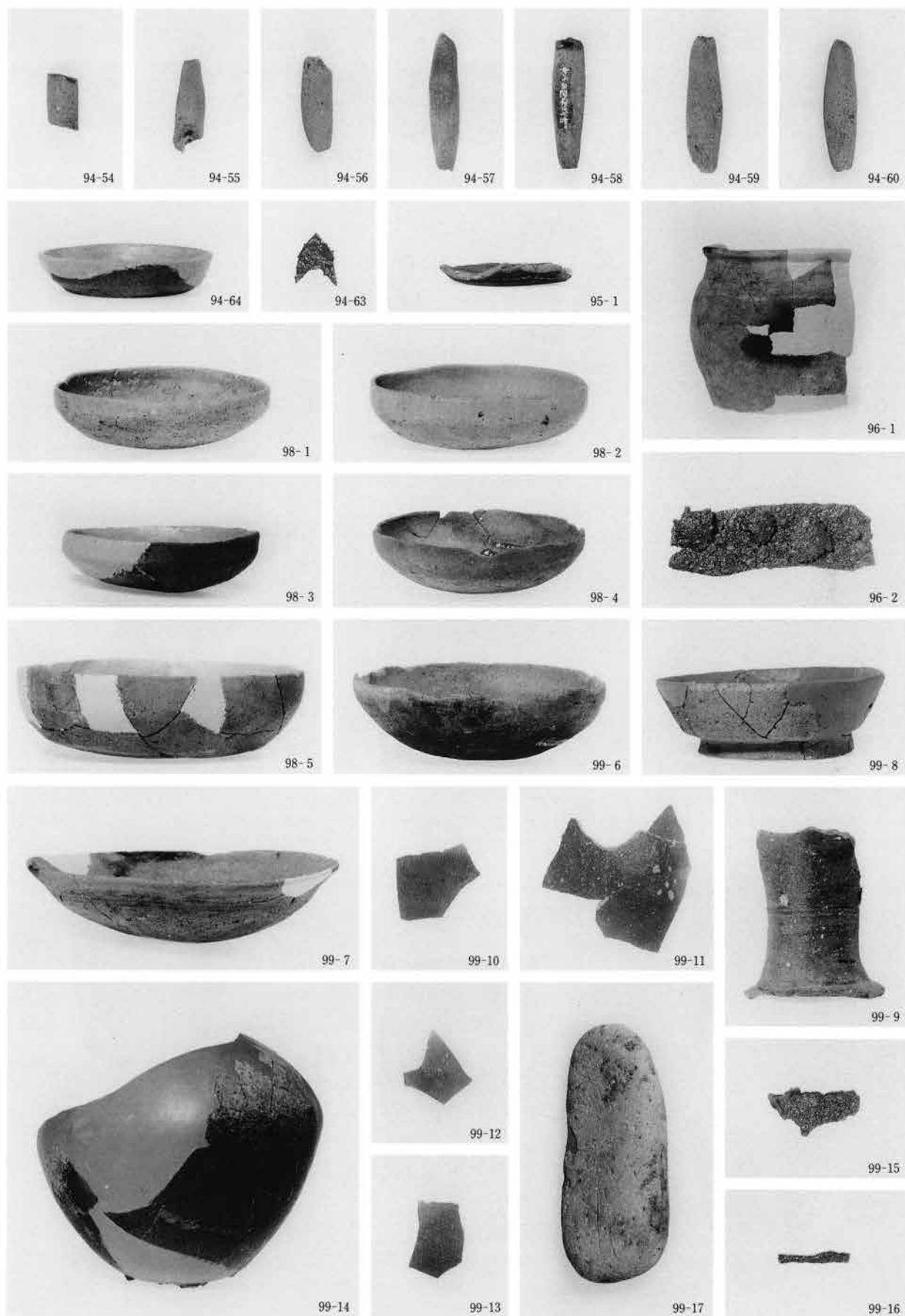
2区38~40号住居跡出土遺物



2区40号住居跡出土遺物



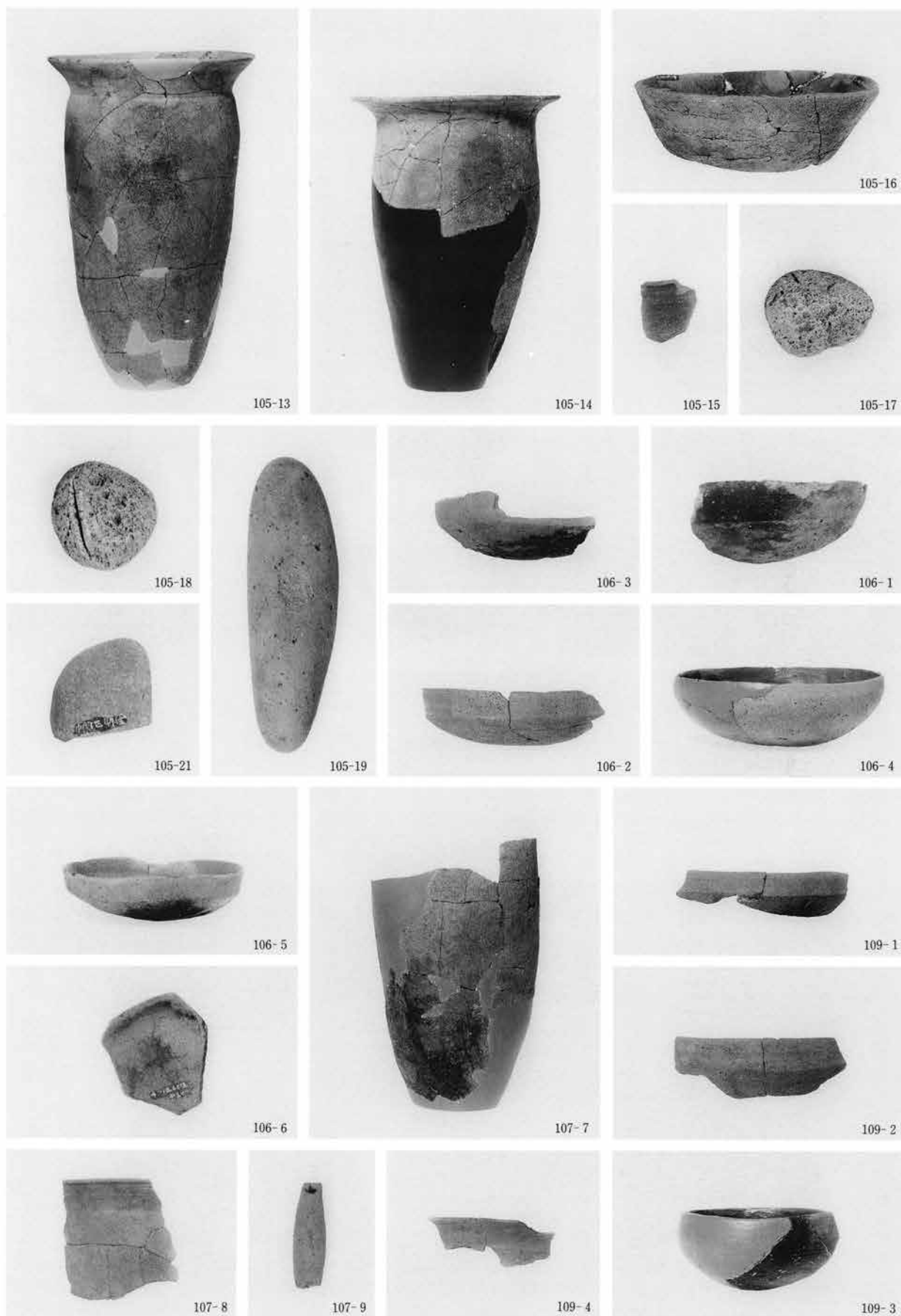
2区40号住居跡出土遺物



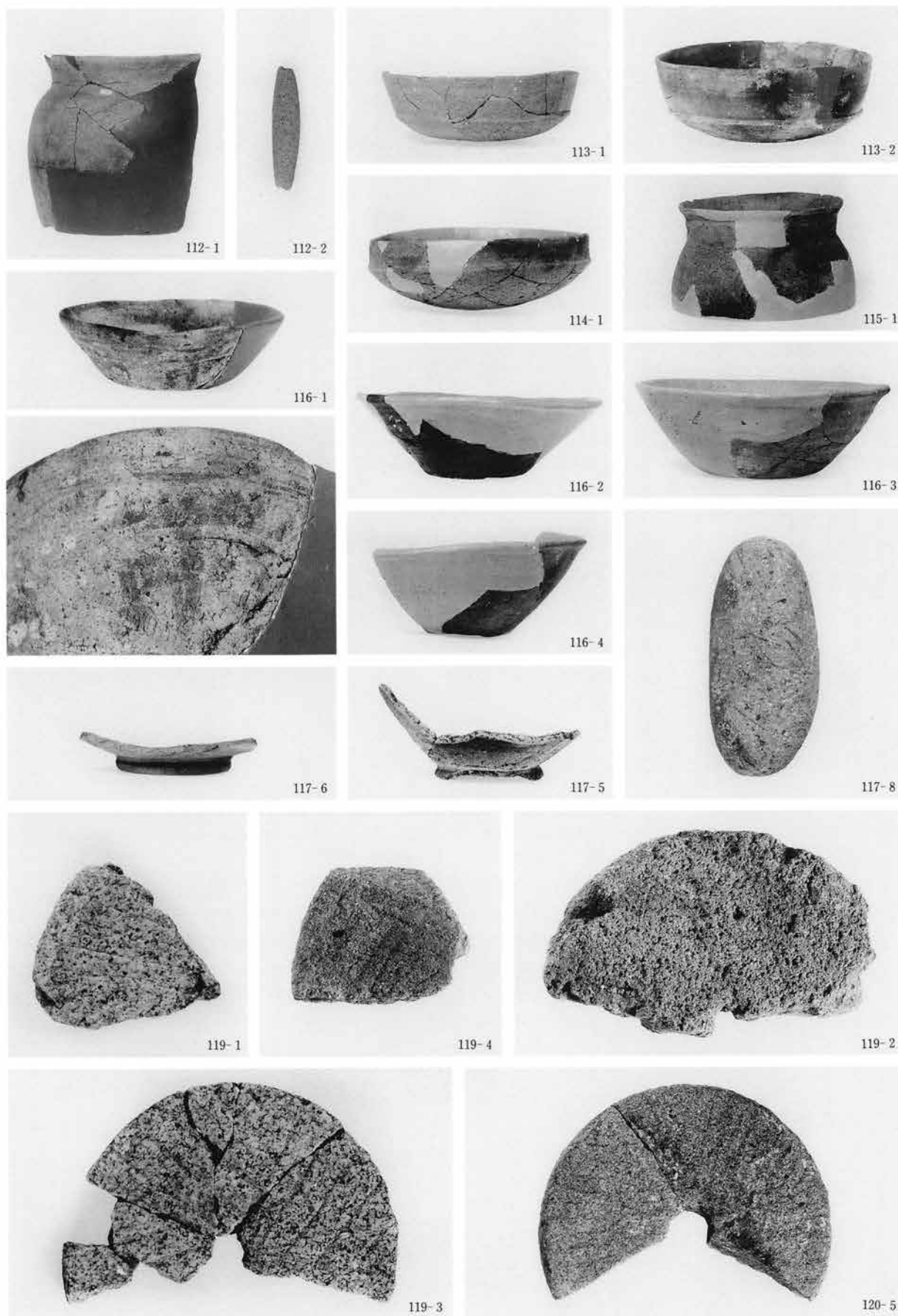
2区40~42・44号住居跡出土遺物



1区46・47号住居跡出土遺物



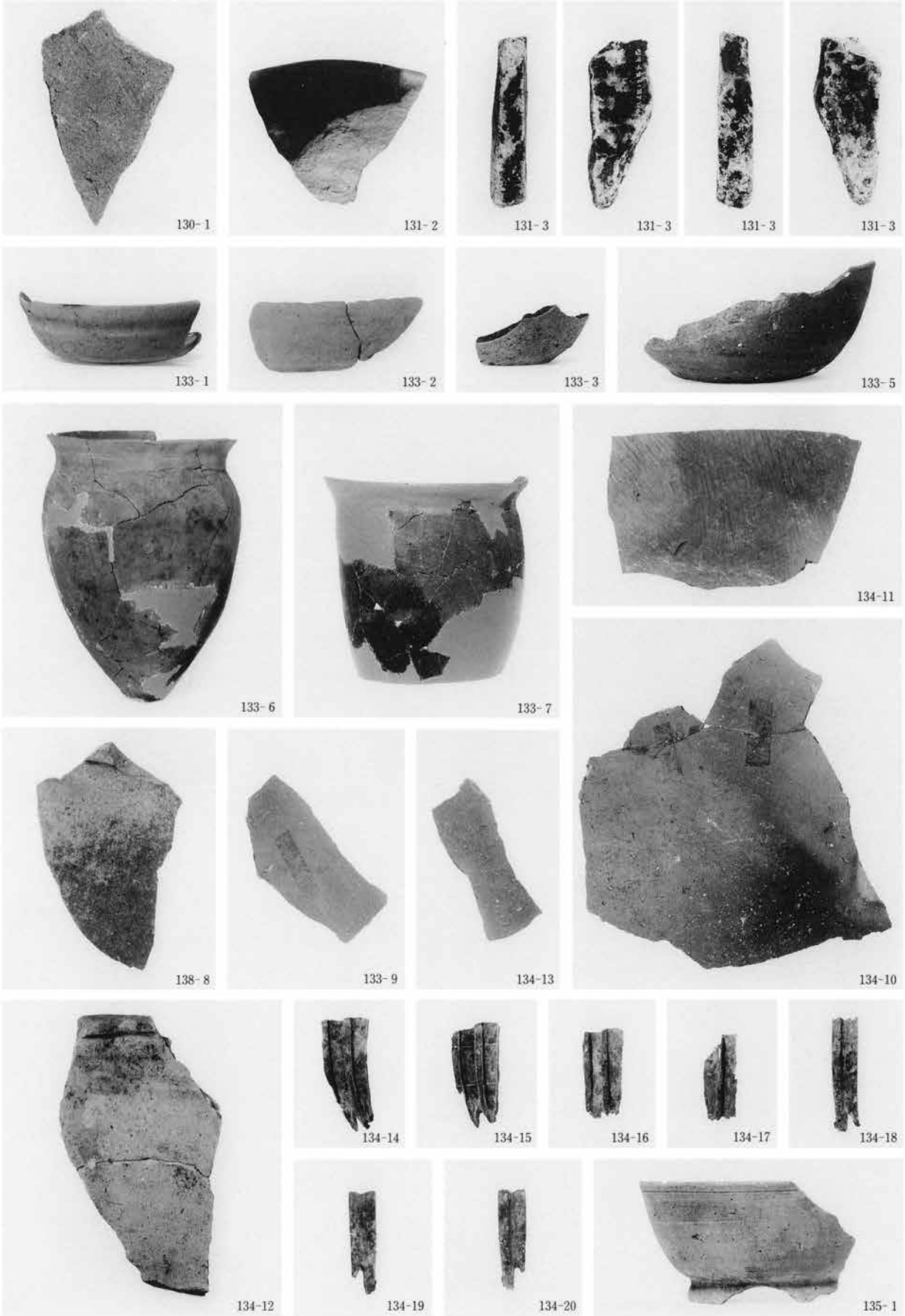
1区47~49号住居跡出土遺物



2区52~54・3区1・2号住居跡、1区1号井戸出土遺物



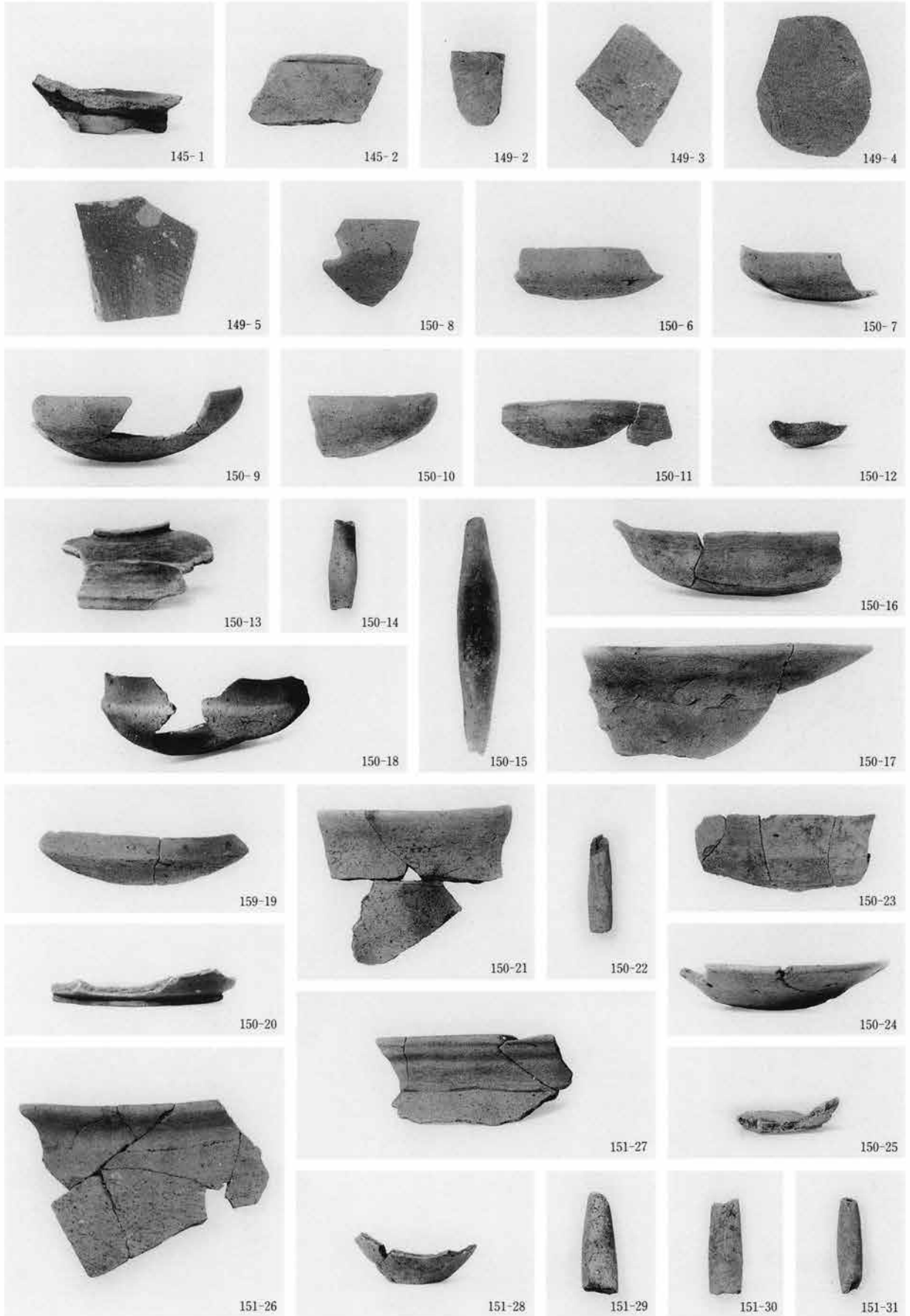
1区1・2・5・2区14・1区17号井戸出土遺物



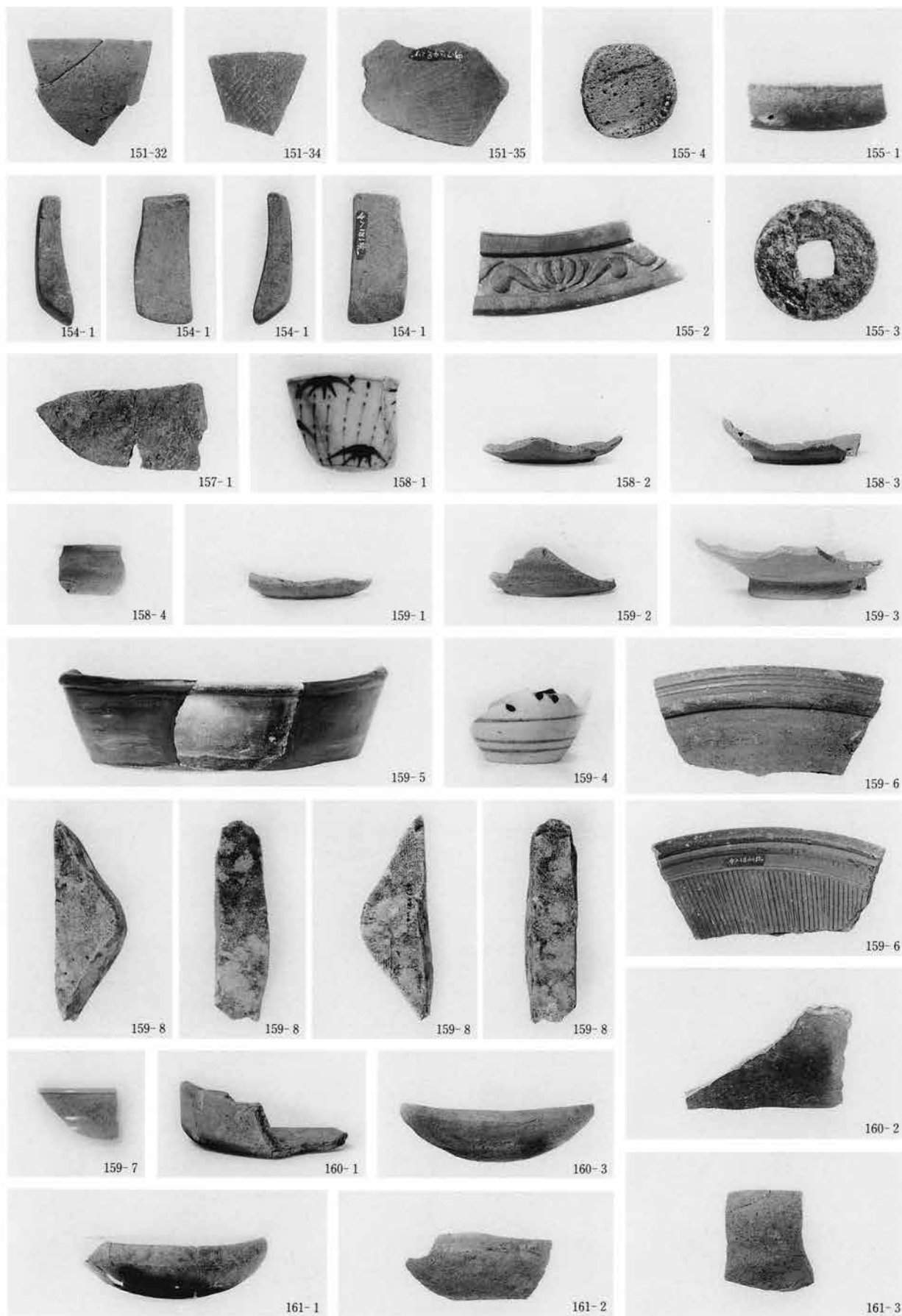
2区18・19・1区20号井戸出土遺物



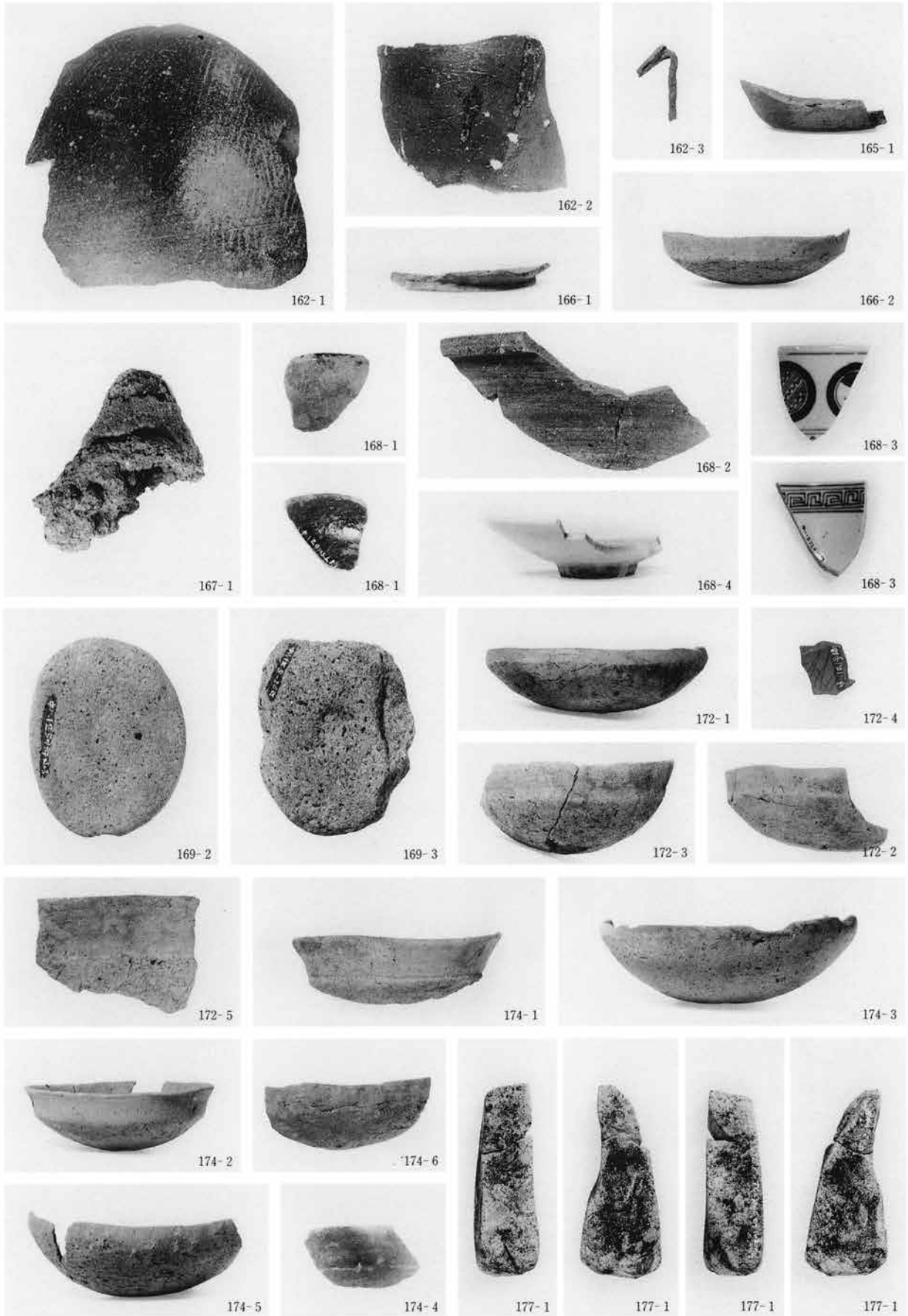
1区20・2区24号井戸、1区1～3号溝出土遺物



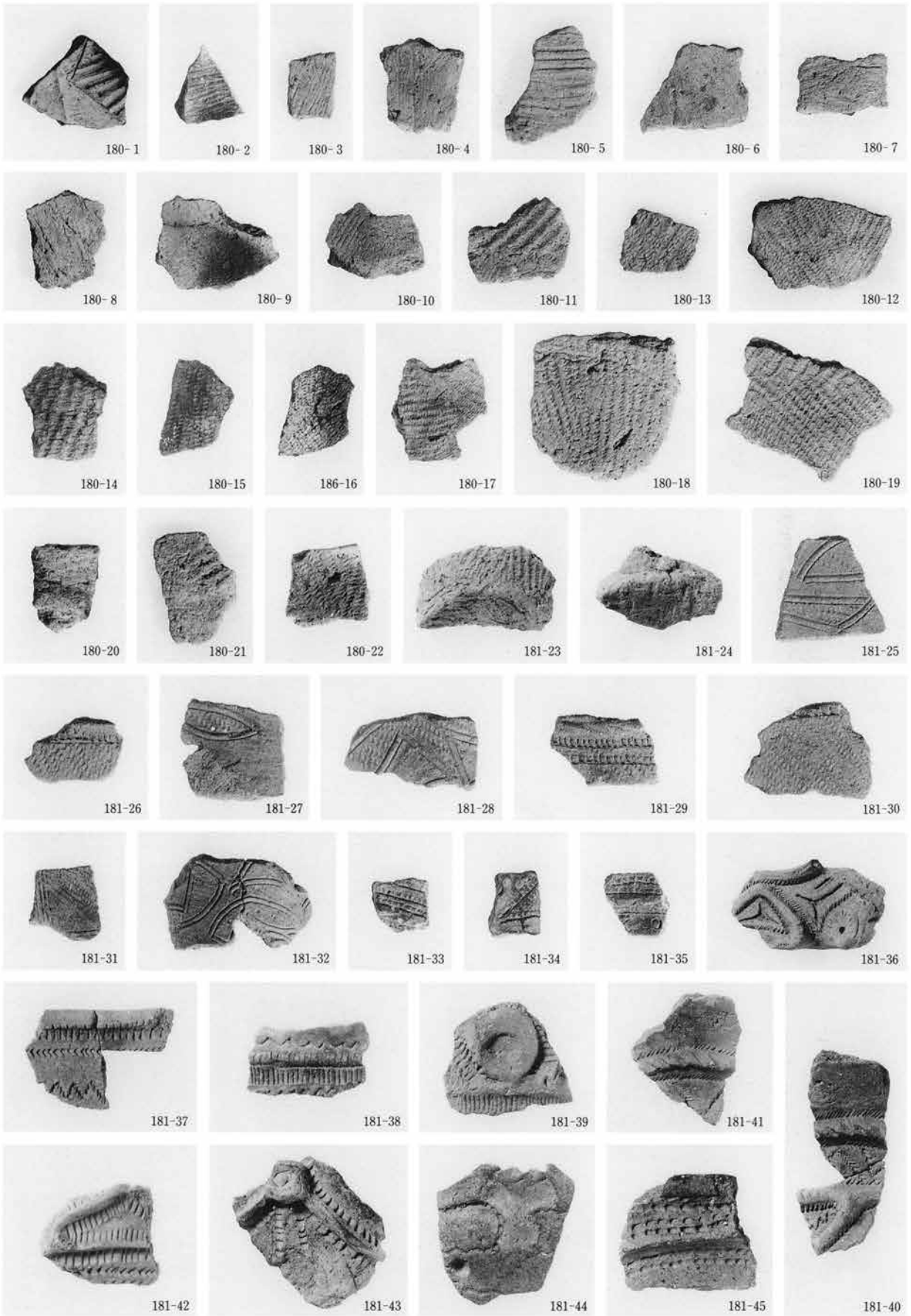
1区4・2区5～7号溝出土遺物



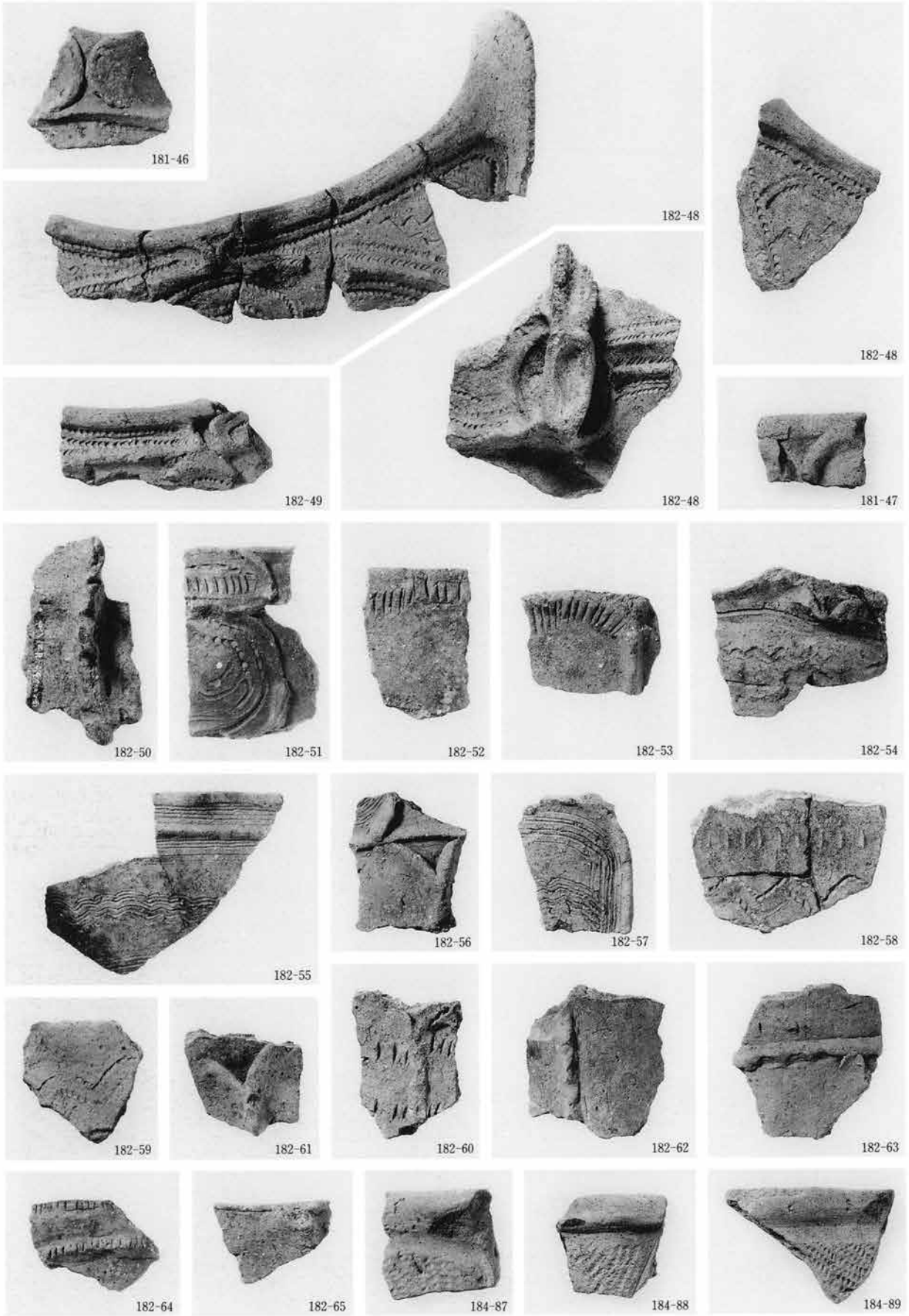
2区7・9号溝、1区9・32・39・45~47・50・59号土坑出土遺物



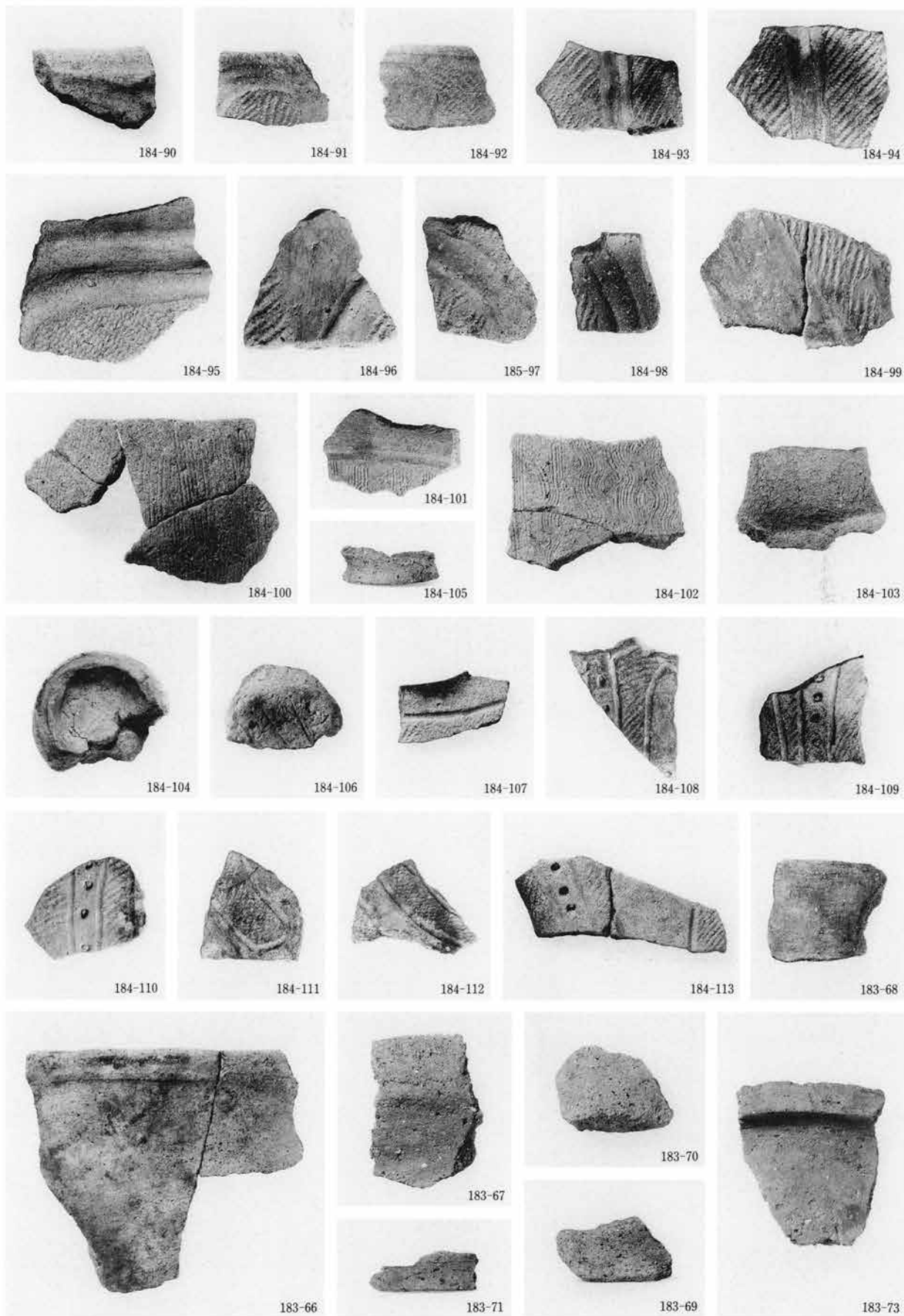
土坑（群）、1号焼土遺構、1号円形周溝遺構、1号竪穴遺構、1号サク状遺構出土遺物



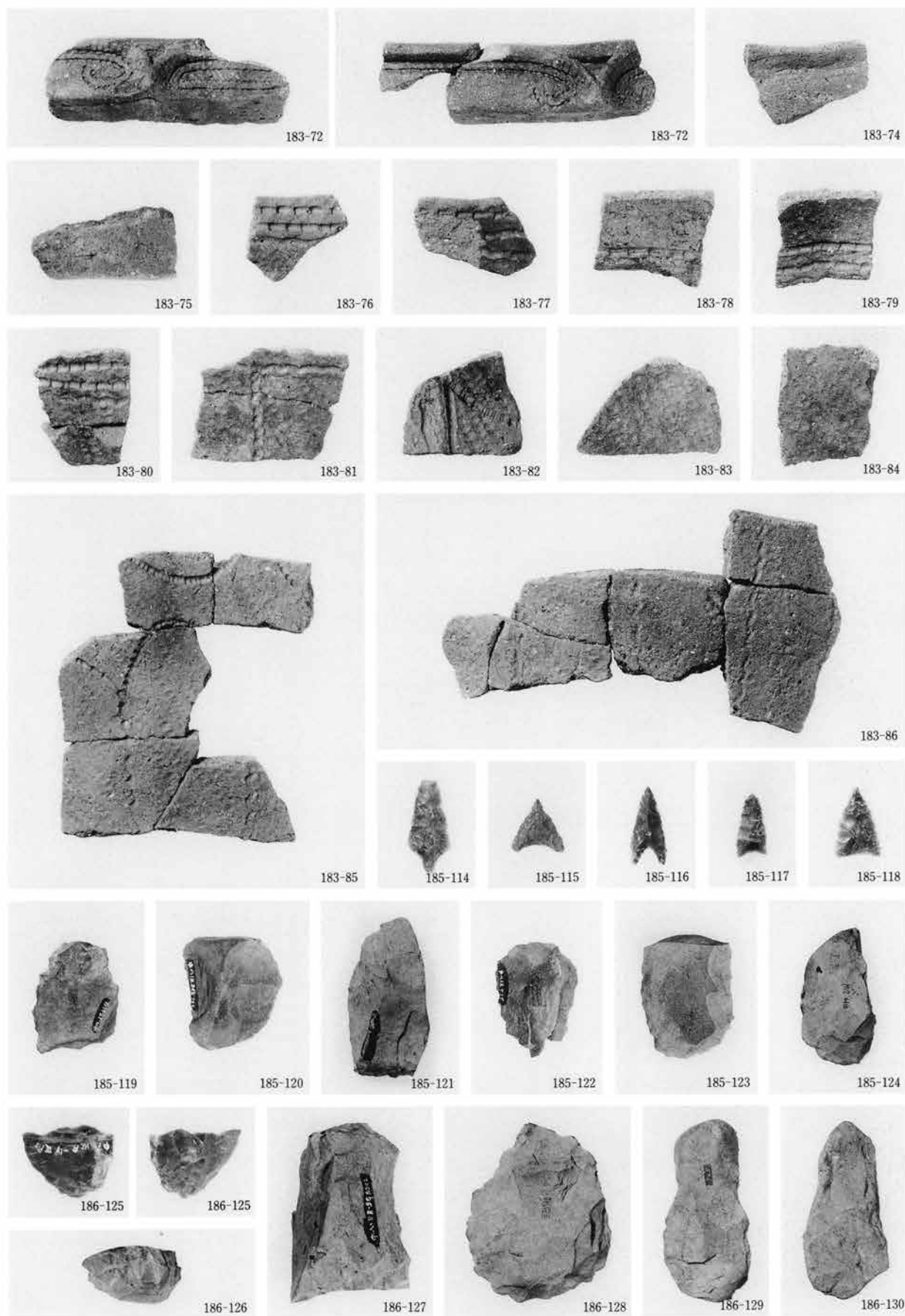
遺構外出土遺物 (1)



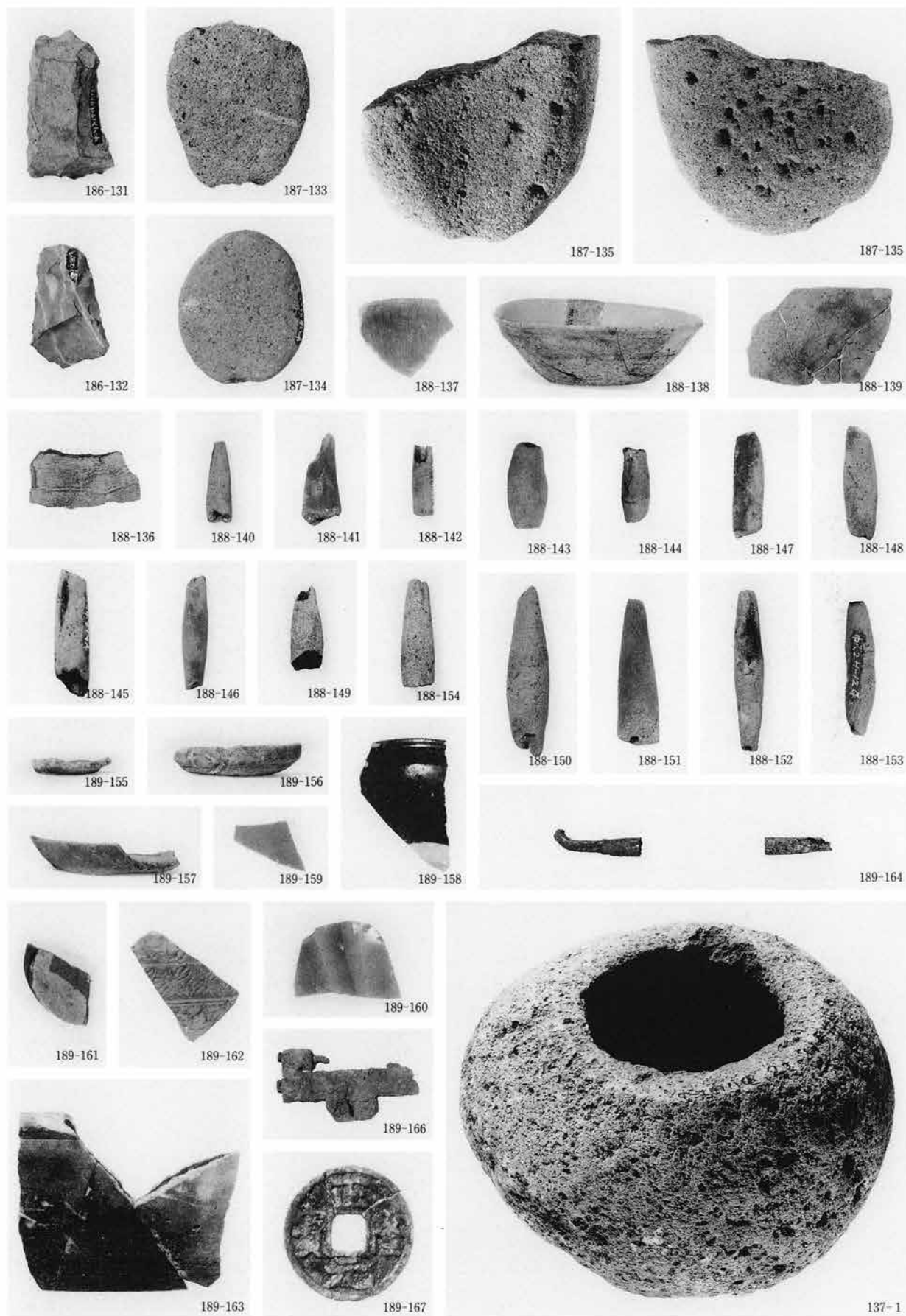
遺構外出土遺物 (2)



遺構外出土遺物 (3)



遺構外出土遺物 (4)



遺構外出土遺物 (5)

報告書抄録

ふりがな	なかえだやつなわいせき							
書名	中江田ハツ縄遺跡							
副書名	国道354号道路改築（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	第2集							
シリーズ名	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告							
シリーズ番号	第200集							
編著者名	斉藤英敏 大木紳一郎							
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511							
発行年月日	西暦 1996年 3月 25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		㎡	
中江田ハツ縄	群馬県新田郡 新田町大字中江 田字ハツ縄	10482	00390	36度 16分 19秒	139度 18分 4秒	19940201 ～ 19940831	5,300	道路改良
所収遺跡名	種別	主な遺構		主な遺物		特記事項		
中江田ハツ縄	住居	竪穴住居跡	47	土師器・須恵器・鉄器		古墳時代～平安時代		
	生産址	サク状遺構	1	土師器		近世		
	その他	井戸	25	土師器・石製品		古墳時代～近代		
		溝	11	土師器・須恵器他		中世～近代		
		土坑	131	土師器・陶磁器		古墳時代～近代		
		円形周溝遺構	1	土師器		古墳時代		
		竪穴遺構	2	土師器		古墳時代・中世		
		掘立柱建物	1			中世		
		焼土遺構	1	縄文土器・石器		縄文時代		

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書 200 集

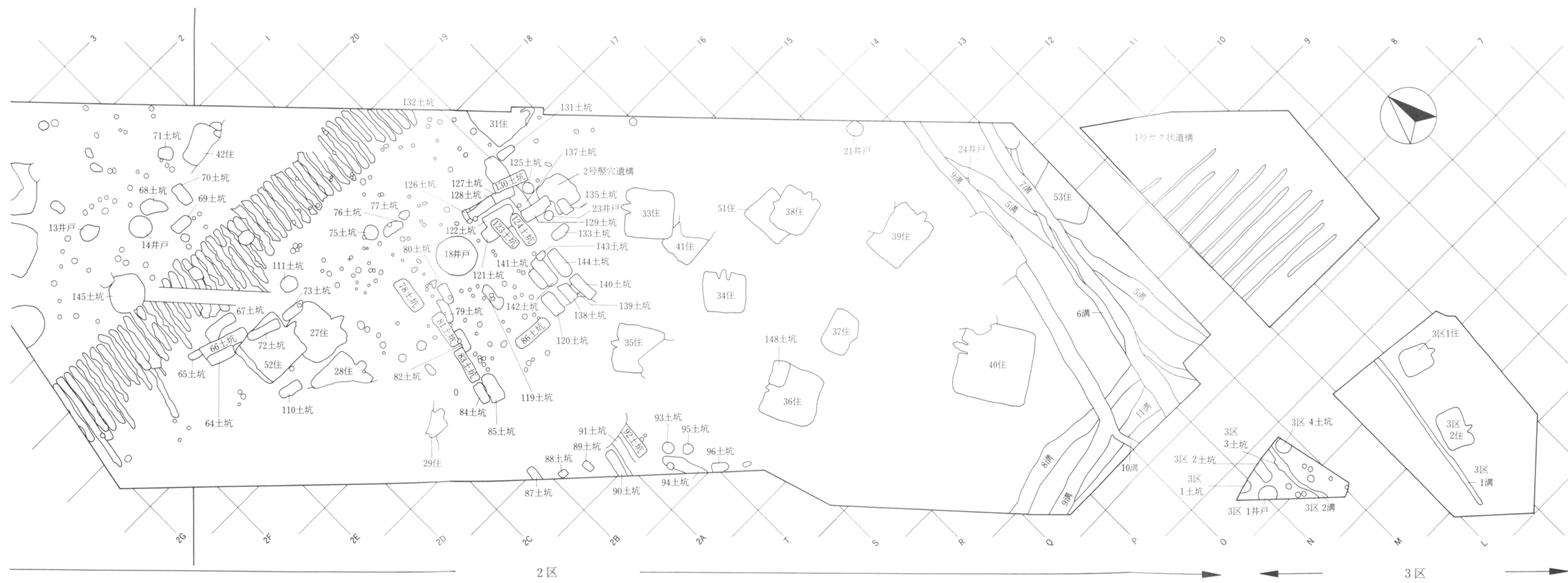
中江田八ツ縄遺跡 国道354号道路改築(改良)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

平成8年3月22日 印刷
平成8年3月25日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社



中江田ハツ縄遺跡遺溝全体図

0 10m